

(財) 高知県文化財団埋蔵文化財センター調査報告書第33集

山田三ツ又遺跡

— あけぼの道路建設工事に伴う発掘調査報告書 —

1997. 9

(財) 高知県文化財団埋蔵文化財センター

山田三ツ又遺跡

1997. 9

(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター

序

我々の生活が地球環境に与える影響については語られて久しくなります。公害や森林の破壊などは人間の歴史の中にこれまで存在しなかった訳ではありません。ただその出現頻度が高く成ってきたことは確かでしょう。人間の歴史を学ぶ時、人間相互の関わりに言及するのは勿論ですが、人間の生活が自然環境に与えた影響について目を向けて行く必要があるように思われます。我々の祖先が如何に巧みにその中で暮らしてきたかは、最近の研究成果によっても明らかであります。その中で生み出されてきたものは今現在の我々の暮らしの中に形こそ変えてはいるものの繋がりを持って存在しています。環境に対する適応のすばらしさは目も見張るものでありますが、環境に対して何が可能であり、何が不可能であるか、これまでの歴史の中に学ぶことが出来るのではないのでしょうか。

今回報告をすることが出来ます山田三ツ又遺跡は中世を主体とする遺跡と考えられておりましたが、今回調査された部分からは中世の遺物に加えて、近世の遺物や集落を構成すると考えられる屋敷跡などの遺構が発見されております。江戸時代は比較的近い時代ではありますが、一般庶民の生活については文献資料や考古学的に調査の行われている都市部が主体であり、詳細については不明な部分が多く存在しています。今回の調査による成果が近世農村集落を考える場合一つの手がかりとなれば幸いです。

最後に、山田三ツ又遺跡の発掘調査に際しては格別のご配慮を頂いた周辺住民の皆様には紙面を借りて厚く御礼申し上げます。

(財) 高知県文化財団 埋蔵文化財センター
所長 古谷 碩志

例 言

1. 本書は、あけぼの道路敷設工事に伴う「山田三ツ又遺跡」の発掘調査報告書である。調査は1995年に実施されており、『山田三ツ又遺跡』との書名を冠する。
2. 山田三ツ又遺跡は、高知県香美郡土佐山田町中組に所在し、古墳時代～平安時代の遺物散布地として認識されている遺跡である。
3. 調査面積は、4,113m²である。(内訳は調査Ⅰ区1,730m²、調査Ⅱ区1,479m²、調査Ⅲ区904m²である。) 調査期間は、調査範囲を確定する為の試掘調査を1995年8月23日から同年8月29日まで行い、本調査は1995年8月30日から同年12月27日まで行った。
4. 発掘調査は、(財)高知県文化財団 埋蔵文化財センターが南国土木事務所の委託を受けて実施した。発掘業務は、出原恵三(埋蔵文化財センター調査第三係長)の指導のもとに佐竹 寛(同 専門調査員)と藤方正治(同 調査員)が担当し、事務は吉岡利一(同 主幹)が行った。
5. 本書の執筆・編集は佐竹 寛と藤方正治が行った。
6. 以下の諸氏の協力を得た、紙面を借りて厚くお礼を申し上げます。
 - 本報告書の作成に当たっては大橋康二(佐賀県教育委員会)、浜田恵子(埋蔵文化財センター主任調査員)、曾我貴行(同 調査員)の助言・協力を得た。
 - 現場作業では
小松栄一、小松好、小松浜子、島井博志、浜口 興、永田美津子、大和田延子、山本冴子、内田愛子、岡内美行、吉川和美、池上小梅、松岡信行、小野山由香里、西内 保、竹村絹子、一円敏於、加治宣子、田島一徳、石川健史、秋山純一
調査・測量においては山本純代(埋蔵文化財センター 調査補助員)、井上郁雄、小倉 功
 - 整理作業では
洗浄・注記・接合においては松山真澄 岩本須美子 尾崎富貴、土器補填においては矢野 雅、拓本においては楠瀬憲子 前田玲子 高橋千代 久万公子、実測においては小野山美香 東村知子 山中美代子 大原喜子 浜田雅代、トレースにおいては中西純子 小松経子 大黒泰子 河村真美
7. 出土遺物及び調査資料は高知県立埋蔵文化財センターに於て保管している。尚、遺物についての

注記は、「95-15RYY」を使用する。

8. 遺構の名称については、SB（掘立柱建物）、ST（竪穴状遺構）、SK（土坑）、SD（溝状遺構）、SX（性格不明土坑）、P（柱穴又はピット）を使用する。番号は調査区を単位として付す。

凡例

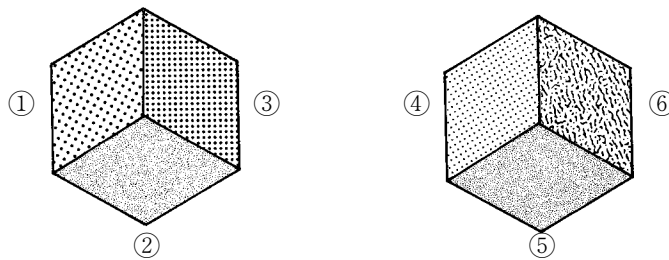
1. 各遺構の平面図は縮尺1/15、1/20、1/30で掲載し、出土状況図では1/10を適宜使用している。遺構平面図中における網掛けについては以下の通りである。

- ① 黄色土（土坑枠として構築されているもの）
- ② 黄色粘土（土坑壁に残存するものと土坑底部に存在するもの）
- ③ 石

2. 遺物実測図については主に縮尺1/3で掲載するが、一部の大型遺物については1/4、また、小型の遺物については1/1を使用している。

遺物実測図中における網掛けについては以下の通りである。

- ④ 青磁釉
- ⑤ 煤
- ⑥ 鉄滓



本文目次

第Ⅰ章	遺跡の位置と地理的・歴史的環境	
1.	地理的環境	1
2.	歴史的環境	4
第Ⅱ章	調査に至る経過と調査の方法	
1.	調査に至る経過	6
2.	調査の方法	6
第Ⅲ章	調査の成果	
1.	基本層準	9
2.	調査Ⅰ区	
	調査Ⅰ区全体図	10
	遺構と遺物	12
	調査Ⅰ区出土遺物観察表	33
3.	調査Ⅱ区	
	調査Ⅱ区全体図	46
	遺構と遺物	48
	調査Ⅱ区出土遺物観察表	133
4.	調査Ⅲ区	
	調査Ⅲ区全体図	158
	遺構と遺物	159
	調査Ⅲ区出土遺物観察表	168
	山田三ツ又遺跡 出土銅銭拓影	169
第Ⅳ章	まとめ	
1.	山田三ツ又遺跡出土遺物について	170
2.	山田三ツ又遺跡出土のかわらけについて	172
3.	山田三ツ又遺跡検出遺構について	175

図版目次

- fig. 1 山田三ツ又遺跡の位置と周辺の遺跡分布図
fig. 2 調査区配置図
fig. 3 試掘トレンチ位置図・出土遺物実測図
fig. 4 東西方向セクション図・南北方向セクション図
fig. 5 調査Ⅰ区全体図
fig. 6 SB1平面図・エレベーション図
fig. 7 SB2平面図・エレベーション図
fig. 8 SB3平面図・エレベーション図及び出土遺物実測図
fig. 9 SB4平面図・エレベーション図及び出土遺物実測図
fig. 10 SB5平面図・エレベーション図
fig. 11 SK1平面図・セクション図・エレベーション図
fig. 12 SK2～SK4平面図・セクション図・エレベーション図
fig. 13 SK5平面図・セクション図
fig. 14 SK6遺物出土状況図・出土遺物実測図
fig. 15 SK7～SK10平面図・エレベーション図・SK9出土遺物実測図
fig. 16 SK11平面図・エレベーション図及び石組み平面図・立面図
fig. 17 SD1～SD23セクション図・エレベーション図
fig. 18 SD3平面図・セクション図
fig. 19 SD1・SD6・SD12出土遺物実測図
fig. 20 SX1平面図・エレベーション図
fig. 21 SX2平面図・セクション図
fig. 22 SX3平面図・セクション図・エレベーション図
fig. 23 SX4平面図・エレベーション図
fig. 24 SX3出土遺物実測図
fig. 25 遺構間接合の遺物実測図
fig. 26 Ⅰ区包含層出土遺物実測図(その1)
fig. 27 Ⅰ区包含層出土遺物実測図(その2)
fig. 28 調査Ⅱ区全体図
fig. 29 SB1平面図・エレベーション図
fig. 30 SB2平面図・エレベーション図
fig. 31 SB3平面図・エレベーション図
fig. 32 SB4・SB5平面図・エレベーション図
fig. 33 SB6・SB7平面図・エレベーション図
fig. 34 SB8平面図・エレベーション図
fig. 35 SB9平面図・エレベーション図
fig. 36 SB10平面図・エレベーション図・出土遺物実測図
fig. 37 SK1出土状況図・平面図・エレベーション図
fig. 38 SK1出土遺物実測図
fig. 39 SK2出土状況図・平面図・エレベーション図
fig. 40 SK3平面図・エレベーション図・出土遺物実測図
fig. 41 SK4出土状況図・平面図・エレベーション図
fig. 42 SK5出土遺物実測図
fig. 43 SK5平面図・エレベーション図
fig. 44 SK6平面図・エレベーション図・出土遺物実測図
fig. 45 SK7平面図・セクション図・エレベーション図
fig. 46 SK7出土遺物実測図
fig. 47 SK8平面図・エレベーション図
fig. 48 SK9平面図・エレベーション図
fig. 49 SK9出土遺物実測図
fig. 50 SK10平面図・セクション図・エレベーション図
fig. 51 SK11平面図・エレベーション図
fig. 52 SK12平面図・エレベーション図
fig. 53 SK13出土状況図・平面図・セクション図・出土遺物実測図
fig. 54 SK14出土状況図
fig. 55 SK14平面図・エレベーション図
fig. 56 SK15平面図・セクション図・エレベーション図
fig. 57 SK16出土状況図・平面図・エレベーション図・出土遺物実測図
fig. 58 SK16-2出土状況図・平面図・エレベーション図
fig. 59 SK17平面図・セクション図・エレベーション図・出土遺物実測図
fig. 60 SK18平面図・セクション図
fig. 61 SK19出土状況図・平面図・セクション図・出土遺物実測図
fig. 62 SK20・SK21出土状況図・平面図・セクション図
fig. 63 SK22平面図・セクション図・エレベーション図
fig. 64 SK23平面図・セクション図・エレベーション図・出土遺物実測図
fig. 65 SK24出土状況図・平面図・エレベーション図
fig. 66 SK25平面図・セクション図・エレベーション図
fig. 67 SK25出土遺物実測図
fig. 68 SK26平面図・セクション図・エレベーション図
fig. 69 SK26出土遺物実測図
fig. 70 SK27平面図・セクション図・エレベーション図
fig. 71 SK27出土遺物実測図

- fig. 72 SK28 平面図・セクション図・エレベーション図
- fig. 73 SK29 平面図・エレベーション図
- fig. 74 SK29 出土遺物実測図
- fig. 75 SK30 平面図・エレベーション図
- fig. 76 SK31・SK32 出土状況図・平面図・セクション図・エレベーション図
- fig. 77 SK31・SK32 出土遺物実測図
- fig. 78 SK33 平面図・セクション図
- fig. 79 SK33出土遺物実測図
- fig. 80 SK33-2・SK33-3 平面図・エレベーション図
- fig. 81 SK34 平面図・エレベーション図
- fig. 82 SK34 出土遺物実測図
- fig. 83 SK35 平面図・セクション図・出土遺物実測図
- fig. 84 SK36 平面図・セクション図
- fig. 85 SK36 出土遺物実測図
- fig. 86 SK37 平面図・セクション図・エレベーション図
- fig. 87 SK38 平面図・エレベーション図・出土遺物実測図
- fig. 88 SK39 平面図・セクション図・エレベーション図・出土遺物実測図
- fig. 89 SK40 出土状況図・平面図・セクション図・エレベーション図
- fig. 90 SK41 平面図・セクション図・エレベーション図
- fig. 91 SK42 平面図・セクション図・エレベーション図
- fig. 92 SK43 平面図・エレベーション図
- fig. 93 SK44 平面図・セクション図
- fig. 94 SK45 平面図・セクション図
- fig. 95 SK45 出土遺物実測図
- fig. 96 SK46 平面図・セクション図
- fig. 97 SK47 平面図・セクション図・エレベーション図
- fig. 98 SK47 出土遺物実測図
- fig. 99 SK48 平面図・エレベーション図・出土遺物実測図
- fig.100 SK49 平面図・セクション図・エレベーション図
- fig.101 SK50 平面図・エレベーション図
- fig.102 SK51 出土状況図・平面図・エレベーション図
- fig.103 SK52 平面図・セクション図・エレベーション図
- fig.104 SK53 平面図・セクション図・エレベーション図
- fig.105 SK54 平面図・エレベーション図
- fig.106 SK55・SK56 平面図・エレベーション図
- fig.107 SK57 平面図・エレベーション図
- fig.108 SK58 平面図・エレベーション図・出土遺物実測図
- fig.109 SK59 平面図・エレベーション図
- fig.110 SK60 平面図・エレベーション図
- fig.111 SK61 平面図・エレベーション図
- fig.112 SK62 平面図・エレベーション図
- fig.113 SK63 平面図・セクション図・エレベーション図・出土遺物実測図
- fig.114 SK64 平面図・セクション図・エレベーション図・出土遺物実測図
- fig.115 SK65 平面図・エレベーション図
- fig.116 SK66 平面図・セクション図
- fig.117 SK67 平面図・エレベーション図
- fig.118 SK68 平面図・エレベーション図
- fig.119 SK69 平面図・エレベーション図
- fig.120 SK69 出土遺物実測図
- fig.121 SK70 平面図・エレベーション図
- fig.122 SK71～SK73・SD11(北) 平面図・セクション図・エレベーション図・出土遺物実測図
- fig.123 SK74 平面図・エレベーション図
- fig.124 SK74 出土遺物実測図
- fig.125 SK75 平面図・エレベーション図・出土遺物実測図
- fig.126 ST1 平面図・エレベーション図・出土遺物実測図
- fig.127 ST2・ST3 平面図・エレベーション図
- fig.128 ST3 出土遺物実測図
- fig.129 SD1 出土遺物実測図(その1)
- fig.130 SD1 出土遺物実測図(その2)
- fig.131 SD1 出土遺物実測図(その3)
- fig.132 SD4 出土遺物実測図
- fig.133 SD5 出土遺物実測図
- fig.134 SD6 出土遺物実測図
- fig.135 SD8 出土遺物実測図
- fig.136 SD9-2 出土遺物実測図
- fig.137 SD1～SD12セクション図・エレベーション図
- fig.138 SD11 出土遺物実測図
- fig.139 SX2 出土遺物実測図
- fig.140 SX1～SX3 平面図・セクション図・エレベーション図
- fig.141 SX3 出土遺物実測図
- fig.142 SX4 平面図・セクション図
- fig.143 SX5 平面図・セクション図
- fig.144 SX6 平面図・エレベーション図
- fig.145 SX6 出土遺物実測図
- fig.146 SX7 平面図・セクション図
- fig.147 SX8～SX10 平面図・セクション図
- fig.148 SX11 平面図・セクション図
- fig.149 SX12～SX15 平面図・エレベーション図

- fig.150 ピット出土遺物実測図
- fig.151 遺構間接合の遺物実測図
- fig.152 II区包含層出土遺物実測図(その1)
- fig.153 II区包含層出土遺物実測図(その2)
- fig.154 II区包含層出土遺物実測図(その3)
- fig.155 II区包含層出土遺物実測図(その4)
- fig.156 調査III区全体図
- fig.157 SK1-1～SK1-3 平面図・セクション図・エレベーション図
- fig.158 SK2 出土状況図・平面図・セクション図・エレベーション図
- fig.159 SK3 平面図・エレベーション図
- fig.160 SK4 平面図・セクション図・エレベーション図
- fig.161 SD1 出土遺物実測図
- fig.162 SD4 出土遺物実測図
- fig.163 SD1～SD7 エレベーション図
- fig.164 SD7 出土遺物実測図
- fig.165 SX1 平面図・セクション図・エレベーション図
- fig.166 SX2 平面図・セクション図・エレベーション図
- fig.167 SX3 平面図・エレベーション図
- fig.168 SX4～SX7 平面図・セクション図・エレベーション図
- fig.169 III区表採遺物実測図
- fig.170 調査I区(上)・II区(下)出土銅銭拓影

写真図版目次

	上	中	下
PL. 1	調査区東遠景	調査区西遠景	調査区南遠景
PL. 2	調査区北遠景	試掘調査掘削風景	調査 I 区(東)全景
PL. 3	調査 I 区(西)全景	I 区 SB1 P9 柱痕	I 区 SB2 P3 柱痕
PL. 4	I 区 SK1完掘状況	I 区 SK2完掘状況	I 区 SK3 完掘状況
PL. 5	I 区 SK5半截状況	I 区 SK5完掘状況	I 区 SK6土師質土器小皿出土状況
PL. 6	I 区 SK7半截状況	I 区 SK8完掘状況	I 区 SK11石組み検出状況(南から)
PL. 7	I 区 SK11石組み検出状況(俯瞰)	I 区 SK11銅銭出土状況	I 区 SK11完掘状況
PL. 8	I 区 SD3半截状況	I 区 SD6遺物出土状況	I 区 SX1完掘状況
PL. 9	I 区 SX2半截状況	I 区 SX3検出状況	I 区 SX3半截状況
PL.10	I 区 SB5 P4 銅銭出土状況	II 区 遺構検出状況(東から)	II 区 遺構検出状況(西から)
PL.11	調査 II 区全景(東から)	調査 II 区全景(西から)	II 区 SB2 P4 柱痕
PL.12	II 区 SB3 P3 柱痕	II 区 SB6 P5 柱痕	II 区 SK1 検出状況
PL.13	II 区 SK1 完掘状況	II 区 SK2 検出状況	II 区 SK2 完掘状況
PL.14	II 区 SK4 検出状況	II 区 SK4 完掘状況	II 区 SK5キセル(吸口)出土状況
PL.15	II 区 SK5 完掘状況	II 区 SK7 半截状況	II 区 SK8 完掘状況
PL.16	II 区 SK9 完掘状況	II 区 SK10 完掘状況	II 区 SK13 出土状況
PL.17	II 区 SK13 完掘状況	II 区 SK14 検出状況	II 区 SK14 出土状況
PL.18	II 区 SK14 完掘状況	II 区 SK15 検出状況	II 区 SK15 完掘状況
PL.19	II 区 SK16 完掘状況	II 区 SK16(右)・SK16-2(左) 完掘状況	II 区 SK17 検出状況
PL.20	II 区 SK17 完掘状況	II 区 SK18 検出状況	II 区 SK18 完掘状況
PL.21	II 区 SK18 黄色土枠	II 区 SK18 黄色土枠背後 掘り方埋積状況	II 区 SK18 掘り方完掘状況
PL.22	II 区 SK19 鉄製品出土状況	II 区 SK20 鉄製品出土状況	II 区 SK19(右)・SK20(左)完掘状況
PL.23	II 区 SK21 完掘状況	II 区 SK23 完掘状況	II 区 SK24 出土状況
PL.24	II 区 SK25 完掘状況	II 区 SK27 完掘状況	II 区 SK28 完掘状況
PL.25	II 区 SK29 半截状況	II 区 SK31・SK32検出状況	II 区 SK31 石臼出土状況
PL.26	II 区 SK31 完掘状況	II 区 SK32 完掘状況	II 区 SK33・SK33-2・SK33-3 検出状況
PL.27	II 区 SK33 完掘状況	II 区 SK34 完掘状況	II 区 SK35 木片出土状況
PL.28	II 区 SK35 完掘状況	II 区 SK36 完掘状況	II 区 SK38 完掘状況
PL.29	II 区 SK39 完掘状況	II 区 SK40 出土状況	II 区 SK40 完掘状況
PL.30	II 区 SK41 完掘状況	II 区 SK44 完掘状況	II 区 SK45(右)・SK46(左) 完掘状況
PL.31	II 区 SK45 底部 小溝検出状況	II 区 SK45 黄色粘土による 壁残存状況	II 区 SK46 完掘状況
PL.32	II 区 SK47 銅銭出土状況	II 区 SK48 陶器(碗) 出土状況	II 区 SK50 完掘状況
PL.33	II 区 SK51 出土状況	II 区 SK51 完掘状況	II 区 SK54 完掘状況
PL.34	II 区 SK59 完掘状況	II 区 SK62 完掘状況	II 区 SK65 完掘状況
PL.35	II 区 SK66 完掘状況	II 区 SK69 検出状況	II 区 SK75 半截状況
PL.36	II 区 SD1 陶器(汁次) 出土状況	II 区 SD1 遺物出土状況	II 区 SD1 半截状況
PL.37	II 区 SD5 陶器(碗) 出土状況	II 区 SD11(北) 完掘状況	II 区 SX2 半截状況
PL.38	II 区 SX3 完掘状況	II 区 SX5 完掘状況	II 区 SX7 完掘状況
PL.39	II 区 SX9 完掘状況	II 区 SX15 半截状況	II 区 P33検出状況
PL.40	調査 III 区(南西)全景	III 区 SK1 検出状況	III 区 SK1完掘状況
PL.41	III 区 SK2 検出状況	III 区 SK2 半截状況	III 区 SK4完掘状況
PL.42	III 区 SX1 半截状況	III 区 SX3 半截状況	III 区 SX6 半截状況
PL.43	(43A～43D) 調査 I 区出土遺物	その 1	

- PL.44 (44A~44D) 調査Ⅰ区出土遺物 その2
PL.45 (45A~45D) 調査Ⅰ区出土遺物 その3
PL.46 (46A~46D) 調査Ⅰ・Ⅱ区出土遺物
PL.47 (47A~47D) 調査Ⅱ区出土遺物 その1
PL.48 (48A~48D) 調査Ⅱ区出土遺物 その2
PL.49 (49A~49D) 調査Ⅱ区出土遺物 その3
PL.50 (50A~50D) 調査Ⅱ区出土遺物 その4
PL.51 (51A~51D) 調査Ⅱ区出土遺物 その5
PL.52 (52A~52D) 調査Ⅱ区出土遺物 その6
PL.53 (53A~53D) 調査Ⅱ区出土遺物 その7
PL.54 (54A~54D) 調査Ⅱ区出土遺物 その8
PL.55 (55A~55D) 調査Ⅱ区出土遺物 その9
PL.56 (56A~56D) 調査Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ区出土遺物
PL.57 (57A~57D) 調査Ⅰ・Ⅱ区出土遺物 (石製品/瓦)
PL.58 調査Ⅱ区出土遺物 その10
PL.59 調査Ⅱ区出土遺物 その11
PL.60 調査Ⅱ区出土遺物 その12
PL.61 調査Ⅰ・Ⅱ区出土遺物 (紋様/銘/銅銭)

第Ⅰ章 遺跡の位置と地理的・歴史的環境

1. 地理的環境

山田三ツ又遺跡の所在する香美郡土佐山田町は、県の中央部、香美郡西部に位置する。県下最大の穀倉地帯、香長平野の北端、県下3大河川の一つ物部川の下流域から北の台地・山間部に広がる。この物部川は、県北東部の香美郡物部村、剣山山系の白髪山(1,770m)の東斜面に源流を発し、高知平野東部の同郡吉川村で土佐湾に注ぐ。上・中流は仏像構造線に沿って直線的に西南西流しており、流路に沿ったルートは古来阿波への最短路として知られている。物部川に沿う山間部には見事な河岸段丘が発達し、土佐山田町で流路を南に変えた物部川は、下流に肥沃な香長平野を形成する。広義の高知平野の東部を成す香長平野は不整形の扇状地で、物部川兩岸に鏡野・山田野と呼ばれる古期扇状地の砂礫層からなる洪積台地が横たわる。台地面は河床から5m内外の比高を持ち、台地の間に新期扇状地が広がり、北端は国分川の侵食により崖を成す。新期扇状地から沖積低地にかけての開発の歴史は古く、県下最大の遺跡群である南国市の田村遺跡群は縄文時代から近世にわたる巨大な複合遺跡で、水田、住居跡も発掘されている。また、条里制地割の遺構が広く認められるが、旧物部川は洪水氾濫をたびたび繰り返しており、条里地割りの乱れた部分も多く、旧流路も数本認められる。

この洪積台地上には長岡台地と称される部分があり、山田三ツ又遺跡もこの台地上に位置する。長岡台地は、香長平野の北部を香美郡土佐山田町から南国市にまたがり、北東から南西に約5キロに連なる。洪積世中期以降に形成された比較的連続性に富んだ砂礫台地で、隆起性扇状地でもあり、台地面は物部川左岸の野市面に対して長岡面とも称される。標高は扇頂部に近い土佐山田町付近では約50mに達し、南西に緩やかに傾斜し、扇端部の南国市後免町付近では15~10mである。台地面の北西側は国分川流域に扇状地性低地、南東側は物部川下流域の扇状地性低地に対して段丘面を持って接している。

土佐山田町の市街地が乗っている扇頂部分付近は周囲に比べて高位な面となり、南部に一段低い下位面があり、二段の段丘面となっている。中央部から末端部は低地性氾濫原に向かって緩やかに台地斜面が傾斜し、特に南西端は扇状地性低地の粗粒性沖積層に埋没しており湧水地帯となって小河川が流出し湿地帯を形成している。土壌は多湿黒ボク土壌であり、層の厚さは20~50cm以上で下層は灰色か灰褐色の場合が多い。台地面は自然の河流が無く江戸期以前は開発が遅れていたが、江戸期初頭、土佐藩家老野中兼山が物部川に山田堰を築き、灌漑水路を設けたことによって台地面にも導水が行われた。開発には郷土が登用され、台地上には旧郷土屋敷が散在し、散村的景観を呈する。また、後免・土佐山田・野市の在郷町もこの時期に形成されたものである。灌漑用水により、かつては米の二期作が盛んであり、現在も高知平野の水田地帯の一部であるが、乾田であるため、古来、葉タバコ・野菜の栽培も盛んである。近年はビニールハウスの施設園芸も増加してきている。町域面積の70%を森林地帯が占め、林業が盛んで良材を多く産出する。工業は地場産業の打刃物などがある。台地面の中心集落、扇頂部の土佐山田町は物部川上流部と香長平野の接点に立地した谷口集落でもある。台地面はかつて開発の主体となった郷土屋敷の点在する散村形態がみられ、現在もその景観の

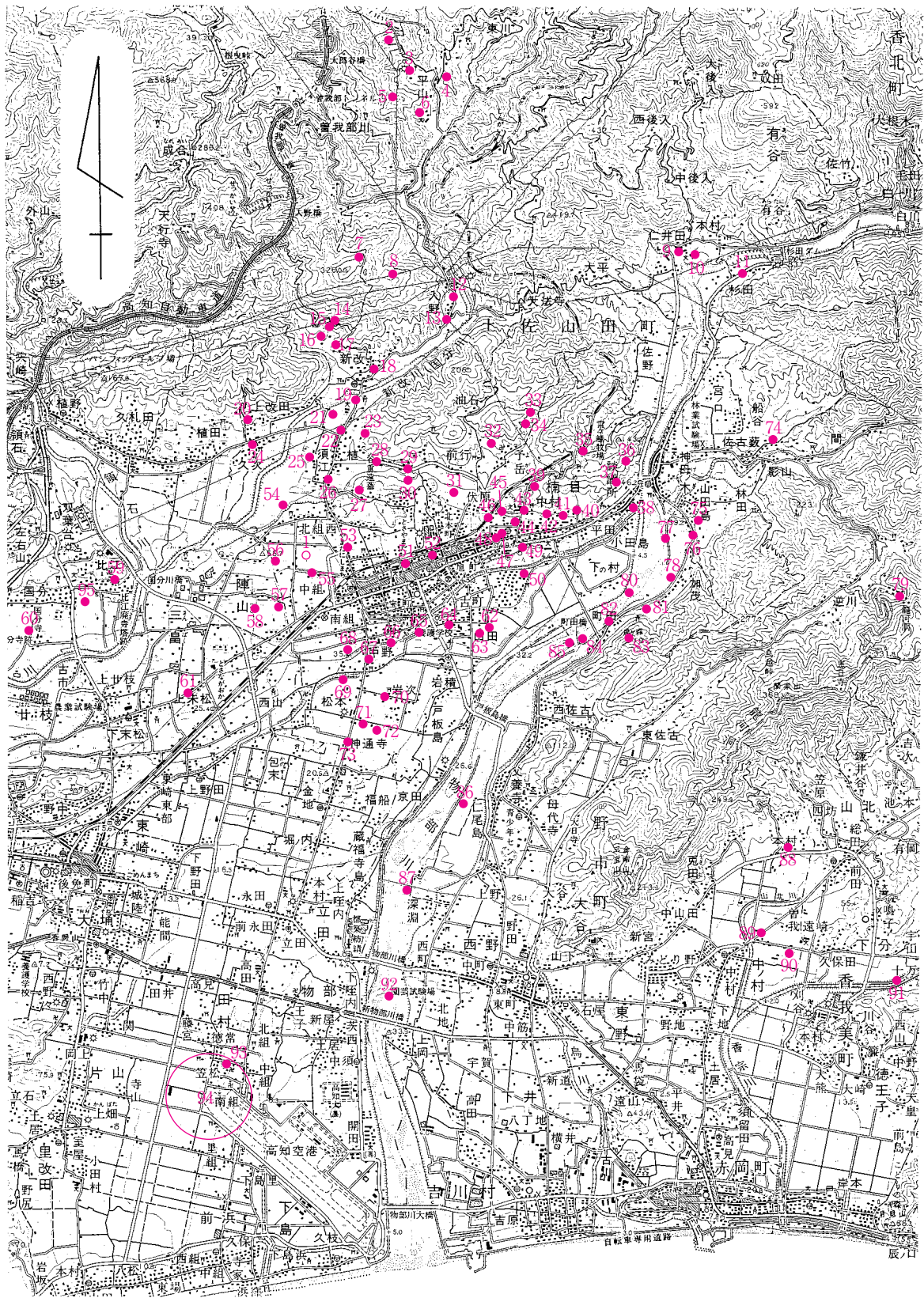


fig.1 山田三ツ又遺跡の位置と周辺の遺跡分布図

名残がみられる。台地面の長軸(北東～南西方向)にほぼ沿う方向でJR土讃本線及び国道195号が直線的に通過している。東にある三宝山の中腹には国指定史跡、天然記念物である龍河洞があり、県下でも有数の観光地となっている。

引用・参考文献

- 「土佐山田町史」土佐山田町教育委員会 1979
 「角川 日本地名大辞典 39高知県」 角川書店 1986

No.	遺 跡 名	時 代	No.	遺 跡 名	時 代	No.	遺 跡 名	時 代
1	山田三ツ又遺跡	古墳～近世	33	予岳窯跡	古墳	65	クロアイ遺跡	弥生～中世
2	安楽寺跡	中世	34	予岳古墳	〃	66	下夕野遺跡	古墳～中世
3	甫喜山氏土居城跡	〃	35	雪ヶ峰古墳	古墳	67	野中兼山邸跡	近世
4	岡ノ上城跡	〃	36	雪ヶ峰城跡	中世	68	坂西遺跡	古墳～中世
5	甫喜山城跡	〃	37	宮田遺跡	弥生～近世	69	口戸遺跡	〃
6	平山城跡	〃	38	山田堰跡	近世	70	大領遺跡	〃
7	鈴ヶ森遺跡	〃	39	楠目城跡	中世	71	下門田遺跡	〃
8	入野城跡	〃	40	南森城跡	〃	72	ヤイタ遺跡	〃
9	佐岡城跡	〃	41	横田遺跡	弥生～中世	73	津野親忠墓	中世
10	佐岡新田遺跡	弥生～中世	42	田所神社遺跡	〃	74	影山城跡	〃
11	若一王子神道遺跡	中世	43	ひびのき大河内遺跡	弥生～近世	75	林田遺跡	弥生～中世
12	入野遺跡	平安・中世	44	ひびのき遺跡	弥生・古墳	76	林田城跡	中世
13	入野南遺跡	〃	45	ひびのき岡の神母遺跡	弥生～中世	77	山田島遺跡	古墳・近世
14	東谷古窯跡	奈良・平安	46	ひびのきサウジ遺跡	弥生～近世	78	加茂遺跡	古墳～中世
15	勝福寺跡	中世・近世	47	伏原大塚古墳	古墳	79	龍河洞洞穴遺跡	弥生
16	勝楽寺跡	近世	48	大塚遺跡	弥生～近世	80	加茂神社西遺跡	古墳～中世
17	松本山長久寺跡	〃	49	楠目遺跡	弥生～近世	81	加茂城跡	中世
18	屋甫田丸遺跡	中世	50	稲荷前遺跡	〃	82	ガニウド遺跡	古墳～中世
19	藁原神社遺跡	奈良～中世	51	公儀の井戸1	近世	83	鳥ヶ森城跡	中世
20	北野遺跡	古墳～中世	52	公儀の井戸2	〃	84	町田遺跡	弥生～中世
21	須江北遺跡	〃	53	谷重遠邸跡	〃	85	町田堰東遺跡	縄文～中世
22	植南土居遺跡	平安・中世	54	野中神社	〃	86	深淵北遺跡	弥生～中世
23	植村城跡	中世	55	山田三ツ又東遺跡	弥生～近世	87	深淵遺跡	縄文～近世
24	久次土居城跡	〃	56	浜道の西遺跡	古墳～平安	88	本村遺跡	平安
25	須江上段遺跡	古墳～近世	57	山田三ツ又西遺跡	〃	89	曾我遺跡	弥生～中世
26	モジリカワ遺跡	弥生～近世	58	陣山遺跡	近世	90	下分遠崎遺跡	弥生
27	谷重遠墓	近世	59	比江廢寺跡	白鳳・奈良	91	十万遺跡	弥生～中世
28	西クレドリ遺跡	弥生～近世	60	土佐国分寺跡	奈良・平安	92	下ノ坪遺跡	平安
29	植キノサキ遺跡	中世	61	五反地遺跡	古墳～中世	93	田村城跡	中世
30	山ノ間丸遺跡	〃	62	高柳土居城跡	中世	94	田村遺跡群	縄文～近世
31	メウカイ遺跡	弥生～中世	63	高柳遺跡	弥生～中世	95	土佐国府跡	弥生～中世
32	山田氏累代墓所	中世	64	原遺跡	弥生～近世			

遺跡一覧表

2. 歴史的環境

土佐山田町は地理的に恵まれ、県下最大の穀倉地帯香長平野の一面に位置することから原始以来、綿々とした人々の営みを大地に刻み付けている。また、南に隣接する南国市とともに、県下屈指の遺跡稠密地帯である。

土佐山田町の歴史は、北部山間部銅古屋岩陰遺跡の調査によって、縄文時代早期にまで遡ることが確認されている。ここでは、早期押型紋土器・厚手無紋の葛島式土器・中期の船元Ⅱ式土器・後期の彦崎Ⅱ式土器とともに多量のサヌカイト製の石鏃が出土している。また、東部物部川左岸の段丘上林田シタノヅ遺跡が存在するが、ここではピット状遺構から後期初頭の中津式土器が出土している。

弥生時代では前期に属する遺跡の確認には至っておらず、今のところ中期後半に位置付けられる龍河洞洞穴遺跡が最古である。この遺跡は全山石灰岩でできた三宝山(322m)の中腹に開口した洞穴遺跡で、昭和8年に遺跡の部分が発見され、翌9年に天然記念物及び史蹟として指定を受けている。洞内の生活面は3室からなり、出土遺物は凹線文の発達した龍河洞式土器をはじめ、鉄族・石錘・有孔鹿角製品、貝輪・骨製管玉・瑪瑙製勾玉等の装身具、貝類・獣骨類の自然遺物などである。また、龍河洞式土器に混在してただ一点、弥生後期末のヒビノキⅡ式土器が出土している。龍河洞洞穴遺跡と同時期とみられる遺跡に予岳遺跡・雪ヶ峰遺跡・影山遺跡がある。中期後半に属する遺跡は多く原遺跡・原南遺跡からは竪穴住居跡とともに環濠と思われる溝や掘立柱建物跡等集落を構成する遺構も発見されている。その北部台地上には、弥生時代後半～古墳時代初頭の土器群を出土したひびのき遺跡が存在する。これらの土器群はヒビノキⅠ～Ⅲ式土器と命名され、高知県中央部以東の標式土器とされていると同時に、同遺跡がその時期に集落遺跡として栄えたことを示している。弥生時代も後期になると遺跡数・規模の拡大がみられ、特に同遺跡に代表される後期後半に属する遺跡の急増が認められる。隣接するひびのきサウジ遺跡では、弥生後期後半の竪穴住居跡5棟を検出しており、この内1棟は祭祀的意味を持つものと考えられている。また、物部川左岸には林田遺跡が存在する。ここからは竪穴住居跡5棟が検出され、土器と共に鉄鏃が出土している。

古墳時代では、「小円墳・横穴式石室・群集」といった特徴を持つ後期古墳の存在が、山麓部を中心に知られている。中でも、ひびのき遺跡に近い伏原大塚古墳は、5世紀末から6世紀初頭に築造されたと考えられる。また、この古墳の周溝からは須恵器の円筒埴輪が出土している。この期の須恵器の窯跡は今のところ発見されていないが、当古墳の埴輪の存在を考えれば、出現期は少なくとも築造期と同時期まで遡ることは可能であろう。また、これらの地域を特徴付ける遺跡として窯跡をあげることができる。当町北部の新改地区とその周辺には須江上段遺跡・須江北遺跡等20ヶ所ほどが知られており、一括して須江古窯跡群と呼称されている。窯跡の中には下流の比江廃寺跡の瓦を焼成したタンガン窯跡や国分寺の平瓦を焼成した東谷古窯跡も存在し、国分川による水運を考えれば、須江古窯跡群は国府等と密接な関係にあったと思われる。

当町南端の沖積平野は県下最大の平野部北辺にあたり、広く古代条里制の遺構を残している。この条里関係遺構と「大領」・「田倉」・「官毛田」等の現存地名から大領遺跡は香美の郡衙の推定

地と考えられている。また、前述のとおり新改・須江方面は、その西方約2kmに土佐国府(南国市)を控えて国庁と密接な結びつきのあった地域と考えられている。更には、須江上段遺跡内には南海道の駅家跡ではないかとされる区画が見つけられ、古窯跡の存在と合わせ、古代の要衝の地として注目される。

中世～近世では、戦国7雄の一人に数えられた山田氏が、建久4年(1193)土佐に入部以来勢力をのばし、楠目に築城した山田城を拠点として城下町建設を行っている。しかし、天文18年(1549)には長宗部国親の攻撃を受けて敗北し、長宗部氏の支配下に入る。関ヶ原の戦後、土佐一国は新たに山内一豊に与えられ、古い領主関係を一掃した土地の上に新しい行政単位としての区画が行われ、村切りが成されて、村役人が指名され体制固めが急速に完了する。近世において、長岡台地上の景観を決定付けたのは、野中兼山による用水路の建設と新田の開発である。寛文4年(1664)山田堰完成や用水路の貫通は、それまでの畑作が中心であり、荒地の多かった台地上に水田耕作を可能にした。また兼山は郷士の登用によって新たに灌漑可能となったこの地に新田を開発する。こうして開発された野地村はのちの山田町に発展する地域で、香美郡北部の山地と南部の平野の接点にあり、物産の集散地となり、さらに舟入川の舟運を利用して高知城下と結ぶ経済圏の要地としての意義は大きい。

引用・参考文献

- 「土佐山田町史」 土佐山田町教育委員会 1979
 森田尚宏・中山泰弘 「土佐山田北部遺跡群」 土佐山田町教育委員会 1992
 廣田佳久「伏原大塚古墳」 土佐山田町教育委員会 1993
 山崎正明「林田シタノヂ遺跡Ⅱ」 土佐山田町教育委員会 1993
 出原恵三・泉 幸代・藤方正治「小籠遺跡Ⅰ」 (財)高知県文化財団埋蔵文化財センター 1995
 高橋啓明「ひびのきサウジ遺跡発掘調査報告書」 土佐山田町教育委員会 1990
 「角川 日本地名大辞典 39高知県」 角川書店 1986

第Ⅱ章 調査に至る経過と調査の方法

1. 調査に至る経過

国道195号線は、高知市から東部四国山地を経て徳島県阿南市とを結ぶ最短の幹線道路である。物部川から四ツ足峠を経て那賀川に至る直線ルートは、古代以来阿波への最短路として知られており、南海道の官道も設定されたとの説もある。この国道は、昭和40年の国道昇格以来、幾たびの改修整備がなされ今日に至っている。その間、物資の輸送は勿論のこと、東西の産業・経済・文化の発展に重要な役割を果たしてきた。高知県東部、分けても物部川沿線においては、地域の大動脈として人々の生活を支え、地域社会や文化の形成に果たしてきた役割の大きさには計り知れないものがある。

しかし、この国道は高知市のベッドタウン化が急速に進みつつある南国市及び土佐山田町域において市街地を通過していることから、近年交通渋滞は慢性化の一途をたどっている。また、情報・物資輸送の遅滞は人々の生活の潤いを疎外し、円滑な産業の充実発展にとっても深刻な問題となってきた。そのため高知県は、地域産業の振興や四国横断自動車道建設に伴う流通等の円滑化を図るために、南国市西部の高知東道路から土佐山田町市街地に至るあけぼの道路の敷設を計画することとなった。

当計画路線の大部分は、高知平野の東北部に広がる県史の主要舞台の一つ、長岡台地上を貫いて走る。長岡台地には、弥生時代～古代・中世に至る多数の遺跡が立地しており、県内でも有数の遺跡稠密地帯である。土佐山田地区においては、山田三ツ又遺跡域と浜の道西遺跡域とが計画路線内に含まれることにより、高知県教育委員会は文化財保護の立場から、開発部局である高知県南国土木事務所と協議を重ね、道路敷設計画においては極力遺跡を避けることを要請すると共に、遺跡内及びその付近が計画地内に入る場合は記録保存のための緊急調査を実施することが必要であり、埋蔵文化財に対する理解と協力を求めた。

平成7年4月27日付けで、高知県南国土木事務所長三浦功より高知県教育委員会を經由して、高知県文化財団埋蔵文化財センター所長原雅彦に対して、国道195号道路改良（あけぼの道路）に伴う山田三ツ又遺跡、米屋の東遺跡、他3遺跡発掘調査業務の委託について依頼があった。これを受けて平成7年7月26日、高知県と高知県文化財団埋蔵文化財センターとの間で委託契約を締結し、同埋蔵文化財センターが発掘調査を実施することとなった。

2. 調査の方法

土佐山田地区では、町域に弥生時代から中世にかけて比較的残りの良い遺跡が多く存在している。あけぼの道路計画路線は、このうち山田三ツ又遺跡・山田三ツ又東遺跡・浜の道西遺跡に近接して通過することから、遺構の広がり及び遺物の分布密度を把握するために平成7年8月23日から同年8月29日まで調査対象地の試掘調査を実施した。また、本調査はこれに継続する形で同年8月30日から実施した。

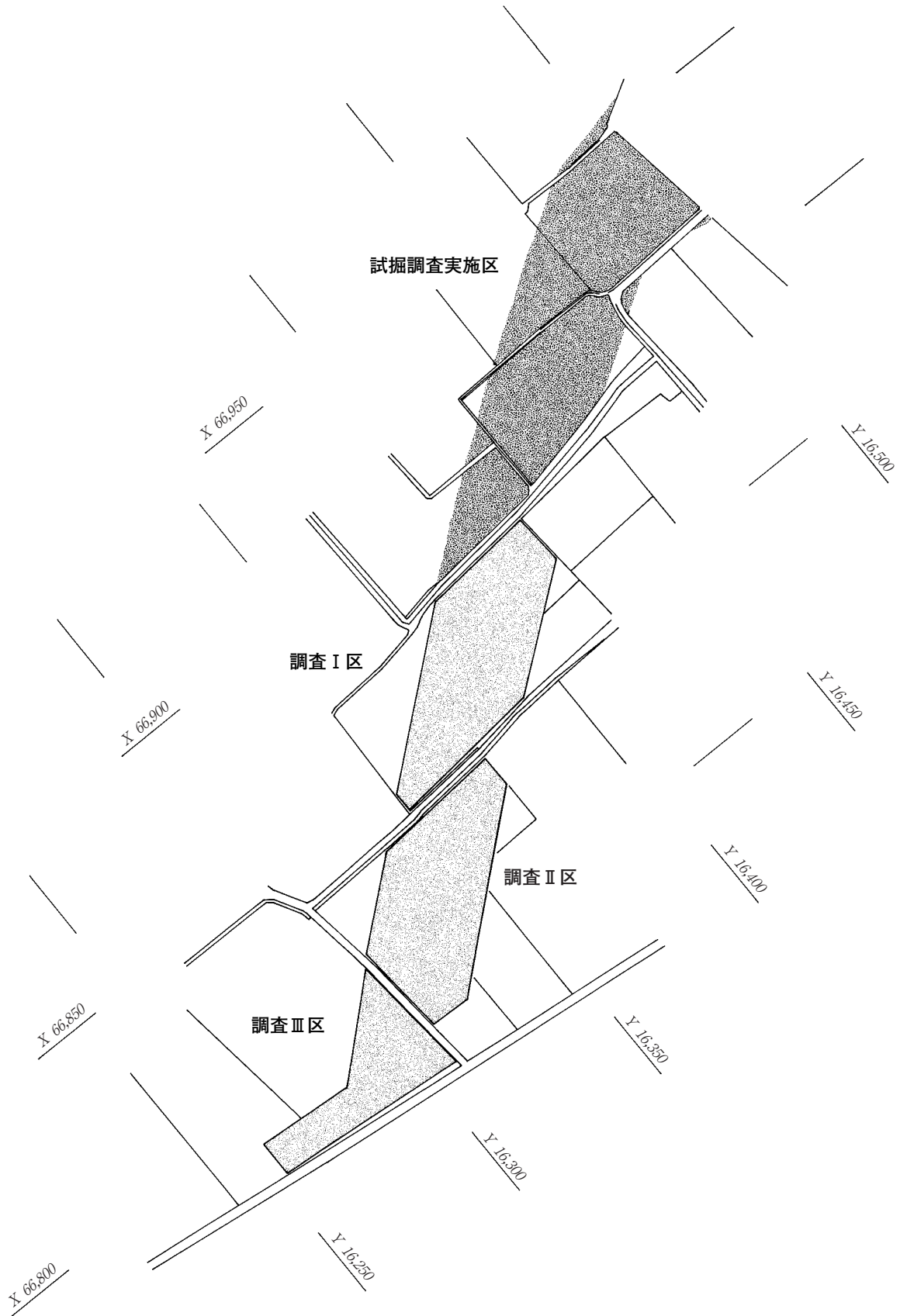
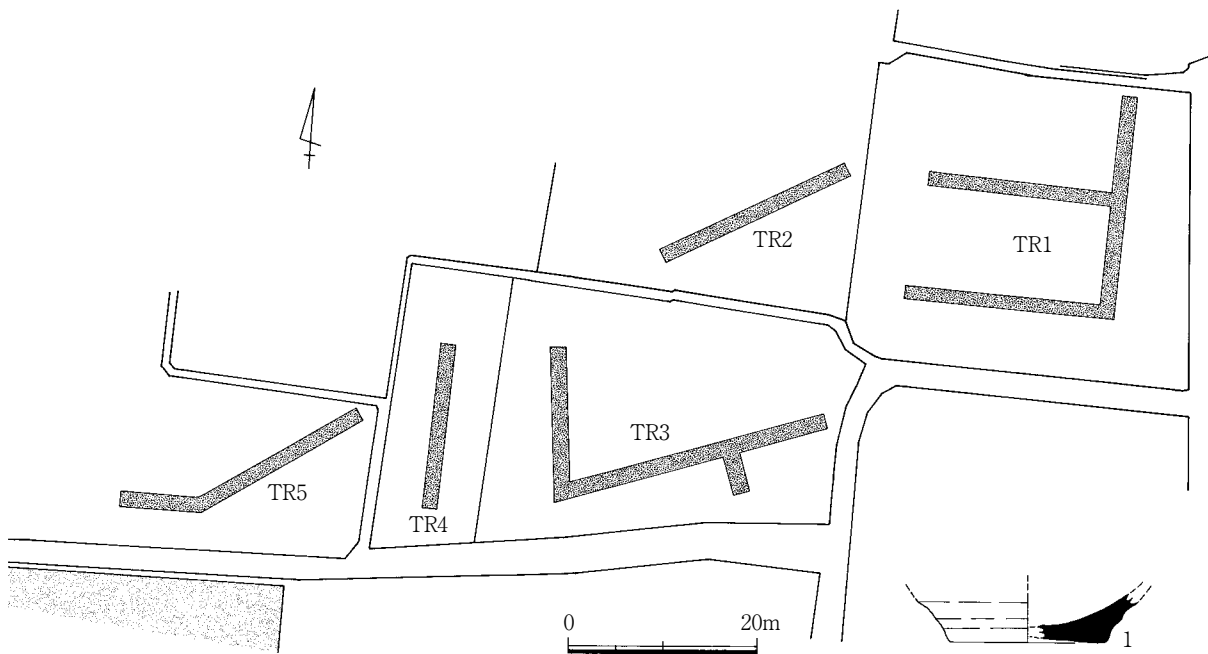


fig.2 調査区配置図 (S=1/1,600)



○ 試掘調査

試掘調査は幅2mのトレンチを調査対象地に設定して行った。対象地区には耕作地割りに伴う構築物(例えば、コンクリート畦畔や水路)が存在し、敷設予定地内には未買収地などがあることから、地権者及び耕作者の了解の基に、これら構築物は現況のまま置くことで調査を進めた。この結果、後に調査Ⅰ区とした水路の北(TR4)までは表土から僅かに出土遺物が見られるものの、遺物包含層や遺構の検出は認められなかった。

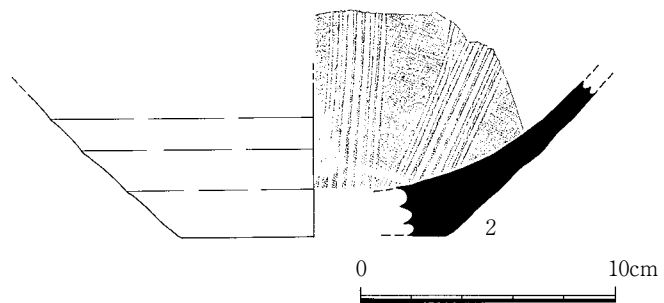


fig.3 試掘トレンチ位置図・出土遺物実測図

この試掘調査で出土した遺物の中で図示できるものは2点(fig.3-1・2)が存在する。1はTR3から出土したものであり、須恵器の坏である。2は調査Ⅱ区の東部に相当する箇所で見つかったもので、陶器挿鉢である。この他に細片としては、磁器19点、陶器25点、土師質土器18点、瓦質土器1点、須恵器5点と弥生土器6点が存在している。

○ 本調査

本調査の手順としてまず、調査対象地内に調査区を設定し、耕作土等の表土については主に重機によって除去を行い、遺構検出面または遺物包含層直上まで掘削を行った後、人力による精査を行った。検出した遺構・遺物の出土状況、及び土層等については、写真撮影を行った後、平面図及び断面図を作成した。遺物の取り上げ、遺構の実測については、公共座標に基づいて調査区全体に4m方眼をかけ、東西方向に1、2、3…、南北方向にA、B、C…、のNo.を付して地点の記録及び実測を行った。平面実測及び地層断面図については、20分の1を基本とし、必要に応じて10分の1実測を行った。

第Ⅲ章 調査の成果

1. 基本層準

山田三ツ又遺跡における堆積状況は、基本的に長岡台地と呼ばれるこの更新世形成の扇状地上に標準的に見られるものである。基本的には台地形成時の河成堆積物である黄色砂礫層を下層とし、通称「黒ボク」と呼ばれる喜界カルデラ噴出の火山灰を含む黒色土層を表土とするものと考えられる。但しここでは後世の耕作に伴う削平を受けており、現在の地割り形態に於ける東側では台地傾斜面上位に当たることから、黄色砂礫層等の安定層が耕作土下で検出されている。また、斜面下位に当たる部分でも遺構の検出面までは比較的浅く、上記黒色土の存在が認められるのは遺構埋土の一部である。

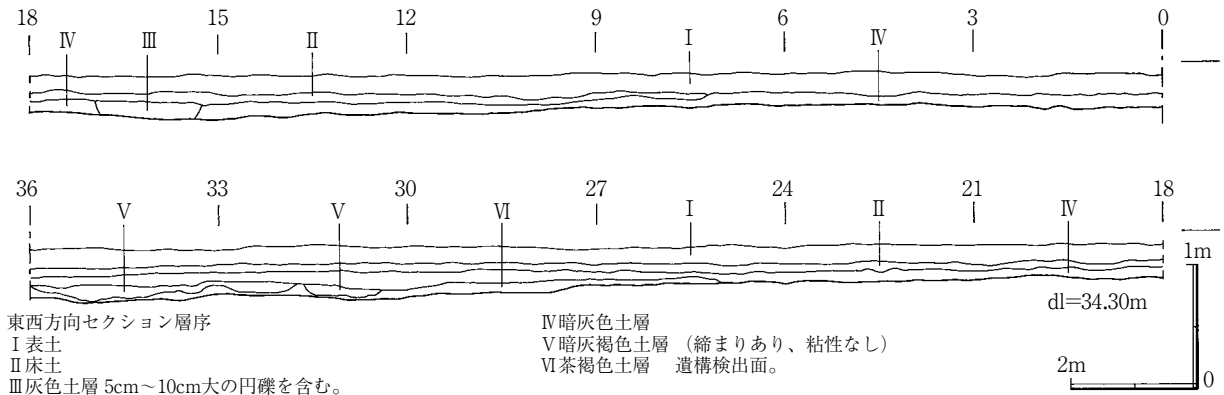


fig.4-1 東西方向セクション図

調査区の北西部に当たる調査Ⅰ区の北壁に於ける堆積状況である。Ⅵ層は長岡台地上で遺構を検出する際に概ね検出面と成る土層であり、黄色砂礫層の崩壊土と考えられる。Ⅵ層の上面では上位に堆積する黒色土が斑に混入する。Ⅴ層は検出面にまで達した溝状の遺構埋土と考えられる。

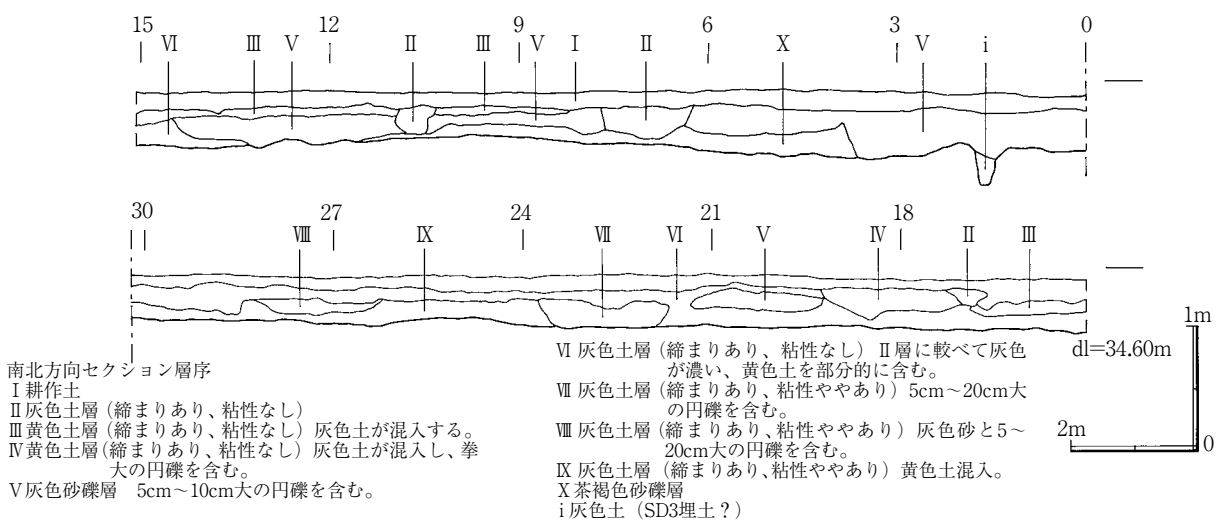


fig.4-2 南北方向セクション図

調査Ⅰ区中央部分の南北方向の堆積状況である。安定した東西方向の堆積状況に比較してやや変化の激しいものである。耕作に伴い削平と盛土を行った可能性が強い。

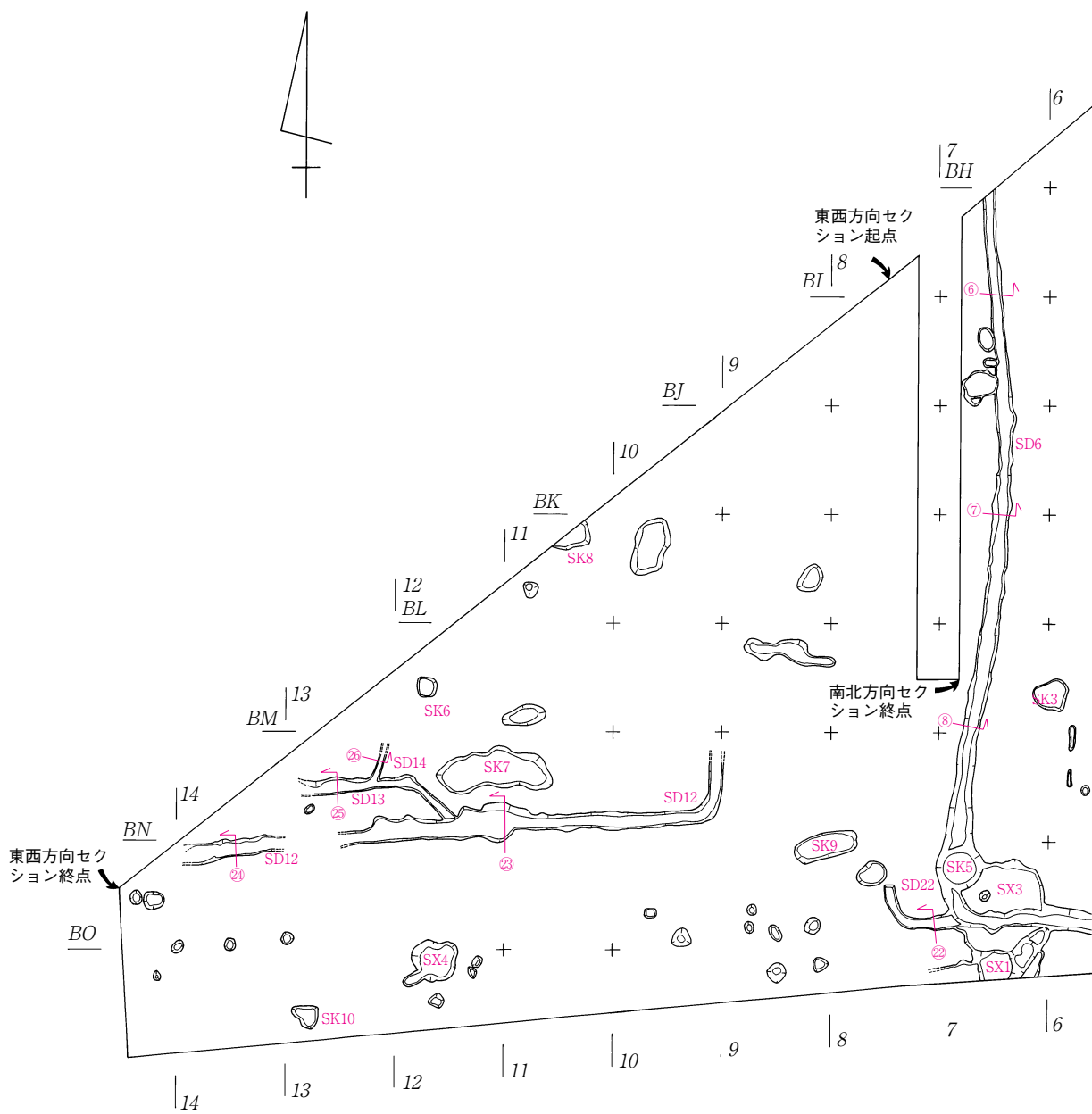
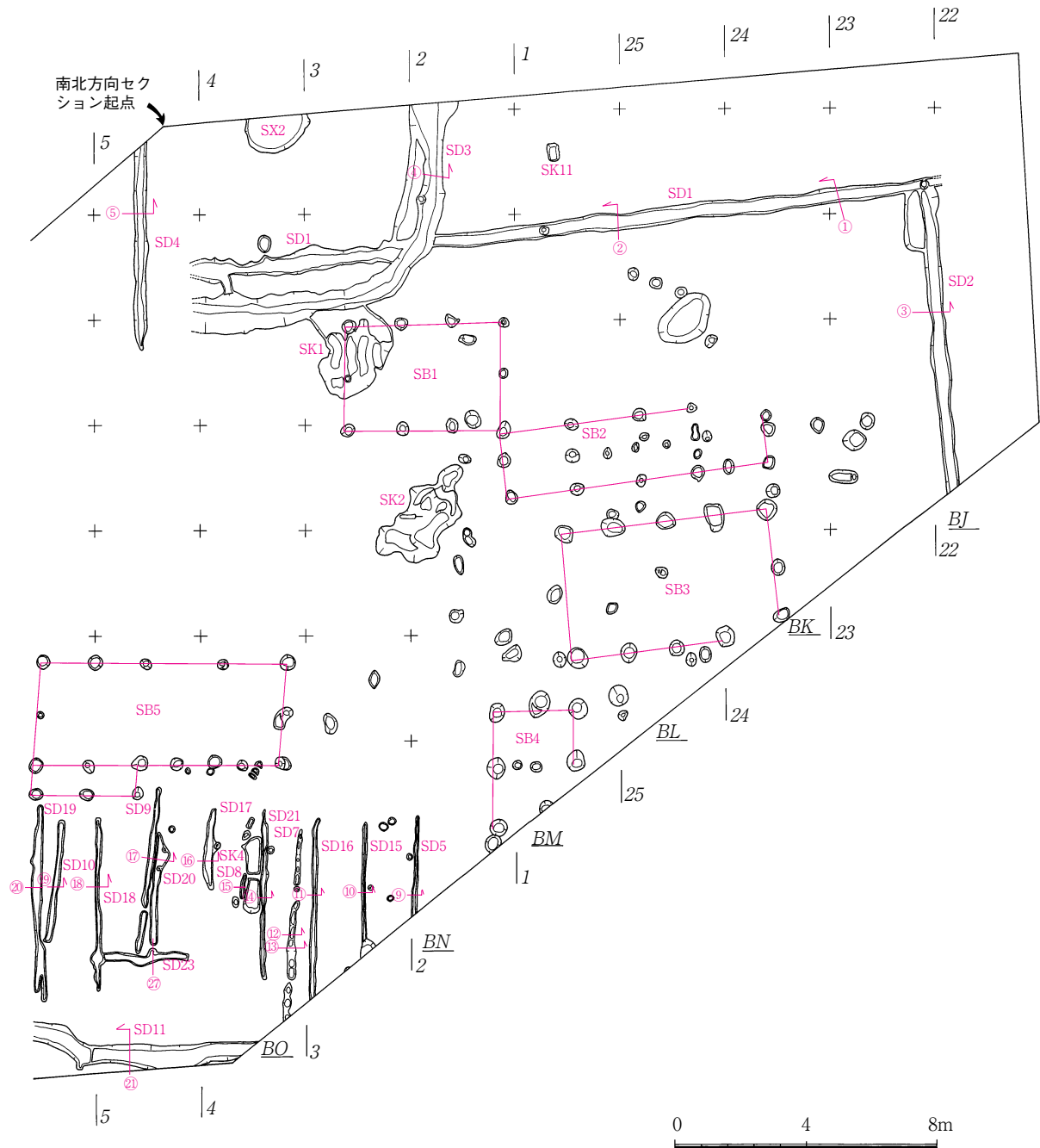


fig.5 調査 I 区全体図



2. 調査 I 区の遺構と遺物

(1) 堀立柱建物跡

SB 1 (fig.6)

調査区中央部東寄りに位置する。建物の規模は梁間 2 間 (4 m)、桁行 3 間 (6 m) を測る。棟方向は $N-89^{\circ}-E$ である。柱穴は円形及び楕円形を呈し、径 24~60cm、深さ 16~64cm を測る。このうち P9 は柱痕が残存する。柱痕は方形を呈し、一辺 18cm、深さ 52cm を測る。東南端の柱穴は SB 2 と重複するものと考えられる。

出土遺物は P7 より尾戸産陶器細片 1 点、P8 より土師質土器細片 4 点が出土しているが図示できるものはない。他のピットからの遺物の出土は皆無である。

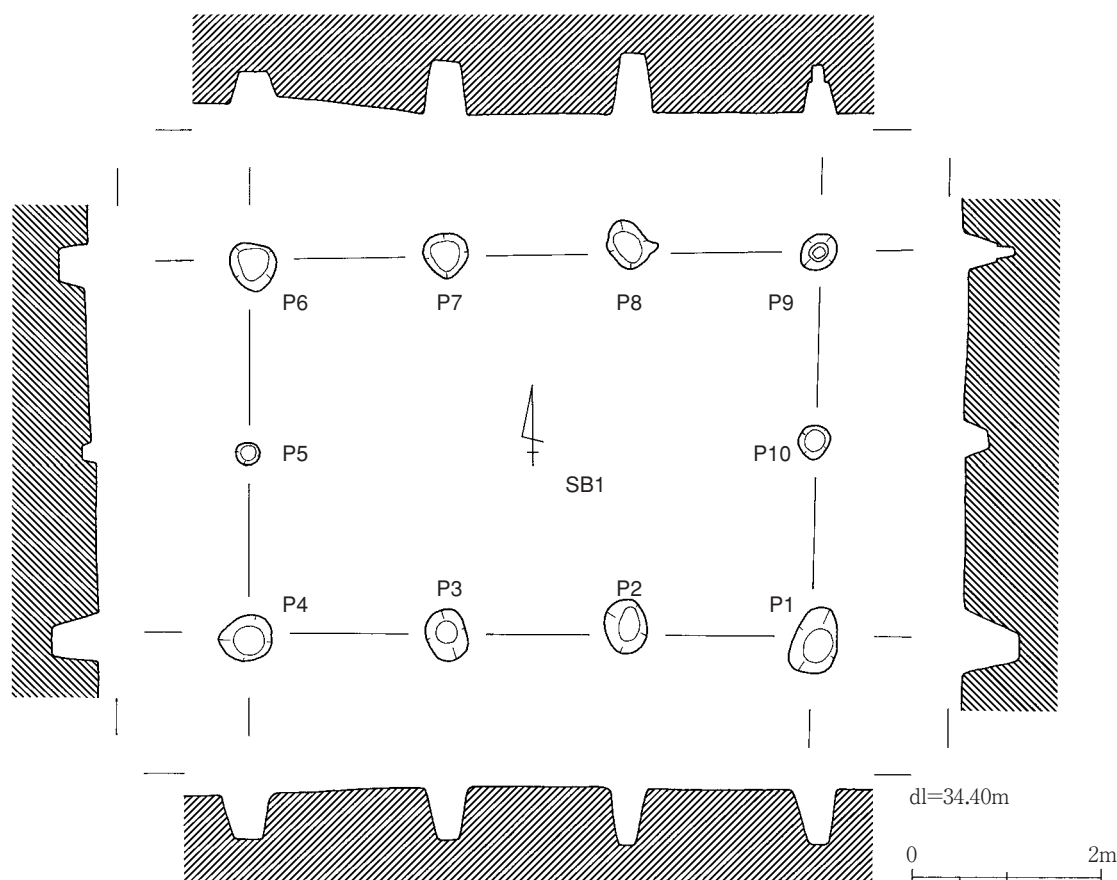


fig.6 SB1平面図・エレベーション図

SB 2 (Fig7)

調査区東部に位置する。建物の規模は梁間 2 間 (2.5m)、桁行 4 間 (10m) を測る。棟方向は $N-84^{\circ}-E$ であり、SB 3 と平行に延びる。柱穴は円形、楕円形及び方形を呈し、径 26~56cm、深さ 12~56cm を測る。北西端の柱穴は SB 1 と重複するもの

Pit no.	規模(cm)	検出面からの深さ(cm)	平面形態	出土遺物・その他
P 1	76×48	56	不整楕円形	
P 2	56×44	60	楕円形	
P 3	52×44	56	不整円形	
P 4	56×48	48	〃	
P 5	24	16	円形	
P 6	52×48	28	不整円形	
P 7	48×44	56	〃	陶器1点
P 8	52×40	54	不整楕円形	土師質土器4点
P 9	44×34	52	楕円形	柱痕(方形)
P 10	36×32	24	円形	

SB1 ピット計測表

と考えられる。北東端の柱穴1個が確認できなかった。

出土遺物はP2より陶器鉢1点が出土しているが図示できない。他のピットからの遺物の出土は皆無である。

SB 3 (fig.8)

調査区東部、SB 2の南側に位置する。建物の規模は梁間2間(4m)、桁行4間(8m)を測り、棟方向がSB 2と平行に延びる。棟方向はN-83°-Eである。柱穴は円形及び楕円形を呈し、径50~83cm、深さ45~68cmを測る。

出土遺物はP9より土師質土器細片10点、P10より縄文晩期深鉢1点(fig.8-1)、P6より磁器の染付端反り小碗1点(fig.8-2)、P7より磁器の染付碗1点であり、他のピットからの遺物の出土は皆無である。

SB 4 (fig.9)

調査区東部、SB 3の南側に位置する。建物の規模は梁間2間(3m)、桁行の南部は調査区南壁に隔されるが、検出規模は2間(4.30m)を測る。棟方向はほぼ真北である。柱穴は円形及び楕円形を呈し、径は65~92cm、深さは32~72cmを測る。

出土遺物はP2より土師質土器の小皿1点(fig.9-1)が出土している。他のピットからの遺物の出土は皆無である。

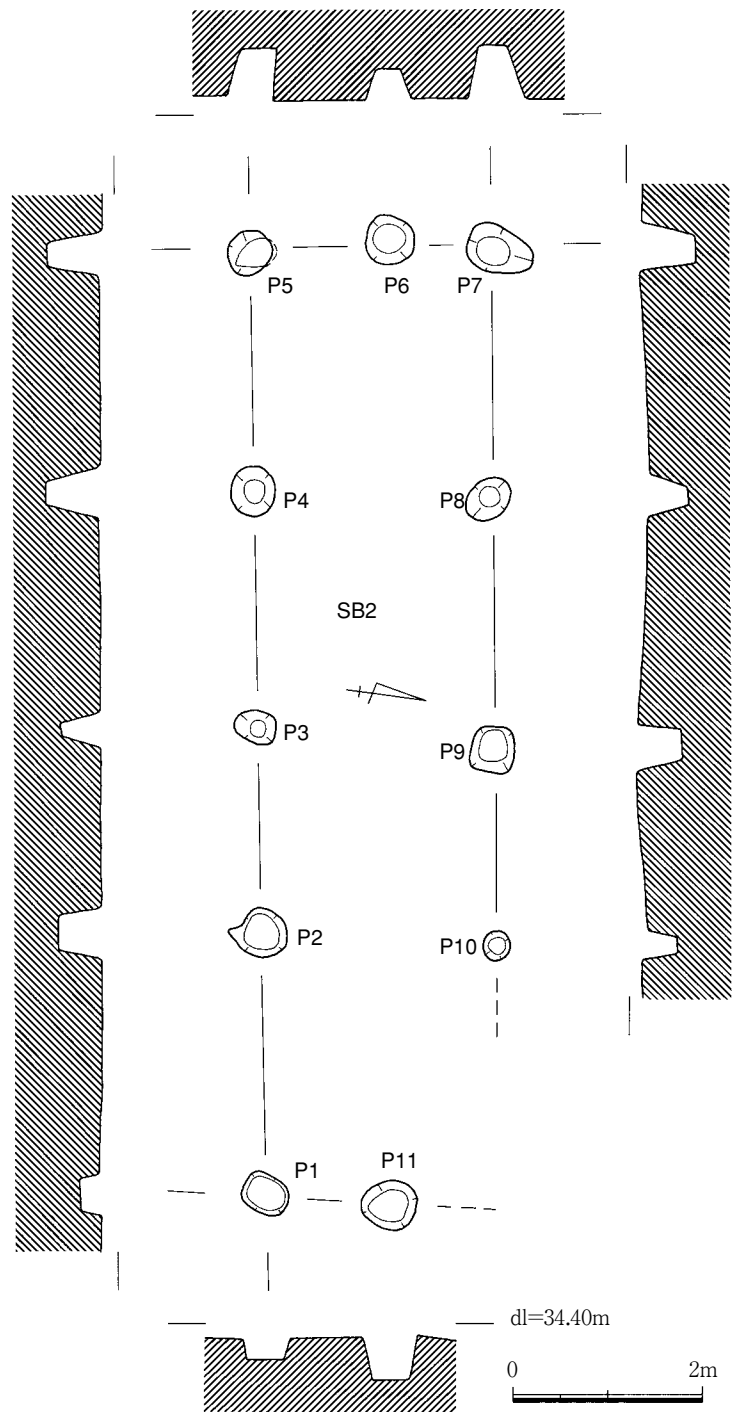


fig.7 SB2平面図・エレベーション図

Pit no.	規模(cm)	検出面からの深さ(cm)	平面形態	出土遺物・その他
P 1	48×36	20	楕円形	
P 2	52×48	44	不整円形	陶器1点
P 3	46×32	42	〃	
P 4	52×44	56	〃	
P 5	48×47	56	〃	
P 6	54×52	36	円形	
P 7	72×48	60	不整楕円形	
P 8	52×42	40	楕円形	
P 9	48×46	48	不整形	
P10	28	36	円形	
P11	60×52	48	不整円形	

SB2 ピット計測表

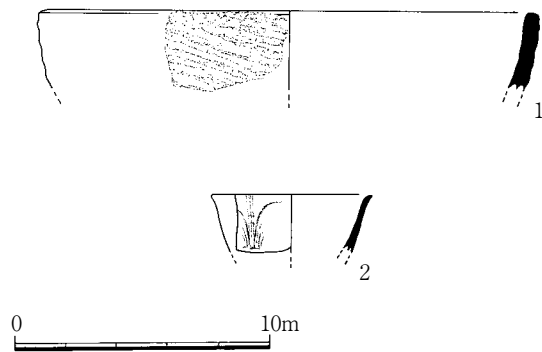
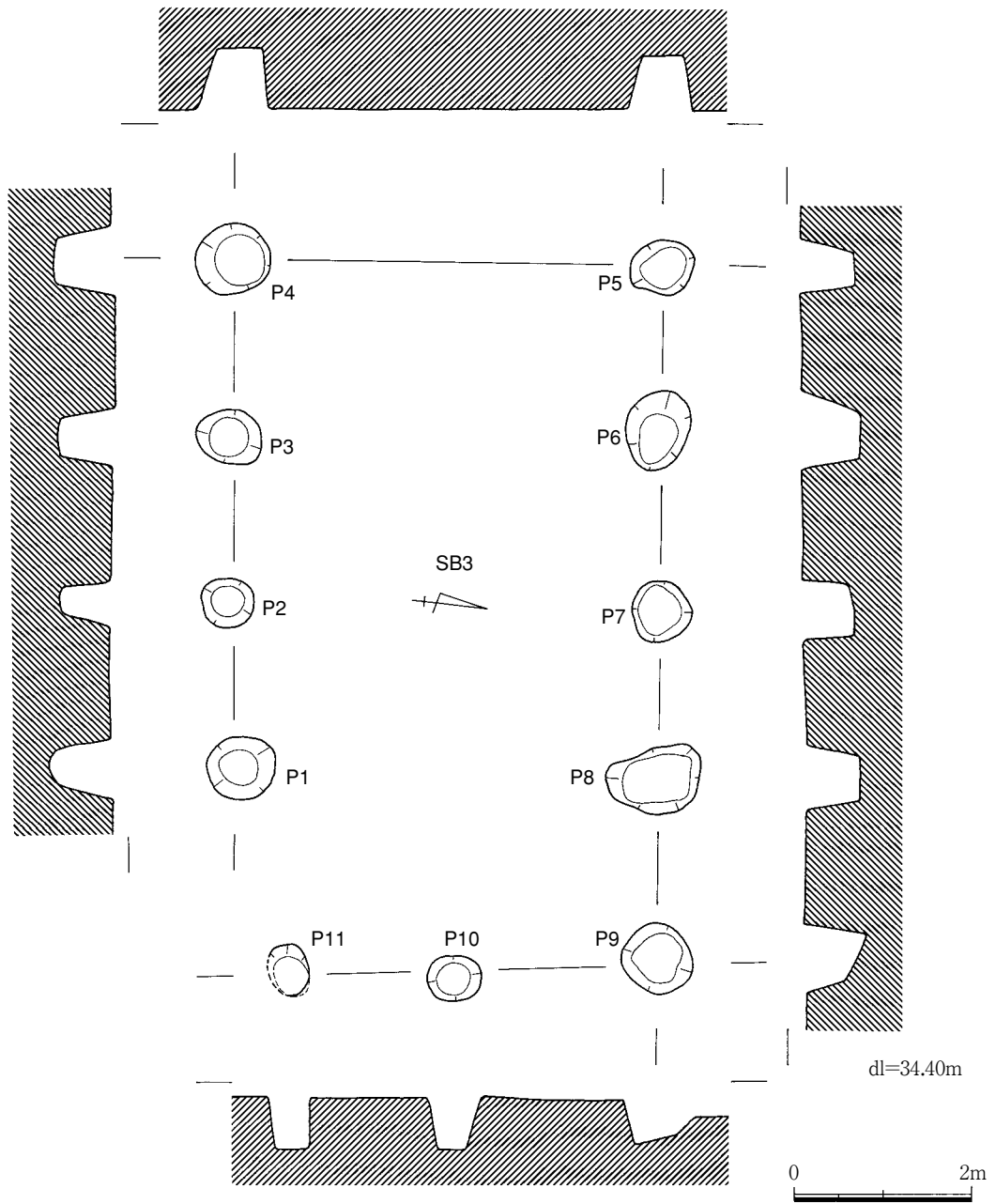


fig.8 SB3平面図・エレベーション図及び出土遺物実測図

Pit no.	規模(cm)	検出面からの深さ(cm)	平面形態	出土遺物・その他
P 1	76	70	円形	
P 2	58	56	〃	
P 3	76×62	64	不整形円形	
P 4	84×80	90	円形	
P 5	76×64	64	不整形円形	
P 6	92×72	64	楕円形	fig.8-2
P 7	72×64	60	不整形円形	磁器1点
P 8	104×76	60	不整形長方形	
P 9	82×80	68	不整形円形	土師質土器10点
P10	62×50	56	円形	fig.8-1
P11	60×44	56	楕円形	

SB3 ピット計測表

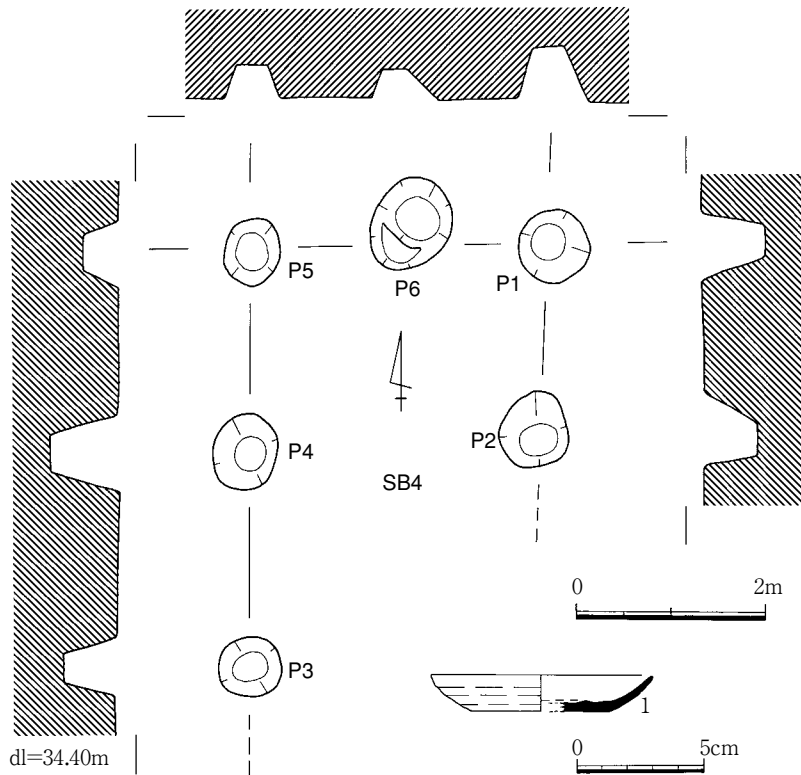


fig.9 SB4平面図・エレベーション図及び出土遺物実測図

Pit no.	規模(cm)	検出面からの深さ(cm)	平面形態	出土遺物・その他
P1	80×53	68	円形	
P2	82×68	56	不整形円形	fig.9-1
P3	64×62	56	円形	
P4	82×68	70	楕円形	
P5	72×58	36	〃	
P6	104×82	32	〃	

SB4 ピット計測表

SB 5 (fig.10)

調査区中央部西寄りに位置する。建物の規模は梁間2間(4m)、桁行4間(9.2m)を測る。南側には2間分の張出しがつく。棟方向はN-90°-Eである。

柱穴は円形及び不整楕円形を呈し、径38~60cm、深さ1.4~60cmを測る。

ピットからの出土遺物は皆無である。

(2) 土坑

SK 1 (fig11)

調査区のほぼ中央部に位置し、北寄りには近世のSD 3によって切られて存在する。平面形は、不整形を呈しており、長軸方向はほぼ真北である。規模は南北3.36m、東西2.44m、深さは最深部で27cmを測る。底部は凹凸が著しく畝状を呈する。壁は緩やかに立ち上がり、埋土

は暗褐色土である。底面で検出された2個の柱穴はSB 1に伴うもので、この土坑とは関係がないものと考えられる。

出土遺物は皆無である。

SK 2 (fig.12)

調査区の中央部に位置する。平面形は不整形を呈しており、長軸方向はN-36°-Eである。規模は南北4.00m、東西2.20m、深さは50~56cmを測る。断面は舟底状を呈する。埋土はI層：黒褐色土(5cm大の円礫を含む)、II層：茶褐色土(1~5cm大の礫を含む)、III層：灰色砂礫である。

出土遺物は皆無である。

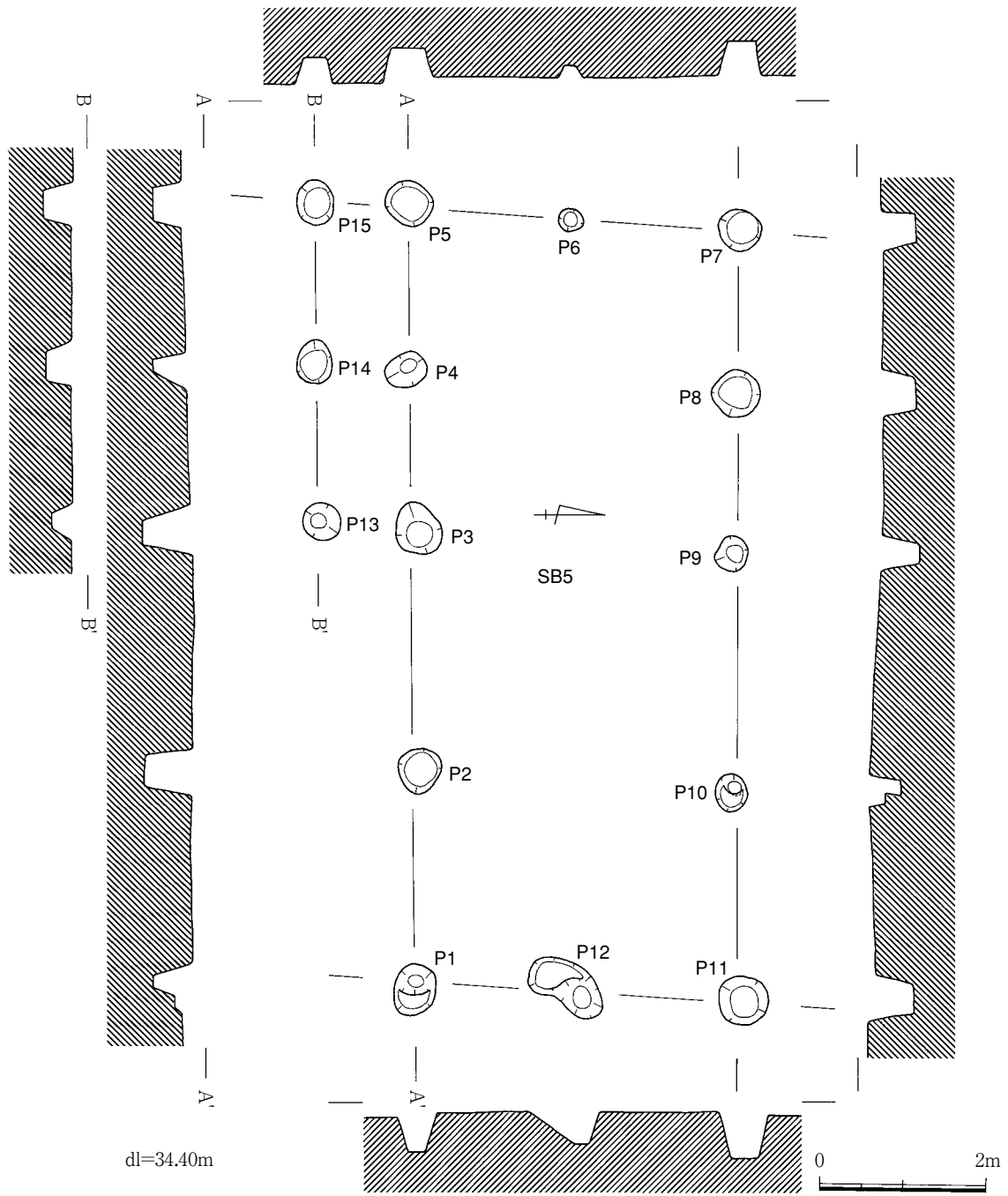


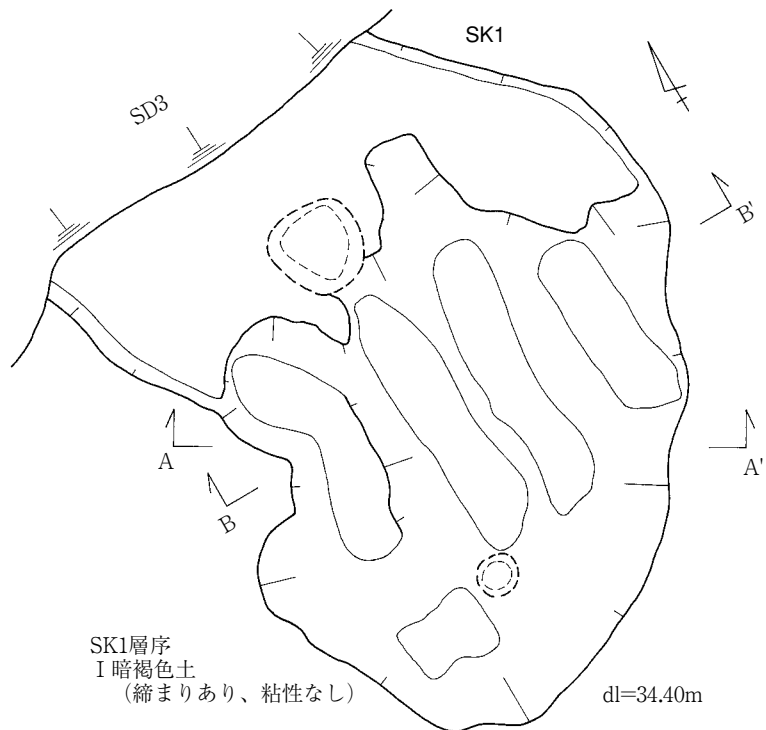
fig.10 SB5平面図・エレベーション図

Pit no.	規模(cm)	検出面からの深さ (cm)	平面形態	出土遺物・その他
P1	62×48	48	楕円形	
P2	52	56	円形	
P3	68×52	60	不整形円形	
P4	52×40	40	ク	
P5	56×50	44	ク	
P6	30×28	16	円形	
P7	52×48	40	ク	
P8	58×56	40	不整形円形	
P9	42×36	44	ク	
P10	44×36	40	楕円形	
P11	60	56	円形	
P12	96×48	40	不整形楕円形	
P13	44	24	円形	
P14	52×44	52	楕円形	
P15	52×44	36	ク	

SB5 ビット計測表

SK 3 (fig.12)

調査区の南西部に位置する。平面形は西側で削平を受けて不整形を呈するが、本来は隅丸方形を呈するものと考えられる。長軸方向は $N-42^{\circ}-E$ である。規模は南北1.20m、東西1.25m、深さは3～6cmを測る。断面は僅かに舟底状を呈する。埋土は黒色土（暗褐色土混）である。土壙底部と考えられる。出土遺物は皆無である。



SK1層序
I 暗褐色土
(締まりあり、粘性なし)

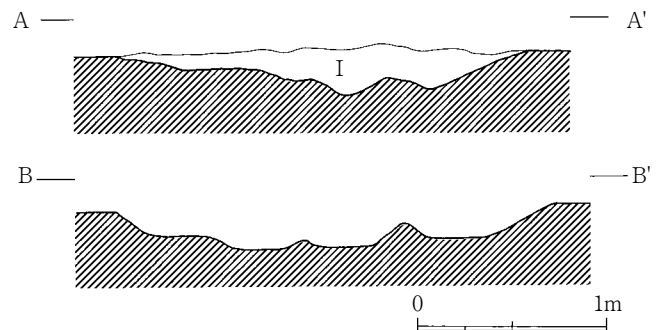


fig.11 SK1平面図・セクション図・エレベーション図

SK 4 (fig.12)

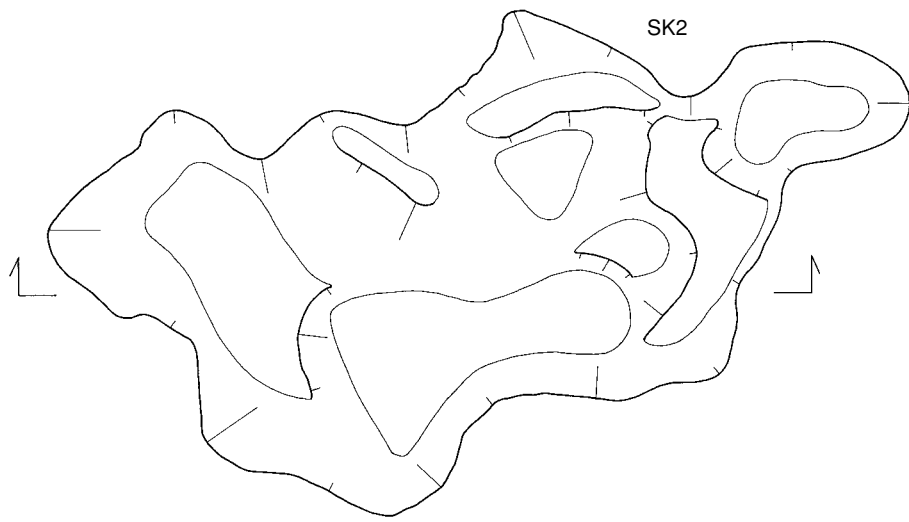
調査区の南部に位置し、東部を小溝SD21によって切られて存在する。西部はSD 8によって切られるが、底部は残存する。全形は不明である。長軸方向は $N-3^{\circ}-E$ である。規模は南北2.95m、東西0.44m、深さ7～20cmを測る。断面は逆台形を呈するものと考えられる。埋土は暗褐色土である。

出土遺物は瀬戸・美濃産の天目茶碗1点が存在するが図示できない。

SK 5 (fig.13)

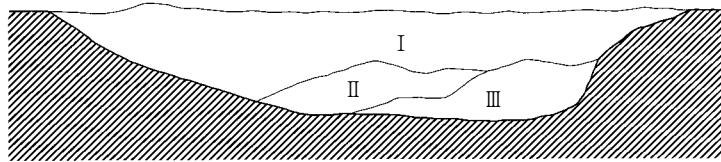
調査区の南東端に位置し、SD 6とSX 3を切って存在する。平面形は直径1.8mの円形を呈し、深さは70～77cmを測る。断面はほぼ逆台形を呈し、底部は平らである。埋土はI層：暗褐色土（SD 6埋土）、II層：灰褐色土、III層：褐色土、IV層：暗褐色土（黒色土ブロック混）、V層：褐色土、VI層：灰褐色土、VII層：褐色土（10cm大の円礫を含む）、VIII層：黒褐色土、IX層：暗褐色土（灰褐色土混）、X層：黄褐色土、XI層：黒褐色土（赤褐色を帯びる）である。X層は底部を作り付けたものではないかと考えられる。

出土遺物は皆無である。

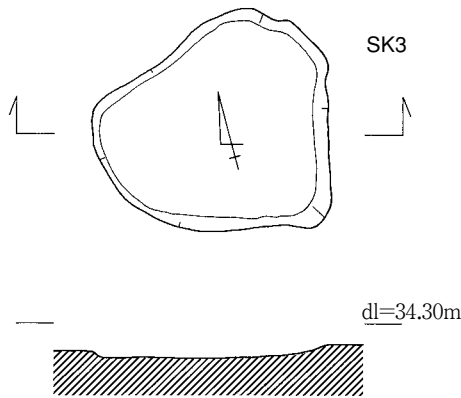


SK2

dl=34.40m

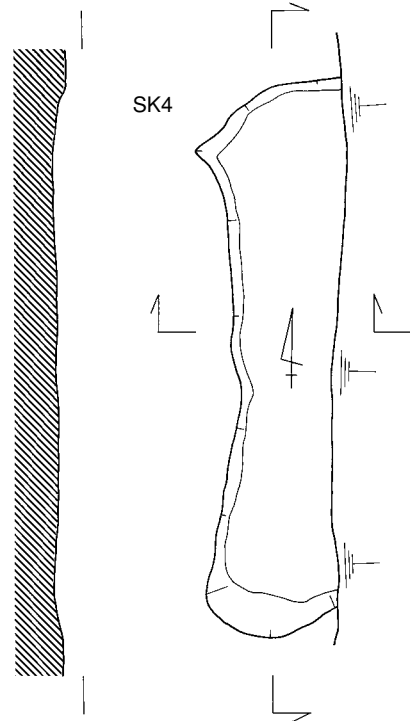


SK2層序
 I 黒褐色土(縮まりあり、粘性なし)
 5cm大の円礫を含む。
 II 茶褐色土(縮まりあり、粘性なし)
 1~5cm大の礫を含む。
 III 灰色砂礫



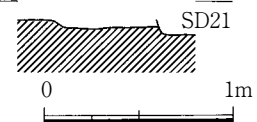
SK3

dl=34.30m



SK4

dl=34.30m



SK 6 (Fig.14)

調査区の西方に位置する。平面形は隅丸方形を呈する。長軸方向はほぼ真北である。規模は南北0.66m、東西0.66m、深さは20cmを測る。断面は逆台形を呈し、底部は平らである。埋土は暗褐色土である。

出土遺物は土師質土器の小皿と磁器片である。このうち、図示した土師質土器の小皿は土坑の南寄りに2枚重ねて2組 (fig.14-5の上に3が、6の上に4が重なる)、さらにその北隣に1枚ずつ (fig.14-1・2) が並べられた状態で計6点が出土している。

fig.12 SK2~SK4
 平面図・セクション図・
 エレベーション図

SK 7 (fig.15)

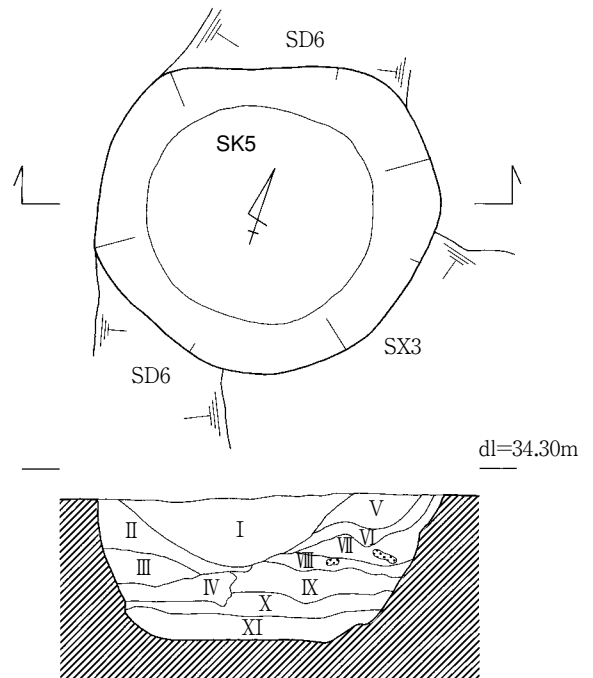
調査区の西方に位置する。平面形は不整楕円形を呈する。長軸方向は $N-86^{\circ}-W$ である。規模は東西4.34m、南北1.52m、深さ4~15cmを測る。断面は舟底形を呈し、底部は平らである。埋土は茶褐色土(暗褐色土混)である。

出土遺物は陶器の鉢2点、蓋又は灯明皿とみられる陶器1点、尾戸産陶器細片2点、内野山窯産陶器染付皿2点、磁器皿1点、陶器大甕1点があげられるが図示できるものはない。

SK 8 (fig.15)

調査区の北西部に位置する。遺構全体の平面形態は不明であるが、長方形又は隅丸長方形を呈するものと考えられる。長軸方向は $N-51^{\circ}-E$ である。

出土遺物は皆無である。



- SK5層序
 I 暗褐色土 (SD6埋土)
 II 灰褐色土
 III 褐色土
 IV 暗褐色土 黒色土のブロックを含む。
 V 褐色土
 VI 灰褐色土
 VII 褐色土 約10cm大の円礫を含む。
 VIII 黒褐色土
 IX 暗褐色土+灰褐色土 黒色土・褐色土のブロックを含む。
 X 黄褐色土 底部を作り付ける。
 XI 黒褐色土 赤褐色を帯びる。

fig.13 SK5平面図・セクション図

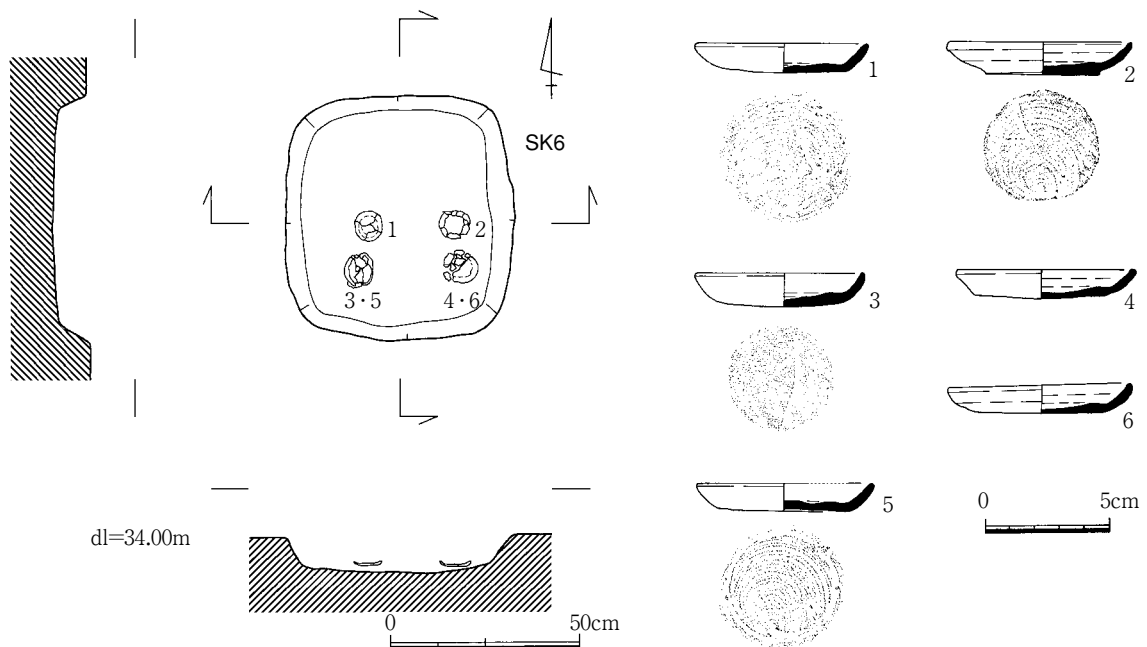


fig.14 SK6遺物出土状況図・出土遺物実測図

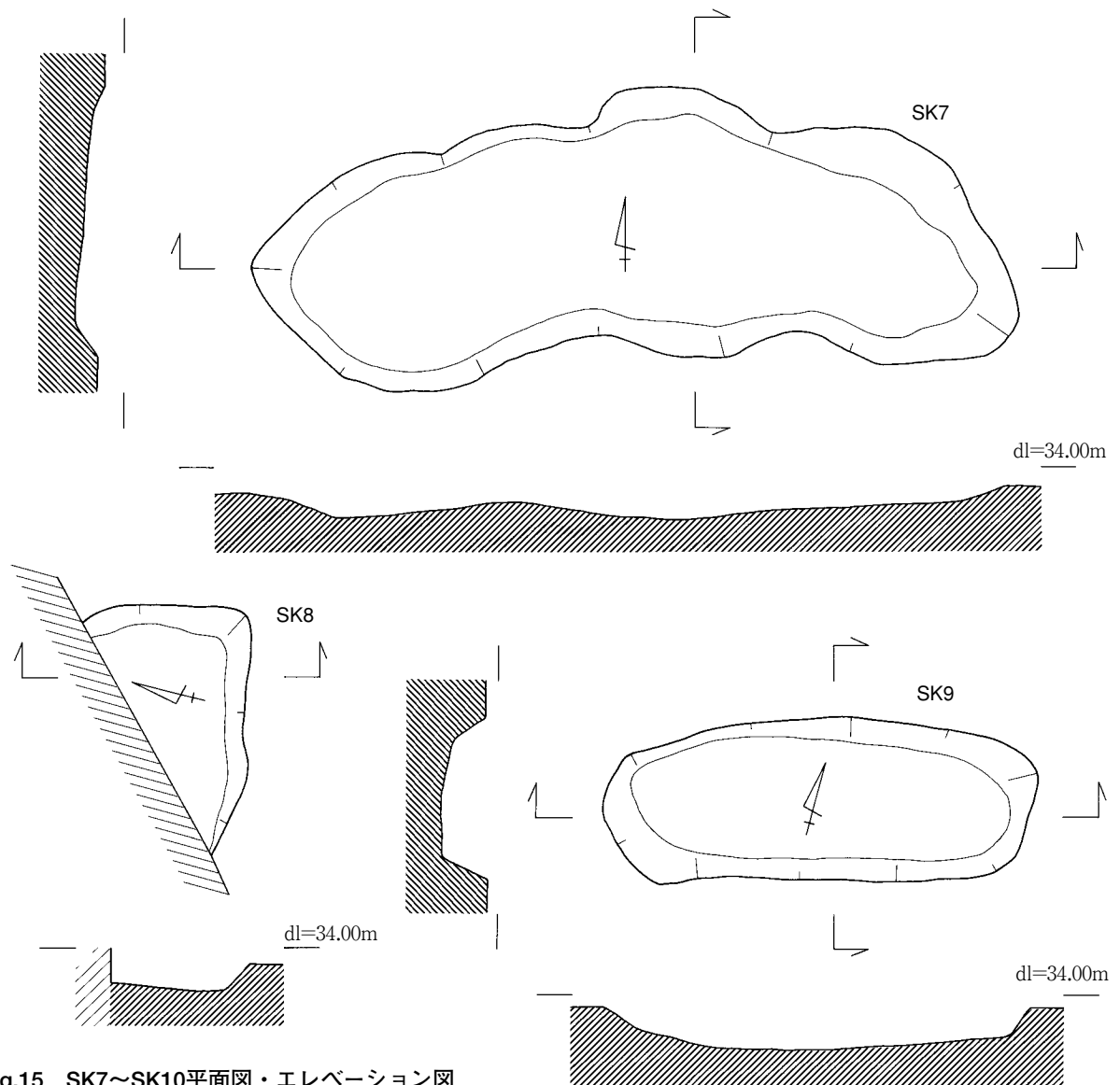
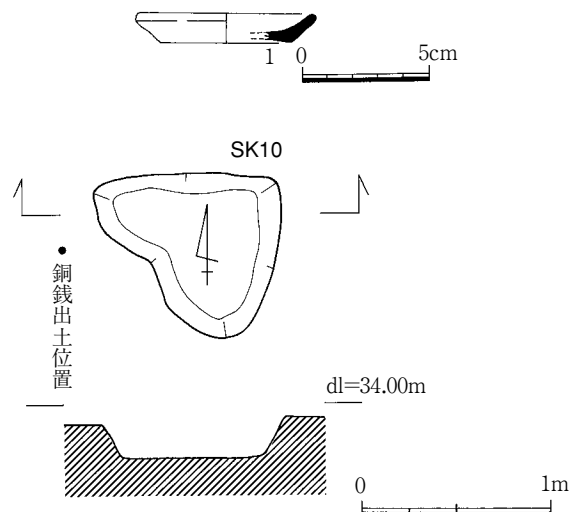


fig.15 SK7~SK10平面図・エレベーション図
・SK9出土遺物実測図

SK 9 (fig.15)

調査区西南部に位置する。平面形は隅丸長方形を呈しており、長軸方向は $N-72^{\circ}-E$ である。規模は東西2.4m、南北0.9m、深さ15~25cmを測る。断面は舟底形を呈し、底部は平らである。埋土は暗灰色土である。

出土遺物としては口唇部に煤が付着し、灯明皿として使用されたとみられる土師質土器の小皿 (fig.15-1) が図示可能であり、他に陶器3点、陶器の鉢1点、磁器1点、瓦1点が出土している。



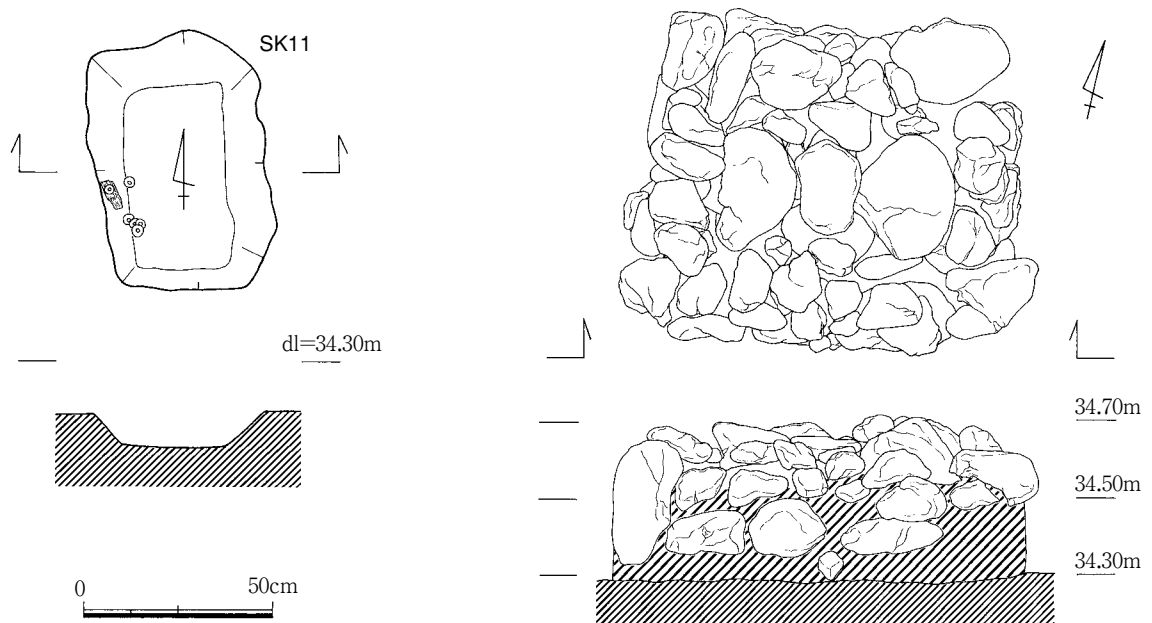


fig.16 SK11平面図・エレベーション図及び石組み平面図・立面図

SK10 (fig.15)

調査区の西端部付近に位置する。平面形は不整形を呈しており、長軸方向は $N-67^{\circ}-W$ である。規模は東西1m、南北0.8m、深さは19cmを測る。断面は逆台形を呈し、底部は平らである。埋土は暗灰色土である。

出土遺物は皆無である。

SK11 (fig.16)

調査区の北部中央寄りに位置する。平面形は長軸68cm、短軸45cmの長方形を呈し、深さは10cmを測る。主軸方向はほぼ真北である。断面は逆台形状に立ち上がり、埋土は暗灰色土である。近世墓と思われ、埋葬時に供されたものとみられる古銭が底部壁際より5点、壁より木片に付着する形で1点、計6点が出土した。銭種は古寛永3点、文銭2点、1656年鑄造の鳥越銭1点である。

また、東側には石組みが隣接する。平面形は長軸1.1m、短軸0.9m、の方形を呈する。挙大から34cm大の円礫で構築されており、高さは約45cmを測る。石組みからの出土遺物は皆無である。SK11の上部構造と思われ、移築された可能性が高い。

(3) 溝状遺構

SD 1 (fig.17・19)

調査区の北部に位置する。東端部はSD 2北端部と接し、西方でSD 3に切られて存在する。主軸方向は $N-83^{\circ}-E$ であり、東から西へ向かって流れていたものと考えられる。中央部と東端部で柱穴と重複するが、先後関係は不明である。延長29m、幅40~72cm、深さ10~22cmを測る。埋土は灰色土である。

出土遺物は、土師質土器細片3点、肥前産磁器皿1点、須恵器1点であるが、図示できたのは石

の型枠 (fig.19-1) である。

SD 2 (fig.17)

調査区の東部に位置する。北端部はSD 1 と接し、南端部は南壁に隔られて存在する。主軸方向は $N-6^{\circ}-W$ である。延長12m、幅50~68cm、深さ0~22cmを測る。埋土は暗灰色土である。

出土遺物は内野山窯産とみられる陶器と、弥生土器細片であるが図示できるものはない。

SD 3 (fig.18)

調査区の北西部に位置し、大きな弧を描いて北から西方に走る溝である。北部は拡張して延びるが、北壁に隔されており、全体の規模は不明である。ほぼ中央部でSD 1、南部ではSK 1 を切って存在する。延長14.7m、幅0.6~1.6m、深さ9~27cmを測る。埋土は暗褐色土である。

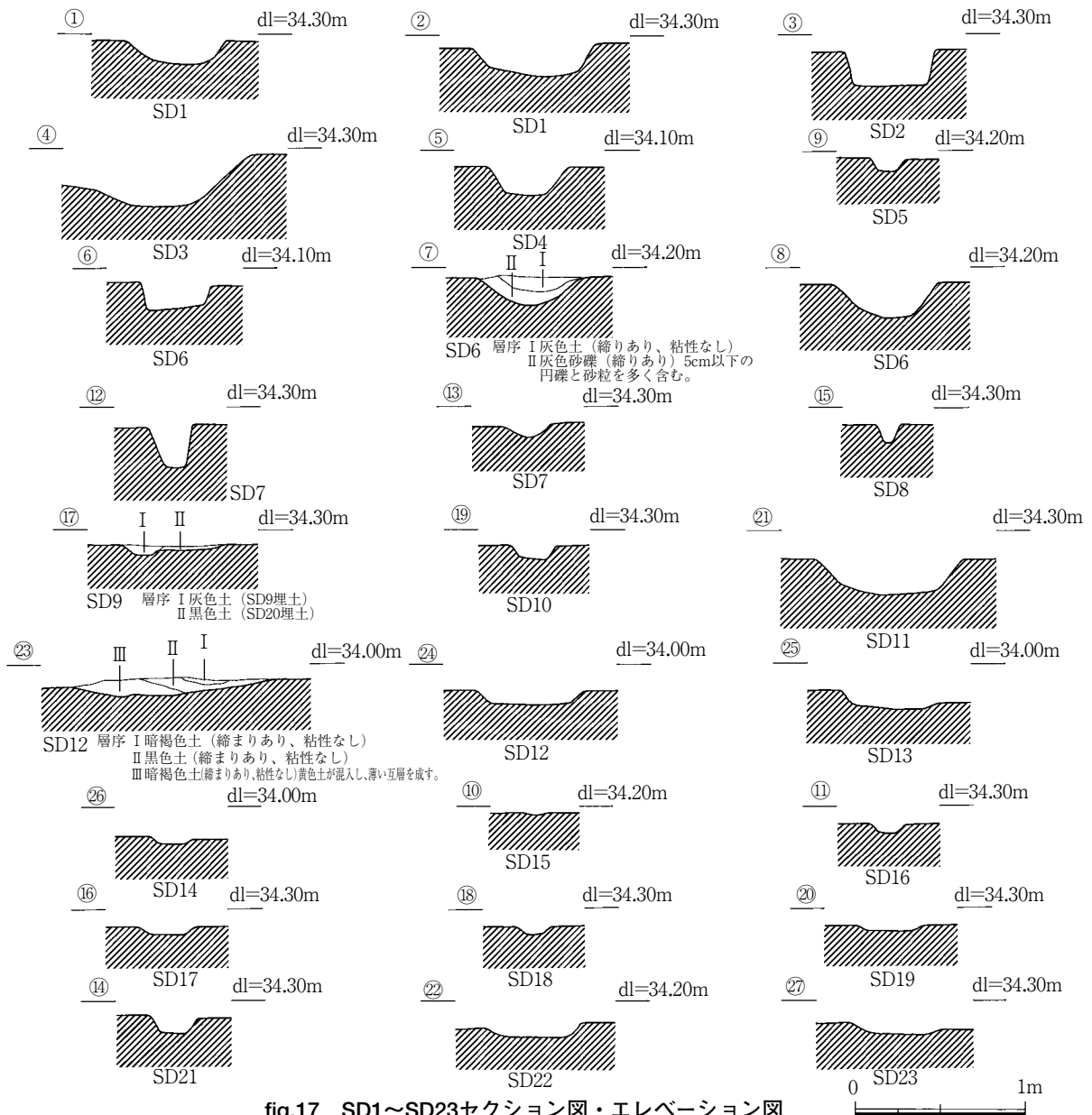


fig.17 SD1~SD23セクション図・エレベーション図

出土遺物は陶器6点、磁器3点、瓦1点、土師質土器1点であるが、図示できるものはない。

SD 4 (fig.17)

調査区の北部に位置し、北壁に隔られて存在する。主軸方向は真北であり、南から北へ向かって流れていたものと考えられる。延長8m、幅40~46cm、深さ5~23cmを測る。埋土は灰色土である。

出土遺物は磁器1点、陶器1点であるが、図示できるものはない。

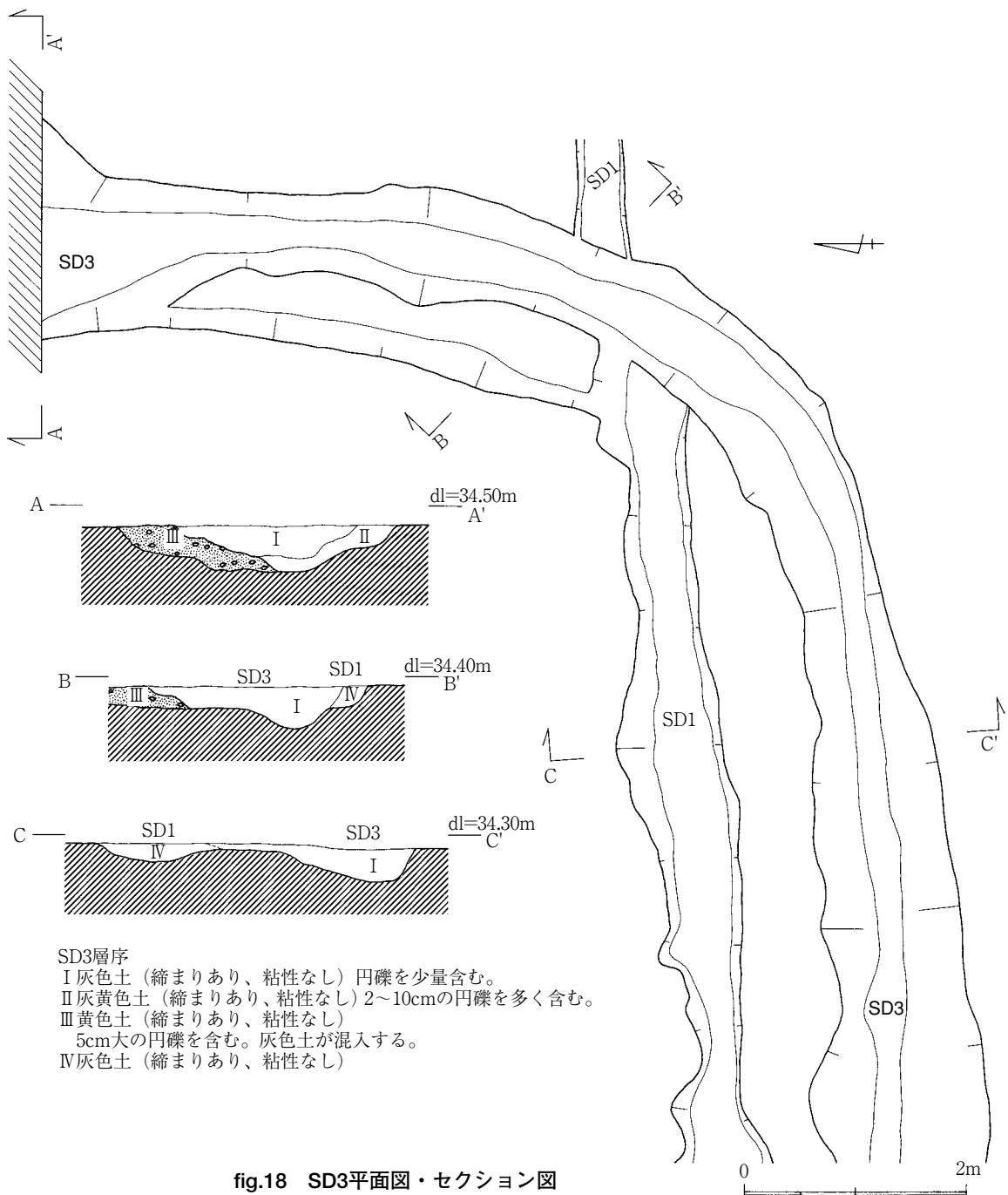


fig.18 SD3平面図・セクション図

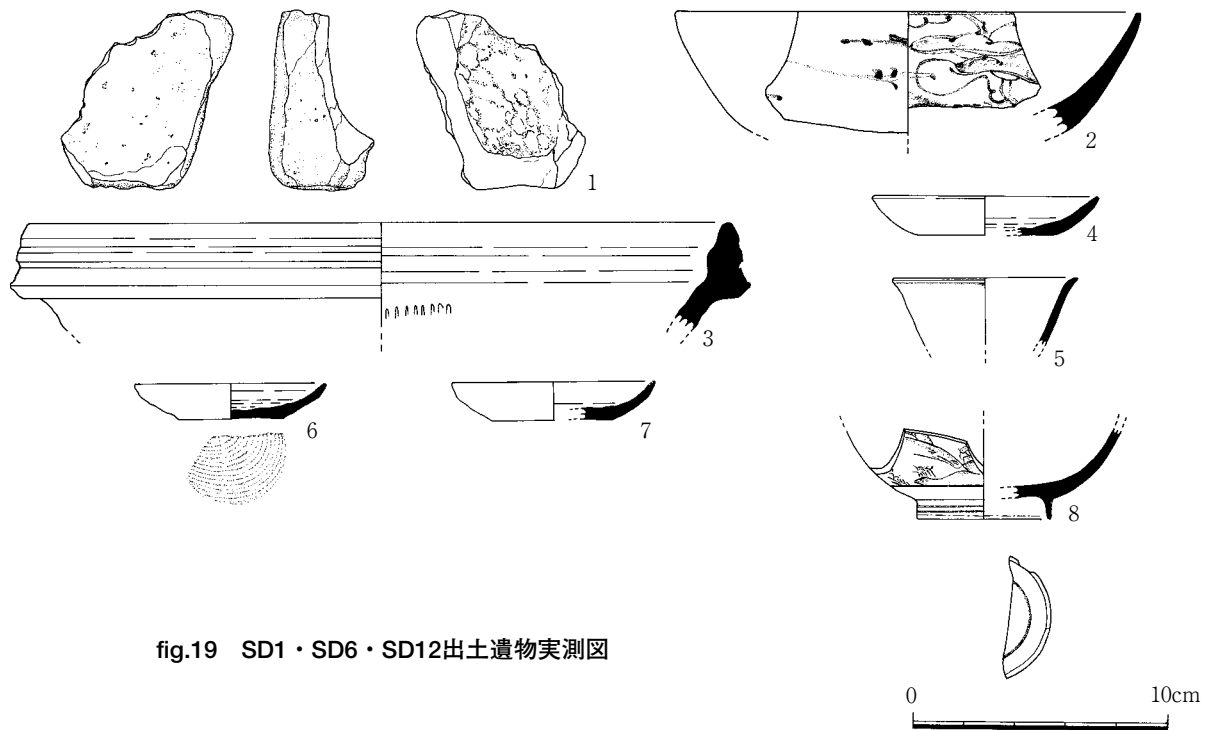


fig.19 SD1・SD6・SD12出土遺物実測図

SD 5 (fig.17)

調査区の南端部に位置し、南部は南壁に隔されて存在する。主軸方向は真北であり、北から南へ向かって流れていたものと考えられる。延長3.7m、幅14~20cm、深さ6~35cmを測る。埋土は黒色土である。

出土遺物は土師質土器4点、陶器1点、磁器1点であるが、図示できるものはない。

SD 6 (fig.17・19)

調査区の中央部西寄りに位置し、北端で調査区北壁に隔され、南端はSK 5 に切られて存在する。主軸方向はN-8°-Eである。延長24m、幅50~64cm、深さ4~28cmを測る。埋土は暗褐色土である。

出土遺物は、土師質土器15点、磁器3点、ガラス1点、陶器8点、須恵器1点、弥生土器細片4点であるが、うち図示できたものは、口唇部に一部煤が付着した灯明具として使用されたと思われる土師質土器小皿 (fig.19-4)、波佐見窯産の磁器染付皿 (fig.19-2)、端反りの陶器小碗 (fig.19-5)、備前焼と思われる陶器の播鉢 (fig.19-3) である。また、土師質土器の小皿 (fig.25-1) はSD12出土の破片と接合関係にある。

SD 7 (fig.17)

調査区の南部に位置し、南部は調査区南壁に隔されて存在する。底部は全体的に連続して凹凸が存在する。主軸方向はN-4°-Wである。延長7.4m、幅12~34cm、深さ6~20cmを測る。埋土は灰色土である。

出土遺物は皆無である。

SD 8 (fig.17)

調査区の南部に位置し、SK 4 に接して存在するが先後関係は不明である。主軸方向は $N-8^{\circ}-E$ である。延長1m、幅13cm、深さ6~13cmを測る。埋土は灰色土である。

出土遺物は土師質土器細片1点のみであり、図示できない。

SD 9 (fig.17)

調査区の南部に位置し、SD20と接して存在する。主軸方向は $N-8^{\circ}-E$ である。延長6.34m、幅14~24cm、深さ2~10cmを測る。埋土は灰色土である。

出土遺物は磁器1点、陶器1点であるが、図示できるものはない。

SD10 (fig.17)

調査区の南部に位置する。主軸方向は $N-7^{\circ}-E$ である。延長4.6m、幅22cm、深さ2~12cmを測る。埋土は灰色土である。

出土遺物は陶器1点であるが図示できない。

SD11 (fig.17)

調査区の南端に位置し、西部でSX 3 を切って存在する。主軸方向は $N-90^{\circ}-E$ であり、西から東へ向かって流れていたものと考えられる。延長13.6m、幅70~86cm、深さ0.5~38cmを測る。埋土は暗灰色土である。

出土遺物は土師質土器22点、陶器2点、須恵器1点であるが図示できるものはない。

SD12 (fig.17・19)

調査区の西部に位置し、東部で北方向へ曲折して存在する。主軸方向は $N-86^{\circ}-E$ である。延長18.7m、幅50~70cm、深さ5~18cmを測る。埋土は暗灰色土である。

出土遺物は土師質土器15点、陶器1点、磁器5点であるが、図示できたものは肥前系の磁器碗(fig.19-8)、土師質土器の小皿(fig.19-6・7)である。また、土師質土器の小皿(fig.25-1)はSD6出土の破片と接合関係にある。

SD13 (fig.17)

調査区の西部に位置する。「へ」の字状に屈折し、SD12に切られて存在する。主軸方向は $N-82^{\circ}-E$ である。延長5.8m、幅30~50cm、深さ0.3~9.2cmを測る。埋土は暗褐色土である。

出土遺物は土師質土器1点、陶器2点であるが、図示できるものはない。

SD14 (fig.17)

調査区の西部に位置し、SD13に合流する溝である。主軸方向は $N-17^{\circ}-E$ である。延長1.1m、幅26cm、深さ2~3cmを測る。埋土は暗褐色土である。

出土遺物は皆無である。

SD15 (fig.17)

調査区の南端に位置し、南部はピットに切られて存在する。主軸方向は真北である。延長4.94m、幅13cm、深さ1～6.5cmを測る。埋土は黒色土である。

出土遺物は皆無である。

SD16 (fig.17)

調査区の南端に位置し、南部は調査区南壁に隔されて存在する。主軸方向は真北である。延長7m、幅14～26cm、深さ1～8cmを測る。埋土は黒色土である。

出土遺物は皆無である。

SD17 (fig.17)

調査区の南部に位置する。主軸方向は $N-4^{\circ}-E$ である。延長3.12m、幅20～34cm、深さ2～6cmを測る。埋土は黒色土である。

出土遺物は皆無である。

SD18 (fig.17)

調査区の南部に位置する。南部ではSD23を切って存在する。主軸方向は真北であり、北から南へ向かって流れていたものと考えられる。延長6.6m、幅20cm、深さ0.1～6cmを測る。埋土は黒色土である。

出土遺物は皆無である。

SD19 (fig.17)

調査区の南部に位置する。主軸方向は真北であり、北から南へ向かって流れていたものと考えられる。延長7.46m、幅16～38cm、深さ0.1～6cmを測る。埋土は黒色土である。

出土遺物は皆無である。

SD20 (fig.17)

調査区の南部に位置し、SD 9 と接して存在する。主軸方向は $N-2^{\circ}-E$ である。延長4.34m、幅24～54cm、深さ0.7～6.7cmを測る。埋土は黒色土である。

出土遺物は皆無である。

SD21 (fig.17)

調査区の南部に位置し、SK 4 の東部を切って存在する。主軸方向は真北であり、北から南へ向かって流れていたものと考えられる。延長6.5m、幅14～22cmであるが、北端部は極端に幅が狭くなる。

深さは0.4～8cmを測る。埋土は黒色土である。

出土遺物は皆無である。

SD22 (fig.17)

調査区の南部西寄りに位置し、東部でSD11に合流して存在する。主軸方向は $N-85^{\circ}-E$ である。延長3.36m、幅40cm、深さ5～10cmを測る。

出土遺物は皆無である。

SD23 (fig.17)

調査区の南部に位置し、中央部で東方向へ曲折する。西端部はSD18によって切られて存在する。主軸方向は $N-90^{\circ}-E$ である。延長3.7m、幅26～42cm、深さ3～5cmを測る。埋土は黒色土である。

出土遺物は皆無である。

(4) 性格不明土坑

SX1 (fig.20)

調査区の南端部に位置する。北はSD11・SX3、南は調査区南壁に隔されて存在する。平面形は不整形を呈する。検出規模は長軸2.5m、短軸0.6m、深さは44～70cmを測る。埋土は灰色土である。

出土遺物は皆無である。

SX2 (fig.21)

調査区の北端に位置する。北壁に隔されており、遺構の全形は不明であるが、平面形は円形又は楕円形を呈するものと考えられる。検出規模は長軸2.40m、短軸1.4m、深さは最深部で50cm

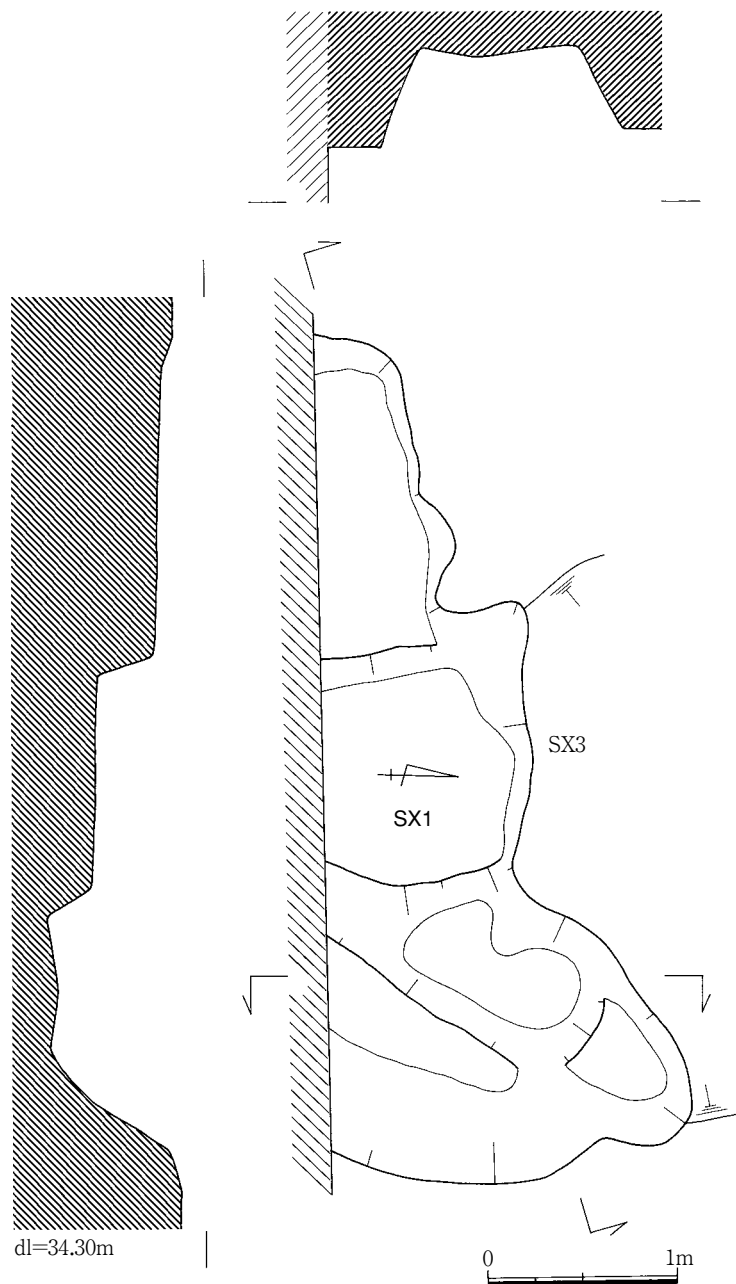


fig.20 SX1平面図・エレベーション図

を測る。底部は東半分は平らであるが西半分は緩やかに下降する。埋土はI層からVI層まで混在する。

出土遺物は皆無である。

SX 3 (fig.22・24)

調査区の南端部に位置し、南壁に隔されて存在する。先後関係は不明であるが、SK 5・SD11が埋積された後に形成されたものと考えられる。平面形は不整形を呈する。検出規模は南北4.4m、東西3.2m、深さは20~30cmを測る。埋土は5~15cm大の円礫を多量に含んだ灰色土である。

出土遺物は、土師質土器27点、陶器23点、磁器15点、砥石1点、弥生土器片1点である。図示できたものは土師質土器の小皿(fig.24-1~17)17点、うち1~10は口縁部に

煤が付着し、10・11は在地産である。18は肥前産と思われる磁器の小碗である。19は肥前産の磁器染付碗であり、17世紀後半のものと思われる。20は肥前産の磁器染付碗である。21は肥前産の磁器皿であり、18世紀のものと思われる。22~24は陶器の碗である。22は内野山産の可能性があり、17世紀後半から18世紀前半。23は肥前産である。25は尾戸産と思われる香炉又は火入れである。26は尾戸産と思われる陶器鉢であり、18世紀のものと思われる。27は内野山窯と思われる陶器の皿である。

SX 4 (fig.23)

調査区の西南端に位置する。平面形は不整形を呈する。検出規模は東西2.38m、南北1.68m、深さは14~18cmを測る。埋土は暗褐色土である。

出土遺物は皆無である。

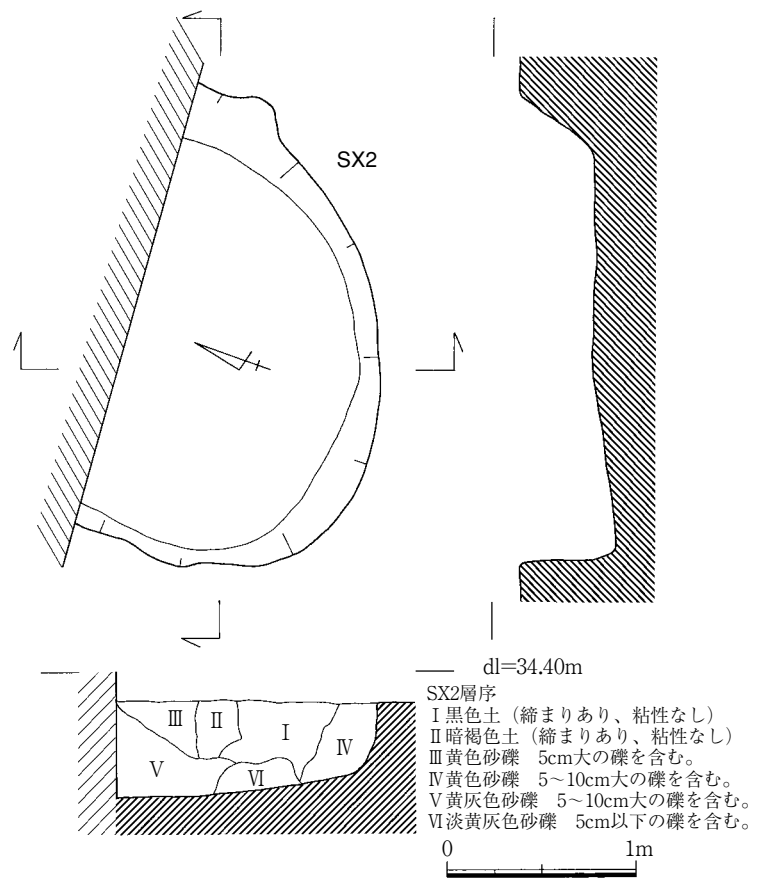


fig.21 SX2平面図・セクション図

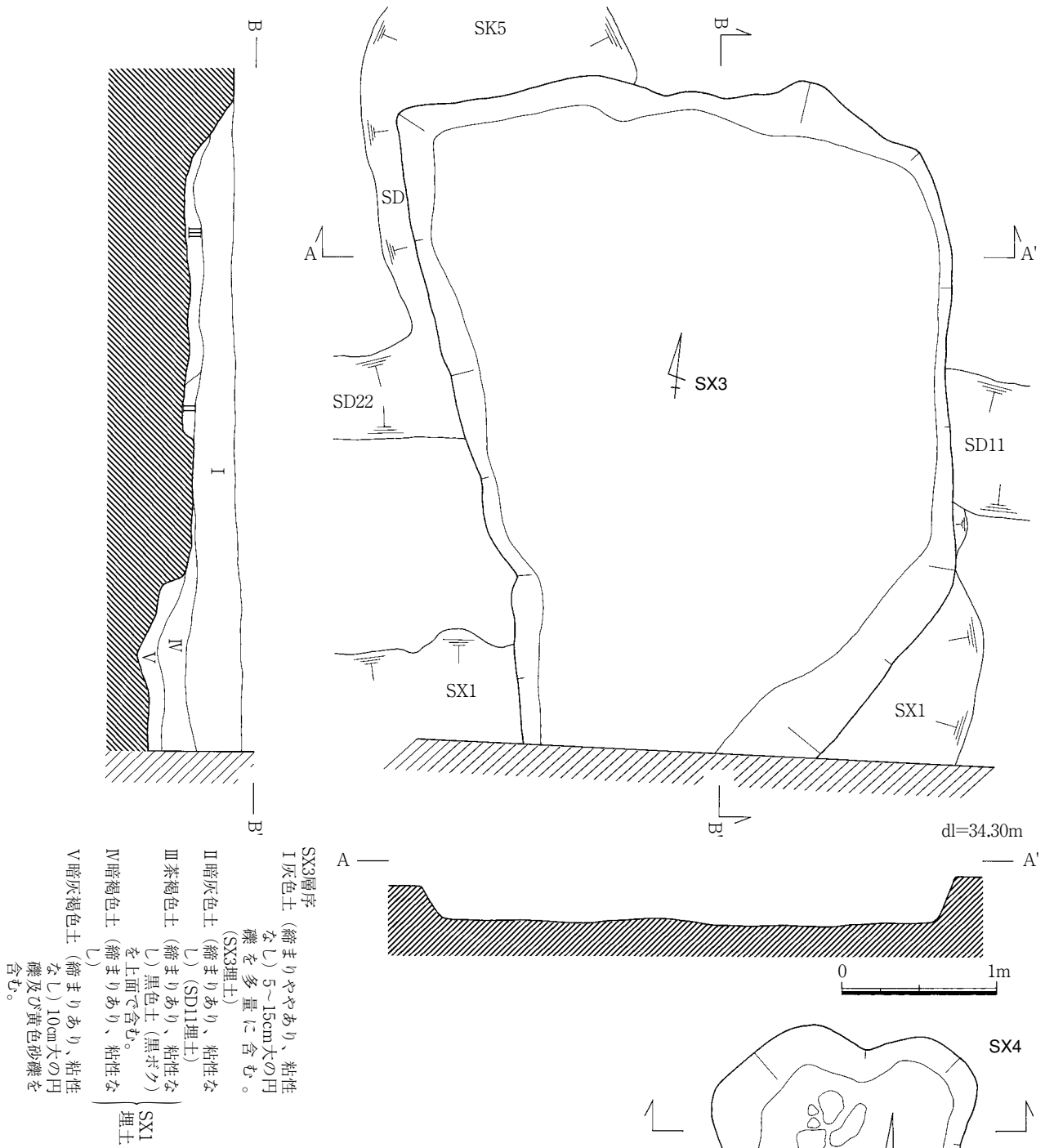


fig.22 SX3平面図・セクション図・エレベーション図

(5) 遺構間接合の遺物 (fig.25)

出土遺構が違いながら接合可能であった遺物は、土師質土器の小皿 (fig.25-1) である。SD6とSD12からの出土であり、ほぼ同時期に埋蔵された可能性を示す遺物である。

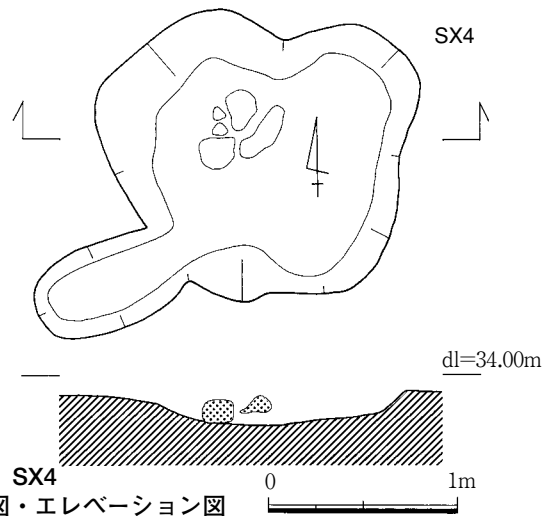


fig.23 SX4平面図・エレベーション図

(6) 包含層出土の遺物 (fig.26・27)

包含層出土の遺物の種別内訳は、磁器140点、陶器150点、土師質土器224点、弥生式土器21点、須恵器9点、瓦20点、石1点であり、図示し得たものは1~39 (fig.26)、1~11 (fig.27) の計50点である。

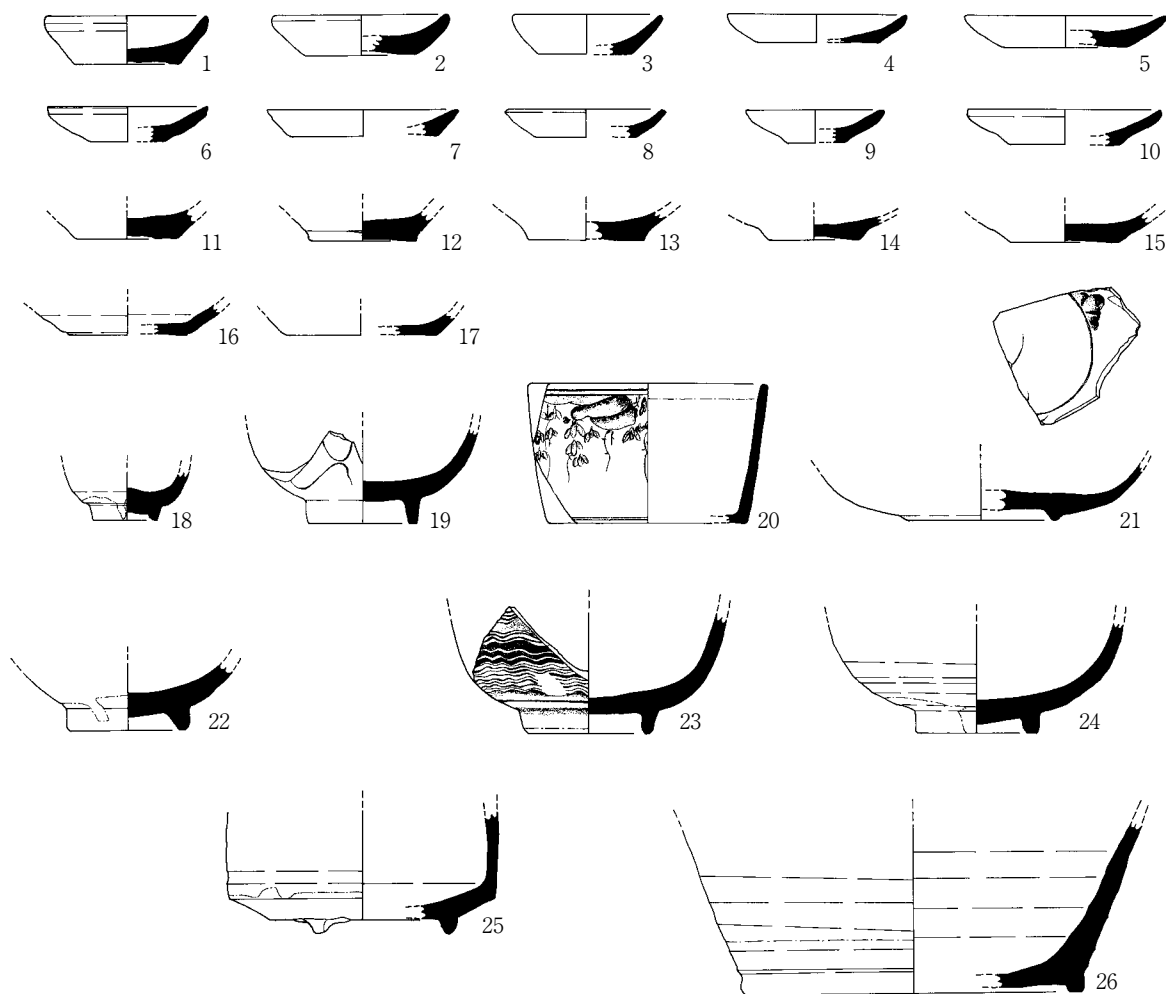


fig.24 SX3出土遺物実測図

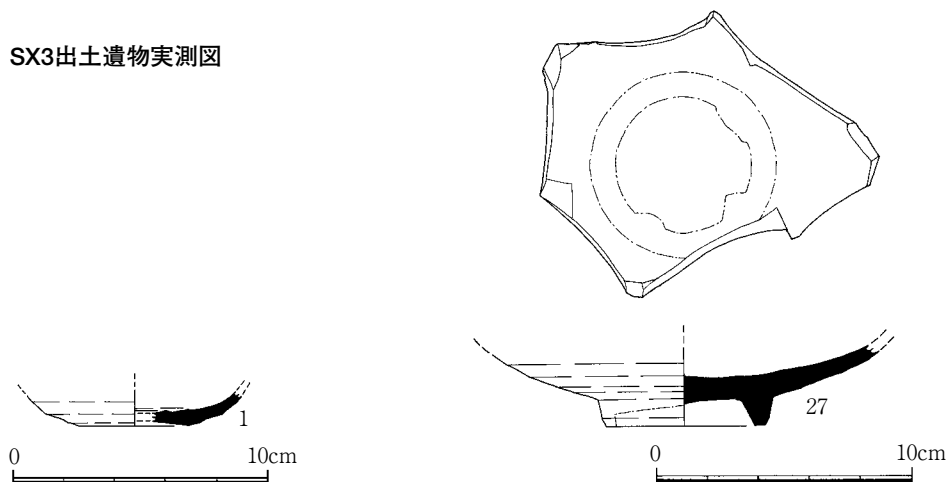


fig.25 遺構間接合の遺物実測図

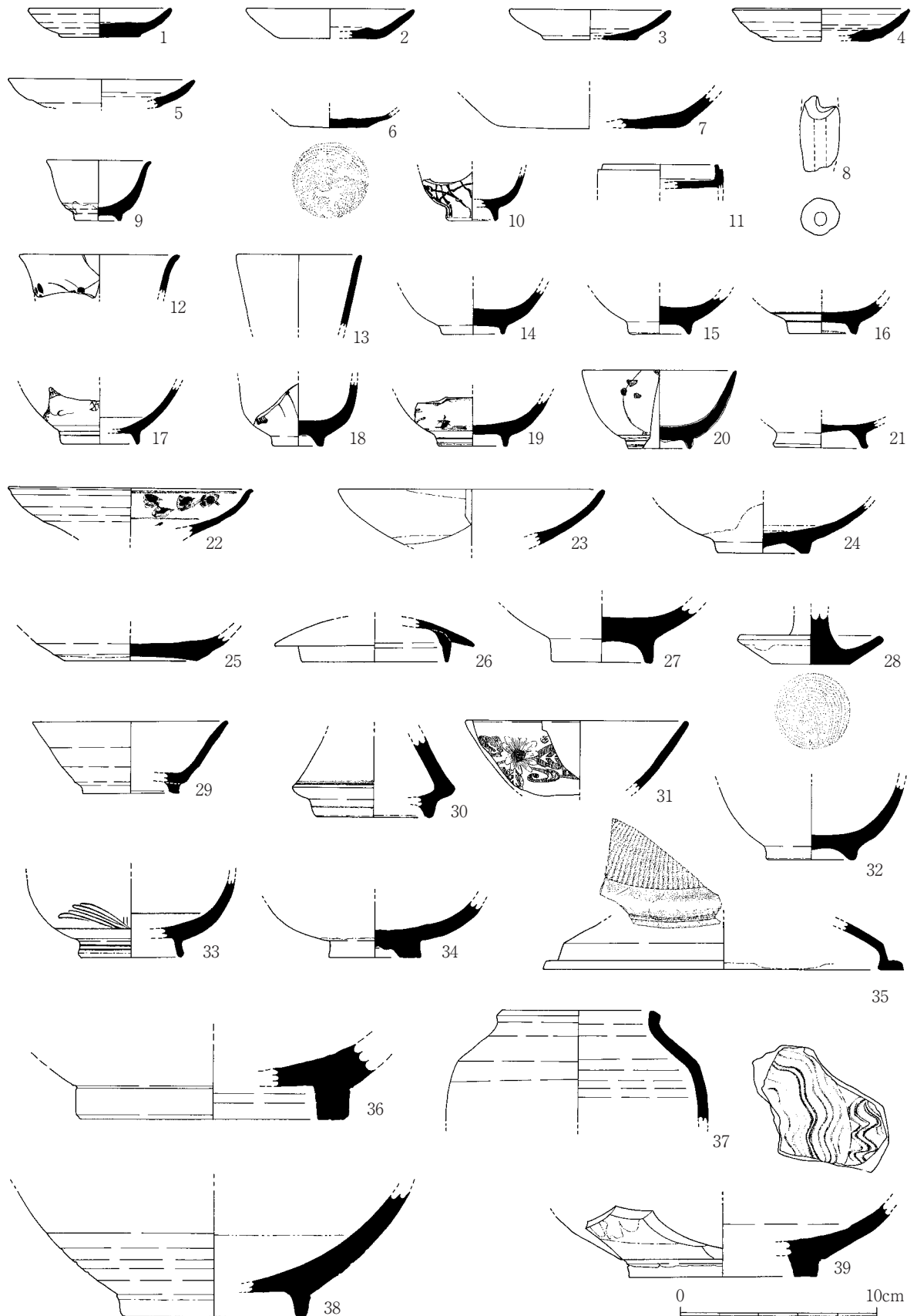


fig.26 I区包含層出土遺物実測図（その1）

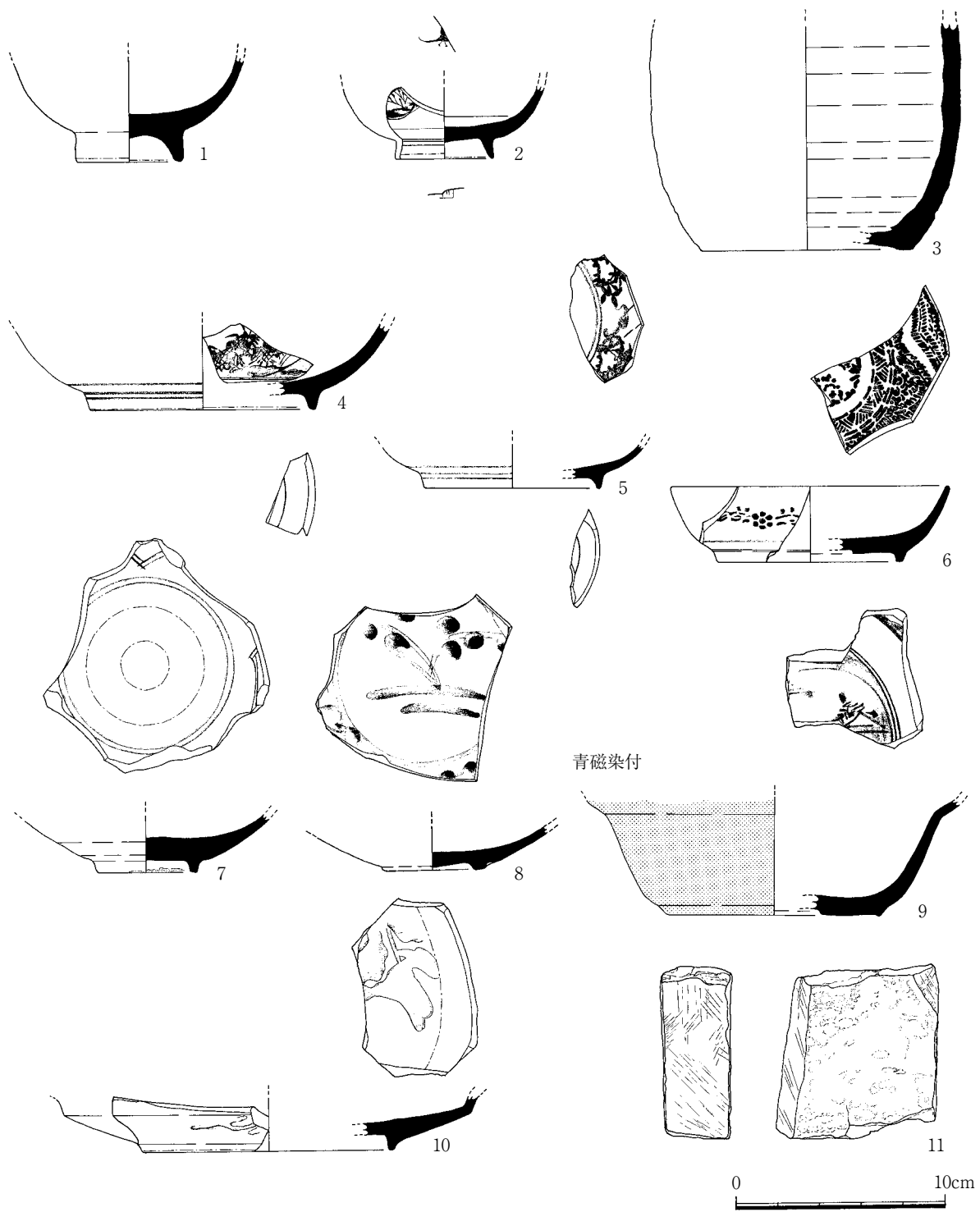


fig.27 I区包含層出土遺物実測図（その2）

調査 I 区出土遺物観察表

fig. no.	遺物番号	pl. no.	出土地点	種類	器種	器形	部位	法量 (cm)			形態的特徴	成形・調整 内面/外面	軸莖・縁付 内面/外面	胎土	その他の特徴	産地	年代	備考
								口径	器高	胴径								
3	1	43 A	TR3-1	須恵器	坏		底部	口径	2.0	胴径	6.2	底径				10世紀初		
3	2	43 A	TR9	陶器	擂鉢		底部		6.1		10.4							
8	1	43 A	SB3 P10	縄文土器	粗製深鉢		口縁	口径	18.8 (3.1)									
8	2	43 A	SB3 P6	磁器	小碗		口縁	口径	6.3 (2.3)							肥前?	17世紀	
9	1	43 A	SB4 P2	土師質土器	小皿			口径	8.8	器高	5.4							
14	1	43 A	SK6	土師質土器	小皿			口径	6.6	器高	5.1							
14	2	43 A	SK6	土師質土器	小皿			口径	7.3	器高	4.6							
14	3	43 A	SK6	土師質土器	小皿			口径	6.4	器高	4.5							

fig. no.	遺物番号	pL no.	出土地点	種類	器種	器形	部位	量 (cm)			形態的特徴	成形・調整 内面/外面	釉薬・絵付 内面/外面	胎土	その他の特徴	産地	年代	備考
								口径	器高	胴径								
14	4	43 A	SK6	土師質 土器	小皿			7.1	1.2		5.4			橙色。赤褐色砂粒。				成形時ロクロ回転は右。
14	5	43 B	SK6	土師質 土器	小皿			6.8	1.1		5.1			橙色。				成形時ロクロ回転は右。
14	6	43 B	SK6	土師質 土器	小皿			7.3	1.1		5.1			橙色。赤褐色粒子を含む。				成形時ロクロは右回転。
15	1	43 B	SK9	土師質 土器	小皿			7.1	1.2		5.0			橙白色。橙色粒。剥離面は荒い。気孔(円)が存在する。				口唇部に黒色斑(線)が付着する。灯明皿として使用。
19	1	57 C	SD1	石	型枠			全長 7.1	全幅 4.1	重量 75.8g								内面に黄色又は赤褐色に変化した部分が存在する。外面にタール状の漆が付着する。
19	2	43 B	SD6	磁器	皿		口縁	8.2	(4.8)					灰白色。粒子のガラス化は良好。やや透明感を持つ。剥離面はやや荒い。気孔(円)が存在する。		波佐見系	18世紀 ~19世紀 初頭	
19	3	43 B	SD6	陶器	掃鉢		口縁	27.6	(4.3)					灰色~黄灰色。黒色斑、赤褐色粒子、石英粒が認められる。(特定の粒子単位が捉えられる。)透明感はない。剥離面は荒い。気孔(円・裂)が多く存在し、裂孔の規模は大きい。(内)撫で。				縁帯の下部に重ね焼に伴う熔着部分が存在する。内面と外面(体部)は黄褐色に発色し、外面(口縁)は赤褐色に発色する。
19	4	43 B	SD6	土師質 土器	小皿			8.8	1.6		5.4			橙白色。赤褐色粒。				口唇部に一部漆が付着しており、灯明皿としての使用とみられる。

fig. no.	遺物番号	pl. no.	出土地点	種類	器種	器形	部位	量 (cm)			形態的特徴	成形・調整 内面/外面	釉薬・絵付 内面/外面	胎土	その他の特徴	産地	年代	備考
								口径	器高	底径								
19	5	43 B	SD6	陶器	小碗	端反り形	口径	7.2	(2.7)		体部は直線的に斜上方に立ち上がる。口縁部は短く外反する。	(内) 透明釉。口縁下に緑色に発色する一重圏線。	黄灰～灰色。粒子単位を留める。透明感を持つ。剥離面は荒い。気孔(円)が存在する。					
19	6	43 B	SD12	土師質土器	小皿			7.5	1.4	4.1	体部はやや内湾して外上方に立ち上がる。	(内) ロクロ目を残し、後撫で。 (底) 回転糸切り痕。	橙白色。	成形時ロクロ回転。				
19	7	43 B	SD12	土師質土器	小皿			8.0	1.5	4.8	体部はやや内湾して外上方に立ち上がる。	(内) ロクロ目を残し、撫でを施す。 (外) 体部は無で。 (底) 回転糸切り痕。	橙白色。石英粒。	成形時ロクロ回転。				
19	8	43 B	SD12	磁器	碗		底部		3.6	高台高 1.0	高台は幅細く、直立する。	染付。体部は桜間山水紋。高台基部は二重圏線。高台外面は二重圏線。高台内に一重圏線。	白色。一部粒子単位を留めガラス化する。透明感をやや持つ。剥離面はやや荒い。気孔(円・裂)が多く存在し、裂孔の規模はやや大きい。	墨付に褐色粒が付着する。	肥前系			
24	1	43 C	SX3	土師質土器	小皿			6.3	1.9	4.1	体部は直線的に外上方に立ち上がる。口縁部はやや肥厚し、やや内湾する。	(内・外) 撫で。	淡橙色。赤色チャート粒。石英粒。剥離面は荒く磨滅する。気孔(円・裂)が存在し、裂孔の規模は大きいものがある。	成形時のロクロ回転は右。口縁部に煤が付着する。				
24	2	43 C	SX3	土師質土器	小皿				(1.1)	4.3	体部はやや内湾して外上方に立ち上がる。口縁部は太く丸味を持って修める。	(内・外) 撫で。	淡橙～淡黄色。石英粒(小粒)を含む。剥離面は荒い。気孔(円・裂)が存在する。	口縁部に煤が付着する。				
24	3	43 C	SX3	土師質土器	小皿			5.1	1.6	2.8	体部はやや内湾して外上方に立ち上がる。	(内) 撫で。 (外) ロクロ目を一部に残すが、無で。	淡橙灰色。剥離面は荒い。気孔(円・裂)が存在する。裂孔には規模の大きなものがある。	口縁の一部には煤が付着。				
24	4	43 C	SX3	土師質土器	小皿			7.1	1.1	4.8	体部はやや内湾して外上方に立ち上がる。	(内) 撫で。 (外) 底部は無で。	淡橙色。石英粒。剥離面は荒い。気孔(円)が存在する。	口縁の一部には煤が付着する。				
24	5	43 C	SX3	土師質土器	小皿			8.0	1.3	5.0	体部は直線的に外上方に立ち上がる。	(内) 撫で、(回転) (外) 体部では弱いロクロ目を残すが無で。底部では無で。(糸切り痕跡)	淡橙色。石英粒。赤色チャート粒を含む。剥離面は荒い。気孔(円・裂)が存在する。裂孔は少ないが、規模は大きい。	口縁の一部に煤が付着する。				
24	6	43 C	SX3	土師質土器	小皿			6.3	1.4	3.0	体部は直線的に外上方に立ち上がる。	(内・外) 撫で。	淡橙灰色。石英粒を含む。剥離面は荒い。気孔(円・裂)が存在する。裂孔は少なく、規模は小さい。	口縁の一部に煤が付着する。				

fig. no.	遺物番号	pl. no.	出土地点	種類	器種	器形	部位	量 (cm)			形態的特徴	成形・調整 内面/外面	釉薬・絵付 内面/外面	胎土	その他の特徴	産地	年代	備考
								口径	器高	底径								
24	7	43 C	SX3	土師質 土器	小皿			7.5	1.1	5.7	体部は短く直線的に外上方に立ち上がる。	(内) 撫で。		淡橙色。石英小粒を含む。剥離面は荒い。気孔(円)が存在する。				
24	8	43 C	SX3	土師質 土器	小皿			6.4	1.1	4.0	体部はやや内湾して外上方に立ち上がる。口縁部は体部に比べ細く、端部はやや外傾する面を成す。	(内) 撫で。(回転) 口縁部撫で。(回転)		橙色～淡橙色。石英粒、赤色チャート粒を含む。剥離面は荒い。気孔(円)が存在する。	口縁の一部に煤が付着する。			
24	9	43 C	SX3	土師質 土器	小皿			5.4	1.3	2.4	体部は直線的に外上方に立ち上がる。底部はやや突出する。	(内・外) 撫で。		淡橙色。石英粒、赤色チャート粒を含む。剥離面は荒い。気孔(円・裂)が存在する。裂孔は稀で、規模は大きい。	口縁部の数カ所に煤の付着がみられる。			
24	10	43 C	SX3	土師質 土器	小皿			7.6	1.4	4.4	体部は直線的に外上方に立ち上がる。口縁部は大きく、丸味を持つ。つが、内面は直線的。	(内) 撫で。(回転) による。(外) 体部は撫で? 底部は撫で。		淡橙～黄色。石英粒を含む。剥離面は荒い。気孔(円)が存在する。	口縁の一部に煤が付着する。			
24	11	43 C	SX3	土師質 土器	小皿		底部		(1.2)	3.9	底部はやや外反し、中央部分が凹む。	(内) 弱いロクロ目、又は撫で。(底) 回転糸切り痕。		淡橙色。石英粒。剥離面は荒く。気孔(円)が存在する。				
24	12	43 C	SX3	土師質 土器	小皿		底部		(1.2)	4.3	(内) 弱いロクロ目。(外) 回転糸切り後撫で。		淡橙色。石英粒、赤色チャートの小粒を含む。剥離面は荒い。気孔(円・裂)が存在する。裂孔は少なく、規模は大きいものがある。	底部に切り離し段階に出来たと考えられる切裂が残る。成形時のロクロの回転は右。				
24	13	43 C	SX3	土師質 土器	小皿		底部		(1.1)	4.6	底部はやや高台状に高く、厚さを持つ。	(内) 撫で。(外) 底部は糸切り痕後撫で。		淡橙色。石英粒、赤色粒を含む。剥離面は荒い。気孔(円・裂)が存在する。裂孔の規模は大きいものがある。				
24	14	43 C	SX3	土師質 土器	小皿		底部		0.9	3.1	底部は円盤状高台風にやや突出する。	(内) 弱いロクロ目を残す。(外) 底部は回転糸切り痕後撫で。		淡橙色。石英粒、赤色粒を含む。剥離面は荒い。気孔(円)が見られる。	成形時のロクロ回転は右。			
24	15	43 C	SX3	土師質 土器	小皿		底部		(1.2)	4.2	体部は直線的に外上方に立ち上がる。	(内・外) 撫で。		淡橙灰色。剥離面は荒い。気孔(円・裂)が存在する。裂孔には規模の大きなものがある。	体部底位の外面に平行線状の輪目がみられる。			
24	16	43 D	SX3	土師質 土器	小皿		底部		(1.2)	4.6	体部は直線的に外上方に立ち上がる。と考えられる。	(内) ロクロ目。(外) 体部はロクロ目。(底) 回転糸切り痕。		淡橙色。石英粒、赤色粒を含む。剥離面は荒い。気孔(円・裂)が存在する。裂孔は規模の大きなものが多い。	成形時のロクロは右回転。			

fig. no.	遺物番号	pl. no.	出土地点	種類	器種	器形	部位	法		量 (cm)		形態的特徴	成形・調整 内面/外面	釉薬・絵付 内面/外面	胎土	その他の特徴	産地	年代	備考
								口径	器高	胴径	底径								
24	17	43 D	SX3	土師質土器	小皿		底部		(0.9)		5.9	(内) ロク口無で。(外) 底部は回転糸切り痕。		淡橙色。剥離面は荒い。気孔(円・裂)が存在し、裂孔の規模は大きなものがある。					
24	18	43 D	SX3	磁器	小碗		底部	(1.7)				(内) 透明釉発色はやや青味を持つ。(外) 体部は透明釉。発色はやや青味を持つ。(底) 露胎。(発色はやや青味を持つ。)		白色。結晶化は良い。透明感はやや荒く、前のものに比べて。剥離面はやや荒く、気孔(円・裂)が存在する。裂孔は稀で、規模はやや大きいものがある。	肥前?				
24	19	43 D	SX3	磁器	碗	丸形	底部	(3.8)		高台高 1.0	4.3	(内) 底部に右回転のロク口目を残す。(外) 体部底位に削り又は無で跡。	染付。 (外) 一重網目紋。	灰白～白色。結晶化は良好。透明感を持つ。剥離面はやや荒く、裂孔が存在する。裂孔の出現は少なく、規模は小さい。	肥前	17世紀後半?			
24	20	43 D	SX3	磁器	碗	筒形		5.6	9.2		7.8	(内) 無で又は削り痕を残す。(外) 体部底位に削り又は無で跡。	染付。 (内) 蔓草? ロ緑部に二重圈線。底部に二重圈線。	白色。結晶化は良好。透明感を持つ。剥離面は滑らか～やや荒く、裂孔(円・裂)が存在し、裂孔の出現は少なく、規模は小さい。	肥前				
24	21	43 D	SX3	磁器	皿		底部	(2.4)		高台高 0.5	5.9	(外) やや細かい単位の襷無で又は削り。(重付け) 釉剥ぎを施し、内側には砂粒が熔着する。	染付。 (内) 草花紋。(唐草紋)	灰白色。結晶化は良好。透明感を持つ。剥離面はやや荒く～(内) 裂孔(円・裂)が多く、規模は大きいものがある。	波佐見? 18世紀?				
24	22	43 D	SX3	陶器	碗(丸碗)	丸形	底部	(2.7)		高台高 0.7	4.5		(内) 灰釉(白濁)一部に鉄絵か、赤褐色に発色している所が存在。(外) 灰釉、緑白色に濁っている。底位には露胎する。※いすれも焼成不良と考えられない。ガラス化はしていない。	白～乳白色。細かい赤色粒子を持つ(軟質)。剥離面は荒い。気孔(円・裂)が存在する。裂孔には規模のやや大きなものがある。	内野山?	17世紀後半～18世紀前半			

fig. no.	遺物番号	pL no.	出土地点	種類	器種	器形	部位	量 (cm)			形態的特徴	成形・調整 内面/外面	釉薬・絵付 内面/外面	胎土	その他の特徴	産地	年代	備考	
								口径	器高	底径									
24	23	43 D	SX3	陶器	碗		底部	口径	4.8	器高	4.8	底径	4.8	体部は内湾して外上方に立ち上がり、やや直線的に斜上方向に向かう。高台は直立しないしは内傾し、断面は逆台形を呈する。	(内) 底面は木理の細かな刷毛目紋(白色土)。(外) 白色化粧土を刷毛による波状紋。※内、外面ともに透明釉。	暗灰色。透明感をやや持つ。ガラス化は良好である。剥離面は荒い。気孔(円・裂)が存在、規模は小さい。	肥前	18世紀	
24	24	43 D	SX3	陶器	碗 (丸碗)		底部	口径	(4.4)	器高	高台高 0.6	底径	4.8	高台は直立し、やや「ハ」の字状に開く。断面は逆台形を呈す。	(内) 灰釉(発色は緑灰色)。(外) 灰釉(発色は緑灰色)。・体部底位以下は露胎する。	灰色~暗灰色。透明感を持つ。粒子単位が認められる。剥離面は荒い。気孔(円・裂)が存在する。裂孔の規模は大きいものがある。			
24	25	44 A	SX3	陶器	香炉、 or 火入れ	筒形	底部	口径	(4.8)	器高	足高 0.5	底径	7.3	腰部で屈折し、直線的に上方へ向かう。3足と考えられる足が付き指頭で押圧される。	(内) 露胎。(外) 灰釉(黄褐色を呈す)。底面は露胎する。	黄白色。石英粒。粒子単位が一定確認できず。剥離面は荒い。気孔(円・裂)が存在する。裂孔は多く、規模は大きいものがある。	尾戸?		
24	26	44 A	SX3	陶器	鉢		底部	口径	(6.7)	器高	高台高 0.3	底径		体部は直線的に外斜上方に立ち上がる。高台は腰輪高台を成し、断面は逆台形を呈す。(外面はやや丸味を持つ膨らむ)	(内) 露胎。(外) 体部は主に灰釉(発色は緑黄色)以下は露胎する。	黄白色。赤色チャート粒。結晶化は進むが透明感はない。剥離面は荒い。気孔(円・裂)が存在する。裂孔は多く、規模の大きなものがある。	尾戸?	18世紀?	
24	27	44 A	SX3	陶器	皿		底部	口径	(3.2)	器高	高台高 1.0	底径	6.3	高台は直立的に外上方に立ち上がる。断面は逆台形を呈す。	(内) 緑釉。(主に緑褐色に発色し、錆色も見られる。)(外) 灰釉。(発色は淡く、透明感のある緑灰色で細い貫入が見られる。)	灰白色。黒色粒、淡褐色粒。結晶化は良好。粒子単位を部分的に捉えることが可能。透明感をやや持つ。剥離面は荒い。気孔(円・裂)が存在する。裂孔の規模はやや大きいものがある。	内野山	17世紀後半~18世紀前半	
25	1	44 B	SD6・SD12	土師質 土器	小皿		底部	口径	(1.4)	器高		底径	4.3	体部は内湾して外上方に立ち上がる。	(内) 緑釉。(外) 剥離面は赤色チャート粒。剥離面はやや荒い。気孔(円・裂)が存在する。裂孔はやや多く、規模は大きいものがある。	淡黄色。石英粒、赤色チャート粒。剥離面は赤色チャート粒。剥離面はやや荒い。気孔(円・裂)が存在する。裂孔はやや多く、規模は大きいものがある。			
26	1	44 B	包含層	土師質 土器	小皿			口径	7.3	器高	1.5	底径	4.0	体部はやや内湾して外上方に立ち上がる。口唇部は丸味を持っておさめる。底部は凹盤状高台でやや突出する。	(内) 底面ロクロ目。(外) ロクロ目。(底) 回転糸切り痕。	橙黄色。赤色粒、石英粒。			

fig. no.	遺物番号	pl. no.	出土地点	種類	器種	器形	部位	量 (cm)			形態的特徴	成形・調整 内面/外面	釉薬・絵付 内面/外面	胎土	その他の特徴	産地	年代	備考
								口径	器高	胴径								
26	2	44 B	包含層	土師質 土器	小皿			口径 8.6	器高 1.5	胴径 4.9	底径 4.9		橙色。赤褐色粒。					
26	3	44 B	包含層	土師質 土器	小皿			口径 8.3	器高 1.6	胴径 4.7	底径 4.7		橙色。 (内) 底部はロクロ目後撫で、体部は撫で、(外) 底部は撫で、一部に糸切り痕を残す。	口唇及び体部に煤付着が認められる。				
26	4	44 B	包含層	土師質 土器	小皿			口径 9.0	器高 1.7	胴径 4.8	底径 4.8		橙色。石英粒。	成形時ロクロは右回転。				
26	5	44 B	包含層	土師質 土器	小皿		口縁	口径 9.6	器高 (1.5)	胴径	底径		橙～橙白色。石英粒。	口唇部に煤が付着する。				
26	6	44 B	包含層	土師質 土器	小皿		底部	口径 4.0	器高 0.8	胴径 4.0	底径 4.0		淡橙色。石英粒。剥離面は荒い。気孔(円・裂)が存在する。	成形時のロクロ回転は右。				
26	7	44 B	包含層	須恵器	碗			口径 (1.8)	器高 (1.8)	胴径	底径		暗灰色。赤色粒。					
26	8	44 B	包含層	土師質 土器	土鉢			全長 (3.9)	全幅 2.0	口径 0.6	重量 9.7 g		橙色。					
26	9	44 C	包含層	磁器	小碗			全長 5.3	口径 3.1	高台高 0.2	2.4		白色。透明感を持つ。(結晶化良く進む) 剥離面はやや荒い。気孔(円・裂)が存在する。裂孔は稀で、規模はやや大きい。	灰釉中に剥落粒子が混じり、褐色に変色する。	肥前			
26	10	44 C	包含層	磁器	小碗		底部	口径 2.5	器高 2.5	胴径 2.4	底径 2.4		白色。粒子はガラス化良好。透明感を持つ。剥離面はやや荒い。気孔(円・裂)が存在する。	施紋はプリントによる。			近代?	
26	11	44 C	包含層	磁器	合子?		身部	口径 (1.3)	器高 (1.3)	胴径 5.9	底径		白色。透明感を持つ(結晶化良好)。剥離面は滑らか～やや荒い。気孔(円・裂)が存在する。裂孔の出現は稀で規模は小さい。	受け部の露胎部の端が褐色を帯びる。	能楽山			
26	12	44 C	包含層	磁器	碗	端反り形	口縁	口径 8.2	器高 (2.0)	胴径	底径		白色。粒子はガラス化良好。透明感を持つ。剥離面はやや荒い。気孔(円・裂)が存在する。	染付。(外) 草花紋。	瀬戸・美濃	19世紀		

fig. no.	遺物番号	p.l. no.	出土地点	種類	器種	器形	部位	量 (cm)			形態的特徴	成形・調整 内面/外面	釉薬・絵付 内面/外面	胎土	その他の特徴	産地	年代	備考
								口径	器高	胴径								
26	13	44 C	包含層	磁器	碗		口縁	6.3	(3.7)									
26	14	44 C	包含層	磁器	小碗		底部		(2.4)	高台高 0.4	3.1	(量付け) 釉剥ぎを施し、やや赤味を帯びる。	陶器染付? 内面に見られる透明釉は部分的に白濁する。	白色。透明感を持つ。剥離面はやや荒い。気孔(円・裂)が存在し、規模はやや大きい。			肥前?	
26	15	44 C	包含層	磁器	碗		底部		(2.0)	3.0	(量付け) 釉剥ぎを施し、内側に砂粒が溶着する。	白～灰白色。粒子はガラス化し、単位を留めない。透明感を持つ。剥離面は概ね滑らか。気孔(円・裂)が存在、裂孔は小さく、規模の大きいものがある。	波佐見系	18世紀				
26	16	44 C	包含層	磁器	碗		底部		(1.7)	高台高 0.5	3.5	染付。高台基部と体部下位に一重圏線。	灰白色。やや透明感を持つ。剥離面はやや荒い。気孔(円・列)が多く存在する。	高台量付内側に砂粒が溶着する。透明釉は気泡を多く含む。変換点では釉が厚く掛り、紋様を不透明とする。	肥前			
26	17	44 C	包含層	磁器	碗		底部		(3.0)	3.9	(量付け) 釉剥ぎを施す。	染付。 (見込み) 一重圏線。内紋様不明。 (外) 雲紋? 一重圏線。高台は二重圏線。	白色。粒子はガラス化する。やや透明感を持つ。剥離面はやや荒い。気孔(円)が存在する。	高台量付内側に砂粒が溶着する。透明釉は気泡を多く含む。変換点では釉が厚く掛り、紋様を不透明とする。				
26	18	44 D	包含層	磁器	小碗		底部		(4.3)	2.6		染付。 (外) 鶴紋か?	白色。透明感を持つ。ガラス化良好。剥離面は滑らか。気孔(円・裂)が存在する。					
26	19	44 D	包含層	磁器	碗		底部		(1.6)	3.4	染付。 (外) 帆掛け船(山水) 高台に二重圏線。	白色。粒子はガラス化良好。単位は捉えられない。透明感を持つ。剥離面はやや荒い。気孔(円・裂)が多く、規模は小さい。裂孔は少なく、規模はやや大きい。	肥前?	18世紀?				
26	20	44 D	包含層	磁器	碗			7.8	4.0	3.2	(量付け) 釉剥ぎを施す。(部分的に橙色化する。)	染付。 (外) 草花紋。一重圏線。高台に二重圏線。	白色。粒子はガラス化良好。透明感を持つ。剥離面は概ね滑らか。気孔(円・裂)が存在、規模は小さい。	透明釉は白濁し、釉が収縮して露胎する箇所が存在。	肥前	18世紀後半以降		

fig. no.	遺物番号	pl. no.	出土地点	種類	器種	器形	部位	法		量 (cm)		形態的特徴	成形・調整 内面/外面	釉薬・絵付 内面/外面	胎土	その他の特徴	産地	年代	備考
								口径	器高	胴径	底径								
26	21	44 D	包含層	陶器	碗		底部		(1.5)		4.8	高台は「ハ」の字状に開く。高台内はア一チ状に削り出される。	(量付け) 釉剥ぎか? (不完全) 釉剥ぎ部分の内面に砂粒が絡着。(高台内) ロクロ目が見られる。	(内・外) 灰釉 (発色は灰褐色)。	灰～黄灰色。黒色粒、褐色粒が見られる。透粒子はガラス化。透明感をやや持つ。剥離面はやや荒い。気孔(円)は小規模。				
26	22	44 D	包含層	磁器	皿		口縁	12.5	(2.5)			口縁部は短く外反する。	染付。(内) 草花紋。幅の太い圓線。(外) 透明釉が釉垂れし部分的に厚く掛る。	白色。黒色斑。ガラス化がやや弱い。透明感をやや持つ。剥離面はやや荒い。	透明釉は白濁し、褐色粒(斑点)が多く存在している。表面に細かな凹凸が存在する。				
26	23	44 D	包含層	陶器	皿		口縁	13.6	2.9			口縁部はやや太く丸みをもっておさめる。	(内) 銅緑釉。(外) 灰釉。底位は露胎する。	白～乳白色。赤色粒が含まれる。結晶化は見られないが、均一で精緻な胎土を持つ。	銅緑釉はやや白濁する。灰釉部分に細貫入がみられる。	内野山	17世紀後半～18世紀前半		
26	24	44 D	包含層	陶器	皿		底部		2.6		4.7	高台は「ハ」の字状を呈し開き、断面は逆台形を呈する。内面は撫でにより反る。	(内) 銅緑釉。(外) 上位は灰釉、下位露胎。	白～乳白色。赤色粒。結晶化はみられないが均一で精緻な胎土を持つ。剥離面はやや荒い。気孔(円、裂)がみられ、規模はやや大きい。	ロクロの回転は成形時、調整時とも左。	内野山	17世紀後半～18世紀前半		
26	25	45 A	包含層	陶器	鉢		底部		(1.4)		6.8	底部は中央が縁やかに凹む。	(内) 露胎。(外) 体部は露胎。	灰白色。粒子はガラス化する。粒子単位を留めない。剥離面はやや荒い。気孔(円・裂)が存在、裂孔が多い。	ロクロは成形時、調整時共右回転。				
26	26	45 A	包含層	陶器	蓋		口縁	7.4	(2.2)	等部径 10.2		かえりを有する(断面三角形)。笠部は口縁部で内面に粘土を折り返し、かえり部がやや内側に貼付される。	(内) 露胎。(外) 銅緑釉。	黄色。赤色粒子、黒色斑。剥離面は荒い。気孔(円・裂)がみられるが出現はやや少ない。					
26	27	45 A	包含層	陶器	碗	異器形	底部		(3.0)	高台高 1.0	5.1	高台は大きく直立し、高台内はア一チ状を成す。	(内・外) 灰釉。	黄白色。赤色粒子を含む。粒子単位がみられない。剥離面は荒い。気孔(円・裂)が存在、裂孔は小さい。	調整時ロクロ右回転。細貫入が見られる。	尾戸	18世紀		

fig. no.	遺物番号	pl. no.	出土地点	種類	器種	器形	部位	量 (cm)			形態的特徴	成形・調整 内面/外面	釉薬・絵付 内面/外面	胎土	その他の特徴	産地	年代	備考
								口径	器高	底径								
26	28	45 A	包含層	陶器	台付 灯明皿		脚部		(2.6)	4.0		(内) 鉄釉 (茶褐色)。 (外) 露胎。 (底) 回転。糸切り真 (合わせ切り)。	灰褐色。赤色粒。黒色粒。粒子単位を留めてガラス化する。剥離面は荒い。気孔 (円・裂) が存在する。	成形時ロクロ右回転。脚部の内底面に砂粒が付着する。	肥前?			
26	29	45 A	包含層	須恵器	碗		10.0	3.7	高台高 0.6	4.9	(内) 削りの後、無で施すが、体部では弱い削り痕が見られる。(外) 上位は無で施す。		灰色。結晶化は見られない。剥離面は荒い。気孔 (円・裂) が存在する。	成形時ロクロは左回転。	10世紀?			
26	30	45 A	包含層	磁器	仏花瓶			(4.2)		5.7		染付。 (内) 露胎。 (外) 体部は二重圏線。高台は一重圏線。	白色。粒子はガラス化する。透明感をやや持つ。剥離面はやや荒い。気孔 (円) が存在する。	肥前				
26	31	45 A	包含層	磁器	碗		口縁	(3.6)				染付。 (外) 菊紋 (緑色)。	白色。ガラス化良好で単位は留めない。透明感を持つ。剥離面は滑らか。気孔 (円・裂) が存在し、裂孔の規模は大きいものがある。			近代?		
26	32	45 B	包含層	陶器	碗	異器形	底部	(3.9)		4.6	(量付け) 釉剥ぎを施し、砂粒が付着する。	(内・外) 灰釉 (発色は緑灰色)。	白～乳白色。粒子単位の留めてガラス化する。剥離面は荒い。気孔 (円) が存在する。	細貫入が多く見られる。		18世紀		
26	33	45 B	包含層	磁器	碗	丸形	底部	4.0		5.0	染付。一重圏線。 (内) 草紋。底部に一重圏線。高台部は二重圏線。		乳白色。結晶化は進んでいないが透明感のみは荒い。気孔 (円・裂) が存在する。裂孔は多く、規模は大きいものがある。	透明釉はやや白濁し呈する。	能茶山			
26	34	45 B	包含層	陶器	碗		底部	2.8		4.6		(内) 灰釉 (淡緑灰色)。 貫入が見られる。 (外) 灰釉 (淡緑灰色)。 底部以下露胎する。	灰白色。石英粒。黒色粒を含む。粒子はガラス化するが、透明感はない。剥離面は荒い。気孔 (円・裂) が存在する。			17世紀代の肥前製品か?		
26	35	45 B	包含層	陶器	蓋 (行平鍋)		口縁	2.5				(内) 鉄釉。(刷毛により透布する)。 (外) 鉄泥後飛鉋を施す。	黄～黄白色。粒子は単位を留め、ガラス化する。透明感はない。剥離面はやや荒い。気孔 (円・裂) が存在するが、裂孔の規模は小さい。			19世紀		

fig. no.	遺物番号	pl. no.	出土地点	種類	器種	器形	部位	法		形態的特徴	成形・調整 内面/外面	釉薬・絵付 内面/外面	胎土	その他の特徴	産地	年代	備考
								口径	器高								
26	36	45 B	包含層	陶器	鉢	底部	底部	2.9	高台高 1.8	13.4	(見込み) 砂目が施される。 (外) 削り。	(内) 灰釉 (白濁)。 (外) 露胎。	橙色。透明感を持たない。粒子単位を認められる。剥離面は荒い。気孔 (円) が存在する。	高台の内面と畳付には2条のやや浅い溝が存在する。			
26	37	45 C	包含層	陶器	小型壺	口縁	口縁	7.8	(5.7)			(内) ロクロ目又は刷毛で。 (外) 撫で。	白色。粒子はガラス化良好。黒色斑。透明感をやや持つ。剥離面はやや荒く気孔 (円) が存在する。	成形時ロクロは左回転。胎土は磁器質。			
26	38	45 C	包含層	陶器	鉢	底部	底部	(6.5)	高台高 1.3	9.2	底部下位に強い削り痕を留める。	(内) 見込みは白土による刷毛。他は鉄釉 (暗緑色)。 (外) 鉄釉。高台以下露胎する。	赤褐色。石英粒。黒色粒、赤色粒粒子単位を留める。剥離面は荒い。気孔 (円) が多く存在する。	調整時のロクロは右回転。	肥前?	18世紀	
26	39	45 C	包含層	陶器	鉢	底部	底部	(3.8)		9.5		(内) 白土塗布。刷毛目。 (外) 白土。底部以下露胎。	赤褐色。石英粒、褐色粒。ガラス化は見られない。剥離面はやや荒い。	調整時ロクロ右回転。	肥前?	18世紀	
27	1	45 C	包含層	陶器	碗	底部	底部	(5.1)		5.0	(畳付け) 釉剥ぎを施す。	(内・外) 灰釉を施す。 (外面は内面に見られる透明感のある黄緑色が出ておらず、白濁している。)	黄白色。粒子単位を留める。赤色粒子。透明感はない。剥離面は荒い。	内面に細かな貫入が認められる。	尾戸	17世紀後～18世紀前	
27	2	45 C	包含層	磁器	碗	底部	底部	(3.5)	高台高 1.0	4.7		染付。 (見込み) 一重圏線。 (外) 草花紋。底部底位に一重圏線。高台脇に一重圏線。高台基部に二重圏線。	白色。粒子はガラス化良好。やや透明感を持つ。剥離面がやや荒い。	畳付釉剥ぎ部分は橙色を呈す。高台内眼角内「茶」銘を施す。	能茶山		
27	3	45 D	包含層	陶器	甕	底部	底部	(10.9)		10.1		(内) ロクロ目残り、錆付着。 (外) 自然釉はガラス化部分剥落。弱いハケ目。	灰～灰白色。結晶化は良い。黒色、石英粒が存在する。剥離面は荒い。気孔 (円・裂) が多く存在し、裂孔の規模も大きい。	胎土中に10mm程度の角礫が存在している。			
27	4	45 D	包含層	磁器	皿	底部	底部	(4.1)		10.7		染付。竹or笹? 墨弾きを用いた雲紋。二重圏線 (内) 体部下位に一重圏線。高台は二重圏線。高台内は一重圏線。	白～乳白色。粒子単位を留めガラス化する。透明感はない。剥離面はやや荒い。気孔 (円) が存在する。		能茶山		
27	5	45 D	包含層	磁器	皿	底部	底部	(2.2)		8.4		(内) 型紙刷りによる草花紋。二重圏線。 (外) 一重圏線。高台は二重圏線。高台内は一重圏線。	白色。剥離面は滑らか。気孔 (円) が存在し、規模は小さい。		肥前		

fig. no.	遺物番号	pl. no.	出土地点	種類	器種	器形	部位	量 (cm)			形態的特徴	成形・調整 内面/外面	釉薬・絵付 内面/外面	胎土	その他の特徴	産地	年代	備考
								口径	器高	胴径								
27	6	45 D	包含層	磁器	皿			13.1	3.7	8.8	底部は蛇ノ目凹型高台を呈す。底部底位は削りの単位が残される。	染付。 (内) 型紙摺りによる松竹稚紋 (コバルト軸)。 (外) 型紙摺りによる花唐草紋 (コバルト軸)。一重圏線。口唇部にはコバルトが掛かる。	白色。粒子は良くガラス化しており、やや透明感を持つ。剥離面は滑らか。気孔 (円・裂) が存在し、裂孔には規模のやや大きなものが存在する。		近代初頭			
27	7	45 D	包含層	磁器	皿		底部	(2.8)		4.8	体部はやや内湾して外上方に立ち上がりが。高台は断面逆台形を成す。 (外) 体部は削り単位が認められる。 (置付け) 釉剥ぎを施し、内側を中心に砂粒が溶着する。 (見込み) 蛇ノ目軸剥ぎを施し、高台痕跡を残す。	染付。 (内) 底部は二重圏線。刺筆による斜格子紋。 白色。粒子はガラス化良好。透明感を持つ。剥離面は概ね滑らか。気孔 (円) が多く存在する。	肥前?	18世紀?				
27	8	46 A	包含層	磁器	皿		底部	(2.1)	高台高 0.3	4.5	高台は削り出しによる直立し、断面は逆台形を呈する。 (内) 見込みに同心円状の細い溝がみられる。 (外) 体部に削り単位がみられる。	染付。 (内) 草花紋 or 土塼。一重圏線。 灰白色。透明感を持つ。剥離面はやや荒い。気孔 (円・裂) が存在、裂孔は多く規模は大きいものがある。	肥前					
27	9	46 A	包含層	磁器	鉢		底部	(5.6)		10.0	口縁部で屈曲し外側へ広がる。高台内の蛇ノ目凹型高台を成す。蛇ノ目凹型高台の外周部分は露胎し細砂が付着する。 青磁染付。 (内) 発色は暗緑色、紋様帯は見込みと口縁部。 (外) 青磁釉 (発色は緑灰色)。	白～灰白色。一部粒子単位を留めガラス化する。透明感を持つ。剥離面はやや荒い。気孔 (円・裂) が存在、円孔は多く、裂孔は稀。	肥前?					
27	10	46 A	包含層	陶器	皿		底部	(2.6)	高台高 0.8	12.0	体部で変換点を持つ。口縁部は外反する。高台内は削り出しにより、胎に較べて深く削り出される。 (内・外) 銅緑釉による施紋がみられる。	灰～灰白色。黒色斑・粒子はガラス化し単位を残す。剥離面はやや荒い。気孔 (円・裂) が存在する。						
27	11	56 D	包含層	砥石?				全長 8.38	全幅 7.8	重量 356.9 g	成形段階のものか。自然面又は使用面と考えられる滑らかな面×1、剥離面×3 (未使用)、破断面×2。	砂岩製。	面全体に鼠歯状痕。					

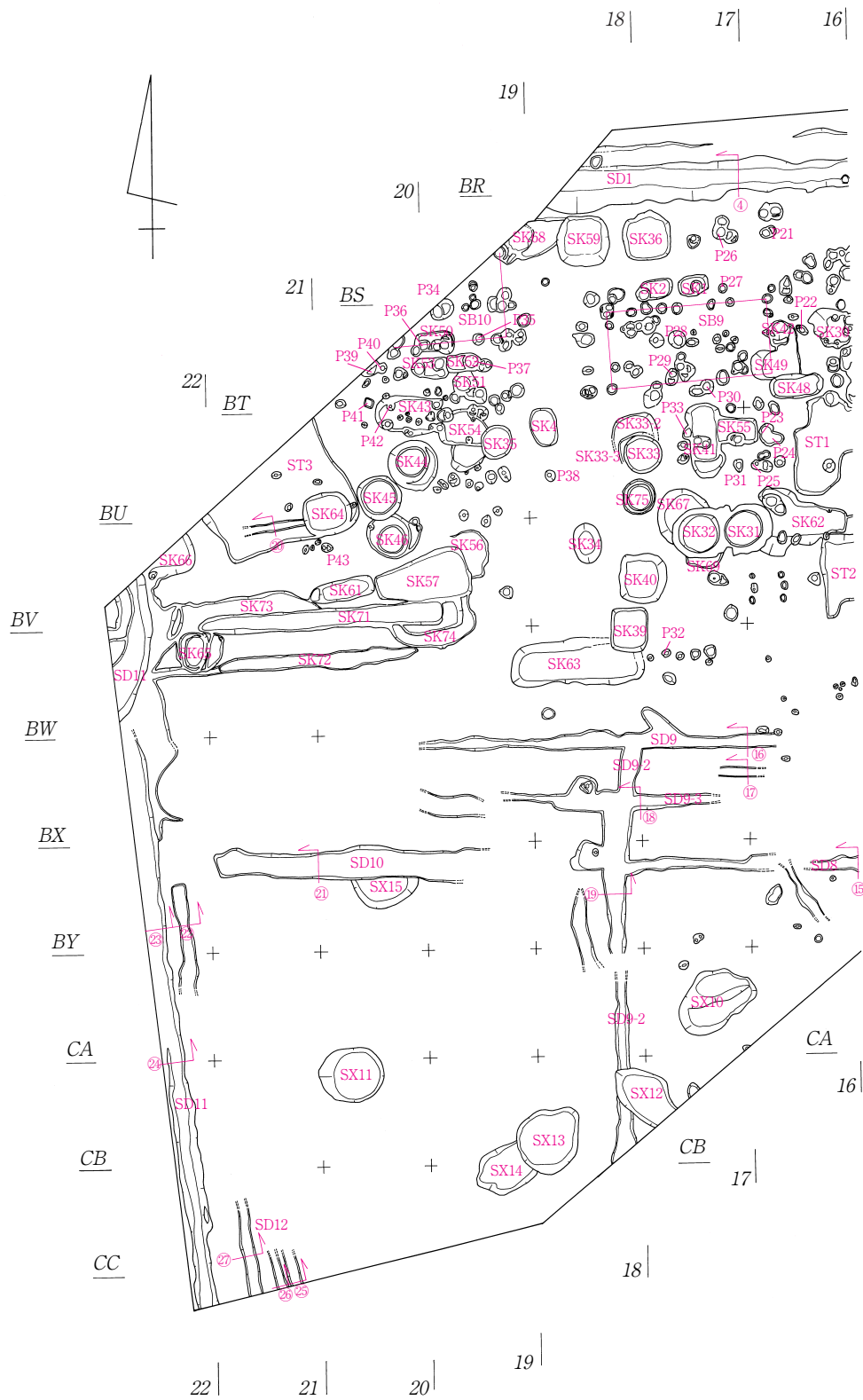
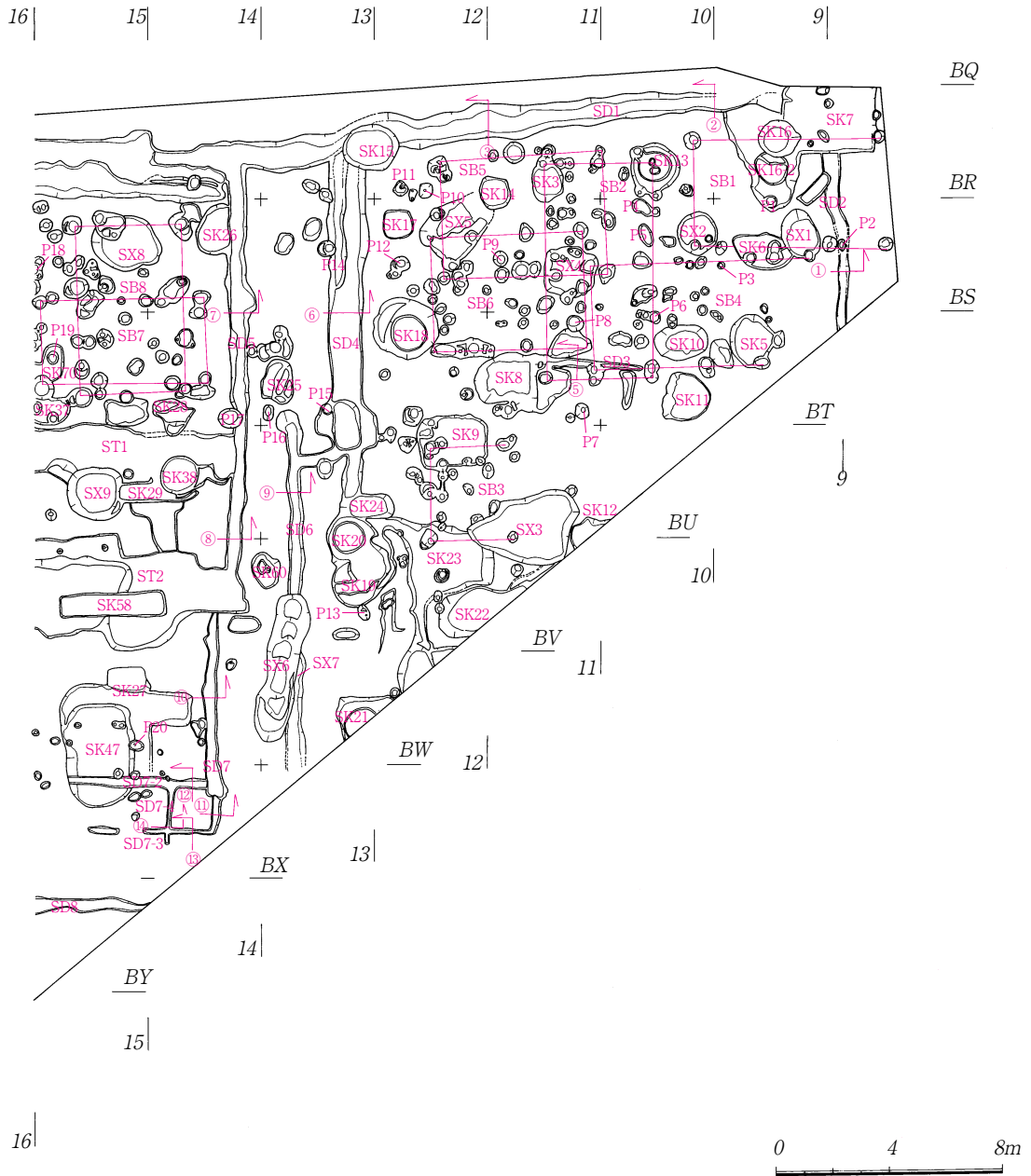


fig.28 調査Ⅱ区全体図



3. 調査Ⅱ区の遺構と遺物

(1) 掘立柱建物跡

SB1 (fig. 29)

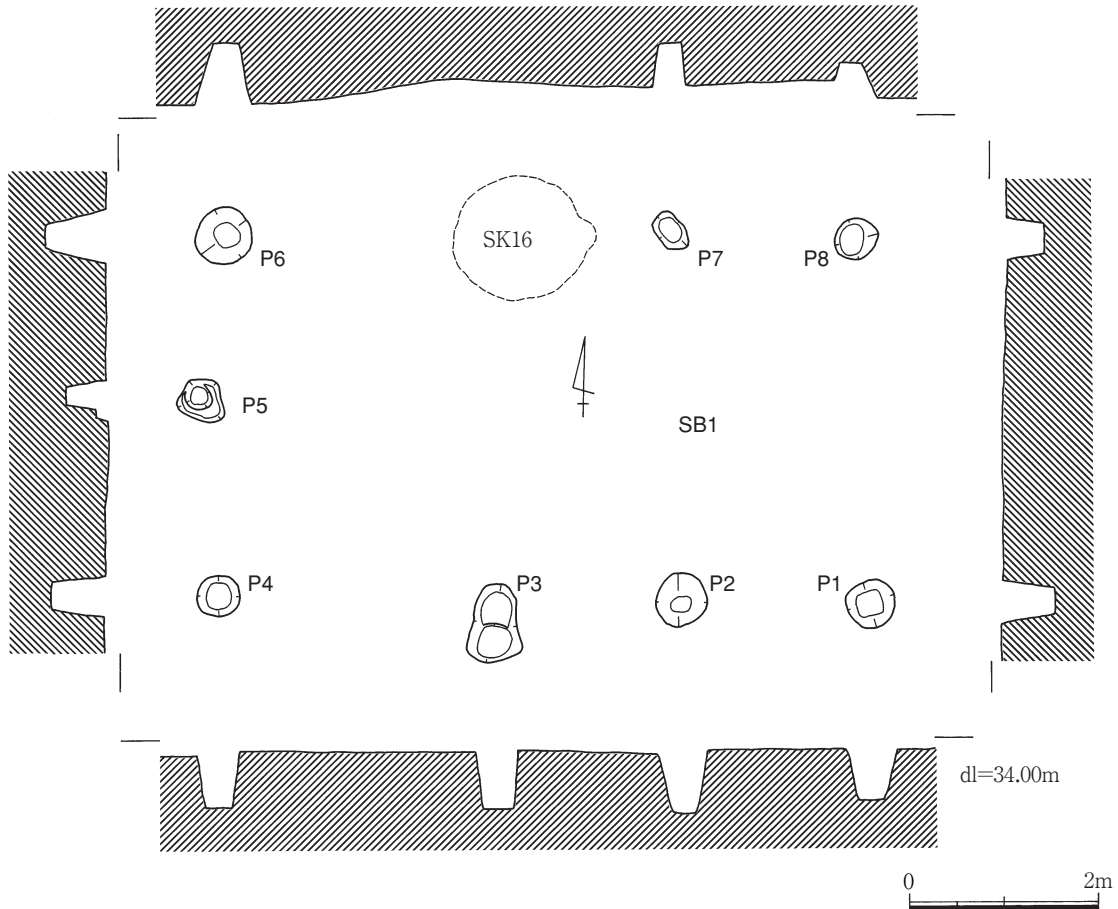


fig.29 SB1平面図・エレベーション図

調査区の東部に位置する。調査区の東壁に隔されており、全体規模は不明である。主軸方向はN-88°Eである。残存規模は東西桁行3間(6m80cm)、南北梁間2間(3m90cm)である。

SB1を構成する柱穴はP1～P8の8個が存在している。平面形態では円形又は楕円形を呈するものが多く、規模は44cm～60cmの最大径を持ち、検出面からの深さは36cm～64cmを測る。遺構埋土としては黄色土が混入する暗灰色土を持つものが多い。

出土遺物の中で図示できるものは無い。細片としてはP2からの磁器1点と土師質土器1点が存在する。

SB1柱穴計測表

Pit no.	規模(cm)	検出面からの深さ(cm)	平面形態	出土遺物・その他
P1	48	52	不整円形	柱痕方形
P2	56	64	不整円形	磁器1点・土師質土器1点
P3	70×84	60	瓢箪形	
P4	44	56	円形	
P5	44×52	44	不整楕円形	
P6	60	64	円形	
P7	28×44	44	不整楕円形	
P8	44	36	不整円形	

※ () 内は残存値又は推定形態。

SB1の帰属時期は19世紀中頃以降と考えられる。

SB2 (fig. 30)

調査区の東部中央に位置する。南北方向の桁行3間(7m60cm)、東西方向の梁間2間(3m80cm)の規模を持つ。棟方向はほぼ真北である。

SB2を構成する柱穴は10個が存在する。平面形態は円形又は楕円形を呈するものが多いが、中には方形を呈する柱痕が見られることから、掘り方円形で方形の柱を使用していた可能性がある。規模は20cm～72cm、検出面からの深さは概ね36cm～72cmを測るが、中にはP7のような検出面からの深さが8cmと浅いものが存在している。遺構埋土は黄色土が混入する暗灰色土である。

出土遺物の中で図示できるものは存在しない。細片としてはP9から磁器1点と陶器1点、P10から陶器1点が出土している。

SB2の帰属時期は18世紀代の可能性がある。

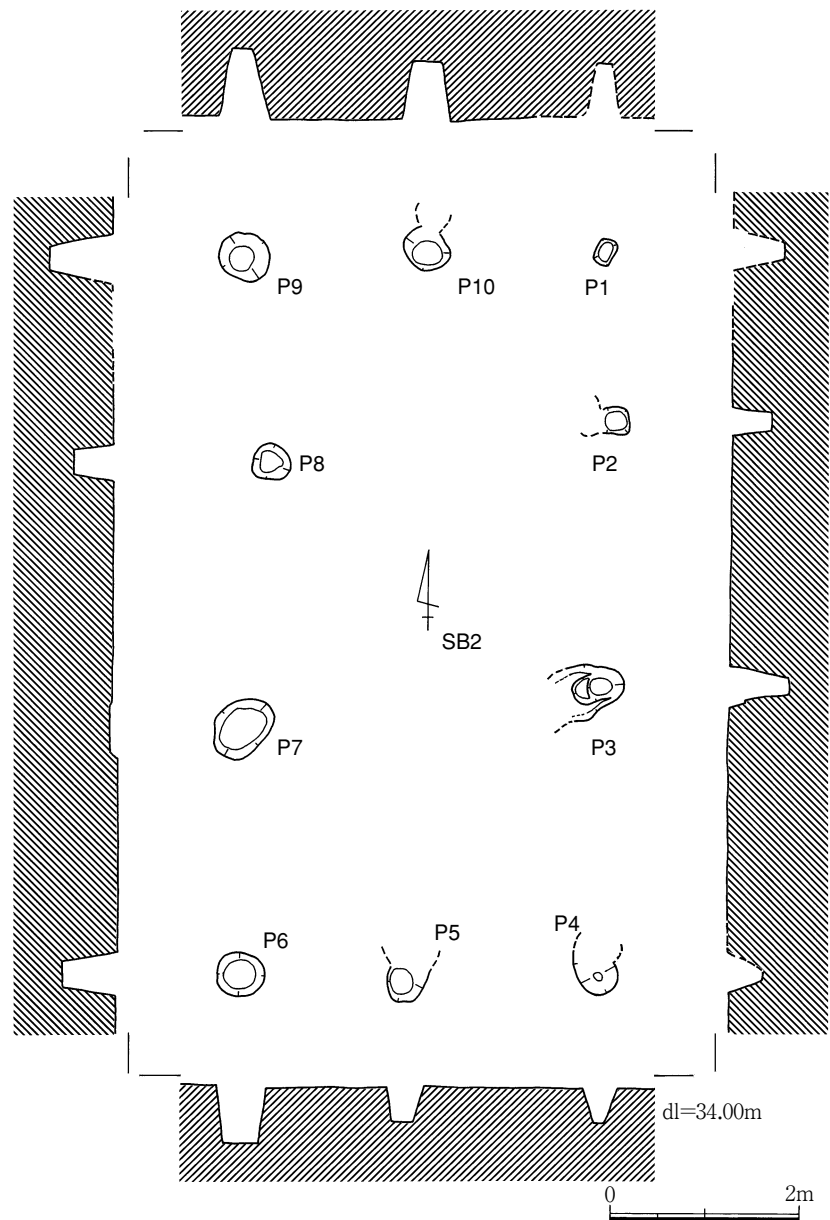


fig.30 SB2平面図・エレベーション図

SB2柱穴計測表

Pit no.	規模(cm)	検出面からの深さ(cm)	平面形態	出土遺物・その他
P1	(20×28)	52	隅円長方形	
P2	28	41	隅円方形	
P3	40×56	64	楕円形	
P4	40	36	(円形)	
P5	40	38	(円形)	
P6	48	56	円形	
P7	54×72	8	楕円形	
P8	40	42	不整円形	
P9	48×56	72	不整楕円形	磁器1点・陶器1点
P10	44×52	64	(楕円形)	陶器1点

※ () 内は残存値又は推定形態。

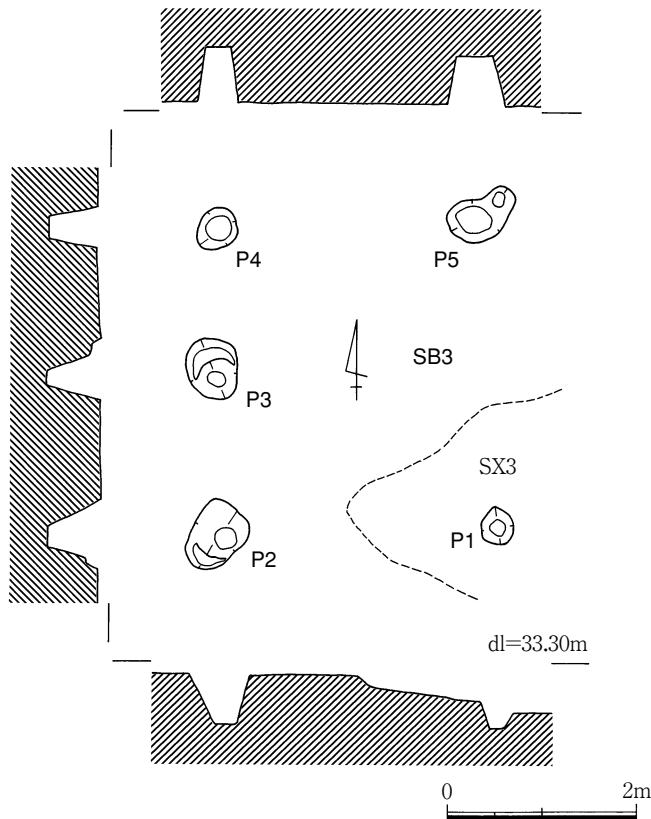


fig.31 SB3平面図・エレベーション図

SB3柱穴計測表

Pit no.	規模(cm)	検出面からの深さ(cm)	平面形態	出土遺物・その他
P1	34×42	(56)	不整楕円形	SX3に切られる。
P2	52×76	54	隅円長方形	
P3	60×66	56	不整楕円形	
P4	40×50	50	不整楕円形	
P5	44×56	52	(楕円形)	

※ () 内は残存値又は推定形態。

は桁行4間(7m90cm)、梁間1間(3m60cm)を測る。

SB4を構成する柱穴は9個が存在する。平面形態は不整の円形又は楕円形を呈するものが多く、規模は32cm～76cm、検出面からの深さは52cm～78cmを測る。遺構埋土としては黄色土の混入する暗灰色土を持つものが多い。

出土遺物の中で図示できるものは無い。細片としてはP2から磁器1点と瓦1点、P9から陶器2点が存在する。

SB4はSB2との先後関係を明らかにし難いが、帰属時期は18世紀代の可能性がある。

SB4柱穴計測表

Pit no.	規模(cm)	検出面からの深さ(cm)	平面形態	出土遺物・その他
P1	44×60	78	不整楕円形	
P2	52×76	64	不整楕円形	磁器1点・瓦1点
P3	48	60	不整形	
P4	(44×60)	64	(楕円形)	
P5	52×60	68	不整楕円形	
P6	62×68	52～58	不整楕円形	
P7	32×48	64	楕円形	
P8	40	60	不整形	
P9	40	64	円形	陶器2点

※ () 内は残存値又は推定形態。

SB3 (fig. 31)

調査区の東部南側に存在する。東西方向N-90°Eに棟方向を持つ掘立柱建物と考えられる。検出規模は桁行1間(2m70cm)、梁間2間(3m30cm)を測る。

SB3を構成する柱穴は5個が存在する。平面形態は不整楕円形又は楕円形を呈するものが多く、規模は34cm～76cm、検出面からの深さは50cm～56cmを測る。遺構埋土としては暗灰色土を持つ。

出土遺物は皆無である。

SB3の帰属時期を明確にすることはできないが、P1がSX3に切られていることから19世紀以前。加えて、調査区の東部で棟方向を同じくするSB2と同時期に機能したものであろうか。

SB4 (fig. 32)

調査区の東部に位置する。南東端部が調査区の南壁に隔される。棟方向はN-86°Eである。検出規模

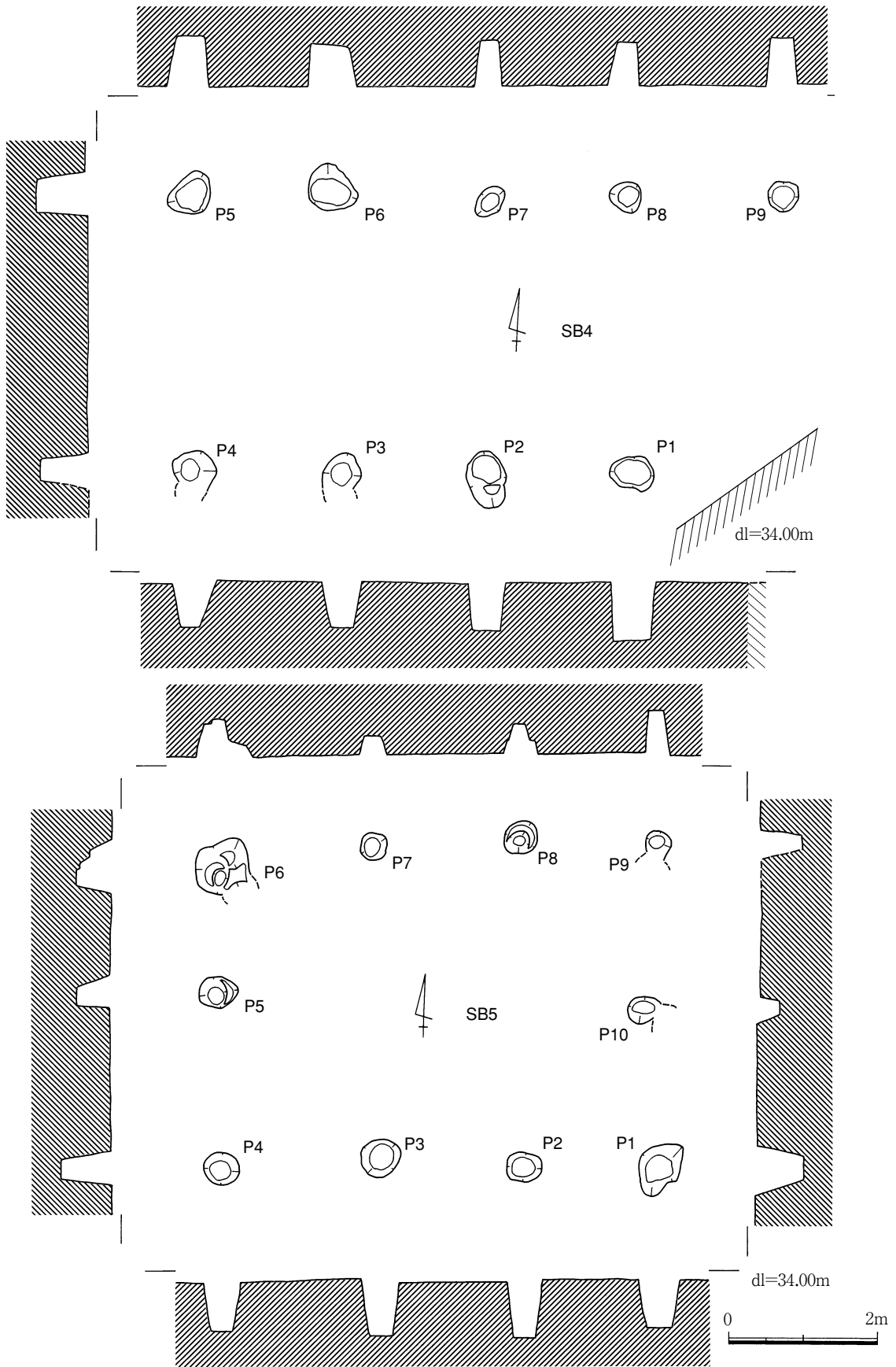


fig.32 SB4・SB5平面図・エレベーション図

SB5 (fig. 32)

調査区の東部北側に位置する。規模は桁行3間(5m90cm)、梁間2間(4m40cm)を測る。棟方向はN-87°-Eである。

SB5を構成する柱穴としてはP1～P10の10個が存在する。平面形態は円形又は楕円形を呈するものが多く、規模は32cm～80cm、検出面からの深さは24cm～78cmを測る。遺構埋土としては主に黄色土が混入する暗灰色土が存在する。

出土遺物として図示できるものは無い。細片としてはP2からの磁器2点、P3からの土師質土器1点、P4からの陶器1点、P6からの磁器1点、P8からの陶器1点が存在する。

SB5の帰属時期は18世紀代の可能性がある。

SB5柱穴計測表

Pit no.	規模(cm)	検出面からの深さ(cm)	平面形態	出土遺物・その他
P1	60×80	64	不整楕円	
P2	40×48	76	楕円形	陶器2点
P3	52	78	円形	土師質土器1点
P4	46	66	円形	陶器1点
P5	42×54	44	楕円形	
P6	(40×48)	32	(円形)	磁器1点
P7	36	24	円形	
P8	44	40	不整円形	陶器1点
P9	32	60	(円形)	炭
P10	36×40	34	楕円形	

※ () 内は残存値又は推定形態。

SB6 (fig. 33)

調査区の東部で中央寄りに位置する。規模は桁行3間(5m50cm)、梁行2間(4m)を測る。棟方向はN-86°-Eである。

SB6を構成する柱穴はP1～P10の10個が存在する。この内P1は柱穴とは判断し難いが浅い落ち込み部分を掘立柱建物を構成する部分として扱う。平面形態は円形又は楕円形を呈するものが多く、規模は24cm～76cm、検出面からの深さは24cm～60cmを測る。遺構埋土は黄色土の混入する暗灰色土である。

出土遺物の中で図示できるものは無い。細片としてはP5からの陶器1点、P8からの陶器1点、P9からの陶器1点が存在する。

SB6の帰属時期は19世紀代の可能性がある。

SB6柱穴計測表

Pit no.	規模(cm)	検出面からの深さ(cm)	平面形態	出土遺物・その他
P1	—	24	—	
P2	40	52	円形	
P3	62×72	60	不整楕円形	
P4	24×32	31	不整楕円形	
P5	56×60	38	瓢箪形	陶器1点
P6	64×76	36	楕円形	
P7	48×54	60	楕円形	
P8	52×68	60	不整楕円形	陶器1点
P9	56	60	円形	陶器1点
P10	48×58	20	楕円形	

※ () 内は推定値又は形態。

SB7 (fig. 33)

調査区の中央部東側に位置する。規模は桁行3間(6m60cm)、梁行1間(3m)を測る。棟方向はN-90°-Eである。

SB7を構成する柱穴としてはP1～P8の8個が存在する。平面形態は円形又は楕円形を呈し、P6・P7では他の柱穴と重複する。規模は約40cm～56cm、検出面からの深さは12cm～42cmを測る。遺構埋土としては主として黄色

SB7柱穴計測表

Pit no.	規模(cm)	検出面からの深さ(cm)	平面形態	出土遺物・その他
P1	44	30	円形	
P2	52	18	円形	
P3	56	25	円形	
P4	48×56	38	楕円形	
P5	48×54	40	楕円形	
P6	(40)	42	(円形)	
P7	48	40	円形	
P8	52×68	12	楕円形	

※ () 内は推定値又は形態。

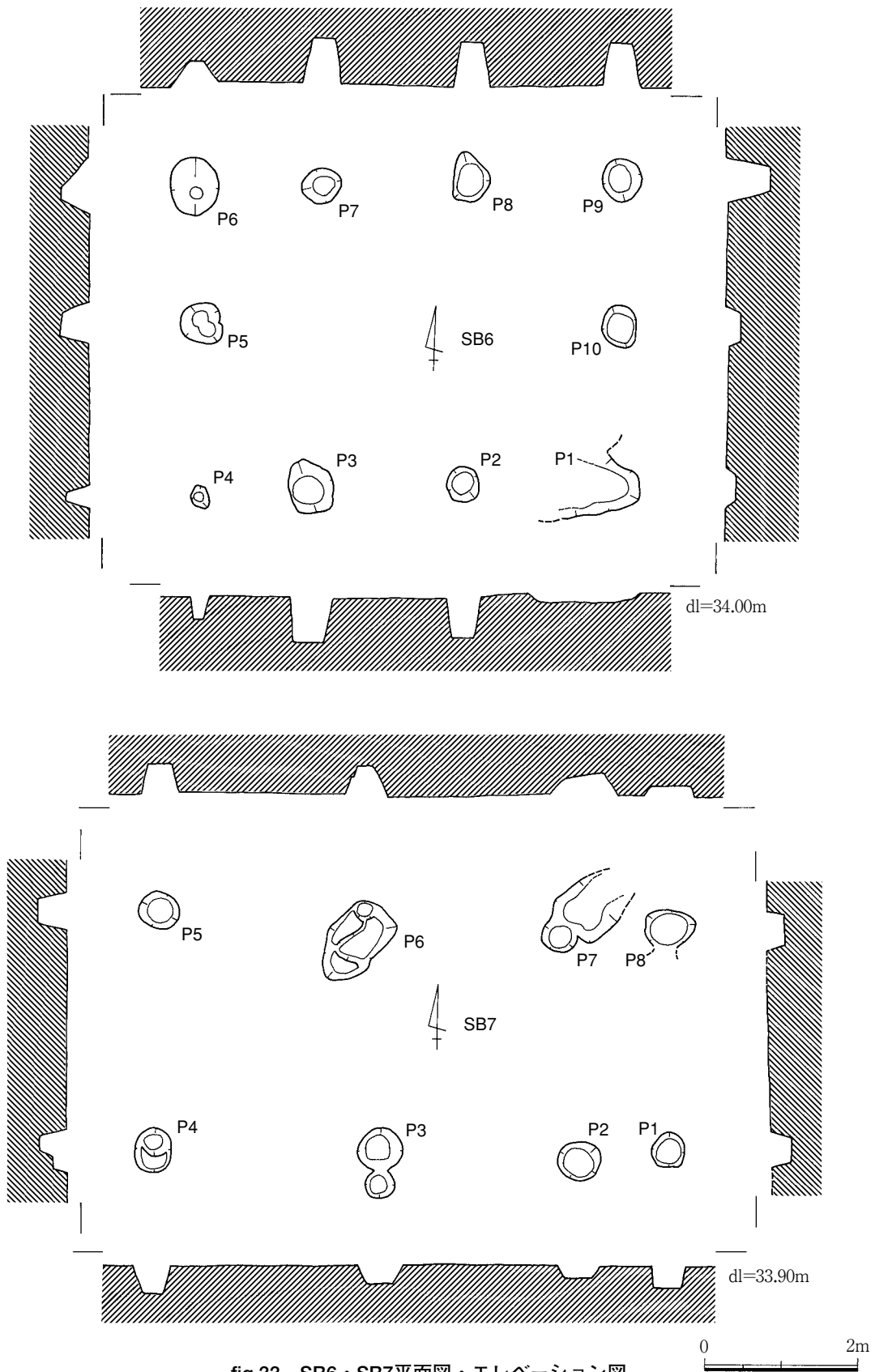


fig.33 SB6・SB7平面図・エレベーション図

土混入の暗灰色土が存在する。

出土遺物は皆無である。

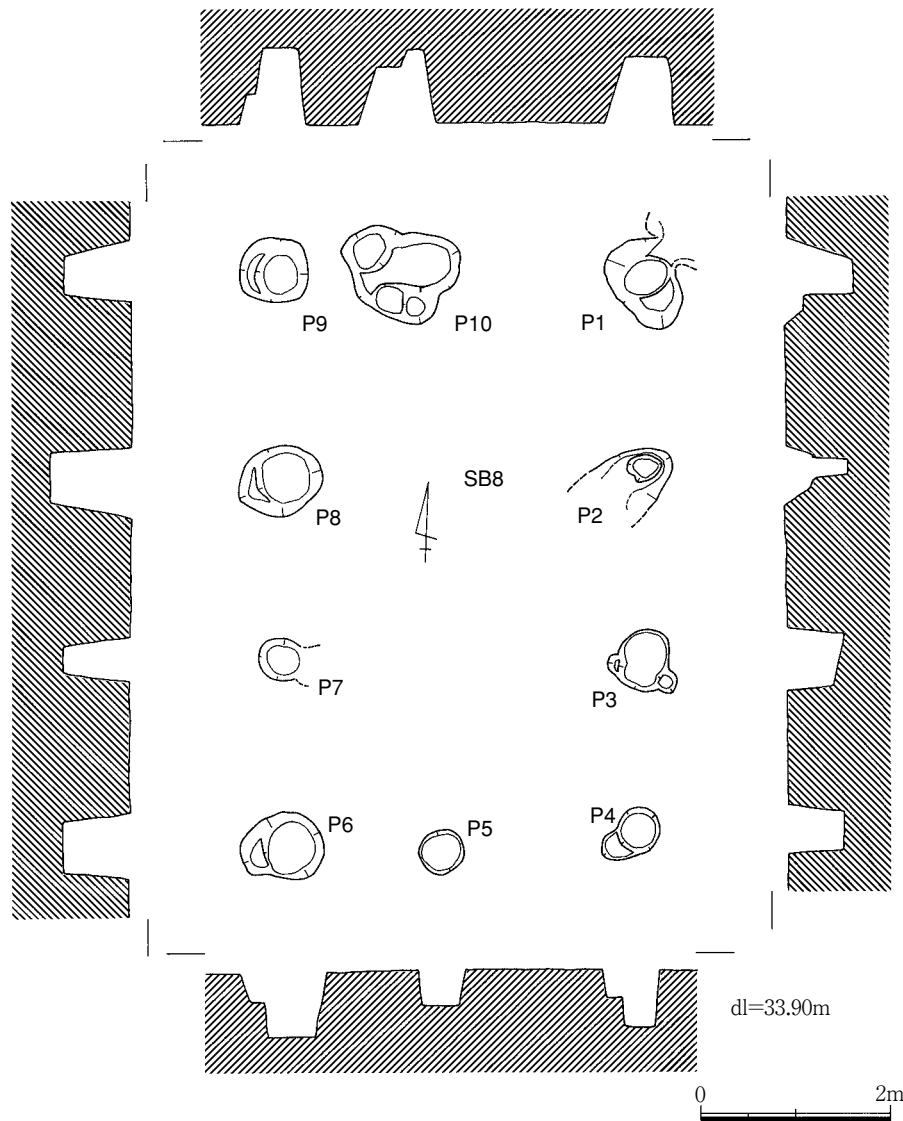


fig.34 SB8平面図・エレベーション図

SB8柱穴計測表

Pit no.	規模(cm)	検出面からの深さ(cm)	平面形態	出土遺物・その他
P1	66×98	68	(楕円形)	
P2	(48×56)	69	(楕円形)	
P3	54×66	49~60	不整楕円形	
P4	44×70	58	不整楕円形	陶器1点・土師質土器1点
P5	48	38	円形	土師質土器1点
P6	74×86	72	不整楕円形	磁器1点
P7	46	72	円形	陶器1点
P8	92	86	不整円形	磁器1点
P9	68	72	不整円形	
P10	(60×80)	80	楕円形	磁器1点

※ () 内は推定値又は形態。

SB8 (fig. 34)

調査区の中央部東側に位置する。規模は桁行3間(6m10cm)、梁間2間(3m80cm)を測る。棟方向はN-2°-Wである。

SB8を構成する柱穴としてはP1~P10の10個が存在する。平面形態は楕円形又は円形を呈するものが多く、規模は48cm~98cmを測る。検出面からの深さは38cm~86cmである。遺構埋土としては暗褐色土を持つものが多い。

出土遺物の中で図示できるものは無い。細片としてはP4からの陶器1点と土師質土器1点、P5からの土師質土器1点、P6からの磁器1点、

P7からの陶器1点、P8からの磁器1点、P10からの磁器1点である。

SB8の帰属時期は19世紀代と考えられる。

SB9 (fig. 35)

調査区の中央部東寄りに位置する。規模

SB9柱穴計測表

Pit no.	規模(cm)	検出面からの深さ(cm)	平面形態	出土遺物・その他
P 1	47×57	30	楕円形	
P 2	38×44	45	(楕円形)	陶器1点
P 3	36	20	円形	陶器3点
P 4	58	50	不整形円形	土師質土器2点
P 5	44×49	32	達磨形	
P 6	32×39	48	楕円形	磁器1点・土師質土器1点
P 7	36×43	44	楕円形	

※ () 内は推定値又は形態。

は桁行3間(6m10cm)、梁間1間(2m70cm)を測る。棟方向はN-84°Eである。

SB9を構成する柱穴はP1～P7の7個が存在する。平面形態は楕円形又は円形を呈するものが多く、規模は32cm～58cmを測る。検出面からの深さは20cm～50cmであり、全体的に見て規模は小さめの柱

穴群である。遺構埋土は主として黄色土を混入する暗灰色土又は暗褐色土である。

出土遺物の中で図示できるものは無い。細片としてはP2からの陶器1点、P3からの陶器3点、P4からの土師質土器2点、P6からの磁器1点と土師質土器2点が存在する。

SB9の帰属時期は18世紀代か。

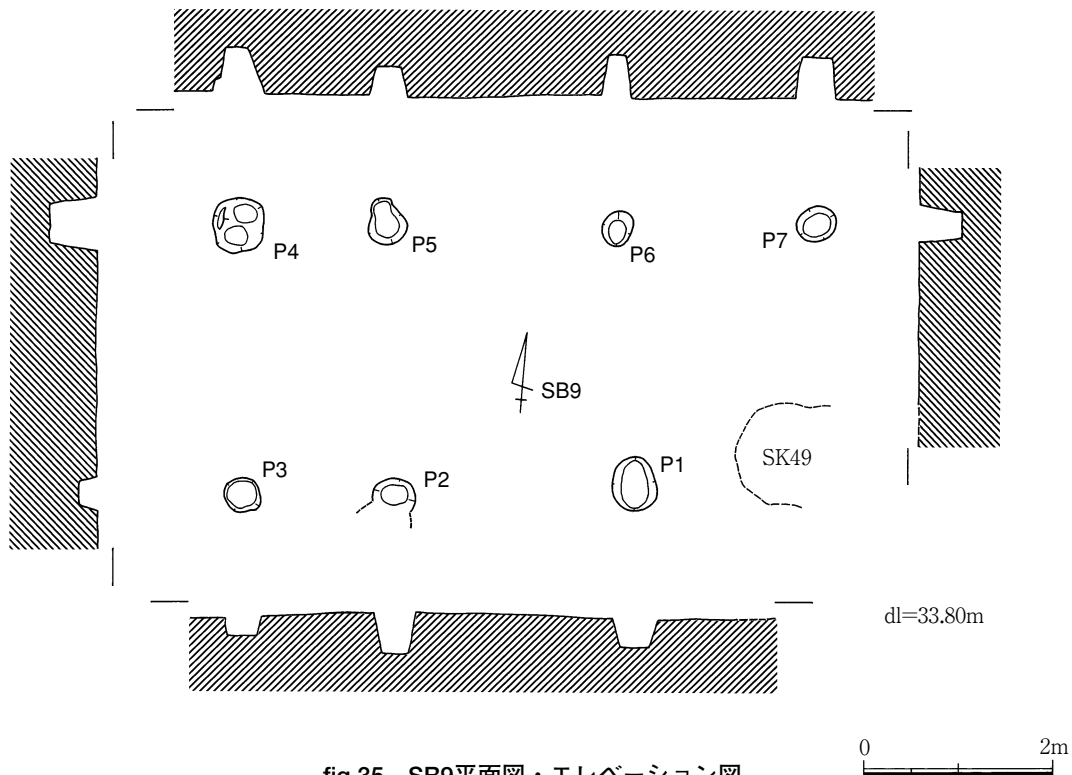


fig.35 SB9平面図・エレベーション図

SB10 (fig. 36)

調査区の西部北端に位置する。調査区の北壁に隔されており、全体規模は不明である。残存規模は南北方向2間(4m40cm)、東西方向2間(3m10cm)を測る。主軸方向はほぼ真北である。

SB10を構成すると考えられる柱穴はP1～P5の5個である。これらの多くには柱穴の重複が見られることから、建て替えが行われた可能性が強い。遺構埋土は黄色土の混入する暗褐色土である。

出土遺物として図示できるものは1点(fig. 36-1)である。1は土師質土器の小皿である。その他に細片

としてP1からの土師質土器1点と弥生土器1点、P2からの陶器3点、P3からの土師質土器1点、P5からの土師質土器1点が存在する。

SB10柱穴計測表

Pit no.	規模(cm)	検出面からの深さ(cm)	平面形態	出土遺物・その他
P1	44	60	(円形)	fig.36-1 土師質土器1点・弥生土器1点
P2	48×(60)	52	(楕円形)	陶器3点
P3	52	70	(円形)	土師質土器1点
P4	54×62	64	(楕円形)	
P5	52	64	(不整形)	土師質土器1点

※ () 内は推定値又は形態。

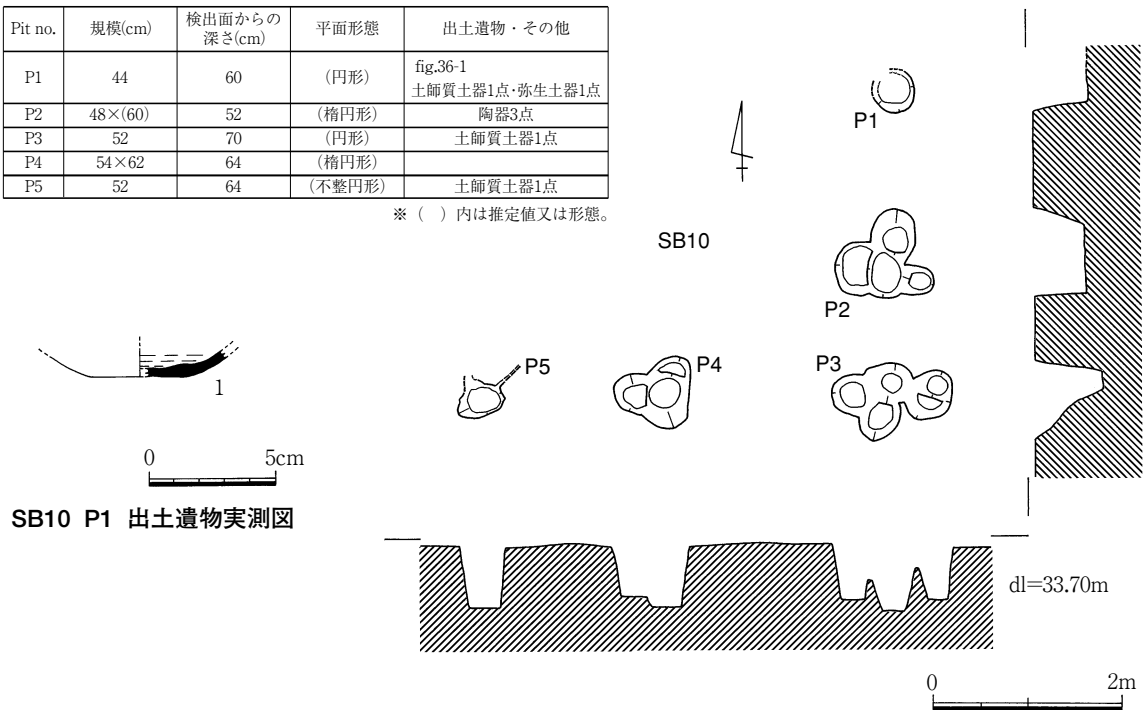


fig.36 SB10平面図・エレベーション図・出土遺物実測図

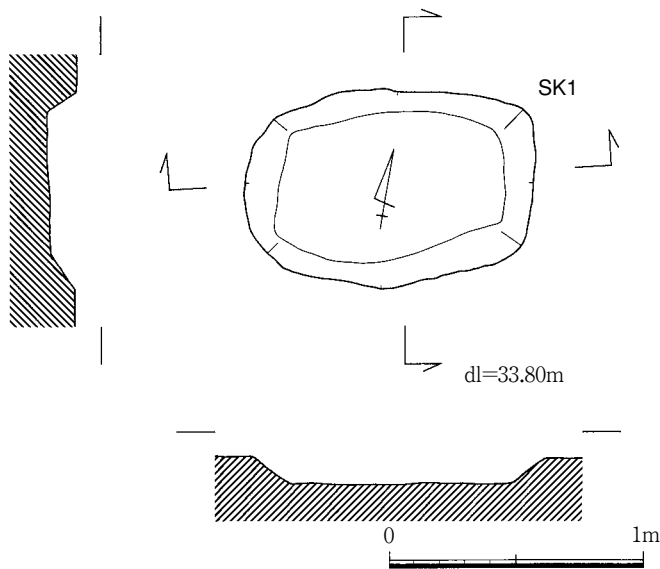


fig.37 SK1出土状況図・平面図・エレベーション図

(2) 土坑

SK1 (fig. 37)

調査区の中央部で埋土に黄色土の混入する暗灰色土を持つ柱穴を切って存在する。平面形態は隅丸長方形を呈し、規模は長軸1m9cm、短

軸1m78cmを測る。主軸方向はN-76°Eである。底部は平らな面を成し、検出面からの深さは15cmである。遺構埋土は暗灰褐色土であり、黄灰色土による枠が存在する。底面直上から拳大を中心に最大で20cm大の円礫が多く出土している。

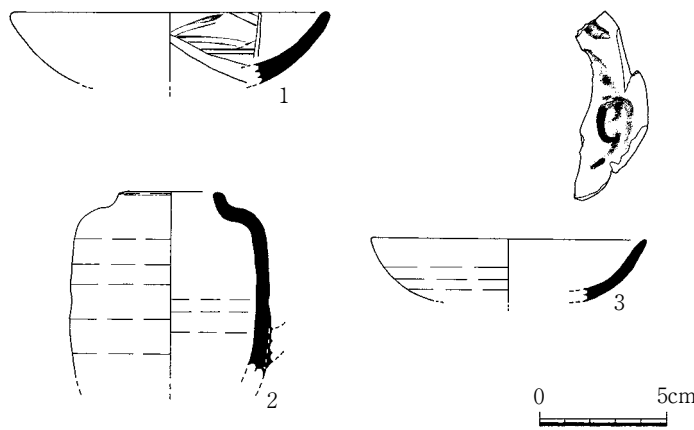


fig.38 SK1出土遺物実測図

出土遺物として図示できるものは3点(fig. 38-1~3)である。1は磁器染付の皿であり、割筆による斜格子紋を描く。肥前産であり、18世紀後半。2は陶器の汁次である。3は陶器染付の皿であり、瀬戸・美濃産の19世紀。その他細片が16点存在する。種類別の内訳は、磁器1点、陶器2点、土師質土器4点、弥生土器3点、瓦6点である。

SK1は19世紀代に機能したものと考えられる。

SK2 (fig. 39)

調査区の中央北部に位置し、同様な形態を持つSK1に西隣する。遺構の西南部で黄灰色土の混入した黒色土を埋土とする柱穴を切る。平面形態は隅丸長方形を呈し、規模は長軸1m20cm、短軸94cmを測る。主軸方向はN-81°Eである。底部は平らな面を成し、検出面からの深さは8cmである。遺構埋土は黄灰色土と暗灰色土の混じった黒色土である。床面直上には拳大を中心とする円礫が多く存在したが、SK1に較べて、礫の密度は低い。SK1に見られた黄灰色土による枠の存在は確認できなかった。

出土遺物は皆無であるが、形態や出土状況からSK1と同時期のものと考えられる。

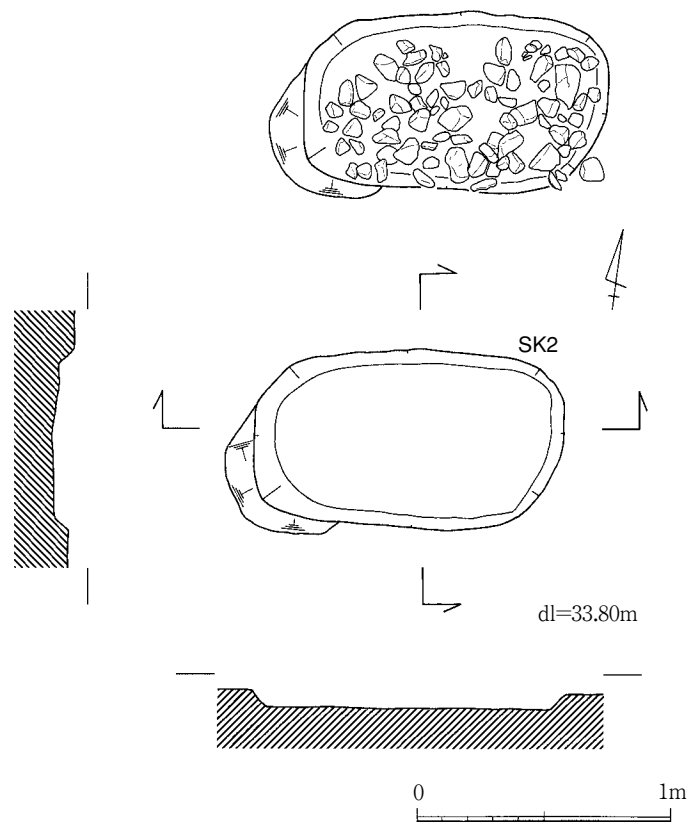


fig.39 SK2出土状況図・平面図・エレベーション図

SK3 (fig. 40)

調査区の東部に位置する。SB2のP9を切っている。平面形態は隅丸方形を呈し、南辺はやや張り出す。規模は一辺1m10cmを測る。主軸方向はN-4°-Wである。底面は弱い凹面を成し、検出面からの深さは20cmである。遺構埋土は灰色土である。

出土遺物として図示できるものは10点(fig. 40-1~10)である。1は磁器染付碗であり、瀬戸・美濃産19世紀。2・7は磁器の染付端反り形碗であり、19世紀。3は磁器の碗である。4は陶器の端反り形の皿であり、19世紀。5は陶器端反り形の皿であり、19世紀。6は磁器の染付徳利であり、18世紀後半から19世紀の肥前産。8は陶器の急須と考えられ、近代初頭ののものか。9は陶器の爛徳

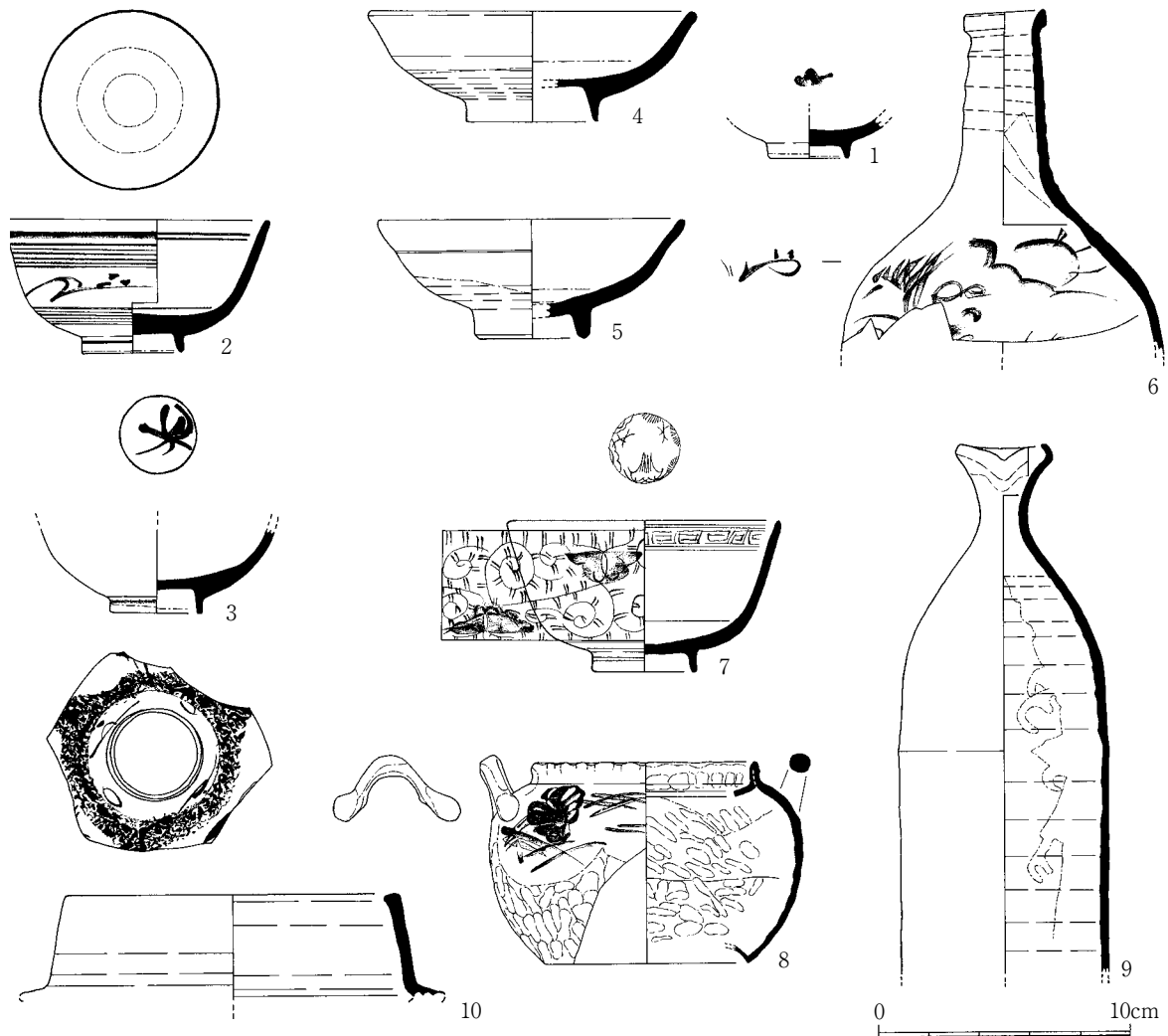
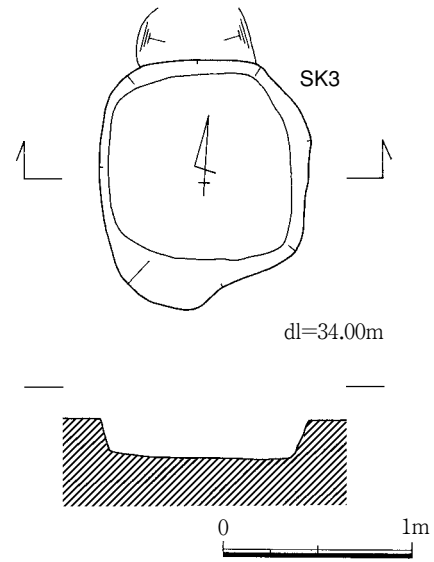


fig.40 SK3平面図・エレベーション図・出土遺物実測図

利であり、19世紀。10は土師質土器の壺か羽釜と考えられる。その他に細片として陶器1点、土師質土器2点、瓦1点とガラス片が存在している。

SK3の帰属時期は近代に成るものと考えられる。

SK4 (fig. 41)

調査区の西部北側に位置する。平面形態は概ね隅丸長方形を呈するが、南西部分の隅角部は不明瞭である。主軸方向は $N-1^{\circ}-W$ であり、規模は長軸1m41cm、短軸96cmを測る。底面は平らな面を成し、検出面からの深さは12cmである。遺構埋土は暗灰色土であり、床面直上に5cm~20cm大の円礫が多く存在している。

出土遺物として図示できるものは無く、細片として肥前産の青磁1点、陶器4点、瓦2点が存在している。

时期的な限定はし難いが18~19世紀のものと考えられる。

SK5 (fig. 43)

調査区の東部に位置する。遺構の東端部と東南部分で黄色土混入の暗灰色土を埋土とする柱穴により切られる。平面形態は不整形を呈し、規模は一辺約1m50cmを測る。主軸方向は $N-33^{\circ}-E$ である。底面は鍋底状であり、西部に浅い窪みが存在するが検出面での切り合いは認められない。検出面からの深さは25cmである。遺構埋土は黒色土である。

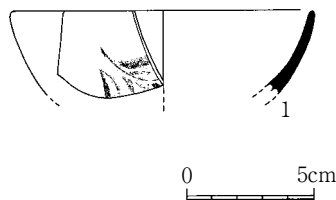


fig.42 SK5出土遺物実測図

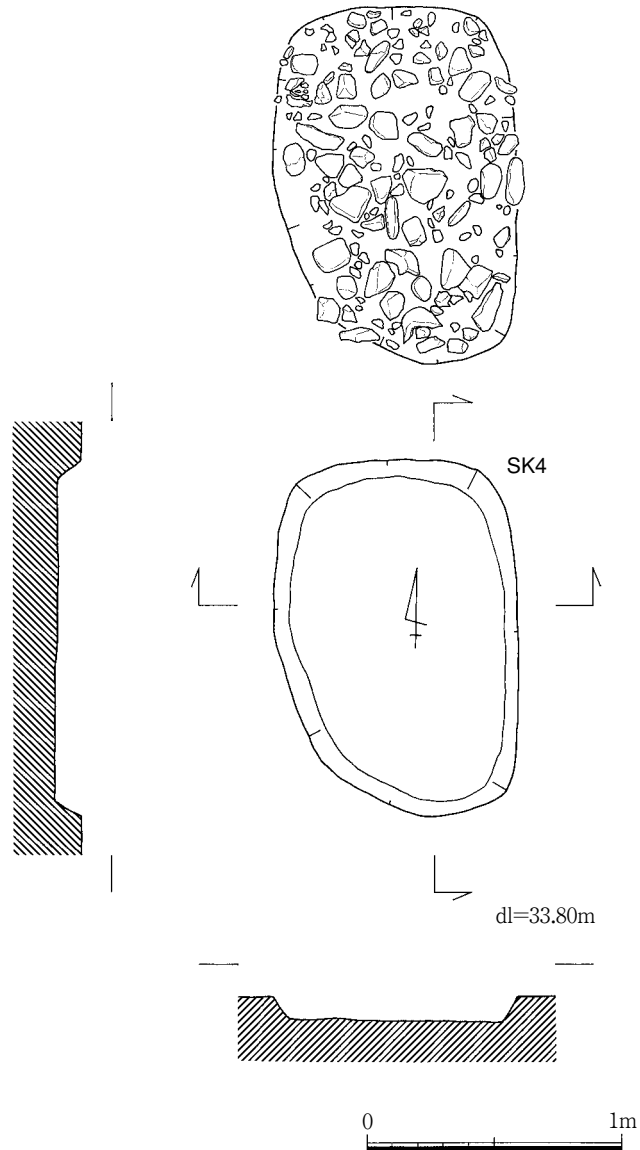


fig.41 SK4出土状況図・平面図・エレベーション図

出土遺物として図示できるものは1点(fig. 42-1)である。1は磁器染付の碗である。この他に細片として磁器1点、陶器4点が存在する。

SK5の帰属時期は18世紀代と考えられる。

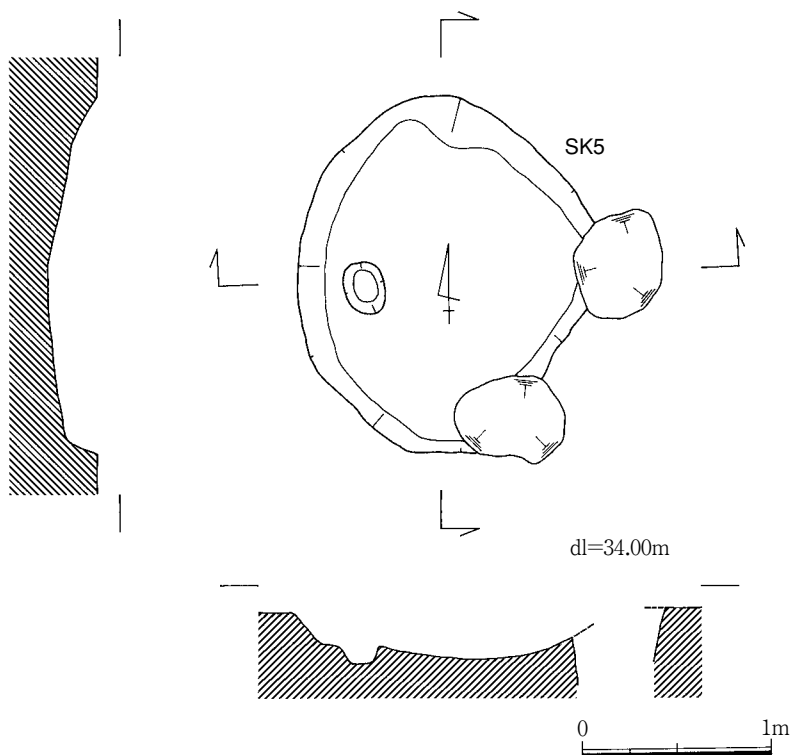


fig.43 SK5平面図・エレベーション図

SK6 (fig. 44)

調査区の東部に位置する。遺構の中央部分で黄色土混入の暗灰色土を埋土とする柱穴3個により切られる。平面形態は不整楕円形を呈し、規模は長径2m20cm、短径1m25cmを測る。主軸方向はN-83°-Wである。底面は弱い凸面を成し東壁は緩やかに立ち上がる。検出面からの深さは8cm~13cmである。遺構埋土は暗褐色土であり、小礫を多く含む。

出土遺物として図示できるものは1点(fig. 44-1)である。1は肥前産の青磁香

炉である。この他に細片として磁器1点、陶器2点、土師質土器2点が存在する。

SK6の帰属時期は18世紀前半と考えられる。

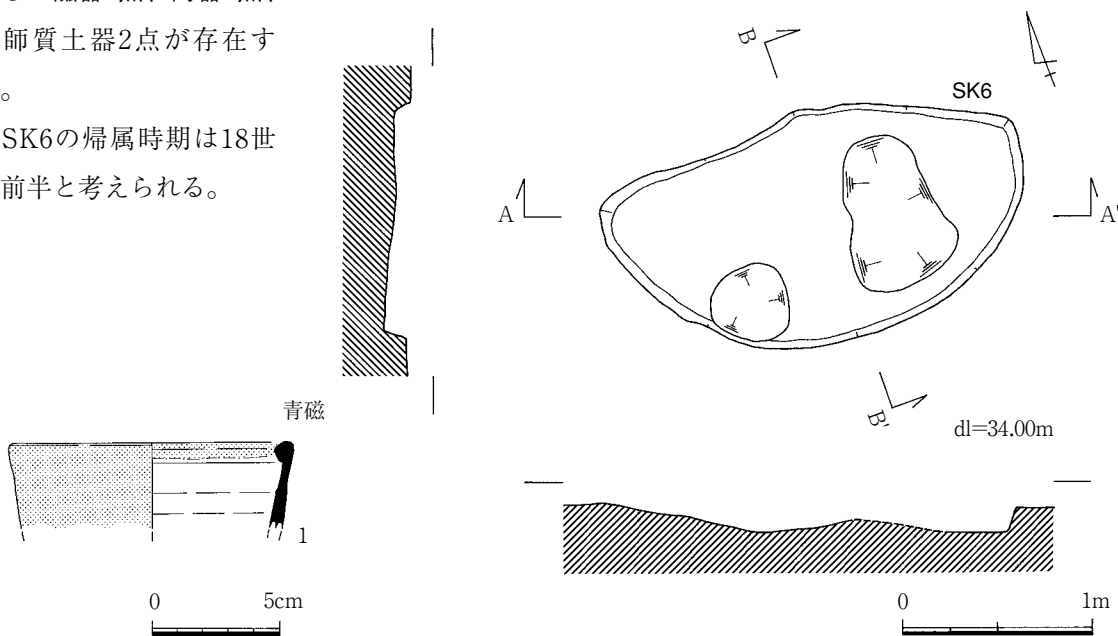


fig.44 SK6平面図・エレベーション図・出土遺物実測図

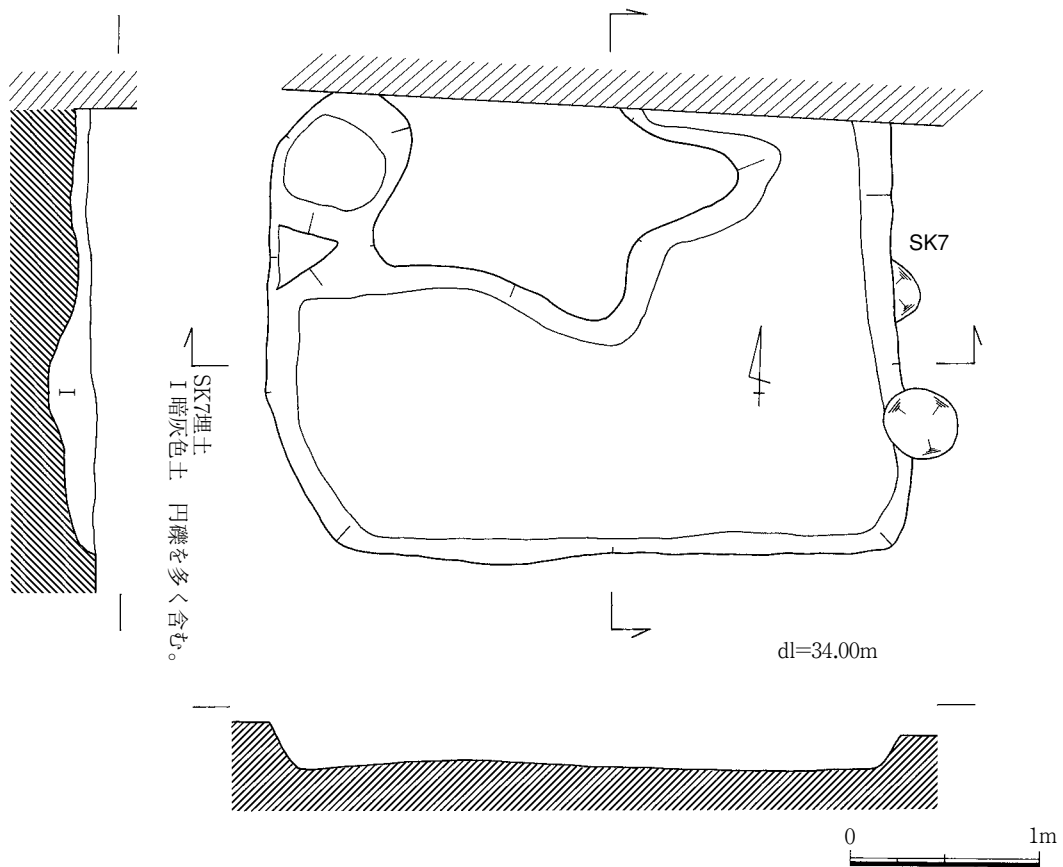


fig.45 SK7平面図・セクション図・エレベーション図

SK7 (fig. 45)

調査区の東部東端に位置する。土坑の北部は調査区の北壁によって隔されている。東端部で暗灰色土を埋土とする柱穴に切られ、西部ではSK16とSD1を、また中央部分では区画溝と考えられるSD2を切っている。平面形態は隅丸長方形を呈すと考えられ、残存規模は長辺3m、短辺2m40cmを測る。主軸方向はN-90°Eである。底面には緩やかな起伏が存在しており、北部はやや高い台状を成している。検出面から床面までの深さは7cm~25cmである。遺構埋土は暗灰色土単純一層であり、円礫が多く含まれる。

出土遺物として図示できるものは14点(fig. 46-1~14)である。1~12は土師質土器の小皿である。器高の低いもの(1~10)の内、口径が小さいもの(1~6)と口径のやや大きいもの(7~10)が存在する。また、器高の高いもの(11・12)は器壁がやや厚い。煤の付着は1・3~9・12に認められる。13は陶器の碗であり、信楽産か。14は陶器の播鉢であり、堺・明石系のものと考えられる。その他に細片としては磁器11点、陶器25点、土師質土器73点、瓦1点が出土している。

SK7の帰属時期は18世紀末から19世紀か。

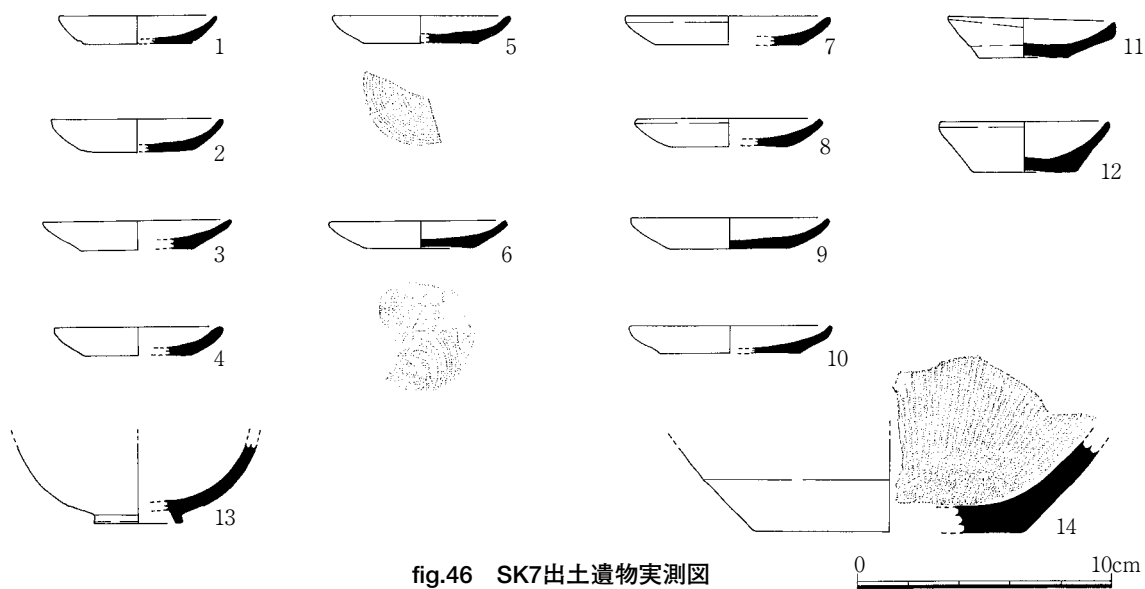


fig.46 SK7出土遺物実測図

SK8 (fig. 47)

調査区の東部中央に位置する。遺構の東部で黄色土混入の暗灰色土を埋土とする柱穴によって切られる。又、北部には東西方向の溝SD3が存在するが遺構埋土が共に暗灰色であることから、両者は同時期に機能していた可能性が強い。平面形態は不整楕円形を呈し、規模は長径3m50cm、短径2m10cmを測る。主軸方向はN-90°-Eである。底面には弱い凹凸が見られ、東部には低い段部が存在する。検出面からの深さは5cm~20cmである。

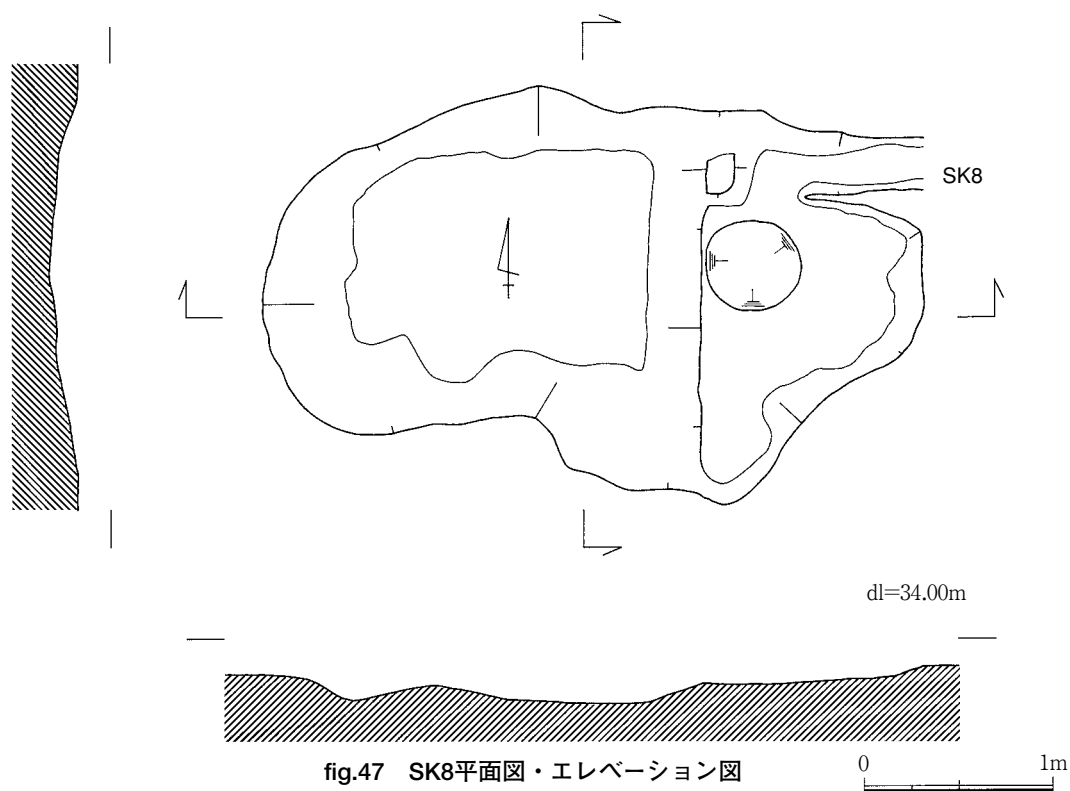


fig.47 SK8平面図・エレベーション図

出土遺物は皆無である。

SD3に関わる溝の帰属時期が18世紀代と考えられることから、SK8も同時期のものか。

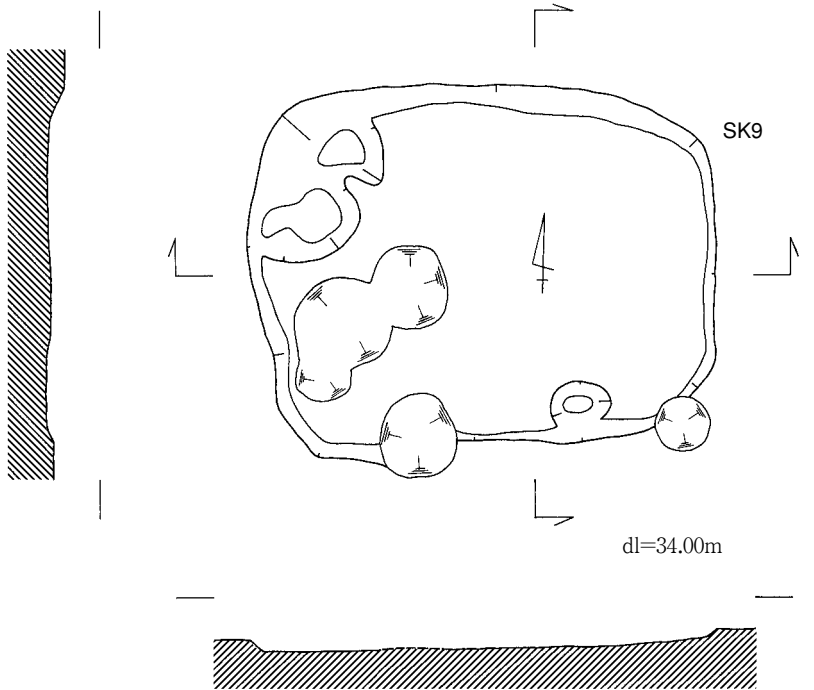


fig.48 SK9平面図・エレベーション図

SK9 (fig. 48)

調査区の東部に位置する。遺構は黄色土混入の暗灰色土を埋土とする柱穴によって数カ所で切られる。平面形態は隅丸長方形を呈す。規模は長軸2m44cm、短軸1m86cmを測る。主軸方向はN-90°Eである。底面は概ね平らであるが北西隅と南東部に床面から深さ10cm～15cmの窪みが存在する。検出面から床面までの深さは5cm～8cmである。遺

構埋土は暗灰色土単純一層である。

出土遺物として図示できるものは土師質の小皿2点(fig. 49-1・2)である。そ

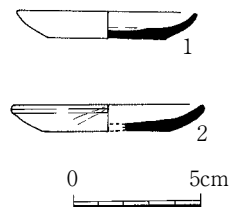
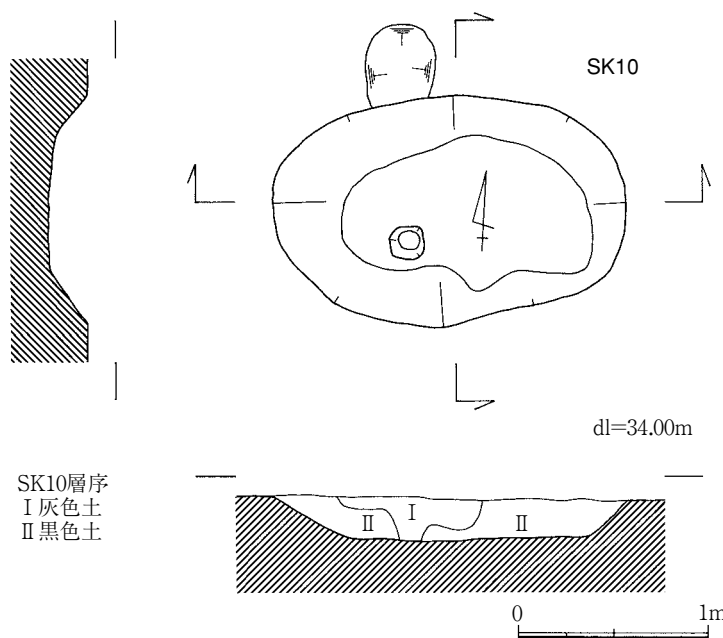


fig.49 SK9
出土遺物実測図



SK10層序
I 灰色土
II 黒色土

fig.50 SK10平面図・セクション図・エレベーション図

他細片として磁器5点、陶器4点、土師質土器10点である。出土細片の中に能茶山産磁器が含まれることから19世紀代には機能を終了したものと考えられる。

SK10 (fig. 50)

調査区の東部に位置する。遺構北側に存在する黄色土混入の暗灰色土を埋土とする柱穴を切ってい

る。平面形態は楕円形を呈し、規模は長径1m86cm、短軸1m22cmを測る。主軸方向はN-86°-Eである。底面は概ね平らであるが、南西部に床面から深さ10cm程の窪みが存在する。又、壁の立ち上がりは緩やかである。検出面から床面までの深さは24cmである。遺構埋土は灰色土と黒色土である。

出土遺物は皆無である。

SK11 (fig. 51)

調査区の東部に位置する。平面形態は不整形であり、規模は長軸1m70cm、短軸1m56cmを測る。主軸方向はN-5°-Eである。底面は平らであり、西壁は緩やかに立ち上がる。検出面からの深さは6cm~8cmである。遺構埋土は黒色土単純一層である。

出土遺物は皆無である。

SK12 (fig. 52)

調査区の東部南端に位置する。平面形態は隅丸長方形を呈すると考えられるが、調査区の南壁に隔されており、全体規模を認めることはできない。長軸方向はN-84°-Eであり、確認規模は長軸1m20cm、短軸84cmを測る。底面は

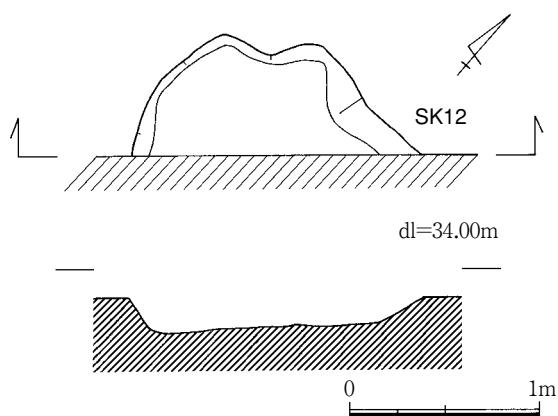


fig.52 SK12平面図・エレベーション図

個によって切られている。土坑本体の枠部分は平面形態円形を呈し、規模は直径1m20cmを測り、黄色土による枠は厚さ約5cmで周囲を巡る。掘り方部分は平面形態不整楕円形を呈し、規模は長径1m80cm、短径1m70cmを測る。底面は鍋底状を呈し、検出面からの深さは33cmである。遺構埋土は

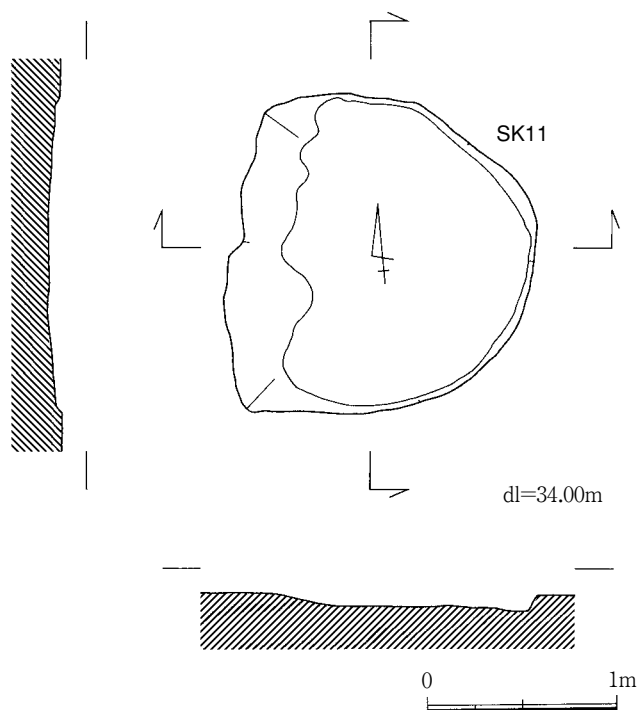


fig.51 SK11平面図・エレベーション図

西方へ下る緩い傾斜面を成すが、概ね平らで検出面からの深さは13cm~19cmである。遺構埋土は主に暗灰色土である。

出土遺物は皆無である。

SK13 (fig. 53)

調査区の東部北側に位置する。黄色土による枠を底部と壁に持つが、調査時点では壁は殆どが崩落しており、底部に15cm程度の立ち上がりを留めるに過ぎない。後世の柱穴によってこの枠は一部破壊されており、掘り方の上端を柱穴2

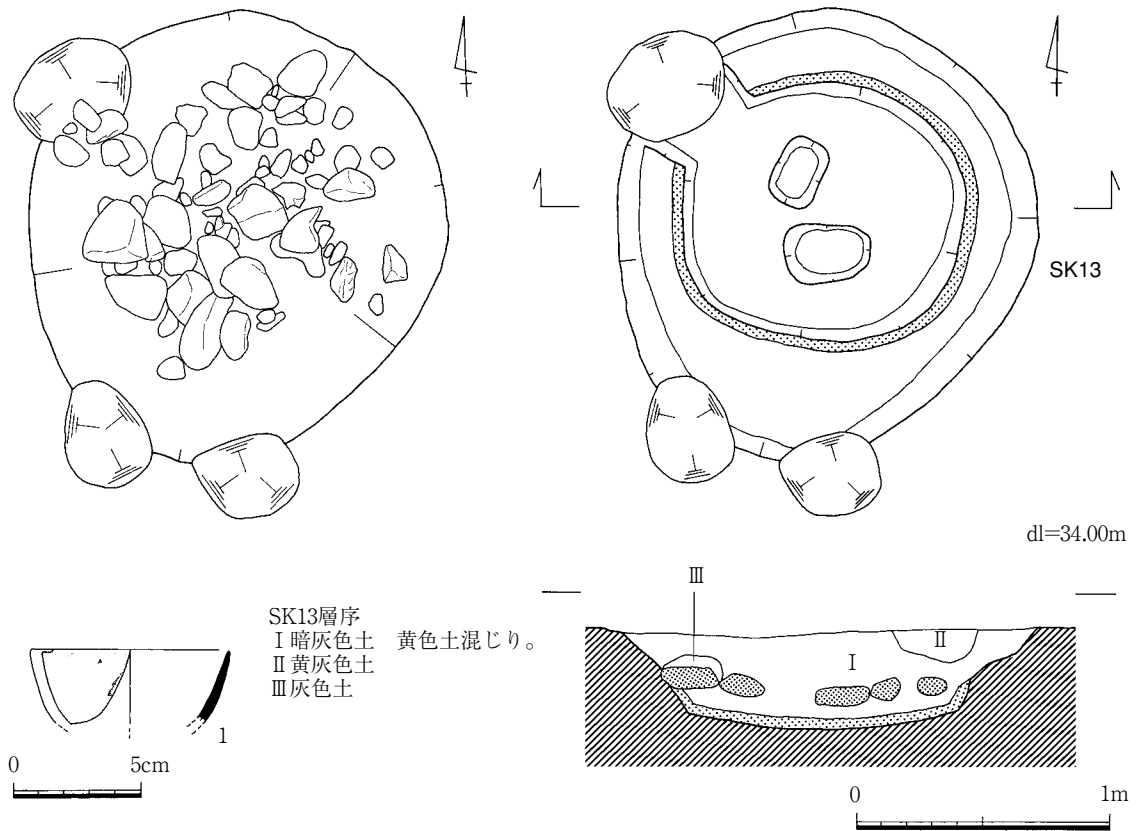


fig.53 SK13出土状況図・平面図・セクション図・出土遺物実測図

3つの層によって形成されているが、主に暗灰色土によるI層が存在し、ここには拳大から人頭大の円礫と共に杵を構成していた黄色土が含まれている。土坑廃棄に際して杵を破壊して、円礫を放り込んだものと考えられる。

出土遺物の中で図示できるものは1点(fig. 53-1)のみである。1は磁器の染付碗であり、肥前産と考えられる。その他細片として磁器2点、陶器4点、須恵器1点、土師質土器3点が出土しているが、この中には瀬戸・美濃産の天目碗破片も含まれている。

遺構廃棄時期は18世紀末であろうか。

SK14 (fig. 54・55)

調査区の東部北側に位置する。黄色土の杵が約5cmの厚味をもって存在し、壁の検出面付近では厚味を増して15cm程度となる。また、この杵の外側には不完全ではあるが拳大の円礫が環状に存在しており、杵を外側から安定させるものと考えられる。平面形態は不整方形を呈し、規模は一辺約1m15cmを測る。主軸方向はN-9°Wである。底部は弱い鍋底状を呈し、中央部分の深さは検出面から33cmである。遺構埋土は灰色土であり、

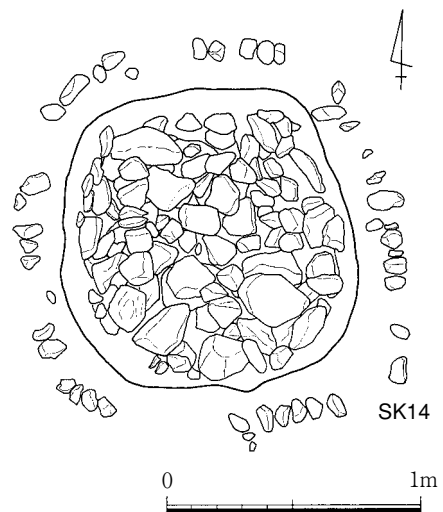


fig.54 SK14出土状況図

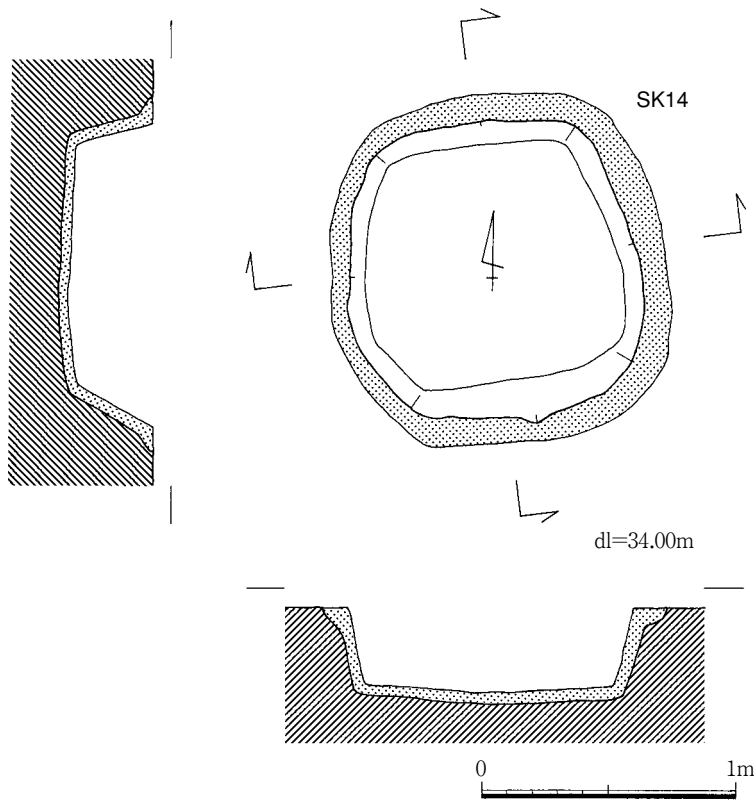


fig.55 SK14平面図・エレベーション図

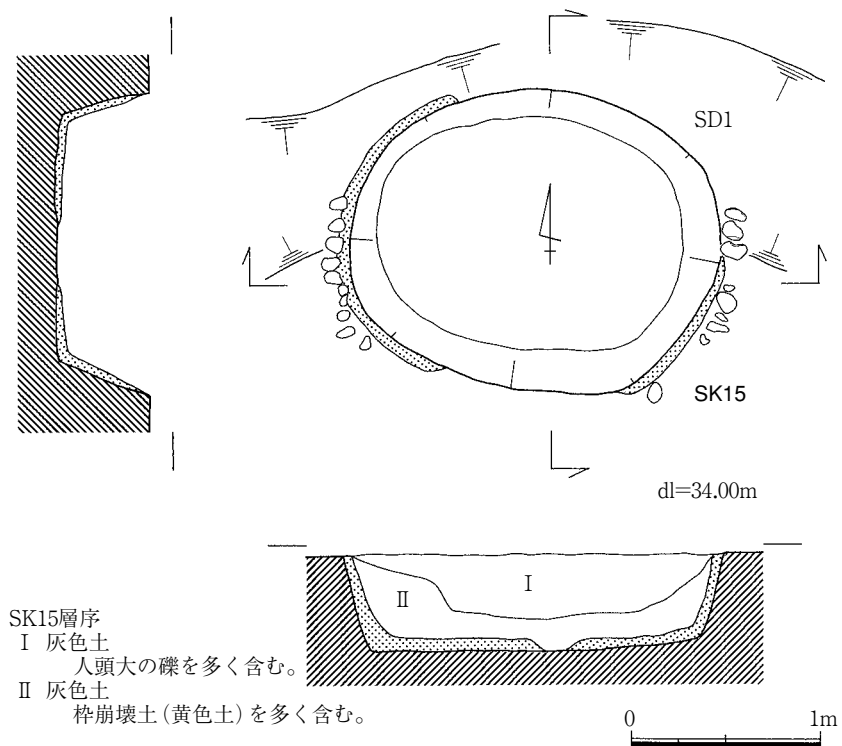
拳大から人頭大の円礫が非常に多く存在する。出土遺物として図示できるものは無い。細片としては肥前産の陶胎染付が1点存在している。

調査区の東部北側に位置する。遺構プランの半分以上がSD1を切っている。黄色土による幅約5cmの枠を底部と壁に持っている。又、枠の外側には部分的に拳大の円礫が環状に巡る。土坑本体の平面形態は楕円形を呈し、規模は長径2m、短径1m60cmを測る。長軸方向はN-82°-Wである。底部は概ね平らであるが、中央部分では枠が欠損している。検出面からの深さは42cm～48cmである。枠を持った土坑群の中では比較的規模の大きなものである。遺構埋土は二層で構成されており、下位の灰色土層(II層)には枠崩壊土が多く存在することから、枠は検出面よりも高く造られていた可能性がある。上位埋土である灰色土層(I層)には人頭大の円礫が多く含まれていた。

出土遺物の中で図示できるものは無い。細片として陶器2点、瓦1点が存在している。

SK16 (fig. 57)

調査区の東部北側に位置する。SK16-2の一部を破壊しており、廃棄的性格の土坑(SK7)に上面では切られて存在した。平面形態は東側に一部突出する箇所が見



SK15層序
 I 灰色土
 人頭大の礫を多く含む。
 II 灰色土
 枠崩壊土(黄色土)を多く含む。

fig.56 SK15平面図・セクション図・エレベーション図

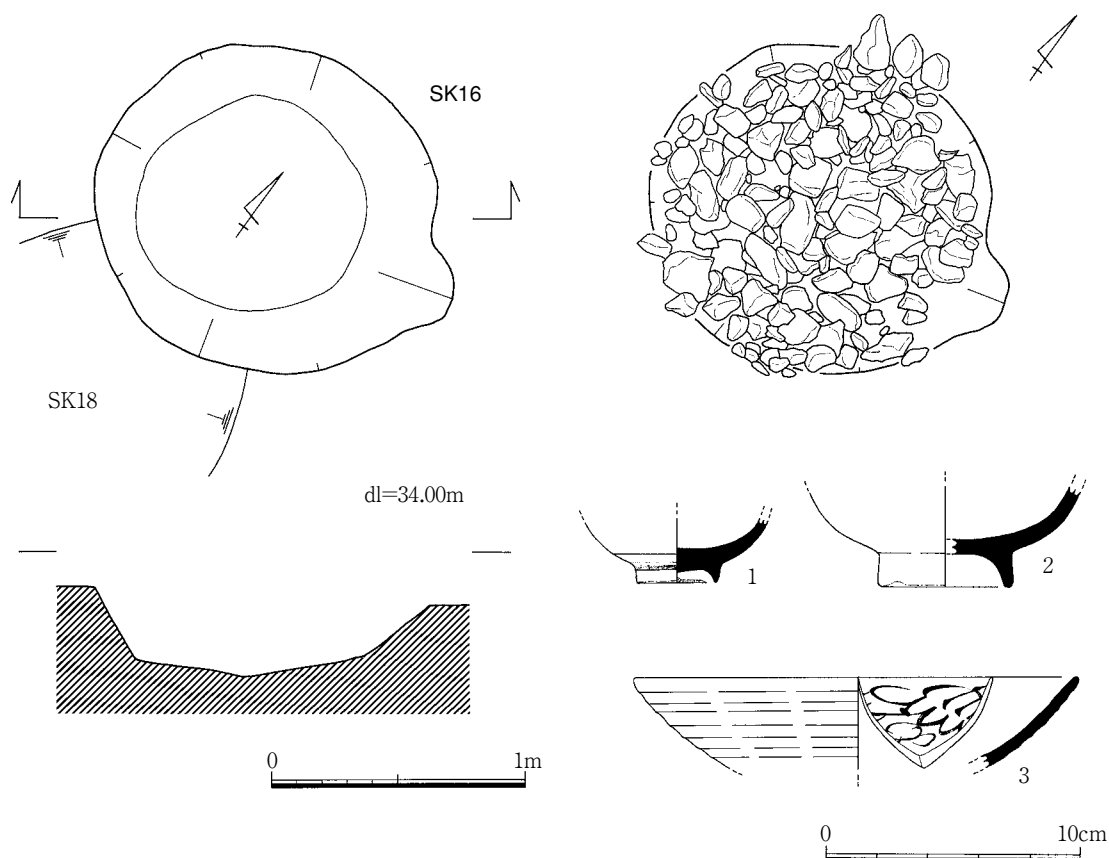


fig.57 SK16出土状況図・平面図・エレベーション図・出土遺物実測図

られるものの、ほぼ円形を呈する。規模は直径約1m30cmである。底面は鍋底状を呈し、壁はやや緩やかに傾斜をする。検出面からの深さは38cm～48cmである。遺構埋土は暗褐色土であり、人頭大の円礫を多量に、また黄色土ブロックを含むものである。埋土上部は暗褐色土や暗灰色土の混入が見られた。SK16については黄色土の存在は確認できない。土坑の廃棄に際しては円礫を放り込んだものと考えられる。

出土遺物の中で図示できるものは土器3点(fig. 57-1～3)と銅銭1点(fig.170-9)が存在する。1は磁器の染付碗であり、波佐見産か。2は陶器で呉器形の碗、尾戸又は肥前の製品で18世紀。3は磁器染付皿である。また銅銭は古寛永である。その他に細片として陶器4点、須恵器1点、土師質土器1点が存在している。

土坑の機能時期は18世紀と考えられ、土壙の可能性を持つ。

SK16-2 (fig. 58)

調査区の東部に位置する。北側に存在するSK16によって切られている。SK16構築以前にSK16-2は埋められていたと考えられ、土坑上位もSK16に伴う掘り方によって破壊を受けた様である。平面形態は円形又は楕円形を呈すると考えられ、規模は直径約1m20cmを測る。底面はほぼ平らであり、検出面からの深さは12cm～15cmである。

遺構埋土は暗灰色土である。

出土遺物は皆無である。

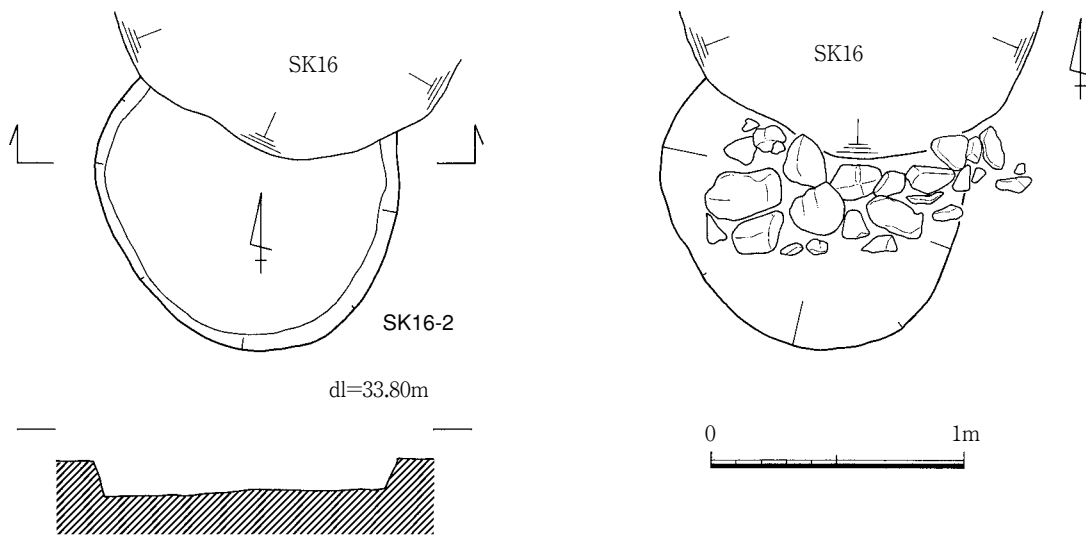
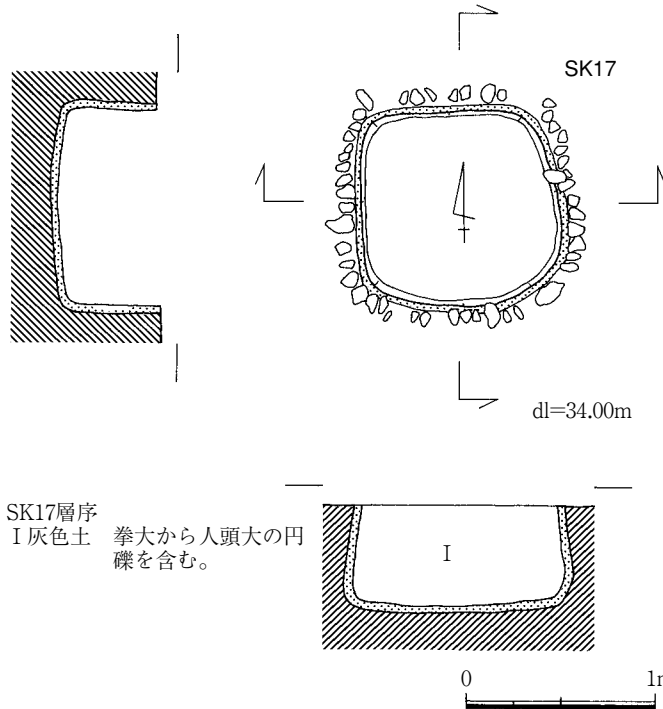


fig.58 SK16-2出土状況図・平面図・エレベーション図

SK17 (fig. 59)

調査区の東部に位置する。黄色土による幅約5cmの枠を底面と壁に持ち、枠の外側には拳大の円礫が列石を成す。平面形態は隅丸方形を呈し、規模は一辺1m10cmを測る。主軸方向はN-3°Wである。底部はほぼ平らで、壁はやや内傾する。遺構埋土は灰色土で、ここには拳大から人頭大の円礫が含まれていた。



出土遺物の中で図示できるものが3点 (fig. 59-1~3)存在する。1は磁器の蓋皿

SK17層序
I 灰色土 拳大から人頭大の円礫を含む。

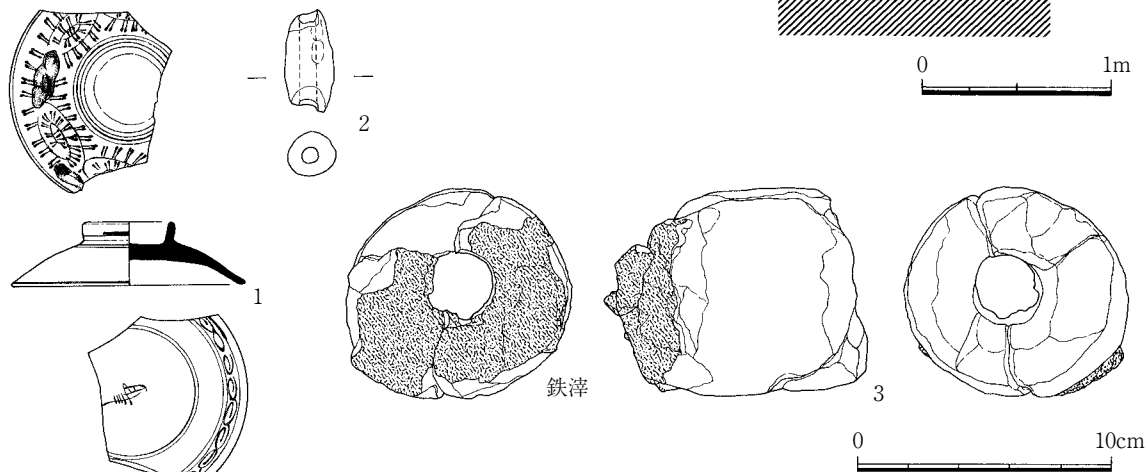


fig.59 SK17平面図・セクション図・エレベーション図・出土遺物実測図

で、瀬戸・美濃産19世紀。2は土錘である。3は鞆羽口吹き口部分であり、砂岩製で端部には鉄滓が熔着する。その他に細片として磁器7点、陶器15点、土師質土器3点が存在している。

19世紀中頃に機能時期を考える。

SK18 (fig. 60)

調査区の東部中央に位置する。黄色土による幅5cmの枠を壁のみに持つ。土坑本体の平面形態は円形を呈し、規模は1m30cmを測る。底面は弱い凸面を成し、検出面からの深さは50cm～56cmである。SK18に於いて枠の構築は、先ず断面形逆台形に大きく掘り込み、床面を平らに仕上げる。底面に拳大の円礫と暗灰色土を用いて枠の土台を造り、この上に黄色土による枠を構築する。枠の内面中位に細い窪みが巡ることから、容器状内部構造を持つか構築段階で内側に型を当てた可能性がある。最後に枠の背後に円礫と灰色土(埋土I層)が充填される。土坑本体の外側に存在する掘り方部分は、平面形態不整長方形を呈し、規模は長軸2m20cm、短軸2mを測る。土坑本体の埋土は黄色土の混入した暗灰色土であり、この層の低位には5cm～20cm大の円礫が多く含まれていた。

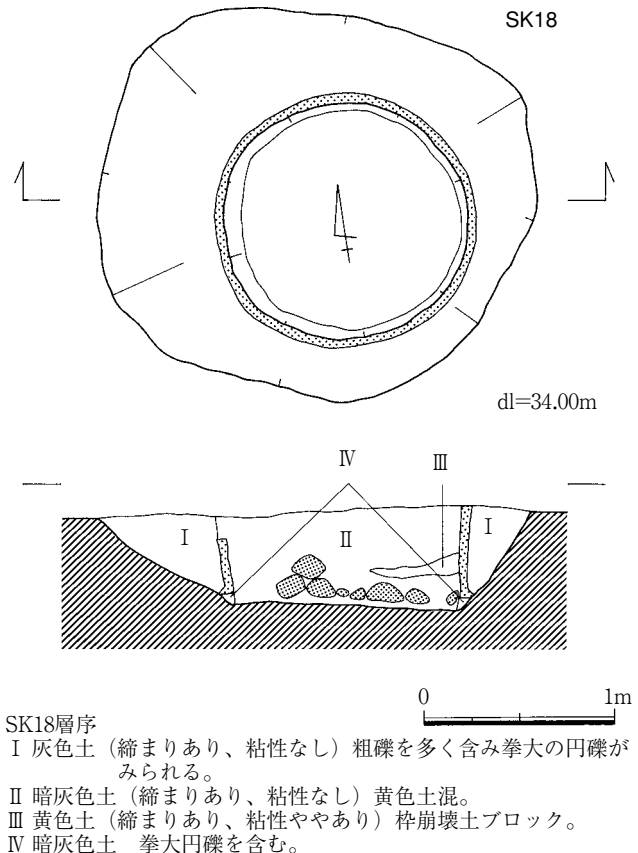


fig.60 SK18平面図・セクション図

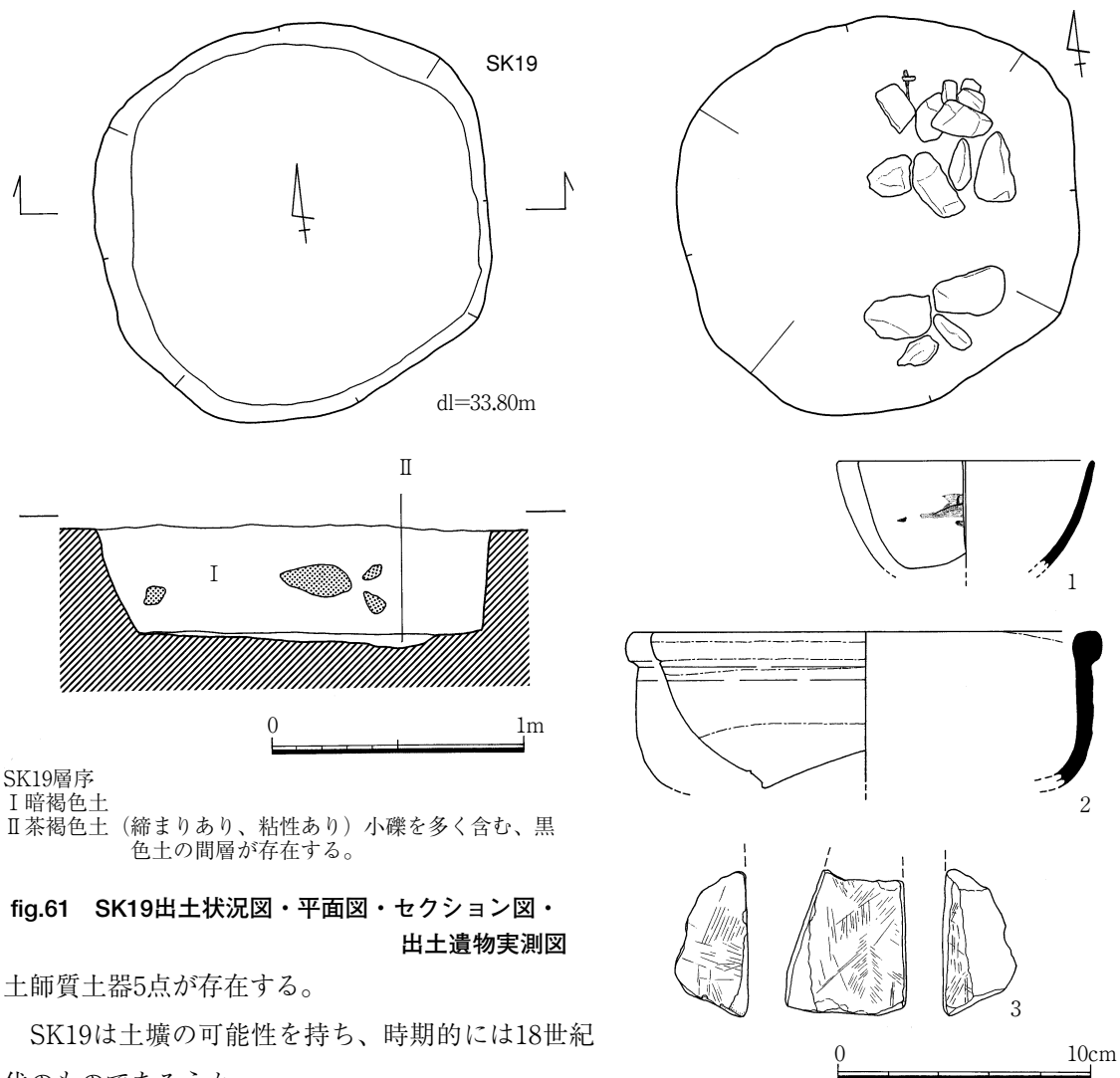
出土遺物の中で図示できるものは無い。細片として掘り方部分では磁器1点、陶器1点、土師質土器1点があり、土坑本体からは磁器2点、陶器2点、土師質土器1点が存在する。

SK18の帰属時期は18世紀末乃至19世紀初頭から19世紀中頃までと考えられる。

SK19 (fig. 61)

調査区の東部南側に位置する。平面形態は不整円形を呈し、規模は直径1m60cmを測る。底面は茶褐色土(埋土II層)により概ね平滑に仕上げられており、壁は急に立ち上がる。検出面からの深さは40cmである。遺構埋土は主に暗褐色土であり、床面上に30cm大の円礫が存在する。底面の整形に用いられたと考えられる暗褐色土は厚さ2～3cmであり、SK19が掘削されている土壌が黒色土を含む比較的柔らかな部分であることを考慮して施された可能性がある。

出土遺物の中で図示できるものは3点(fig. 61-1～3)である。1は磁器染付碗であり、肥前産。2は陶器の鉢である。3は泥岩製の砥石である。その他に出土遺物としては鉄製品1点、磁器1点、陶器3点、



SK19層序
 I 暗褐色土
 II 茶褐色土 (縮まりあり、粘性あり) 小礫を多く含む、黒色土の間層が存在する。

fig.61 SK19出土状況図・平面図・セクション図・
 出土遺物実測図

土師質土器5点が存在する。

SK19は土壌の可能性を持ち、時期的には18世紀代のものであろうか。

SK20 (fig. 62)

調査区の東部南側に位置する。北側でSK24を切っており、南西端を後世の柱穴によって切られている。SK19の北西に隣接して存在する土坑であり、規模や検出状態が相似通っていることから、同様な時期に存在し、同じ性格を持つものであろうか。平面形態は楕円形を呈し、規模は長径1m70cm、短径1m42cmを測る。底面は概ね平らであるが北側から西側の壁に沿って床面との比高差が最大10cmの段部が存在する。検出面からの深さは土坑中央部で46cmである。底面には直径1m15cmの環状に、幅4cm、床面からの深さ4cmを測る細い溝が存在している。桶状の埋葬具底部圧痕であろうか。遺構埋土は暗褐色土単純一層であり、床面上に30cm大の円礫が数個存在している。

出土遺物の中で図示できるものは無い。細片としては磁器1点、陶器2点、土師質土器4点が存在している。

SK20は土壌の可能性があり、18世紀末以降のものか。

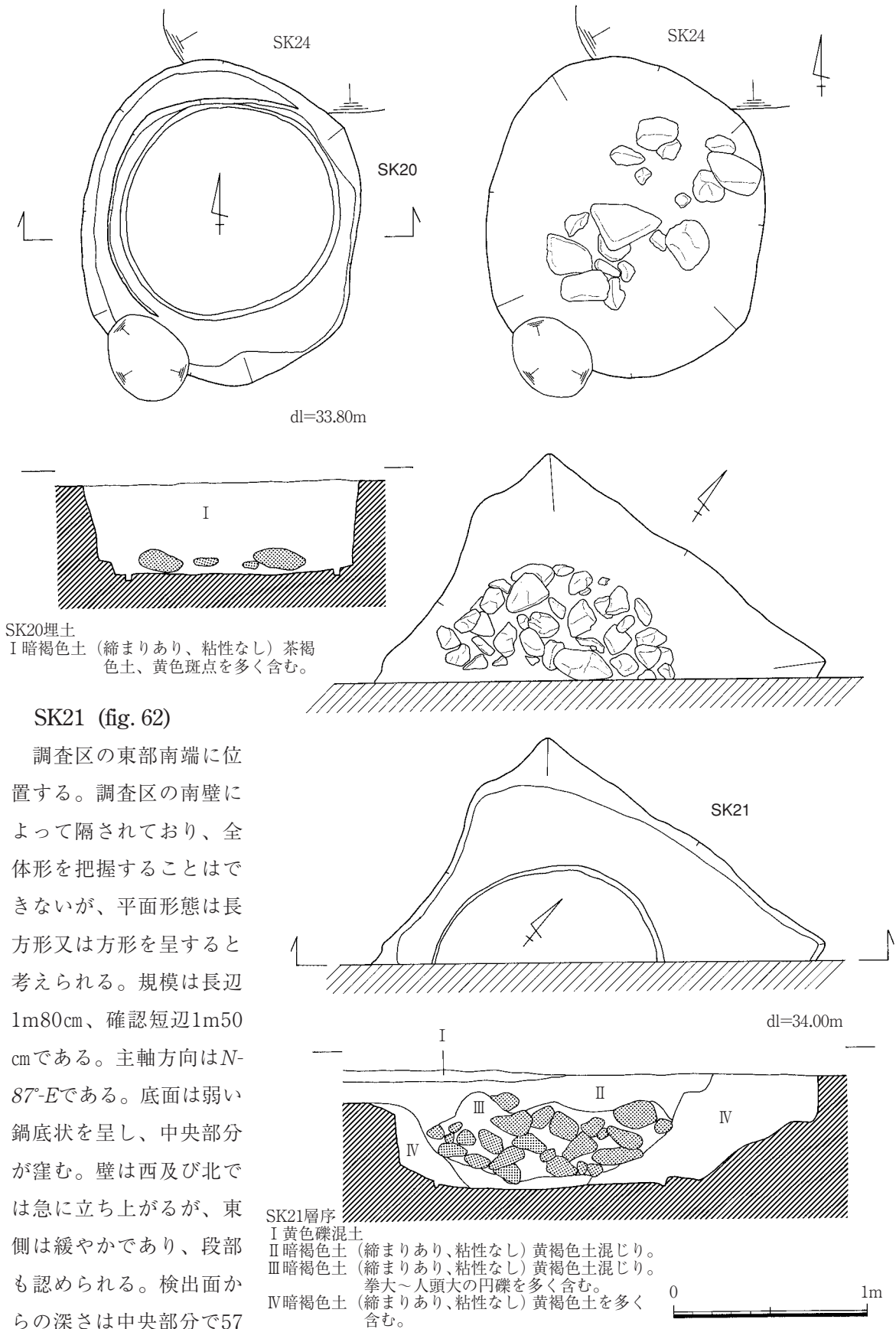


fig.62 SK20・SK21出土状況図・平面図・セクション図

cmである。底面には直径1m20cmの環状に、幅4cm、床面からの深さ4cmの細い溝が存在する。SK20と同様、桶状の埋葬具底部痕跡であろうか。遺構埋土は暗灰色系の土が存在するが、中央部分(環状の小溝が存在する部分)には10cm~20cm大の円礫が集中している。

出土遺物の中で図示できるものは無い。細片としては磁器1点と陶器1点が存在している。

SK21は土壌の可能性があり、19世紀代のものか。

SK22 (fig. 63)

調査区の東部南端に位置する。西端部を黄色土混じりの暗灰色土を埋土とする柱穴によって切られている。調査区の南壁によって隔されており、全体形を把握することはできないが、平面形態は隅丸長方形を呈すると考えられる。確認規模は長辺3m30cm、短辺1m60cmを測る。長軸方向はN-82°Eである。底面は中央部がやや窪み、緩やかな起伏が見られる。検出面からの深さは40cmである。遺構埋土としては2層が存在し、上位の黒色土層は北接して存在するSK23と埋土を同じくする。この二つの遺構はSK22がやや先行して存在したと考えられるが、切り合いは認められない。

出土遺物として図示可能なものは、上の2基の遺構に亘って存在する埋土I層から出土した1点(fig.151-1)のみである。1は土師質の小皿である。口縁部に煤が付着することから灯明具として使用したのか。その他細片としては土師質土器2点が存在する。

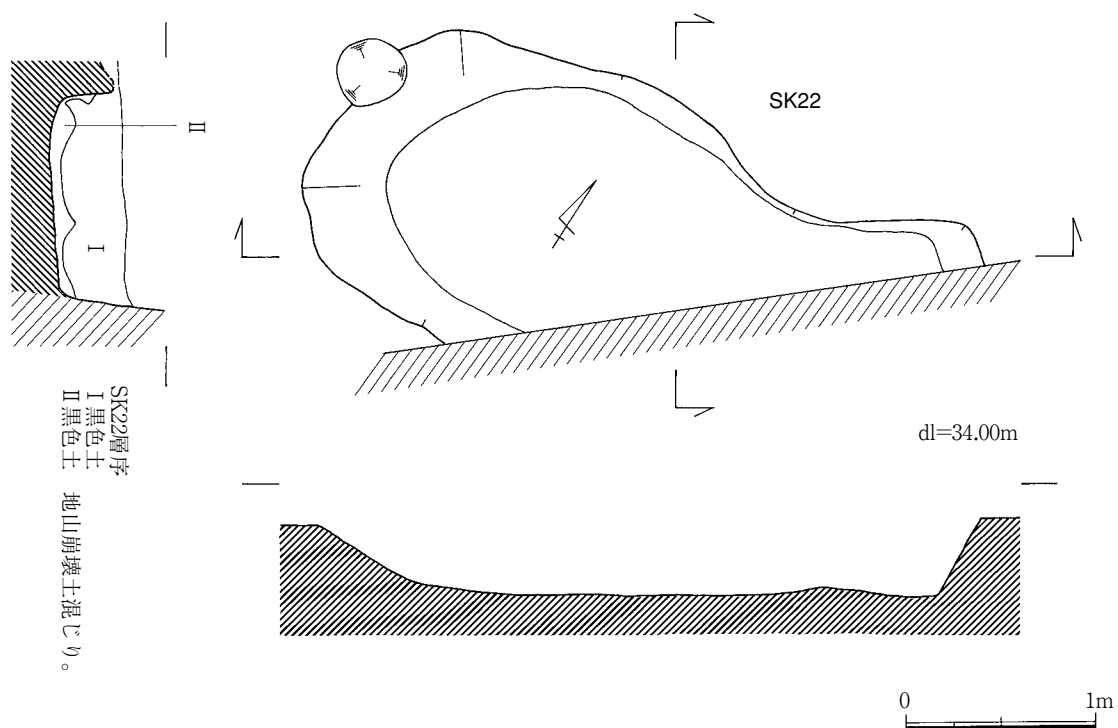


fig.63 SK22平面図・セクション図・エレベーション図

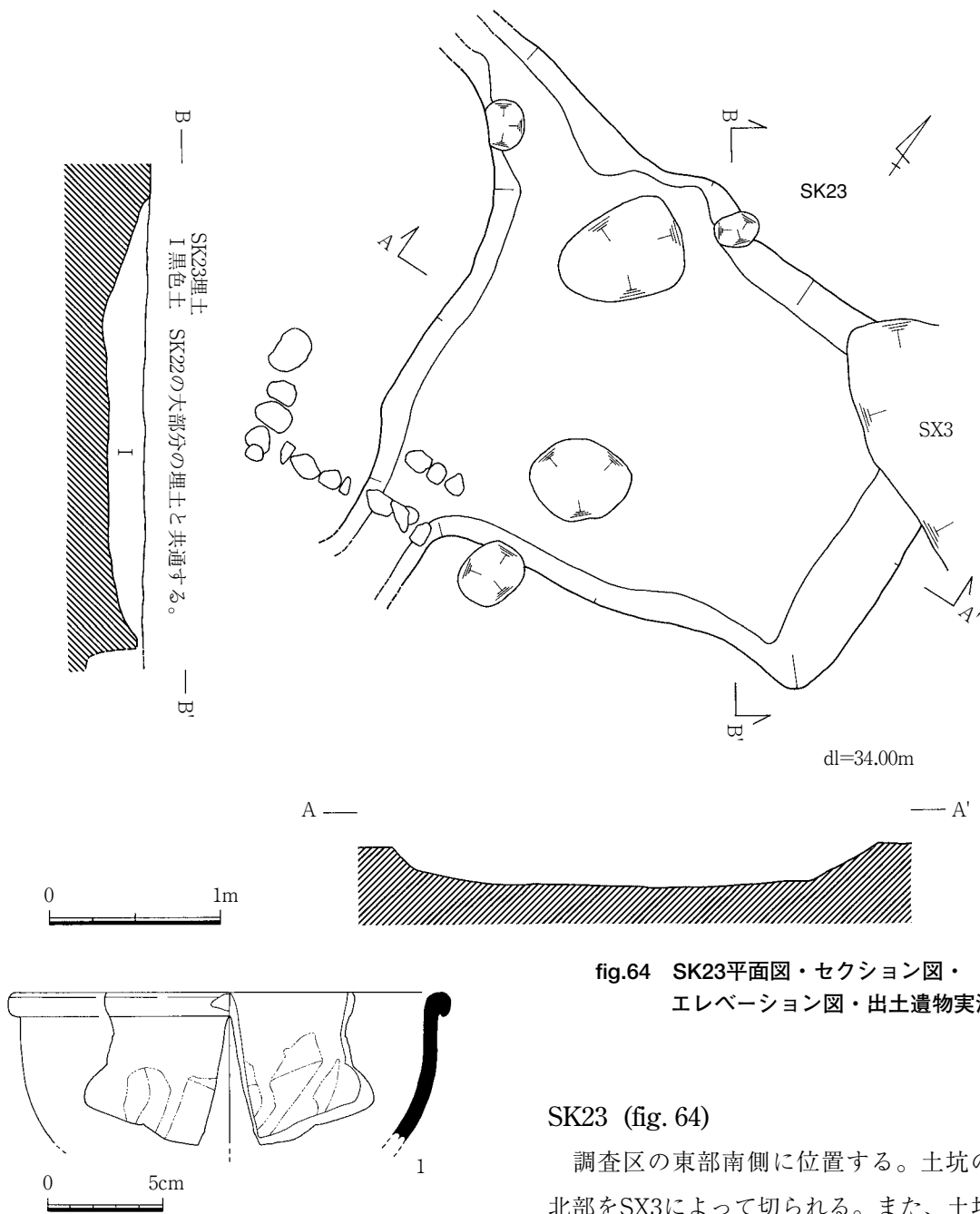


fig.64 SK23平面図・セクション図・
エレベーション図・出土遺物実測図

SK23 (fig. 64)

調査区の東部南側に位置する。土坑の東北部をSX3によって切られる。また、土坑内の数カ所を黄色土混入の暗灰色土を埋土とする

柱穴群によって切られる。平面形態は明確にし得ないが、北西側と南西側には幅40cmと幅50cmの溝状遺構が存在し、本土坑に連なる可能性がある。

また、SK23南西側には本土坑に関わると考えられる逆L字状の石列が存在している。この石列は5cm~20cm大の円礫によって構成されており、先述の南西側に連なると考えられる溝に直行する。土坑主体部は長辺3m、短辺2m30cmの規模を持つ長方形を呈する。底面は凹面を成し、壁は緩やかに立ち上がる。検出面からの深さは24cmである。遺構埋土は黒色土であり、これはSK22の主な埋積土と共通することから、同時期に放棄された可能性が高い。

出土遺物の中で図示できるものは1点(fig. 64-1)である。1は陶器の鉢である。細片として土師質土器が1点存在する。

SK24 (fig. 65)

調査区の東部に位置する。南西部分をSK20によって切られている。平面形態は隅丸長方形を呈し、各辺は外側への膨らみを持つ。規模は長辺1m80cm、短辺1m10cmを測り、主軸方向はN-75°Eである。底面は緩やかな凹面を成し、検出面からの深さは46cmを測る。遺構埋土は暗灰色土単純一層であり、検出面では円礫の存在を認め得ないが、床面上からは拳大～人頭大の円礫が

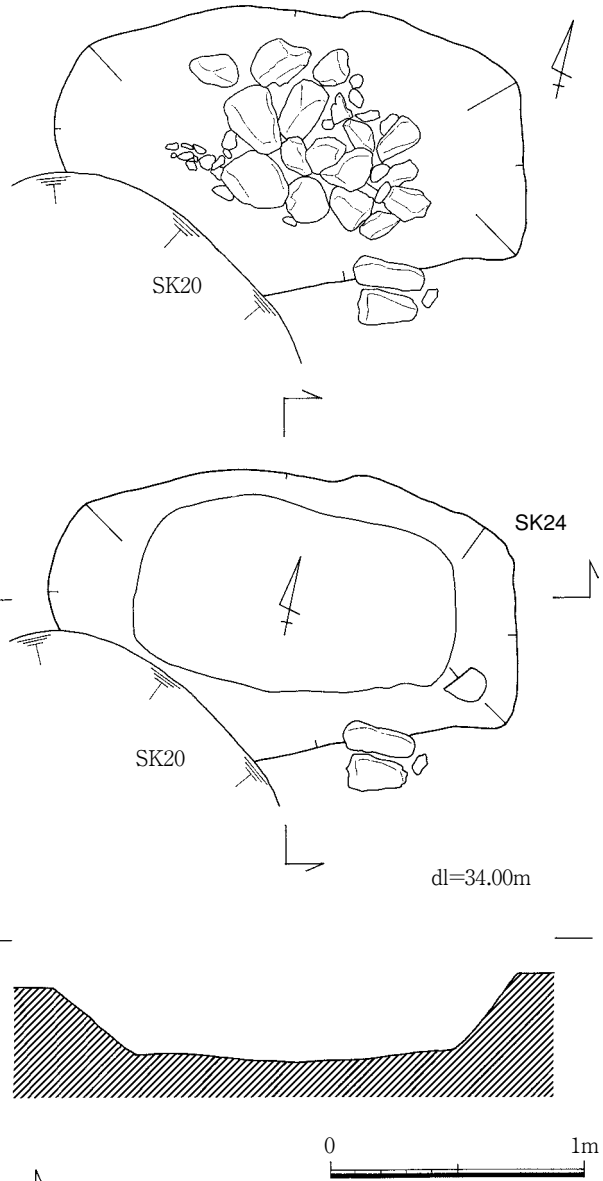


fig.65 SK24出土状況図・平面図
・エレベーション図

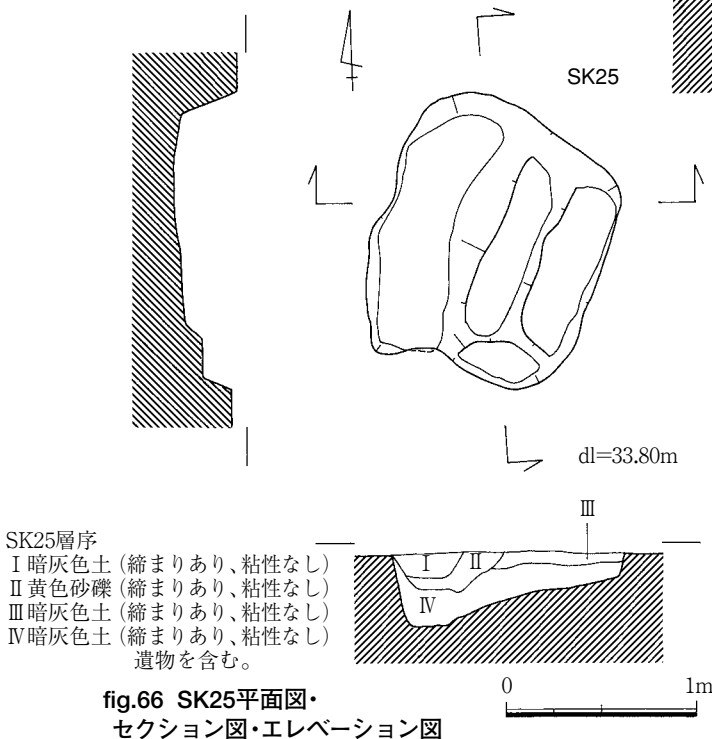
多く存在する。

出土遺物の中で図示できるものは無い。細片として陶器1点が存在する。

SK24の帰属時期は18世紀と考えられ、土壌の可能性を持つ。

SK25 (fig. 66)

調査区の中央部に位置する。土坑の北端部では上面に攪乱を受けている。平面形態



SK25層序
I 暗灰色土 (締まりあり、粘性なし)
II 黄色砂礫 (締まりあり、粘性なし)
III 暗灰色土 (締まりあり、粘性なし)
IV 暗灰色土 (締まりあり、粘性なし)
遺物を含む。

fig.66 SK25平面図・
セクション図・エレベーション図

は隅丸長方形を呈し、規模は長辺1m30cm、短辺1m20cmを測る。主軸方向は $N-33^{\circ}E$ である。底面は東側から不明瞭な段部を形成しながら西側へ向かって標高を下げて行く。検出面からの深さは最大で38cmである。遺構埋土は4層が存在しており、I・II層には5cm以下の円礫が多く含まれている。

出土遺物の中で図示できるものは1点(fig. 67-1)である。1は陶器褐釉を施した灯明皿であり、関西系か。他に細片として陶器2点が存在する。

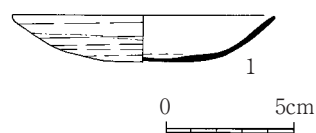


fig.67 SK25出土遺物実測図

SK25の帰属時期は19世紀か。

SK26 (fig. 68)

調査区の中央部北側に位置する。区画溝と考えられるSD5を切っている。平面形態は不整形を呈し、規模は長軸1m80cm、短軸1m50cmを測る。長軸方向は $N-3^{\circ}E$ である。底部は平らな面を成し、検出面からの深さは16cmである。遺構埋土は暗茶褐色土単統一層である。

出土遺物として図示できるものは1点(fig. 69-1)である。1は陶器碗底部であり、18世紀前半の肥前産か。細片として磁器染付1点が存在する。

SK26は18世紀前半に帰属時期を考えるが、削平を激しく受けている。

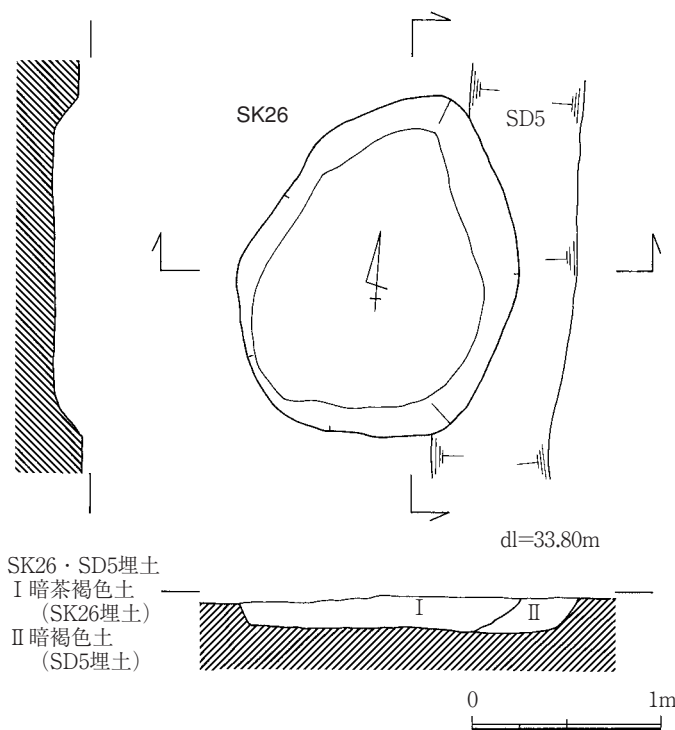


fig.68 SK26平面図・セクション図・エレベーション図

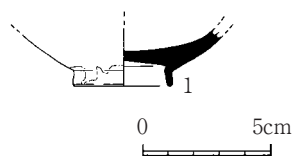


fig.69 SK26出土遺物実測図

SK27 (fig. 70)

調査区の中央部南側に位置する。土坑は南側と北側で明確に異なる形態を示しているが、最終埋土は灰色土(I層)で共通する。北側部分は平面形態隅丸長方形を呈し、規模は長辺1m40cm、短辺90cmを測る。底面は平らな面を成し、検出面からの深さは60cmである。南側部分は平面形態隅丸長方形を呈し、規模は長辺3m50cm、短辺1m20cmを測る。底部は平らな面を成す部分が多く、南壁は緩やかな傾斜面を成す。検出面からの深さは19cmである。主軸方向は共に $N-90^{\circ}E$ である。遺構埋土は先述した様に上位にI層(灰色土層)が存在しており、北側部分の下位にはII層(灰色土層)と床面上にIII層(暗褐色土層)が存在する。

出土遺物の中で図示できるものは1点(fig. 71-1)である。1は陶器碗であり、18世紀前半の肥前産か。

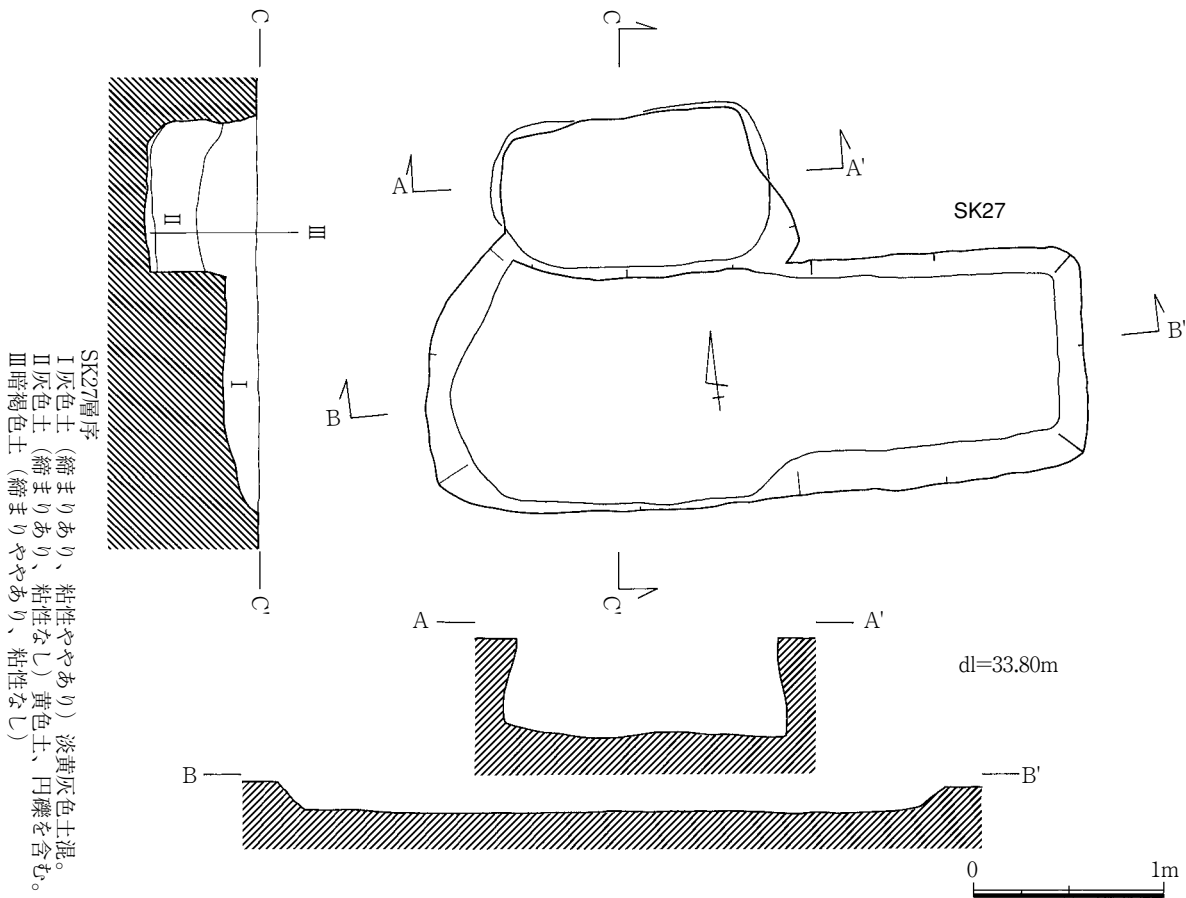


fig.70 SK27平面図・セクション図・エレベーション図

他に細片として陶器3点、瓦1点が存在する。

SK27の帰属時期は18世紀前半代と考えられる。

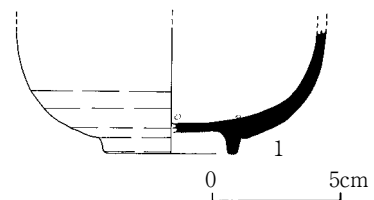


fig.71 SK27出土遺物実測図

SK28 (fig. 72)

調査区の中央部に位置する。黄色土による枠を持つ土坑と考えられるが、枠の残存状態は良くない。外周に拳大の円礫が環状に存在する。南東部分では後世の攪乱を受けているが、平面形態は隅丸長方形を呈すると考えられる。規模は長辺1m20cm、短辺68cmを測る。主軸方向はN-90°-Eである。底面は弱い凸面を成し、検出面からの深さは24cm

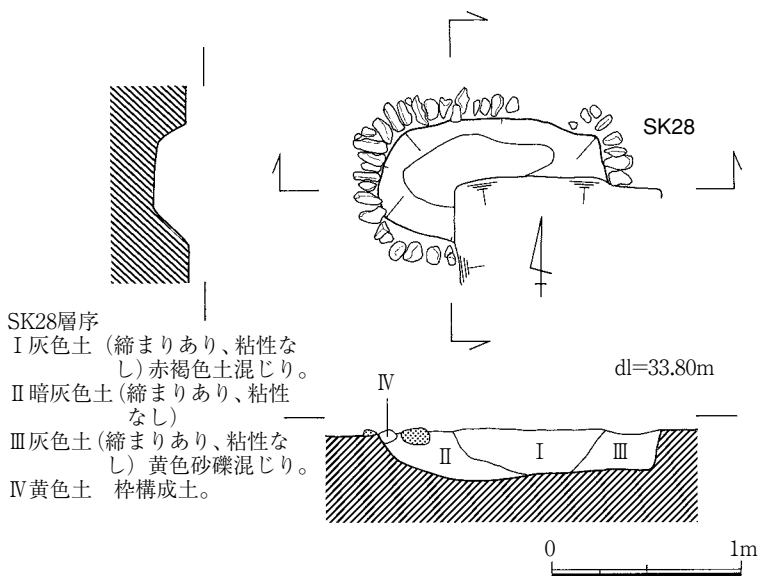


fig.72 SK28平面図・セクション図・エレベーション図

である。遺構埋土としては3層が存在する。Ⅰ層(灰色土層)、Ⅱ層(暗灰色土層)、Ⅲ層(灰色土層)である。

出土遺物として図示できるものは無い。細片としては磁器1点、陶器2点が存在する。

SK28の帰属時期は18世紀末か。

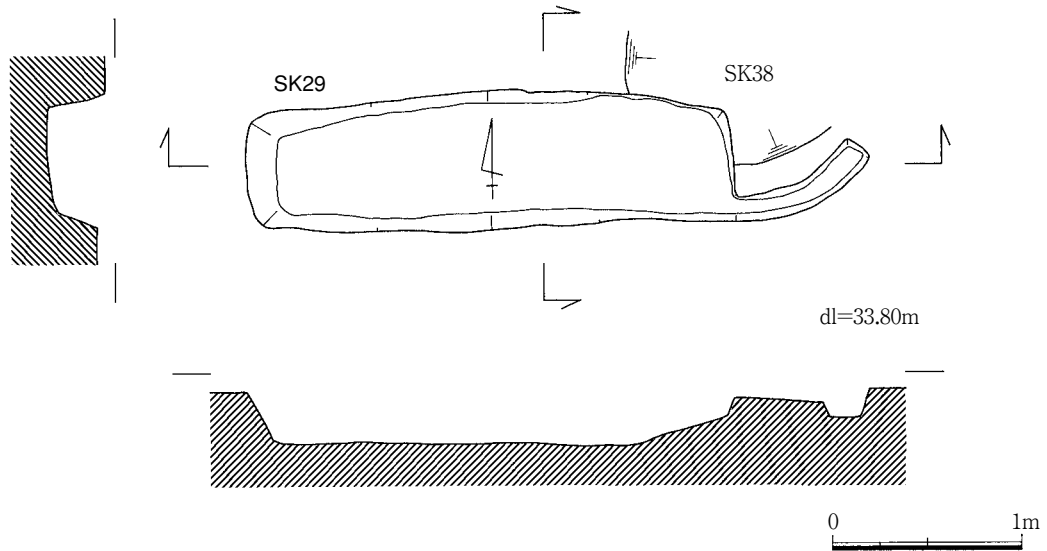


fig.73 SK29平面図・エレベーション図

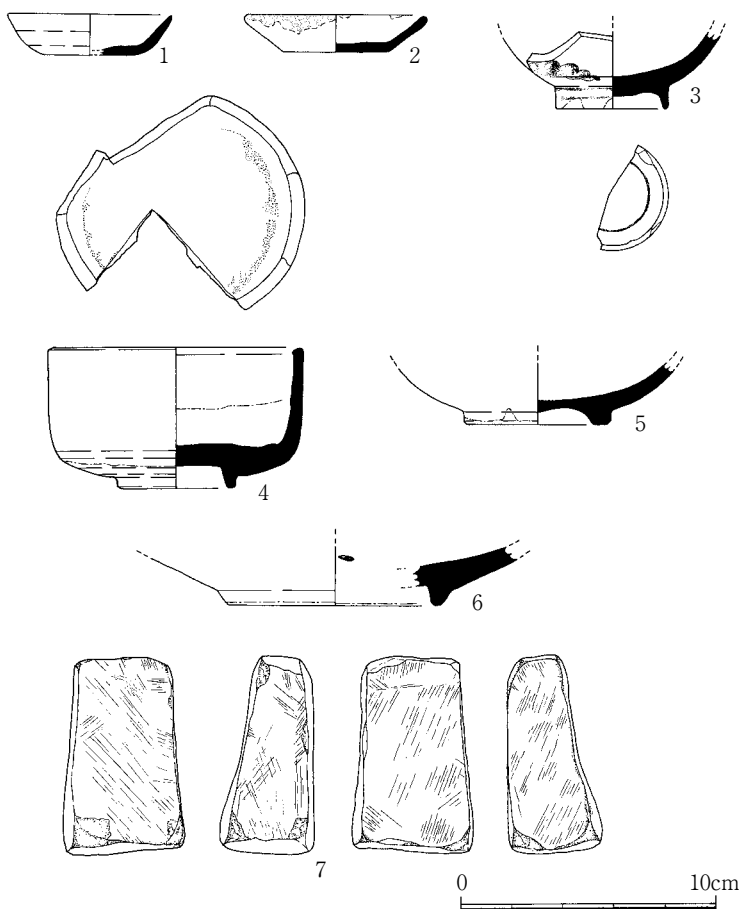


fig.74 SK29出土遺物実測図

SK29 (fig. 73)

調査区の中央部に位置する。東北部ではSK38、西部では倒木痕跡SX9を切っている。主体部は平面形態長方形を呈し、東側に溝状の張り出し部分を持つ。規模は主体部が長辺2m60cm、短辺74cmを測る。主軸方向はN-87°-Eである。底面は概ね平らであり、壁は東側では緩やかである。検出面からの深さは26cmである。東側への張り出しは幅14cmで、北側に弱く湾曲しながら長さ約70cmを測る。検出面からの深さは15cm~17cmである。遺構埋土は灰色土単純一層であり、拳大の円礫を含む。

出土遺物の中で図示できるものは7点(fig. 74-1~7)である。1・2は土師質土器の小皿であり、口縁部

に煤が付着することから灯明皿として使用されたものか。3は磁器染付碗であり、肥前産。4は陶器の香炉か火入れであり、肥前産18世紀。5は陶器碗であり、18世紀前半か。6は磁器染付皿であり、肥前産か。7は石英粗面岩製の砥石である。その他に細片として磁器5点(この内肥前青磁1点、青花1点)、陶器11点、土師質土器15点、須恵器2点が存在する。

SK30 (fig. 75)

調査区の中央部に位置する。土坑の東北部分は後世の柱穴群によって切られる。平面形態は不整形を呈し、規模は長軸が1m65cm、短軸が1m35cmを測る。長軸方向はN-87°-Wである。底面は平らな面を成すが、部分的に床面からの深さが4cm～10cmの柱穴状の掘り込みが存在する。又、西壁は緩やかな斜面を成す。検出面から床面までの深さは10cmである。遺構埋土は暗褐色土単純一層である。

出土遺物の中で図示できるものは無い。

細片としては陶器2点が存在する。

SK30の帰属時期は18世紀前半か。

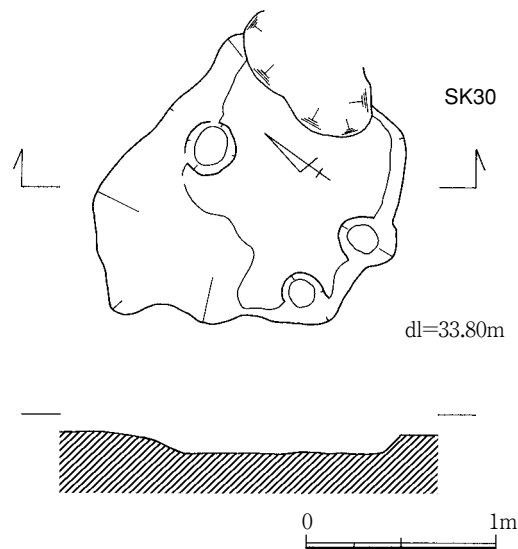


fig.75 SK30平面図・エレベーション図

SK31 (fig. 76)

調査区の中央部に位置する。西隣に存在するSK32と共に同時期に機能した可能性が強い。黄色土による枠が存在し、その外側には環状の列石が存在すると言うよりも拳大の円礫を敷き詰めた感がある。平面形態は円形を呈し、規模は直径1m30cmを測る。黄色土による枠は壁部分で幅8cmであり、底部にも施されている。床面はこの枠によって平らに成形されており、この下位には人頭大(20cm～40cm大)の円礫を丁寧に敷き詰めている。補強の目的を持つものであろうか。壁はほぼ直立乃至は外傾する。検出面から床面までの深さは38cmであり、SK32と比較するとやや浅い。遺構埋土はSK31では3層が存在する。壁際に見られるV層(黄色土ブロック)は枠の崩落土と考えられ、I層(灰褐色土層)とII層(灰色土層)はSK32と共通する埋土である。SK31に於てはII層部分に拳大から人頭大に亘る円礫が多量に存在し、この中には粉挽き臼(上臼)の破片(fig. 77-1)が存在する。土坑廃棄時に一気に放り込まれたものか。

出土遺物として図示できるものは3点(fig. 77-1～3)である。2は陶器染付広東碗であり、瀬戸・美濃産19世紀中頃である。3は陶器染付碗であり、瀬戸・美濃産19世紀前半。細片として磁器3点、陶器8点、土師質土器1点、瓦5点が存在する。

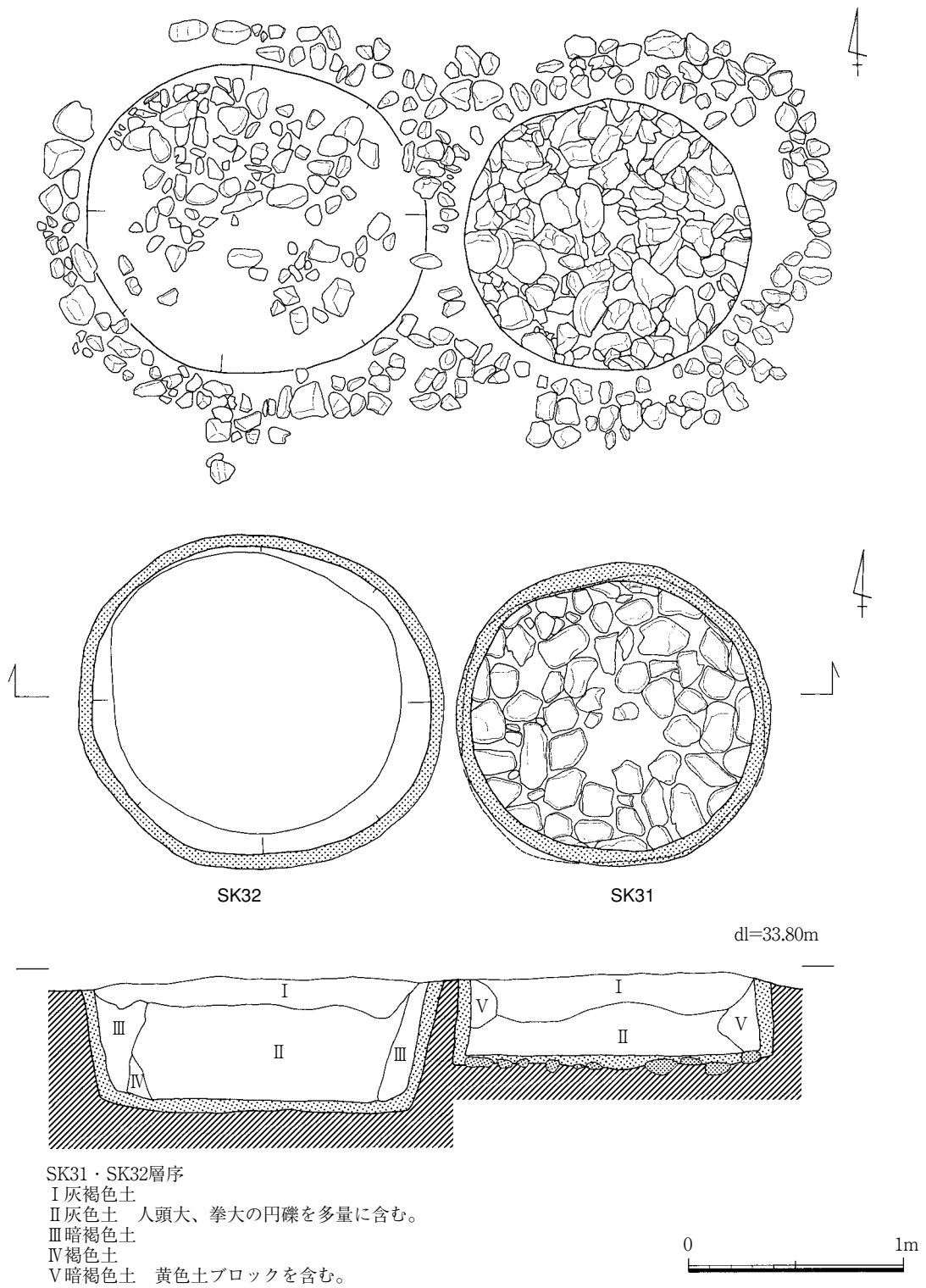


fig.76 SK31・SK32出土状況図・平面図・セクション図・エレベーション図

SK32 (fig. 76)

調査区の中央部に位置する。SK31と同時期に機能した可能性がある。土坑の掘り方によって北西側に存在するSK67と南に存在するSK69を切っている。SK31と同様に黄色土(ここでは発色は橙色)に

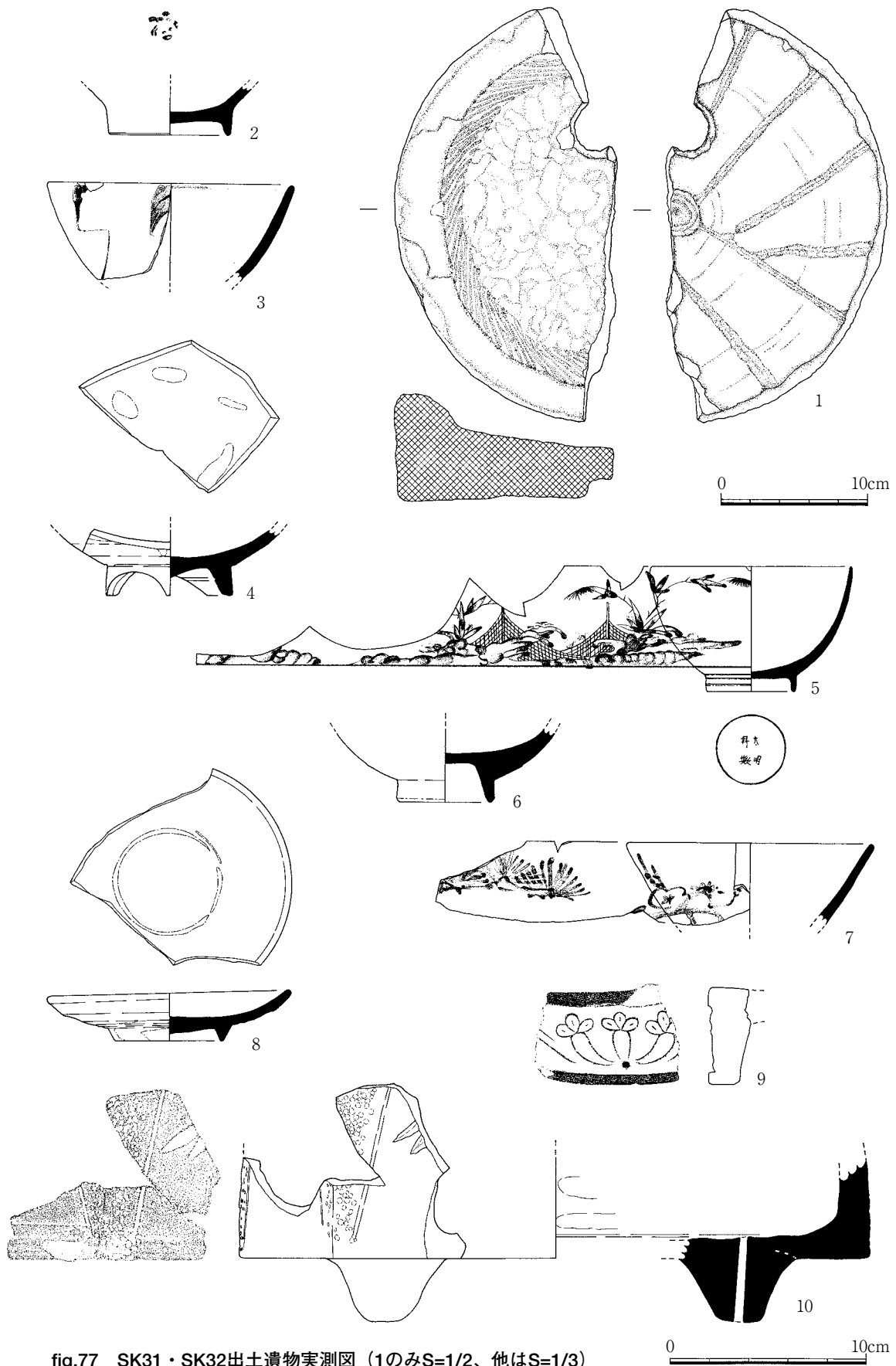
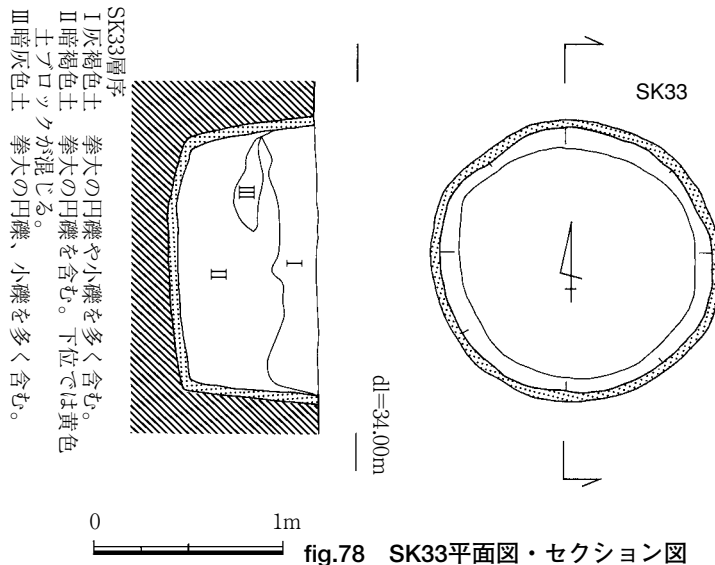


fig.77 SK31・SK32出土遺物実測図 (1のみS=1/2、他はS=1/3)

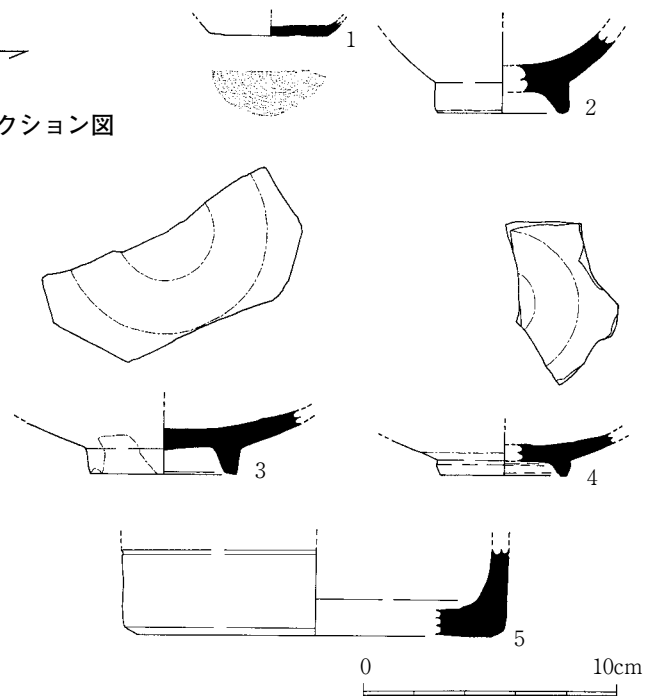
よる枠を持ち、外周の円礫はSK31に較べて不揃いであり、5cm~20cm大の円礫を詰め込んだと言う表現に近い。平面形態は楕円形を呈し、長径1m60cm、短径1m45cmを測る。長軸方向はN-72°-Wである。壁及び底面の橙色土による枠は幅約7.5cmである。床面はほぼ平らであり、検出面からの深さは57cmである。床面下にはSK31で見られたような丁寧な石敷きは存在しないが小円礫を施して成形している。遺構埋土としては4層が存在し、Ⅲ層(暗褐色土層)、Ⅳ層(褐色土層)は埋積初期に本土坑のみで見られる埋土である。又、Ⅰ層(灰褐色土層)、Ⅱ層(灰色土層)はSK31と共通する埋土であり、SK32ではⅡ層にSK31程多量ではないが5cm~20cm大の円礫が存在している。

出土遺物の中で図示できるものは7点(fig. 77-4~10)である。4は陶器の皿であり、アーチ状の切り高台を持つ。5は磁器碗であり、高台内に「太明年製」の銘を持つ。肥前産18世紀。6は陶器の碗であり、呉器形を呈し18世紀前半。7は陶器染付の広東碗であり、瀬戸・美濃産で19世紀前半か。8は陶器の皿である。9は軒平瓦の瓦当部破片である。10は瓦質の火器類(焜炉)の底部である。細片としては陶器3点、弥生土器1点、瓦4点が存在する。



SK33 (fig. 78)

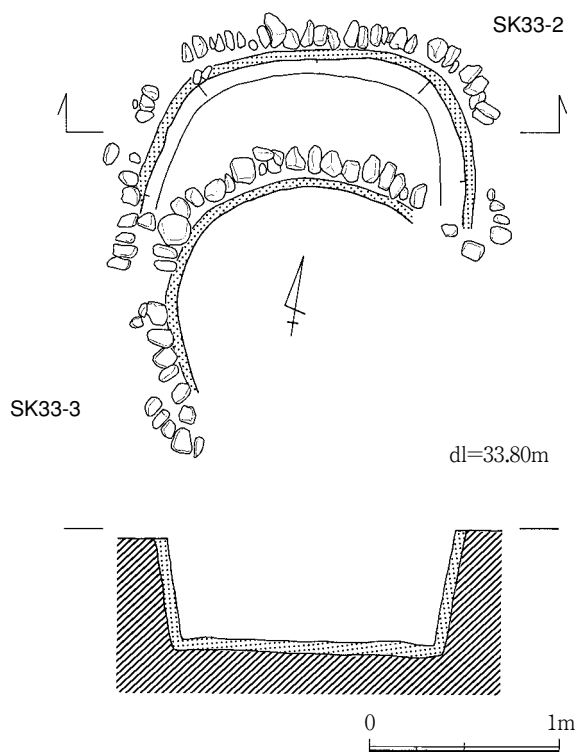
調査区の中央部西側に位置する。同様な黄色土による枠を持った土坑が3基重なり合って存在している。SK33はこの中で最も新しいものであり、その掘り方は小規模であるが北部に存在する土坑SK33-3平面形の殆どを切っている。平面形態は



円形を呈し、規模は直径1m 40cmを測る。底面は鍋底状を成し、検出面からの深さは73cmである。黄色土による枠は壁と床面に厚さ5cmで存在する。遺構埋土としては3層が存在している。Ⅰ層(灰褐色土)、Ⅱ層(暗褐色土)、Ⅲ層(暗灰色土)であり、早い時期の埋積土であるⅡ層には枠構成の黄色土ブロックが存在している。

出土遺物の中で図示できるものは5点(fig. 79-1~5)である。1は土師質土器

小皿の底部。3は磁器の皿であり、肥前産。4は陶器の皿であり、内野山窯産で17世紀後半～18世紀前半。2は陶器の碗であり、17世紀末。5は陶器の甕であり、備前産か。その他細片として磁器13点、陶器16点、須恵器1点、土師質土器4点、瓦2点、弥生土器1点が存在する。



SK33-2 (fig. 80)

調査区の中央部西側に位置する。南半をSK33-3及びその掘り方によって切られている。このSK33-3についてはその規模・形態を明らかにし得ない。推定規模直径70cmの円形を呈するものと考えられる。幅5cmの黄色土による枠を持ち、外側には拳大の円礫による列石を有する。SK33と同様に掘り方の規模は小さい。SK33-2は残存部分から推して平面形態は隅丸方形を呈すると考えられる。残存規模は長軸1m60cm、短軸45cmである。底面はほぼ平らな面を成し、検出面からの深さは54cm～60cmである。幅5cmの枠が壁と底面に存在し、その外周には拳大の円礫による列石を有する。遺構埋土は黄色土ブロックを含む暗褐色土である。

fig.80 SK33-2・SK33-3平面図・エレベーション図

出土遺物の中で図示できるものは無い。細片として磁器2点、陶器3点、須恵器1点、土師質土器3点が存在している。

SK34 (fig. 81)

調査区の中央部西側に位置する。平面形態は隅丸長方形又は楕円形を呈し、規模は長径1m44cm、短径1mを測る。主軸方向はN-7°-Wである。底面は平らな面を成し、検出面からの深さは34cmである。遺構埋土は灰色土であり、円礫を多く含んでいる。

出土遺物の中で図示できるものは4点(fig. 82-1～4)である。1は陶胎染付碗であり、肥前産で18世紀。2は陶器の碗であり、18世

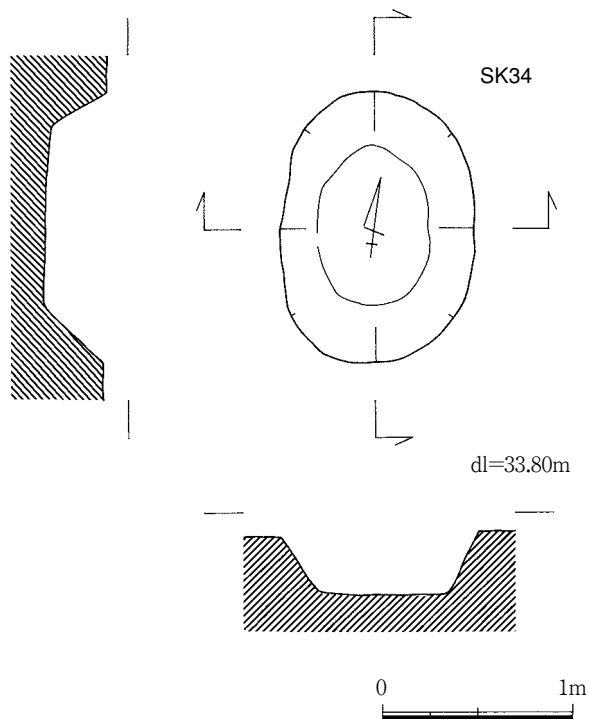


fig.81 SK34平面図・エレベーション図

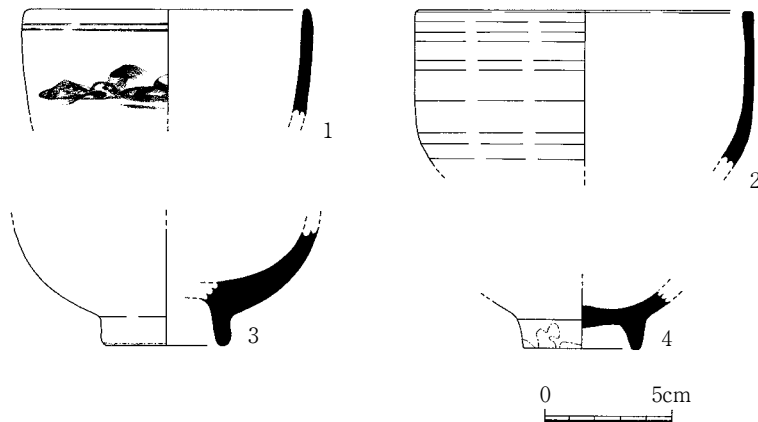


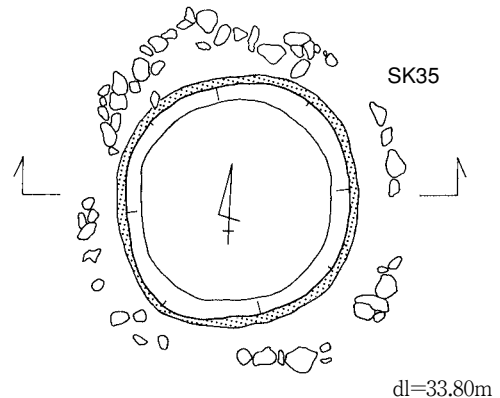
fig.82 SK34出土遺物実測図

紀。3は陶器具器形の碗であり、18世紀前半。4は磁器染付碗であり、肥前産。細片としては陶器3点、土師質土器7点、瓦質土器1点と瓦4点が存在する。

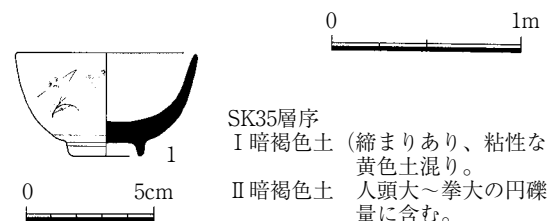
SK34の帰属時期は18世紀前半代と考えられ、土壌の可能性を持つ。

SK35 (fig. 83)

調査区の西部北側に位置する。北西側に存在するSK54を枠構築に伴う掘り方によって切っている。平面形態は円形を呈し、規模は直径1m20cmを測る。底面は緩やかな凹面を成し、検出面からの深さは62cmである。黄色土による枠は厚さ4cmで底面と壁に施されている。外側には拳大の円礫が存在するが、石の並びは断続的であり、整然としない。遺構埋土には2層が存在する。上層は黄色土混じりの暗褐色土層(I層)であり、下層は拳大~人頭大の円礫を多量に含んだ暗褐色土層である。SK35廃棄時に円礫を放り込んだものであろうか。



出土遺物の中で図示できるものは1点(fig.83-1)である。1は磁器染付碗であり、波佐見産と考えられる。床面からの出土である。細片としては磁器2点(内1点は端反りの小碗)、陶器2点、土師質土器1点と木片が1点存在する。木片は混入とも考えられるが枠内に木製の内部構造が存在した可能性も否定できない。



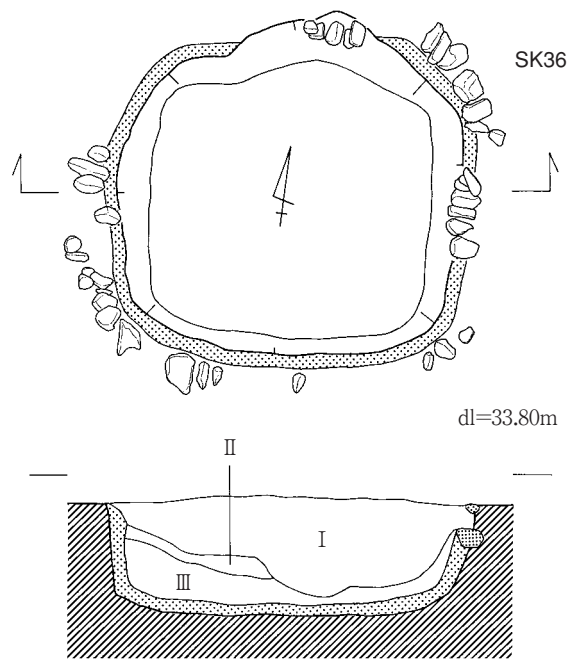
SK35層序
I 暗褐色土 (締まりあり、粘性なし) 黄色土混り。
II 暗褐色土 人頭大~拳大の円礫を多量に含む。

fig.83 SK35平面図・セクション図・出土遺物実測図

SK35の帰属時期は19世紀と考えられる。

SK36 (fig. 84)

調査区の中央部北側に位置する。黄色土による枠を持つ大型の土坑の一つである。西側に存在す



SK36層序
 I 暗灰色土 (縮まりややあり、粘性なし)
 黄色土が混じり円礫は下位に多く見られる。
 II 黄色土 杵崩壊土。
 III 暗褐色土 (縮まりややあり、粘性なし)

fig.84 SK36平面図・セクション図

土を持つ呉器形の碗である。4は陶器の呉器手碗であり、18世紀前半。5は陶器の鉢であり、18世紀か。細片としては磁器1点、陶器2点、土師質土器3点と瓦1点が存在する。

SK36の帰属時期は19世紀代と考えられる。

SK37 (fig. 86)

調査区の中央部に位置する。平面形態は隅丸長方形を呈し、規模は長辺1m40cm、短辺94cm

を測る。土坑は数カ所で円礫を含む暗褐色土を埋土とする後世の柱穴によって切られる。底面には小さな凹凸面が存在し、検出面からの深さは14cm~17cmである。遺構埋土は暗灰色土である。

出土遺物は皆無である。

る同形態及び規模を持つSK59と同時期に機能した可能性がある。平面形態は隅丸方形を呈し、規模は一辺1m65cmを測る。底面は緩やかな凹面を成し、検出面からの深さは58cmである。黄色土による杵は幅7cmで土坑の底面と壁に施されている。北壁の一部は欠落しており、背後に並べられた拳大の円礫が露呈している。外側に存在する列石は意図して並べられているが不連続である。遺構埋土には3層が存在する。早い段階の埋土であるIII層(暗褐色土層)と上位埋土のI層(暗灰色土層)の間には、杵崩壊土と考えられるII層(黄色土層)が存在している。

出土遺物として図示できるものは5点(fig. 85-1~5)である。1は土師質土器の小皿である。2は肥前産青磁の碗又は花生と考えられる。3は炆器質の胎

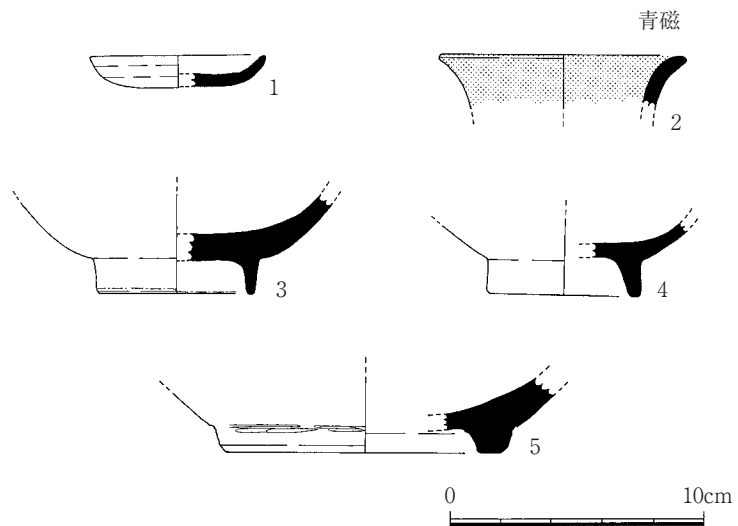


fig.85 SK36出土遺物実測図

SK38 (fig. 87)

調査区の中央部東側に位置する。上面は大部分をST1によって切られ、南西部分はSK29に切られる。上部の削平が激しかった為か、黄色土による枠を持つが外側に列石の存在を認めない。平面形態は円形を呈し、規模は直径1m30cmである。

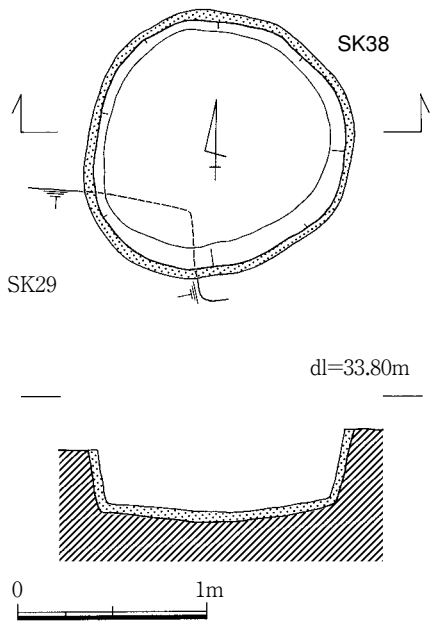


fig.87 SK38平面図・エレベーション図・出土遺物実測図

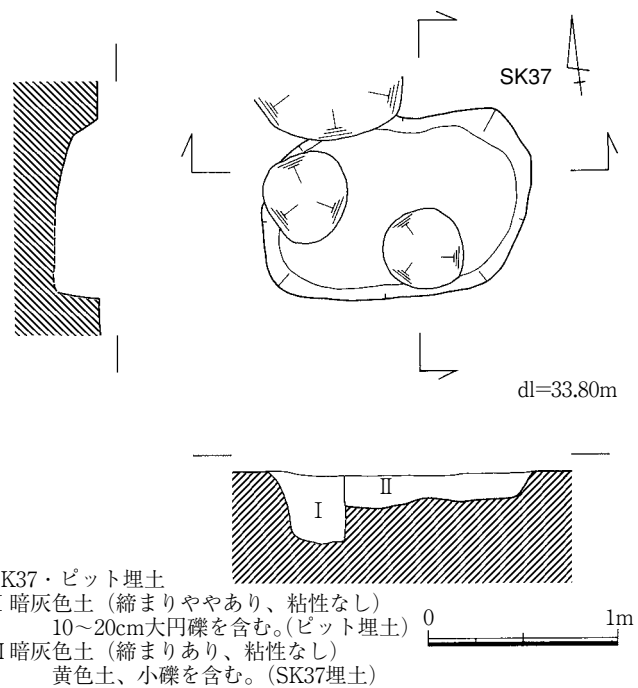
底面は緩やかな凹面を成し、検出面からの深さは44cmである。遺構埋土は暗灰褐色単純一層である。

出土遺物としては1点(fig. 87-1)が存在する。1は陶器の鉢である。他に遺構間で接合関係にあるもの(fig.151-4)が存在する。

SK39 (fig. 88)

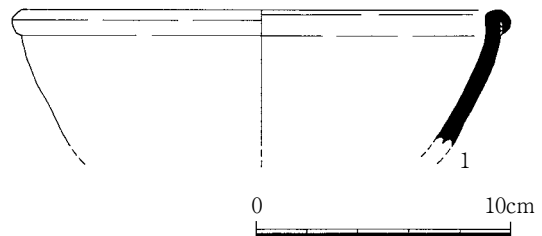
調査区の中央部西側に位置する。SK63の東北部を切っている。幅5cmの黄色土による枠を底面と壁に有するが、底部中央ではこれが欠損する。平面形態は隅丸長方形を呈し、規模は長辺1m64cm、短辺1m30cmを測る。主軸方向はN-2°-Eである。先述のように本来底部は平らに整えられていたものと考えられるが、土坑の使用に伴って深く削り込まれたものであろう。検出面からの深さは黄色土上面までが52cmであり、掘り込まれた箇所では64cmを測る。黄色土枠の外側には拳大の円礫が整然と並べられている。遺構埋土はI層(暗灰色土)とIII層(黒灰色土)が主に存在している。前者には5cm~20cm大の円礫が多く含まれており、後者との間には枠崩落土と考えられるII層(黄色土)が存在する。

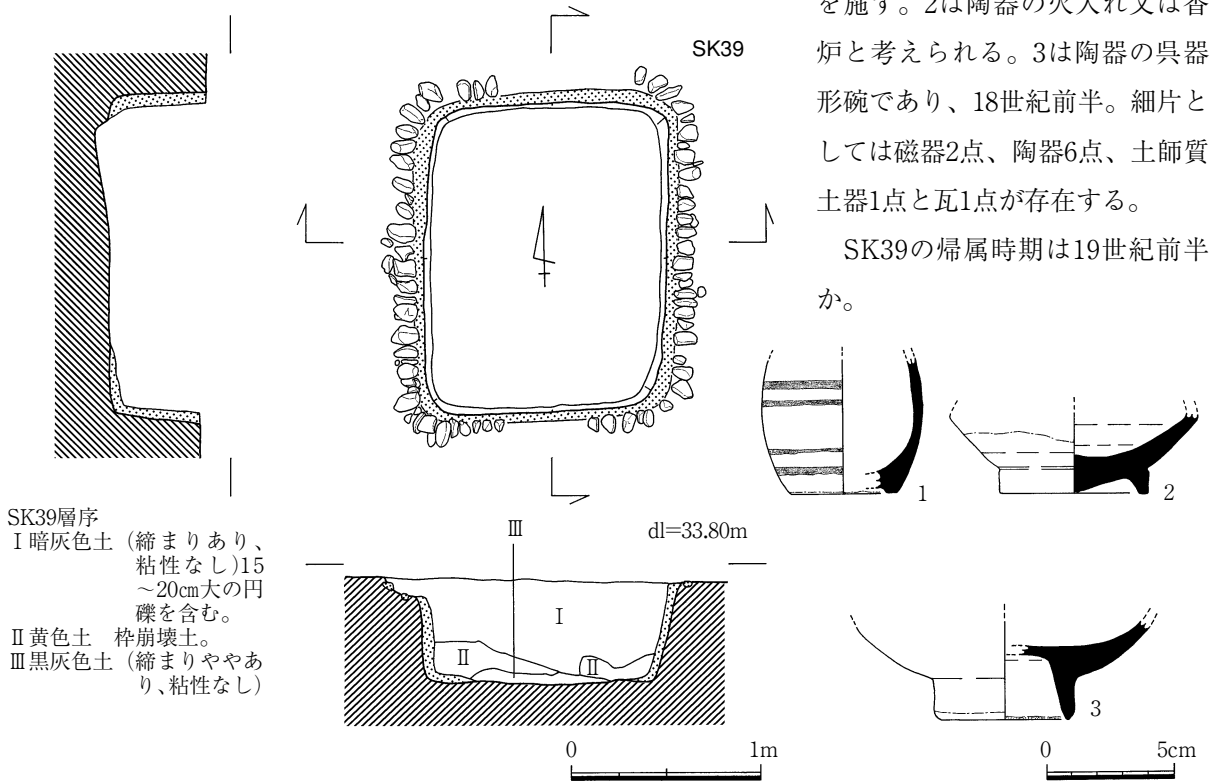
出土遺物の中で図示できるものは3点(fig.88-1~3)である。1は磁器の瓶であり、釉璃紅による帯線



SK37・ピット埋土
I 暗灰色土 (縮まりややあり、粘性なし)
10~20cm大円礫を含む。(ピット埋土)
II 暗灰色土 (縮まりあり、粘性なし)
黄色土、小礫を含む。(SK37埋土)

fig.86 SK37平面図・セクション図・エレベーション図





を施す。2は陶器の火入れ又は香炉と考えられる。3は陶器の呉器形碗であり、18世紀前半。細片としては磁器2点、陶器6点、土師質土器1点と瓦1点が存在する。

SK39の帰属時期は19世紀前半か。

fig.88 SK39平面図・セクション図・エレベーション図・出土遺物実測図

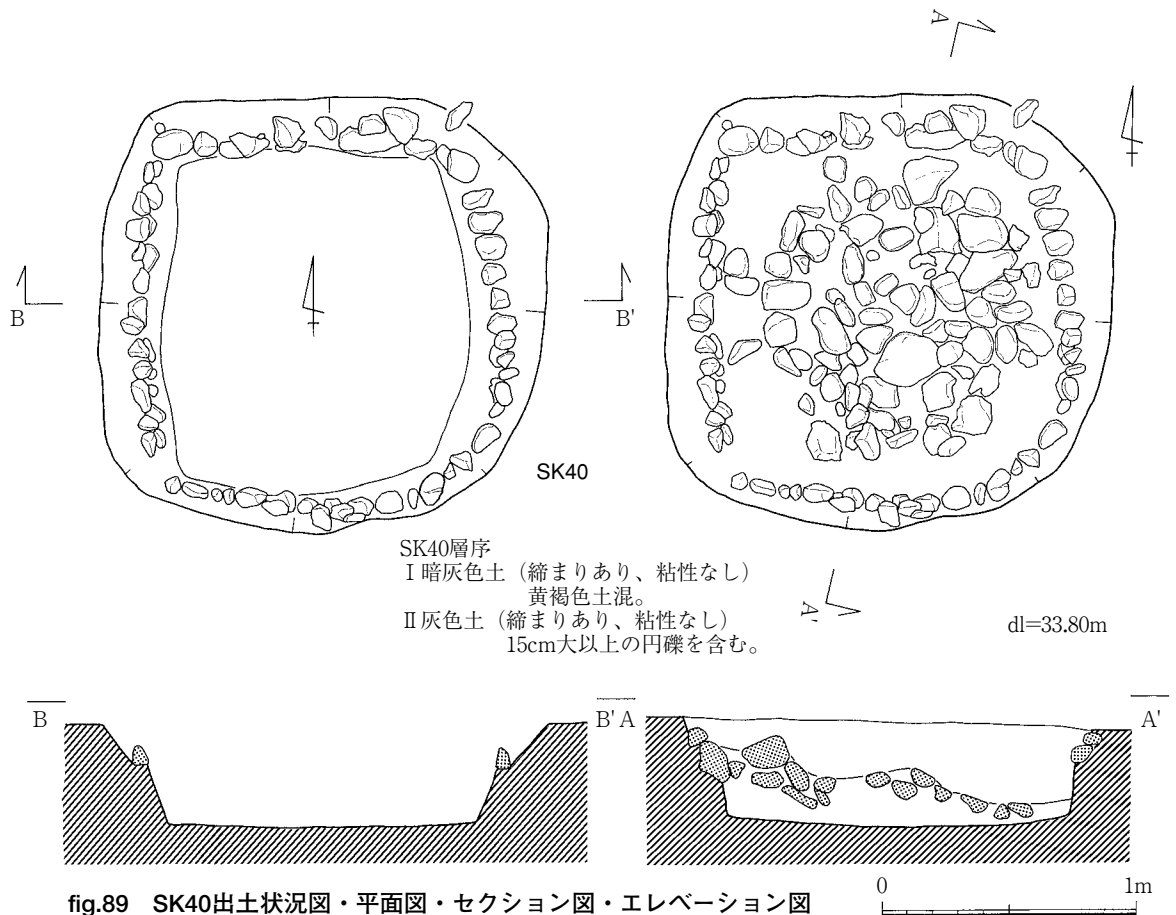


fig.89 SK40出土状況図・平面図・セクション図・エレベーション図

SK40 (fig. 89)

調査区の中央部西側に位置する。SK39の北隣りに存在しており、規模はやや小さいものの、形態は近似する。黄色土による枠の存在は確認できなかった。平面形態は隅丸長方形を呈し、南側と東側はやや外側へ膨らみを持つ。規模は長辺1m20cm、短辺1mを測る。主軸方向はほぼ真北である。底面は弱い凹面を成し、検出面からの深さは50cmである。外周と考えられる部分には列石が存在している。構成する円礫の規模は5cm～25cm大であり、上下二段に積まれた状態で検出された。遺構埋土としては2層が存在している。I層(暗灰色土)とII層(灰色土)であり、II層には拳大～人頭大の円礫が多く含まれる。

出土遺物として図示できるものは無い。細片としては磁器3点、陶器4点と土師質土器7点が存在する。

SK39と同時期の機能を考えるがやや先行する可能性がある。

SK41 (fig. 90)

調査区の中央部に位置する。東側に存在するSK55を切っており、黄色土による枠を持つP33に切られている。平面形態は隅丸長方形を呈し、規模は長辺2m80cm、短辺1m10cmを測る。主軸方向は真北である。底面は弱い凹面を成すが、南側には床面より4cm程高い段部が存在し、中央部には落ち込みが存在している。この落ち込みの深さは床面から30cmを測り、柱穴と考えられるが切り合いは確認できなかった。検出面から床面までの深さは13cmである。遺構埋土は暗灰色土単純一層である。

出土遺物として図示できるものは無い。細片としては磁器4点が存在している。

SK41の帰属時期は19世紀代と考えられる。

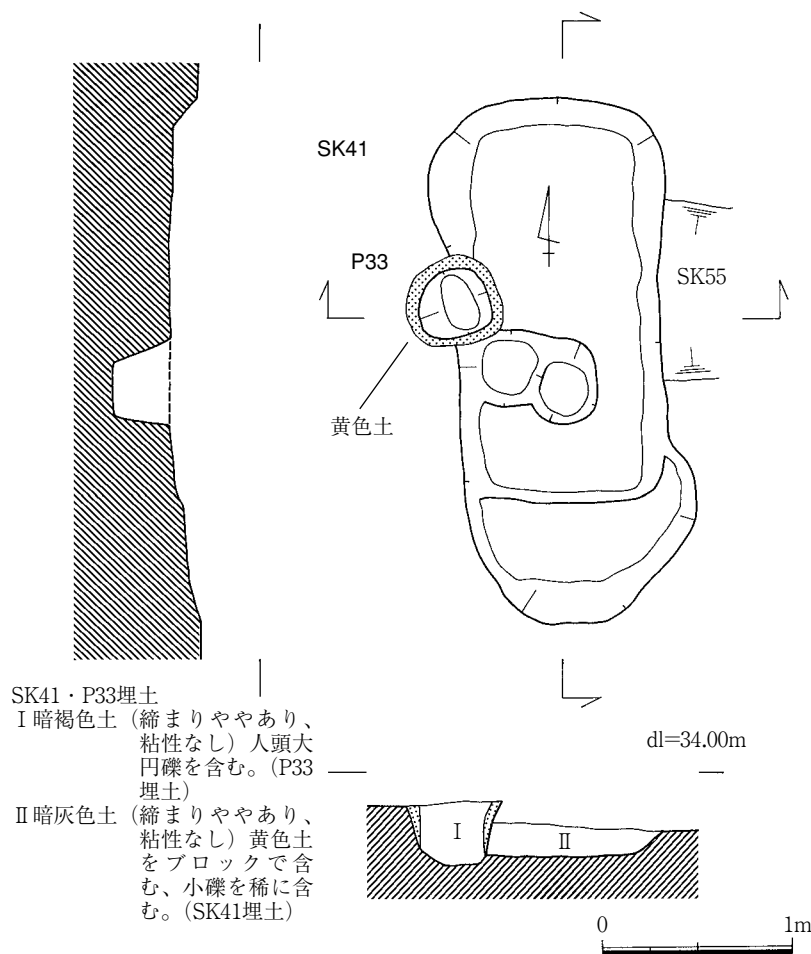


fig.90 SK41平面図・セクション図・エレベーション図

SK42 (fig. 91)

調査区の中央部北寄りに位置する。南部をSK49によって切られてる。平面形態は不整形を呈し、規模は長軸1m30cm、短軸1mを測る。長軸方向はN-45°Wである。底面は東南部で浅い平坦面を成し、西北部では階段上に深くなる。検出面からの深さは東南部で10cmであり、西北部では最大80cmである。遺構埋土としては3層が存在する。I層(暗褐色土層)、II層(暗灰色土層)、III層(暗褐色土層)である。

出土遺物の中で図示できるものは無い。細片としては磁器2点(内1点は青磁)、陶器1点、土師質土器2点が存在している。

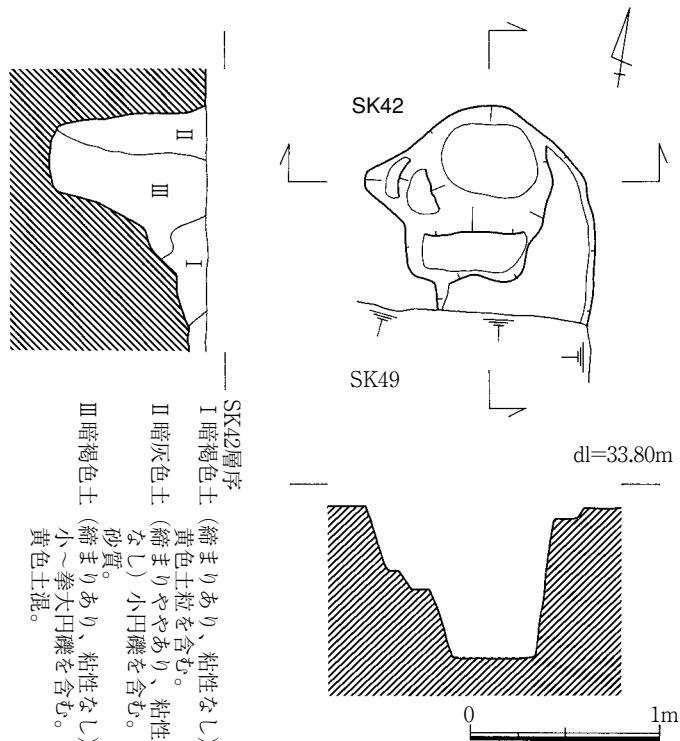


fig.91 SK42平面図・セクション図・エレベーション図

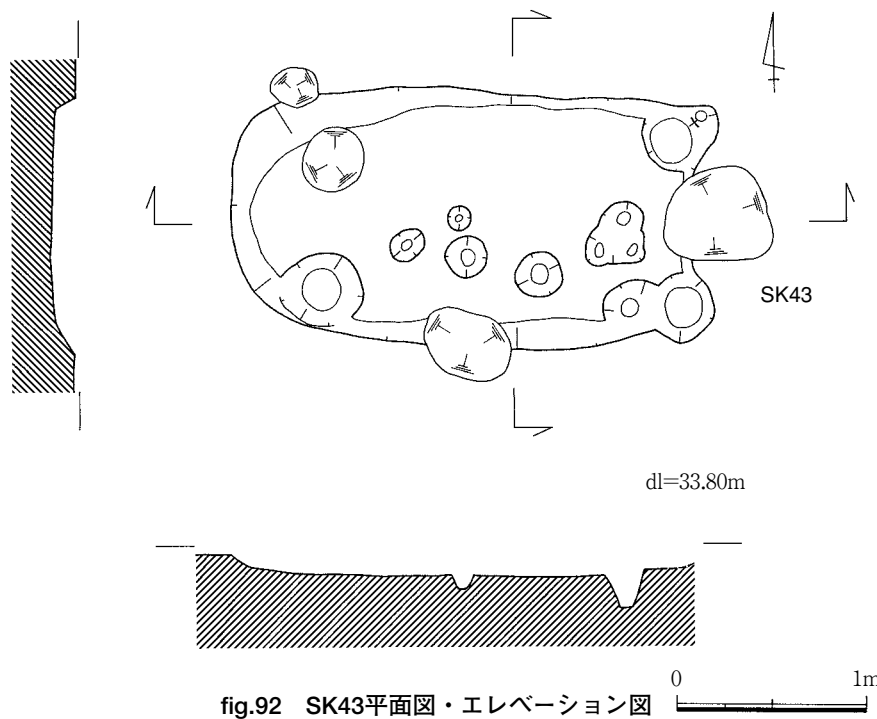


fig.92 SK43平面図・エレベーション図

SK43 (fig. 92)

調査区の西部北側に位置する。遺構は黄色土を混入する暗灰色土や暗褐色土を埋土とする後世の柱穴群によって数カ所を切られる。平面形態は隅丸長方形を呈し、規模は長辺2m40cm、短辺1m34cmを測る。主軸方向はN-86°Wである。底面は概ね平らであるが部分的には小さな凹凸が存在する。

又、北西隅を除く3箇所の隅角部には柱穴状の落ち込みが存在している。柱穴と考えられるがSK43との新旧関係は不明である。検出面から床面までの深さは12cmである。遺構埋土は暗灰色土単純一層である。

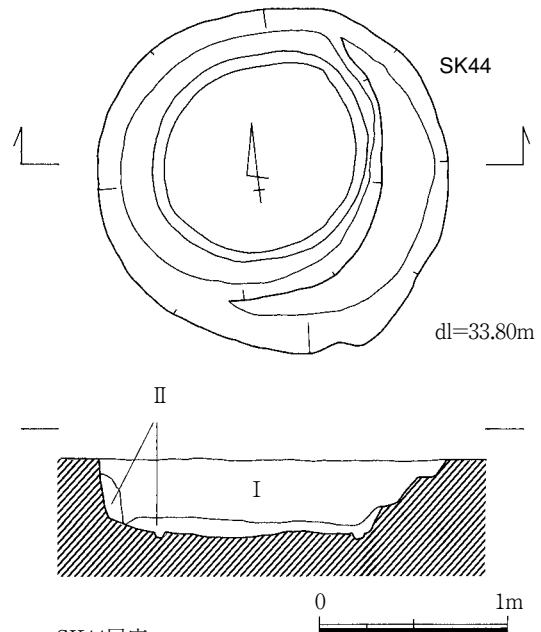
出土遺物として図示できるものは無い。細片としては陶器4点、土師質土器1点が存在する。
SK43の帰属時期は18世紀代と考えられる。

SK44 (fig. 93)

調査区の西部北側に位置する。SK45とは南西部分で接するが切り合い関係は認められない。平面形態は不整円形を呈し、規模は1m80cmを測る。底面には緩やかな凹凸面と幅約6cm、床面からの深さ2cm～5cmの小溝が存在する。桶状の埋葬具底部圧痕であろうか。また、東側から南側に掛けての壁には段部が存在しており、掘削に際して階段状に掘り込まれたものであろうか。検出面から床面までの深さは41cmである。遺構埋土としては2層が存在している。早い段階の埋積と考えられるⅡ層(褐色土層)は地山崩壊土である黄褐色土を混入しており、大部分はⅠ層(暗褐色土層)で埋積されている。

出土遺物の中で図示できるものは無い。細片としては陶器1点が存在する。

SK44は土壙の可能性を持つ。



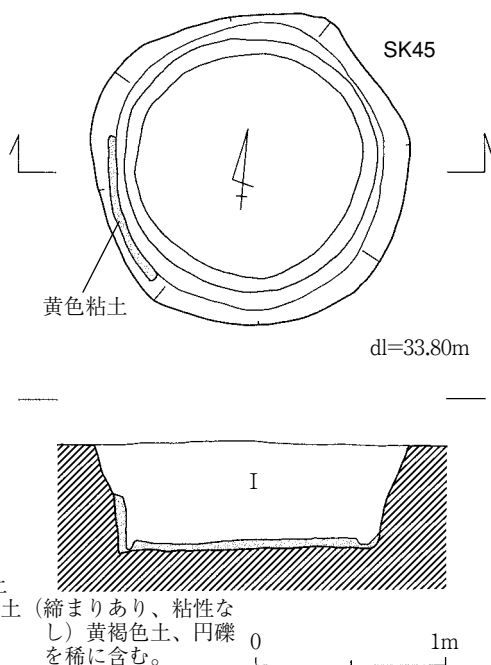
SK44層序
Ⅰ 暗褐色土 (締まりあり、粘性なし)
拳大円礫を稀に含む。
Ⅱ 褐色土 (締まりあり、粘性ややあり)
黄褐色土、黒褐色土混。

fig.93 SK44平面図・セクション図

SK45 (fig. 94)

調査区の西部北側に位置する。SK44に北東部で接する。平面形態は不整円形を呈し、規模は直径1m60cmを測る。底面と壁の一部には厚さ約5cmで黄色粘土が残存している。床の粘土上には幅約4cm、床面からの深さ4cmの規模を持つSK44同様の小溝が巡っており、壁の粘土は溝の外周に沿うように施されている。桶を底部で安定させたものであろうか。黄色土粘土は嘗ても壁全体には存在していなかったものと考えられ、土坑の掘削場所が調査区でも比較的軟質な地盤であることからそれを考慮して施された可能性を持つ。検出面から床面までの深さは52cmである。遺構埋土は黄褐色土と円礫を稀に含む暗褐色土であり、中央部の床面付近では円礫が多く出土している。

出土遺物として図示できるものは1点(fig. 95-1)が存



SK45埋土
Ⅰ 暗褐色土 (締まりあり、粘性なし)
黄褐色土、円礫を稀に含む。

fig.94 SK45平面図・セクション図

在する。1は磁器染付の碗であり、肥前産である。細片としては磁器染付が1点存在する。

SK45は土壌の可能性を持つ。

SK46 (fig. 96)

調査区の西部北側に位置する。北端部でSK45に切られている。平面形態は不整円形を呈し、東側には掘り方に伴う張り出し部分を持つ。規模は長軸2m、短軸1m60cmを測る。長軸方向はN-71°Wであ

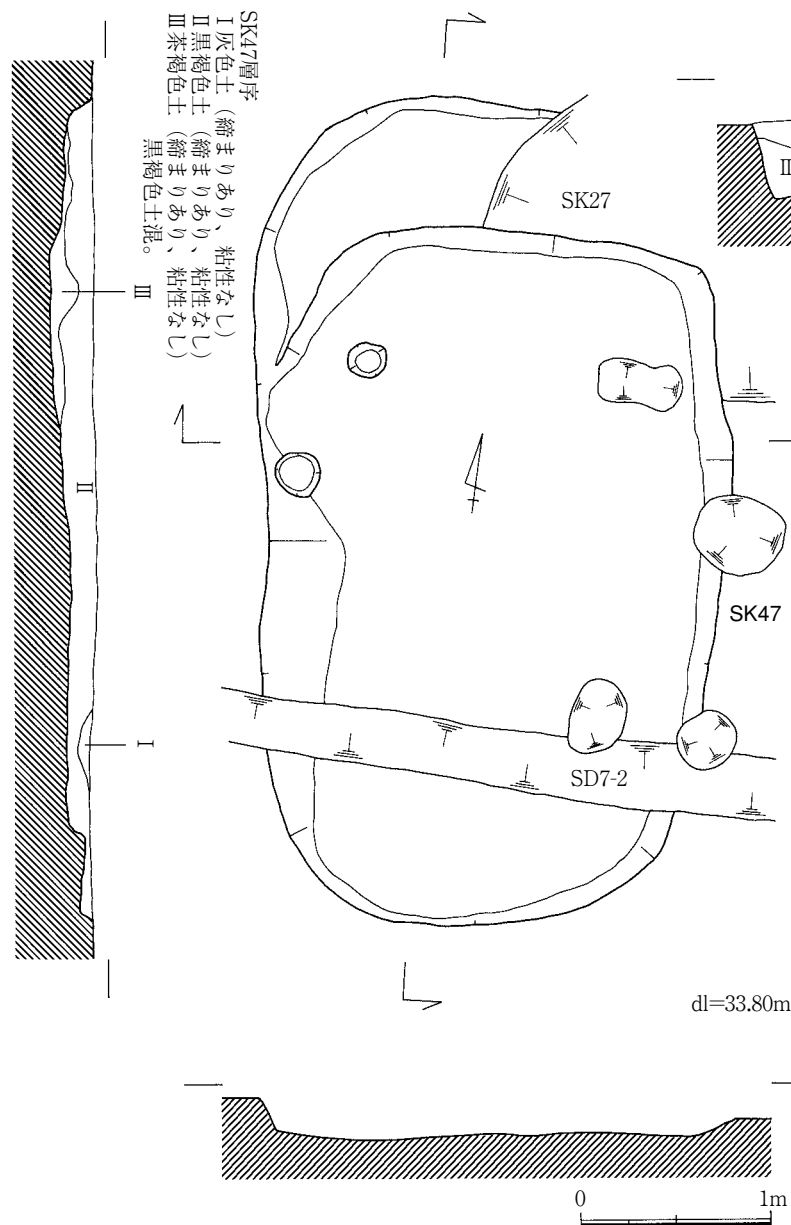


fig.97 SK47平面図・セクション図・エレベーション図

SK46層序
I 暗褐色土 (縮まりあり、粘性なし) 黄褐色土粒、黒褐色土粒を含む。
II 黄褐色土 (縮まりあり、粘性なし) 暗褐色土、黒褐色土粒を含む。

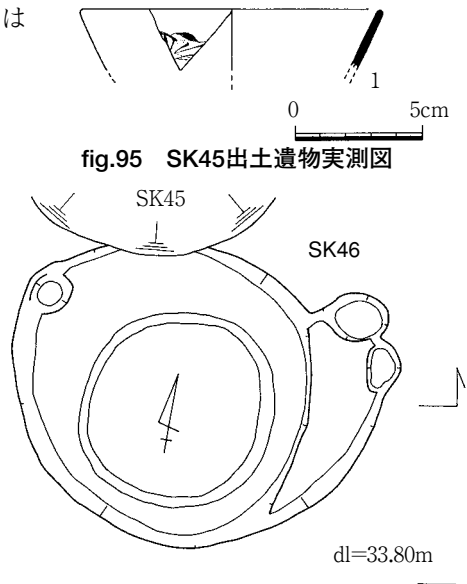


fig.96 SK46平面図・セクション図

る。底面は概ね平らであるが、幅6cm、床面からの深さ5cmを測る小溝が内径90cmで巡っている。また、東側の壁は張り出し部分に伴い中位から緩やかな傾斜を持って立ち上がる。検出面からの床面までの深さは40cmである。遺構埋土としては2層が存在する。I層(暗褐色土)、II層(黄褐色土層)であり、主にI層が存在する。

出土遺物は皆無である。

SK46は土壌の可能性を持つ。

SK47 (fig. 97)

調査区の中央部南側に存在する。南部で上面をSD7-2によって切られ、東北部では上部をSK27によって切られる。遺構内は数カ所で暗灰色土を埋土とする柱穴によって切られている。平面形態は隅丸長方形を呈し、規模は長辺が4m35cm、短辺が2m40cmを測る。底面は弱い凸面を成し中央北側でやや深く成るが、北側には幅60cm、床面との比高差6cmを測る段部が存在し、南側には幅40cm、床面からの比高差10cmを測る段部が存在する。検出面からの床面までの深さは最大で22cmである。遺構埋土としては2層が存在する。北側の段部と最深部ではⅢ層(茶褐色土層)が見られ、Ⅱ層(黒褐色土層)が主に存在する。

出土遺物の中で図示できるものは1点(fig. 98-1)である。1は陶器折縁皿であり、17世紀である。細片としては磁器8点、陶器5点、土師質土器3点と弥生土器2点が存在する。

SK47は17世紀末～18世紀前半に帰属時期が考えられる。

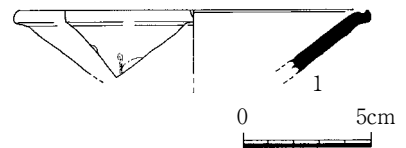


fig.98 SK47出土遺物実測図

SK48 (fig. 99)

調査区の中央部に位置する。北側に存在するSK49を切る。平面形態は隅丸長方形を呈し、規模は長辺1m95cm、短辺90cmを測る。主軸方向はN-86°Eである。底面は弱い凹面を成し、検出面からの深さは26cmであ

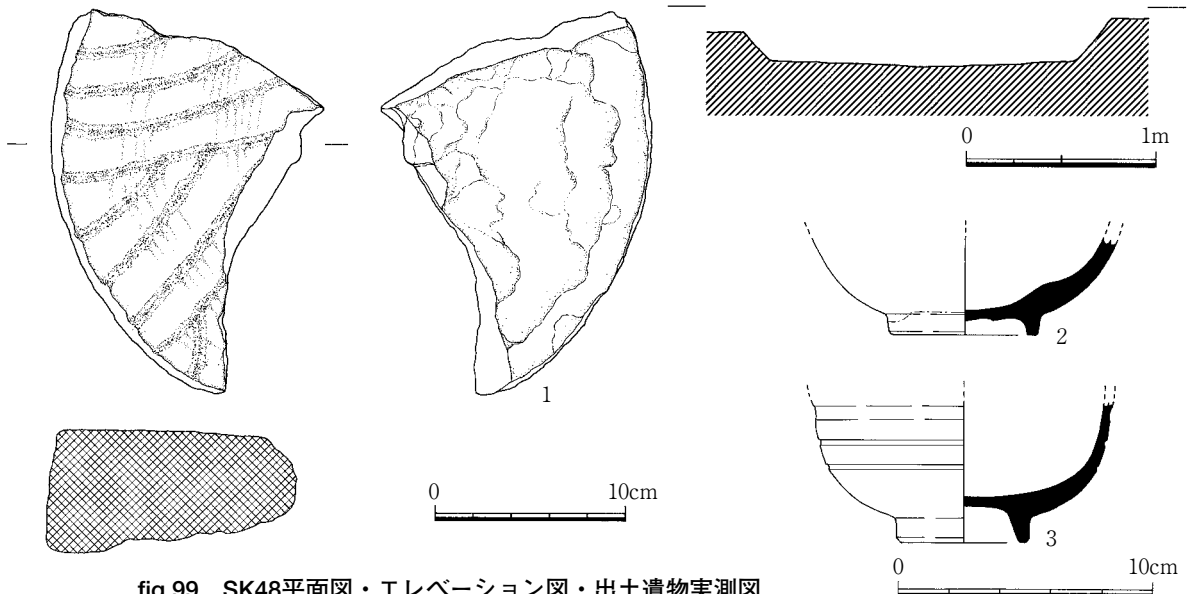
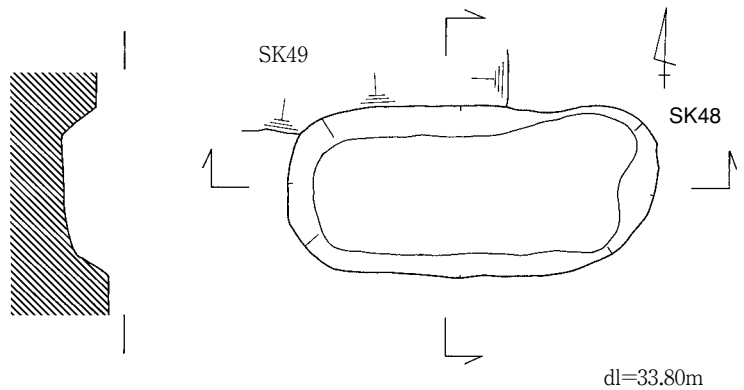


fig.99 SK48平面図・エレベーション図・出土遺物実測図

る。遺構埋土は黄色土の混じった暗灰色土であり、埋土上部には拳大を中心とする円礫が集積している。中には石臼の破片(fig. 99-1)も含まれている。

出土遺物として図示できるものは3点(fig. 99-1~3)である。2は京焼風陶器の碗であり、17世紀末である。3は陶器の呉器形碗であり、18世紀前半。細片としては磁器1点と土師質土器1点が存在する。

SK48の帰属時期は18世紀前半と考える。

SK49 (fig. 100)

調査区の中央部北側に位置する。SK42の南部を切っており、南端部はSK48によって切られる。平面形態は隅丸長方形を呈し、規模は長辺1m84cm、短辺1m4cmを測る。主軸方向はN-87°-Eである。底面は緩やかな凹凸を有し、西壁はなだらかに立ち上がる。検出面からの深さは10cmである。遺構埋土は暗褐色土である。

出土遺物の中で図示できるものは無い。細片としては陶器7点と土師質土器3点が存在する。

SK49の帰属時期は18世紀の早い段階であろうか。

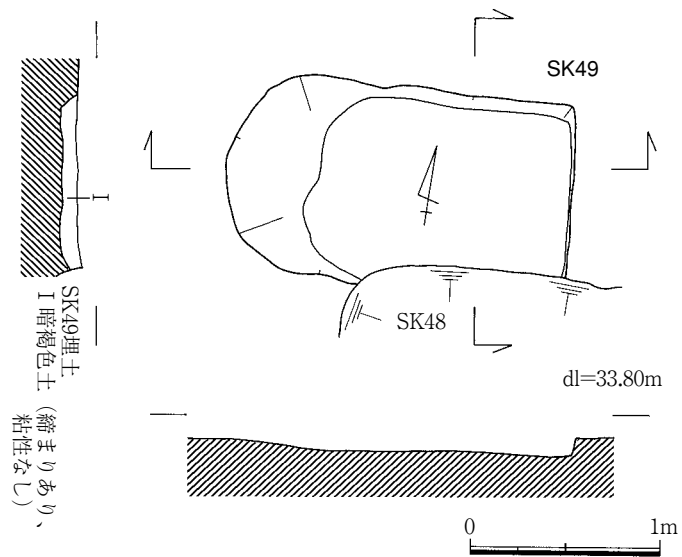


fig.100 SK49平面図・セクション図・エレベーション図

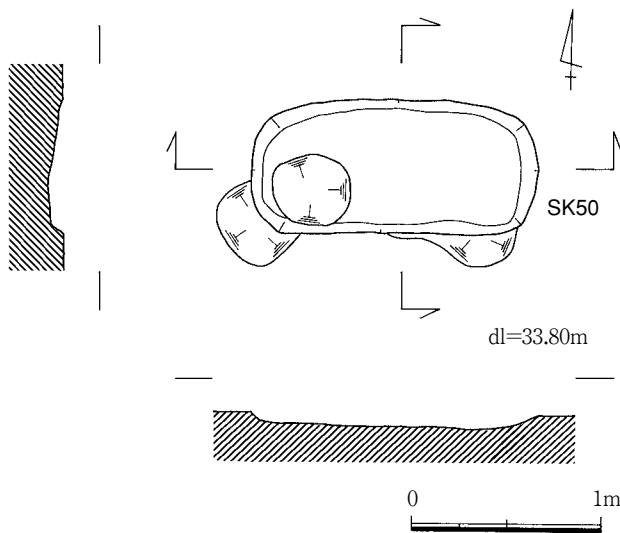


fig.101 SK50平面図・エレベーション図

SK50 (fig. 101)

調査区の西部北側に位置する。東南部及び西南部で柱穴を切っている。又、西部を後世の柱穴によって切られる。平面形態は隅丸長方形を呈し、長辺は1m50cm、短辺は70cmを測る。主軸方向はN-90°-Eである。底面には弱い起伏が存在し、北西方向に向かって緩やかな傾斜を成す。検出面からの深さは8cmである。遺構埋土は黄色土の混入した暗褐色土である。

出土遺物は皆無である。

SK51 (fig. 102)

調査区の西部北側に位置する。黄色土による枠が壁の一部と底面に残存している。北端部でSK52を、また東南部は柱穴の上部を切っている。平面形態は不整形円形を呈し、規模は直径約86cmを測る。底面は緩い凹面を成し、検出面からの深さ18cm。黄色土による枠は、壁を広く緩やかに成す。枠の規模は底面では直径57cm、壁では厚さ7.5cmを測る。底面に施されが強く、他で見られる黄色土枠と異なり黄色土の混入した暗灰色土であり、検出面では5cm～20cm大の円礫が多く存在する。

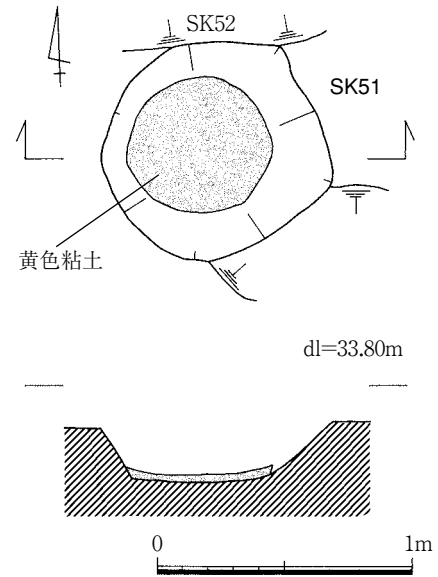
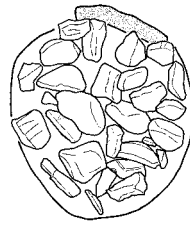


fig.102 SK51出土状況図・平面図・エレベーション図

出土遺物は皆無である。

SK52 (fig. 103)

調査区の西部北側に位置する。南端部をSK51に切られる。また、西部でSK53、東部で柱穴の掘り方を切っている。SK52は柱穴上に柱が立った状態で掘削されたか、柱穴の掘り方であった可能性がある。平面形態は隅丸長方形を呈し、規模は1m28cm、短辺66cmを測る。主軸方向はN-84°-Eである。底面は弱い凸面を成し、検出面からの深さは18cmである。遺構埋土は暗褐色土である。

出土遺物として図示できるものは無い。細片としては陶器2点が存在している。

SK52は18世紀代の遺構である。

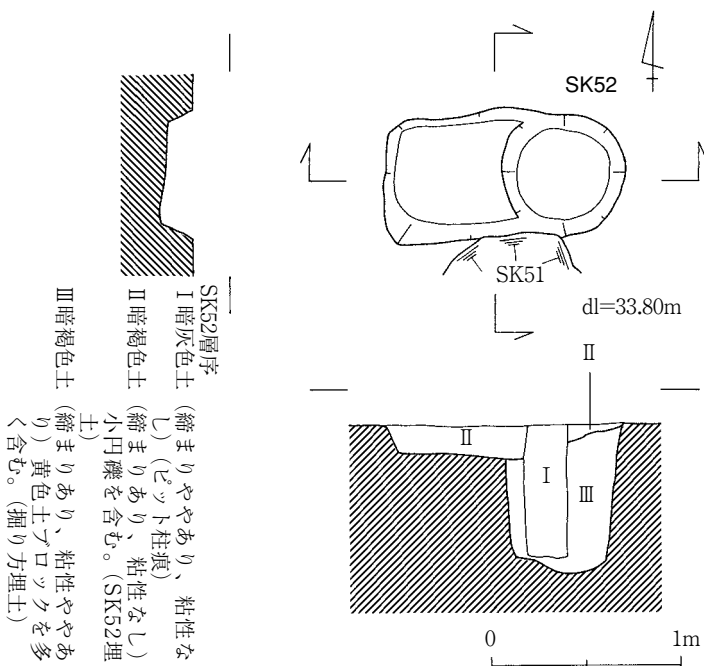


fig.103 SK52平面図・セクション図・エレベーション図

SK53 (fig. 104)

調査区の西部北側に位置する。西部及び東部に存在する柱穴を切っており、東端部ではSK52によって切られる。平面形態は隅丸長方形を呈すると考えられ、推定規模は長辺約1m20cm、短辺74cmを測る。主軸方向はN-90°-Eである。底面には緩やかな起伏が存在し、検出面からの深さは12cmである。

出土遺物は皆無である。

SK54 (fig. 105)

調査区の西部北側に位置する。黄色土混じりの暗褐色土を埋土とする柱穴群を西端部で切る。東部はSK35の掘り方によって切られる。平面形態は不整形を呈し、規模は長軸

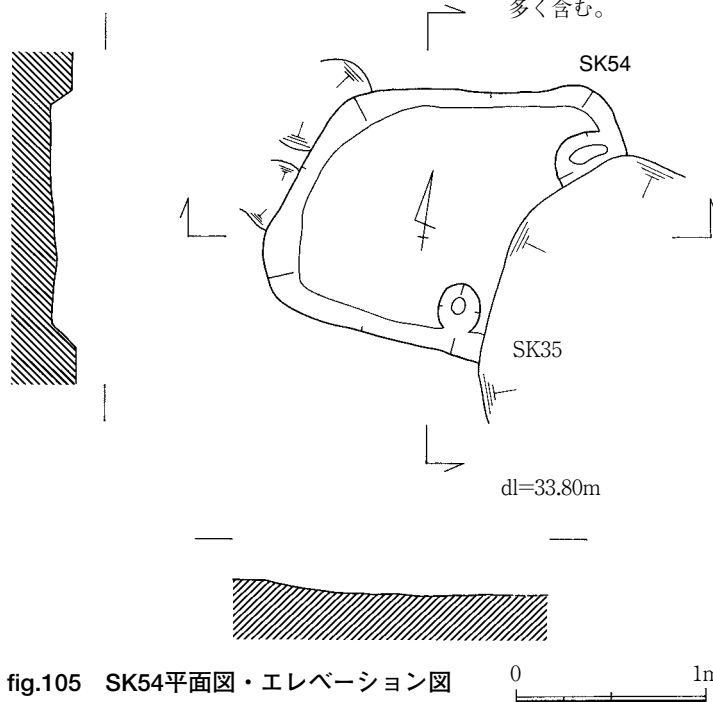


fig.105 SK54平面図・エレベーション図

SK53層序
 I 暗灰色土 (縮まりややあり、粘性なし) 礫を多く含む。
 II 暗褐色土 (縮まりあり、粘性なし) 黄色土をやや多く含む。
 III 暗褐色土 (ク、粘性ややあり) 黄褐色土ブロックを多く含む。

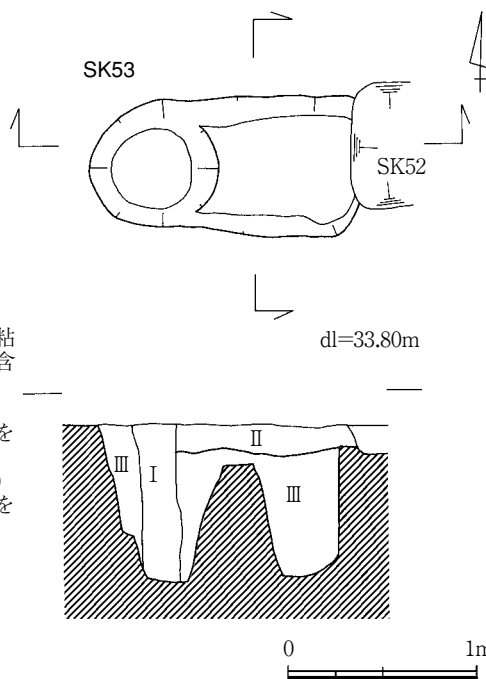


fig.104 SK53平面図・セクション図・エレベーション図

1m50cm、短軸1m20cmを測る。主軸方向はN-13°-Eである。底面には弱い凹凸が存在し、西側では壁が緩やかに立ち上がる。東北部には床面から30cmを測る落ち込みが存在するが埋土の違いは確認できない。検出面から床面までの深さは11cmである。遺構埋土は暗褐色土である。

出土遺物は皆無である。

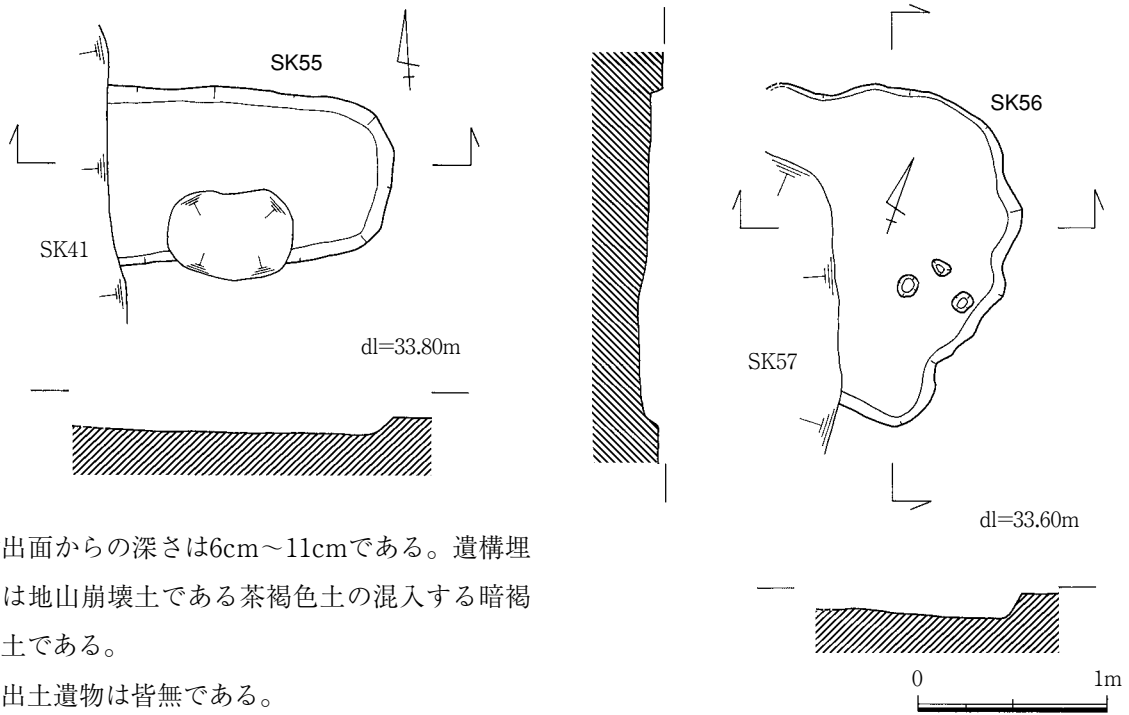
SK55 (fig. 106)

調査区の中央部に位置する。西部をSK41に、中央南側を後世の柱穴によって切られる。平面形態は隅丸長方形を呈すると考えられ、残存規模は長辺1m50cm、短辺92cmを測る。主軸方向はN-88°-Wである。底部は平らな面を成し、検出面からの深さは8cmである。遺構埋土は暗灰色土である。

出土遺物として図示できるものは無い。細片としては磁器1点と陶器1点(甕か鉢の胴体部)が存在する。

SK56 (fig. 106)

調査区の西部北側に位置する。西部をSK57によって切られる。平面形態は不整形であり、規模は長軸1m70cm、短軸1m50cmを測る。長軸方向はN-6°-Eである。底面は南東方向への緩い傾斜を持ち、



検出面からの深さは6cm～11cmである。遺構埋土は地山崩壊土である茶褐色土の混入する暗褐色土である。

出土遺物は皆無である。

fig.106 SK55・SK56平面図・エレベーション図

SK57 (fig. 107)

調査区の西部北側に位置する。西側に存在するSK61や南に隣接するSK74と同時に存在したとは考

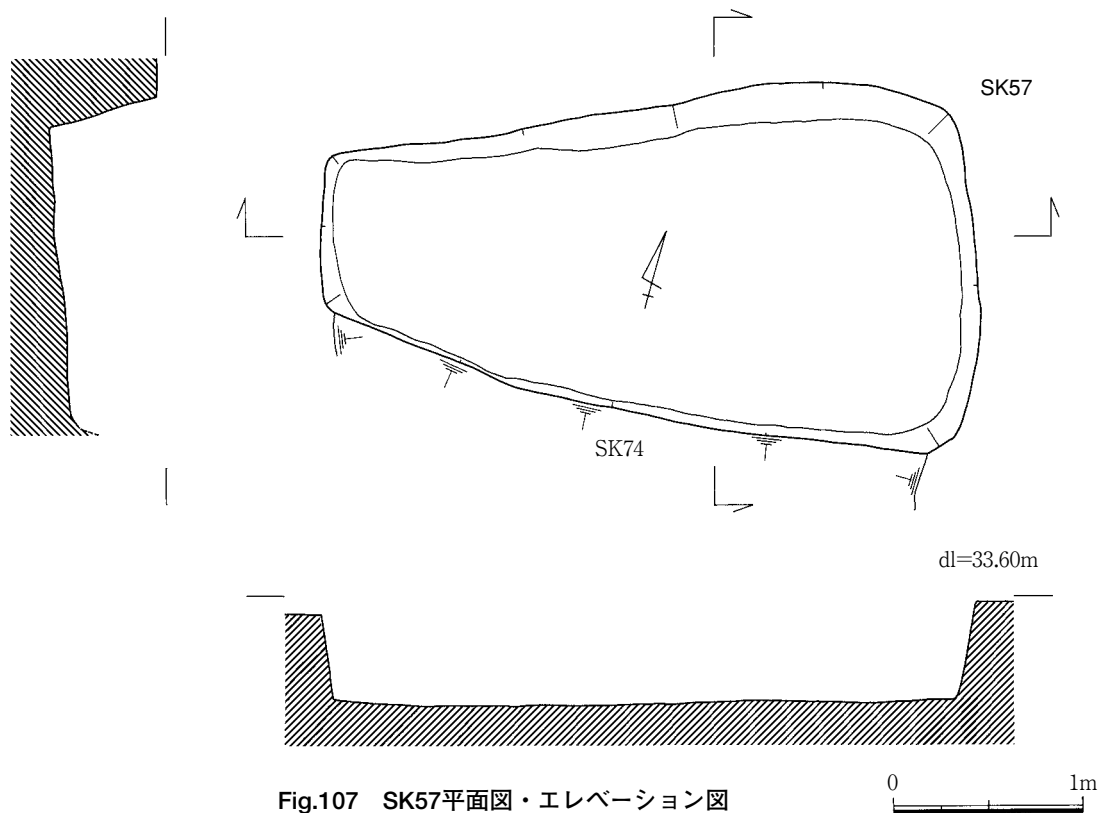


Fig.107 SK57平面図・エレベーション図

えられないが、新旧関係は不明である。平面形態は不整台形を呈し、規模は長軸3m50cm、短軸は80cm～1m80cmを測る。長軸方向はN-73°-Eである。底面は平らな面を成すが、西部には床面上に円形を呈す小溝が存在した。桶状の構造物底部圧痕であろうか。検出面からの深さは50cmである。遺構埋土としては黄色土が混入する暗灰色土が存在する。

出土遺物は皆無である。

SK58 (fig. 108)

調査区の中央部に位置する。遺構は浅い竪穴状の落ち込みに含まれている。平面形態は長方形を呈し、規模は長辺3m65cm、短辺80cmを測る。主軸方向はN-87°-Eである。底面は弱い凸面を成し、検出面からの深さは最大で10cmである。遺構埋土は灰色土単純一層である。

出土遺物の中で図示できるものは2点(fig. 108-1・2)である。1は鞆羽口である。吹き口部分であり、鉄滓が熔着する。2は陶器皿であり、肥前内野山製品。細片としては磁器5点、陶器11点、土師質土器5点や弥生土器3点が存在する。

SK58の帰属時期は19世紀代と考えられる。

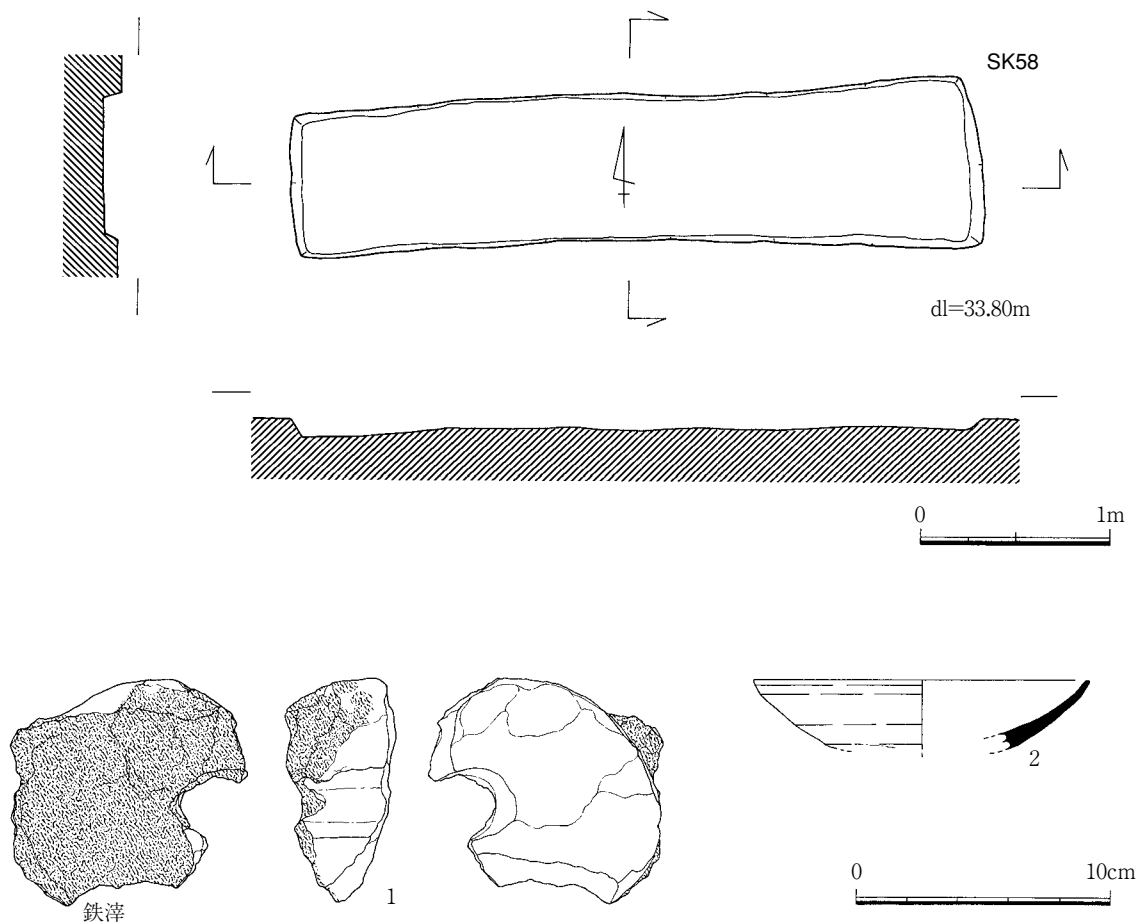


fig.108 SK58平面図・エレベーション図・出土遺物実測図

SK59 (fig. 109)

調査区の中央部北側に位置する。北部と西部で各々SD1とSK68の一部を切っている。SK36の西に隣接し、形態及び規模が近似することから同時期に存在した可能性を有する。黄色土による枠が底面には存在するものの、壁部分には残存しない。平面形態は隅丸方形を呈し、規模は一辺が1m30cmである。主軸方向は真北である。底面は鍋底状を呈し、検出面からの深さは53cmである。土坑の掘り方壁には枠の外回りに施されたと考えられる列石が南側から西側に掛けて残存している。これは壁の中位に段部を作り出し、その上に20cm大の円磔を用いて丁寧に並べられている。遺構埋土は黄色土混じりの暗灰色土である。

出土遺物の中で図示できるものは無い。細片としては磁器1点(青磁)、陶器9点と土師質土器1点が存在している。

SK59の帰属時期は18世紀末～19世紀である。

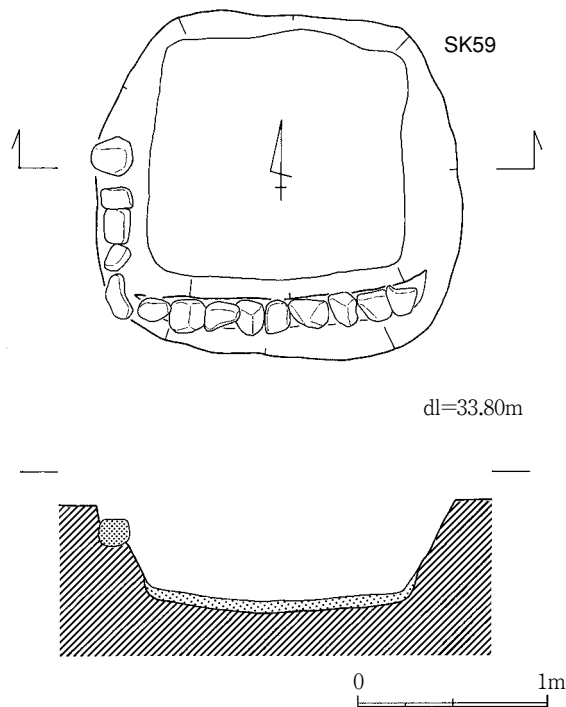


fig.109 SK59平面図・エレベーション図

SK60 (fig. 110)

調査区の中央部東側に位置する。区画溝と考えられるSD4とSD5に挟まれた部分(道跡か)に存在する。平面形態は不整楕円形を呈し、規模は長径1m28cm、短径1mを測る。主軸方向はN-18°Wである。底部は二段掘りの様相を呈し、中央北寄り深く、壁は東側では緩やかである。検出面から床面までの深さは24cmである。遺構埋土は暗灰色土単純一層である。

出土遺物の中で図示できるものは無い。細片としては磁器1点と陶器1点が存在する。

SK60の帰属時期は18世紀代か。

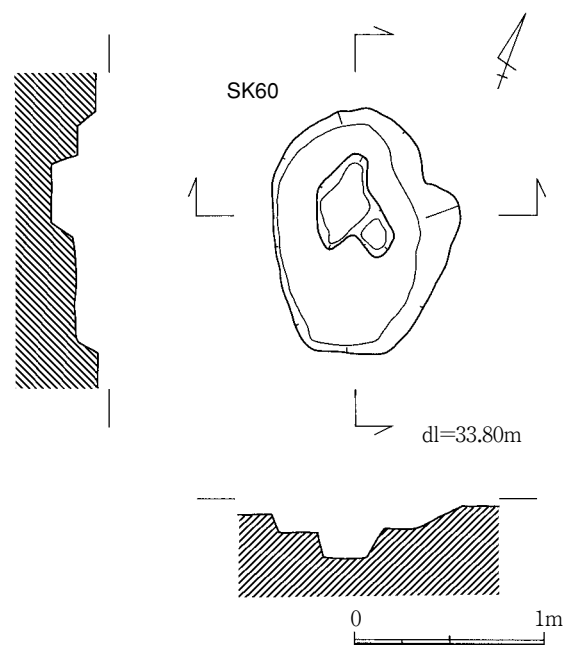


fig.110 SK60平面図・エレベーション図

SK61 (fig. 111)

調査区の西部北側に位置する。SK57に隣接して存在し、SK73東端に位置することから関連が考えられる。平面形態は不整長方形を呈し、規模は長辺2m50cm、短辺84cmを測る。主軸方向は $N-76^{\circ}E$ である。底部は弱い凹面を成し、西部には床面からの比高差8cmを測

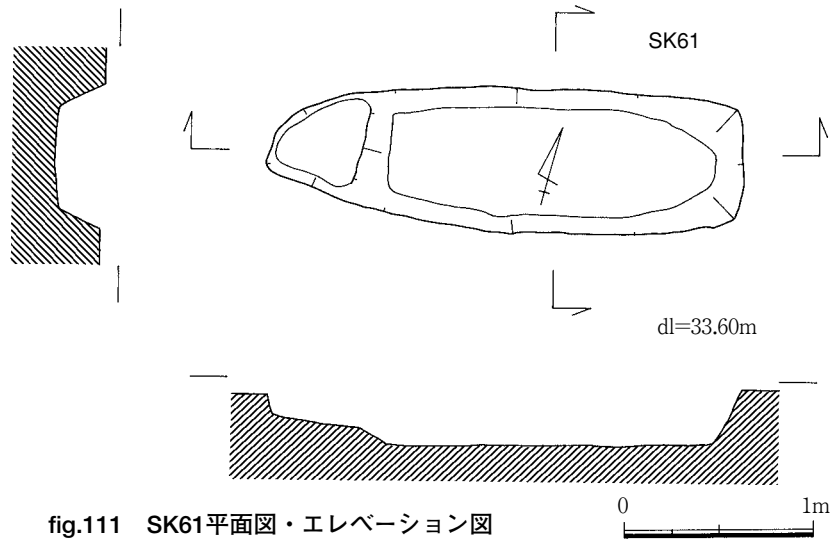


fig.111 SK61平面図・エレベーション図

る段部が存在する。検出面から床面までの深さは30cmである。遺構埋土は暗褐色土単純一層である。出土遺物は皆無である。

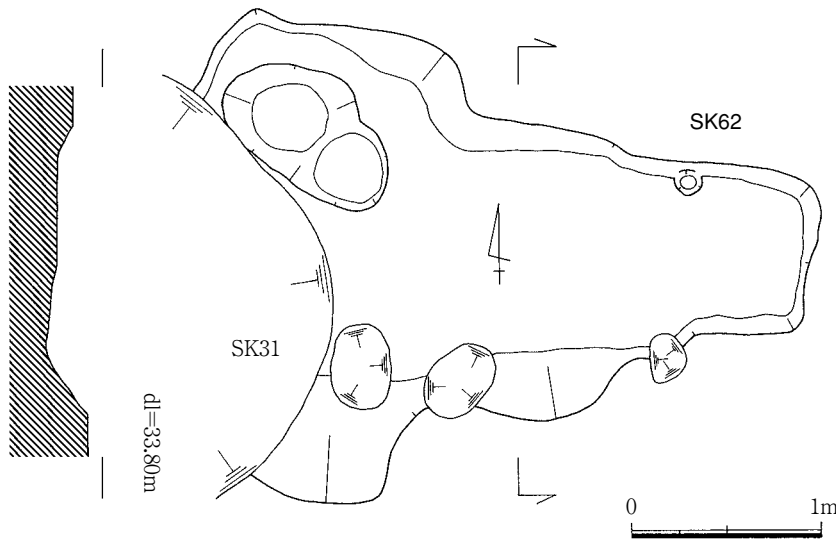


fig.112 SK62平面図・エレベーション図

SK62 (fig. 112)

調査区の中央部に位置する。西側部分をSK31の掘り方によって、又後世の柱穴群によって土坑内を数カ所で切られる。平面形態は不整形を呈し、規模は長軸3m30cm、短軸2m25cmを測る。長軸方向は $N-67^{\circ}W$ である。底面は緩やかな凸面を成し、北西部分には床面からの深さ30cmと37cmの

柱穴状の落ち込みが存在する。遺構埋土は暗灰色土である。

出土遺物として図示できるものは無い。細片としては磁器1点と陶器3点が存在する。

※ SK62は調査・整理段階ではSK38-2を名称として使用する。

SK63(fig. 113)

調査区の中央部西側に位置する。東北部分をSK39の掘り方によって切られる。平面形態は隅丸長方形を呈し、規模は長辺4m96cm、短辺1m70cmを測る。主軸方向はN-86°-Wである。底面には凹凸面が存在し、検出面から床面までの深さは38cmを測る。遺構埋土は主に2層が存在する。I層(暗褐色土層)、II層(黒褐色土層)であり、上層であるI層には黒色土のブロックが存在する。

出土遺物として図示できるものは2点(fig. 113-1・2)である。1は土師質土器の小皿である。2は磁器染付の碗であり、肥前産。細片としては土師質土器1点が存在する。

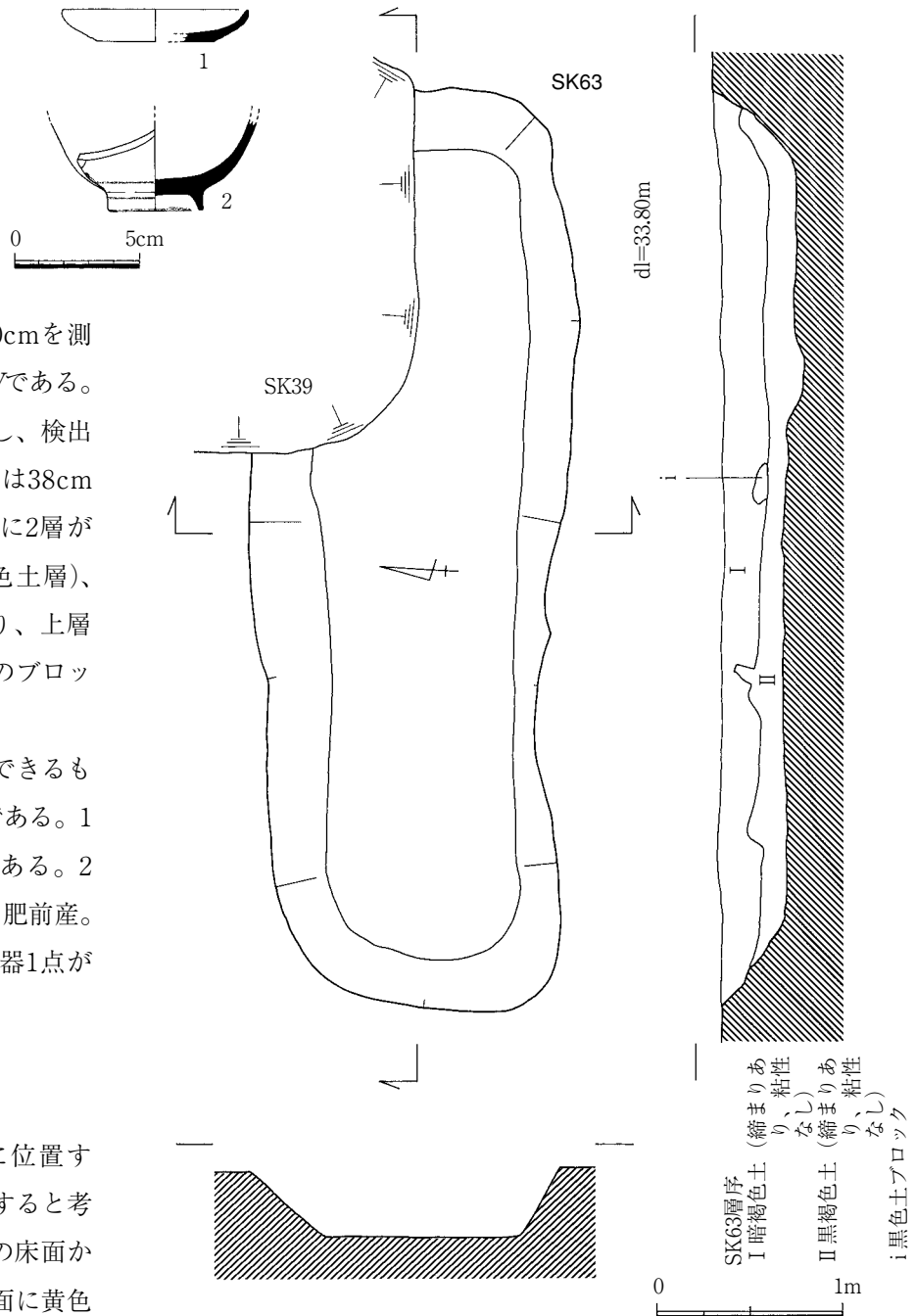


fig.113 SK63平面図・セクション図・エレベーション図・出土遺物実測図

SK64 (fig. 114)

調査区の西部北側に位置する。竪穴状の方形を呈すると考えられる浅い落ち込みの床面から検出された。壁と底面に黄色土による枠を持つ。平面形態は隅丸長方形を呈し、規模は長辺

1m40cm、短辺1m20cmを測る。主軸方向はN-80°-Eである。底面は緩い凹面を成し、検出面からの深さは48cmである。黄色土による枠は厚さ約8cmで構築されており、上位は掘り方部分の埋土を伴って崩壊している。外回りには円礫の存在は認められない。遺構埋土は3層が存在する。I層(暗褐色土層)は上部の落ち込みに伴う埋土と同じである。II層(褐色土層)は地山である茶褐色土の崩壊土と考えられる。III層(黄色土層)は枠の崩壊土である。これは枠が故意に破壊された後やや時間を置いた後に、上部の落ち込み部分と共に埋積された可能性を示す。また、土坑掘り方の外側には規模の小さい柱穴

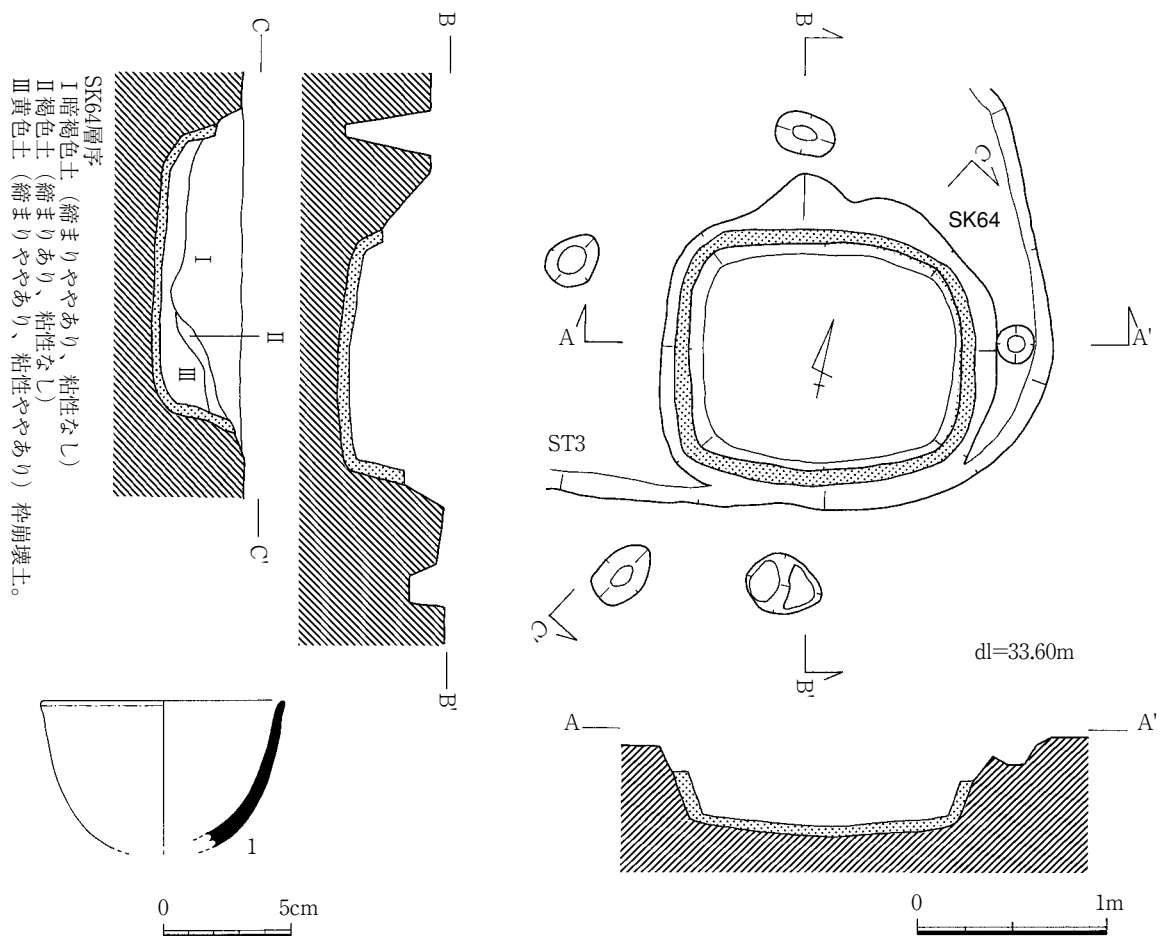


fig.114 SK64平面図・セクション図・エレベーション図・出土遺物実測図

が5個存在しており、SK64の上屋構造に伴う可能性がある。

出土遺物として図示できるものは1点(fig. 114-1)である。1は陶器の碗である。

SK64の帰属時期は18世紀代の可能性がある。

SK65 (fig. 115)

調査区の西部に位置する。SK72及びSK73によって切られる。平面形態は主体部で隅丸長方形を呈し、掘り方は不整形を呈する。規模は主体部が長辺1m30cm、短辺90cmを測り、掘り方部分は一辺が1m60cmを測る。主軸方向はN-

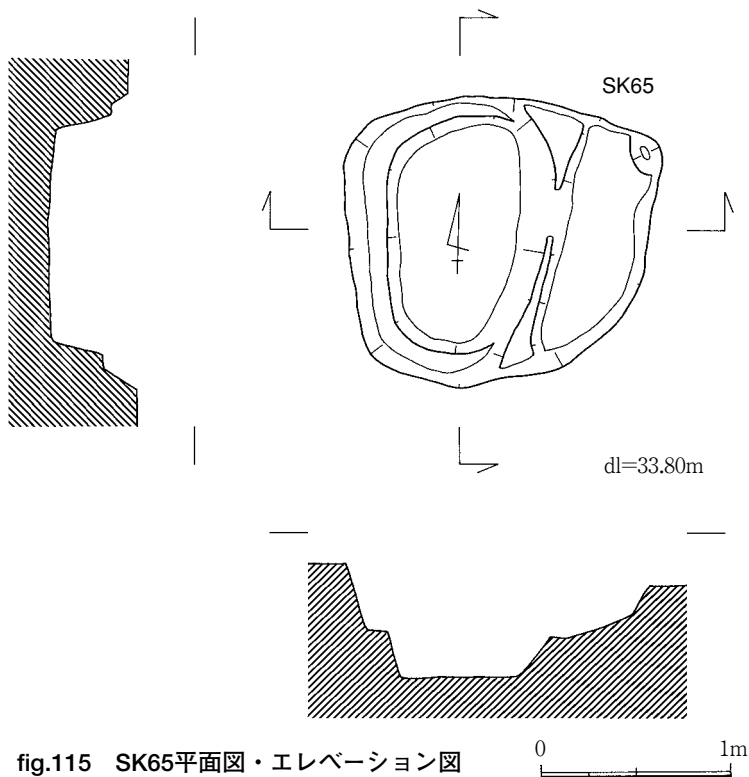


fig.115 SK65平面図・エレベーション図

6°Eである。底面は概ね平らな面を成し、北壁から西壁及び南壁に掛けては壁の中位に狭い段部が存在する。東側には緩い傾斜を持つ幅広い段部が形成されている。検出面から床面までの深さは59cmである。遺構埋土は黒褐色土と茶褐色土が混ざり合った土である。

出土遺物として図示できるものは無い。

SK65の帰属年代はSK73との関わりを考慮すると18世紀代か。

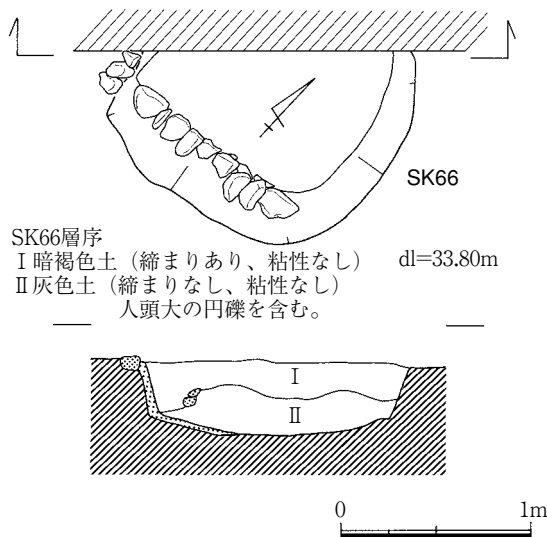


fig.116 SK66平面図・セクション図

れている。

出土遺物の中で図示できるものは無い。細片としては陶器が1点存在する。

SK67 (fig. 117)

調査区の中央部西側に位置する。東南部をSK32の掘り方によって切られる。赤褐色に発色する枠が壁と底面に存在する。平面形態は不整円形を呈すると考えられ、規模は直径約1m80cmを測る。底面は概ね滑らかな面を成し、検出面からの深さは70cmを測る。枠は厚さ約5cmで構築されており、外回りには円礫の存在は認められない。遺構埋土は暗褐色土であり、20cm大の円礫を含んでいる。

出土遺物として図示できるものは無い。細片としては磁器1点が存在する。

SK67の帰属時期はSK32に先行する18世紀末から19世紀初頭か。

SK66 (fig. 116)

調査区の西部北端に位置する。調査区の北壁に隔されている。黄色土の枠が壁と底面の一部に残存する。平面形態は隅丸方形を呈すると考えられ、残存規模は一辺が1m10cmを測る。主軸方向はN-7°-Wである。底面は鍋底状を呈し、黄色土の欠損部分では凹凸面を成す。検出面から床面までの深さは40cmである。黄色土による枠は厚さ約5cmであり、外周りには10cm~20cm大の円礫が丁寧に並べられている。遺構埋土は2層が存在している。I層は暗褐色土により、II層は灰色土による。II層には人頭大の円礫が含ま

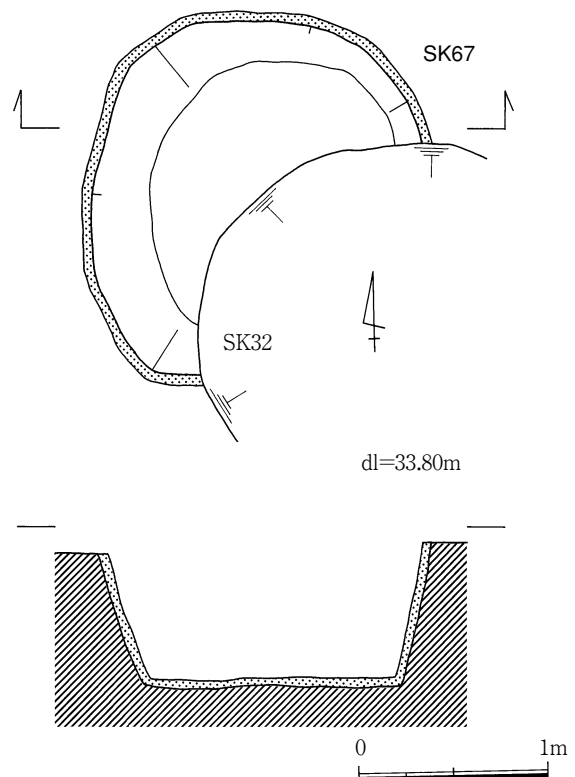
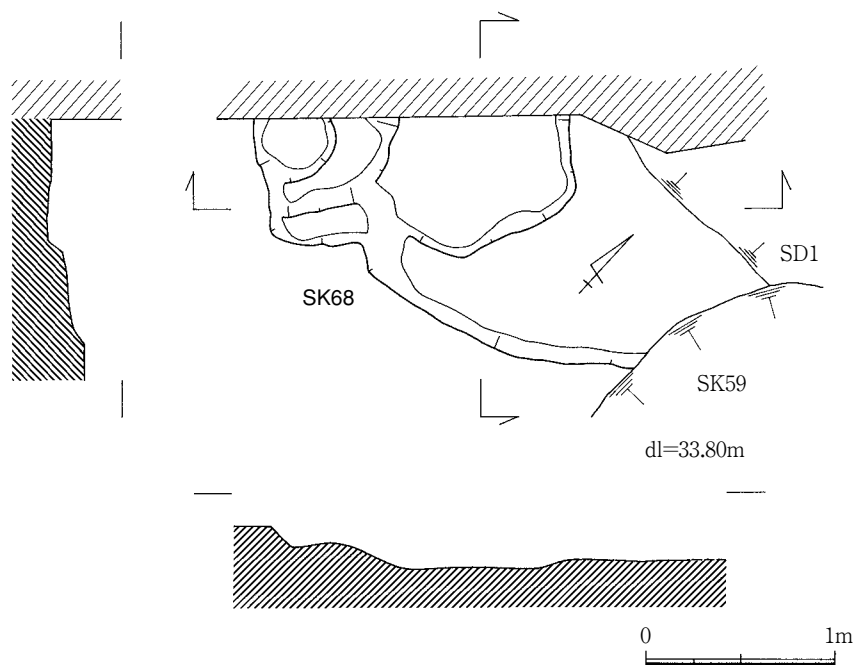


fig.117 SK67平面図・エレベーション図

SK68 (fig. 118)

調査区の西部北端に位置する。東部をSK59によって切られる。北部に存在するSD1と西部に存在する柱穴との先後関係は判然としない。平面形態は不整形を呈し、残存規模は長軸が1m80cm、短軸



が1m30cmである。長軸方向はN-80°-Eである。底面には幾つかの平らな段部が存在する。検出面からの深さは最大で約22cmである。遺構埋土は暗褐色土単純一層である。出土遺物の中で図示できるものは無い。細片としては陶器1点と土師質土器1点が存在する。

fig.118 SK68平面図・エレベーション図

SK69 (fig. 119)

調査区の中央部に位置する。SK32の掘り方によって切られており、遺構の全体規模は不明である。残存規模は長軸1m40cm、短軸40cmを測る。残存長軸方向はN-80°-Wである。底部は平らであり、検出面からの深さは16cmである。遺構埋土は暗褐色土であり、検出面では15cm~20cm大の円礫が多く存在していた。

出土遺物として図示できるものは1点(fig.120-1)で

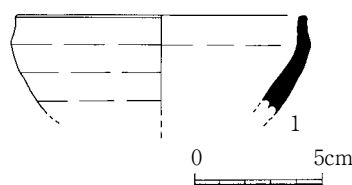


fig.120 SK69出土遺物実測図

ある。1は陶器の天目形碗であり、瀬戸・美濃産。

SK69の帰属時期は17世紀~18世紀か。

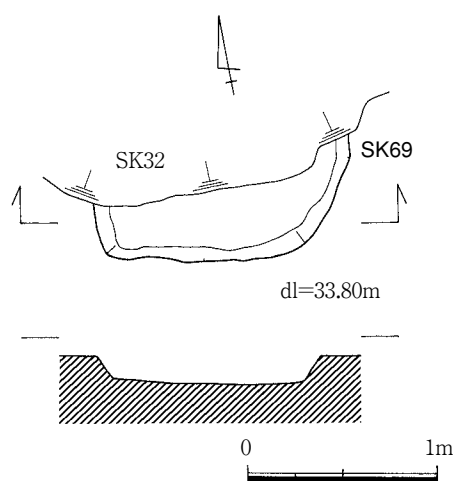


fig.119 SK69平面図・エレベーション図

SK70 (fig. 121)

調査区の中央部に位置する。土坑は数カ所で円礫と黄色土を遺構埋土とする後世の柱穴群によって切られる。平面形態は東西で独立した形態を示す。検出時点では2基の土坑として扱っていたが明

確な切り合いを認め得ない為、ここでは一基の土坑として報告する。東側部分は平面形態隅丸長方形を呈し、規模は長辺1m30cm、短辺80cmを測る。主軸方向は北である。底面は緩やかな凸面を成し、検出面からの深さは10cm~14cmである。西側部分は平面形態不整形を呈し、確認規模は長軸1m、短軸60cmを測る。底面は鍋底状を成し、検出面からの深さは15cmである。遺構埋土は黄色土の混入した暗褐色土である。

出土遺物は皆無である。

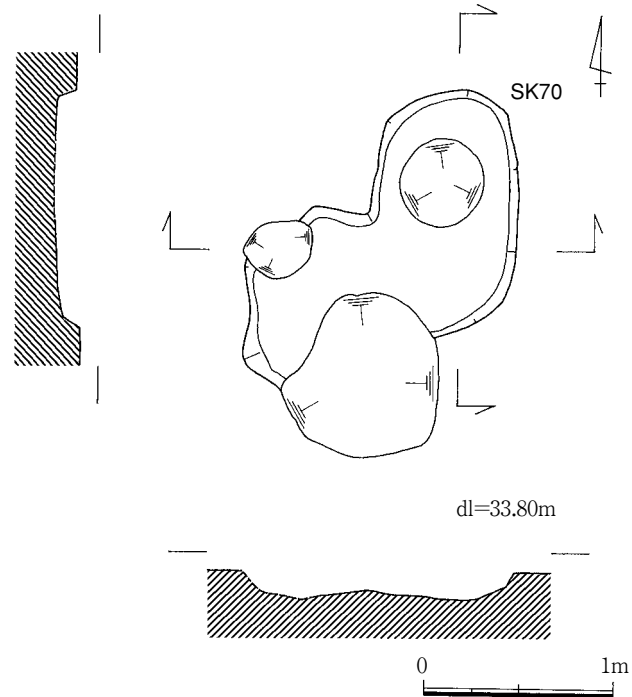


fig.121 SK70平面図・エレベーション図

SK71 (fig. 122)

調査区の西部に位置する。東西方向の溝状を呈した細長い土坑である。溝としてのつながりが不明確であり、西部に存在する急な段部が存在しており人為的な掘削が施されている。また、SK71は北側に存在する浅い土坑SK73を切っている。規模は長さ9m30cm、幅は75cmを測る。主軸方向はN-83°Eである。断面形は舟底形を呈し、西部には床面からの比高差15cmの段部が存在する。検出面からの深さは東部で38cmであり、西部では23cmである。遺構埋土は黒褐色度単純一層である。

出土遺物として図示できるものは無い。細片としては磁器1点、陶器5点、須恵器1点と土師質土器8点が存在する。

SK71はSK73よりも新しいことから、18世紀末以降の時期が考えられる。

SK72 (fig. 122)

調査区の西部に位置する。SK71の南側で平行して存在する溝状の遺構である。西端部ではSD11と重なり新旧関係は判然としない。主軸方向はN-85°Eである。確認延長は9m90cmであり、幅は27cm~69cmを測る。断面形態は逆台形を呈し、検出面からの深さは7cmである。遺構埋土は暗褐色土単純一層であり、SK73の遺構埋土とは不可分である。

出土遺物は皆無である。

SK72の帰属時期はSK73と同じ遺構埋土であることを考慮して18世紀代と考える。

SK73 (fig. 122)

調査区の西部に位置する。南部はSK71によって切られている。西側はSD11と重なり新旧関係は不明である。主軸方向はN-82°Eである。確認延長は5m85cmであり、幅は75cm~1m50cmである。底

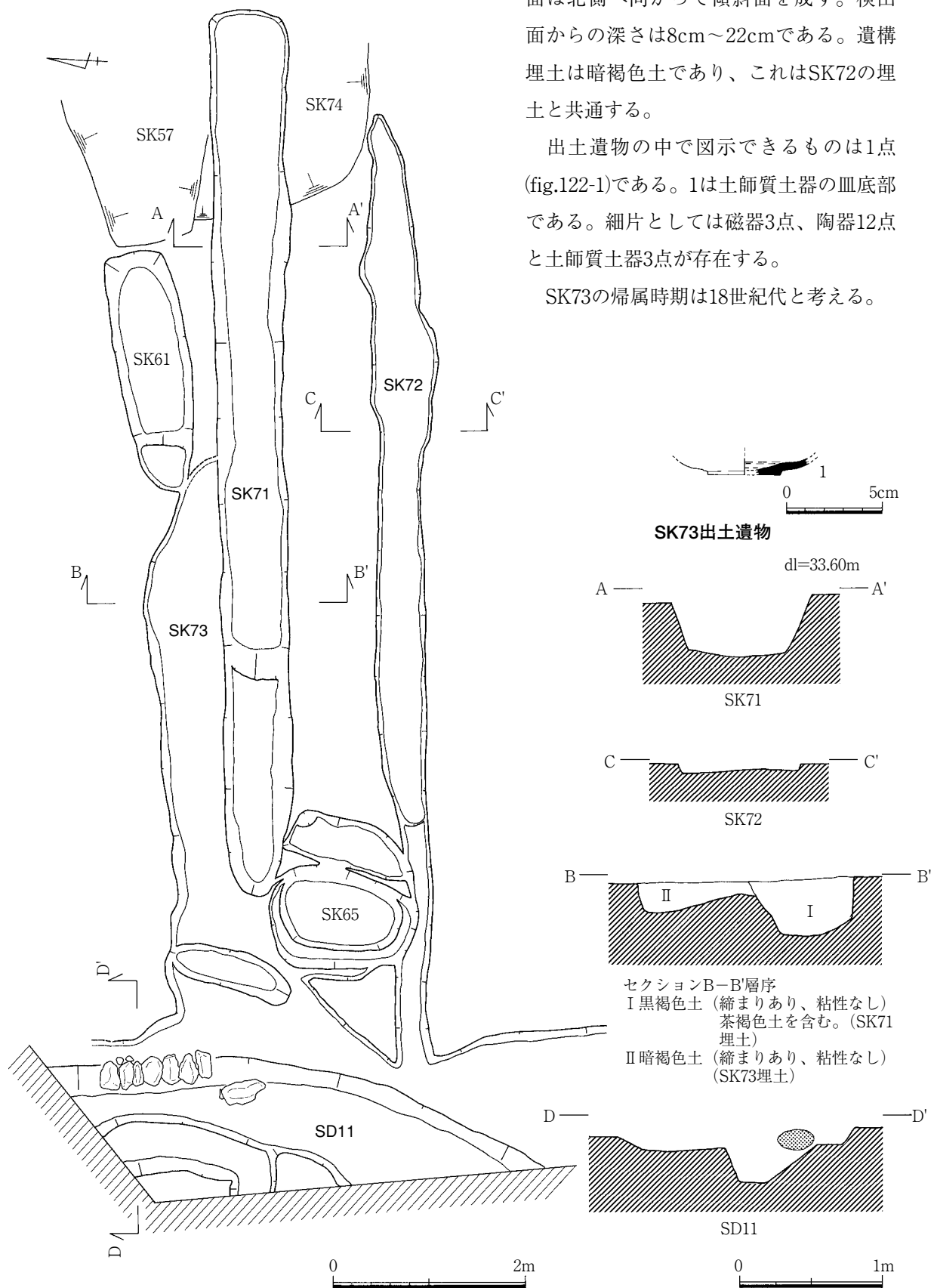


fig.122 SK71~SK73・SD11 (北) 平面図・セクション図・エレベーション図・出土遺物実測図

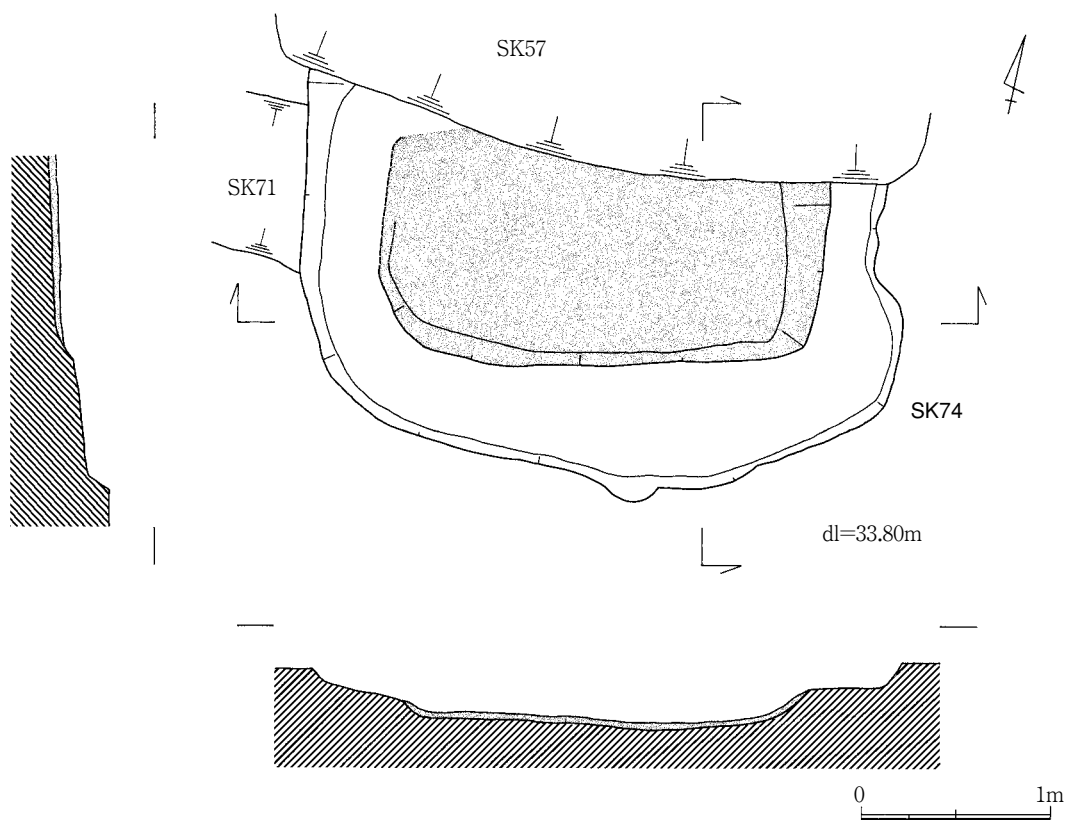


fig.123 SK74平面図・エレベーション図

SK74 (fig. 123)

調査区の西部に位置する。北部をSK57によって切られ、西部ではSK71を切る。平面形態は残存部分から推して、隅丸方形に近いものと考えられる。残存規模は長辺3m20cm、短辺1m60cmを測る。残存部における長軸方向はN-75°Eである。底面は弱い凹凸面を成すが、中央部分を中心に厚さ4cm程度の黄色粘土を敷き詰めて成形している。壁には幅40cm程度の平坦な段部が存在する。検出面から床面までの深さは中央部分で35cm、周辺の段部では約13cmである。遺構埋土は暗褐色土単層一層である。

出土遺物として図示できるものは1点(fig.124-1)である。1は磁器染付の皿である。細片としては磁器5点、陶器2点と土師質土器6点が存在する。

SK74の帰属時期は19世紀代と考えられる。

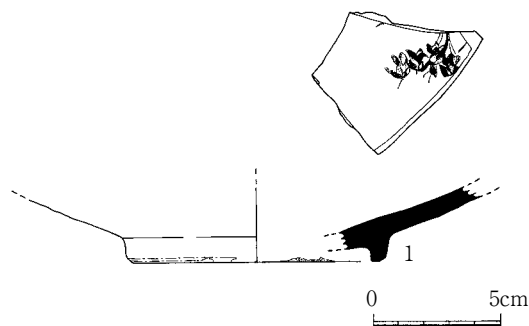


fig.124 SK74出土遺物実測図

SK75 (fig. 125)

調査区の中央部西側に位置する。平面形態は不整円形を呈し、規模は直径1m30cmを測る。底面は鍋底を呈するが、壁際には幅約10cmの狭い段部が存在する。検出面からの深さは中央部で66cm、段部では43cm～57cmである。遺構埋土は暗褐色土であり、5cm～20cm大の円礫を含む。又、埋土下

位には黄色土ブロックが見られたことから壁際に存在する段部上に黄色土を用いた枠を構築していた可能性が高い。

出土遺物の中で図示できるものは2点(fig.125-1・2)である。1は磁器染付小碗。2は須恵器壺底部である。細片としては磁器2点(うち1点は瀬戸・美濃産の水滴か)、陶器2点、土師質土器2点である。

SK75の帰属時期は19世紀と考えられる。

※ SK75は調査・整理段階ではSK33-3を使用する。

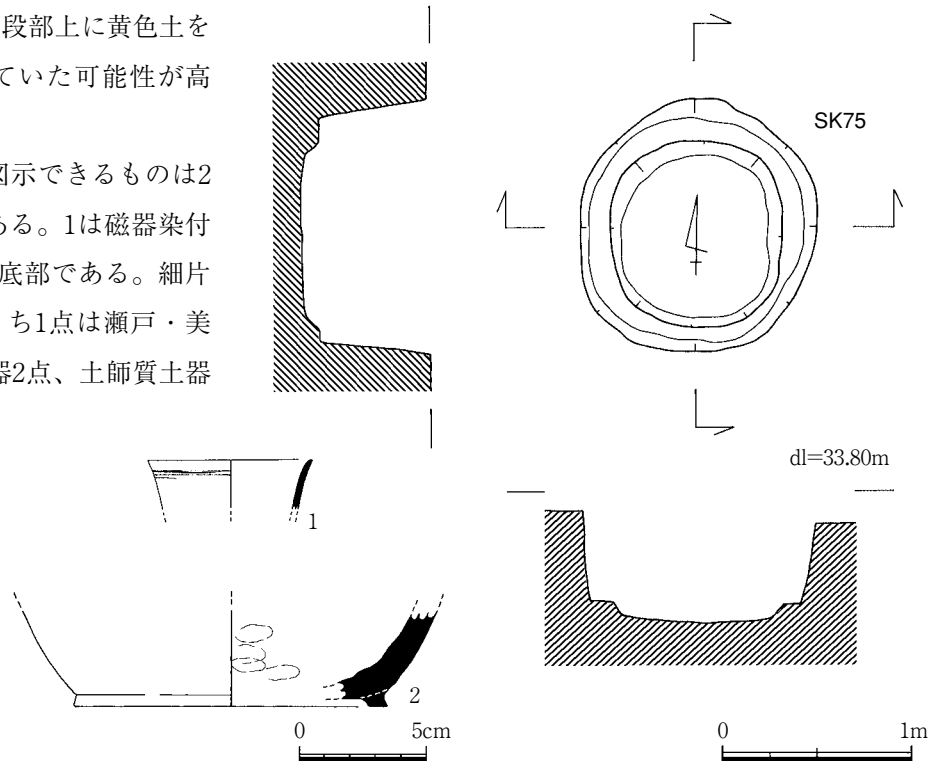


fig.125 SK75平面図・エレベーション図・出土遺物実測図

(3) 竪穴状遺構

調査区内には調査当初土坑として扱っていたものの中で、規模が大きく、平面形態が不明確なものが存在していた。また、これらは検出面からの深さもやや浅いものであり、同時期乃至は時間差のある連続した遺構群と考えることは出来ない。これは、遺構埋土において殆どのものが単純一層であることから明らかである。柱穴群が集中して存在する場所に隣接しており、柱穴群内には存在しないのが特徴である。主軸方向から見た場合、区画溝に対してある程度制約を受けているものと考えられ、屋敷地内の中心的な家屋の土間的な存在であろうか。上屋構造を伴うものかは不明である。ここでは規模の大きい3例についてST(竪穴状遺構)として扱うこととする。

ST1 (fig. 126)

調査区の中央部に位置する。東端はSD5、南辺の一部はSK29、遺構内は後世の柱穴群によって数カ所を切られて存在し、南東部でSK38を切る。平面形態は不整形であり、規模は東西方向に長さ9m20cmに及ぶ。東西の両端部で南側への屈曲が見られ、特に西側では顕著である。底面は概ね平らであるが、中央部分に向かって緩やかな傾斜を持つ。検出面からの深さは22cmである。遺構埋土は暗灰色土である。

出土遺物の中で図示できるものは2点(fig.126-1・2)である。1は磁器小碗である。2は陶器の香炉である。細片としては磁

器9点、陶器14点と土師質土器3点が存在する。

ST1は19世紀中頃以降に埋積されたものである。

ST2 (fig. 127)

調査区の中央部に位置する。中央部分ではSK58に切られる。西端部と東端部で各々SK62とSD5に重なるが先後関係は不明であった。規模は東西方向に長さ8m85cm、幅は1m65cm～3m60cmを測る。長軸方向はN-88°Eである。東部と北部では段部を持って浅く、西部ではやや深い。底面は何れも平らな面を成し、壁は南側で緩やかである。遺構埋土は暗灰色土である。

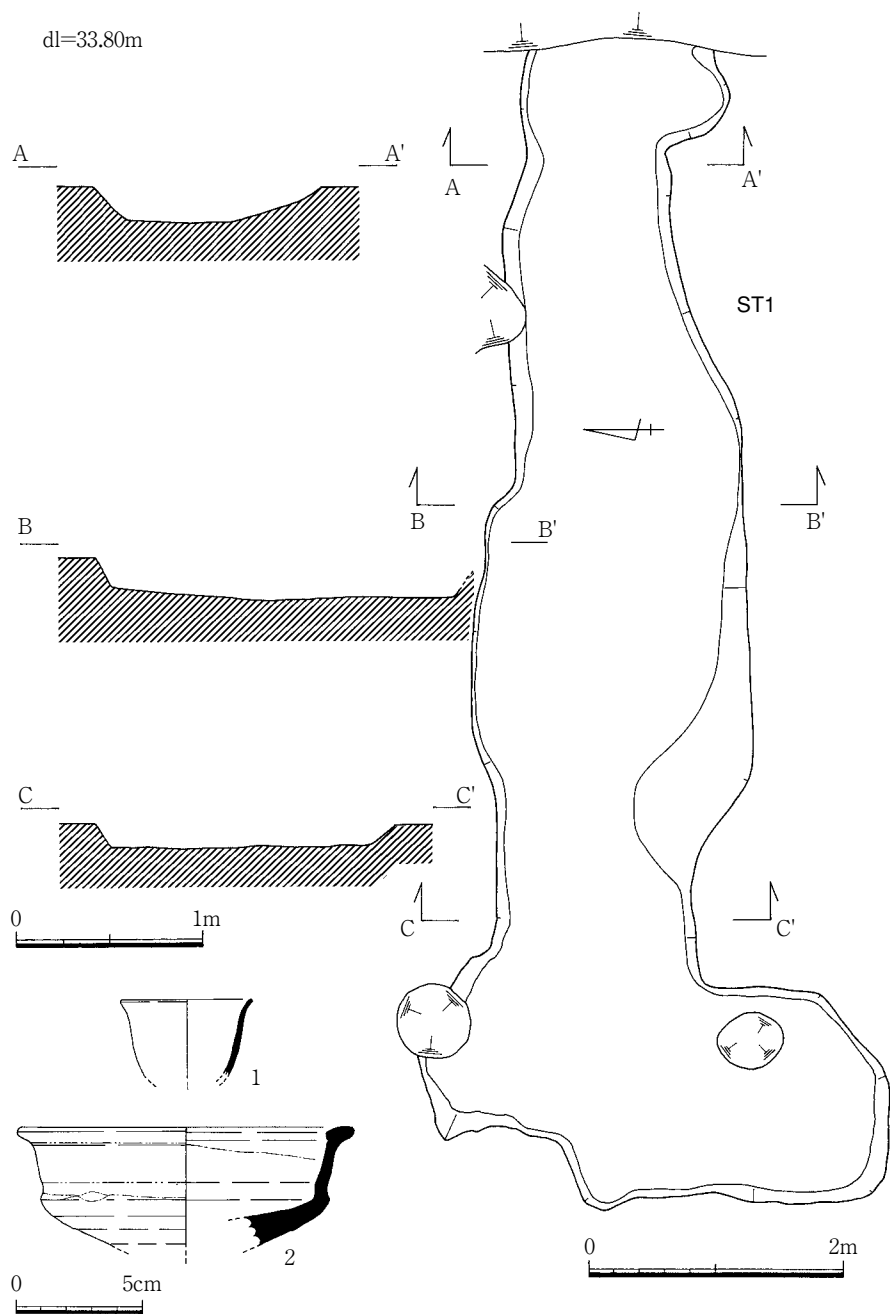
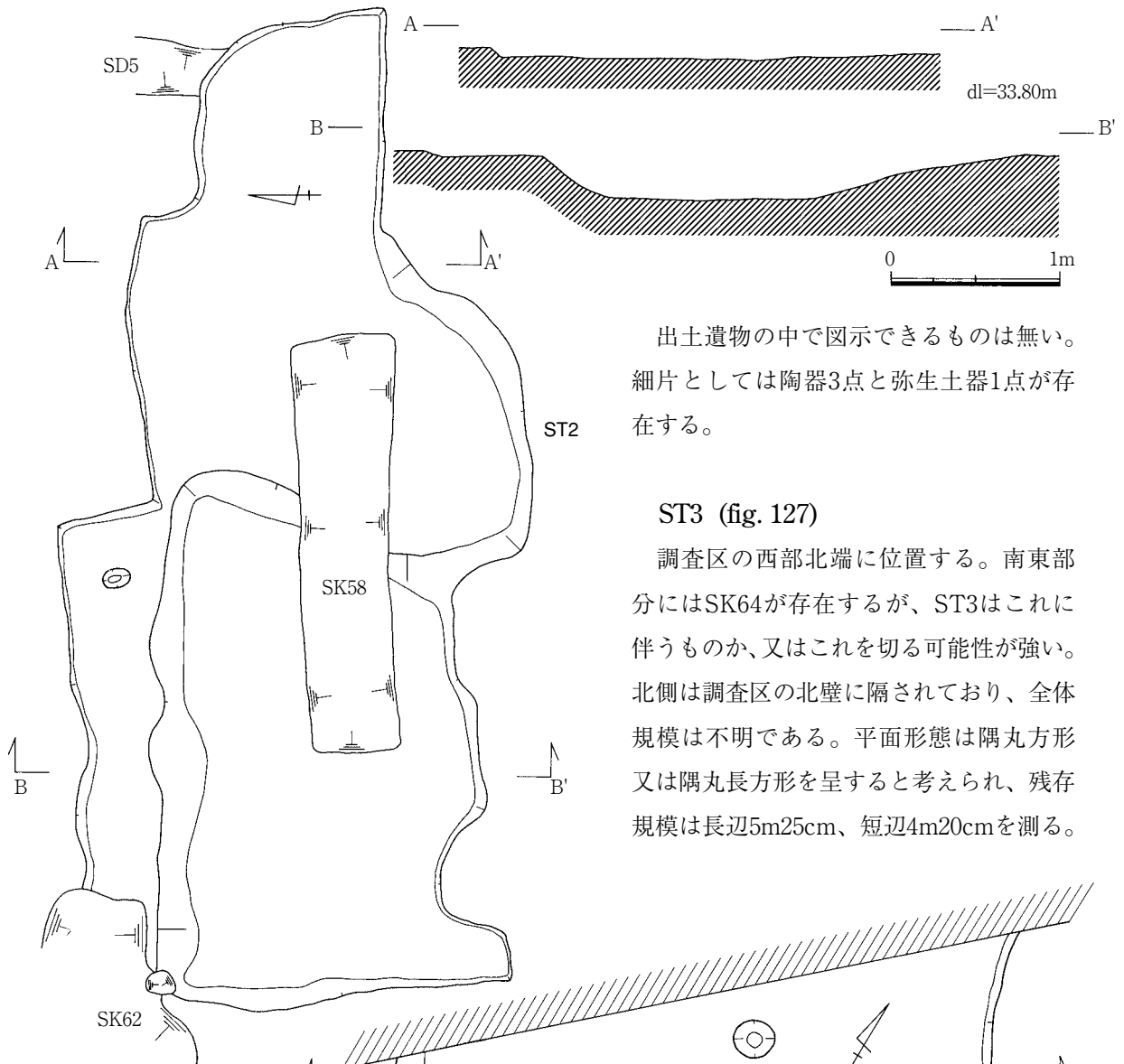


fig.126 ST1平面図・エレベーション図・出土遺物実測図



出土遺物の中で図示できるものは無い。細片としては陶器3点と弥生土器1点が存在する。

ST3 (fig. 127)

調査区の西部北端に位置する。南東部分にはSK64が存在するが、ST3はこれに伴うものか、又はこれを切る可能性が強い。北側は調査区の北壁に隔されており、全体規模は不明である。平面形態は隅丸方形又は隅丸長方形を呈すると考えられ、残存規模は長辺5m25cm、短辺4m20cmを測る。

長軸方向はN-75°Eである。底面は概ね平らな面を成すがSK64に関わる可能性のある柱穴が存在している。柱穴群の規模は22cm~32cmの径を持つ円形か楕円形を呈し、検出面からの深さは10cm~45cmである。南部には2m余りの長さを

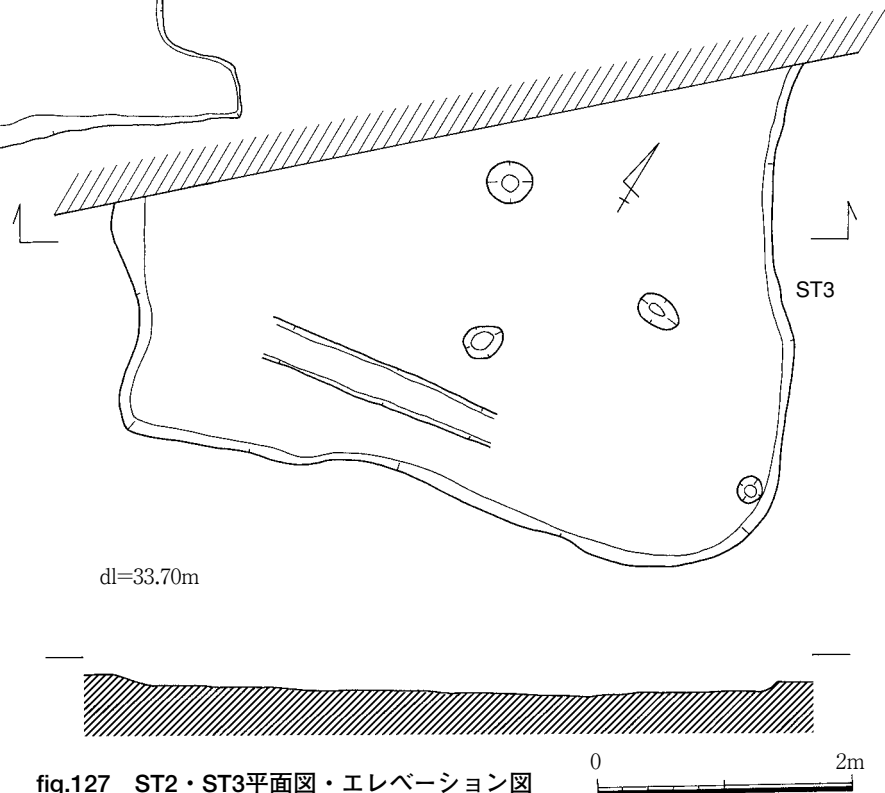


fig.127 ST2・ST3平面図・エレベーション図

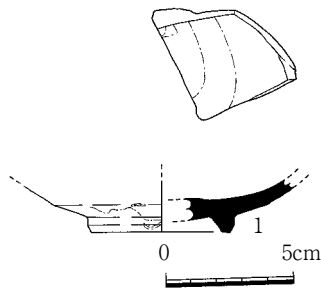


fig.128 ST3出土遺物実測図

持つ溝状の落ち込み部分が存在し、床面からの深さは5cmを測る。遺構埋土は暗褐色土単純一層である。

出土遺物として図示できるものは1点(fig.128-1)が存在する。1は陶器の皿であり、嬉野内野山窯産17世紀後半から18世紀前半である。その他に細片としては磁器5点、陶器8点と土師質土器9点が存在する。

ST3の帰属時期は18世紀後半から19世紀か。

(4)溝状遺構

SD1 (fig. 137-②,③,④)

調査区の北端に位置し、現在の地割り形態に沿うように東西の方向性を持つ溝である。東及び西方に調査区外に延びると考えられる。西部では南側に平行する溝が存在する可能性があるが、先後関係は明らかでなくSD1として扱う。東端ではSK7、中央部ではSK15、によって大きく切られる。また、後世の柱穴によって部分的に切られる。断面形態は逆台形を呈し、底面は北側で深い傾斜面を成す。規模は約1m20cmであり、検出面からの深さは25cm程度を測る。SD1の埋積土層としてはI層(暗灰色土層)、II層(暗灰色土層)、III層(灰色砂層)が存在しており、水の影響を受けていたものと考えられる。IV層(明褐色土層)に含まれる拳大の円礫は、西部では顕著で溝の底面に円礫を敷き詰めた状態で検出された。これは屋敷地の北側を画する意味を持つものであろうか。同様な円礫の集中が調査区西端に存在するSD11でも見られた。

出土遺物として図示できるものは43点(fig.129-1～fig.131-43)が存在する。1～4は土師質の小皿である。5は土師質土器の坏。6は磁器の瓶。7～19は碗である。7・8は腰張形の丸碗で煎茶碗。12は陶胎染付の碗であり、肥前産18世紀。13はやや深めの丸形を呈する煎茶碗。14・15・17～19は呉器形の碗である。16は天目形の碗であり、瀬戸・美濃産。20は陶器の瓶。21・22は陶器筒形の火入れ又は香炉であり、22は両端を指押さえた三足が付く。信楽産か。23～29は皿である。23は陶器で白土を斑に施したものであり、瀬戸・美濃産。24は陶器、内面に銅緑釉を施したものであり、肥前内野山産。25は磁器であり、肥前産18世紀。26は陶器で内面に鉄絵を施す。27は磁器端反り形を呈した能茶山産。28は磁器であり、内面に墨弾きによる流水紋を施す。肥前産。29は磁器であり、鏝状に開いた口縁部に花卉状の浅い彫りが見られる。30は陶器鉢であり、縁折形を呈する。31は土師質土器であり、壺の底部。32は陶器瓶であり、33～38・41は陶器の鉢である。何れも白土による刷毛目を施す。18世紀肥前産か。39は陶器の汁次。40は挿鉢であり、1単位9条の摺目が下から上に施される。42は砥石であり、石英粗面岩製。43は土師質土器の焙烙である。

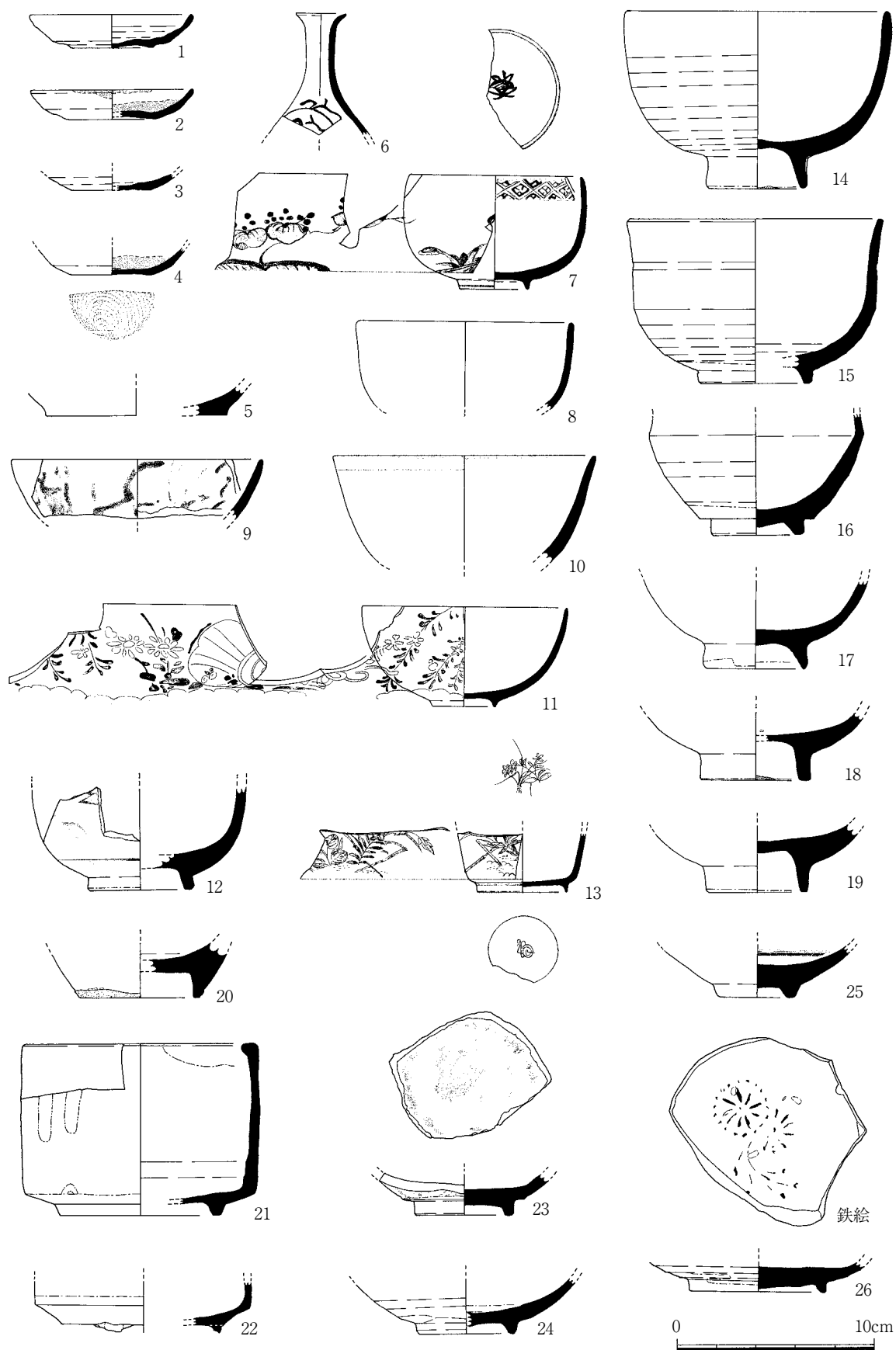


fig.129 SD1出土遺物実測図 (その1)

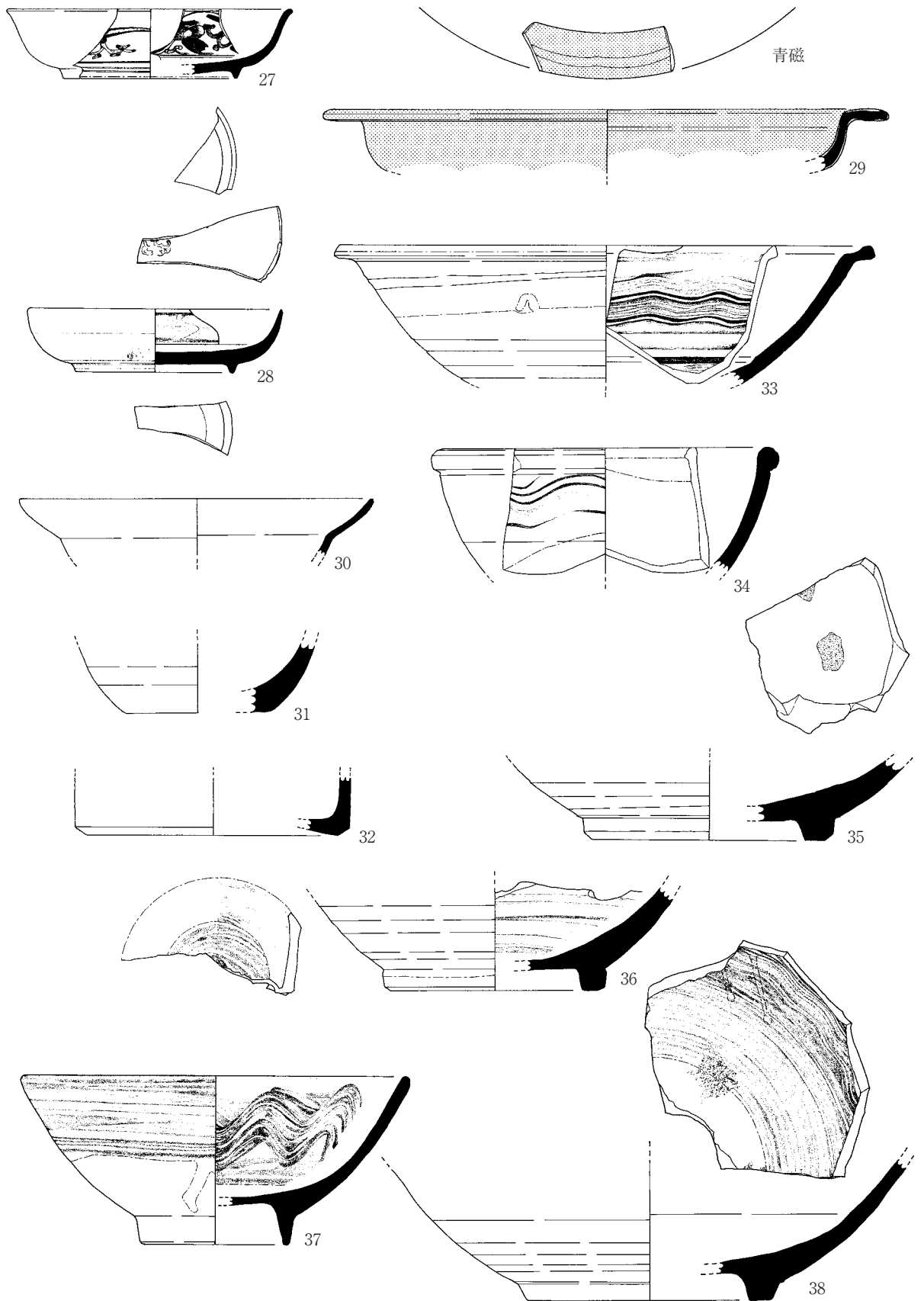


fig.130 SD1出土遺物実測図 (その2)

0 10cm

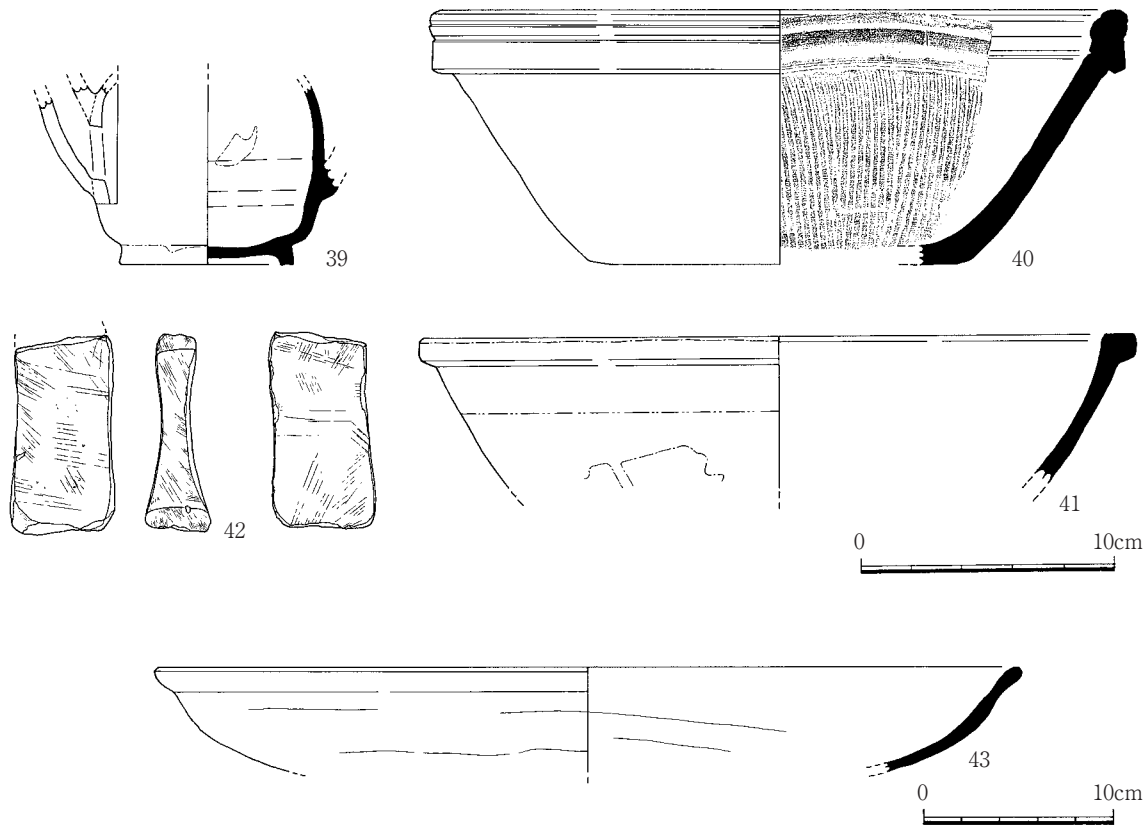


fig.131 SD1出土遺物実測図（その3）

SD2 (fig. 137-①)

調査区の東部に位置する南北方向の溝である。黄色土を混入する暗灰色土を埋土とする柱穴群によって切られる。断面形態は逆台形を呈し、幅約36cm、検出面からの深さは10cmを測る。遺構埋土は黒色土を混入する灰色土である。調査区の東部に存在する屋敷地の東を区画する溝か。

出土遺物の中で図示できるものは無い。細片としては陶器1点と土師質土器1点が存在する。

SD3 (fig. 137-⑤)

調査区の東部中央に位置する東西方向の溝である。一ヶ所で南側に派生する南北方向の小さな溝を検出しており、同時期に機能したものと考えられる。断面形態は逆台形を呈し、幅は26cm、検出面からの深さは4cm～10cmを測る。遺構埋土は暗灰色土単純一層である。SK8との関わりは不明である。周辺に掘立柱建物に関わる柱穴群が存在することから、雨落ち溝的な性格を有するものか。

出土遺物の中で図示できるものは無い。細片としては磁器1点と陶器2点が存在する。

SD4 (fig. 137-⑥)

調査区の東部西端に位置する南北方向の溝である。黄色土の混入する暗灰色土を埋土とする柱穴群を切って存在する。調査区の東部に存在する屋敷地の西側を区画する溝であり、南側では東にやや

偏してSK23や隣接して存在する石列に関わる可能性がある。断面形態は逆台形を呈し、西側がやや深い。幅は1m4cm、検出面からの深さは18cmを測る。遺構埋土は暗灰色土であり、円礫が存在する。

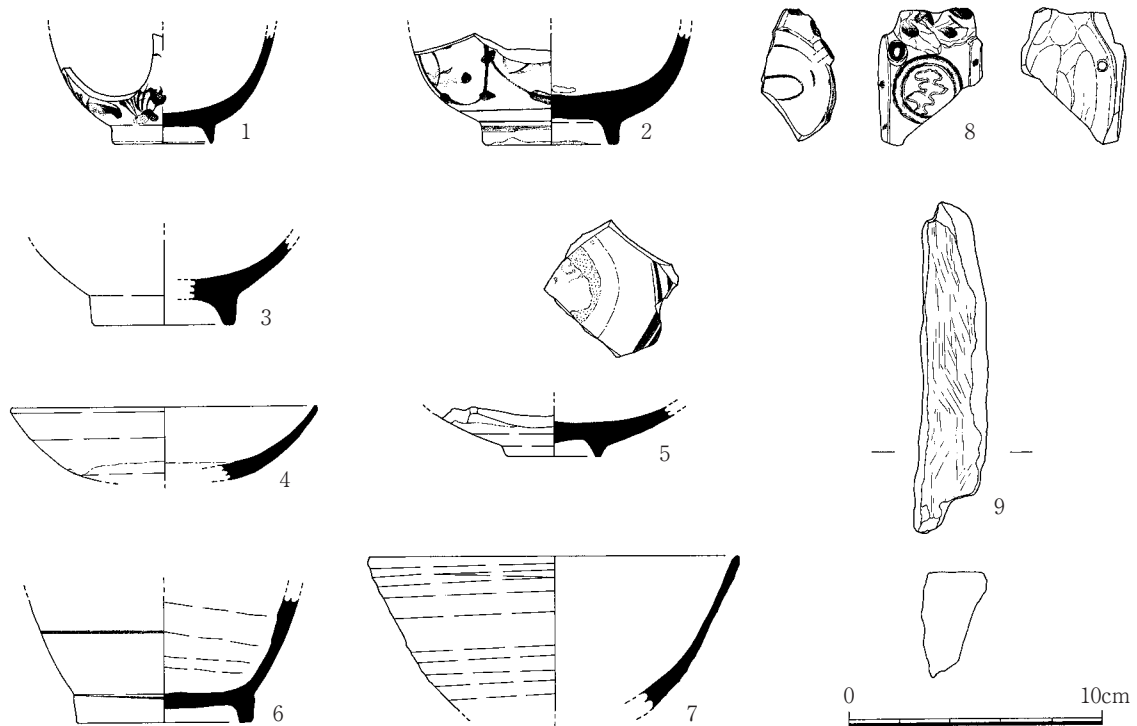


fig.132 SD4出土遺物実測図

出土遺物として図示できるものは9点(fig.132-1~9)である。1は磁器染付の碗であり、肥前産。2は磁器染付のくらわんか手の碗であり、18世紀。3は陶器呉器形の碗であり、18世紀。4は陶器皿であり、嬉野内野山産。5は陶器の皿であり、17世紀後半から18世紀前半。6は磁器染付の瓶であり、波佐見産。7は陶器の碗であるが胎土は炝器質。8は磁器の水滴であり、型押し成形により、赤絵を施す。9は砥石であり、泥岩製の中砥~仕上げ砥と考えられる。他に細片としては磁器3点、陶器11点、土師質土器12点と弥生土器2点が存在する。

SD4は帰属時期として18世紀後半を考える。

SD5 (fig.137-⑦, ⑧)

調査区の西部東端に位置する南北方向の溝である。断面形態は舟底状を成し、幅は65cm~1m8cmを測る。遺構埋土は暗灰色土である。SD4と同様に屋敷地の東端を画する溝と考えられ、SD4とSD5の間の空間は道として利用されていた可能性がある。

出土遺物として図示できるものは9点(fig.133-1~9)である。1は磁器水滴であり、15~16世紀ベトナム産。2は陶胎染付の碗であり、肥前産18世紀。3は陶器呉器形の碗であり、18世紀初頭。4は磁器染付碗であり、肥前産。5は磁器染付碗であり、能茶山産か。6は陶器の汁次である。7~9は陶器の鉢

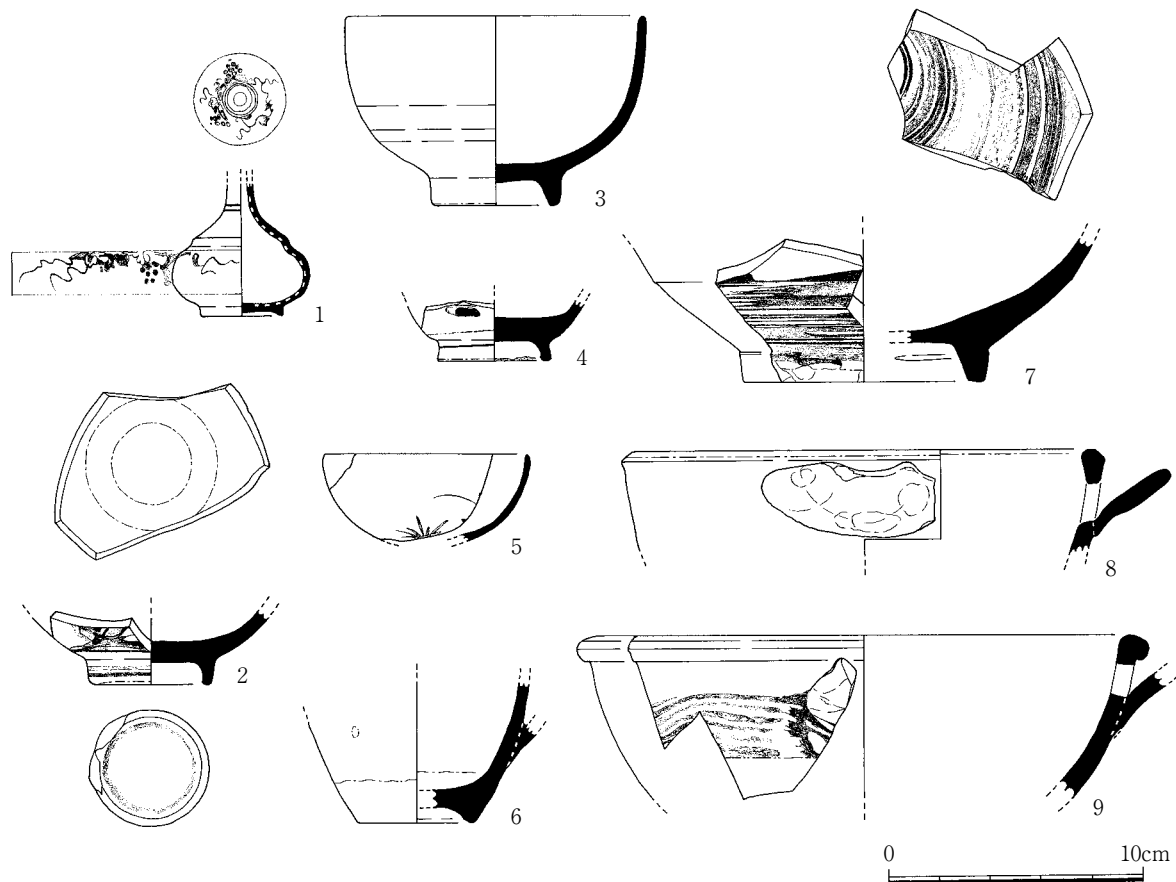


fig.133 SD5出土遺物実測図

である。7は白土刷毛掛けのものであり、肥前産18世紀。8・9は口縁下穿孔による注口部分が形成される。細片としては磁器9点、陶器18点と土師質土器2点が存在する。

SD5の帰属時期は19世紀代と考えられる。

SD6 (fig. 137-⑨)

調査区の中央部東側に位置する。南部で灰色土を埋土とするSX6に切られる。SD4から派生する溝であり、先程道とされた空間の中程に存在する南北方向の溝である。断面形態は逆台形を呈し、幅は24cm、検出面からの深さは18cmを測る。遺構埋土は暗灰色土である。

出土遺物の中に図示できるものは1点(fig.134-1)が存在する。1は京焼風陶器碗であり、高台内に「森」の刻印が施される。細片として陶器2点と土師質土器4点が存在する。

SD6の帰属時期は僅少な出土遺物から判断し難いが18世紀代と考えられる。

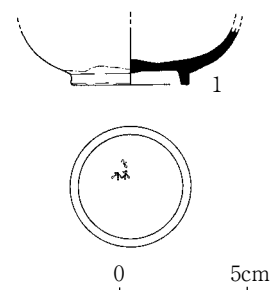


fig.134 SD6出土遺物実測図

SD7系 (fig. 137-⑩～⑭)

調査区の中央部南側に位置する南北方向と東西方向の小規模な溝については、埋土が区別し難く同時期に機能した可能性が高いことから、SD7に関わるものとして一括して扱う。SD7-2は西部でSK47を切っている。後世の削平を受けており残存状態は悪い。断面形態は逆台形を呈し、幅は20cm～40cm、検出面からの深さは4cm～8cmを測る。遺構埋土は灰色土である。SD7系の4本の溝により、一辺1m40cmの方形区画が一ヶ所造り出されている。

出土遺物の中で図示できるものは無い。細片としてはSD7から陶器2点と土師質土器1点が出土しており、SD7-3から土師質土器2点が出土している。

SD8 (fig. 137-⑮)

調査区の中央部南側に位置する東西方向の溝である。西方ではSD9系の溝群と関わりを持つ。後世の削平を受けており残存状態は良くない。断面形態は逆台形を呈し、幅は63cm、検出面からの深さは3cmを測る。遺構埋土は黒褐色土である。

出土遺物として図示できるものは1点(fig.135-1)である。1は磁器染付の香炉であり、肥前産。

その他に細片としては陶器1点が存在する。

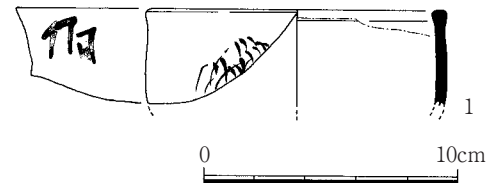


fig.135 SD8出土遺物実測図

SD9系 (fig.137-⑯,⑰,⑱)

調査区の中央部西南側に位置する。縦横に存在する数条の溝は先後関係が不明確であり、同時期に存在した可能性が高いことからSD9系として一括して扱う。後世の削平を受けており、浅く、断面形態は逆台形を呈する。SD9は溝群の一番北に位置し、幅50cm、検出面からの深さは3cmを測る。SD9-2は南北方向の溝であり、幅94cm、検出面からの深さは6cmを測る。SD9-3はSD9の南で東西方向の溝である。規模は幅52cm、検出面からの深さ3cmである。遺構埋土は何れも黒褐色土である。

出土遺物の中で図示できるものは1点(fig.136-1)である。1は須恵器の坏である。細片としてはSD9には磁器1点と弥生土器1点が存在し、SD9-2には土師質土器14点が存在する。

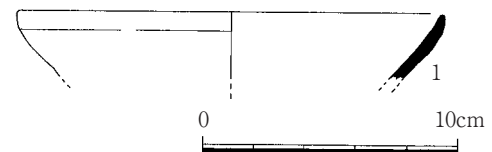


fig.136 SD9-2出土遺物実測図

SD10 (fig.137-㉑)

調査区の西部南側に位置する東西方向の溝である。SD9系とSD8に関わる溝と考えられ、同様に削平を受けている。断面形態は逆台形を呈し、幅は96cm、検出面からの深さは3cmを測る。遺構埋土は黒褐色土である。

出土遺物の中で図示できるものは無い。細片としては陶器1点が存在する。

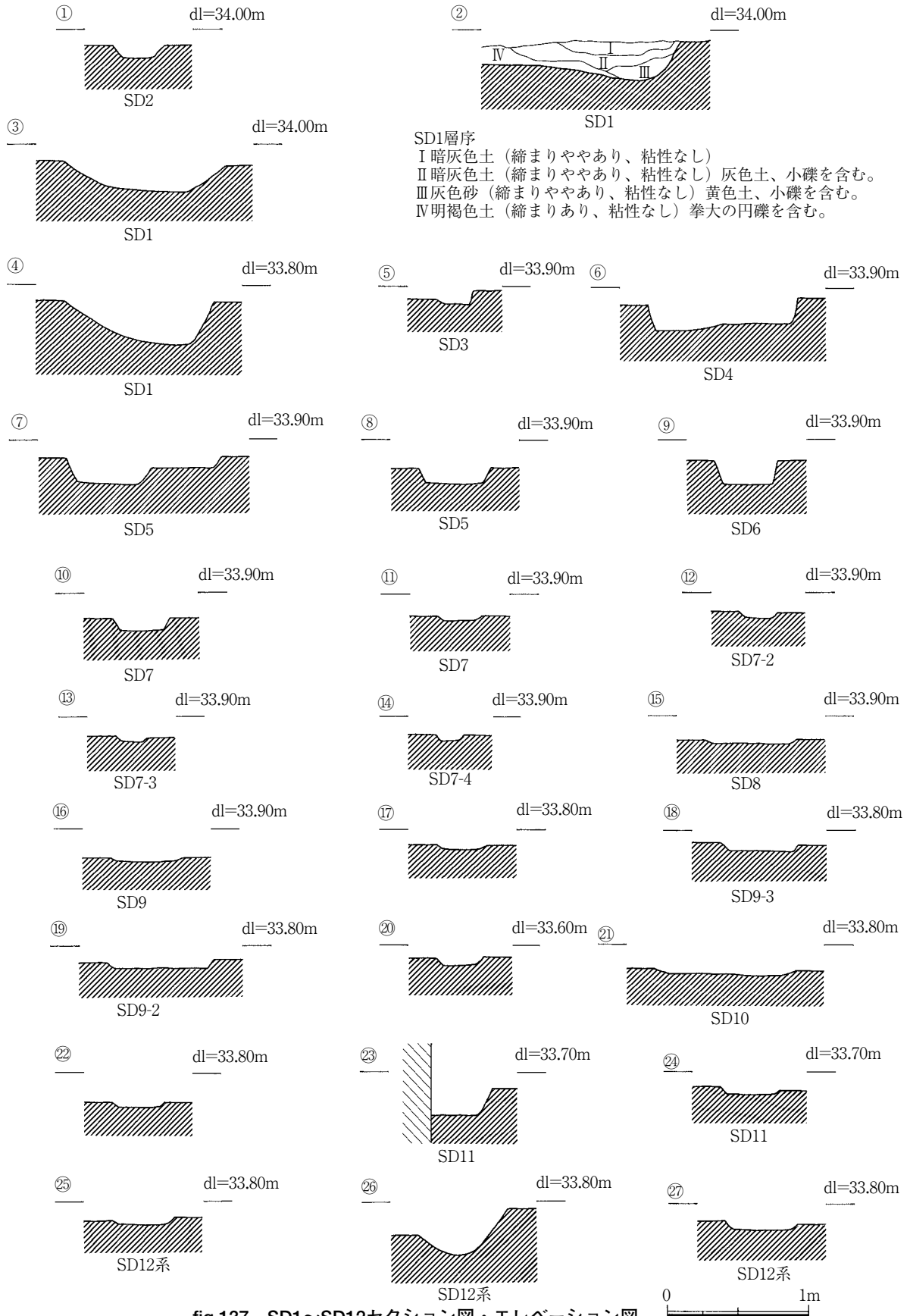


fig.137 SD1～SD12セクション図・エレベーション図

SD11 (fig.137- ㉓,㉔)

調査区の西端部に存在する南北方向の溝である。断面形態は調査区の北部では逆台形を呈しており、南部では舟底状を呈する。幅は北部では1m65cm、南部では60cmを測る。北端部では東側への膨らみを持ち、溝の埋積が行われ始めた段階に置かれたと考えられる石列が部分的に存在している。ここはSK73の入り口に相当することから水の進入を制限する様な役割を持つものであろうか。遺構埋土は暗褐色土である。埋土中に円礫を多く含んでおり、区画溝として何らかの構築物が存在していた可能性がある。

出土遺物として図示できるものは1点(fig.138-1)である。1は陶器の鉢である。細片としては磁器が1点、陶器が2点と土師質土器が3点存在する。

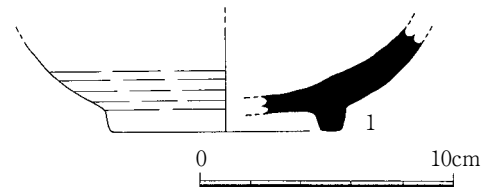


fig.138 SD11出土遺物実測図

SD12系 (fig.137- ㉕~㉗)

調査区の西南端部に位置し、南北方向の小規模な溝を一括してSD12系として扱う。断面形態は逆台形を呈し、幅は40cm~50cm、検出面からの深さは3cm~5cmを測る。

出土遺物は皆無である。

(5) 性格不明土坑

SX1 (fig. 140)

調査区の東部に位置する。倒木痕跡と考えられるものである。西部をSK6により、また南端部を黄色土が混入する暗灰色土を埋土とする柱穴によって切られる。平面形態は楕円形を呈し、規模は長径1m70cm、短径1m30cm、検出面からの深さは56cmを測る。ここでは黒色土が南側に存在する。

出土遺物は皆無である。

SX2 (fig.140)

調査区の東部に位置する。倒木痕跡と考えられる。南部で後世の柱穴群によって切られる。平面形態は不整円形を呈し、規模は直径約1m40cm、検出面からの深さは44cmを測る。南側に黒褐色土の堆積が見られる。

出土遺物は柱穴群に伴うものと考えられ、図示できるものは1点(fig.139-1)が存在する。1は青磁の香炉であり、肥前産である。細片としては磁器2点が存在する。

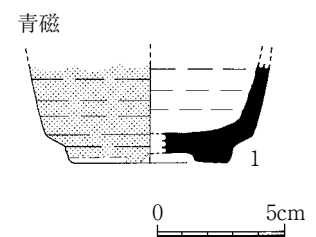
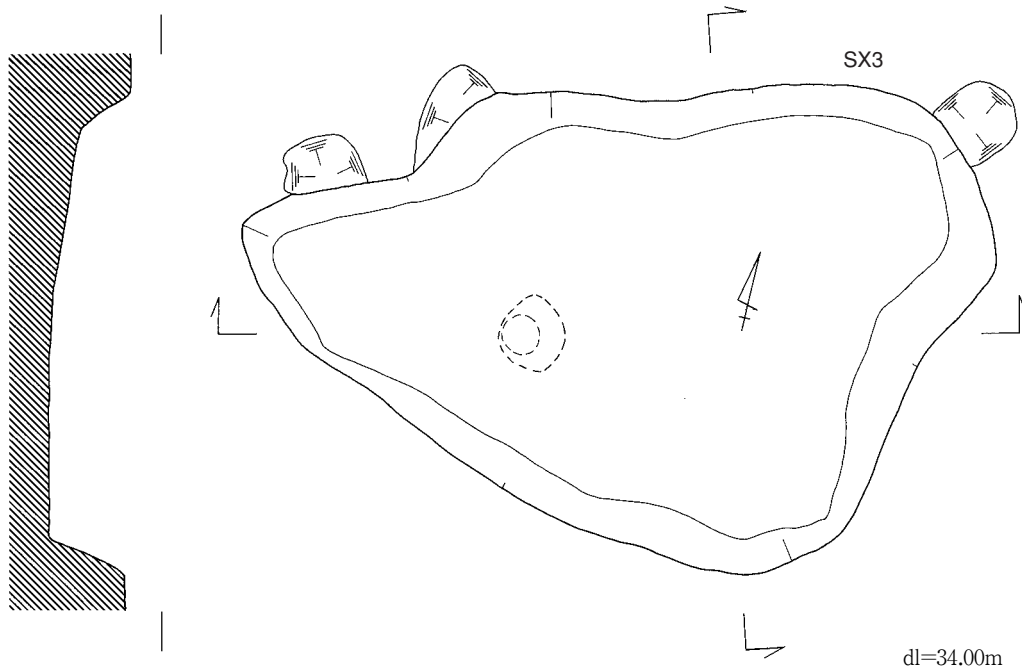
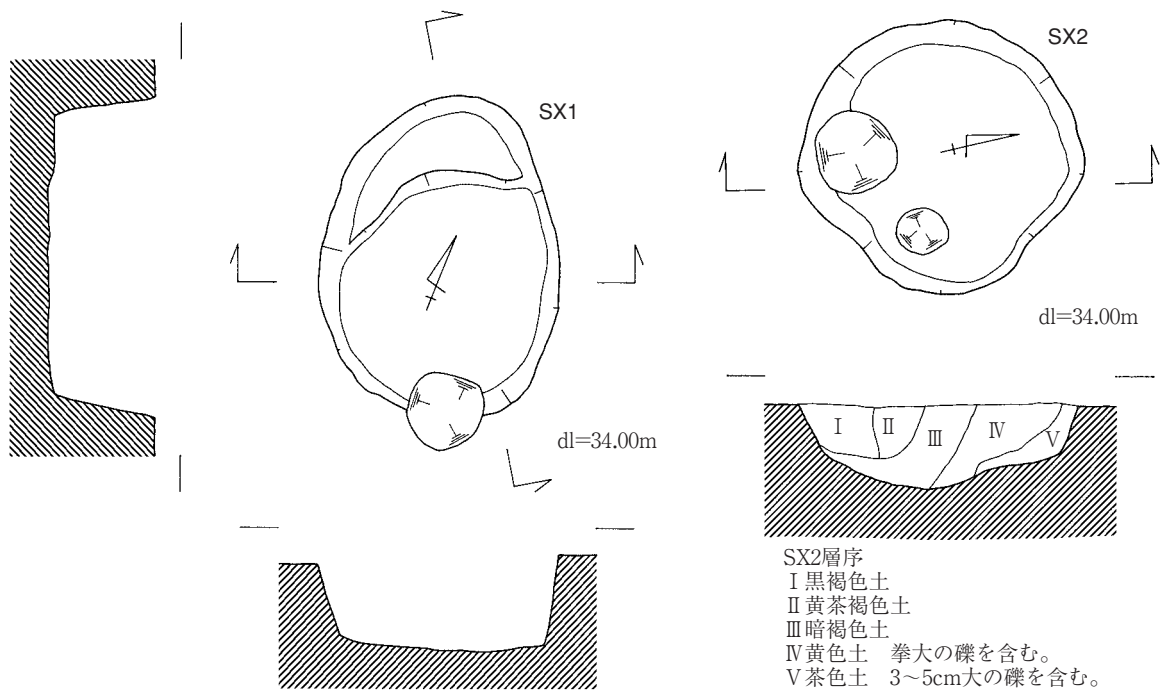


fig.139 SX2出土遺物実測図



- SX3層序
 I 灰色土（縮まりあり、粘性なし）人頭大円礫を含む。
 II 暗褐色土（縮まりあり、粘性なし）小礫を含む。
 III 褐色土+灰色土（縮まりあり、粘性なし）地山崩壊土。
 i 暗灰色土（縮まりあり、粘性なし）黄色土混入、ピット埋土。

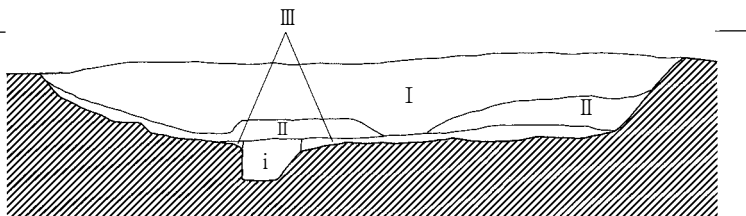


fig.140 SX1~SX3平面図・セクション図・エレベーション図



SX3 (fig.140)

調査区の東部南側に位置する。暗灰色土を埋土とする柱穴群を切る。平面形態は不整形を呈し、規模は長軸4m、短軸2m55cmを測る。主軸方向はN-77°-Eである。底面には小さな凹凸が存在しており、検出面からの深さは46cmである。遺構埋土としては3層が存在しており、I層(灰色土層)、II層(暗褐色土層)、III層(灰色土の混入する褐色土層)である。柱穴群は地山崩壊土による埋積の後に掘削された可能性がある。

出土遺物として図示できるものは4点(fig.141-1~4)が存在する。1は磁器染付の碗であり、18世紀か。2は磁器染付の蕎麦猪口である。3は磁器染付の碗である。4は陶器播鉢であり、堺・明石系。その他に細片として磁器3点、陶器11点、土師質土器2点と瓦1点が存在する。

SX3の帰属時期は19世紀と考えられる。

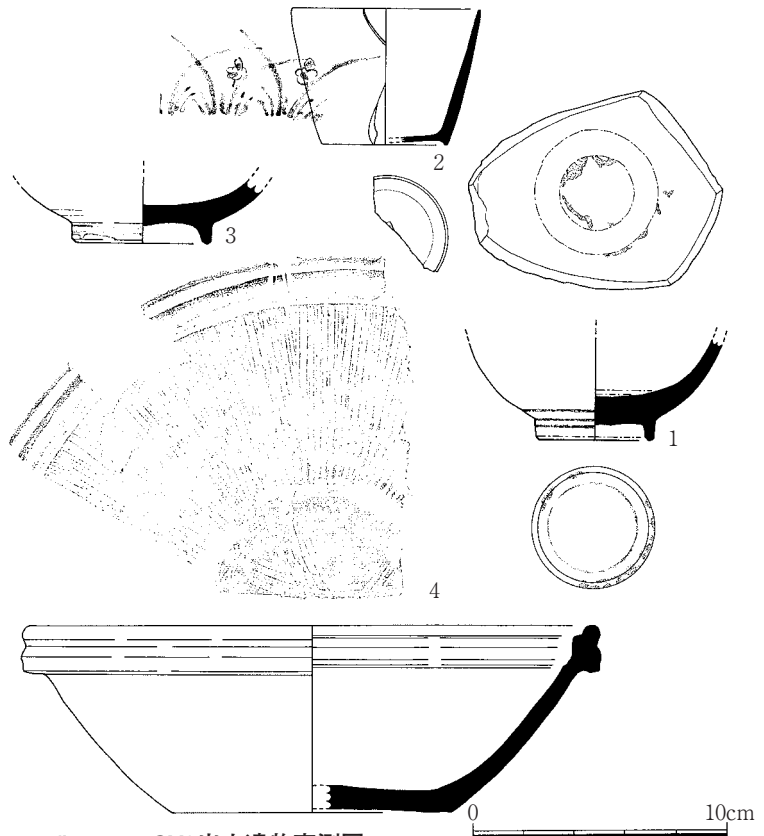
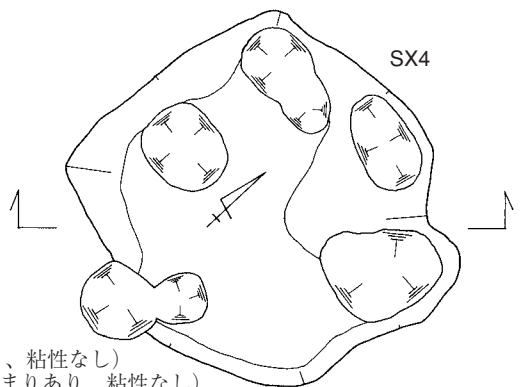


fig.141 SX3出土遺物実測図



SX4層序
 I 褐色土 (縮まりあり、粘性なし)
 II 黒色土 (縮まりあり、粘性なし)
 III 褐色砂礫 (縮まりあり)
 IV 灰色砂礫 (縮まりあり)

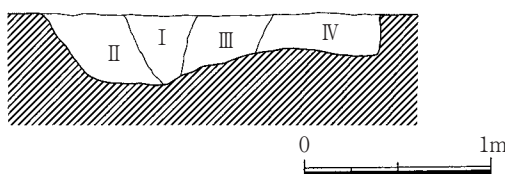


fig.142 SX4平面図・セクション図

SX4 (fig.142)

調査区の東部に位置する。黄色土が混入する暗灰色土を埋土とする柱穴群によって切られる。不整形円形を呈し、規模は直径約2m、検出面からの深さは36cmを測る。黒色土は南西側に存在する。

出土遺物は皆無である。

SX5 (fig.143)

調査区の東部西側に位置する。東北部分をSK14に、又遺構内数ヶ所で黄色土を混入する暗灰色土を埋土とする柱穴群に切られる。平面形態は不整形長方形を呈し、規模は長軸2m15cm、短辺1m80cm、検出面からの深

さは56cmを測る。黒色土は西側に存在する。

出土遺物は皆無である。

SX6 (fig.144)

調査区の中央部南側に位置する。倒木痕跡SX7と南北方向の区画溝と考えられるSD6を切

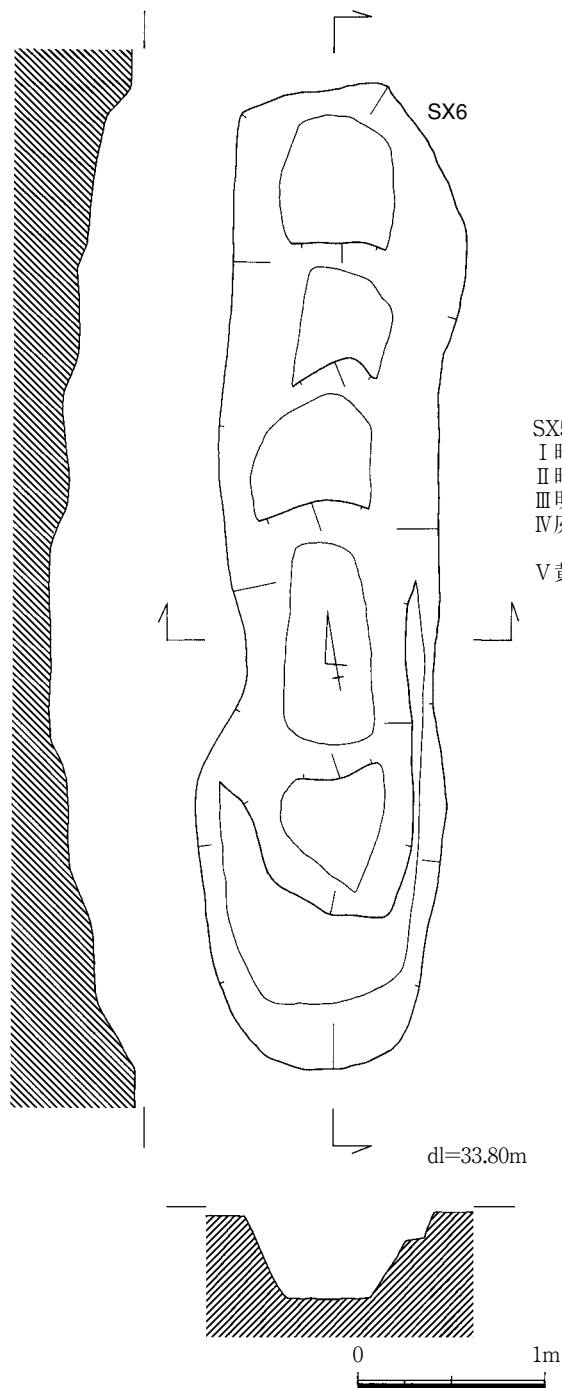


fig.144 SX6平面図・エレベーション図

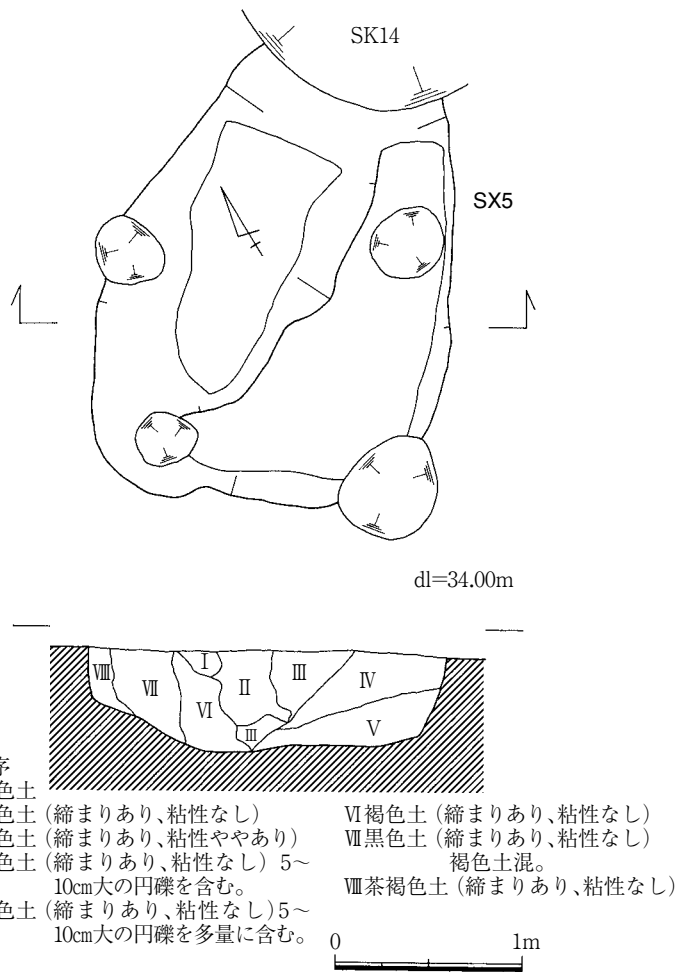


fig.143 SX5平面図・セクション図

っている。平面形態は葉巻形を呈し、規模は長軸5m18cm、短軸1m02cmを測る。主軸方向はN-9°-Eである。底面は南側と北側から徐々に降下する階段状を成し、中央部分で深く、平らな面が見られる。検出面からの深さは48cmを測る。遺構埋土は暗灰色土単純一層であり、ここには円礫が多く含まれる。

出土遺物として図示できるものは7点(fig.145-1~7)が存在する。1~3は陶器腰張形の煎茶碗であり、瀬戸・美濃産19世紀。4は陶器呉器形の碗であり、肥前産18世紀。5は陶器の碗であり、尾戸産か。6は粘板岩製の砥石であり、板形を呈した仕上げ砥と考えられる。7は土師質土器の焙烙である。細片としては磁器4点、陶器16点、土師質

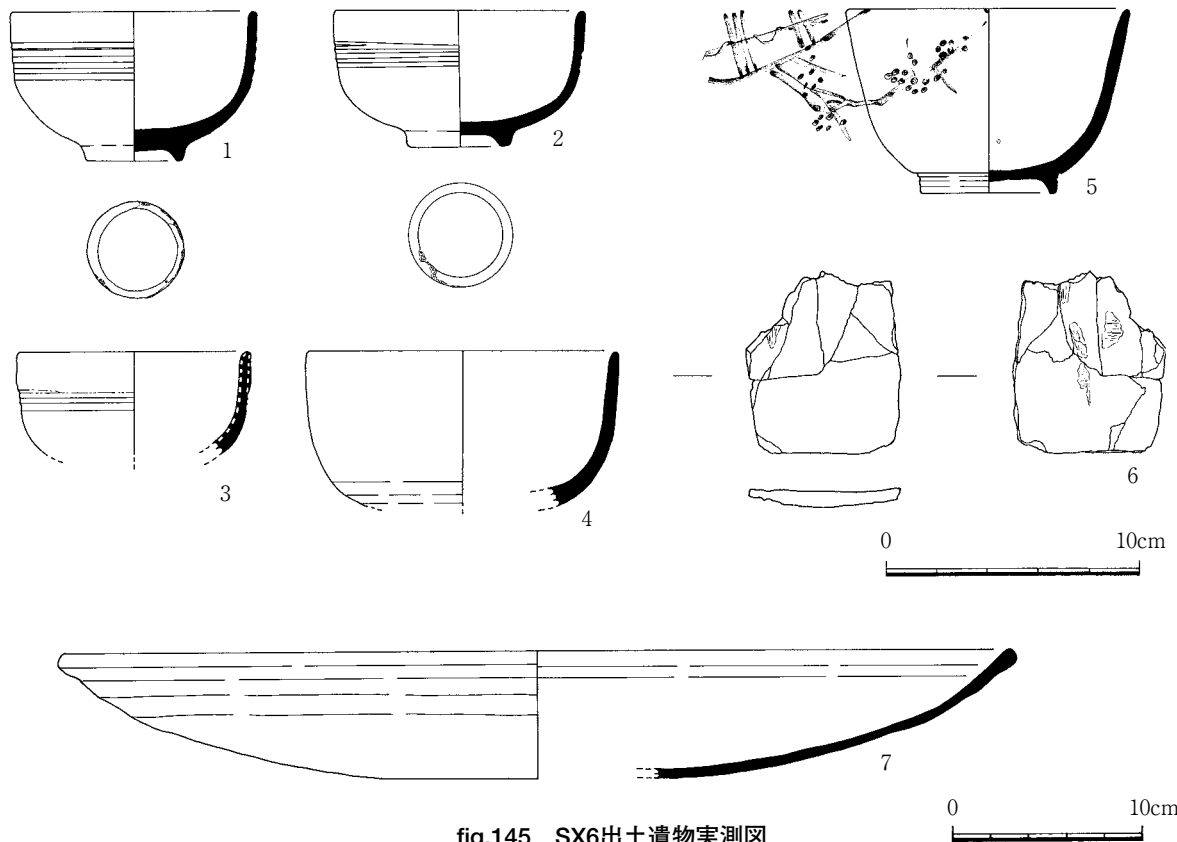


fig.145 SX6出土遺物実測図

土器2点と瓦3点が存在する。

SX6の帰属時期は19世紀と考えられる。

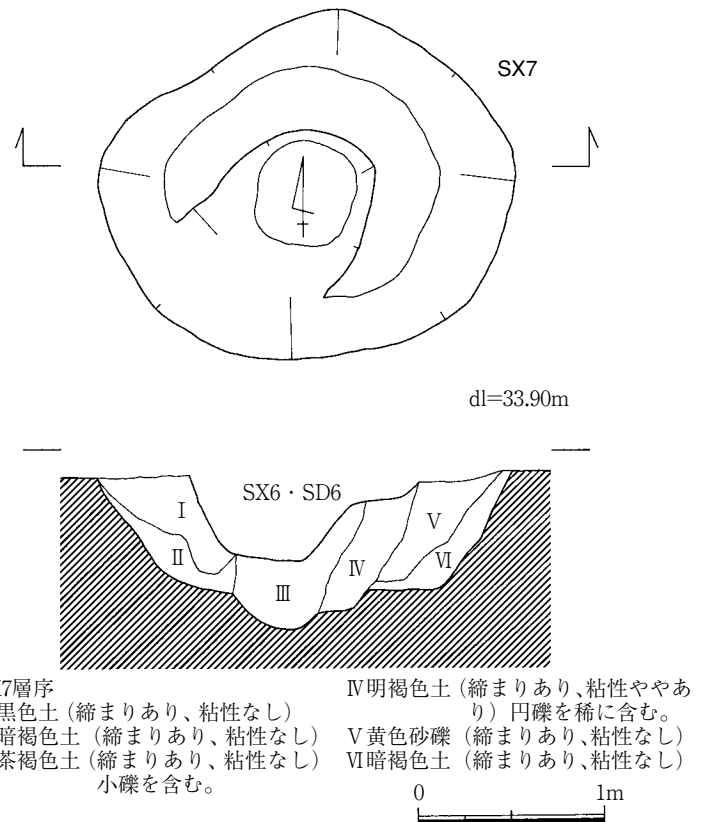
SX7 (fig.146)

調査区の中央部南側に位置する。倒木痕跡と考えられる。中央部分を南北にSD6とSX6によって切られる。平面形態は不整楕円形を呈し、規模は長径2m20cm、短径1m85cm、検出面からの深さは80cmを測る。西側に黒色土の堆積が見られる。

出土遺物は皆無である。

SX8 (fig.147)

調査区の中央部北側に位置する。倒木痕跡と考えられる。北部と南部で各々暗褐色土と暗灰色土を埋土とする



SX7層序
 I 黒色土 (縮まりあり、粘性なし)
 II 暗褐色土 (縮まりあり、粘性なし)
 III 茶褐色土 (縮まりあり、粘性なし) 小礫を含む。
 IV 明褐色土 (縮まりあり、粘性ややあり) 円礫を稀に含む。
 V 黄色砂礫 (縮まりあり、粘性なし)
 VI 暗褐色土 (縮まりあり、粘性なし)

fig.146 SX7平面図・セクション図

柱穴によって切られる。平面形態は不整楕円形を呈し、規模は長径2m50cm、短径1m90cm、検出面からの深さは42cmを測る。南側に黒色土層を持つ。

出土遺物は皆無である。

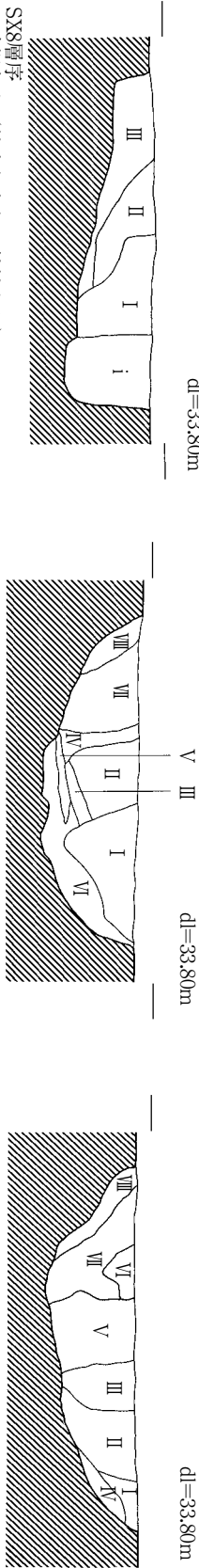
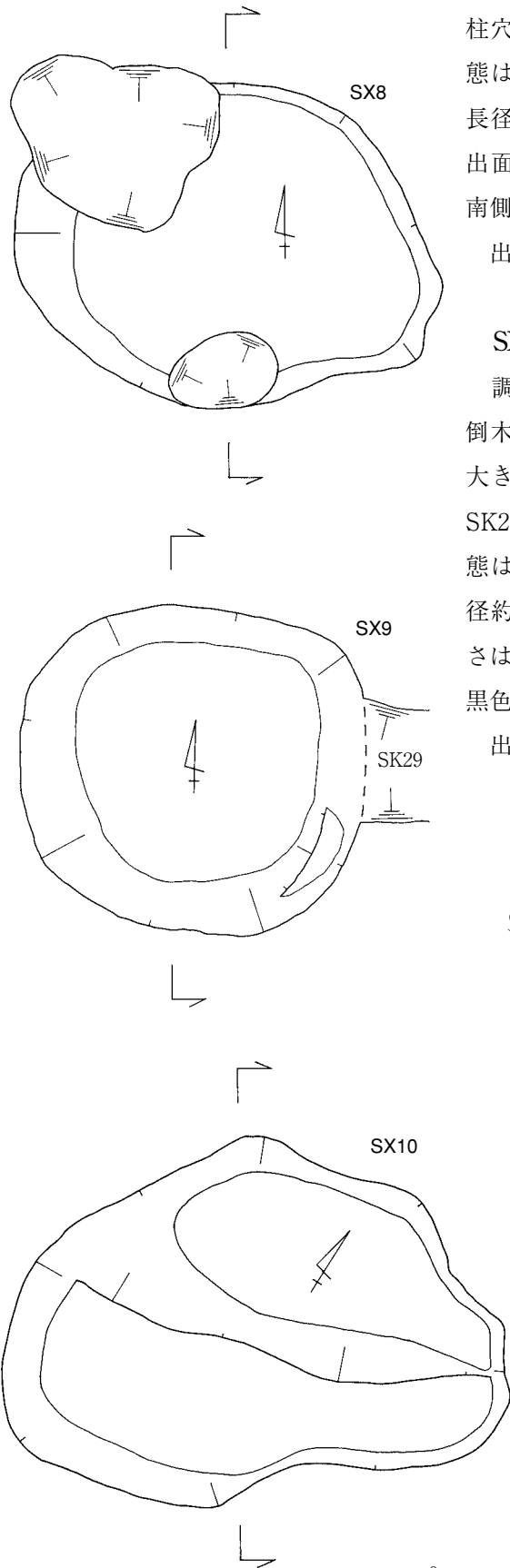
SX9 (fig.147)

調査区の中央部に位置する。倒木痕跡と考えられる。規模の大きな竪穴状遺構であるST1とSK29によって切られる。平面形態は不整円形を呈し、規模は直径約2m10cm、検出面からの深さは最大で54cmを測る。南側に黒色土層を持つ。

出土遺物は皆無である。

- SX9層序
- I 黒色土 (縮まりあり、粘性なし)
 - II 褐色土 (縮まりあり、粘性なし)
 - III 黒褐色土 (縮まりあり、粘性なし)
 - IV 暗褐色土 (縮まりあり、粘性なし) 小礫が混入。
 - V 黄色土+暗褐色土 (縮まりややあり、粘性なし) 小礫が混入。
 - VI 暗褐色土 (縮まりあり、粘性なし)
 - VII 茶褐色土 (縮まりあり、粘性ややあり)
 - VIII 暗褐色土 (縮まりややあり、粘性なし)

- SX10層序
- I 茶褐色土 (縮まりあり、粘性なし)
 - II 黄色砂礫 (縮まりあり、粘性ややあり) 5~10cm大の円礫を含む。
 - III 茶褐色土 (縮まりあり、粘性ややあり) 5cm以下の円礫を多く混入する。
 - IV 暗褐色土 (縮まりあり、粘性なし)
 - V 茶褐色土 (縮まりあり、粘性なし)
 - VI 黒褐色土 (縮まりあり、粘性なし)
 - VII 茶褐色土 (縮まりあり、粘性なし)



SX8層序

- I 暗褐色土 (縮まりあり、粘性なし)
- II 明褐色土 (縮まりあり、粘性ややあり) 5cm大の円礫が混入。
- III 暗褐色土 (縮まりあり、粘性なし) 5cm大の円礫を多く含む。
- i 暗灰色土 (縮まりややあり、粘性なし) 黄色土及5cm大の礫を含む。

fig.147 SX8~SX10平面図・セクション図

SX10 (fig.147)

調査区の中央部南側に位置する。倒木痕跡と考えられる。平面形態は不整楕円形を呈し、規模は長径2m90cm、短径2m20cm、検出面からの深さは50cmを測る。北側に黒色土層が存在する。

出土遺物は皆無である。

SX11 (fig. 148)

調査区の西部南側に位置する。倒木痕跡と考えられる。平面形態は不整楕円形を呈し、規模は長径2m40cm、短径2m、検出面からの深さは48cmである。黒色系の埋土が南側に存在する。

出土遺物は皆無である。

SX12 (fig. 149)

調査区の西部南端に位置する。倒木痕跡と考えられる。南端部は調査区の南壁に隔され、西部の上面は南北方向の溝であるSD9-2によって切られる。平面形態は不整楕円形を呈し、残存規模は長径2m60cm、短径1m70cm、検出面からの深さは42cmを測る。黒色土層は南西側に存在している。

出土遺物は皆無である。

SX13・SX14 (fig.149)

調査区の西部南端に位置する。何れも倒木痕跡と考えられる。平面で切り合いが認められSX13がSX14よりも後出することが明らかである。SX13は平面形態不整円形を呈し、規模は直径2m30cm、検出面からの深さは40cmを測る。北西側に黒色系の堆積土層が存在する。SX14は平面形態不整楕円形を呈し、残存規模は長軸2m、短軸1m65cm、検出面からの深さは48cmを測る。南側に黒色系埋土が存在する。

出土遺物は皆無である。

SX15 (fig.149)

調査区の西部に位置する。倒木痕跡と考えられる。平面形態は不整楕円形を呈し、規模は長径2m55cm、短径2m、検出面からの深さは54cmを測る。黒褐色系の埋土を西側に持つ、出土遺物は皆無である。

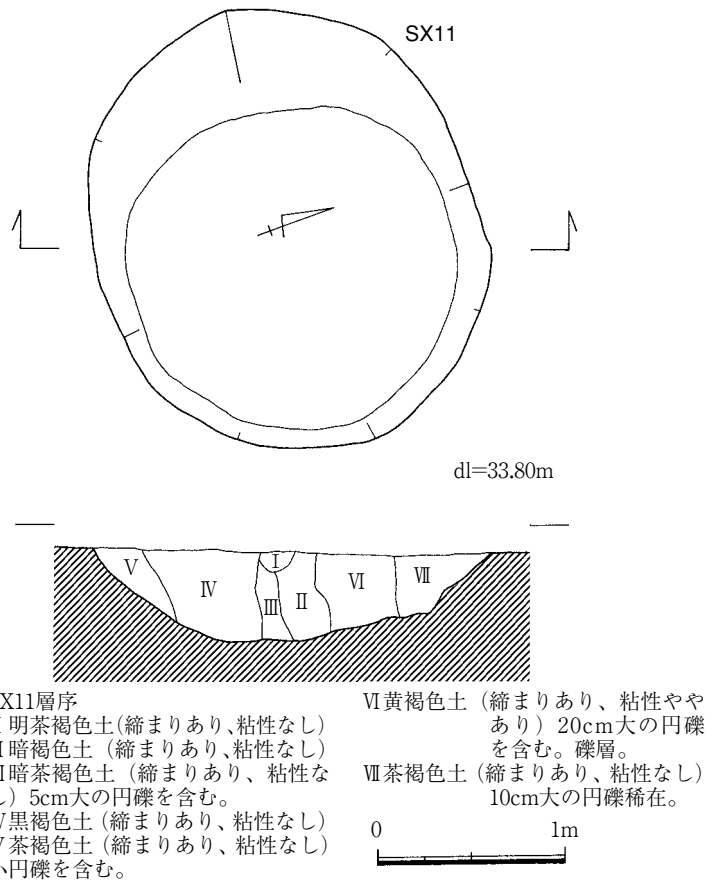


fig.148 SX11平面図・セクション図

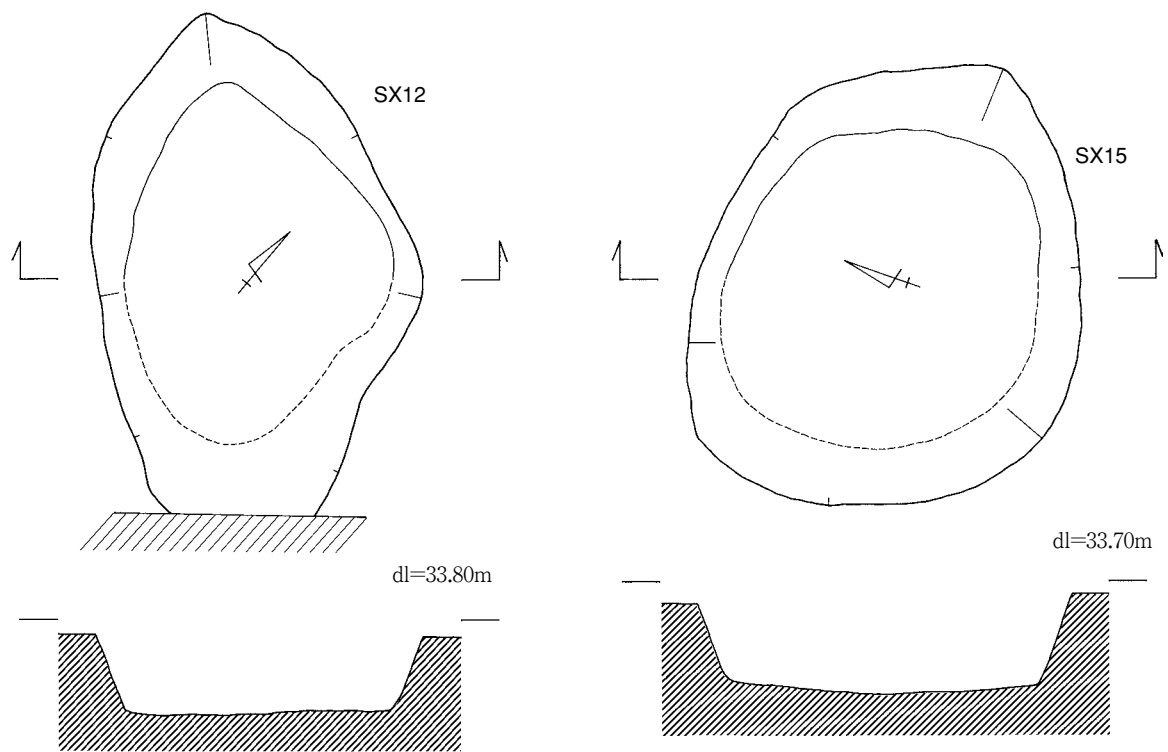
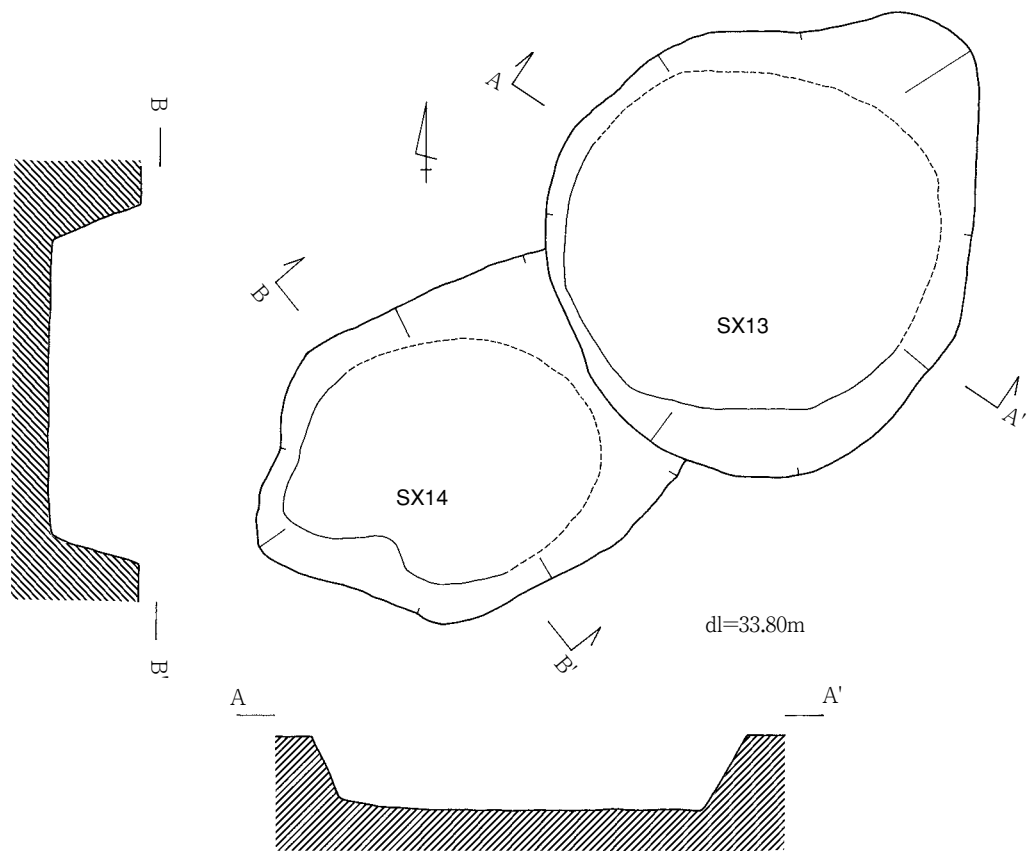


fig.149 SX12~SX15平面図・エレベーション図



(6)柱穴 (fig.28)

調査区内で検出された柱穴の総数は約400個であり、後世の削平は受けているものの残存状態は良好である。平面形態は円形を呈するものが多く、検出場所は溝によって区画された屋敷単位と考えられる部分の北側に集中する傾向が窺える。ここは検出面においても比較的硬い黄色砂礫層が検出される部分であるが、SBの項でも見られた様に深さが1mに達するものが存在する。柱穴の遺構埋土は大きく3つの系統に分けることができる。黒色土系統、灰褐色土系統と黒褐色土系統のものであり、各々の系統に黄色土が混入するもの、10cm～30cm大の円礫を多く含むものとその両者を含んだものが存在している。柱痕が確認できた柱穴が存在しており、平面形態は円形又は方形を呈し、規模は一辺又は直径が18cm～20cmである。出土遺物の認められた柱穴については別表に示している通りであるが、検出総数に対する出現率は低い。

出土遺物の中で図示できるものは6点(fig. 150-1～6)である。1は砂岩製の土白である。摩滅が激しい。

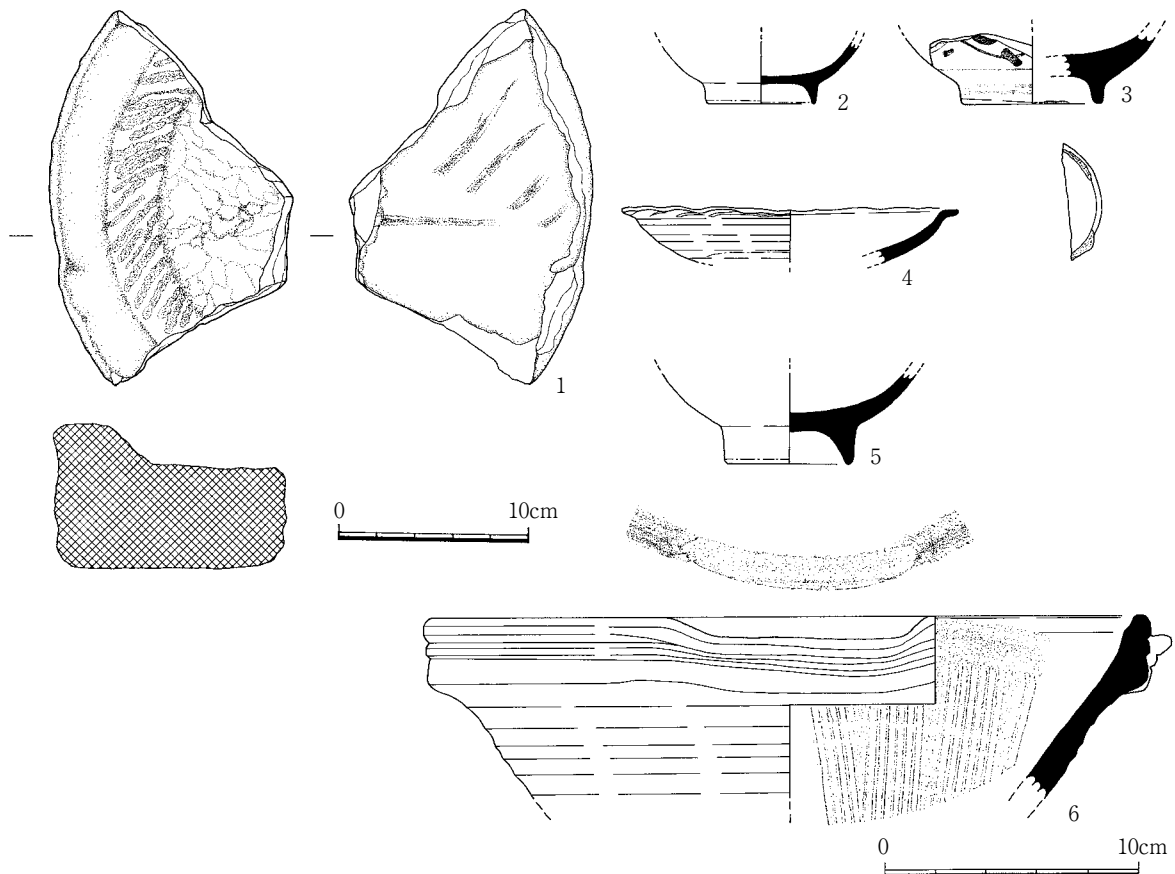


fig.150 ピット出土遺物実測図

2はP2からの出土であり、磁器の碗である。3はP14から出土の陶胎染付碗であり、肥前産18世紀。4はP3から出土の陶器輪花皿である。5はP28から出土の陶器器具器形の碗である。6は陶器の播鉢である。注口部分が残存しており、摺目は1単位7条で下から上に施される。

調査Ⅱ区Pit計測表（その1）

Pit no.	位置	grid番号	規模(cm)	検出面からの深さ(cm)	平面形態	遺構埋土	出土遺物・その他
P1	東	BR9	52×54	60	不整楕円形	暗灰色土	陶器1点
P2	東	BR8	25×40	8	楕円形	暗灰色土	fig.150-2
P3	東	BR9	22	15	円形	黄色土混暗灰色土	fig.150-4
P4	東	BR10	56×84	58	瓢箪形	円礫混暗灰色土	磁器1点
P5	東	BR10	48×84	9	楕円形	黄色土混暗灰色土	磁器1点・陶器1点
P6	東	BS10	44	66	不整円形	黄色土混暗灰色土	陶器1点
P7	東	BS11	50×56	25	不整楕円形	黄色土混暗灰色土	磁器1点
P8	東	BS11	60	73	不整円形	黄色土混暗灰色土	fig.150-6
P9	東	BR11	52	65	円形	黄色土混暗灰色土	陶器1点
P10	東	BQ12	48	33	隅円方形	黄色土混暗灰色土	陶器1点
P11	東	BQ12	50	51	隅円方形	黄色土混暗灰色土	磁器1点・陶器1点・土師質土器1点
P12	東	BR12	60×64	72	不整楕円形	黄色土混暗灰色土	陶器1点
P13	東	BU13	36×56	48	楕円形	暗褐色土	土師質土器1点
P14	東	BR13	56×64	47	楕円形	黄色土混暗灰色土	fig.150-3・SD4に切られる。
P15	東	BS13	44	58	円形	黄色土混暗灰色土	SK38・P17と接合。(fig.151-4)
P16	東	BS13	35×54	15	楕円形	暗褐色土	
P17	中	BS14	66×84	19	楕円形	円礫混暗灰色土	SK38・P15と接合。(fig.151-4)
P18	中	BR15	52×88	81	(楕円形)	暗灰色土	土師質土器1点
P19	中	BS15	64	56	円形	円礫・黄色土混暗褐色土	SD1と接合。(fig.151-8)・土師質土器1点
P20	中	BV15	58×82	28	楕円形	暗灰色土	陶器1点・土師質土器1点・弥生土器1点
P21	中	BR16	40×58	27	楕円形	黄色土混暗灰色土	陶器1点
P22	中	BS16	29×50	58	楕円形	黄色土混暗褐色土	磁器1点・陶器1点
P23	中	BT16	42×52	50	(楕円形)	黄色土混暗灰色土	磁器1点
P24	中	BT16	48×82	50	(不整楕円形)	黄色土混暗灰色土	陶器1点
P25	中	BT16	18×30	15	不整形	暗灰色土	土師質土器1点
P26	中	BR17	55	73	(円形)	黄色土混暗灰色土	磁器1点・土師質土器1点
P27	中	BR17	32	42	不整円形	黄色土混暗灰色土	磁器1点
P28	中	BS17	68	91	不整円形	黄色土混暗灰色土	fig.150-5
P29	中	BS17	46×62	42	楕円形	暗褐色土	陶器1・土師質土器1点
P30	中	BS17	57	43	円形	暗褐色土	磁器1点・土師質土器1点・弥生土器1点
P31	中	BT17	37×48	53	不整楕円形	暗褐色土	土師質土器1点
P32	中	BV17	29×32	10	楕円形	暗褐色土	陶器1点
P33	中	BT17	38×44	22	不整楕円形	黄色土混暗灰色土	黄色土による枠を持つ。
P34	西	BS19	(56)×88	62	不整楕円形	円礫・黄色土混暗褐色土	陶器1点
P35	西	BS19	44	55	円形	黄色土混暗褐色土	土師質土器1点
P36	西	BS19	36	28	(円形)	黄色土混暗褐色土	磁器1点

調査Ⅱ区Pit計測表（その2）

Pit no.	位置	grid番号	規模(cm)	検出面からの 深さ(cm)	平面形態	遺構埋土	出土遺物・その他
P37	西	BS19	66	78	円形	暗灰色土	fig.150-1
P38	西	BT18	34×40	49	楕円形	暗灰色土	磁器1点・陶器1点
P39	西	BS20	28×75	60	(楕円形)	黄色土混暗褐色土	陶器1点
P40	西	BS20	41	54	(円形)	黄色土混暗褐色土	陶器2点
P41	西	BS20	32	19	隅円方形	黄色土	陶器1点・土師質土器1点
P42	西	BS20	34	36	円形	暗灰色土	磁器1点・陶器1点
P43	西	BU20	31×42	36	不整楕円形	黄色土混暗褐色土	磁器(青磁)1点

※（ ）内は残存値又は推定形態。

(7)遺構間接合の遺物

出土遺物の中で遺構間で接合関係に合ったもの10点(fig.151-1～10)が存在している。1はSK22とSK23から出土した土師質土器の小皿である。2はSK32、SK33とSK34から出土した陶器染付の広東形碗であり、瀬戸・美濃産19世紀。3はSK73とSD11から出土した陶器の皿であり、内野山産か。4はSK38、P15とP17からの出土した陶器の鉢であり、肥前産18世紀。5はSK33-2とSD1から出土した陶器の皿であり、18世紀。6はSK29とSK33-2から出土した陶器の油徳利である。7はSK15、SD1とSX3から出土した陶器の鉢であり、肥前産17世紀後半～18世紀前半。8はSD1とP19から出土した陶製の匣身部である。胎土は黄白色を呈し、底部には重ね積みに伴うものか陶器片が熔着する。9はSD1とSX6から出土した陶器甕である。10はSK27とSK31から出土した軒平瓦の瓦当部である。紋様区画の横に「ウエムラ」銘の刻印が施される。

(8)包含層出土の遺物

調査区内には中近世遺物包含層が存在した。これは東部の標高が高い部分では後世の削平を受け欠損し、中央部分を中心にして残存していたものと考えられる。ここで図示するものは76点(fig.152-1～fig.155-76)である。包含層出土の遺物の中細片に於ける種別内訳は、磁器239点、陶器502点、土師質土器371点、弥生土器45点、須恵器17点である。

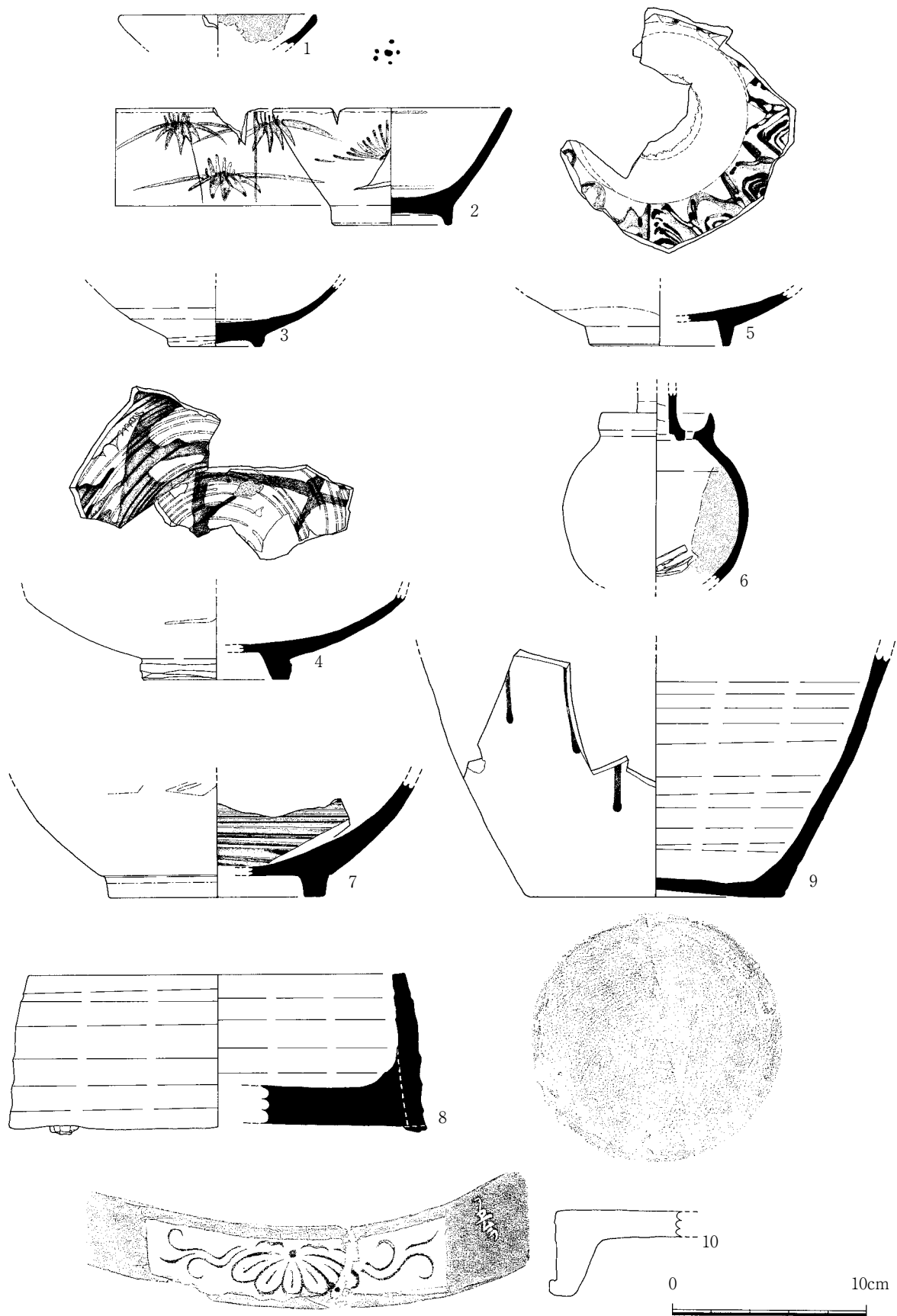


fig.151 遺構間接合の遺物実測図

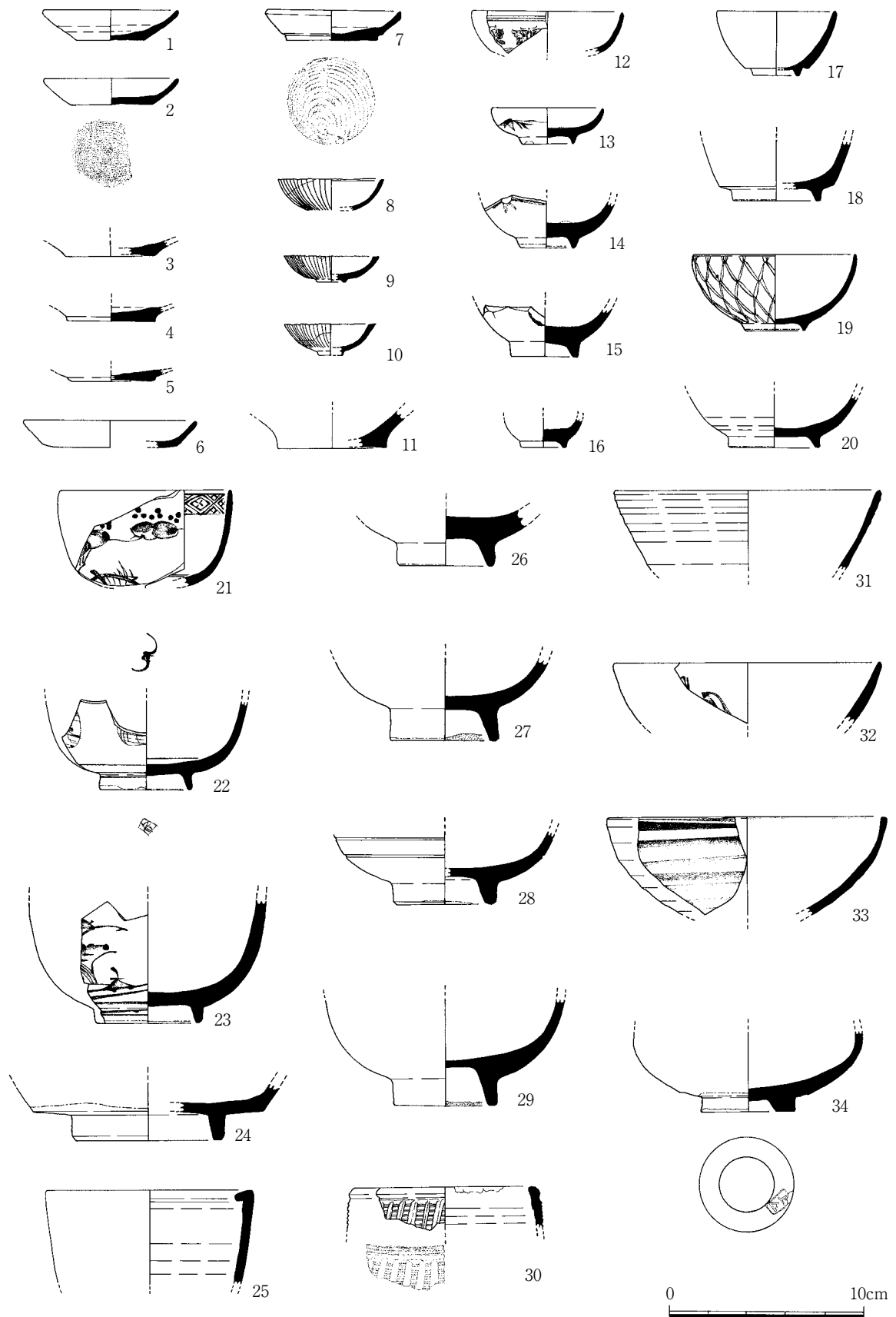


fig.152 Ⅱ区包含層出土遺物実測図（その1）

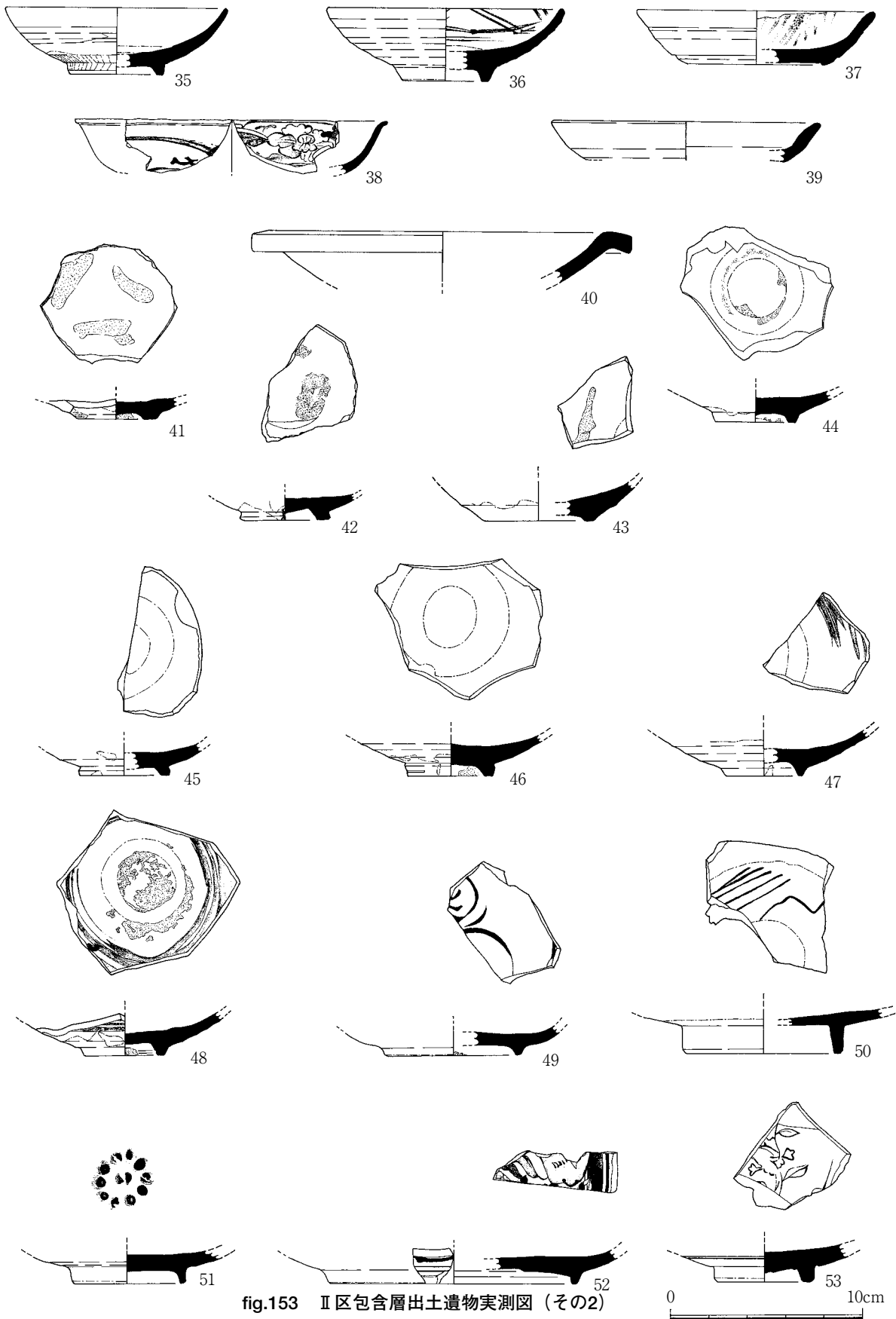


fig.153 II区包含層出土遺物実測図 (その2)

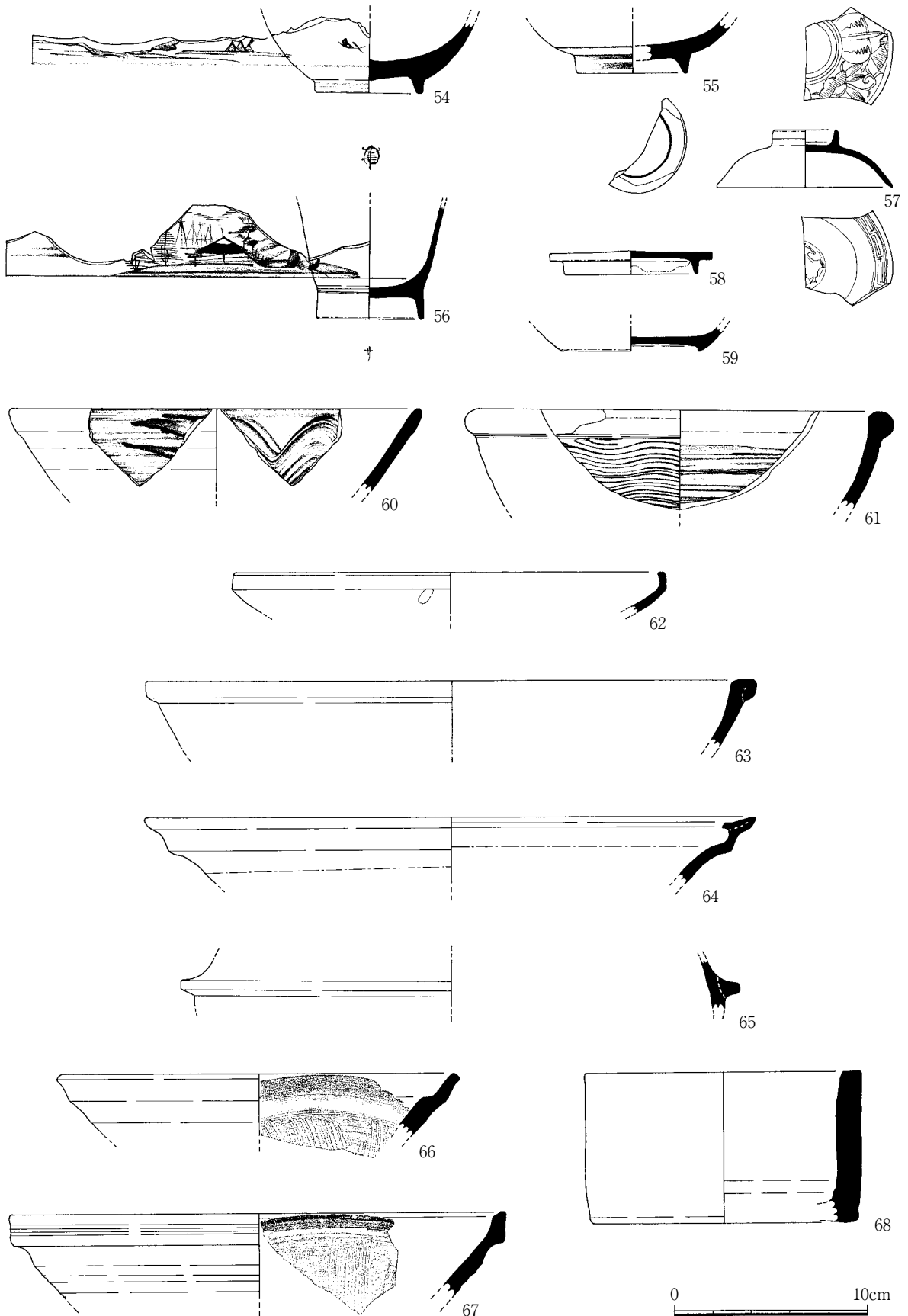
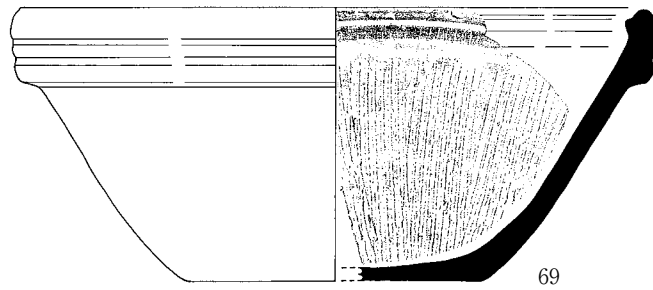
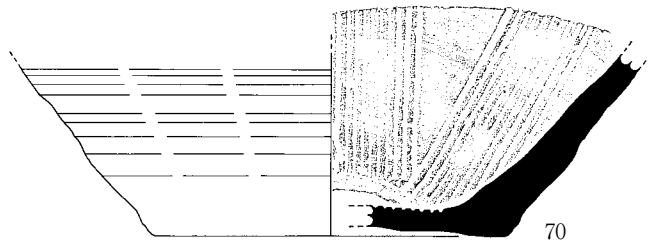


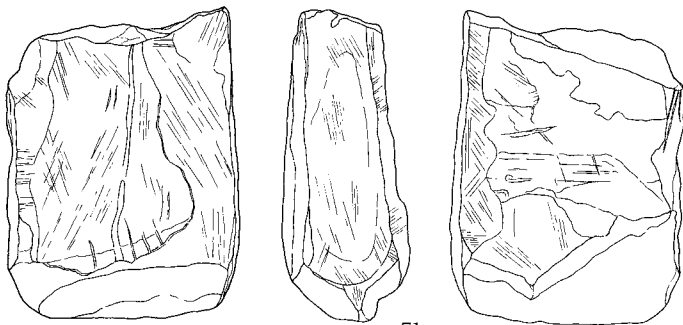
fig.154 II区包含層出土遺物実測図(その3)



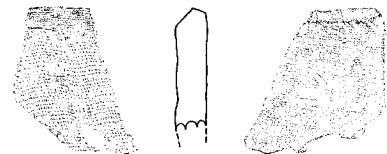
69



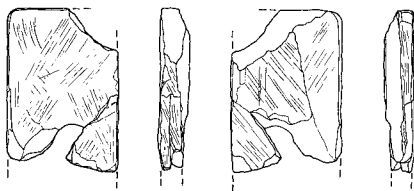
70



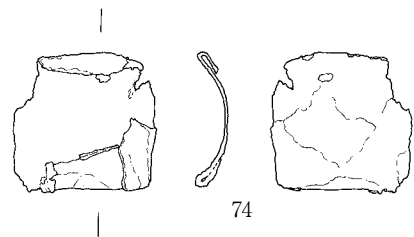
71



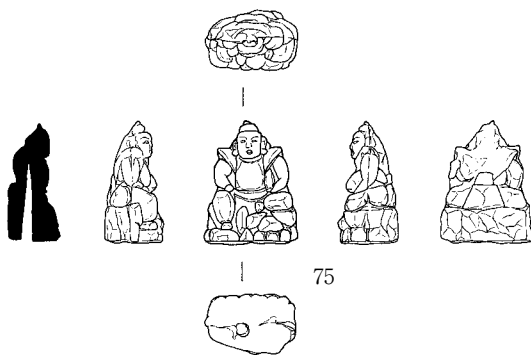
72



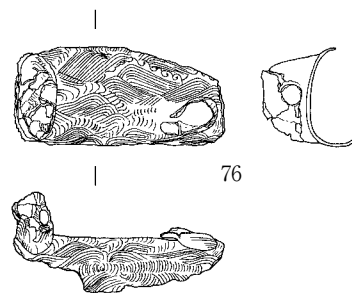
73



74



75



76



fig.155 II区包含層出土遺物実測図 (その4)

調査Ⅱ区出土遺物観察表

fig. no.	遺物番号	pl. no.	出土地点	種類	器種	器形	部位	法量 (cm)			形態的特徴	成形・調整 内面/外面	釉薬・絵付 内面/外面	胎土	その他の特徴	産地	年代	備考
								口径	器高	胴径								
36	1	46 B	SB10 (P1)	土師質土器	小皿		底部	(1.1)		2.8	(内) ロクロ目。 (外) 底部回転糸切り痕。		橙色。石英粒。	ロクロは右回転。				
38	1	46 B	SK1	磁器	皿		口縁	(2.8)			染付。 (内) 割筆による斜格子紋。二重圏線。	白色。粒子ガラス化。透明感を持つ。剥離面はやや荒い。気孔(円)が存在する。		18世紀後半	肥前			
38	2		SK1	陶器	汁次		口縁	(7.3)			(内) 露胎。 (外) 鉄釉(黒釉)。	赤灰褐色。石英粒、赤褐色斑、粒子単位を留める。剥離面は荒い。気孔(円・裂)が存在、裂孔の規模はやや大きい。	内面の体部上位に鉄分が付着する。					
38	3	46 B	SK1	陶器	皿		口縁	(2.6)			(外) ロクロ目。		白色。石英粒。粒子単位を留める。剥離面は荒い。気孔(円・裂)が存在する。	内外面に貫入が見られる。	瀬戸・美濃	19世紀	陶器染付	
40	1	46 B	SK3	磁器	碗		底部	(1.6)		3.2	(置付け) 釉剥ぎ。	染付。 (見込み) 蝶or草花紋。	白色。粒子ガラス化。透明感を持つ。剥離面は滑らか。気孔(円)が存在する。	透明釉が厚く紋様は不明瞭。(呉須) 青灰~緑灰色。	瀬戸・美濃	19世紀		
40	2	58	SK3	磁器	碗	端反り形		5.3		4.0	(見込み) 蛇ノ目釉剥ぎ。	(内) 口縁部に二重圏線。底部に一重圏線。 (外) 濃みによる一重圏線、横線紋に折枝梅or土坡。	白色。ガラス化。剥離面はやや荒い。		肥前系			
40	3	46 B	SK3	磁器	碗	端反り形?	底部	3.4		3.6	(置付け) 釉剥ぎ。	(見込み) 丸紋内に 蠟蝟紋。 (外) 草花紋。	白色。粒子ガラス化。剥離面は滑らか。気孔(円・裂)が存在する。	(呉須) 青・紺色。				
40	4	46 C	SK3	陶器	皿	端反り形		4.4		5.2	(見込み) 蛇ノ目釉剥ぎ。	(内) 鉄釉(発色は暗褐色)。 (外) 鉄釉。露胎。	黄灰~灰褐色。黒色斑。粒子単位を留める。剥離面はやや荒い。気孔(円)が存在する。	(見込み) 重ね焼に伴う熔着痕跡。	関西系	19世紀		
40	5	46 C	SK3	陶器	皿	端反り形		4.8		4.2	(外) 体部上位に一条の沈線。 (見込み) 蛇ノ目釉剥ぎ。アルミナ砂塗布。	(内) 鉄釉(鉛釉)。 (外) 鉄釉(鉛釉)。露胎。	暗灰色。石英粒。粒子単位を留めガラス化。剥離面は荒い。気孔(円・裂)が存在する。	ロクロは調整時左回転。(置付け) 重ねによる熔着痕。		19世紀		
40	6	58	SK3	磁器	徳利		口縁	(13.7)			(内) 露胎。 (外) 竹、岩。	灰白色。黒色斑。ガラス化良好。透明感を持つ。剥離面はやや荒い。気孔(円・裂)が存在し、規模の大きなものが見られる。	成形時ロクロ右回転。調整時ロクロ左回転。	肥前	18世紀後半~19世紀			

fig. no.	遺物番号	pL no.	出土地点	種類	器種	器形	部位	法		量 (cm)		形態的特徴	成形・調整 内面/外面	釉薬・絵付 内面/外面	胎土	その他の特徴	産地	年代	備考
								口径	器高	胴径	底径								
40	7	58・61	SK3	磁器	碗	端反り形		10.6	6.0		3.9	高台は幅狭く直立する。口縁部はやや外反する。		(内) 口縁部に雷紋帯。一重圏線。 (外) 蜻唐草に蝶紋。高台に二重圏線(見込み) 丸紋内に松竹梅。	白色。ガラス化。透明感を持つ。剥離面はやや荒い。気孔(円)が存在する。	肥前系	19世紀		
40	8	58	SK3	陶器	急須			8.6	8.0		8.0	底部は春嵩底風の凹面を成す。内面の口縁部下に蓋受けが付く。	(内) 指頭圧痕。口縁部は撫で。 (外) 底部に布目圧痕。	(外) 白土を素地に施しコバルトによる草花紋。透明釉。 (内) 頸部以上緑灰。口縁部以下露胎。鉄軸垂れ。 (外) 緑灰釉。	黄灰色。黒色斑。ガラス化。剥離面はやや荒い。気孔(円・裂)が存在する。	関西系	近代?		
40	9	58	SK3	陶器	瀬徳利		口縁	3.4	(20.8)	8.3	口縁部は罈口形を成し、端部は短く内湾する。		(内) 頸部以上緑灰。口縁部以下露胎。鉄軸垂れ。 (外) 緑灰釉。	黄灰色。黒色斑。粒子ガラス化。剥離面はやや荒い。気孔(円)が存在、規模は小さい。	関西系	19世紀			
40	10	46 C	SK3	土師質土器	羽釜?		口縁	13.2	(4.2)		口縁部は内側に肥厚し、端部は内傾する面を成す。		(内・外) 弱い口縁部を成す。	橙白色。石英粒。					
42	1	46 C	SK5	磁器	碗		口縁	11.8	(3.3)		体部は内湾して立ち上がる。	染付。 (外) 草花紋?		白色。一部粒子単位を留めガラス化する。透明感を持つ。剥離面はやや荒い。気孔(円・裂)が存在する。	内外面に貫入が見られる。				
44	1	46 C	SK6	磁器	香炉		口縁	10.8	(3.4)		口縁部で内側に肥厚し主縁状を成す。	(内) 露胎。青磁釉。 (外) 青磁釉。		白色。粒子ガラス化良好。透明感を持つ。剥離面は概ね滑らか。気孔(円・裂)が存在し、裂孔は稀。	肥前				
46	1	46 D	SK7	土師質土器	小皿			6.2	1.1	4.2	体部はやや内湾して短く外上方に立ち上がる。	(内) 撫で。 (外) 撫で。 (底) 回転糸切り痕。		淡橙色。石英粒。					
46	2	46 D	SK7	土師質土器	小皿			6.6	1.3	4.4	体部はやや内湾して立ち上がる。	(内) 撫で。 (外) 撫で。 (底) 回転糸切り痕(合わせ切り)。		淡橙色。石英粒。					
46	3	46 D	SK7	土師質土器	小皿			7.4	1.2	4.4	体部はやや内湾して外上方に立ち上がる。	(内) 撫で。 (外) 撫で。 (底) 回転糸切り痕。		淡橙色。石英粒。	口縁端の一部に煤が付着する。				
46	4	46 D	SK7	土師質土器	小皿			6.6	1.1	4.2	体部はやや内湾して外上方に立ち上がる。	(内) 撫で。 (外) 撫で。 (底) 回転糸切り痕。		淡橙色。石英粒。	口縁部に煤が付着する。				
46	5	46 D	SK7	土師質土器	小皿			6.8	1.1	4.5	体部はやや内湾して外上方に立ち上がる。口縁端部は丸味を持って仕上がる。	(内) 撫で。 (外) 撫で。 (底) 回転糸切り混り。		橙白色。赤褐色。石英粒。	口縁部に煤が付着する。				
46	6	46 D	SK7	土師質土器	小皿			6.9	1.1	4.2	体部はやや内湾して外上方に立ち上がる。	(内) 撫で。 (外) 撫で。 (底) 回転糸切り痕。		淡橙色。褐色粒子。	成形時ロクロ右回転。口縁の一部に煤が付着する。				
46	7	46 D	SK7	土師質土器	小皿			8.0	1.2	5.6	体部はやや内湾して外上方に立ち上がる。口縁端部は丸味を持って修める。	(内) 撫で。 (底) 回転糸切り痕。		橙白色。石英粒。	口縁部に煤が付着する。				

fig. no.	遺物番号	pl. no.	出土地点	種類	器種	器形	部位	法		量 (cm)		形態的特徴	成形・調整 内面/外面	釉薬・絵付 内面/外面	胎土	その他の特徴	産地	年代	備考
								口径	器高	胴径	底径								
46	8	46 D	SK7	土師質 土器	小皿			7.2	1.1		4.6	体部はやや内湾して外上方に立ち上がっている。口縁端部は不明瞭な面を成す。	(内) 撫で。 (外) 撫で。 (底) 回転糸切り痕。		黄白色。石英粒。	口縁端の一部に煤が付着する。			
46	9	46 D	SK7	土師質 土器	小皿			7.6	1.2		4.8	体部はやや内湾して外上方に立ち上がる。	(内) 撫で。 (外) 撫で。 (底) 回転糸切り痕。		橙白色。石英粒。	成形時ロクロは右回転。口縁の一部に煤が付着する。			
46	10	46 D	SK7	土師質 土器	小皿			7.8	1.1		5.5	体部はやや内湾して外上方に立ち上がる。口縁端部は丸味を持って修める。	(内) 撫で。 (外) 撫で。 (底) 回転糸切り痕。		橙色。				
46	11	47 A	SK7	土師質 土器	小皿			6.5	1.6		3.5	体部は直線的に外上方に立ち上がる。口縁部は肥厚し端部は直立する弱い凸面を成す。	(内・外) 撫で。		淡橙色。石英粒。				
46	12	47 A	SK7	土師質 土器	小皿			6.6	2.0		4.1	体部は直線的に外上方に立ち上がる。口縁部は外傾する面を成す。	(内・外) 撫で。		橙灰色。	内外面に煤が付着する。			
46	13	47 A	SK7	陶器	碗		底部		(3.2)		3.4	高台は低く「ハ」の字状に開く。高台内の削りは脇より深い。	(内) 青灰釉。 (外) 青灰釉露胎。		黄白色。粒子ガラス化良好。剥離面は概ね滑らか。気孔(円・裂)が存在、裂孔の規模は大きい。	細貫入が見られる。信楽?			
46	14	47 A	SK7	陶器	掃鉢		底部		(3.7)		104	底面はベタ底を成す。	(内) 摺目は1単位9条以上の細い溝であり、縦位又は斜位に下から上に施される。 (外) 撫で。底部は削り。		赤橙色。石英粒。剥離面は荒い。気孔(円・裂)が存在する。	調整時ロクロは左回転。			
49	1	47 A	SK9	土師質 土器	小皿			7.0	1.1		4.6	体部はやや内湾して立ち上がる。口縁端部は丸く修める。	(底) 回転糸切り痕。	(内・外) 撫で。	淡橙色。石英粒。	口縁の一部に煤が付着する。			
49	2	47 A	SK9	土師質 土器	小皿			7.5	1.1		5.1	体部はやや内湾して外上方に立ち上がる。端部は丸く修める。	(底) 回転糸切り痕。	(内・外) 撫で。	淡橙色。	成形時ロクロ右回転。口縁の一部に煤が付着する。			
53	1	47 A	SK13	磁器	碗		口縁	7.8	2.9			体部はやや内湾する。		染付。	白色。粒子はガラス化する。透明感を持つ。剥離面は荒い。気孔(円)が存在する。	口縁部を中心に透明釉が暗緑化する(二次的な靱酸か?)。口唇部は摩滅する。	肥前		
57	1	47 B	SK16	磁器	碗		底部		(2.6)		3.1	高台は断面三角形を呈し直立する。	(置付け) 釉剥ぎを施す。	染付。 (外) 底部に一重圈線。高台に二重圈線。	灰～灰白色。粒子はガラス化する。透明感を持つ。剥離面はやや荒い。気孔(円・裂)が存在する。	内面に細貫入が見られる。	波佐見		

fig. no.	遺物番号	pL no.	出土地点	種類	器種	器形	部位	量 (cm)			形態的特徴	成形・調整 内面/外面	釉薬・絵付 内面/外面	胎土	その他の特徴	産地	年代	備考
								口径	器高	胴径								
57	2	47 B	SK16	陶器	碗	呉器形	底部	口径 (4.0)	器高 (4.0)	胴径 5.0	底径 5.0	高台は幅厚く高く直立する。高台内はア ーチ状に削り出され る。	(量付け) 釉剥ぎ を施し、砂粒が付 着する。	(内・外) 灰釉。	黄白色。赤色粒。粒 子単位を留める。剥 離面は荒い。気孔 (円・裂) が存在す る。	尾戸	18世紀	呉器手
57	3	47 B	SK16	磁器	皿			口径 17.4	器高 (3.6)			体部はやや内湾して 外上方に立ち上 がる。口縁端部は太 丸味を持って修め る。	染付。 (内) 渦紋? (外) ロクロ目。		白色。粒子はガラス 化し、やや透明感を 持つ。剥離面はや や荒い。気孔(円・ 裂) が存在する。	肥前?		
59	1	47 B	SK17	磁器	蓋	端反り形		口径 9.0	器高 2.5	胴径 3.4	底径 3.4	口縁部は外反する。 口縁部で外反する。	染付。 (内) 口縁部に渦 紋? (見込み) 二重 線。 (外) 蜻唐草。底 部に二重線。摘み 部に一重線。	白色。粒子ガラス 化。透明感を持つ。 気孔(円・裂) が存 在する。	瀬戸・ 美濃	19世紀		
59	2	47 B	SK17	土師質 土器	土唾	管状		全長 (4.0)	直径 2.0	円口径 0.7	重量 10.5g		中央部で膨らみを持 つ。長軸方向に7mm の円孔が穿たれる。		橙灰色。石英粒。			
59	3	57 C	SK17	轆羽口	筒形?		吹き口	全長 (14.4)	直径 8.3	円口径 2.8	重量 665.5g		吹き口周辺には鉄 滓が溶着する。吹 子側は斜めに面取 りが施される。		砂岩製。			
61	1	47 B	SK19	磁器	碗	丸形		口径 10.0	器高 (4.3)			体部は内湾して斜 め上方に立ち上 がる。	染付。 (内) 口縁部に 丸線? (外) 山水紋?	白色。黒色斑が見 られる。粒子はガ ラス化する。剥離 面はやや荒い。気 孔(円・裂) が存 在する。	肥前			
61	2	47 B	SK19	陶器	鉢	口縁		全長 18.2	器高 (5.9)			口縁部は粘土を折 返すことにより断 面を成して肥厚す る。	(内) 鉄泥。 (外) 鉄泥。露胎。 (内) 鉄泥。露胎。 (外) 鉄泥。露胎。 (口) 露胎。	赤灰褐色。粒子単 位を留める。剥離 面は荒い。気孔(円) が存在する。	肥前?			
61	3	56 D	SK19	砥石	仕上げ 砥			全長 (5.8)	全厚 (4.7)	全厚 (2.6)	重量 76.1g	底面は3面が存在し 、端面には部分的 に滑らかな部分 が見られる。各底 面の長軸方向に 斜位の条痕が見 られる。		泥岩製。				
64	1	47 C	SK23	陶器	鉢	口縁		口径 18.6	器高 (6.6)			口縁部は外側へ肥 厚し断面は楕円形 を成す。	(内・外) 鉄 釉掛け。下部は 露胎する。	赤灰色。粒子単位 を留める。剥離面 は荒い。気孔(円・ 裂) が存在する。				
67	1	47 C	SK25	陶器	灯明皿			口径 10.3	器高 1.9		重量 3.2	体部は内湾の後直 線的に外上方に立 ち上がる。器壁は 薄く仕上げられ る。	(内) 褐釉。 (外) 褐釉。体部 以下露胎する。	灰色。黒色斑。	関西系			
69	1	47 C	SK26	陶器	碗	底部		口径 (2.3)	器高 (2.3)		重量 3.9	高台は幅狭く、外 側にやや開く。高 台内は筋より深く 凹面を成して削り 込まれる。	(内) 灰釉。 (外) 灰釉。露胎。 (内) 灰釉。露胎。 (外) 灰釉。露胎。	黄白色。赤色粒。粒 子単位を留める。剥 離面はやや荒い。気 孔(円・裂) が存 在。裂孔の規模は 小さく多在。	肥前or 尾戸	18世紀 前半		

fig. no.	遺物番号	pl. no.	出土地点	種類	器種	器形	部位	量 (cm)			形態的特徴	成形・調整 内面/外面	釉薬・絵付 内面/外面	胎土	その他の特徴	産地	年代	備考
								口径	器高	底径								
71	1	47 C	SK27	陶器	碗		底部	口径 (5.0)	器高 1.6	底径 5.2	高台は断面逆台形を呈し直立する。高台内は胎に較べ深くアーチ状に削り出される。	(内) 緑灰釉。露胎。 (外) 緑灰釉。露胎。	灰～灰褐色。粒子はガラス化。剥離面はやや荒い。気孔(円・裂)が多く存在する。	調整時ロクロ左回転。	肥前?	18世紀前半		
74	1	47 D	SK29	土師質土器	小皿			口径 6.4	器高 1.5	底径 4.3	体部はやや外反して上方に立ち上がる。口縁部は丸味を持つ。	(内) 撫で。 (底) 回転糸切り痕。	橙色。2mm大の砂粒を含む。	口縁の一部に煤が付着する。				
74	2	47 D	SK29	土師質土器	小皿			口径 6.9	器高 1.5	底径 4.2	体部はやや外反して上方に立ち上がる。口縁部は丸味を持つ。	(内) 撫で。 (底) 回転糸切り痕。	橙色。	成形時ロクロは右回転。	口縁部に数カ所煤が付着する。			
74	3	47 D	SK29	磁器	碗		底部	口径 (3.0)	器高 4.2	底径 4.2	高台は断面逆台形を呈し直立する。高台内は胎に較べ深くアーチ状に削り出される。	染付。 (内) 草花紋? 底面に一重圏線。高台に太めの二重圏線。高台内に一重圏線。	白色。ガラス化良好。透明感はやや弱い。剥離面はやや荒い。気孔(円・裂)が存在。太めの二重圏線。高台内に一重圏線。		肥前			
74	4	58	SK29	陶器	香炉	筒形		口径 10.0	器高 5.6	底径 4.2	高台は削り出しにより短く「ハ」の字状に開く。口縁部は内側にやや肥厚する。	(暈付け) 釉剥ぎを施し、内面に砂粒が付着する。	灰～灰白色。粒子単位を留める。剥離面は荒い。気孔(円・裂)が存在する。	調整時ロクロ右回転。貫入が認められる。	肥前	18世紀	陶胎染付	
74	5	47 D	SK29	陶器	碗		底部	口径 (2.5)	器高 5.6	底径 5.6	高台は断面逆台形を呈し直立する。高台内はアーチ状を成し胎に対して深く削り出される。	(内) 灰釉。 (外) 灰釉露胎。	黄白色。赤色粒、黒色粒。粒子単位を留めガラス化する。剥離面は荒い。気孔(円・裂)が存在。裂孔の規模は大きい。	細貫入が認められる。	尾戸?		呉器形?	
74	6	47 D	SK29	磁器	皿		底部	口径 (2.4)	器高 8.2	底径 8.2	高台は削り出しにより断面三角形を成し、端部には面取りを施す。高台内は深く削り出される。	染付。	白色。一部粒子単位を留めガラス化する。透明感を持つ。剥離面はやや荒い。気孔(円・裂)が存在。裂孔の規模は大きい。		肥前			
74	7	56 D	SK29	砥石	中砥	棒状		全長 (7.8)	全幅 (4.8)	重量 193.2g	砥面は表裏2面と側面2面である。端面1には斜位の剥離痕が見られる。砥面には長軸方向に対して斜位の擦痕が多く存在する。		石英粗面岩製。					
77	1	57 A・B	SK31	石臼	粉挽き臼		上臼	直径 27.0	厚さ 7.2	円孔径 3.2	4分面?(主溝角度は81°)。主溝1条に対して副溝2条が存在する。全体的に摩滅を受ける。中心軸は一边2cmの方形を呈す。中心から約1/3の所に直径3.2cmの円孔を穿つ。		砂岩製。					
77	2	47 D	SK31	陶器	碗	広東形	底部	口径 (2.5)	器高 6.0	底径 6.0	高台はやや低く直立する。	(内) 底部は一重圏線。(見込み) 五弁花。(外) 底部と高台に一重圏線。	白色～乳白色。粒子単位を留める。剥離面は荒い。気孔(円・裂)が存在する。		瀬戸・美濃	19世紀第2四半期	陶器染付	
77	3	47 D	SK31	陶器	碗	広東形	口縁	口径 12.4	器高 (5.0)	底径 12.4	口縁部は丸く修められる。	(内) 口縁部と底部に一重圏線。(外) 捻じ梅。	白色。粒子単位を留める。剥離面は荒い。気孔(円・裂)が存在する。		瀬戸・美濃	19世紀前半	陶器染付	

fig. no.	遺物番号	pl. no.	出土地点	種類	器種	器形	部位	量 (cm)			形態的特徴	成形・調整 内面/外面	釉薬・絵付 内面/外面	胎土	その他の特徴	産地	年代	備考
								口径	器高	胴径								
77	4	48 A	SK32	陶器	皿?		底部		(3.4)	6.5		(内) 霽胎。 (外) 銅緑釉。下位露胎する。	灰褐色。粒子単位を残す。剥離面は荒い。気孔(円)が存在する。	成形時ロクロ右回転。調整時ロクロ右回転。	肥前?	17世紀?		
77	5	58・61	SK32	磁器	碗			10.1	6.4	4.5		(外) 網干し紋。草花紋。	白色。粒子ガラス化。剥離面はやや荒い。気孔(円・裂)が存在。規模は小さい。	(高台内)「太明年製」。	肥前	18世紀		
77	6	48 A	SK32	陶器	碗	兵器形	底部		(3.8)	4.6		(内・外) 灰釉。	黄灰色。粒子単位を残す。剥離面はやや荒い。気孔(円・裂)が存在する。	細貫入が見られる。	肥前?	18世紀前半	兵器手	
77	7	48 A	SK32	陶器	碗	広東形	口縁	12.4	(4.1)			(内) 口縁部に一重の露胎。 (外) 松、梅紋。	白色。粒子単位を留める。剥離面は著しく荒い。気孔(円・裂)が多く存在。裂は多く規模は大。		瀬戸・美濃	18世紀末~19世紀	陶器染付	
77	8	48 A	SK32	陶器	皿			12.4	(2.5)	5.5		(内) 緑灰釉。 (外) 緑灰釉。露胎。	灰~灰褐色。粒子単位を留めガラス化する。剥離面は荒い。気孔(円・裂)が存在。裂は多く規模は大。		肥前			
77	9	57 D	SK32	瓦	軒平瓦		瓦当部	瓦当幅 4.9	紋様 区幅 3.4	体部厚 1.8		3単位の雄志状紋、珠点が存在する。(均等唐草紋)						
77	10	58	SK32	瓦質土器	焜炉		底部		(5.2)	32.0		(内) 縦位の区画沈線。径紋? 円形の刺突が側面に陰刻される。	灰色4mm大の砂粒。石英粒。					
79	1	48 B	SK33	土師質土器	小皿		底部		(0.6)	4.6		(内) 弱いロクロ目。 (底部) 回転糸切り葉。	褐色。石英粒。気孔(円・裂)が存在する。	成形時ロクロ右回転。				
79	2	48 B	SK33	陶器	碗	兵器形	底部		(3.3)	5.0		(内・外) 灰釉。	黄白色。粒子単位を留めガラス化する。剥離面は荒い。気孔(円)が存在する。	細貫入が見られる。	尾戸or肥前	17世紀後半	兵器手	
79	3	48 B	SK33	磁器	皿		底部		(5.6)	5.7		(内) 白釉。 (外) 白釉。露胎。	白色。黒色斑。粒子単位を留めガラス化する。透明感をやや持つ。気孔(円)が存在する。	高台の内側に砂粒が付着する。成形時ロクロ左回転(釉剥ぎ時)。	肥前			
79	4	48 B	SK33	陶器	皿		底部		(1.8)	4.9		(見込み) 蛇ノ目釉剥ぎを施し、砂粒が付着する。 (見込み) 砂粒が付着する。	白~乳白色。赤色粒。粒子単位を留めガラス化する。剥離面は均一な荒い。気孔(円・裂)が存在。裂は稀で規模は大さい。	調整時ロクロ左回転。	内野山	17世紀後半~18世紀前半		

fig. no.	遺物番号	pl. no.	出土地点	種類	器種	器形	部位	法量 (cm)		形態的特徴	成形・調整 内面/外面	釉薬・絵付 内面/外面	胎土	その他の特徴	産地	年代	備考
								口径	器高								
79	5	48 B	SK33	陶器	甕?	底部	底部	(3.6)	13.8	底部はベタ底を呈し、端部では面取りが施される。	(内) 撫で。		赤灰～暗灰色。石英粒、赤色粒、黒色斑。粒子ガラス化良好。剥離面は荒い。気孔(円・裂)が存在する。	調整時ロクロ左回転?	備前		
82	1	48 C	SK34	陶器	碗	口縁	口縁	(4.2)	10.8	口縁端部は太く丸味を持つ。		(外) 口縁部に二重圏線。山水紋。	灰色。粒子単位を留めガラス化する。剥離面は荒い。気孔(円)が存在する。	内外面に規模の大きな貫入が見られる。	肥前	18世紀	陶胎染付
82	2	48 C	SK34	陶器	碗	底部	底部	(6.2)	13.2	体部は内湾後直立する。口縁端部は水平な弱い凸面を成す。	(外) ロクロ目。	(内・外) 緑灰釉(濁る)。	灰色。粒子単位を留めガラス化する。剥離面は荒い。気孔(円・裂)が存在、裂孔の規模は大きい。		18世紀		
82	3	48 C	SK34	陶器	碗	底部	底部	(4.6)	4.6	高台は高く幅広い直立する。高台内はアーチ状に削り出される。	(量付け) 釉剥ぎを施し、砂粒が付着する。	(内・外) 灰濁釉。	黄灰色。赤色粒。粒子単位を留めガラス化する。剥離面は荒い。気孔(円・裂)が存在、裂孔の規模はやや大きい。	細貫入が見られる。	肥前?	18世紀前	呉器手
82	4	48 C	SK34	磁器	碗	底部	底部	(2.4)	4.6	高台は断面逆台形を呈し直立する。		染付。高台基部に一重圏線。高台内は露胎。	白色。一部粒子単位を留めガラス化良好。透明感を持つ。剥離面はやや荒い。気孔(円・裂)が存在、裂孔の規模は大きい。	成形時ロクロ右回転。貫入が見られる。	肥前	18世紀?	
83	1	48 C	SK35	磁器	碗	丸形	丸形	4.1	7.0	高台は短く直立する。	(量付け) 釉剥ぎを施し、砂粒が付着する。	染付。草花紋。底部に二重圏線。高台に二重圏線。	白～灰白色。粒子ガラス化良好。透明感を持つ。剥離面は概ね滑らか。気孔(円)が存在する。	波佐見?		煎茶碗	
85	1	48 D	SK36	土師質土器	小皿			(1.3)	6.8	体部は直線的に外上方に短く立ち上がっている。	(内) 撫で。 (外) 合わせ切りによる回転糸切り痕。	赤褐色。石英粒。		焼成良好で堅緻。			
85	2	48 D	SK36	磁器	花生	口縁	口縁	(7.1)	9.8	端部は丸味を持つが、不明瞭な面が存在する。		(内・外) 青磁釉。	白色。粒子ガラス化良好。剥離面は荒い。気孔(円)が存在する。	肥前		青磁	
85	3	48 D	SK36	磁器?	碗	底部	底部	(4.0)	6.0	高台は幅狭く断面逆台形を呈し直立する。高台内はアーチ状に削り出される。		(内・外) 灰釉(白濁)。	白色。黒色斑。粒子ガラス化良好。剥離面はやや荒い。気孔(円・裂)が存在する。	胎土は磁器質である。			呉器形
85	4	48 D	SK36	陶器	碗	底部	底部	(3.1)	5.8	高台は高く幅広い「ハ」の字状にやや開く。高台内はアーチ状を成し、脇に較べてやや深く削られる。		(内・外) 灰釉。	乳白色。赤色粒。粒子単位を留めガラス化する。剥離面はやや荒い。気孔(円・裂)が存在する。	細貫入が見られる。			
85	5	48 D	SK36	陶器	鉢	底部	底部	(3.0)	10.8	高台は断面台形を呈し直立する。		(内) 灰釉。 (外) 鉄泥。	赤褐色。剥離面は荒い。気孔(円)が存在する。	調整時ロクロ左回転。			

fig. no.	遺物番号	pL no.	出土地点	種類	器種	器形	部位	量 (cm)			形態的特徴	成形・調整 内面/外面	釉薬・絵付 内面/外面	胎土	その他の特徴	産地	年代	備考	
								口径	器高	胴径									底径
87	1	48 D	SK38	陶器	鉢		口縁	18.6	(5.4)		口縁部は外側に肥厚することにより玉縁状を成す。 高台は腰輪高台を成す。量付けは面を成す。 高台は断面逆台形を呈し直立する。 高台幅は広く直立ち、高台内は脇に較べて深く削り出される。	(内) 横位の刷毛。 (外) 撫で。 (口唇) 釉剥ぎを施し、密着痕跡を留める。 (量付け) 釉剥ぎを施し、砂粒が付着する。 (内) 撫で。 (外) 低位は削り高台内は鏡撫で。	(内) 鉄釉 (暗褐色)。 (外) 鉄釉 (黒褐色)。 (内) 露胎。 (外) 露胎。 体部と底部に各々3条の帯線。	橙褐色。石英粒。剥離面は荒い。気孔(円・裂)が存在する。					
88	1	49 A	SK39	磁器	瓶		底部		(5.3)	4.2			白色。やや透明感を有する。剥離面は荒い。気孔(円)が存在する。	肥前					
88	2	49 A	SK39	陶器	碗	腰折形	底部		3.2	5.8		(内) 露胎。 (外) 灰釉。	橙色。石英粒。剥離面は荒い。気孔(円)が存在する。						
88	3	49 A	SK39	陶器	碗		底部		3.9	5.0		(内・外) 緑灰釉。	灰～黄灰色。粒子単位を留める。ガラス化は良好。剥離面は荒い。気孔(円・裂)が存在、裂孔は多く規模は小さい。	肥前	18世紀前半	呉器手			
95	1	49 A	SK45	磁器	碗		口縁	11.6	(2.4)		染付。 (外) 松紋。	白色。透明感を持つ。剥離面はやや荒い。気孔(円・裂)が存在、裂孔は稀。							
98	1	49 A	SK47	陶器	皿	縁折形	口縁	13.7	(2.5)		(内・外) 灰褐色。	黄白色。赤色粒。粒子単位を留める。剥離面は荒い。気孔(円・裂)が存在する。							
99	1	57 A・B	SK48	石臼	粉挽き臼		上臼	直径 33.0	厚さ 6.4	重量 2.25kg	10分画(主溝角度37°)。主溝1条に対して副溝3条が存在する。各溝は端部で湾曲する。二次的な被熱を受ける。		砂岩製。						
99	2	49 B	SK48	陶器	碗		底部		(3.9)	5.7	高台は断面逆台形を呈し直立する。高台内は脇に較べて浅く削り出されるが中央部では円筒状に深く削られる部分が存在する。	(内) 緑灰釉。 (外) 緑灰釉。露胎。	灰色。一部粒子単位を留めるがガラス化はやや荒い。剥離面は荒い。気孔(円・裂)が存在する。	肥前?	17世紀後半～18世紀前半				
99	3	49 B	SK48	陶器	碗	呉器形	底部		(5.6)	4.8	高台は幅広く「ハ」の字状にやや開く。量付けは面を成す。高台内はアーチ状に脇より深く削り出される。	体部に二条の沈線が施される。	黄白色。赤色粒。粒子単位を留めガラス化している。剥離面は荒い。気孔(円・裂)が存在、規模は大。	肥前or信楽	18世紀前半	呉器手			
108	1	57 C	SK58	輪羽口	筒形		吹き口	全長 (8.8)	直径 9.2	円口径 4.3	重量 256.3g	直径約10cmの円筒形を呈し、中央部に直径2.5cmの円孔が穿たれる。吹き口側には鉄滓とコークス?が熔着する。	砂岩製						
108	2	49 B	SK58	陶器	皿	丸形	口縁		(2.8)		口縁端部はやや大きく丸味を持つ。	(内) 銅緑釉。 (外) 灰釉。低位は削りを施す。	白～乳白色。粒子単位を留めガラス化する。剥離面はやや荒い。精緻。気孔(円・裂)が存在、規模は小さい。	内野山	17世紀後半～18世紀前半				
113	1	49 B	SK63	土師質土器	小皿			7.4	1.3	4.6	体部はやや内湾して外上方に立ち上がる。	黄橙色。石英粒。褐色粒。	口縁の一部に灰が付着する。						

fig. no.	遺物番号	pl. no.	出土地点	種類	器種	器形	部位	量 (cm)		形態的特徴	成形・調整 内面/外面	釉薬・絵付 内面/外面	胎土	その他の特徴	産地	年代	備考
								口径	器高								
113	2	49 B	SK63	磁器	碗		底部	口径 (3.7)	底径 3.7	高台は幅広く「ハ」の字状にやや開く。	(量付け) 釉剥ぎを施し砂粒が付着する。	染付。 (外) 草花紋? 底部と高台に一重圓線。	白色。透明感を持つ。剥離面はやや荒い。気孔(円・裂)が存在する。		肥前		
114	1	49 C	SK64	陶器	碗		口縁	口径 (5.8)		口縁部で弱く外反する。		(内・外) 鉄釉(茶褐色)。	赤褐～赤褐色。粒子単位を留める。剥離面は荒い。気孔(円)が存在する。				
120	1	49 C	SK69	陶器	碗	天目形	口縁	口径 (3.9)		口縁部で緩やかな屈曲部を持つ。端部は太く丸味を持つ。		(内・外) 鉄釉(鉛釉)。	白色。石英粒。粒子単位を留める。剥離面は著しく荒い。気孔(円・裂)が存在する。		瀬戸・美濃	17世紀?	
122	1	49 C	SK73	土師質土器	小皿		底部	口径 (0.9)	3.8	体部はやや内湾して外上方に立ち上がる。	(内) ロクロ目。 (外) 撫で。 (底) 回転糸切り痕。		褐色。石英粒。				
124	1	49 C	SK74	磁器	皿		底部	口径 (2.9)	9.6	高台は断面逆台形を呈し直立する。壘付けの端部には面取りが施される。高台内の削りは脇に較べて浅い。	(量付け) 釉剥ぎを施し砂粒が付着する。	染付。 (内) 草花紋。	白～乳白色。一部粒子単位を留めガラス化する。剥離面はやや荒い。気孔(円・裂)が多く存在する。				
125	1	49 C	SK75	磁器	小碗		口縁	口径 (2.0)		口縁部で短く外反する。器壁は薄い。口縁端部に稜を持つ。	染付。 (外) 口縁下に二重圓線。		白色。一部粒子単位を留める。透明感を持つ。剥離面はやや荒い。気孔(円・裂)が存在する。				
125	2	49 C	SK75	須恵器	壺?		底部	口径 (3.8)	12.3	高台は断面逆台形を呈し、腰輪高台状に「ハ」の字状に開いて貼付される。	(内) 撫でを施し、指頭圧痕を残す。 (外) 撫で。		灰～淡緑灰色。石英粒。剥離面は荒い。気孔(円)が存在する。粘土の混和痕跡が残る。				
126	1	49 C	ST1	磁器	小碗		口縁	口径 (3.0)		口縁部で外反する。			白色。剥離面はやや荒い。気孔(円・列)が存在、規模は小さい。				
126	2	49 C	ST1	陶器	香炉	腰折形	口縁	口径 (4.7)		体部中位で屈曲し腰部を成す。口縁部は外側へ肥厚し、口縁端部は緩やかな凸面を成す。	(内) 口縁部は緑釉。露胎。 (外) 上位は緑釉。露胎。		暗灰色。石英粒。剥離面は荒い。気孔(円)が存在する。		能登山?		
128	1	49 D	ST3	陶器	皿		底部	口径 (2.1)	5.4	高台は断面逆台形を呈し直立する。	(外) 削り。 (見込み) 蛇ノ目釉剥ぎ。	(内) 銅緑釉。露胎。 (外) 灰釉。露胎。	白色。赤色斑。粒子ガラス化する。剥離面は荒いが一様である。気孔(円・裂)が存在、裂孔の規模は大。		内野山	17世紀後半～18世紀前半	
129	1	49 D	SD1 (BQ9)	土師質土器	小皿			口径 1.7	4.2	体部はやや内湾して外上方に立ち上がる。口縁端部は太く丸味を持って修める。	(内) ロクロ目。 (外) 横位の撫で。 (底) 回転糸切り痕。		橙灰色。石英粒多し。				
129	2	49 D	SD1 (BQ9)	土師質土器	小皿			口径 1.5	4.4	体部はやや内湾して外上方に立ち上がる。口縁端部は丸味を持って修める。	(内・外) 撫で。 (底) 回転糸切り痕。		橙灰色。石英粒。				

fig. no.	遺物番号	pl. no.	出土地点	種類	器種	器形	部位	量 (cm)			形態的特徴	成形・調整 内面/外面	釉薬・絵付 内面/外面	胎土	その他の特徴	産地	年代	備考
								口径	器高	底径								
129 3	49 D	SD1 (BQ-18)	土師質 土器	小皿		底部	2.5	(0.8)	4.0	体部はやや内湾して外上方に立ち上る。口縁部は太く丸味を持つて修める。	(内) ロクロ目。 (外) ロクロ目。底部に回転糸切り痕。		黄橙色。赤色粒。	成形時ロクロ右回転。				
129 4	49 D	SD1 (BQ-9)	土師質 土器	小皿		底部		(1.4)	4.2	体部は内湾して外上方に立ち上る。口縁部は太く丸味を持つて修める。	(内) ロクロ目。撫で。 (外) 撫で。 (底) 回転糸切り痕。		橙色。石英粒。	成形時ロクロ右回転。				
129 5	49 D	SD1 (BQ-11)	土師質 土器	坏		底部		(1.4)	9.2	底部は平らな面を成し、やや突出する。	(内) 撫で。 (底部) 回転糸切り痕。		橙色。石英粒、赤色チャート粒。					
129 6	49 D	SD1 (BQ-10)	磁器	瓶		口縁	2.5	(6.2)		頸部は細く直立し、口縁部で外反する。	染付。 (内) 露胎。 (外) 唐草紋。		白色。粒子はガラス化し透明感を持つ。 (内) 剥離面はやや荒い。気孔(円)が存在する。	調整時ロクロ右回転。	肥前			
129 7	59	SD1 (BQ-18)	磁器	碗	腰張形		8.7	5.6	3.5	高台は低く直立する。	(量付け) 釉剥ぎを施し、砂粒が付着する。	(内) 口縁部に四方構(見込み)二重圏線。 (外) 草花紋。二重圏線。	白～灰白色。粒子がガラス化。透明感を持つ。 (内) 剥離面はやや荒い。気孔(円)が存在する。		肥前	18世紀末	煎茶碗	
129 8	50 A	SD1 (BQ-12)	陶器	碗		口縁	10.8	(4.4)		腰張形を呈する?	(内・外) 緑灰釉。		灰～黄灰色。黒色斑。粒子は良くガラス化する。透明感を持つ。剥離面はやや荒い。気孔(円)が存在する。	細貫入が見られる。	関西系?	18世紀末～19世紀		
129 9	50 A	SD1 (BQ-17)	陶器	碗		口縁	12.6	(3.7)		(内・外) 透明釉。白土による打ち刷毛?			灰色。石英粒。剥離面は荒い。気孔(円・裂)が存在、裂孔の規模は大きい。					
129 10	50 A	SD1 (BQ-13)	陶器	碗		口縁	13.1	(5.5)		体部は内湾して立ち上り、口縁部では直線的に斜め上方に向かう。	(内・外) 長石釉(白濁)。 (口唇) 鉄釉。		黄灰色。黒色斑。粒子単位を留める。剥離面は荒い。気孔(円)が存在する。	(内・外) 貫入が見られる。				
129 11	59	SD1 (BQ-18)	磁器	碗	丸形		10.3	5.1	3.2	高台は断面三角形を呈し直立する。	上絵付。 (外) 草花紋。宝紋。		白色。粒子はガラス化良好。透明感を持つたない。剥離面はやや荒い。気孔(円・裂)が存在、規模は小さい。	器壁は薄く仕上げられる。		近代?		
129 12		SD1 (BQ-16・17)	陶器	碗		底部		(5.2)	5.0	高台は幅広く「ハ」の字状にやや開く。高台内は脇に較べてやや深く削り出される。	(内) 透明釉。薄い。白色土による円紋が見られる。 (外) 山水紋?		白色。粒子単位を留める。ガラス化は良好。剥離面はやや荒い。気孔(円)が存在する。	細貫入が施される。	肥前	18世紀	陶胎染付	
129 13	50 A・59	SD1 (BQ-17)	磁器	碗	丸形			(3.0)	4.5	高台は断面三角形を呈し短く直立する。腰部が短く張り出す。	(見込み) 上絵付による草花紋。 (外) 呉須による草花紋。上絵付による高台に二重圏線。 (高台内) 一重圏線内に草書体の「福」を施す。		白色。ガラス化良好であるが透明感を持つたない。剥離面は滑らか。気孔(円)が存在する。			19世紀	煎茶碗	

fig. no.	遺物番号	pl. no.	出土地点	種類	器種	器形	部位	法量 (cm)		形態的特徴	成形・調整 内面/外面	釉薬・絵付 内面/外面	胎土	その他の特徴	産地	年代	備考
								口径	器高								
129 14		59	SD1 (BQ-17)	陶器	碗	罌器形	底部	13.1	9.0	高台は幅広で高く「ハ」の字状に開く。口縁端部は太く丸味を持って修める。	(置付け) 釉剥ぎを施し、砂粒が付着する。	(内・外) 緑灰釉。	黄灰色。一部に粒子化単位を留めガラス化する。剥離面はやや荒い。気孔(円・裂)が存在する。	細貫入がみられる。	肥前?	18世紀	
129 15		59	SD1 (BQ-18)	陶器	碗			12.7	8.4	高台は低く断面逆台形を成す。高台内はアーチ状に削り出される。口縁部ではやや外反する。	(内) 底部は弱いロクロ目。撫で。 (外) 底部は削り無で。体部上位に凹線状の窪みが巡る。	(内) 緑灰釉。 (外) 緑灰釉。露胎。	灰～黄白色。一部粒化単位を留めガラス化する。剥離面はやや荒い。気孔(円・裂)が存在し、規模はやや大きい。	調整時ロクロ右回転。			
129 16		50 A	SD1 (BQ-17)	陶器	碗	天目形	底部		(6.1)	高台は断面逆台形を呈し「ハ」の字状にやや開く。高台脇は短く削り出される。口縁下で屈曲部を持ち弱く外反する。	(内) ロクロ目。	(内) 鉄釉(鉛釉)。 (外) 鉄釉(鉛釉)。露胎。	白色。石英粒。剥離面は著しく荒い。気孔(円・裂)が多く存在する。		瀬戸・美濃		
129 17		50 B	SD1 (BQ-9)	陶器	碗	罌器形	底部		(4.5)	高台は高く開く。高台内はアーチ状に削り込まれる。	(置付け) 釉剥ぎを施し、赤色化する。	(内・外) 緑灰釉。	黄灰色。赤色粒子。粒化単位を留めガラス化する。剥離面は荒い。気孔(円・裂)が存在する。	貫入が見られる。	尾戸	18世紀	罌器手
129 18		50 B	SD1 (BQ-17)	陶器	碗	罌器形	底部		(3.5)	高台は逆台形を呈し直立する。	(置付け) 釉剥ぎを施し、内側に砂粒が付着する。	(内・外) 緑灰釉。	黄灰色。赤色粒子。粒化単位を留めガラス化する。剥離面は荒い。	(見込み) 面? 剥落粒子が溶着する。	尾戸	18世紀前半	罌器手
129 19		50 B	SD1 (BQ-17)	陶器	碗	罌器形	底部		(3.4)	高台は高く直立し、高台内は深く削り込まれる。	(内) 底部は無調整。底部以上は撫で。 (外) 緑灰釉。 (置付け) 釉剥ぎを施し、砂粒が付着する。	(内・外) 灰釉(緑褐色)。	黄灰色。赤色粒子。粒化単位を部分的に留め、ガラス化は良好。剥離面はやや荒い。気孔(円)が存在する。	細貫入が見られる。	肥前?	18世紀	
129 20		50 B	SD1 (BQ-17)	陶器	瓶		底部		(2.7)	高台は腰輪高台状を呈し、直立する。	(内) 露胎。 (外) 緑灰釉。	(内) 露胎。 (外) 緑灰釉。	灰～灰黄色。黒色斑。石英粒を多く含む。剥離面は荒い。気孔(円)が存在する。	細貫入が見られる。	関西系?		
129 21			SD1 (BQ-16)	陶器	香炉	筒形		11.8	8.7	高台は断面逆台形を呈し直立する。口縁部は内側に肥厚し、端部は緩やかな凸面を成す。	(内) 撫で。 (外) 弱いロクロ目。	(内) 露胎。 (外) 鉄釉(部分的に錆軸が見られる)。	赤灰色。石英粒。剥離面は荒い(精緻)。気孔(円)が存在する。	調整時ロクロ左回転。			
129 22		50 C	SD1 (BQ-17)	陶器	香炉	筒形	底部		(2.7)	腰部で屈曲部を持つ。面端を指押さえによる三足が付く。	(内) 露胎。 (外) 灰釉(白濁)。 (外) 露胎。	(内) 露胎。 (外) 灰釉(白濁)。 (外) 露胎。	黒色～黄色。石英粒。粒化単位を留めガラス化する。剥離面は荒い。気孔(円・裂)が存在する。	調整時ロクロ左回転。	信楽?		
129 23		50 C	SD1 (BQ-14)	陶器	皿?		底部		(2.1)	高台は断面逆台形を呈し直立する。高台脇は削りにより平坦な面を成す。高台内は脇に較べて浅く削られる。	(内) 白土。灰釉。 (内) 白土。灰釉。露胎。	(内) 白土。灰釉。 (内) 白土。灰釉。露胎。	黄白色。石英粒。赤色粒。一部粒化単位を留めガラス化する。剥離面は荒い。	調整時ロクロ右回転。	瀬戸・美濃		

fig. no.	遺物番号	pL no.	出土地点	種類	器種	器形	部位	量 (cm)			形態的特徴	成形・調整 内面/外面	釉薬・絵付 内面/外面	胎土	その他の特徴	産地	年代	備考
								口径	器高	胴径								
129	24	50 C	SD1 (BQ-13)	陶器	皿		底部		(2.8)		4.8	(内) 御緑釉。 (外) 緑灰釉。露胎。	白～乳白色。赤色粒子。粒子単位は留めない。剥離面はやや荒い。気孔(円)が存在、規模はやや大きい。		内野山	17世紀後半～18世紀前半		
129	25	50 C	SD1 (BQ-17)	磁器	皿		底部		(2.8)		3.6	(内) 二重圈線。 (外) 草花紋。露胎。	白色。粒子ガラス化。透明感を持つ。剥離面はやや荒い。気孔(円)が存在、規模は小さい。	見込みを重ね焼に伴う砂粒が高台痕として残る。	肥前	18世紀		
129	26	50 C	SD1 (BQ-10)	陶器	皿		底部		(1.6)		6.8	(内) 灰釉。鉄釉による菊花紋。 (外) 灰釉。露胎。	黄白色。粒子単位を留めるが、ガラス化は顕著でない。剥離面は荒い。気孔(円・裂)が存在、裂孔の規模は大きい。	見込みに3ヶ所の目跡が見られる。	信楽?			
130	27	50 D	SD1 (BQ-16)	磁器	鉢(皿)	端反り形?		14.5	3.6		9.0	(内) 草花紋。二重圈線。 (外) 唐草紋。二重圈線。 (高台) 二重圈線。 (内) 墨弾きによる流水紋。 (見込み) 草花紋。 (外) 体部、底面、高台内に各々二重圈線。 高台に二重圈線。	白色。粒子はガラス化する。剥離面はやや荒い。気孔(円)が存在、規模は小さい。		能茶山	19世紀		
130	28	50 D	SD1 (BQ-11)	磁器	皿	丸形		13.0	3.3		8.0	(内) 墨弾きによる流水紋。 (見込み) 草花紋。 (外) 体部、底面、高台内に各々二重圈線。 高台に二重圈線。	白色。粒子はガラス化。透明感を持つ。剥離面はやや荒い。気孔(円・裂)が存在する。		肥前	17世紀末～18世紀		
130	29	50 D	SD1 (BQ-10)	磁器	盤		口縁	29.1	(3.2)			(内・外) 青磁釉。	灰色。粒子はガラス化。透明感を持つ。剥離面はやや荒い。気孔(円)が存在する。		波佐見		青磁	
130	30	50 D	SD1 (BQ-15)	陶器	鉢	縁折形	口縁	18.2	2.9			(内・外) 灰釉。うすのふ釉。(部分的に錆の発色が見られる。)	灰色。赤色粒。粒子単位を留めガラス化の良好。剥離面はやや荒い。気孔(円)が存在する。					
130	31	50 D	SD1 (BQ-11)	土師質土器	火消し壺		底部		(3.6)		7.4	(内・外) 横位の撫で。	橙色。赤色粒、石英粒。					
130	32	50 D	SD1 (BQ-13)	陶器	瓶?		底部		(3.0)		12.9	(内) 露胎。	赤褐色。黒色粒。赤色粒。白色粒。一部で粒子単位を留めガラス化する。剥離面は荒い。気孔(円・裂)が存在する。	調整時ロクロ左回転。				
130	33	51 A	SD1 (BQ-13)	陶器	鉢		口縁	27.3	(7.2)			(内) 白土による刷毛目。暗緑釉。露胎。 (外) 暗緑釉。露胎。	灰～赤褐色。石英粒。部分的に粒子単位を留めガラス化する。剥離面は荒い。気孔(円)が存在する。	調整時ロクロ右回転。	肥前	18世紀		

fig. no.	遺物番号	pl. no.	出土地点	種類	器種	器形	部位	法		量 (cm)		形態的特徴	成形・調整 内面/外面	釉薬・絵付 内面/外面	胎土	その他の特徴	産地	年代	備考
								口径	器高	胴径	底径								
130	34	51 A	SD1 (BQ-17)	陶器	鉢	口縁	底部	16.8	(6.5)			口縁部は玉縁状を成し外側に肥厚する。	(内・外) 灰釉 (白濁する)。	赤褐色。粒子単位を留める。剥離面は荒い。気孔 (円・裂) が存在する。	調整時ロクロ左回転。口唇部は露胎し、重ね焼に伴う烙着痕が残る。	肥前?	18世紀		
130	35	51 A	SD1 (BQ-13)	陶器	鉢	底部	底部		(4.1)	12.0		高台は断面逆台形を呈し直立する。	(外) 白土による刷毛目。露胎。	橙灰色。石英粒。剥離面は荒い。気孔 (円) が存在する。	調査時ロクロ左回転。	肥前			
130	36	51 A	SD1 (BQ-17)	陶器	鉢	底部	底部		(5.3)	10.6		高台は断面逆台形を呈し、直立する。	(内) 白土による刷毛目。鉄泥。	灰褐色。粒子単位を留める。剥離面は荒い。気孔 (円) が存在する。		肥前?	18世紀		
130	37		SD1 (BQ-17)	陶器	鉢			19.4	8.8	7.4	高台は高く直立し、断面は三角形を呈する。口縁端部は太く丸味を持つ。	(内) 白土による波状の刷毛目。 (外) 横位の白土刷毛目。露胎。	灰褐色。石英粒。赤色粒。黒色斑。粒子単位を留める。剥離面は荒い。気孔 (円・裂) が存在する。	調整時ロクロ右回転。	肥前	18世紀			
130	38	51 B	SD1 (BQ-18)	陶器	鉢	底部	底部		(7.3)	12.5	高台は断面逆台形を呈し直立する。高台内は脇よりも深く削り込まれる。	(外) 無で。底部削り。 (見込み) 蛇ノ目剥きを施し、砂粒が付着する。	(内) 白土による刷毛目。露胎。	赤褐色。石英粒。剥離面は荒い。気孔 (円) が存在する。	調整時ロクロ左回転。	肥前	18世紀	二彩手?	
131	39	59	SD1 (BQ-17)	陶器	汁次	底部	底部		(7.1)	6.8	底部は輪高台を呈する。断面円形の押手が貼付される。体部下位に円孔が穿たれ、注入口が貼付される。	(内) 透明釉。露胎。 (外) 鉄釉。高台脇より下位は露胎する。	灰～灰白色。黒色斑。一部粒子単位を留める。剥離面はやや荒い。気孔 (円・裂) が多く存在する。	成形時ロクロ左回転。調整時ロクロ右回転。	関西系?				
131	40	51 B	SD1 (BQ-16・17)	陶器	搦鉢			26.8	10.1	14.9	口縁部は縁帯を成す。	(口内) 1条の断面薄鈍型の突帯。 (口外) 2条の断面「V」字形の沈線。 (外) 体部下位で無で。上位で削り。	赤褐色。石英粒。剥離面は荒い。気孔 (円・裂) が存在する。	摺目は1単位9条で下から上に施す。摺目は湾曲する。調整時ロクロ右回転。口縁部に煤が付着する。	肥前?	18世紀後半～19世紀			
131	41	51 C	SD1 (BQ-16)	陶器	鉢	口縁	口縁	28.0	(5.9)		口縁部は粘土を外側へ折り込むことにより断面方形を成して肥厚する。端部は平らな面を成す。	(内) 暗褐色。白土。暗褐色。赤色粒。黒色粒。粒子単位を留める。剥離面は荒い。気孔 (円・裂) が存在する。	赤褐色。石英粒。剥離面は荒い。気孔 (円・裂) が存在する。	肥前?	18世紀?				
131	42	56 D	SD1 (BQ-16)	砥石	仕上げ砥	板状		全長 7.8	全幅 4.1	重量 89.1g	砥面は表・裏面と側面1面であり、端面の1つには滑らかな面が見られる。砥面には長軸方向に対して斜位の擦痕が多々見られる。		石英粗面岩製。						

fig. no.	遺物番号	pl. no.	出土地点	種類	器種	器形	部位	量 (cm)			形態的特徴	成形・調整 内面/外面	釉薬・絵付 内面/外面	胎土	その他の特徴	産地	年代	備考
								口径	器高	胴径								
131	43	58	SD1 (BQ-18)	土師質土器	焙烙		口縁	45.2	(5.5)		体部はやや内湾して外上方に立ち上がり、口縁部で弱い屈曲部を持ち更に開口縁部で肥厚して端部は丸味を持つて修める。	灰褐色。粗い砂粒を含む。気孔(円・裂)が多く存在、規模は大。堅緻。	内面の体部に煤が付着する。外面は広く煤ける。					
132	1	51 C	SD4 (BS-13)	磁器	碗		底部		(4.2)	3.8	高台は幅広く、断面三角形を呈す。	(外) 草花紋。	灰白色。ガラス化良好。透明感を持つ。剥離面はやや荒い。気孔(円)が存在する。	(呉須) 青灰色を呈し、やや不明瞭。	肥前			
132	2	51 C	SD4 (BS-13)	陶器	碗		底部		(4.4)	5.1	高台は幅広く直立する。	(外) 唐草紋。一重圏線。高台に二重圏線。	灰～黄灰色。黒色斑。石英粒。一部粒子単位の留めガラス化する。剥離面は荒い。気孔(円・裂)が多く存在する。	内外面に貫入が見られる。	波佐見	18世紀	くらわんか手	
132	3	51 C	SD4	陶器	碗	呉器形	底部		(3.4)	5.4	高台は幅広くアーチ状に削り出される。	(内・外) 灰釉(黄白色)。	黄白色。赤色粒。剥離面は荒い。気孔(円)が存在する。	細貫入が見られる。	尾戸	18世紀		
132	4	51 C	SD4	陶器	皿		口縁	11.9	(2.9)		(見込み) 蛇ノ目釉剥ぎ。底位は削りを施す。	(内) 銅緑釉。底位は(外) 灰釉。露胎する。	黄白色。赤色粒。一部粒子単位の留めガラス化する。剥離面はやや荒い。気孔(円・裂)が存在、裂孔は稀。		内野山	17世紀後半～18世紀前半		
132	5	51 C	SD4 (BS-13)	陶器	皿		底部		(2.0)	3.7	高台は低く直立する。高台内は脇に較べて深く削り込まれる。	(外) 緑灰釉。白土による刷毛。露胎。(内) 緑灰釉。	灰色。石英粒。粒子単位の留めガラス化する。剥離面はやや荒い。気孔(円)が存在する。	調整時クロクロ回転。			18世紀?	
132	6	51 D	SD4	磁器	瓶		底部		(4.0)	6.8	高台は腰輪高台を成す。断面は逆台形を呈し、直立する。	(内) 露胎。高台基部に一重圏線。	灰色。石英粒。粒子単位の留めガラス化する。透明感を持つ。剥離面は概ね滑らか。気孔(円・裂)が存在し、規模は大きい。	成形時クロクロ回転。	波佐見			
132	7	51 D	SD4	陶器	碗		口縁	14.5	(6.1)		(内) 無で。(外) ロクロ無で。	(内・外) 緑灰釉。	灰色。黒色斑。ガラス化良好。剥離面は概ね滑らか。気孔(円・裂)が存在する。				緑釉陶器	
132	8	51 D	SD4 (BS-13)	磁器	水滴		体部				型押成形。(内) 指頭による無で。	陽刻による猫丸紋。内に松、上絵付により赤絵を施す。	白色。粒子ガラス化。透明感はない。剥離面はやや荒い。気孔(円・裂)が存在する。					
132	9	56 D	SD4	砥石	仕上げ砥	棒状		全長(13.1)		重量(186.6 g)	砥面は1面が残存する。ここには長軸方向に細かな条痕が施される。側面に自然面が見られる。							

fig. no.	遺物番号	pl. no.	出土地点	種類	器種	器形	部位	量 (cm)		形態的特徴	成形・調整 内面/外面	釉薬・絵付 内面/外面	胎土	その他の特徴	産地	年代	備考
								口径	器高								
133	1	59	SD5	磁器	水筒		胴部	口径	(5.2)	高台は短く直立し、高台内は脇に較べて浅い。体部は内湾して立ち上がり、上位で捩れ部を持つ。注口部へ向かって頸部は細く成る。	青花。(外)頸部に二重圈線。体部に一重圈線。葡萄紋。	灰白色。粒子は良くガラス化する。剥離面はやや荒い。気孔(円)が存在する。	二次的な被熱を受ける。	ベトナム	15世紀～16世紀		
133	2	51 D	SD5 (BS-14)	陶器	碗		底部	口径	(3.0)	高台は幅広く直立する。	(見込み) 蛇目釉剥ぎを幅狭く施す。(置付け) 釉剥ぎを施し、砂粒が内側に付着する。	乳白色。赤色粒。粒子単位を留めめガラス化する。剥離面は荒い。気孔(円)が存在する。		肥前(内野山?)		陶胎染付	
133	3		SD5 (BS-14)	陶器	碗	異器形		口径	8.0	高台はやや幅広く直立する。	(内・外) 灰釉(黄白色)。	黄白色。赤色粒。粒子単位を留めめガラス化する。剥離面は荒い。気孔(円)が存在する。	細貫入が見られる。	尾戸	18世紀		
133	4	51 D	SD5 (BS-14)	磁器	碗		底部	口径	(2.4)	高台は「ハ」の字状に開く。	(外) 紋様主体は不明。体部下位と高台に一重圈線。	白色。粒子ガラス化。透明感を持つ。剥離面はやや荒い。気孔(円)が存在、規模は大きい。		肥前			
133	5	52 A	SD5 (BS-14)	磁器	碗		口縁	口径	(3.4)	体部は内湾して立ち上がる。器壁は薄く仕上げられる。	(外) 草花紋?	白色。粒子単位を留めめガラス化する。剥離面はやや荒い。気孔(円・裂)が存在、規模は小さい。	外面に細貫入が見られる。	能茶山	19世紀		
133	6	52 A	SD5 (BS-14)	陶器	汁次		底部	口径	(5.6)	底部は基筒底風に仕上げられる。高台内はアーチ状を成す。把手は断面形楕円形を呈す。	(内) 露胎。底面に鉄釉(鉛釉)。(外) 鉄釉。底面は露胎する。	灰色。黒色斑。粒子単位を留めめガラス化する。剥離面は荒い。気孔(円)が存在する。	骨付けには部分的に熔着痕が存在する。				
133	7	52 A	SD5 (BS-14)	陶器	鉢		底部	口径	(5.6)	高台は断面逆台形を呈し直立する。高台内は深く削り込まれる。	(内) 白土刷毛塗り。(外) 白土刷毛塗り。底面は鉄泥刷毛塗り。	赤褐色。石英粒。剥離面は荒い。気孔(円)が存在する。	調整時ロクロは右回転。	肥前	18世紀		
133	8	52 A	SD5	陶器	鉢		片口	口径	(4.2)	口縁部は玉縁状にやや肥厚する。「U」字状に切り取り、筒形の注口部を貼付する。	(内) 鉄釉(褐色)。露胎。(外) 鉄釉(褐色)。	赤褐色。石英粒。剥離面は荒い。気孔(円)が存在する。		肥前?			
133	9	52 A	SD5	陶器	鉢		片口	口径	(6.4)	口縁部は断面逆台形を成し、外側に肥厚する面を成す。注口部は外側より口縁を貼付して形成される。	(内) 灰釉(白濁する)。(外) 白土刷毛。	赤褐色。石英粒。剥離面は荒い。気孔(円)が存在する。	調整時ロクロは左回転。口縁端部には重ねね焼による熔着痕跡が見られる。		17世紀後半～18世紀前半		
134	1	52 B	SD6 (BQ-16)	陶器	碗		底部	口径	(2.3)	高台は断面逆台形を呈し、「ハ」の字状には脇に較べやや深く削り出される。	(内) 緑灰釉。底面は露胎する。	黄灰色。一部粒子単位を留めめガラス化する。剥離面はやや荒い。気孔(円・裂)が多く存在する。	調整時ロクロは左回転。高台内中央部に「森」銘の刻印を施す。	肥前?	18世紀前半	京焼風陶器	

fig. no.	遺物番号	pL no.	出土地点	種類	器種	器形	部位	量 (cm)		形態的特徴	成形・調整 内面/外面	釉薬・絵付 内面/外面	胎土	その他の特徴	産地	年代	備考
								口径	器高								
135	1	52 B	SD8 (BV-13)	磁器	香炉		口縁	11.5	(3.8)	口縁部は粘土を折り込むことにより肥厚する。		(内) 露胎。 (外) 草紋。源氏香。	白色。粒子ガラス化。透明感を持つ。剥離面は荒い。気孔(円・裂)が存在、裂孔の規模は大きい。孔は少在。	肥前			
136	1	52 B	SD9-2 (BY-18)	須磁器	坏		口縁	16.6	(2.6)	口縁部下で緩やかに屈曲し、直立する。			灰色。赤色粒。剥離面はやや荒い。気孔(円・裂)が存在、裂孔の規模は大きい。				
138	1	52 B	SD11 (BW-22)	陶器	鉢		底部		(4.1)	高台は低く断面台形を呈し直立する。	(内) 暗緑釉。 (外) 露胎。	赤灰色。石英粒。剥離面は荒い。気孔(円)が存在する。	調整時ロクロ左回転。量付けは薄減し滑らか。				
139	1	52 B	SX2	磁器	香炉		底部		(4.0)	高台は断面逆台形を呈し短く直立する(蛇ノ目高台)。	(内) 露胎。 (外) 青磁釉。	白色。粒子はガラス化良好。透明感をやや持つ。剥離面は概ね滑らか。気孔(円)が存在する。	細成り時ロクロ右回転。貫入が見られる。	肥前		青磁	
141	1	52 C	SX3	磁器	碗		底部		4.0	高台は幅広く直立する(見込み) 蛇ノ目釉剥きを施す。釉剥き部分が端に砂粒が付着する。(量付け) 釉剥きを施し、砂粒が付着する。		灰褐色。一部粒子単位を留めガラス化する。剥離面は荒い。気孔(円・裂)が存在、規模は小さい。					
141	2	52 C	SX3	磁器	蕎麦猪口			7.3	5.4	底部は腰輪高台を成す。高台は低い。	染付。草花紋。底部に二重圏線。	白色。粒子はガラス化良好。透明感を持つ。剥離面はやや荒い。気孔(円)が存在する。	器壁は薄く仕上げられる。	肥前系			
141	3	52 C	SX3	陶器	碗		底部		(2.6)	(量付け) 釉剥きを施し、砂粒が付着する。	(内) 透明釉。 (外) 透明釉。高台に呉須による二重圏線。	橙灰褐色。石英粒多し。剥離面は荒い。気孔(円)が存在する。	内面に貫入が見られる。透明釉には気泡・孔が多く見られる。	肥前?		陶胎染付	
141	4	52 C	SX3	陶器	搦鉢			22.0	7.4	口縁部は縁帯を形成し、一条の突帯(内) 一条の凹線が施される。		赤褐色。石英粒。剥離面はやや荒い。気孔(円・裂)が存在、裂孔が多く見られる。	内面は1単位7条の褶目を下から上に施す。見込みに摺目4単位による交叉紋。				
145	1	52 C	SX6	陶器	碗	腰張形		9.6	5.9	高台は断面逆台形を呈し直立する。口縁内は臑に散べて浅く削り出される。	(内) 灰釉。 (外) 灰釉。体部下位は鉄釉(鉛釉)。	白色。剥離面は荒く。気孔(円)が存在する。	灰釉部分に貫入が見られる。	瀬戸・美濃	19世紀	煎茶碗	
145	2	59	SX6	陶器	碗	腰張形		9.8	5.4	高台は断面逆台形を呈し直立する。口縁部は丸味を持って修める。	(内) 緑灰釉。 (外) 上位は緑灰釉。下位は鉄釉(鉛釉)。	白色。剥離面は荒い。気孔(円・裂)が存在する。	灰釉部分に貫入が見られる。方形の刻みは鉄釉(鉛釉)で隠れる。	瀬戸・美濃	19世紀	鑑手・煎茶碗	
145	3	52 D	SX6	陶器	碗	腰張形	口縁	8.9	(4.1)	口縁端部は太く丸味を持つ。	(内) 灰釉。 (外) 灰釉。鉄釉(鉛釉)。	灰～灰褐色。粒子単位を留める。剥離面は荒い。気孔(円)が多く存在する。		瀬戸・美濃	19世紀	煎茶碗	

fig. no.	遺物番号	pl. no.	出土地点	種類	器種	器形	部位	量 (cm)		形態的特徴	成形・調整 内面/外面	釉薬・絵付 内面/外面	胎土	その他の特徴	産地	年代	備考
								口径	器高								
145	4	52 D	SX6	陶器	碗	呉器形	口縁	口径 12.0	器高 (6.1)	口縁端部は太く丸味を持つ。	(外) 底面は削りを施す。	(内・外) 緑灰釉。	黄白色。粒子はガラス化良好。剥離面は概ね滑らか。気孔(円)が存在する。	肥前	18世紀	呉器手	
145	5	52 D	SX6	陶器	碗				7.3	高台は断面逆台形を呈し直立する。口縁部はやや外反する。	(内) 底面はロク口目。上位はロク口目。低位は削り。	(内) 灰釉。(外) 灰釉。鉄絵による折杖。折梅紋。	黄白色。粒子はガラス化良好。剥離面は概ね滑らか。気孔(円)が存在する。	尾戸?			
145	6	56 D	SX6	砥石	仕上げ砥	板形		全長 (7.1)	全厚 (0.6)	底面は表裏2面と両側面2面が考えられるが剥落が激しく使用痕は一部を残すのみ。		粘板岩製。					
145	7	59	SX6	土師質土器	焙烙		口縁	49.4	(6.7)	口縁部は肥厚し、端部は外傾する線やかな凸面を成す。	(内・外) 口縁部で構位の無で顕著である。		橙色。石英粒。				
150	1	57 A・B	P37	石臼	粉挽き臼		上臼	直径 29.5	厚さ 7.5	主溝1条に対して副溝4条が存在する。摩滅が激しく溝跡は不明瞭。			砂岩製。				
150	2	53 A	P2	磁器	碗		底部		(2.5)	高台は断面三角形を呈す。			白色。粒子はガラス化する。剥離面は概ね滑らか。気孔(円・裂)が存在する。				
150	3	53 A	P14	陶器	碗		底部		(2.7)	高台は太く直立する。	置付けは釉剥ぎを施し、砂粒が付着する。	(外) 草花紋。一重圏線。(高台) 二重圏線。	灰色。粒子単位を留めガラス化する。剥離面はやや荒く。気孔(円・裂)が多く存在し、裂孔の規模は大きい。	肥前	18世紀	陶胎染付	
150	4	53 A	P3	陶器	皿	輪花	口縁	13.2	(2.0)	口縁部は鈔状に外側へ屈曲する。端部は輪花を成す。		(内) 鉄釉(発色は茶褐色)。(外) 鉄釉(発色は茶褐色)露胎。	灰色。粒子単位を留め。剥離面は荒い。気孔(円・裂)が存在する。裂孔の規模は小さい。				
150	5	53 A	P28	陶器	碗	呉器形	底部		(3.6)	高台は幅太く直立する。高台内はアーチ状に脇よりやや浅く削られる。	(置付け) 釉剥ぎ。(発色は黄白色)。	(内・外) 灰釉(発色は黄白色)。	黄白色。赤色粒。粒子単位を留め。剥離面は荒い。気孔(円・裂)が存在する。	尾戸 or 肥前	17世紀末~18世紀初頭		
150	6	58・59	P8	陶器	播鉢		口縁	28.0	(7.2)	口縁は縁帯を成す。注口部は口縁部の一部を押し下げて幅広く造られる。	(内) 突帯は不明瞭で低い。体部口縁部は丸味。	(外) 縁帯部分に白炭釉が一部掛かる。	灰色。黒色斑。石英粒。粒子単位を留め。剥離面は荒い。気孔(円・裂)が存在し、裂孔の規模は大きい。				
151	1	53 B	SK22・SK23	土師質土器	小皿		口縁	10.0	(1.9)	体部はやや内湾して外上方に立ち上がる。口縁端部は丸味を持って修める。	(内・外) 横方向の無で。		橙灰色。			口縁の一部を打ち欠いて芯受けとして使用したものが。	

fig. no.	遺物番号	pl. no.	出土地点	種類	器種	器形	部位	量 (cm)			形態的特徴	成形・調整 内面/外面	釉薬・絵付 内面/外面	胎土	その他の特徴	産地	年代	備考
								口径	器高	胴径								
151	2	60	SK32・SK33・SK34	陶器	碗	広東形		口径 12.1	器高 6.1	胴径 6.0	底径 6.0	(内) 口縁に二重圈線。底部に二重圈線。底面はやや荒い。気孔(円・裂)が存在する。(見込み) 五弁花。	白色~乳白色。粒子単位を留める。気孔(円)が存在する。		瀬戸・美濃	19世紀	陶器染付	
151	3	53 B	SD11 (BU-22)・SK73	陶器	皿		底部		(3.2)	4.8		(内) 緑釉。露胎。(外) 鉄釉。露胎。	灰色。一部粒子単位を留めてガラス化する。剥離面はやや荒い。気孔(円・裂)が存在する。	厚付けには4ヶ所。目跡が見られ、高台かやや窪む。	肥前?	17世紀後半~18世紀前半		
151	4	53 B	SK38・P15・P17	陶器	鉢		底部	(4.4)		7.5		(内) 白土掛け。硝子による掻き落とし。鉄釉流し掛け。露胎。(外) 鉄泥。露胎。鉄釉掛け。	赤褐色。石英粒。剥離面はやや荒い。気孔(円)が存在する。		肥前	17世紀後半~18世紀前半		
151	5	53 B	SD1 (BQ-18)・SK33-2	陶器	皿		底部	(2.9)		6.9		(内) 緑灰釉。白土による波状の刷毛目。(外) 緑灰釉。露胎。	黄白色。石英粒。黒色斑。剥離面は荒い。気孔(円)が存在する。	細入が見られる。調整時ロクロ口は左回転。	尾戸 or 肥前	18世紀前半		
151	6	60	SK29・SK33-2	陶器	油徳利		体部	(8.8)				(内) 露胎。鉄釉垂れ。(外) 鉄釉(褐色)。	灰色。一部粒子単位を留めガラス化する。剥離面はやや荒い。気孔(円・裂)が存在する。	注口部の横に空気孔の孔が外側から穿たれる。内面底部に剥離物が熔着する。内面に煤の付着が認められる。	関西系			
151	7	53 C	SK15・SD1 (BQ-11)・SX3	陶器	鉢		底部	(5.9)		11.1		(内) 白土刷毛掛け。灰釉。刷毛掛けによる。底面は露胎。	灰褐色。黒色斑。粒子単位を留める。剥離面はやや荒い。気孔(円)が存在する。	調整時ロクロ口右回転。	肥前	17世紀後半~18世紀前半		
151	8	60	SD1 (BQ-16)・P19	陶器	匣		身部	19.4	8.2	21.3		(内・外) 体部はロクロ目。(底) 回転糸切り痕。露胎。	黄白色。黒色斑。粒子単位を留める。剥離面は荒い。気孔(円・裂)が存在、裂。孔の規模は大さい。	内面底部に筒状工具による格子状の記号が施される。匣底部には陶器破片が熔着する。	尾戸?			
151	9	60	SD1 (BQ-16)・SX6	陶器	甕		底部		(12.5)	13.0		(内) 露胎。緑釉掛け。露胎する。	灰褐色。黒色粒。石英粒。粒子単位を留める。剥離面はやや荒い。	外面底部には部分的に目跡が熔着する。				
151	10	57 D	SK27・SK31	瓦	軒平瓦		瓦当部	瓦当幅 4.3	紋線区幅 2.9	体部厚 1.5				「ウエムラ」の刻印が施される。				
152	1	53 C	I層	土師質土器	小皿			6.8	1.5	3.5		(内・外) ロクロ目。(底) 糸切りの後、撫でを施す。	淡褐色。石英粒。	口縁部には煤が付着する。				
152	2	53 C	(BT-14)	土師質土器	小皿			6.8	1.4	4.1		(内) 撫で。(底) 回転糸切り痕。	赤褐色。石英粒。	成形時ロクロ口右回転。				

fig. no.	遺物番号	pl. no.	出土地点	種類	器種	器形	部位	量 (cm)		形態的特徴	成形・調整 内面/外面	釉薬・絵付 内面/外面	胎土	その他の特徴	産地	年代	備考
								口径	器高								
152	3	53 C	II層	土師質土器	小皿	底部		口径 (0.8)	器高 (0.8)	底径 4.6	(内) ロクロ目。 (底) 回転糸切り痕。		黄白色。石英粒。	成形時ロクロ右回転。			
152	4	53 C	II層	土師質土器	小皿	底部		口径 (0.8)	器高 (0.6)	底径 4.6	(内) ロクロ目。 (底) 回転糸切り痕。		淡橙色。褐色粒子。				
152	5	53 C	II層	土師質土器	小皿	底部		口径 (0.6)	器高 (0.6)	底径 4.4	(内) 弱いロクロ目。 (底) 回転糸切り痕。		黄橙色。石英粒。				
152	6	53 C	(BS-14)	土師質土器	小皿			8.8	1.4	6.4	(内) 撫で。 (外) 体部で撫で。		淡橙色。石英粒。				
152	7	53 C	(BQ-15)	土師質土器	小皿			6.8	1.6	4.7	(内) 撫で。 (外) 回転糸切り痕。		黄褐色。石英粒。	口縁部に煤が一部付着する。			
152	8	53 D	(BU-16)	磁器	紅皿	口縁		5.4	(1.6)		(外) 放射状紋。		白色。粒子がガラス化良好。透明感はやや荒い。気孔 (円) が存在する。	口縁の一部に成形時に欠落したと思われる箇所が存在する。	肥前	18世紀後半～19世紀	
152	9	53 D	(BU-15)	磁器	紅皿			4.9	1.4	1.6	(外) 放射状紋。	(外) 露胎。	白色。粒子がガラス化良好。透明感を持つ。剥離面は概ね滑らか。気孔 (円・裂) が存在、規模は小さい。		肥前	18世紀後半～19世紀	
152	10	53 D	(BV-17)	磁器	紅皿			4.7	1.6	1.2	型打成形。 (外) 放射状紋 (刻みは浅い)。	(内) 白釉。 (外) 白釉。露胎。	白色。粒子はガラス化良好。透明感を持つ。剥離面は概ね滑らか。気孔 (円・裂) が存在する。		肥前	18世紀後半～19世紀	灯明皿の可能性あり。
152	11	53 D	(BU-14)	陶器	坏?	底部		7.6	(1.9)	5.5	(内) 撫で。 (外) 撫で。 (底) 回転糸切り痕。	染付。上位と下位に三重の圈線を施す。	白色。剥離面はやや荒い。気孔 (円・裂) が存在する。	内面の一部に煤が付着する。			
152	12	53 D	(BQ-17)	磁器	小碗	口縁		7.6	(2.2)		染付。上位と下位に三重の圈線を施す。	白色。剥離面はやや荒い。気孔 (円・裂) が存在する。		肥前系			
152	13	53 D	I層	磁器	小皿	丸形		5.7	1.9	2.6	(量付け) 釉剥ぎを施す。	染付。外。笹紋。	白色。透明感を持つ。剥離面は概ね滑らか。気孔 (円) が存在、規模は小さい。				
152	14	53 D	I層	磁器	碗	底部			(2.4)	2.8	(量付け) 釉剥ぎを施す。	染付。外。笹紋。	白色。粒子はガラス化良好。透明感を持つ。剥離面は概ね滑らか。気孔 (円・裂) が存在、規模は小さい。	見込みに剥落物が付着する。			
152	15	53 D	(BV-17)	磁器	碗	底部			(2.5)	3.3	(外) 高台内には削りが施される。 (量付け) 釉剥ぎを施し、内側に砂粒が付着する。	染付。	白色。粒子がガラス化良好。透明感を持つ。剥離面は概ね滑らか。気孔 (円・裂) が存在、規模はやや大きい。	調整時ロクロ右回転。剥落粒子の付着が認められる。	肥前		

fig. no.	遺物番号	pL no.	出土地点	種類	器種	器形	部位	量 (cm)			形態的特徴	成形・調整 内面/外面	釉薬・絵付 内面/外面	胎土	その他の特徴	産地	年代	備考
								口径	器高	胴径								
152 16		53 D	II層	磁器	小碗		底部		(1.5)		2.3		(置付け) 釉剥ぎを施す。	染付。高台基部に一重圏線。	白色。粒子ガラス化。透明感を持つ。剥離面は概ね滑らか。気孔(円・裂)が存在する。	肥前		
152 17		60	II層	陶器	小碗				3.4		2.4			(内) 灰釉。露胎。 (外) 灰釉。露胎。	白～黄白色。赤色粒。剥離面は荒い。気孔(円・裂)が存在。規模は小さい。	信楽?	18世紀後半	
152 18		53 D	(BU-18)	陶器	碗		底部		(3.1)		4.5		(置付け) 釉剥ぎを施し、砂粒が付着する。	(内・外) 灰褐釉。	黄白色。赤色粒。粒子ガラス化良好。剥離面はやや荒い。気孔(円)が存在する。			
152 19		54 A	II層	磁器	碗	丸形	底部		3.9		3.0			染付。二重圏線。 (外)	白色。粒子はガラス化良好。透明感を持つ。剥離面はやや荒い。気孔(円・裂)が存在する。	肥前系?		
152 20		54 A	(BQ-17)	陶器	碗		底部		(2.8)		4.6		(置付け) 釉剥ぎを施す。	(内・外) 白土。緑釉。 口縁部は四方二重圏線。底部に二重圏線。(外) 草花。船。	灰色。粒子単位を留めガラス化良好。剥離面はやや荒い。気孔(円・裂)が存在。規模は大きい。		18世紀後半～19世紀	
152 21		54 A	II層	磁器	碗	腰張形	口縁		(4.9)					染付。口縁部は四方二重圏線。底部に二重圏線。(外) 草花。船。	白色。粒子がガラス化良好。透明感を持つ。剥離面はやや荒い。気孔(円)が存在する。	波佐見?		
152 22		54 A	表採	磁器	碗		底部		(4.6)		4.6			染付。(内) 一重圏線。(見込み) 蝶紋。底部、高台脇と高台部に二重圏線。	白色。粒子ガラス化。剥離面はやや荒い。気孔(円・裂)が多く存在する。	能茶山	19世紀	
152 23		54 B	II層	磁器	碗	丸形	底部		(6.3)		5.2			染付。山水紋。低位は二重圏線。高台は二重圏線。	灰白色。一部粒子単位を留めガラス化する。透明感を持つ。剥離面はやや荒い。気孔(円・裂)が存在する。	波佐見	18世紀?	
152 24		54 B	II層	陶器	鉢	腰折形	底部		(2.9)		7.4		(外) 撫で。	(内) 緑灰釉。露胎。 (外) 緑灰釉。露胎。	黄灰色。一部粒子単位を留めガラス化良好。剥離面はやや荒い。気孔(円)が存在する。	肥前	17世紀末～18世紀前半	
152 25		54 B	(BR-18)	磁器	香炉		口縁		(4.8)				(内) 露胎。 (外) 青磁釉。	白色。粒子ガラス化良好。透明感を持つ。剥離面は概ね滑らか。気孔(円・裂)が存在する。	肥前			
152 26		54 B	II層	陶器	碗	呉器形	底部		(2.9)		4.7		(置付け) やや平らな面を成す。軸もやや深くアーチ状に削り出される。	(内・外) 灰釉。	黄白色。赤色粒。剥離面は荒い。気孔(円・裂)が存在。規模は小さい。	肥前?	18世紀前半	呉器手

fig. no.	遺物番号	pl. no.	出土地点	種類	器種	器形	部位	法量 (cm)		形態的特徴	成形・調整 内面/外面	釉薬・絵付 内面/外面	胎土	その他の特徴	産地	年代	備考
								口径	器高								
152	27	54 B	(BS-14)	陶器	碗	呉器形	底部	口径	(4.3)	高台は高く「ハ」の字状に開く。高台内は脇と同程度に削り出される。	(暈付け) 釉剥ぎを施し、内側には砂粒が付着する。	(内・外) 灰釉。	黄灰色。赤褐色粒。粒子単位を留めガラス化する。剥離面は荒い。(円・裂) が存在する。	細貫入が見られる。		呉器手	
152	28	54 B	(BT-14)	陶器	碗	呉器形	底部	口径	(3.8)	高台は大きく直立す。高台内は脇に較べて深く削り出される。暈付けには面取りが施される。	(外) 体部は2条以上の沈線が見られる。	(内・外) 灰釉。	黄白色。赤色粒。一部粒子単位を留めガラス化する。剥離面は荒い。(円・裂) が存在する。	細貫入が見られる。	信楽?	18世紀	
152	29	54 C	I層	陶器	碗	呉器形	底部	口径	(5.5)	高台は断面逆台形を呈し「ハ」の字状に開く。高台内は脇に較べて深く削り出される。	(暈付け) 釉剥ぎを施し、内側に砂粒が付着する。	(内・外) 緑灰釉。	黄灰色。粒子単位を留めガラス化する。剥離面は荒い。(円・裂) が存在する。	細貫入が見られる。断面に煤が付着している。	肥前?	18世紀前半	
152	30	54 C	I層	陶器	香炉		口縁	口径	9.1	口縁部は直線的に内傾し、上方に立ち上がる。端部は外側に肥厚する。	(内) ロクロ目。(外) 口縁下に削り出しによる縦位の短冊状を呈する。断面台形の突出部が存在し、横位の沈線を刻む。	(内・外) 灰釉。	黄灰色。粒子ガラス化良好。剥離面はやや荒い。気孔(円・裂) が存在する。		信楽?		
152	31	54 C	II層	陶器	碗		口縁	口径	13.4	体部は直線的に斜め上方に立ち上がる。	(内・外) 撫で。		灰色～灰褐色。粒子単位を留めガラス化する。剥離面はやや荒い。気孔(円) が存在する。			緑釉陶器	
152	32	54 C	II層	陶器	碗		口縁	口径	13.5	口縁部はやや肥厚し、端部は不明瞭な凸面を成す。	(内) 撫で。		灰～黄灰色。石英粒。ガラス化良好。剥離面はやや荒い。気孔(円・裂) が多く存在する。			陶器染付	
152	33	54 C	(BT-14)	陶器	碗		口縁	口径	14.0	高台は断面逆台形を呈し直立する(蛇の目高台)。	(外) ロクロ目。	(内) 白土打ち刷毛。緑灰釉。(外) 白土刷毛掛け。緑灰釉。	暗灰色。黒色菌。粒子単位を留める。剥離面は荒い。気孔(円・裂) が存在、規模は大きい。	貫入が見られる。			
152	34	54 D	II層	陶器	碗		底部	口径	(4.1)	高台は断面逆台形を呈し直立する。高台内は脇に較べてやや浅く削り出される。	(外) 鏝による狭い単位の撫で。	(内) 黒釉。底部は露胎する。(外) 黒釉。底胎。	灰白～黄灰色。黒色粒。粒子単位を留めガラス化する。剥離面は荒い。気孔(円・裂) が存在する。	暈付けに角内「上△」を施す。			
153	35	54 D	(BS-12)	陶器	皿	丸形		口径	11.4	高台は断面逆台形を呈し直立する。高台内は脇に較べてやや浅く削り出される。	(見込み) 蛇目釉剥ぎ。(外) 口縁部は無で。体部はロクロ目。(底) 削り痕。		白～乳白色。粒子はガラス化し単位を留めない(精緻)。透明感を持たない。剥離面はやや荒い。気孔(円・裂) が存在、規模はやや大きい。		17世紀後半～18世紀前半	内野山	

fig. no.	遺物番号	pl. no.	出土地点	種類	器種	器形	部位	量 (cm)			形態的特徴	成形・調整 内面/外面	釉薬・絵付 内面/外面	胎土	その他の特徴	産地	年代	備考
								口径	器高	底径								
153	36	54 D	II層	磁器	皿			12.2	3.8	4.4	高台は逆台形を呈し直立する。口縁端部は太く丸味を持つ。	(見込み) 蛇ノ目釉剥ぎを施す。ルミナ砂を塗布する。(外) 弱い口縁部(暈付け) 釉剥ぎを施し、内側に砂粒が付着する。	染付。(内) 割筆による交叉紋。	白色。一部粒子単位を留めガラス化良好。透明感持つ。剥離面はやや荒い。気孔(円・裂)が存在、規模は小さい。	肥前	18世紀後半～19世紀		
153	37	54 D	(BV-12)	陶器	皿			12.4	(2.9)	7.0	底部は萐萐底状を呈し、高台は低い。口縁部はやや外反する。端部は太く丸味を持つ。	(内) 灰釉(白濁)。鉄絵。(外) 灰釉(白濁)。	白色。石英粒。橙色。粒子単位を留める。剥離面は著しく荒い。気孔(円・裂)が存在する。	瀬戸・美濃				
153	38	55 A	(BQ-16)	磁器	皿	腰張形	口縁	16.2	(2.8)		口縁部で短く外反する。端部は外傾する面を成す。	染付。草花紋。(外) 唐草紋。	白色。粒子ガラス化良好。剥離面はやや荒い。気孔(円)が存在する。					
153	39	55 A	(BV-18)	陶器	皿		口縁	14.0	(2.1)		口縁端部は太く丸味を持つ。(外) 低位は削り。上位は無で。	(内・外) 灰釉。	白～乳白色。石英粒。粒子単位を留めガラス化する。剥離面は著しく荒い。気孔(円・裂)が存在する。	瀬戸・美濃				
153	40	55 A	(BQ-12)	陶器	皿		口縁	19.8	(2.7)		口縁部で屈強しやや外傾する。口縁端部は直立する面を成す。	(内・外) 緑灰釉。	白色。石英粒。剥離面は著しく荒い。気孔(円)が存在する。			18世紀後半～19世紀		
153	41	55 A	II層	陶器	小皿		底部		(1.2)	4.1	高台は断面逆台形を呈し直立する。(見込み) 砂目痕。(外) 無で。(暈付け) 回転糸切り痕を留め、周囲に砂粒が付着する。	(内) 緑灰釉。剥離面は露胎する。(外) 低位は露胎する。	灰褐色。黒色粒。赤色。石英粒。粒子単位を留める。剥離面は荒い。気孔(円)が存在する。	肥前	17世紀			
153	42	55 A	(BU-15)	陶器	皿		底部		(1.2)	4.2	高台は断面逆台形を呈し「ハ」の字状に開く。(見込み) 砂目が付着し、重ね焼による熔着が見られる。(外) 高台から底部に掛けて砂粒が付着する。	(内) 緑灰釉。露胎。(外) 緑灰釉。露胎。	灰色。めガラス化を留める。剥離面はやや荒い。気孔(円・裂)が存在、規模は小さい。	肥前	17世紀			
153	43	55 A	(BT-17)	陶器	皿		底部		(2.1)	5.9	高台は断面逆台形を呈し直立する。高台内は浅く削り出される。	(内) 灰褐色。底部分は露胎する。(外) 灰褐色。露胎。	黄色。灰褐色。赤色。石英粒。粒子単位を留めガラス化良好。剥離面はやや荒い。気孔(円・裂)が存在する。	肥前	17世紀?			
153	44	55 A	I層	磁器	皿		底部		(1.7)	4.2	高台は断面逆台形を呈し直立する。(見込み) 蛇ノ目釉剥ぎを施し、砂粒が付着する。	(内) 白釉。(外) 白釉。低位は露胎する。	白色。粒子ガラス化良好。透明感を持つ。剥離面はやや荒い。気孔(円・裂)が存在、規模は小さい。	肥前				

fig. no.	遺物番号	pl. no.	出土地点	種類	器種	器形	部位	法量 (cm)		形態的特徴	成形・調整 内面/外面	釉薬・絵付 内面/外面	胎土	その他の特徴	産地	年代	備考
								口径	器高								
153	45	55 B	I層	陶器	皿		底部		(1.7)	高台は断面逆台形を呈し「ハ」の字状に開く。	(見込み) 蛇ノ目釉剥きを施し、高台着ね焼に伴う砂粒が付着する。(外) 削り。	(内) 銅緑釉。低位は露胎する。	白～乳白色。赤色粒。粒子単位を留めガラス化する。剥離面は荒い。気孔(円・裂)が存在する。	内野山?	17世紀後半～18世紀前半		
153	46	55 B	II層	磁器	皿		底部		(2.2)	高台は逆台形を呈し直立する。	(見込み) 蛇ノ目釉剥きを施し、高台着ね焼に伴う砂粒が付着する。(外) 撫で。高台の内面に掛けて砂粒が付着する。	(内) 白釉。低位は露胎する。	白色。粒子ガラス化を持つ。透明感をやや荒い。気孔(円・裂)が存在、規模は小さい。	肥前			
153	47	55 B	(BT-14)	陶器	皿		底部		(2.4)	高台は断面逆台形を呈し直立する。高台脇に較べて深く削り出される。	(見込み) 幅の狭い蛇ノ目釉剥きを施し、高台着ね焼に伴う砂粒が付着する。(外) ロクロ目。高台は削りを施す。(量付け) 重ね焼に伴う熔着痕と砂粒が付着する。	(内) 白土刷毛掛け。緑灰釉。低位は露胎する。	灰～灰褐色。粒子単位を留めガラス化する。剥離面は荒い。気孔(円・裂)が存在、規模は小さい。	肥前?			
153	48	55 B	(BT-10)	陶器	皿		底部		(2.3)	高台は逆台形を呈し直立する。	(見込み) 蛇ノ目釉剥き。	(内) 緑灰釉。白土刷毛掛け。白土刷毛掛け。露胎。	灰褐色。黒色斑。粒子単位を留めガラス化する。剥離面は荒い。気孔(円)が存在する。	肥前			
153	49	55 B	(BU-18)	磁器	皿		底部		(1.6)	高台は断面逆台形を呈し直立する。量付には稜が存在する。	(量付け) 釉剥きを施し、この内側には砂粒が付着する。	(内) 草花紋。	灰色。一部粒子単位を留めガラス化する。透明感をやや荒い。気孔(円)が存在する。	波佐見?			
153	50	55 B	I層	陶器	皿		底部		(2.3)	高台は高く「ハ」の字状にやや開く。	(見込み) 蛇ノ目釉剥き。(外) 削り。高台は無で。高台内削り。	(内) 緑灰釉。鉄絵。露胎。	黄灰色。精緻。粒子ガラス化良好。剥離面はやや荒い。気孔(円・裂)が存在、規模は小さい。	肥前	17世紀後半～18世紀前半		
153	51	55 C	II層	陶器	皿		底部		(1.7)	高台は逆台形を呈し直立する。	(外) 低位は削りを施す。	(内) 草紋?	白色。粒子単位を留めガラス化する。剥離面は著しく荒い。気孔(円)が存在する。	瀬戸・美濃	18世紀末～19世紀	陶器染付	
153	52	55 C	(BQ-17)	磁器	皿		底部		(1.8)	高台は断面逆台形を呈し直立する。底部は蛇の目凹型高台を成し、砂粒が付着する。	(外) 底部は二重圈線。高台は二重圈線。	(外) 底面は二重圈線。高台は二重圈線。	白色。粒子ガラス化良好。剥離面はやや荒い。気孔(円・裂)が多く存在する。				
153	53	55 C	(BV-16)	磁器	碗		底部		(2.0)	高台は幅太く直立する。	(見込み) 2条の沈線が施される。(外) 削り。	(内) 青磁釉。刺花紋。(見込み) 刺花紋。(外) 青磁胎。高台内は露胎する。	灰～灰白色。一部粒子単位を留めガラス化する。透明感をやや荒い。気孔(円・裂)が存在、規模はやや大きい。	龍泉窯	13世紀	青磁	

fig. no.	遺物番号	pL no.	出土地点	種類	器種	器形	部位	量 (cm)			形態的特徴	成形・調整 内面/外面	釉薬・絵付 内面/外面	胎土	その他の特徴	産地	年代	備考
								口径	器高	胴径								
154	54	55 C	II層	陶器	碗		底部	口径	(3.7)	胴径	5.4	底径			肥前	18世紀	陶胎染付	
154	55	55 D	(BQ-13)	磁器	碗		底部		(2.7)		5.6				肥前			
154	56	60・61	II層	磁器	碗	広東形	底部		(5.8)		5.4				能茶山	19世紀		
154	57	55 D	(BQ-12)	磁器	蓋	端反り形		口径	3.0	握み径	3.2				肥前系	19世紀		
154	58	55 D	(BQ-15)	陶器	蓋			口径	1.2	かえり径	6.8				関西系			
154	59	55 D	II層	陶器	鉢?		底部		(1.3)		7.2							
154	60	55 D	(BQ-16)	陶器	鉢		口縁		4.2									
154	61	55 D	II層	陶器	鉢		口縁		(5.1)									
154	62	56 A	(BU-16)	陶器	鉢		口縁		(2.2)									
154	63	56 A	(BU-15)	陶器	鉢		口縁		(3.5)									
154	64	56 A	I層	陶器	鉢		口縁		(3.4)									

fig. no.	遺物番号	pl. no.	出土地点	種類	器種	器形	部位	量 (cm)		形態的特徴	成形・調整 内面/外面	釉薬・絵付 内面/外面	胎土	その他の特徴	産地	年代	備考
								口径	器高								
154	65	56 A	(BV-16)	土師質土器	羽釜		鈎部	口径	底径	錐は貼付により、断面方形で張り出しは短い。	(外) 撫で。		淡橙色。石英粒。				
154	66	56 A	I層	陶器	擂鉢		口縁	20.4	(3.2)	口縁部で器厚を減じて括れる。端部は外傾する弱い凸面を成す。	(内) 撫で。摺目は1単位9条で下から上に施される。 (外) 上位は撫で。下位は削り。		白色。石英粒。剥離面は荒い。気孔(円・裂)が存在する。	瀬戸・美濃			
154	67	56 A	II層	陶器	擂鉢		口縁	25.4	(4.4)	口縁部は縁帯を成す。 (内) 一条の突帯。後部は鋭い。 (外) 弱い2条の凹線。	摺目は1単位10条で下から上に施される。 (内) 撫で。 (外) 体部にロクロ目。口縁下に撫で。		灰色。黒色斑。一部粒子単位を留めガラス化良好。剥離面は荒い。気孔(円・裂)が存在、裂孔には規模の大きいものが見られる。				
154	68	56 B	(BT-18)	陶器	匣			14.2	7.8		(内) 撫で。低位にロクロ目。 (外) 撫で。		赤褐色。石英粒。剥離面は荒い。気孔(円・裂)が存在、裂孔には規模の大きいものが見られる。				
155	69	56 B	II層	陶器	擂鉢			24.6	11.6	底部はベタ底を成す。口縁部は縁帯を成す。 (内) 1条の突帯、1条の凹線。 (外) 2条の凹線。	(内) 撫で。 (外) 撫で。		赤褐色。石英粒。剥離面は荒い。気孔(円・裂)が存在、裂孔には規模の大きいものが見られる。				
155	70	56 B	(BS-14)	陶器	擂鉢		底部		13.7	底部は中央でやや窪む。体部は直線的に外上方に立ち上がっている。	(内) 摺目は1単位10条で太く下から上に施される。 (外) 叩目。	(内・外) 露胎。	灰褐色。黒色斑。褐色斑。石英粒。一部粒子単位を留めガラス化良好。剥離面は荒い。気孔(円・裂)が多く存在、裂孔の規模は大きい。	信楽?			
155	71	60	(BR-11)	砥石	中～仕上げ砥			全長 (12.3)	全厚 (5.1)	砥面は表面の一部と側面1面の3面である。表面には長軸方向と斜位に溝状の条痕が認められ、線条は長軸方向に対して斜位である。裏面には横方向の剥離調整痕。側面にも長軸方向又は斜位の線条。							
155	72	57 D	(BT-15)	瓦	丸瓦		玉縁				(内) 布目圧痕。 (外) 横位の撫で。		淡橙色。石英粒。剥離面は荒い。気孔(円・裂)が存在する。				
155	73	56 D	II層	砥石	仕上げ砥			全長 (6.4)	全厚 (1.2)	砥面は表1面、側面2面であり、各々長軸方向に対して斜位の条痕が存在する。							
155	74	60	(BS-18)	銅製品				全長 5.5	全厚 5.6	方形を呈する。内面は凹面を成す。外側に少なくとも3辺の端部の折返しが見られる。							
155	75	60	(BV-16)	土師質土器	玩具	恵比寿		全長 3.3	全厚 1.6	底部には焼成時に破裂を防ぐための円孔(直径3mm)が穿たれる。	型合せによる。合わせ目を残すが成形後に取り除かれる。左側に頸を抱える。		淡橙灰色。石英粒。				
155	76	60	(BU-15)	銅製品				全長 5.5	全厚 2.6	断面楕円形を呈し、端部には直径5mmの円孔のある突出部が付く。	(外) 波溝。渦紋。						

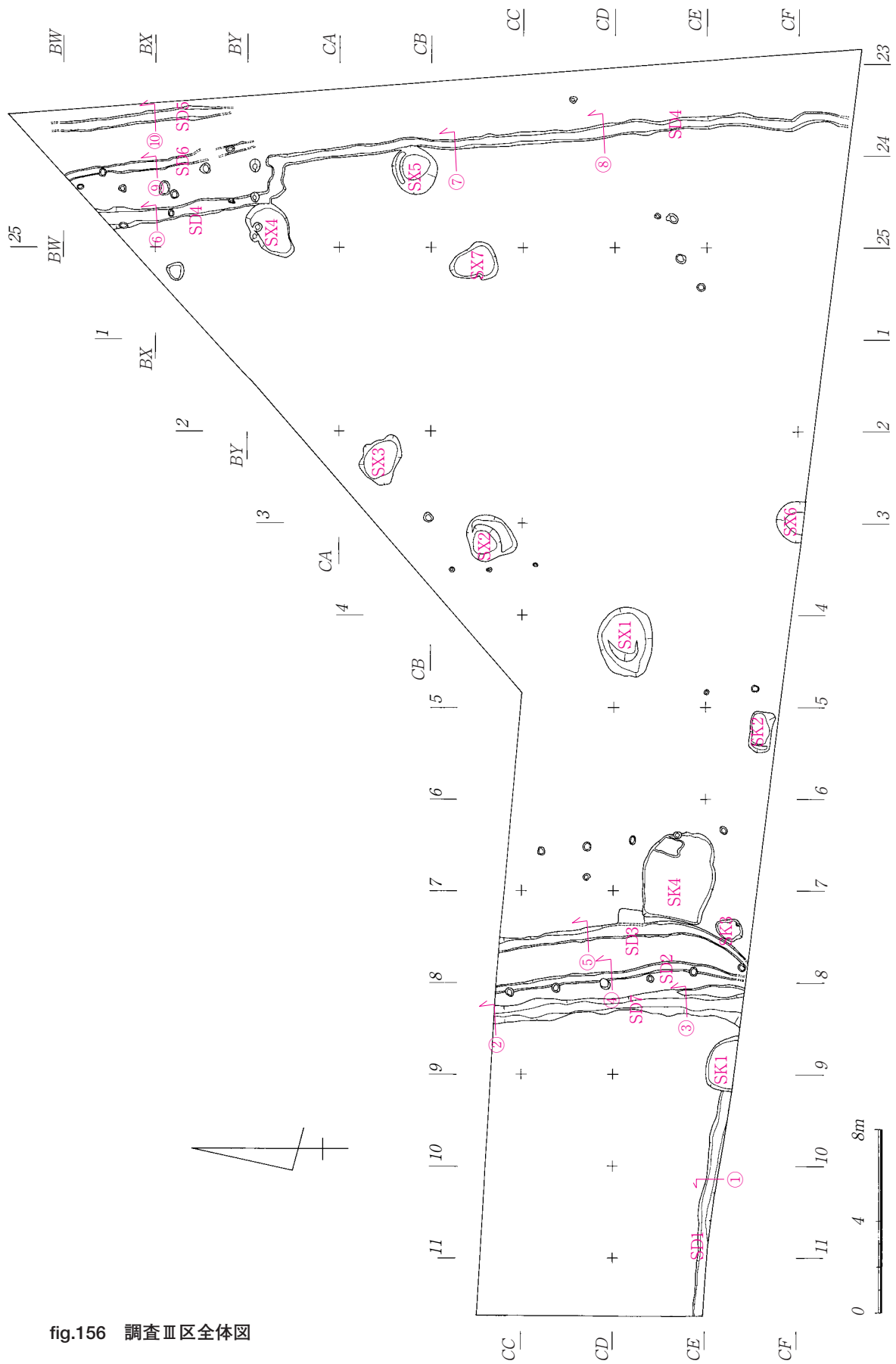


fig.156 調査Ⅲ区全体図

4. 調査Ⅲ区の 遺構と遺物

(1)土坑

SK 1 (fig. 157)

調査区の西部南端に存在する。調査区の南壁によって隔されており、全体の半分を検出したに過ぎない。この土坑は段階的な規模の縮小又は特異な形態を有している。最初の段階では隅丸方形を呈し、残存規模は長軸2m44cm、短軸1m10cmを測り、底面は概ね平らで検出面からの深さは36cm～40cmである。土坑壁及び底面は幅約5cmの黄色土で固められる。この土坑は次の段階で西側を前の段階の壁から80cm程度前進させて規模を縮小させている。この段階の平面形態は東側の壁をそのまま利用したとして隅丸方形又は長方形と考えられる。新しく設けられた壁の背面には30cm大の円礫が列状

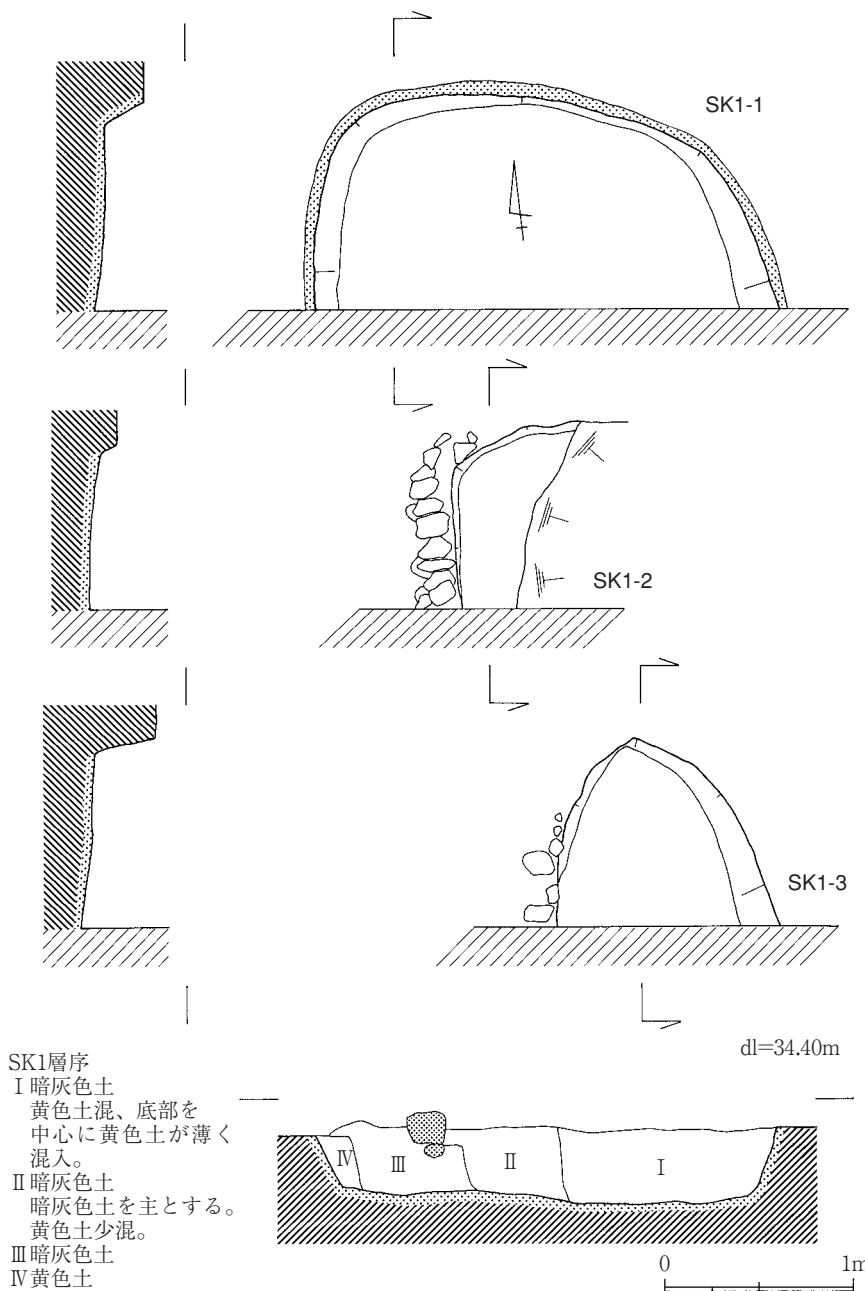
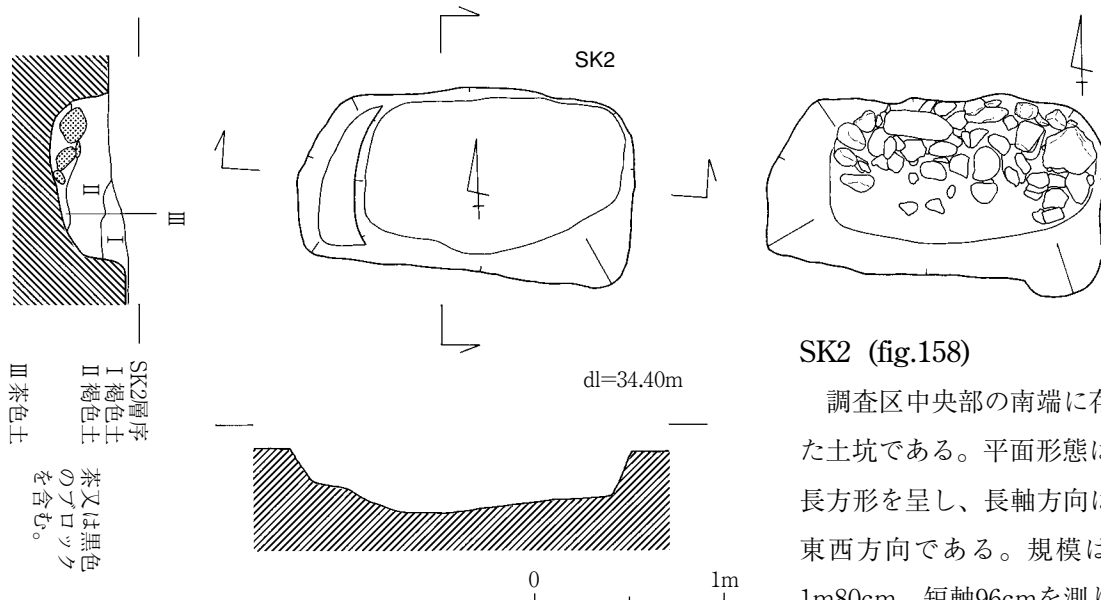


fig.157 SK1-1～SK1-3 平面図・セクション図・エレベーション図

に据えられていた。黄色土の壁の存在は不明確であった。最終段階に於て西壁は更に前進し、最大で60cm、南壁際では30cmを測る。前段階で見られたような壁の背面補強と考えられる石列の存在は不明瞭であり、部分的に20cm大の円礫が見られるのみである。

各段階の埋土は識別が不可能であり、暗灰色土に黄色土が混入するものである。出土遺物は全段階に於て見られなかった。

時期的な形態変遷でなければ構造的に内側を二枚の壁によって隔てたものと考えられるが、上部は削平を受けており不明である。仕切り壁の高さに差を設けて上澄みを移動させる構造を持つものか。



SK2 (fig.158)

調査区中央部の南端に存在した土坑である。平面形態は隅丸長方形を呈し、長軸方向はほぼ東西方向である。規模は長軸1m80cm、短軸96cmを測り、検出面からの深さは25cm～30cm

である。底部は舟底状に緩い凹面を成し、壁は北側で急である。埋土は上位では褐色系の土であるが下位に進むと茶色又は黒色が強くなる。土坑底面直上には北壁に偏って円礫が多く検出され、規模の大きなものは長径27cm～36cmを測る。

出土遺物は土師質土器の破片が1点である。

帰属時期を明確にし難いが、長軸方向は現地割形態に沿うことから近世中期以降と考えられる。土壌の可能性はある。

SK3 (fig.159)

調査区西部南端に存在し、溝状遺構SD3に隣接する。平面形態は不整形を呈し、規模は南北85cm～1m5cm、東西90cmを測る。底面は概ね平らであり、検出面からの深さは20cmである。壁は緩やかに傾斜する。土坑南東隅に直径30cmの柱穴状の落ち込みが存在するが、先後関係は不明である。埋土は黄灰色土の混入した黒色土である。

出土遺物は皆無であった。

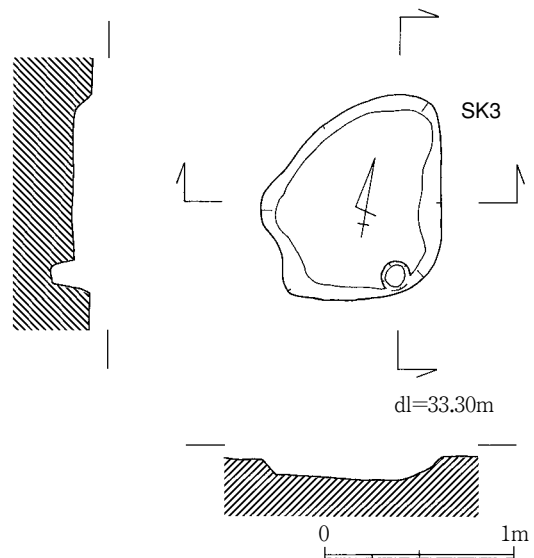


fig.159 SK3平面図・エレベーション図

SK4 (fig.160)

調査区の西部に位置する。竪穴状の土坑であり、西側ではSD3を切って存在し、東側では一部を現代のビニールハウス支柱穴によって切られている。平面形態は隅丸長方形を呈し、各辺は外側へやや膨らみを持つ。長軸方向はN-77°-Wであり、規模は長軸4m10cm、短軸2m50cmを測る。底面は概ね平らであるが北東部分に断面台形の段部が存在し、

検出面からの深さは15cmであり、台状部分では深さ4cmを測る。壁は斜めに立ち上がる。埋土は概ね2層で、暗灰色土(I層)と黒色土(II層)である。

出土遺物は皆無であり、SK4に伴う柱穴やその他の遺構は存在しない。

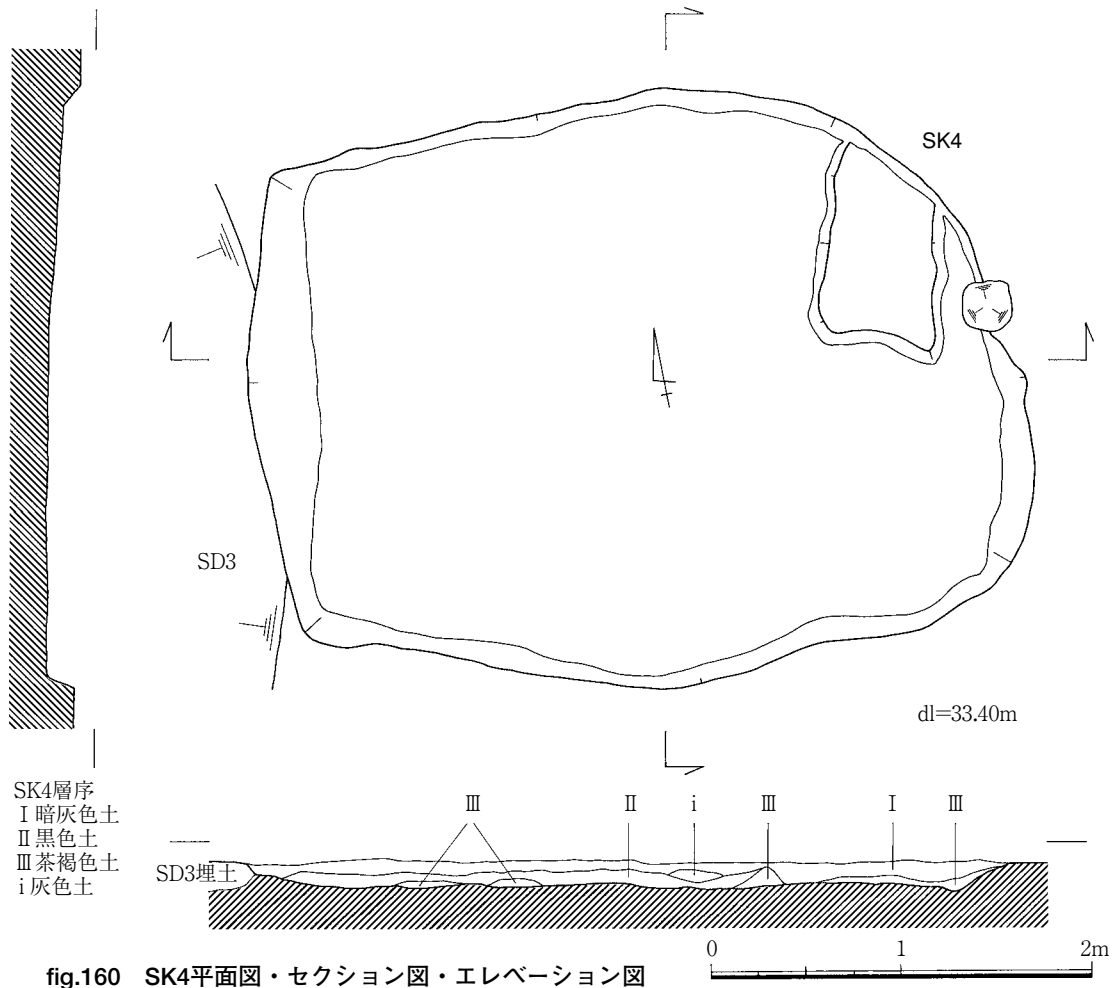


fig.160 SK4平面図・セクション図・エレベーション図

(2) 溝状遺構

SD 1 (fig.163-①)

調査区の西部南端に位置する。西側と東側は各々調査区西壁とSK1によって隔され、調査区南壁に沿う様に検出された溝である。主軸方向はN-83°Wであり、確認延長は9m90cm、幅は46cmを測る。断面形は逆台形を呈し、検出面からの深さは14cmを測る。埋土は黄灰色粘土の混入する黒灰色土が一様に存在する。

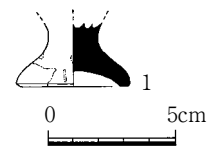


fig.161 SD1
出土遺物実測図

出土遺物の内図示できるものは1点(fig.161-1)である。1は磁器仏飯碗の脚部であり、肥前産と考えられる。他に細片が5点存在する。内訳は磁器1点、陶器1点、土師質土器2点、弥生土器1点である。磁器は染付であり能茶山産か。陶器は黄白釉の尾戸産か。

SD1の帰属時期は18世紀から19世紀と考えられる。

SD2 (fig.163-④)

調査区の西部に位置する。同様な主軸方向を持ってSD3とSD7が在るが、これらの中央に存在する。直径30cm～40cmのビニールハウス支柱穴によって4箇所を切られ、南端部ではSD7によって切られて存在する。主軸方向はN-8°-Wであり、南側では西偏する。確認延長は10m20cmであり、幅は34cmを測る。検出面からの深さは5～7cmである。埋土はSD1と同じく黄灰色粘土を混入する黒灰色土である。

出土遺物は皆無である。

SD3 (fig.163-⑤)

調査区西部に位置する。SK4に切られて存在し、南端部では直径32cmの規模を持つビニールハウス支柱穴によって切られる。主軸方向は北部でN-5°-Wであるが、南側は大きく西方に曲がる。確認延長は10m70cmであり、幅は58cmを測る。断面形は逆台形を呈し、検出面からの深さは7cmである。埋土は黒灰色土単層一層である。

出土遺物は皆無である。

SD4 (fig.163-⑥～⑧)

調査区の東部に位置する。主軸方向はN-8°-Wであり、調査区を南北に横断して検出された。現地割にはほぼ沿っているが、北部で大きく鍵型に折れ曲がる箇所が存在する。北部で暗灰色土を遺構埋土として持つ柱穴に数カ所を切られる。確認延長は35mであり、幅は40cm～50cmを測る。断面形は逆台形又は壁の緩やかなV字形を呈し、検出面からの深さは10cm～12cmである。遺構埋土は暗灰色土である。

出土遺物の中で図示できるものは1点(fig.162-1)である。1は陶器甕の口縁部である。そ

の他細片としては土師質土器が1点存在する。

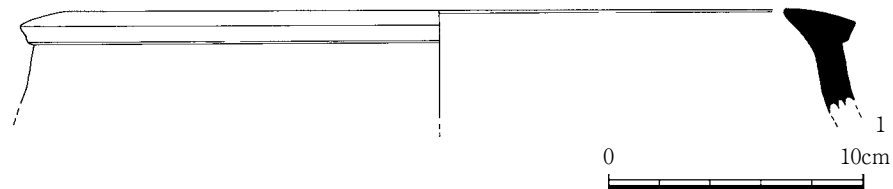


fig.162 SD4出土遺物実測図

SD5 (fig.163-⑩)

調査区の東北部に位置し、SD4とはほぼ平行に存在する。主軸方向はN-5°-Wである。遺構は本来現地割に沿って北や南へ連続するものと考えられるが、検出は調査区北部において確認された長さ7m20cm、幅44cmである。断面形は逆台形を呈し、検出面からの深さは6cmを測る。遺構埋土は暗褐色土である。

出土遺物の中で図示できるものはないが、細片としては陶器2点と土師質土器1点が存在する。

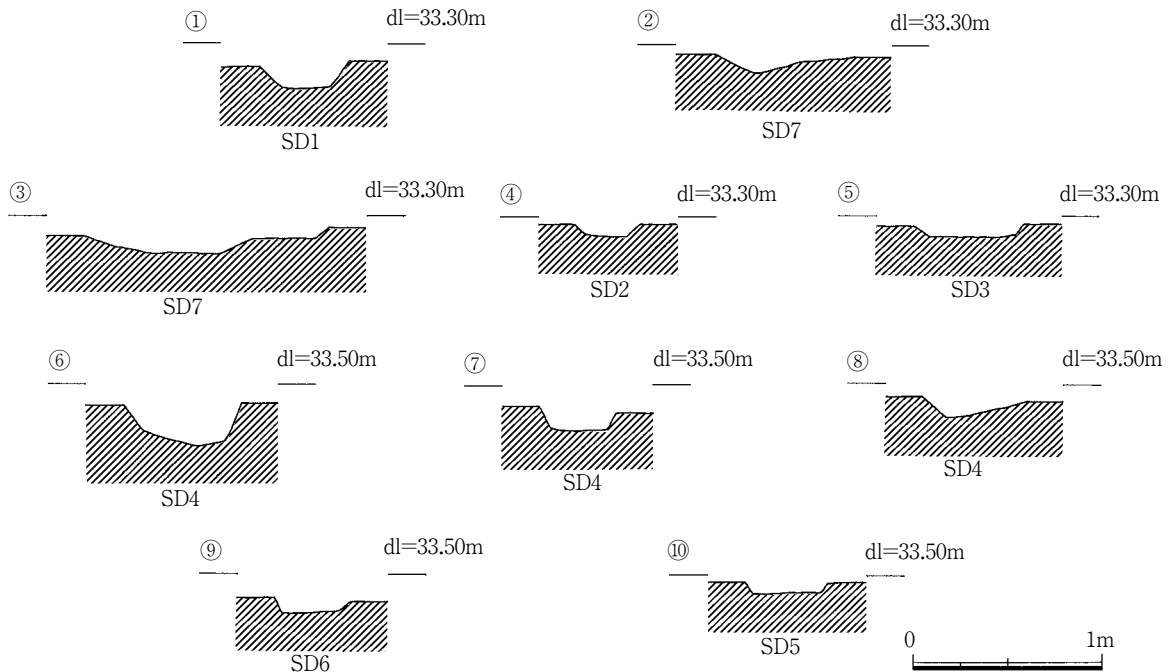


fig.163 SD1～SD7エレベーション図

SD6 (fig.163-⑨)

調査区の東北部に位置し、SD4・5とほぼ平行する。北側は調査区外に延び、南への連続は確認できなかった。北部で黒色土を遺構埋土として持つ柱穴によって切られる。主軸方向はN-5°-Wである。確認延長は8mであり、幅は40cmを測る。断面形は台形を呈し、検出面からの深さは6cm～8cmを測る。遺構埋土は暗褐色土である。

出土遺物は皆無であった。

SD7 (fig.163-②・③)

調査区の西部に位置する。調査区の南端でSD2を切る。主軸方向はN-5°-Wであり、SD2及びSD3同様に南端部はやや西偏する。確認延長10m70cmであり、幅は北側でやや狭く40cm、南側では1m30cmを測る。断面形はV字形から逆台形を呈するが、遺構壁は緩やかな傾斜であり、南部東側は

浅い段部を最大幅48cmで持つ。検出面からの深さは6cm～10cmである。SD7南部では溝方向に拳大を含む最大径25cm程度の円礫を意図的に配置した形跡が認められる。これはSD7が現地割に沿って存在することから地界を意味する何らかの施設と考えられる。調査時点ではこれを石列として扱ったが円礫が溝内から出土したことを考えるとSD7とこの石列は不可分なものと考えられる。SD7の遺構埋土は灰色土である。

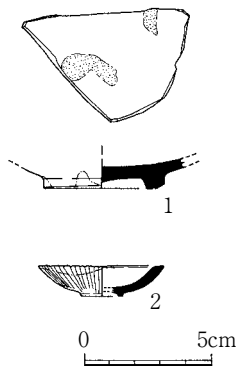


fig.164 SD7
出土遺物実測図

出土遺物の多くはこの石列に伴うものである。この中で図示可能なものは2点(fig. 164-1・2)である。1は陶器の皿底部であり、見込みに砂目を持つ。17世紀代の肥前産か。2は紅皿であり、19世紀の肥前産。他の細片について

てその内訳は磁器4点、陶器5点、土師質土器20点、須恵器3点、弥生土器31点である。

19世紀段階で廃絶されたものか。

(3) 倒木痕跡

調査Ⅲ区では長岡台地上の各発掘調査で頻繁に検出されている倒木痕跡が7基存在している。平面形態で楕円形に近いものが多く、長軸方向に層が分かれている場合が多い。各層は境界が不明確であり、漸次変化するものである。倒木痕跡であることから黄色又は黄褐色を呈する礫層は台地構成の河成堆積物を源とし、黒色土層は旧表土の二次堆積層と考えられる。痕跡の及んだ範囲については安定した層準が見られる箇所を基準として掘削するが遺構底面のように明確に検出出来た訳ではない。調査時点では性格不明土坑として扱ったためSXの名を付しているが、ここでは混乱を避けることから調査時点番号をそのまま使用する。

SX1 (fig.165)

調査区中央部に存在する。平面形態は不整楕円形を呈し、規模は長径2m92cm、短径2m44cmを測

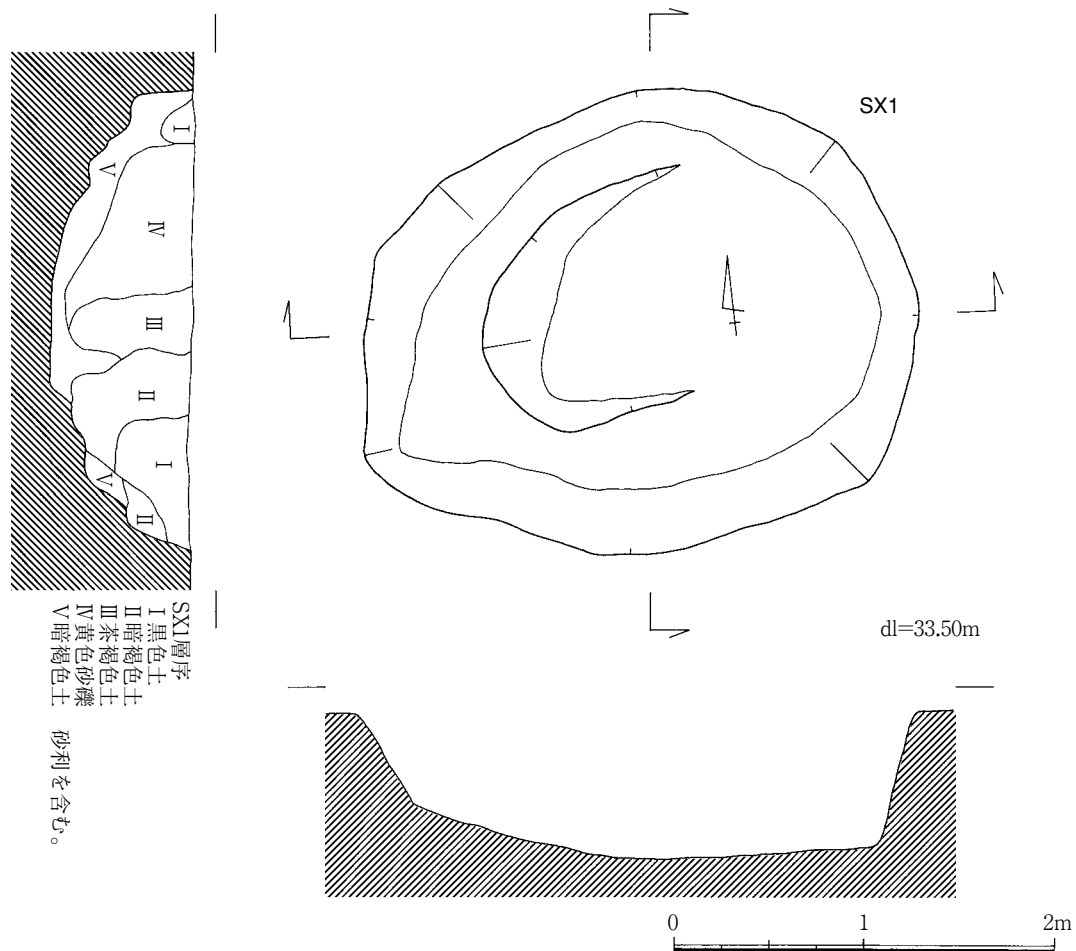


fig.165 SX1平面図・セクション図・エレベーション図

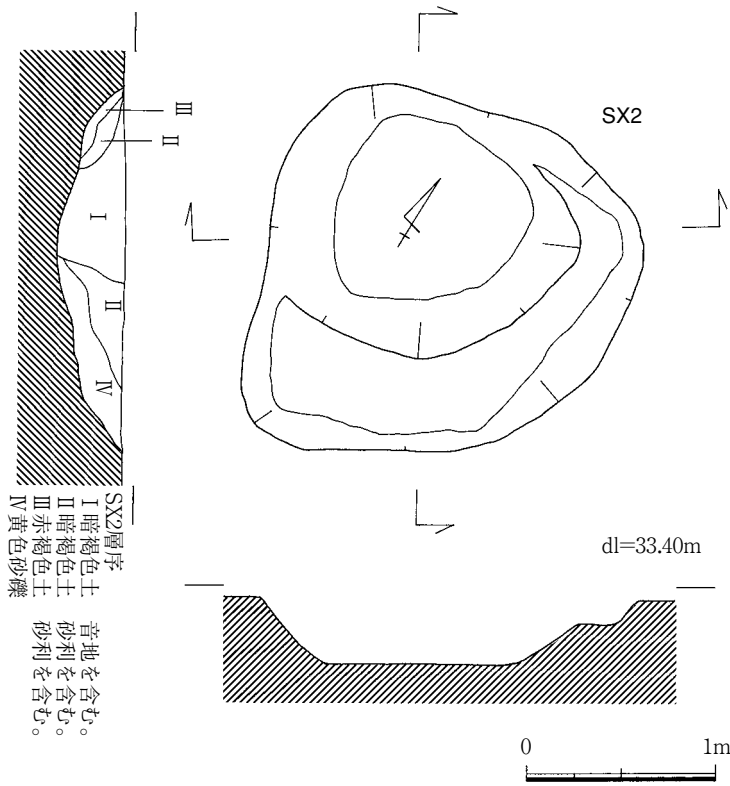


fig.166 SX2平面図・セクション図・エレベーション図

る。遺構内の各層は縦位を基本として存在する。倒木痕跡に顕著である層位として黒色土層と黄褐色砂礫土層が存在するが、ここでは前者が南側に、後者が北側に存在する。検出面からの深さは78cmである。

SX2 (fig.166)

調査区中央部の北側に位置する。平面形態は不整形円形を呈し、規模は直径約2mを測る。黒色土層は検出できず、暗褐色土層が北側に、黄色砂礫層が南側に存在する。本遺構の上位は削平を受けたものと考えられる。検出面からの深さは34cmである。

SX3 (fig.167)

調査区中央部の北側に位置する。平面形態は不整楕円形を呈し、規模は長径2m12cm、短径1m70cmを測る。黒色土層は南側に、黄色砂礫層が北側に存在する。検出面からの深さは43cm～68cmである。

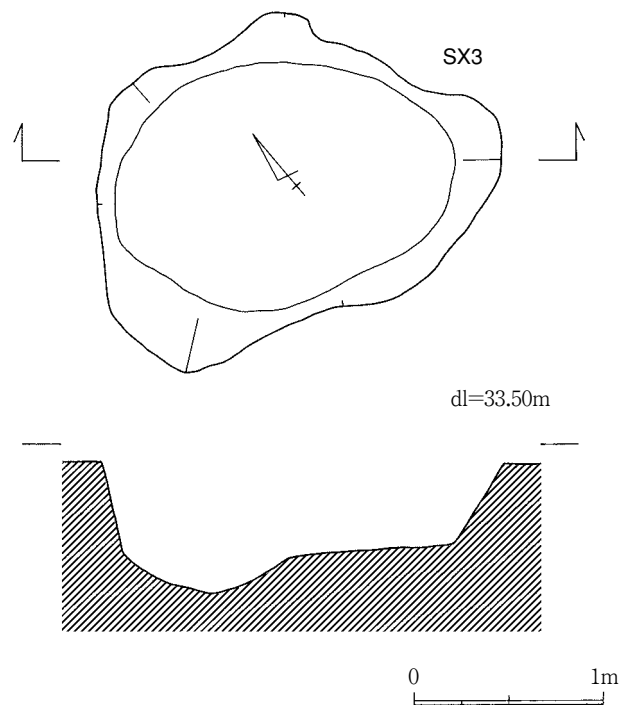
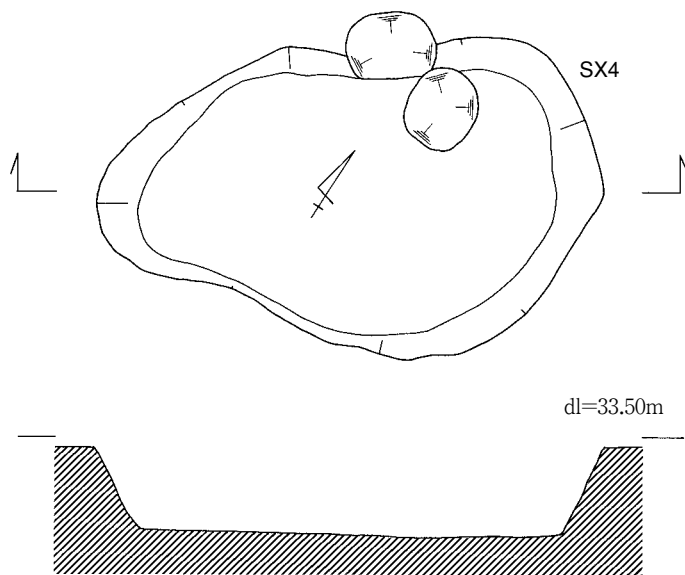


fig.167 SX3平面図・エレベーション図

SX4 (fig.168)

調査区の東北部に位置する。後世の柱穴によって北部を2ヶ所に渡って切られている。平面形態は不整楕円形を呈し、規模は長径2m66cm、短径1m64cmを測る。黒色土層は西側に、黄色砂礫層が東側に存在し、前者にはアカホヤの二次堆積が見られた。検出面からの深さは48cm



である。

SX5 (fig.168)

調査区の東部に位置し、SD4によって東側を一部切られる。平面形態は不整楕円形を呈し、規模は長径1m98cm、短径1m74cmを測る。黒色土層は南側に、黄色砂礫層が北側に存在する。検出面からの深さは42cmである。

SX6 (fig.168)

調査区の南端に位置し、調査区南壁によって隔されており全体規模は不明である。確認し得た遺構の規模は東西1m82cm、南北1m8cmである。黒色土層は西側に、茶褐色砂礫層が東側に存在する。検出面からの深さは67cmである。

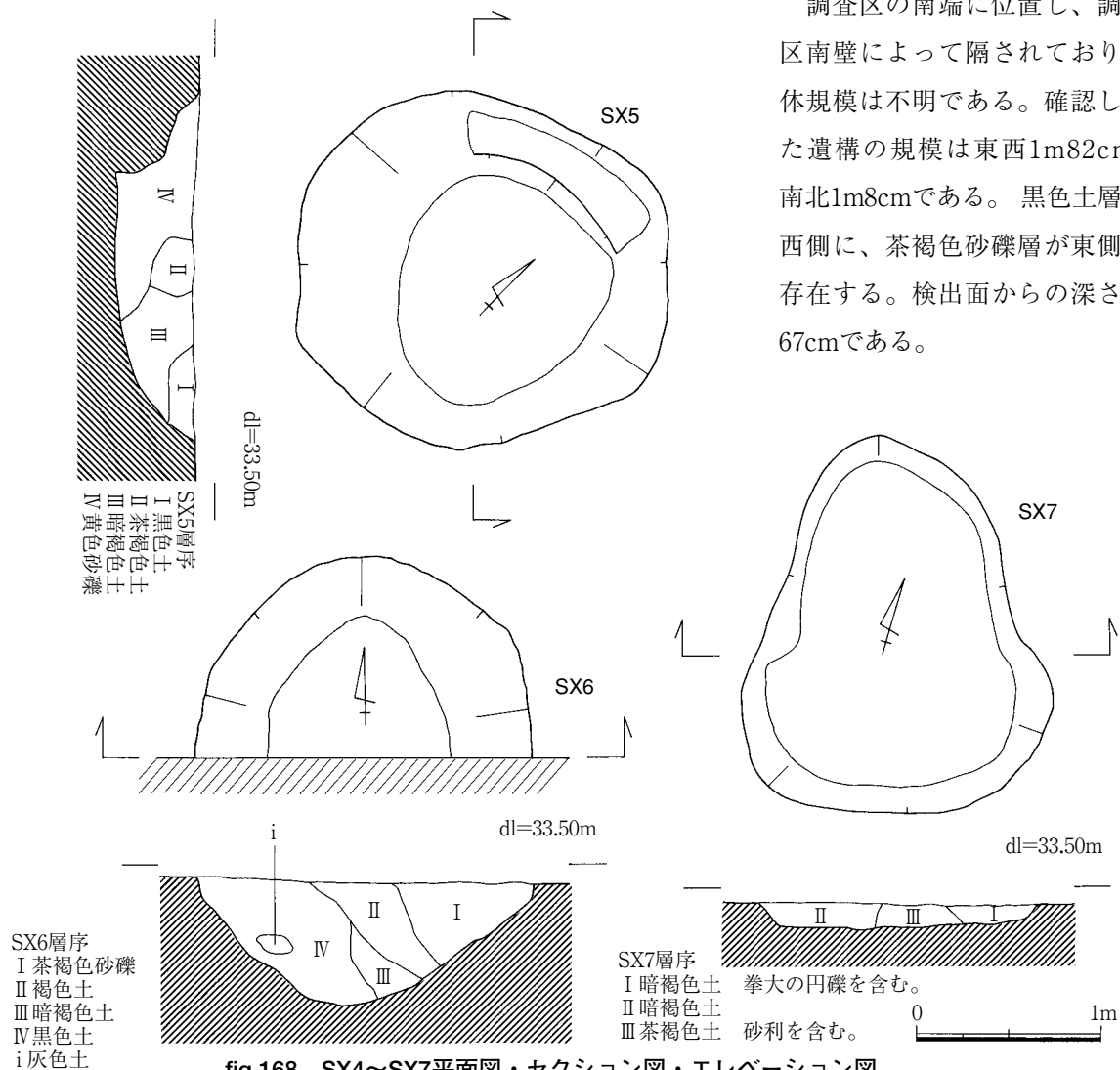


fig.168 SX4~SX7平面図・セクション図・エレベーション図

SX7 (fig.168)

調査区の東部中央に位置する。上部に削平を受けている。平面形態は不整楕円形を呈し、規模は長径2m5cm、短径1m68cmを測る。黒色土層は確認し得ない。暗褐色土層が東側に、茶褐色砂礫層が西側に存在する。検出面からの深さは14cmである。

(4)その他の遺物

調査Ⅲ区では包含層から出土した遺物の中で図示できるものは存在しない。細片としては磁器が8点、陶器が16点、土師質土器が2点、須恵器が2点と瓦片が2点存在している。表採として取り上げた中には近世出自と考えられるものが存在しており、この中で2点(fig.169-1・2)が図示可能である。1は陶器台付灯明皿脚部である。2は磁器染付の小皿であり、肥前産か。19世紀。

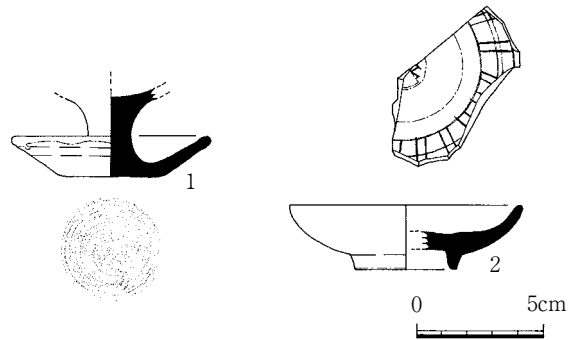
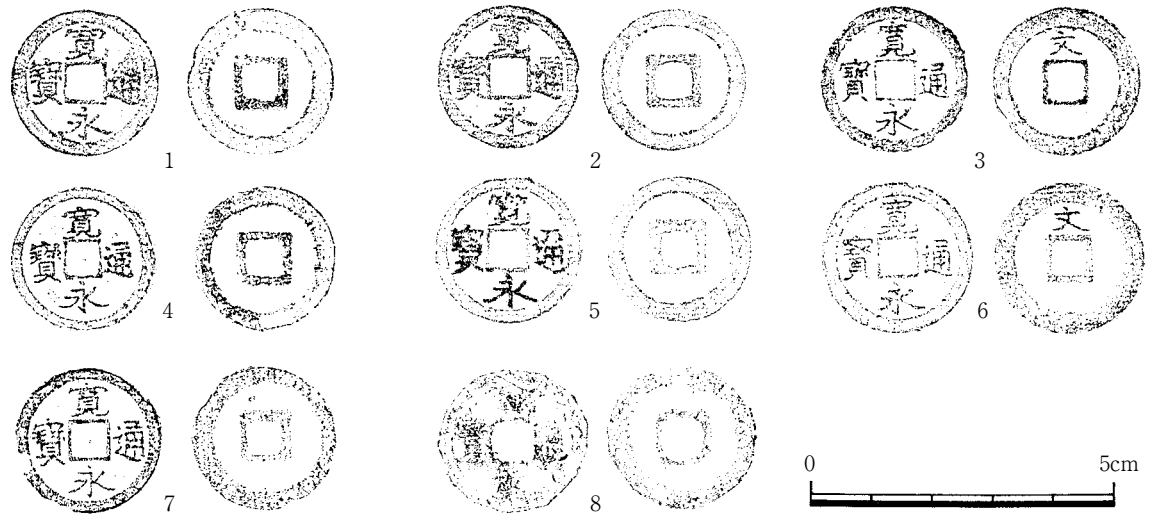


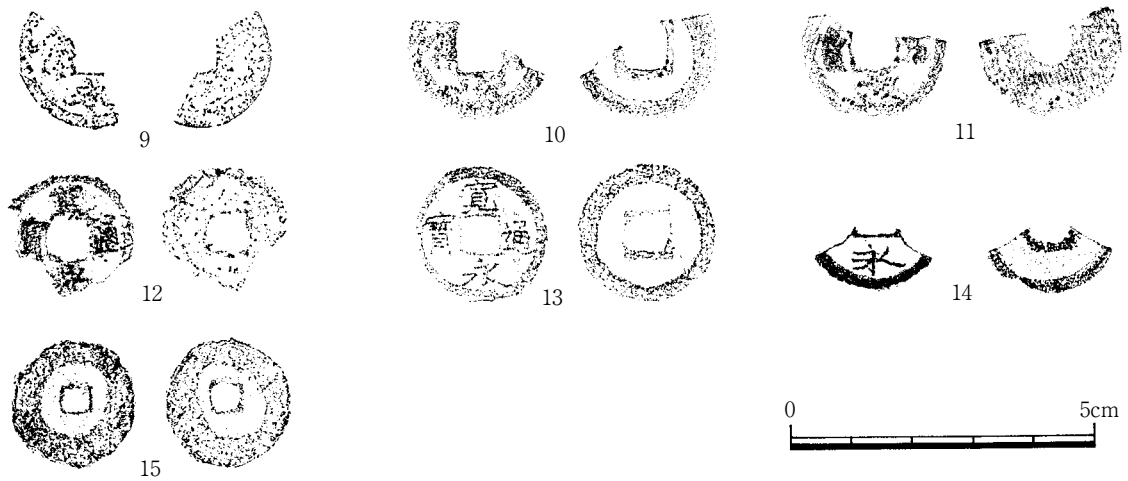
fig.169 Ⅲ区表採遺物実測図

調査Ⅲ区出土遺物観察表

fig. no.	遺物番号	pl. no.	出土地点	種類	器種	器形	部位	法量 (Gm)			形態的特徴	成形・調整 内面/外面	軸囊・総付 内面/外面	胎土	その他の特徴	産地	年代	備考
								口径	器高	脚径								
161	1	56 C	SD1 (II層)	磁器	仏飯碗		脚部	27.2	(2.5)	4.5	底面は撫でにより平滑に仕上げられる。	(外) 透明軸。	白色。粒子ガラス化し透明感を持つ。気孔(円・裂)が存在する。気孔の出現頻度は小さく、規模は大きい。	墨付けに回転糸切り	肥前			
162	1	56 C	SD4 (BX24)	陶器	甕		口縁	27.2	(4.1)		口縁部は内側から外側に粘土を折り返すことにより肥厚すること。端部は緩やかな凸面を成す。	(内・外) 鉄泥?赤褐色化する。	赤褐色。石英粒。剥離面はやや荒い。気孔(円)が存在する。					
164	1	56 C	SD7	陶器	皿		底部		(1.2)	4.7	高台は断面逆台形を呈し、低い。	(内) 緑灰軸。 (外) 緑灰軸。露胎。	灰色。黒色斑。粒子単位を留める。剥離面はやや荒い。気孔(円・裂)が多く存在する。		肥前	17世紀?		
164	2	56 C	石列	磁器	紅皿			4.9	1.2	1.7	体部は内湾して外上方に立ち上がる。口縁部はやや内傾する。	(外) 放射状紋。	白色。粒子ガラス化良好。透明感を持つ。剥離面はやや荒い。気孔(円)が存在する。		肥前	19世紀		
169	1	56 C	表探	陶器	台付灯明皿		脚部		(3.5)	4.2	受部は直線的に外上方に立ち上がる。端部は大きく丸味を持つ。	(内) 鉄軸で発色は暗褐色。 (外) 露胎。	灰褐色~灰白色。粒子単位を留める。剥離面はやや荒い。気孔(円・裂)が存在する。	成型時ロクロ右回転。	肥前?			
169	2	56 C	表探	磁器	小皿	丸形		9.1	2.6	4.0	高台はやや幅太い。高台内は脇に較べて深く削り込まれる。	染付。二重格子紋。 (内) 露胎。	白色。粒子ガラス化良好。透明感を持つ。剥離面は概ね滑らか。気孔(円・裂)が存在するが規模は小さい。		肥前	19世紀		



no.	出土地点	種類	初鑄年	no.	出土地点	種類	初鑄年	no.	出土地点	種類	初鑄年
1	SK11	古寛永	1636年	2	SK11	古寛永(鳥越銭)	1656年	3	SK11	文銭	1668年
4	SK11	古寛永	1636年	5	SK11	古寛永	1636年	6	SK11	文銭	1668年
7	SB5 P4	古寛永	1636年	8	包含層	新寛永	1697年				



no.	出土地点	種類	初鑄年	no.	出土地点	種類	初鑄年	no.	出土地点	種類	初鑄年
9	SK16	古寛永?	1636年	10	SK44	—	—	11	SK44	—	—
12	SK47	新寛永	1697年	13	包含層	新寛永	1697年	14	包含層	新寛永	1697年
15	包含層	雁首銭	—								

fig.170 調査 I 区 (上) ・ II 区 (下) 出土銅銭拓影

第Ⅳ章 まとめ

1. 山田三つ又遺跡出土遺物について

山田三つ又遺跡出土の遺物点数は総数約3,600点である。遺物は主に中・近世出自の土器遺物が中心であるが、中には石製品、土製品、銅製品や今回は報告書に取り上げ得なかったが鉄製品が見られる。土器遺物については表1に示すように調査区ごとに出土状況と種類を捉えることができる。石製品としては砥石(fig.131-42他)、石臼(fig.99-1他)、鞆羽口(fig.108-1他)などが出土している。前二者については近世消費地遺跡で恒常的に出土が見られており、後者についても野鍛冶又は集落を単位として存在した鍛冶工房の残滓であろう。土製品については型合せによる恵比寿天(fig.155-75)、銅製品では刀の小柄(fig.155-76)や装身具の一部であろう(fig.155-74)が見られる。遺構内出土の遺物から判断するに、遺構の殆どは近世中期以降のものであり、従来考えられていたような中世期の山田三つ又遺跡の主体部は本調査区の東又は南に隣接して存在すると考えられる。

これら出土遺物の中には時期的に明らかな資料が存在していることから、簡単にそれらの遺物について触れて行きたい。

種 類	調査Ⅰ区		調査Ⅱ区		調査Ⅲ区		試掘調査区
	遺構内	包含層	遺構内	包含層	遺構内	包含層	
土師質土器	175	232	398	376	25	8	22
瓦質土器			2	1			
磁器	36	138	244	268	8	15	19
陶器	68	149	533	524	44	18	25
須恵器	5	9	8	14	3	2	5
弥生土器	5	33	21	28	32		23
縄文土器	1						

山田三つ又遺跡調査区別遺物出土状況

1) 資料中時期的に古いものとしては縄文時代の粗製深鉢口縁部(fig.8-1)が出土している。長岡台地周辺の河成段丘上や国分川形成の扇状地上に立地する遺跡からは晩期土器が出土している。これらは遺跡北部の山間部から台地及び扇状地の上位に縄文晩期からの生活痕が存在する可能性を示唆するものであろう。

2) 弥生後期土器破片が多く存在する。これは長岡台地上に恒常的に存在したと考えられる旧表土、黒ボク層内に含まれていることが多い。台地上に展開する弥生後期後半からの遺跡は小籠遺跡をはじめ東崎遺跡、ひびのき遺跡群などであるが、調査区南東側を中心として後期の遺跡が存在する可能性がある。

3) 須恵器坏(fig.3-1)、壺底部(fig.24-26)、緑釉陶器碗(fig.132-7)、(fig.152-31)などが出土している。これらは比較的大きな破片であり、磨滅も少ない。緑釉陶器2点は同一個体の可能性があり、胎土は陶

器質で黄灰色を呈し堅緻である。外面にはロクロ目を残し、内面は丁寧に撫で仕上げされている。また、釉薬は薄く掛かり灰緑色を呈する。

4) 中世出自の貿易陶磁としては、(fig.153-53)の青磁碗底部、(fig.130-29)の青磁盤口縁、(fig.133-1)のベトナム産青花水滴などが見られる。(fig.130-29)(fig.153-53)は龍泉窯産のもので、前者は見込みに劃花紋を施し、後者は片切り彫りにより鏢状の口縁に輪花が施される。(fig.133-1)は体部に精緻な葡萄紋を施したものである。ベトナムでの陶磁器生産は中国の影響下開始されたもので、青花については景德鎮の製品を真似ることで需要を拡大していた。15世紀代(1436年～1465年)の明朝期陶磁器の対外輸出禁止に伴い、陶磁器の供給源としてベトナムが重要な位置を占め、ベトナム青花はこの時期に生産拡大を図ったと共に技術的な進歩を遂げたものとされている。これらの製品は東南アジアを中心に輸出されることが多く、日本にもたらされたものもここを経由することが多かった様である。この水滴は二次的な被熱を受けていることから、火災等に遭遇した可能性を持つ。

5) 近世灰釉陶器、ここでは特に山田三ツ又遺跡出土遺物中、細片を含めて非常に多く見られる灰釉陶器碗(形態の確認でき得るものはやや深めの碗)について観察したい。これらの多くは所謂呉器手の碗と呼ばれるものであり、18世紀代に多く、生産地としては肥前や京都周辺が上げられるが、各地方窯でも同様な形態や釉薬を持つ器が焼かれていた可能性が高い。

この土器群の特徴としては胎土の色調が大きく2種類に分けることが出来る。1つは黄白色を呈するものであり、もう1つは緑灰色を呈するものである。破断面は概ね粒子単位を留める荒い断面を持つものが多く、中には赤色粒子を含むものが見られる。また釉薬には細かな貫入が認められる。

釉薬の施釉状態では、高台内を含み底部以下が露胎するものと高台端部を除いて施釉するものとに分けることが出来る。前者には形態的に多彩なものが含まれており、(fig.46-13)や(fig.152-17)の小碗、(fig.152-24)や(fig.153-50)の腰折れ形の向付や皿などが存在している。高台の形態には断面長方形を呈した、豊付け部分が平らな面を成すものが多く、(fig.26-34)は蛇の目高台を有している。装飾的には鉄絵を施したものが2点(fig.145-5)と(fig.153-50)が存在し、刻印は高台内に「森」銘を施した(fig.134-1)に見られる。

後者は1例(fig.152-18)の小碗を除いて形態的に所謂呉器形の碗が多くを占めている。高台は2例(fig.26-21)と(fig.152-20)が低いものの、概ね高く、豊付けは丸く修めるものが多い。また豊付けは釉ハギを施しているが砂粒が付着するケースが多く、製品として出荷する場合にこれを取り除くものと砂粒が付着したまま出荷するものが存在しているようである。(fig.82-3・fig.88-3・fig.129-14・fig.152-26・fig.152-27・fig.152-29)には高台に砂粒の付着が認められる。高台内部は高台脇と同程度か、高台脇に較べて深く削り込まれるものが多く、この中には磁器質の胎土を持った(fig.85-3)が存在する。

前者には(fig.134-1)に見られるように京焼風陶器属するものが存在しており、全体的に精緻な造りを持ったものが多い。また、後者は広義の京焼風陶器として扱われていたごとく形態的には茶器の系譜を引くものであるが、今回の調査に関わる出土状況を見る限りでは一般雑器としての使用が考え易い。

(藤方)

参考文献

- 寺島孝一「平安京出土の緑釉陶器」『考古学雑誌 61-3』1975年 学生社
堀内明博「平安京の土器・陶磁器」『平安京出土土器の研究』1994年（財）古代学協会
「ベトナム陶磁」『世界陶磁全集 16 南海』1984年 平凡社
「東南アジア古陶磁展」1994年（財）富山美術館
鈴木重治「出土資料にみる京焼と京焼写しの検討」『同志社大学新照館地点・新島会館地点の発掘調査』
1990年 同志社大学校地学術調査委員会
鈴木重治「京焼と京焼写しの検討」『白鷗』1990年 都立学校遺跡調査会
『旧芝離宮庭園』1988年 旧芝離宮庭園調査団
仲野泰裕「江戸時代の瀬戸窯と京焼風陶器」『研究紀要 6』1987年 愛知県陶磁資料館

2. 山田三ツ又遺跡出土のかわらけについて

山田三ツ又遺跡出土のかわらけ

「かわらけ」は、低温酸化炎焼成による軟質の土器の中でも無釉偏平皿をいう。同様のものを土師器や土師質土器と呼ぶ研究者もいる。これは、前者は土師器という用語を古墳時代から奈良・平安時代頃までの土器について使用し、それ以降（中世）の土器について土師質土器と呼ぼうというものである。後者についても、ある地域で、古代の伝統を引くものとは全く違う技術体系のものが出現したことを明示するうえで、それ以降のものをかわらけと呼ぶのである。かわらけという用語自体は古代以来の文献に素焼きの製品の意味で使われている。

かわらけは、特に中世都市遺跡で多量に出土しており、用途は一般に宗教的行事や会食などの非日常的・儀礼的行為の際に、使い捨ての食器として、一時的に多量に消費されたものと考えられている。それに対して、近世のかわらけの出土のあり方は、使い捨ての器としての性格は保っているものの、会食の食器というよりも、埋葬者への供養に関する行為に使用されたケースも多いようである。近世農村集落跡である山田三ツ又遺跡Ⅱ区の土壌の可能性をもつ遺構からは、近世陶磁器類とともに土師質土器が出土しているが細片であり、図示できない。また、土葬骨の出土や火葬施設の検出もみられない。

山田三ツ又遺跡の各遺構及び包含層から出土したかわらけのうち、口径・底径・器高の計測ないし復元が可能であった資料は68点を数える。口径はさまざまであるが、大別すると以下のとおりである。

- (1) 6.2cm～6.5cmのグループ
- (2) 6.6cm～6.9cmのグループ
- (3) 7.1cm～7.6cmのグループ
- (4) 8.0cm～8.3cmのグループ
- (5) 8.8cm～9.0cmのグループ

底径は、4.0cm～5.0cm前後のものが圧倒的に多いが、2.4cm、2.8cmのものもみられ、いずれの形態にすべきか帰属の不明瞭なものも認められる。器高は1.1cm～1.6cmのものが圧倒的に多い割合を占める。成形は全てロクロ成形であり、手づくねのものはみられない。底部は摩耗していて判別できにくいも

のも数点みられる。底部外面は回転糸切りであり、篋切りのものは皆無である。また、ナデにより糸切り痕を消しているものもみられる。成形時のロクロ回転方向は全て右回転で、左回転のものはみられない。器形は底部からやや内湾して外上方に立ち上がるものと、直線的に外上方に立ち上がるものとに分かれる。体部は、内外面ともナデが施され、ロクロ目を残すものもみられる。

県内における近世初頭の土師質土器一括資料として高知城跡をあげることができるが、土坑状遺構出土の皿と比較した場合でも圧倒的に底径が小さく、器高の低いものが多い。県内中部地域における土師質土器の変遷については、田村遺跡群や岡豊城跡・芳原城跡等において、16世紀前半から中頃にかけて、手づくねからロクロ成形に変わるといふ土器生産における画期をみることができる。また、他県の例をみても中世から比べると底径の縮小化とともに器高は完全に低くなり、口径に対して底径の割合が減っていく傾向がみられる。

山田三ツ又遺跡の遺構の中でも、I区SX3とII区SK7からは多量の近世等陶磁器類が共伴遺物として出土している。I区SX3からは肥前・尾戸・能茶山産等多量の近世陶磁器類とともに、17点のかわらけが出土している。うち、9点は口縁の一部に煤の付着が認められることから、灯明具として使用されたことは明白である。中には在地系のかわらけが5点含まれている。

次に、II区SK7からも肥前・瀬戸・美濃・能茶山・内野山産等多量の近世陶磁器類とともに、11点のかわらけが出土しており、うち9点は口縁の一部に煤の付着が認められることから、灯明具として使用されたことは明白である。

かわらけはこの他に、遺構外からの出土もみられ、これらの供伴した陶磁器類によって、18世紀前半から19世紀初頭にかけてという帰属年代が導き出される。

土器生産集団と供給体制

県内におけるかわらけ生産の様相については、「長宗我部地検帳」（以下地検帳）の中の「土器（かわらけ）給」という用語から分析することができる。地検帳は、天正年間（1573～1591）に土佐を統一し、四国を制圧した長宗我部元親が、豊臣秀吉の命による太閤検地の一環として土佐国内で行った検地の結果が記されたものである。室町から戦国にかけての在地支配の変遷を読み取ることができ、土佐の中・近世史研究上の一等史料である。

ここでは、松田直則氏が岡本健児氏の研究をもとに考察された文献から引用させて頂くことにする。松田氏は、土器生産集団は在地領主などの権力の保護がなければ存在し得ない技術者集団であるという一つの視点から、岡本氏が地検帳の分析から摘出した土器（かわらけ）生産集団の動向についてみている。

地検帳に記載されている土器生産集団は、中部地域では、南国市で長岡郡甘枝郷・江村郷、香美郡夜須庄、高知市では土佐郡朝倉庄地域の地検帳にそれぞれ土器屋の居住を示すものがいくつか存在する。地検帳の「土州長岡郡甘枝郷地検帳」文面から、土器製作工人のために与えられた給地が、検地の段階ではその田地が川原となって「土器給」ではなくなったことが分かる。次に、「長岡郡甘枝郷衙府中国分地検帳」からは、早くから土佐の国衙と結びついた有力な神社が中世においてもその力を持ち続け、神社に使う土器は特別に作った様子が窺われる。「長岡郡江村郷御地検帳」からは、

土器屋が一部その所有地を売却しているふしがある。「香美郡夜須庄地検帳」には、役人的名を持つ土器工人が出てくるし、地検帳の「土佐郡朝倉庄」の部からも朝倉庄地頭分に土器屋が居住していたことが分かる。この他に幡多郡安並の項に「中村ノ土器給」の文面があり、中村に居住していたことが分かる。安芸郡安芸には「土器屋ゐ」や「土器屋新兵衛」の名も見えている。

これらのことから「土佐の7守護」や一条氏の支配のもとに土器屋が存在していたと推考されている。土師質土器の地域性を概観しても、それぞれに異なった特徴を有しており、戦国時代のめまぐるしい社会情勢の中、各地域の有力者のもと土器生産が行われていたことを垣間見ることができる。しかし、天正年間に実施された地検であるという点から、さらに詳しく土器の地域的編年や特徴を把握する研究を進めなければ、文献面との照合は不可能である。

以上であるが、近世のかわらけの様相については県内各地での調査が増加するに伴って、少しずつ明らかになりつつある。従って、今後の調査事例の増加を待って検討すべき課題が多いように思われる。

(佐竹)

引用・参考文献

- 中世土器研究会編「土器・陶磁器 土師器皿」(『概説 中世の土器・陶磁器』 真陽社
榊淵規彰「近世かわらけについて―神奈川県における在り系かわらけを中心として―」(『國學院大學 考古学資料館紀要 第8輯』 國學院大學考古学資料館)
羽生淳子他「人工遺物各論 かわらけ・燈明具類」(『東京大学本郷構内の遺跡 理学部7号館地点』 東京大学遺跡調査室発掘調査報告書1 1989)
伊野近富「かわらけ考」(『京都府埋蔵文化財論集 第1集 一創立5周年記念誌一』(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター 1987)
森田尚宏・吉成承三・近森泰子「史跡 高知城跡1―御台所屋敷跡発掘調査報告書―」 高知県教育委員会 1994
森田尚宏・宮地早苗・寺川嗣・曾我貴行「高知城跡」(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター 1995
松田直則・下村公彦「中～近世小結」(『田村遺跡群』第10分冊 高知県教育委員会 1986)
松田直則「高知県における中世土器の様相―15・16世紀を中心にして―」(『中近世土器の基礎研究 Ⅲ』日本中世土器研究会 1987)
岡本健児「土佐神道考古学・土器(かわらけ)考一」(『土佐史談』第166号 土佐史談会 1984)

3. 山田三ツ又遺跡検出遺構について

山田三ツ又遺跡検出の各遺構については本文中で見てきたように近世出自のものと考えられる。調査区全体を見た時、水路、柱穴と土坑の存在する屋敷地、それを区画する溝等が認められる。

1) 調査Ⅱ区で北端部に検出された溝状遺構(SD1)は、現在もその北側に存在する農業用水路と同様な性格を持ったものである。また、これと同規模の調査区西端の溝状遺構SD11も水路的な性格を持つものと考えられる。このSD1の西側部分には拳大以上の円礫を敷き詰めた部分が存在しており、水路の廃棄時に円礫を放り込んだものか、水路の土手を補強する目的を持ったものであろうか。

2) 屋敷地は調査区内で2～3箇所を想定することが出来る。この場合区画溝として調査Ⅰ区ではSD1、SD2、SD6、SD11、調査Ⅱ区ではSD2、SD4、SD5である。調査Ⅰ区の屋敷地は北側をSD1、東側をSD2、西側をSD6、南側をSD11に画されるものである。調査Ⅱ区では東側の屋敷地は北側をSD1、東と西を各々SD2とSD4が区画すると考えられ、西側の屋敷地では北側は同じくSD1、東端をSD5とするものであり、西端部のSD11によって区画されるものと考えられる。調査Ⅱ区のSD4とSD5で画される部分には明瞭な遺構が疎らであり、調査時点でも遺構検出面が比較的堅く締まった部分であったことから、道として使用された可能性が強い。また、西側の屋敷地には東寄りの部分と西寄りの部分で遺構の偏りが見られ、その間は遺構の空白部分であることから、別々の屋敷地の可能性を有する。屋敷地内の地域区分については、調査Ⅱ区で見た場合、柱穴や土坑が集中している居住場所がやや北寄りに位置し、耕作に関わると考えられる溝状遺構群が南に位置する。これは現在遺跡周辺に存在する農家の形態と通じるものである。またこの居住域と耕作域は検出面の状況から見た場合、扇状地形成時点の網状に発達した流路部分と河岸部分、つまり流路廃棄後に埋積されたやや軟らかい部分と河成堆積物である砂礫層が露呈している締まりの良い安定した部分と考えられる。形成時点での地形が近世に於ても居住地域の選択に影響を与えていたことが窺える。

3) 規模のやや大きな遺構として、調査Ⅱ区東側屋敷地の南部にSK23が存在する。これはSD4を通じて引水したように溝で繋がっており、南部には石列の存在も確認されている。同じように西側部分ではSD11と繋がりを持つSK73やSK71が存在しており、屋敷地への導水施設の可能性がある。これは今調査区内で井戸の存在が認められなかったことと関連するものと考えられる。長岡台地末端に位置する小籠遺跡調査Ⅱ区では先後関係はあるものの、近世の井戸が10基存在していた。山田堰等による台地上の灌漑は末端部分では排水(悪水)が多くを占め飲料としては適さなかったものと考えられ、対して標高の上位側では湧水も含み水路から供給される水を生活の全般に使用していたものと考えられる。

また調査区内には検出面からの深さは余りないものの大きな広がりを持つST1～ST3までが存在している。この遺構群は柱穴群に隣接し屋敷地内の中心的な位置に存在している。

4) 掘立柱建物跡に関しては建て替え等が行われていたとしても、今回報告し得た以上の数が存在していたものと考えられる。屋敷地内に於けるSBには重複するものが在ることから2時期以上の遺構群が存在すると考えられる。調査Ⅰ区に於けるSB1、SB5及びSB4、SB2とSB3は棟方向が同じであることから同時期に機能していた可能性があり、調査Ⅱ区に於ける東側の屋敷地に於けるSB2とSB3なども

帰属時期が同じであった可能性がある。また東端に存在するSB1が区画溝と考えられるSD2を越えて更に東側に延びる可能性があることから、比較的新しい時期に東側への屋敷地の拡張が行われたものであろうか。

5) 今回の調査で検出された土坑には、小籠遺跡など近世後期の遺跡で見受けられる黄色土枠を施した土坑が存在する。平面形態はSK16やSK33などの正円に近いもの、SK15などの楕円形を呈するもの、SK17やSK59などの隅丸方形を呈するものが見られる。規模は直径又は一辺が1m前後から1m60cm程度のものである。SK16とSK16-2、SK31とSK32、SK33とSK33-2など、同程度の規模を有する土坑が並列したり、重複する傾向が見られる。枠の構築に際しては殆どのものが枠背後の列石部分が入る程度の狭い掘り方を持つものが多いが、SK18やSK31など掘り方部分を可成り広く取るものが見られる。またSK18やSK33では、構築された枠の壁中央に水平な凹部を持つことから、構築時の型痕又は内部構造が存在した可能性がある。内部構造を持つ土坑としては、便所、墓、貯蔵穴、穴蔵などがあるが、SK20、SK21、SK44、SK45に見られる底面の小溝は桶状の構造物底部痕跡と考えられる。SK45で認められた黄色粘土は、この内部構造物を安定させる為、施されたものであろうか。

(藤方)

参考文献

- 出原恵三、泉幸代、浜田恵子、行藤たけし『小籠遺跡Ⅲ』1997年 (財)高知県文化財団埋蔵文化財センター
『多摩ニュータウン遺跡 昭和60年度 (第5分冊)』1987年 (財)東京都埋蔵文化財センター
廣田佳久『上美都岐遺跡』1997年 佐川町教育委員会

写真図版

調査区東遠景



調査区西遠景

調査区南遠景



PL.2



調査区北遠景

試掘調査
掘削風景



調査I区(東)全景

調査 I 区 (西) 全景



I 区 SB1 P9 柱痕

I 区 SB2 P3 柱痕



PL.4

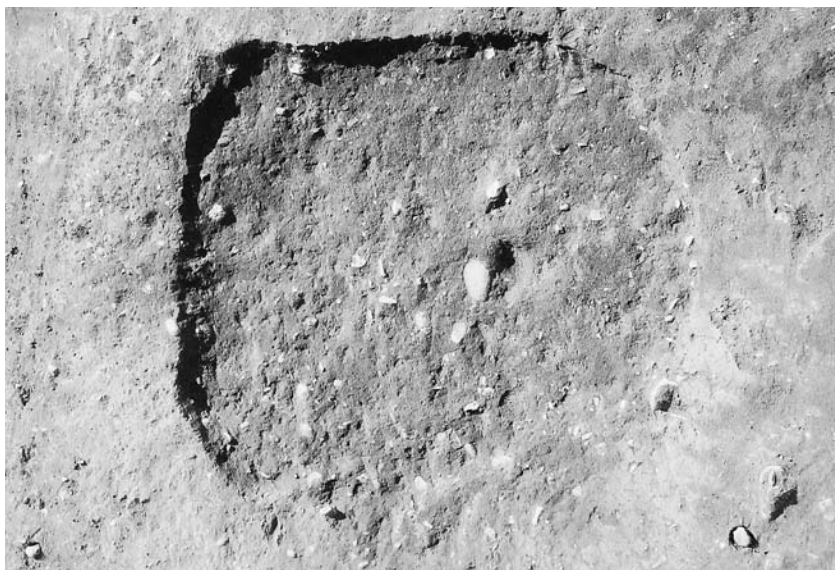


I 区 SK1 完掘状況

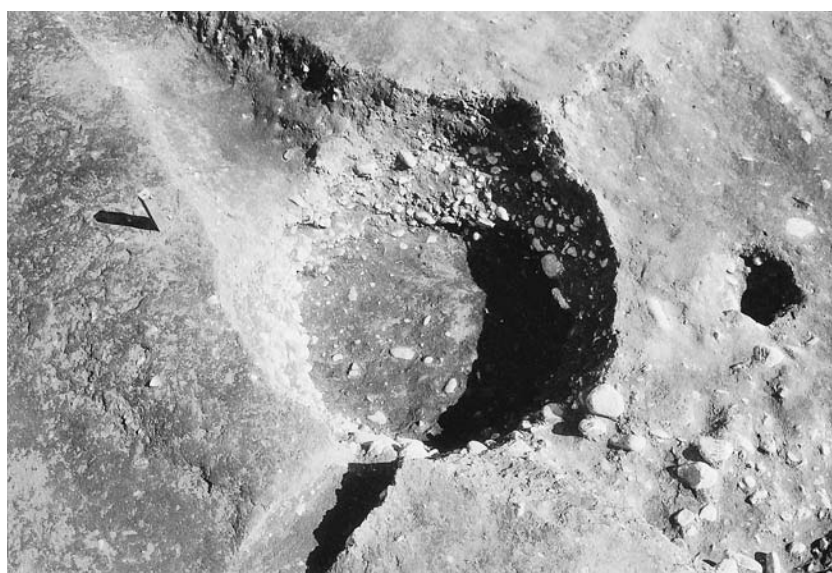
I 区 SK2 完掘状況



I 区 SK3 完掘状況



I区 SK5 半截状况



I区 SK5 完掘状况

I区 SK6
土師質土器小皿出土状况



PL.6



I区 SK7 半截状況

I区 SK8 完掘状況



I区 SK11
石組み検出状況（南から）

I区 SK11
石組み検出状況（俯瞰）



I区 SK11
銅銭出土状況

I区 SK11 完掘状況



PL.8



I 区 SD3 半截狀況

I 区 SD6 遺物出土狀況



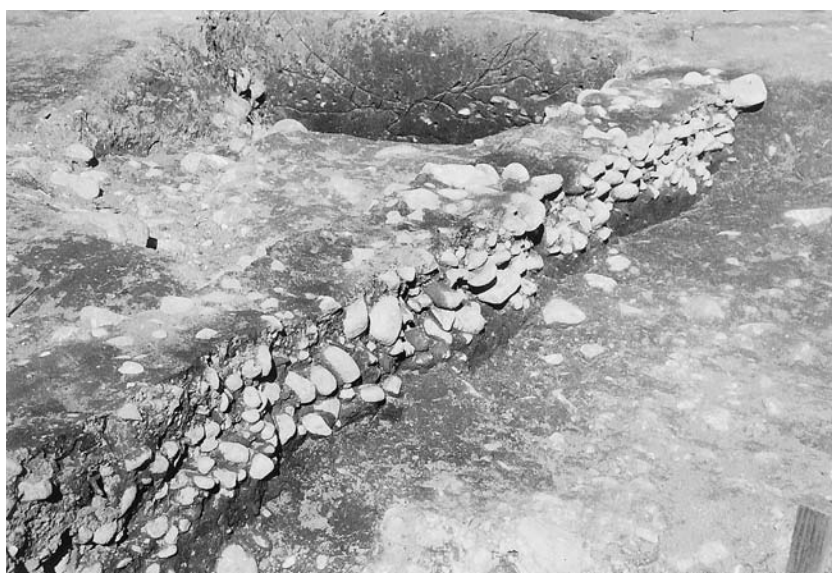
I 区 SX1 完掘狀況

I 区 SX2 半截狀況



I 区 SX3 検出狀況

I 区 SX3 半截狀況



PL.10



I区 SB5 P4
銅銭出土状況

II区
遺構検出状況（東から）



II区
遺構検出状況（西から）

調査Ⅱ区全景（東から）



調査Ⅱ区全景（西から）

Ⅱ区 SB2 P4 柱痕

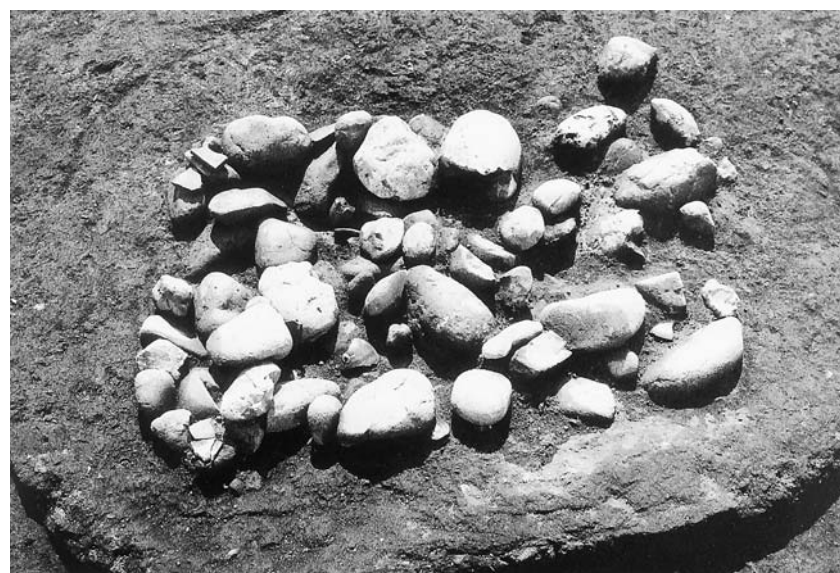


PL.12



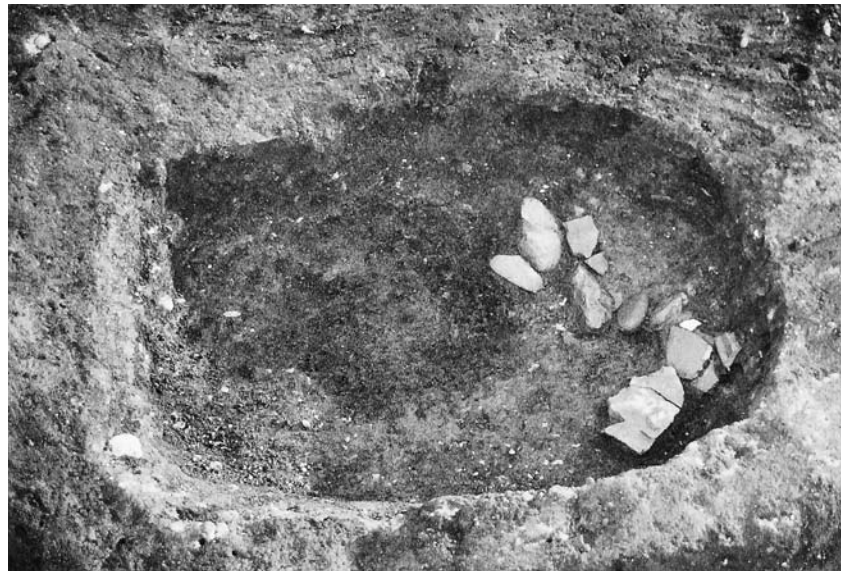
Ⅱ区 SB3 P3 柱痕

Ⅱ区 SB6 P5 柱痕



Ⅱ区 SK1 検出状況

Ⅱ区 SK1 完掘状況



Ⅱ区 SK2 検出状況

Ⅱ区 SK2 完掘状況



PL.14



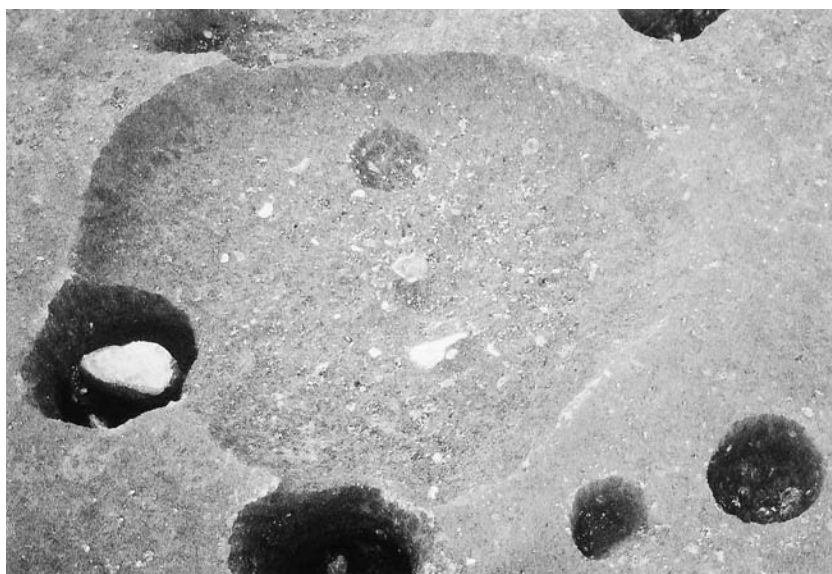
Ⅱ区 SK4 検出状況

Ⅱ区 SK4 完掘状況



Ⅱ区 SK5
キセル（吸口）出土状況

Ⅱ区 SK5 完掘状況

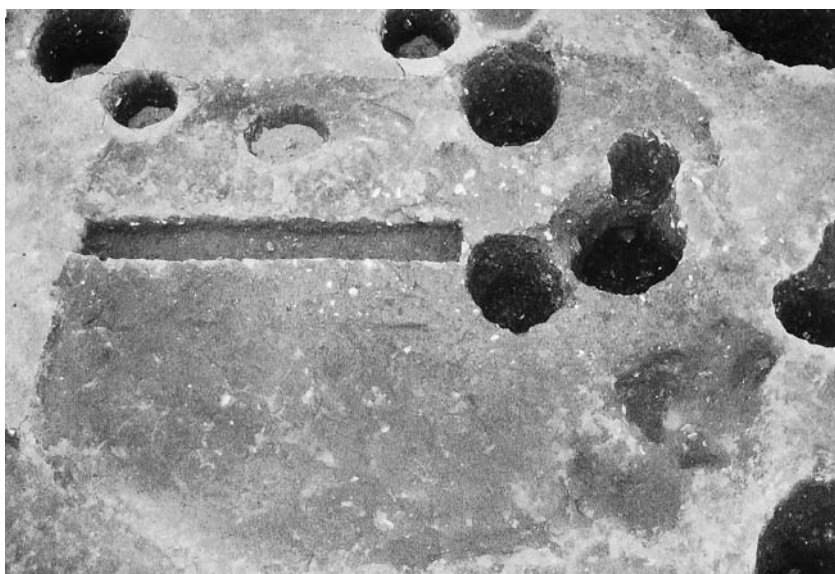


Ⅱ区 SK7 半截状況

Ⅱ区 SK8 完掘状況

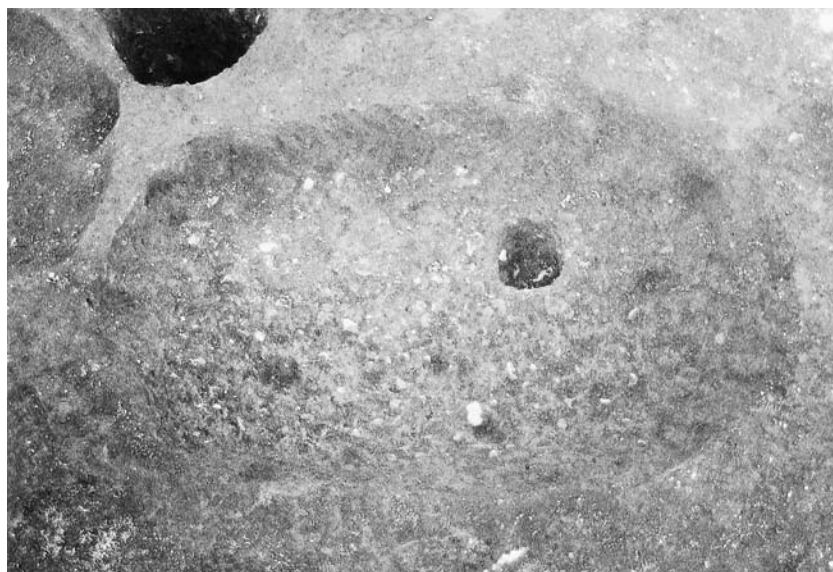


PL.16



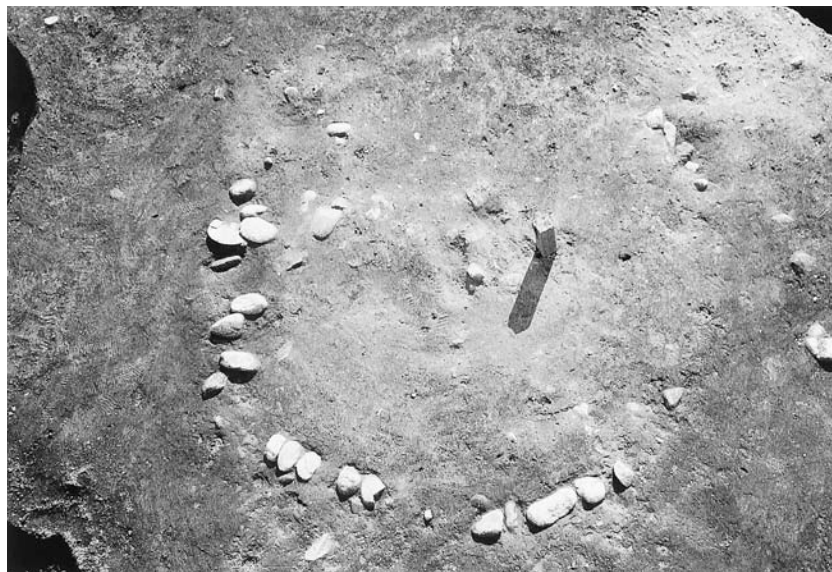
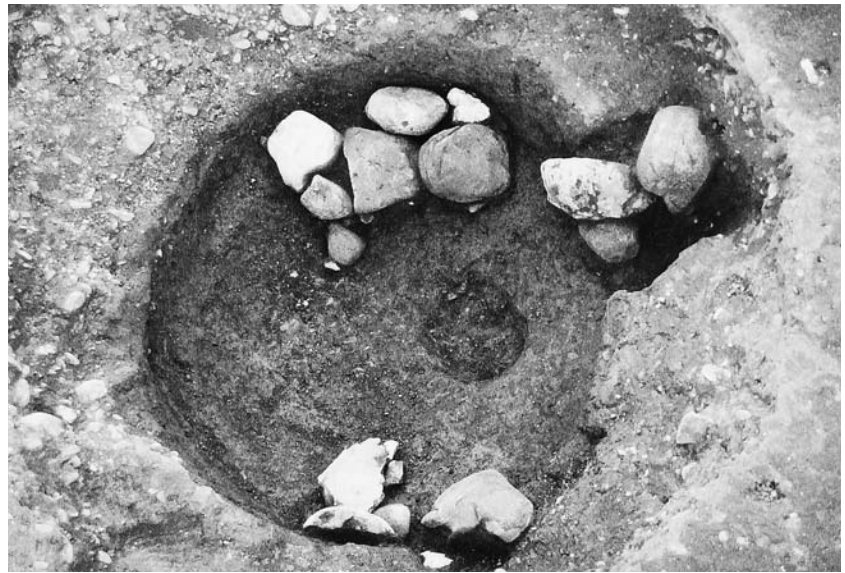
Ⅱ区 SK9 完掘状况

Ⅱ区 SK10 完掘状况



Ⅱ区 SK13 出土状况

Ⅱ区 SK13 完掘状況



Ⅱ区 SK14 検出状況

Ⅱ区 SK14 出土状況



PL.18



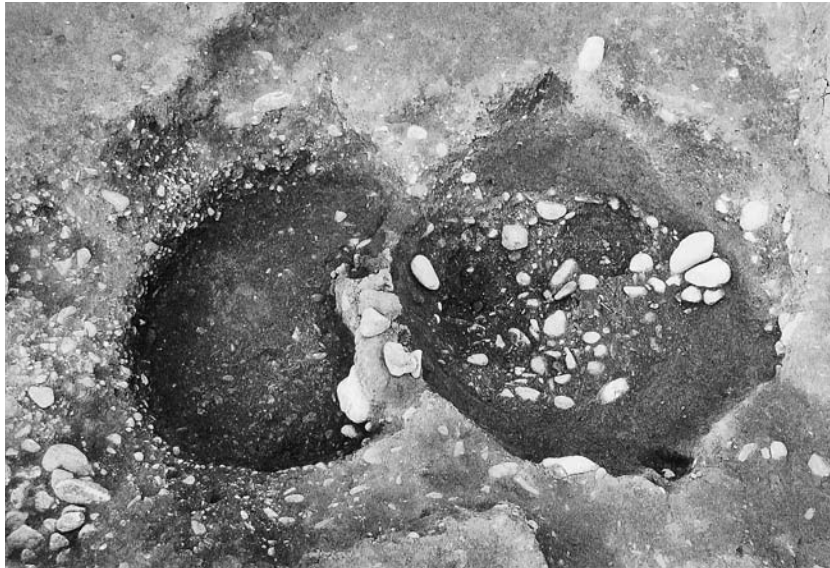
Ⅱ区 SK14 完掘状況

Ⅱ区 SK15 検出状況



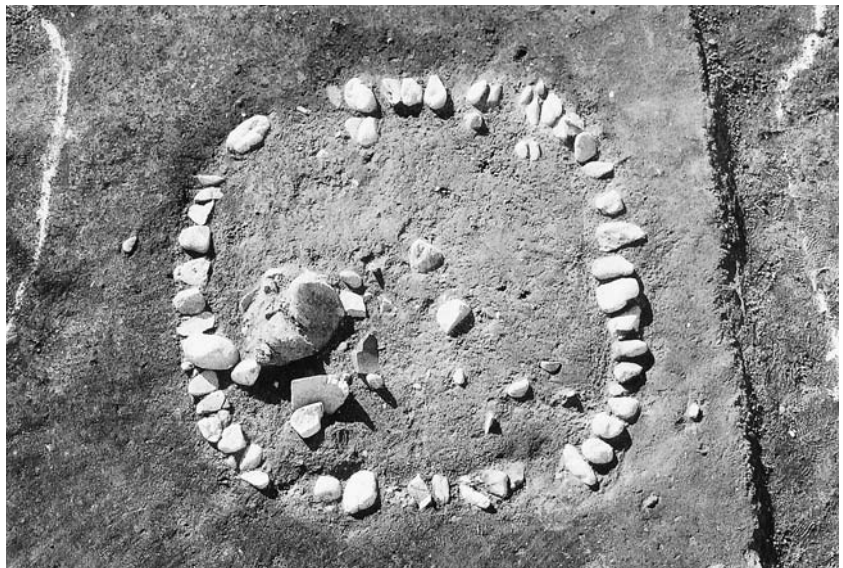
Ⅱ区 SK15 完掘状況

Ⅱ区 SK16 完掘状況

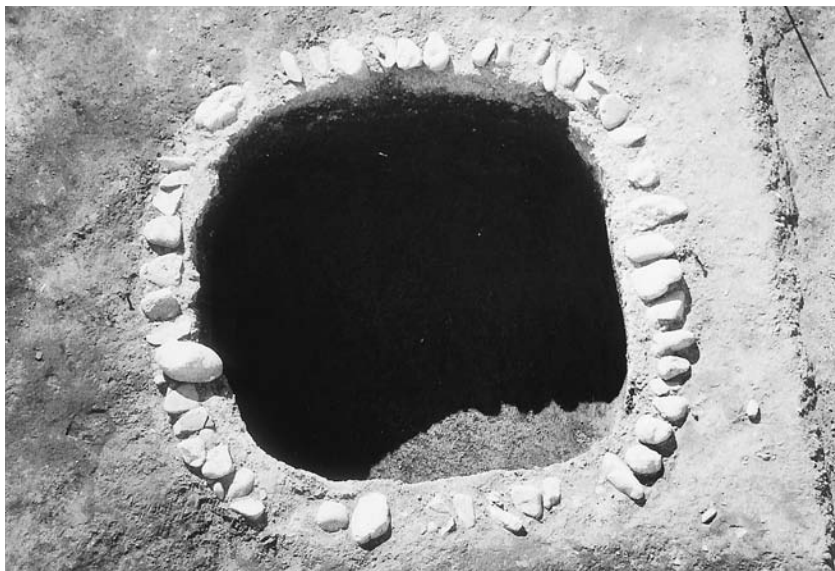


Ⅱ区
SK16 (右) ・SK16-2 (左)
完掘状況

Ⅱ区 SK17 検出状況

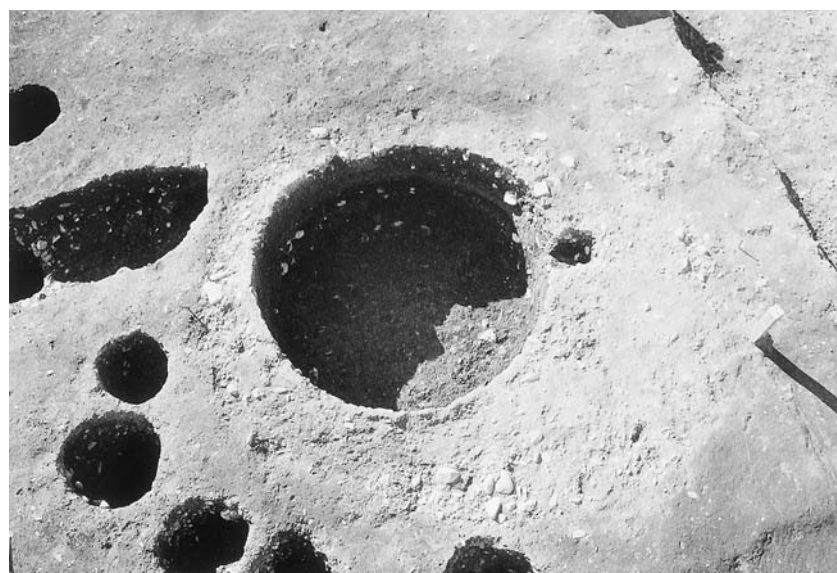
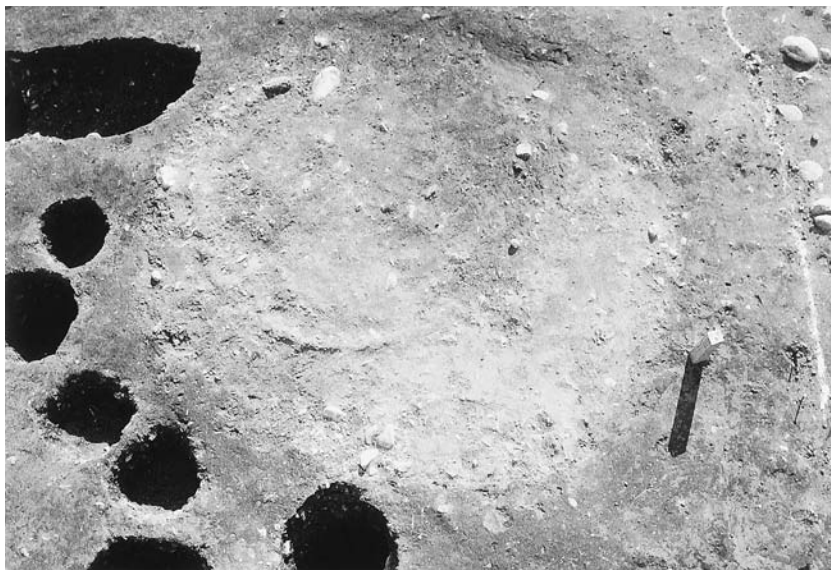


PL.20



Ⅱ区 SK17 完掘状況

Ⅱ区 SK18 検出状況



Ⅱ区 SK18 完掘状況

Ⅱ区 SK18 黄色土粹



Ⅱ区 SK18
黄色土粹背後
掘り方埋積状況

Ⅱ区 SK18
掘り方完掘状況



PL.22



Ⅱ区 SK19
鉄製品
出土状況

Ⅱ区 SK20
鉄製品
出土状況



Ⅱ区 SK19 (右)
SK20 (左)
完掘状況

Ⅱ区 SK21 完掘状况



Ⅱ区 SK23 完掘状况

Ⅱ区 SK24 出土状况



PL.24



Ⅱ区 SK25 完掘状况

Ⅱ区 SK27 完掘状况



Ⅱ区 SK28 完掘状况

Ⅱ区 SK29 半截狀況

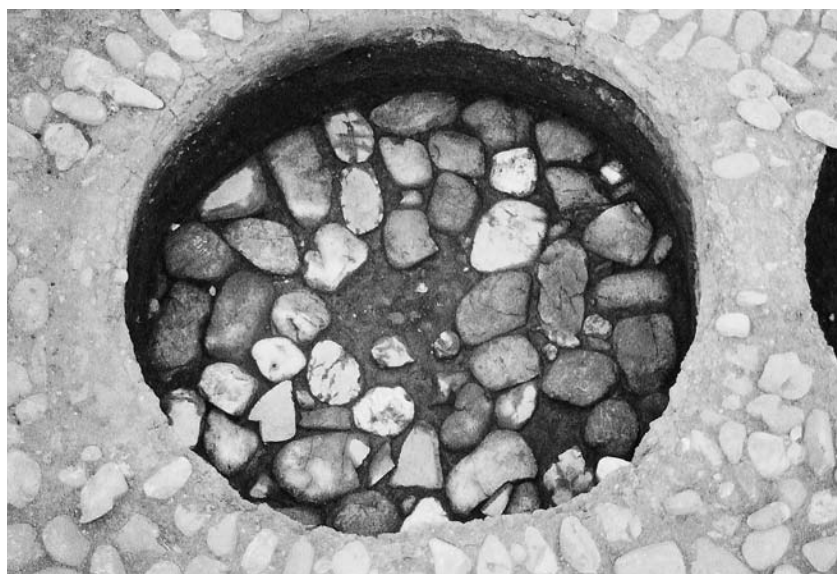


Ⅱ区 SK31 (手前) ・ SK32 (奥)
検出状況

Ⅱ区 SK31
石臼
出土状況



PL.26



Ⅱ区 SK31 完掘状況

Ⅱ区 SK32 完掘状況



Ⅱ区 SK33 ·
SK33-2 · SK33-3
検出状況

Ⅱ区 SK33 完掘状况

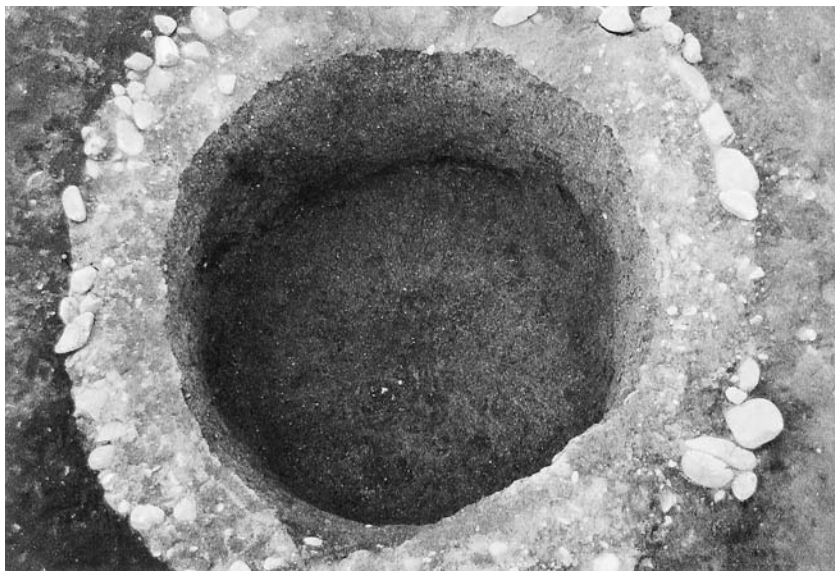


Ⅱ区 SK34 完掘状况

Ⅱ区 SK35
木片
出土状况



PL.28



Ⅱ区 SK35 完掘状况

Ⅱ区 SK36 完掘状况



Ⅱ区 SK38 完掘状况

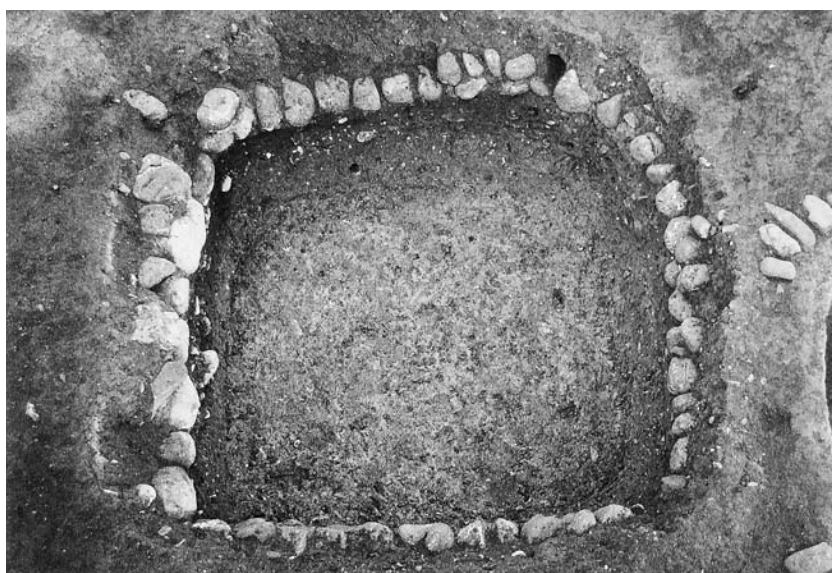


Ⅱ区 SK39 完掘状况



Ⅱ区 SK40 出土状况

Ⅱ区 SK40 完掘状况



PL.30



Ⅱ区 SK41 完掘状況

Ⅱ区 SK44 完掘状況



Ⅱ区 SK45 (右) ·
SK46 (左)
完掘状況

Ⅱ区 SK45
底部小溝
検出状況

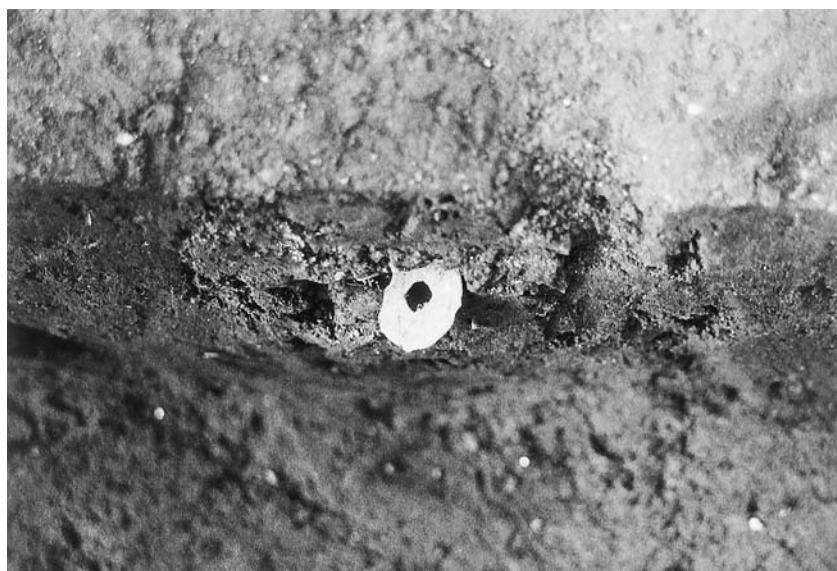


Ⅱ区 SK45
黄色粘土による壁
残存状況

Ⅱ区 SK46 完掘状況



PL.32



Ⅱ区 SK47
銅錢出土狀況

Ⅱ区 SK48
陶器 (碗)
出土狀況



Ⅱ区 SK50 完掘狀況

Ⅱ区 SK51 出土状况

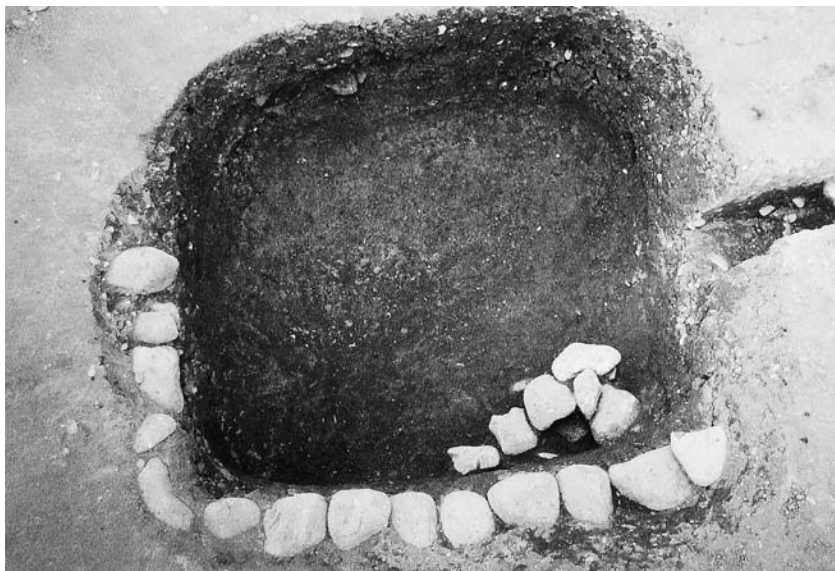


Ⅱ区 SK51 完掘状况

Ⅱ区 SK54 完掘状况



PL.34



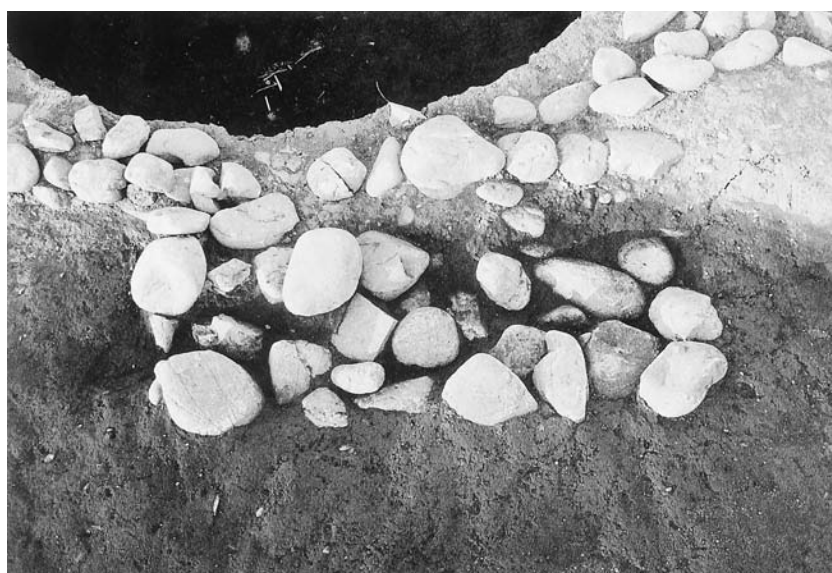
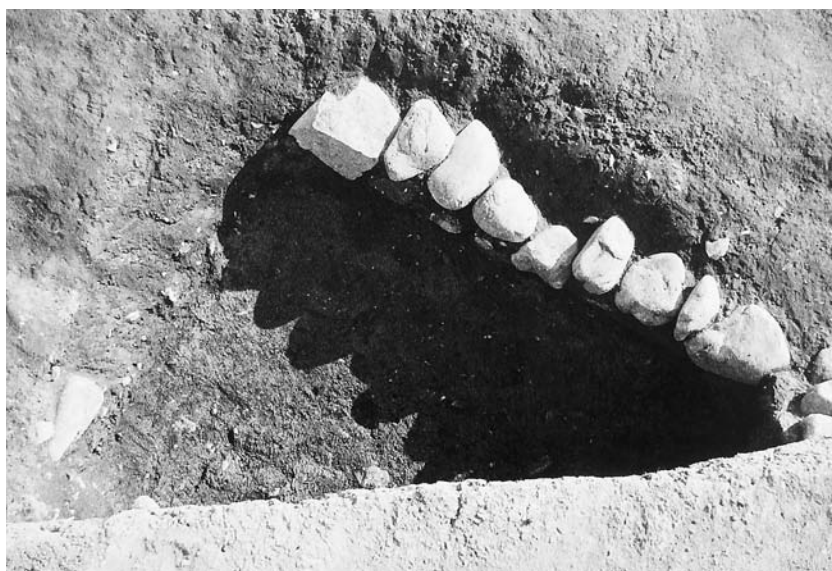
Ⅱ区 SK59 完掘状況

Ⅱ区 SK62 完掘状況



Ⅱ区 SK65 完掘状況

Ⅱ区 SK66 完掘状況



Ⅱ区 SK69 検出状況

Ⅱ区 SK75 半截状況





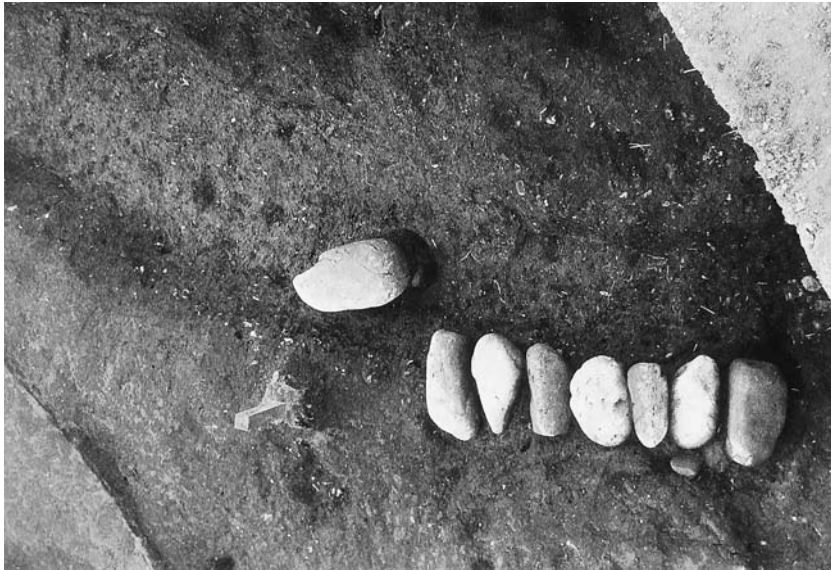
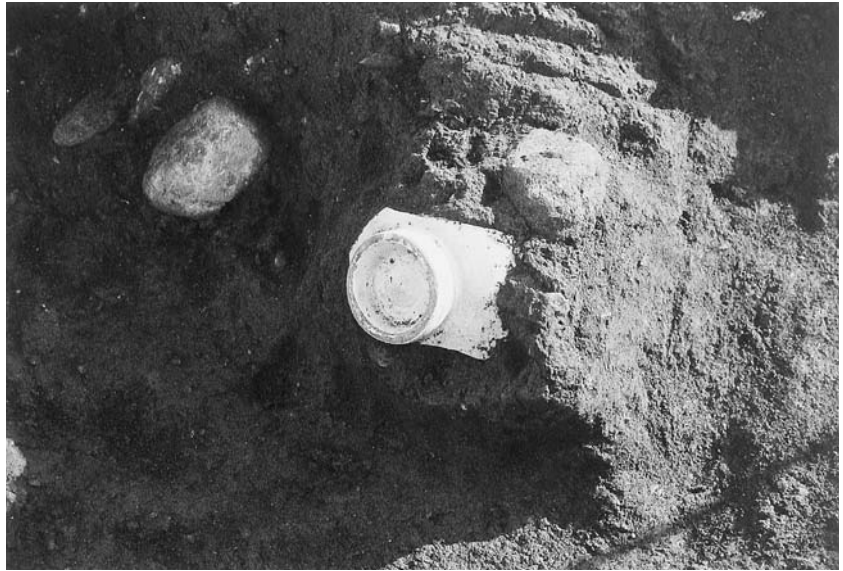
Ⅱ区 SD1
陶器（汁次）
出土状況

Ⅱ区 SD1 遺物出土状況



Ⅱ区 SD1 半截状況

Ⅱ区 SD5
陶器（碗）
出土状況



Ⅱ区 SD11
（北）完掘状況

Ⅱ区 SX2 半截状況



PL.38



Ⅱ区 SX3 完掘状況

Ⅱ区 SX5 完掘状況



Ⅱ区 SX7 完掘状況

Ⅱ区 SX9 完掘状況



Ⅱ区 SX15 半截状況

Ⅱ区 P33 検出状況



PL.40



検査Ⅲ区（南西）全景

Ⅲ区 SK1 検出状況



Ⅲ区 SK1 完掘状況

Ⅲ区 SK2 検出状況



Ⅲ区 SK2 半截状況

Ⅲ区 SK4 完掘状況



PL.42



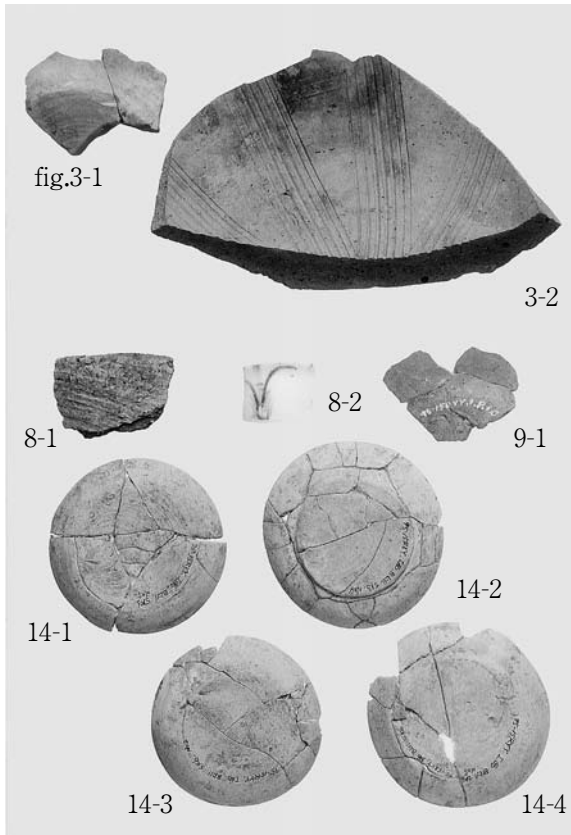
Ⅲ区 SX1 半截状况

Ⅲ区 SX3 半截状况

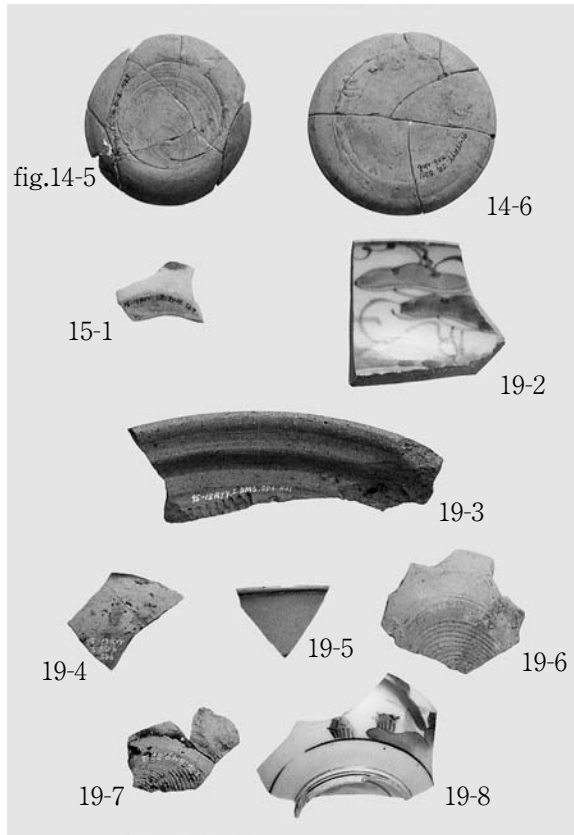


Ⅲ区 SX6 半截状况

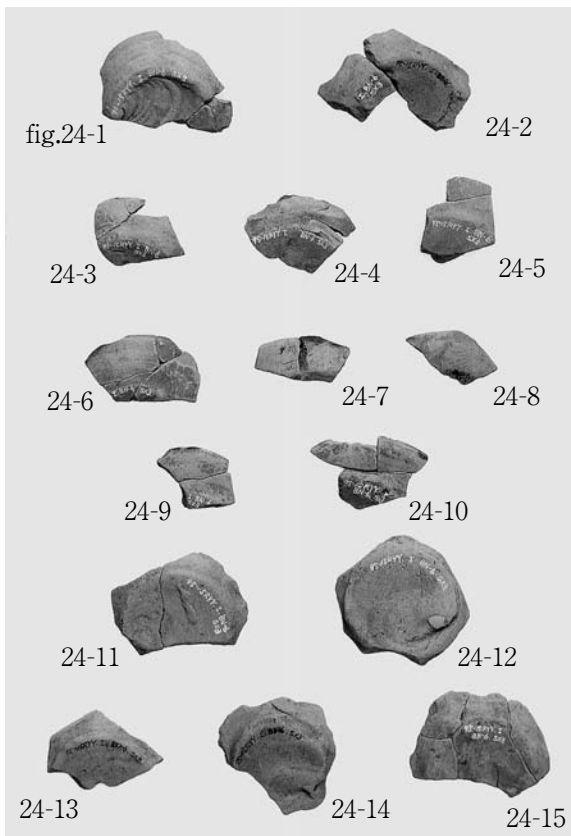
A



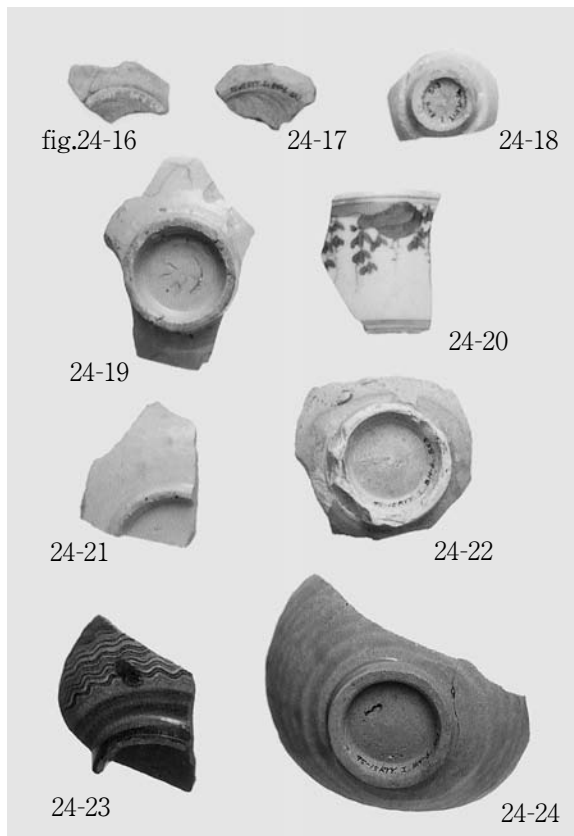
B



C

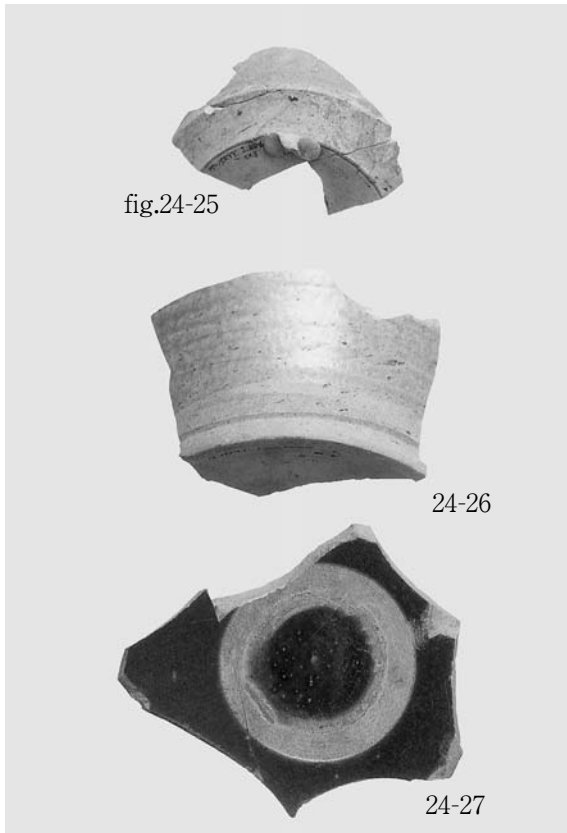


D

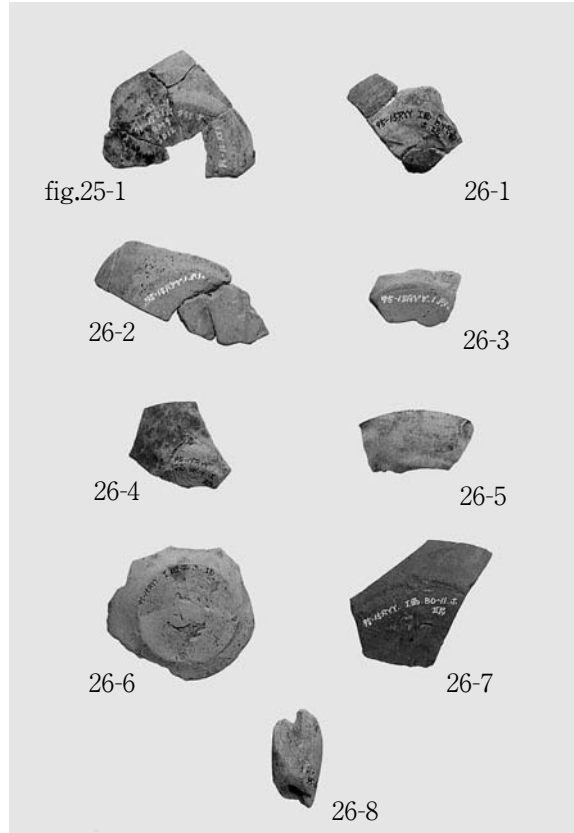


調査 I 区出土遺物 (その1)

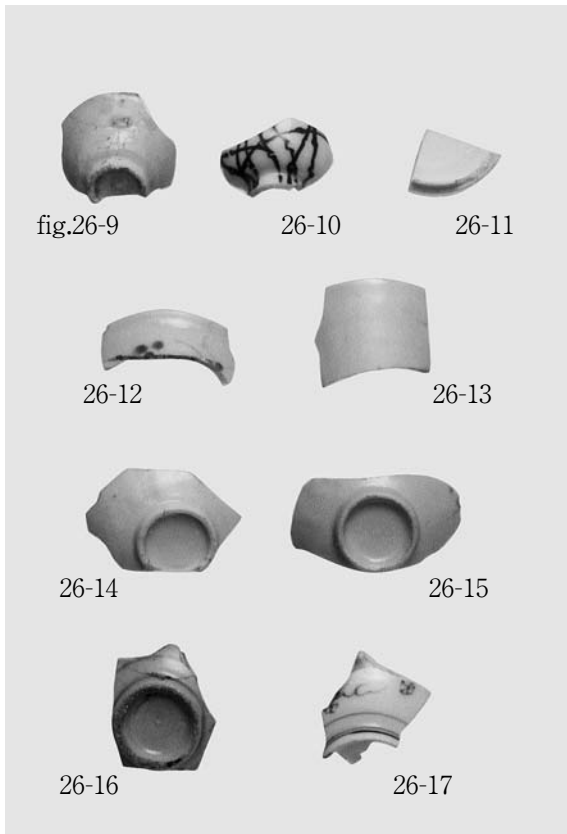
A



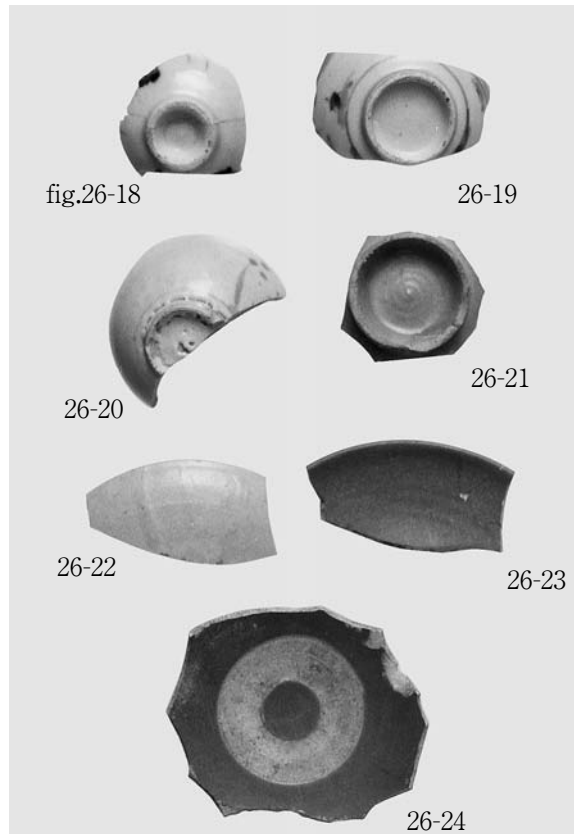
B



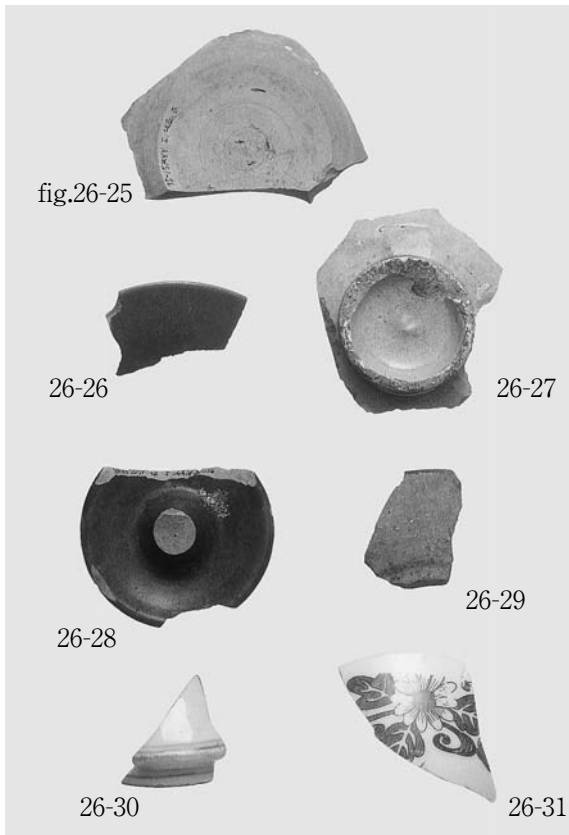
C



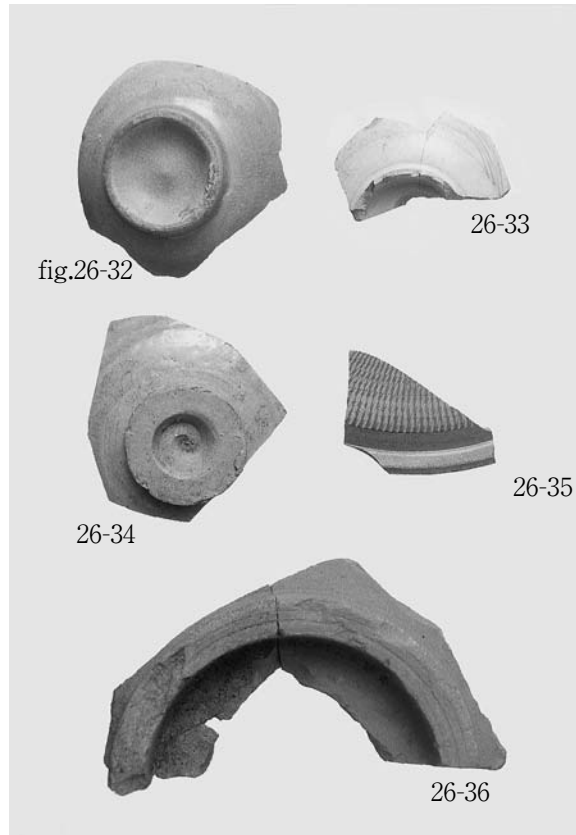
D



A



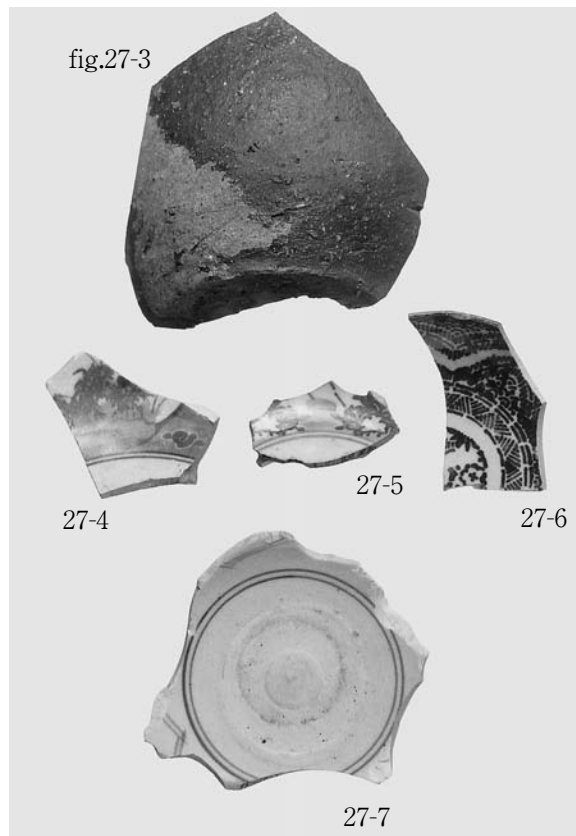
B



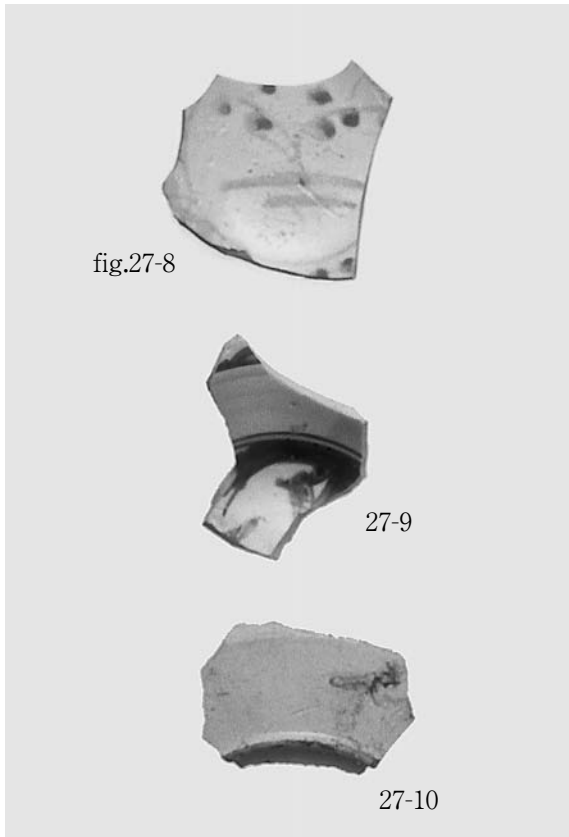
C



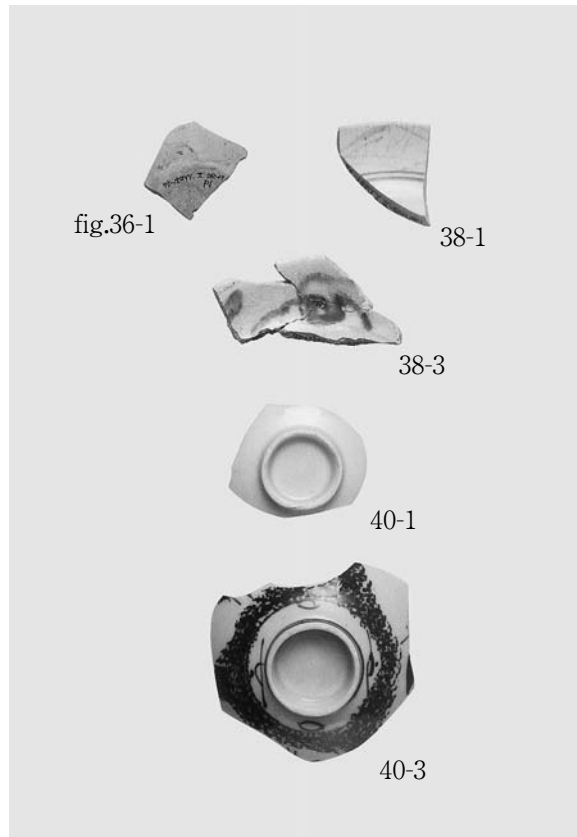
D



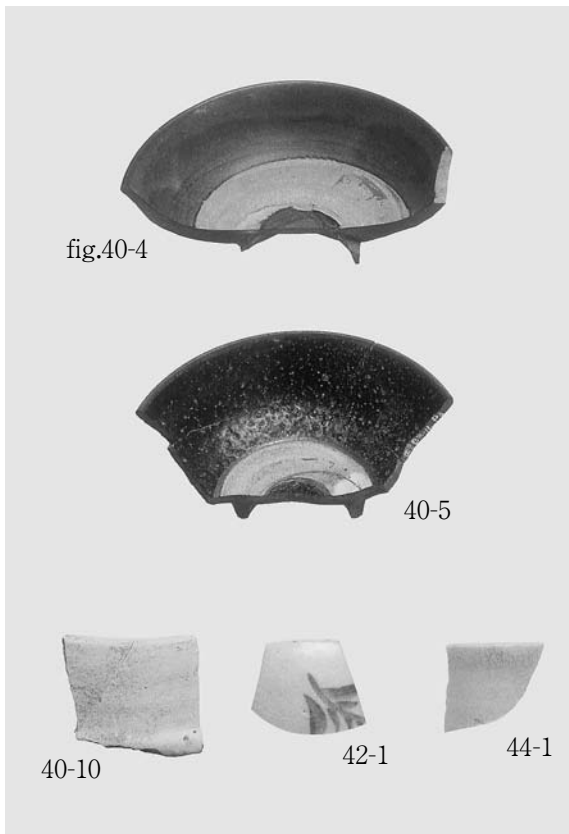
A



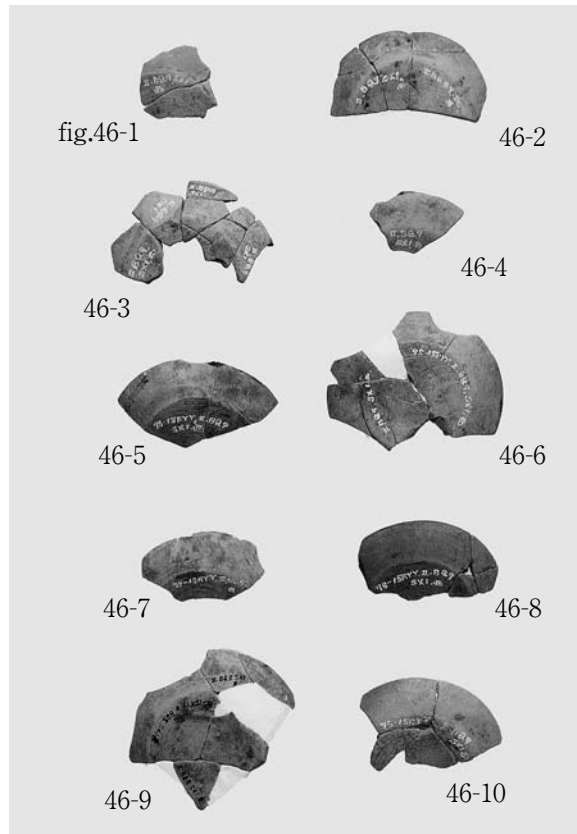
B



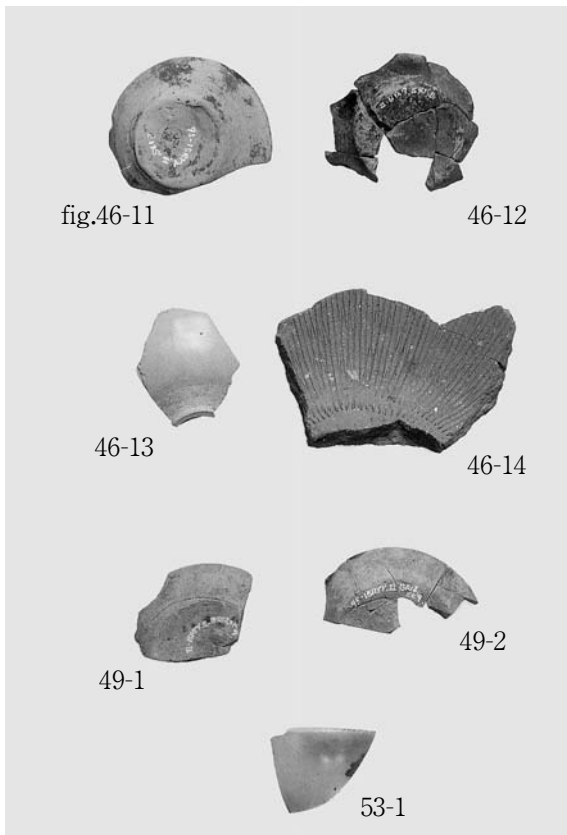
C



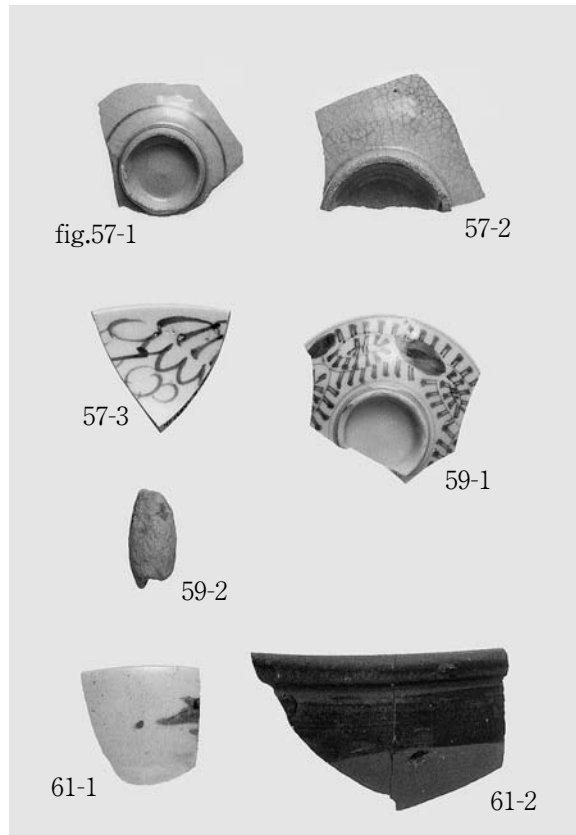
D



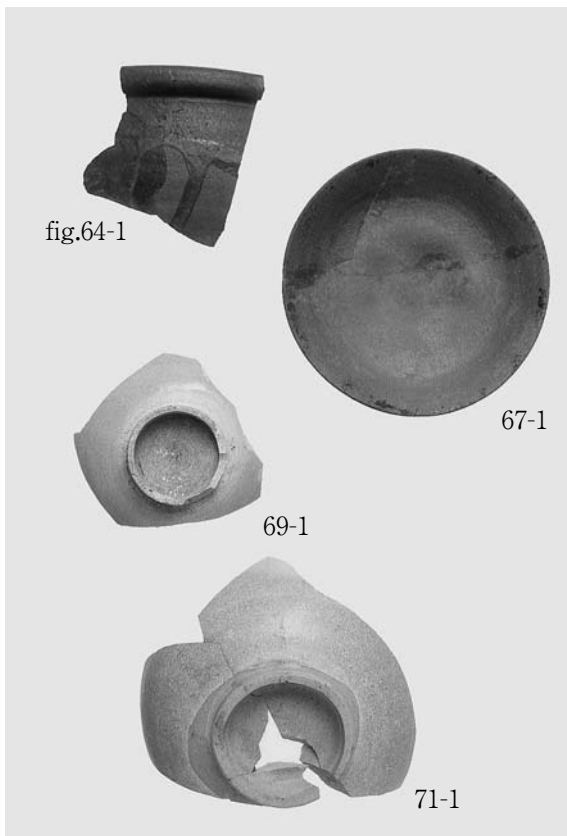
A



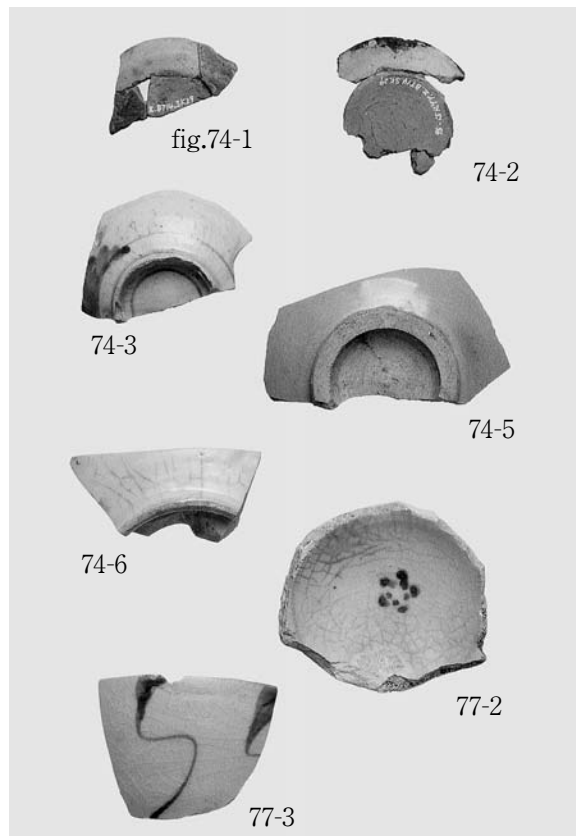
B



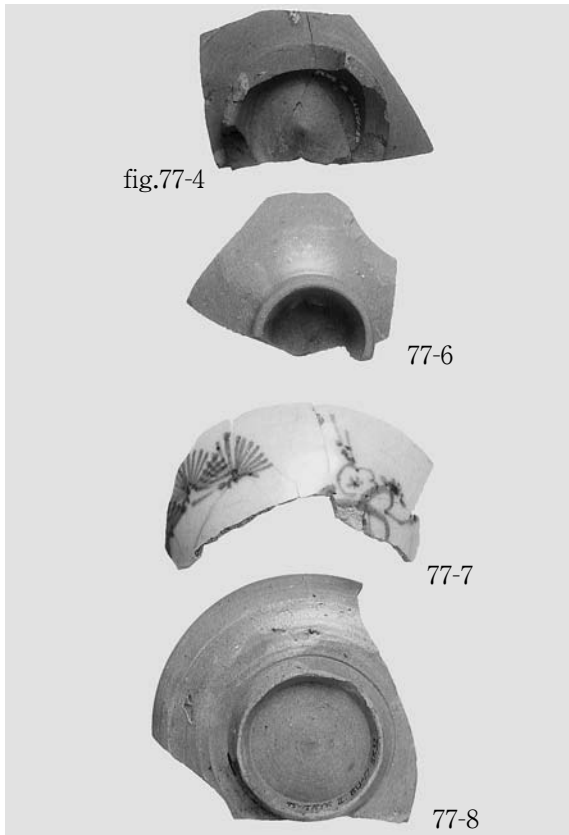
C



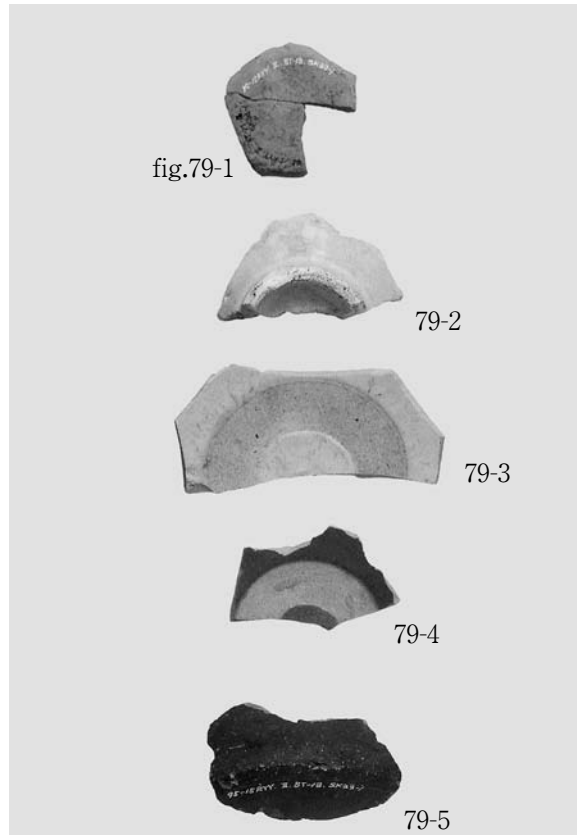
D



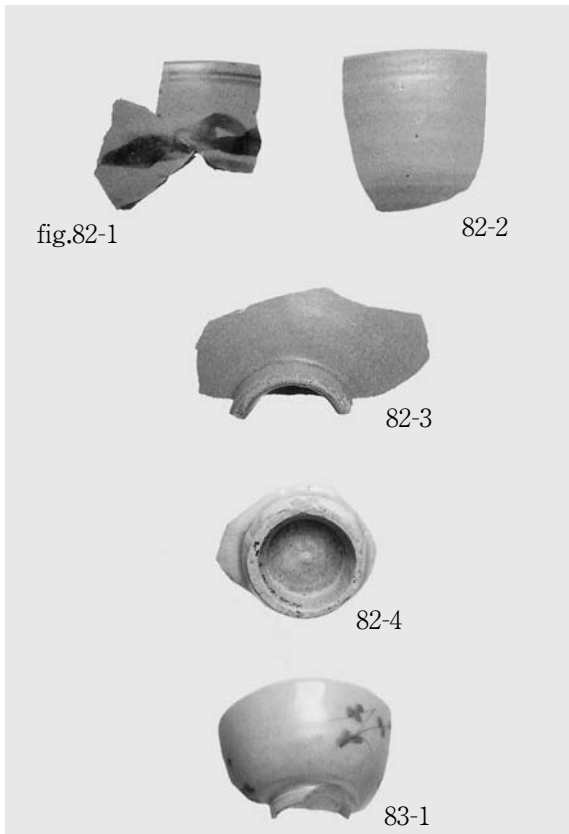
A



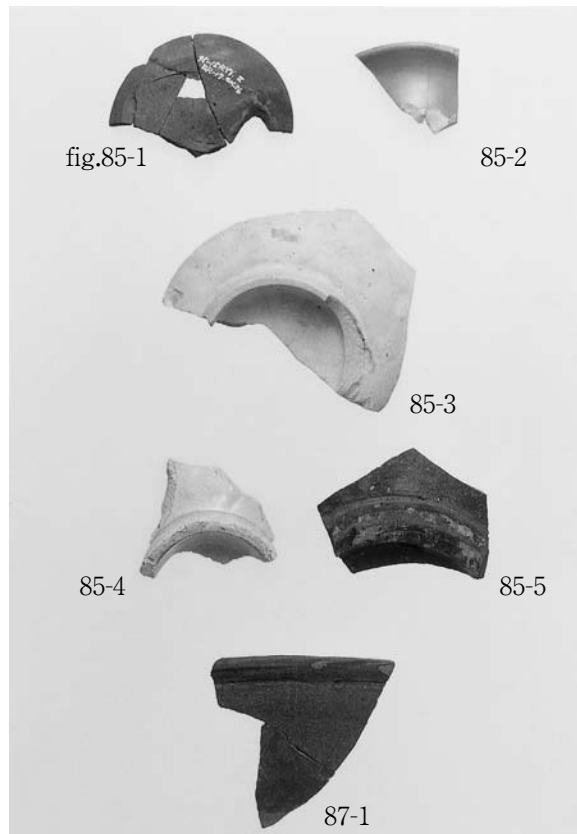
B



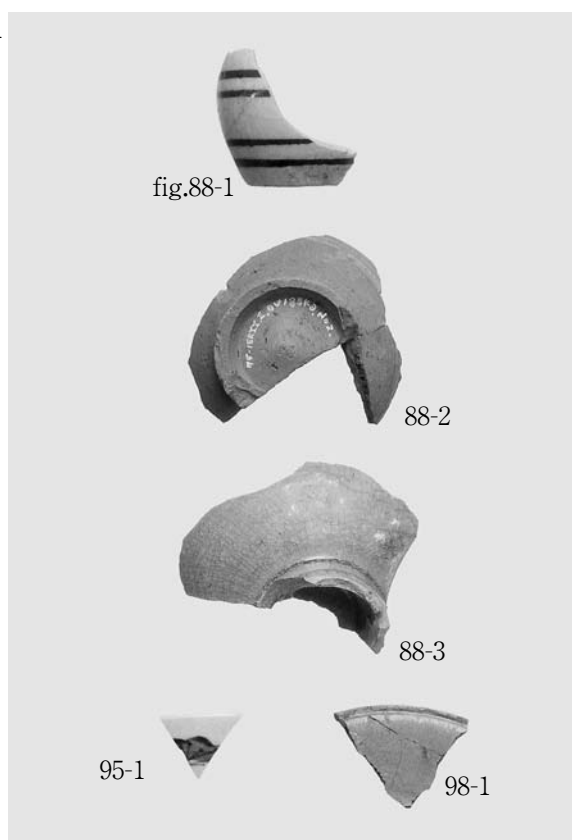
C



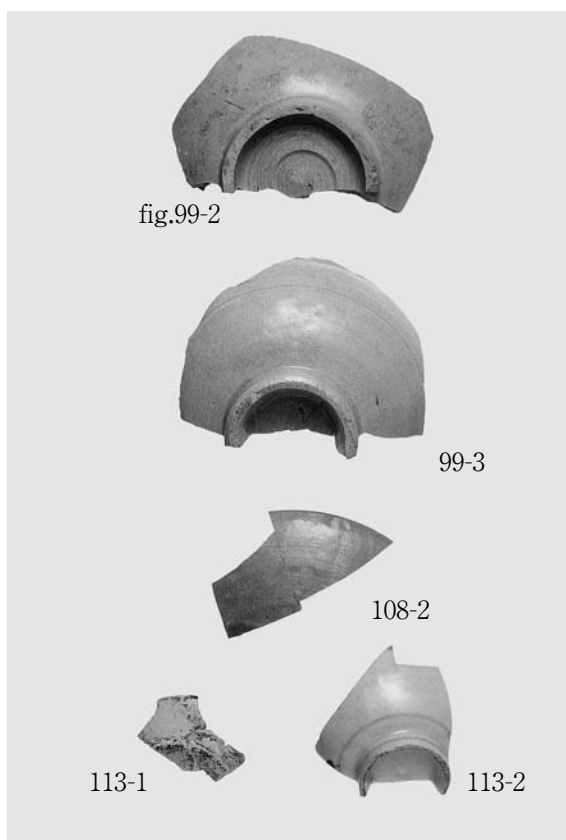
D



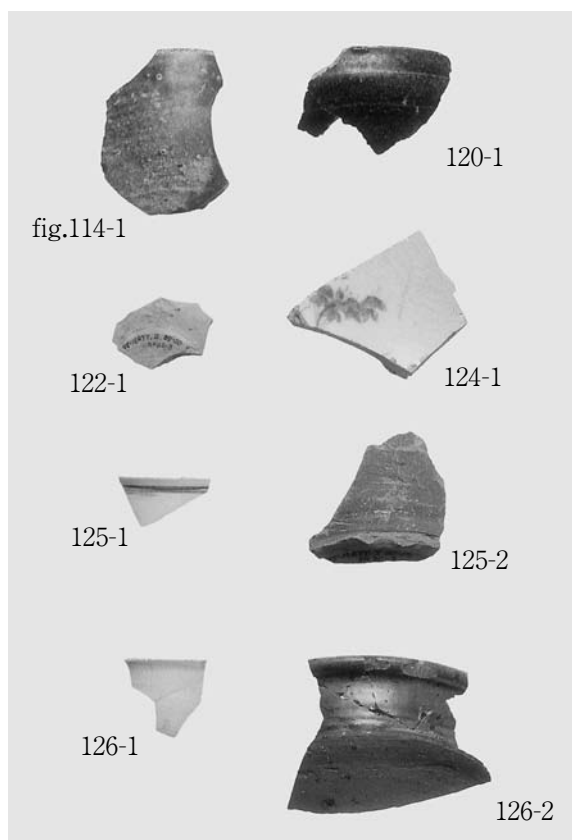
A



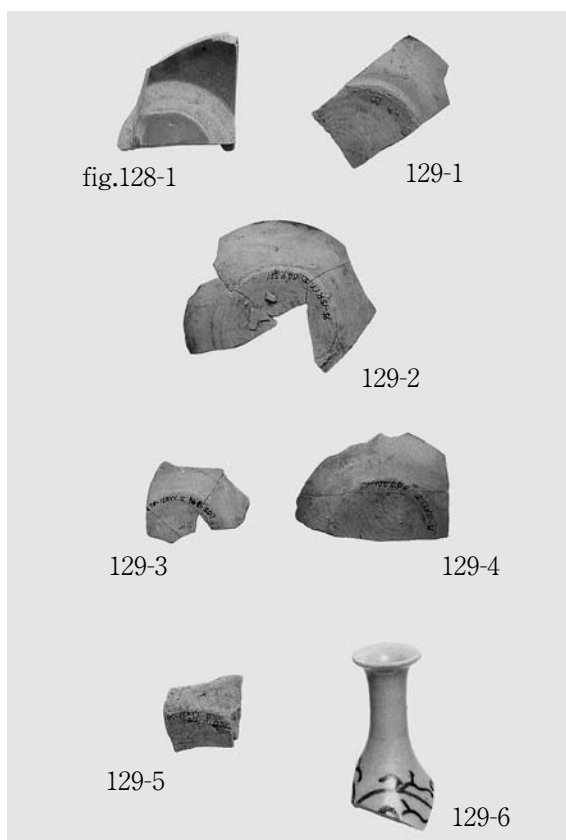
B



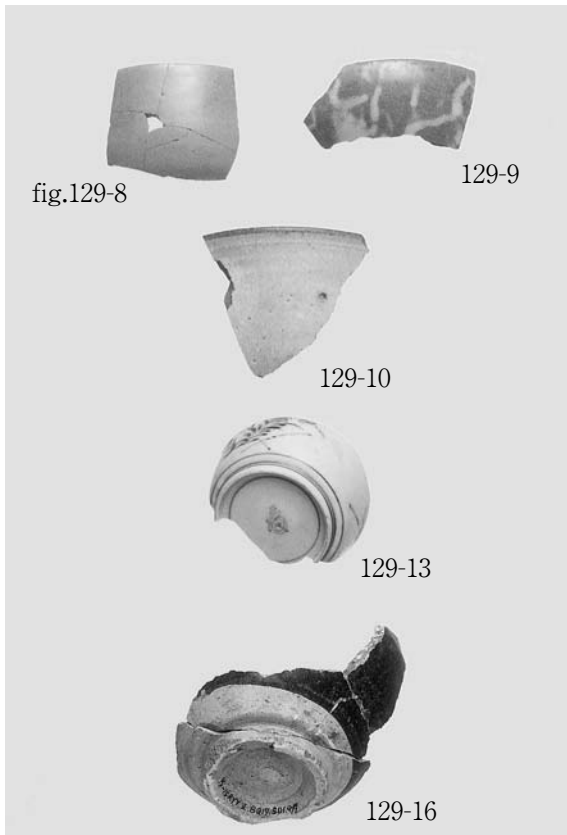
C



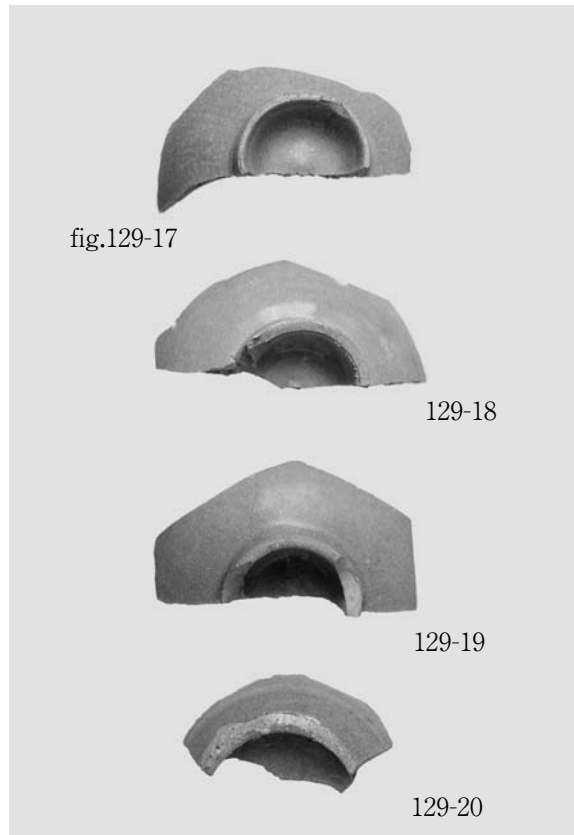
D



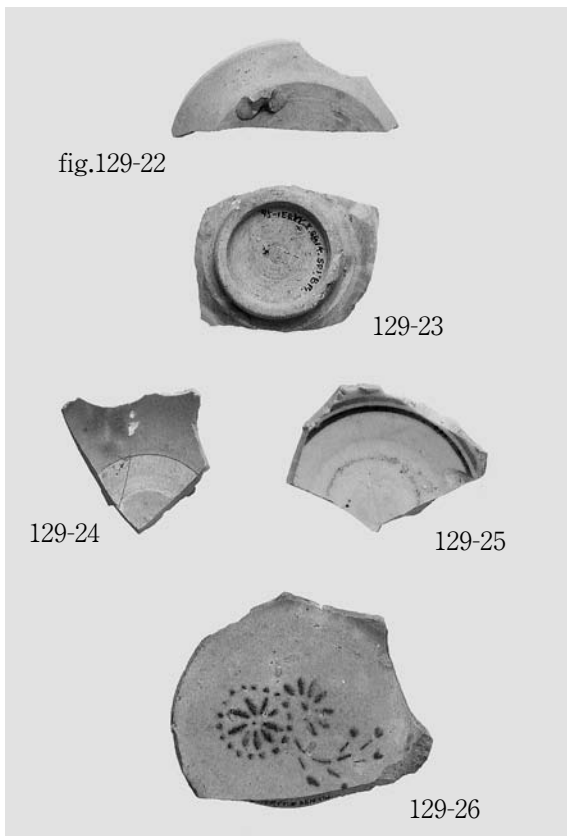
A



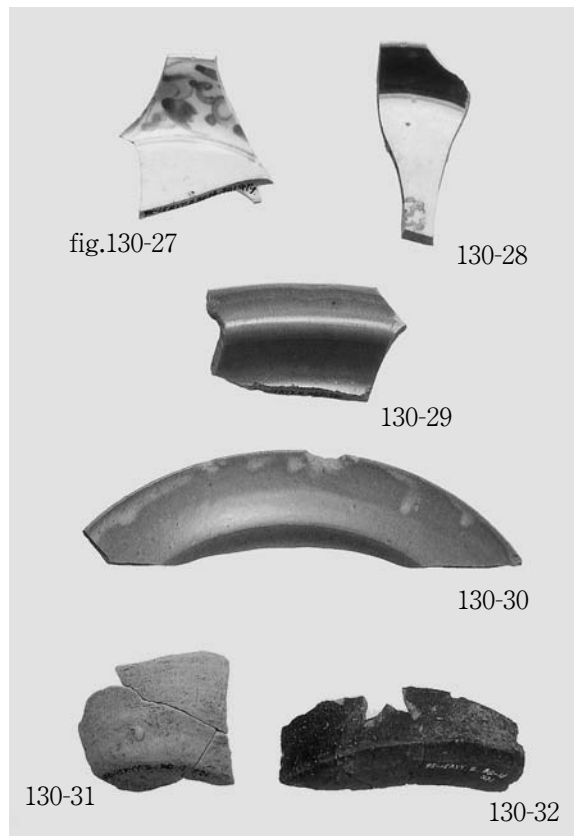
B



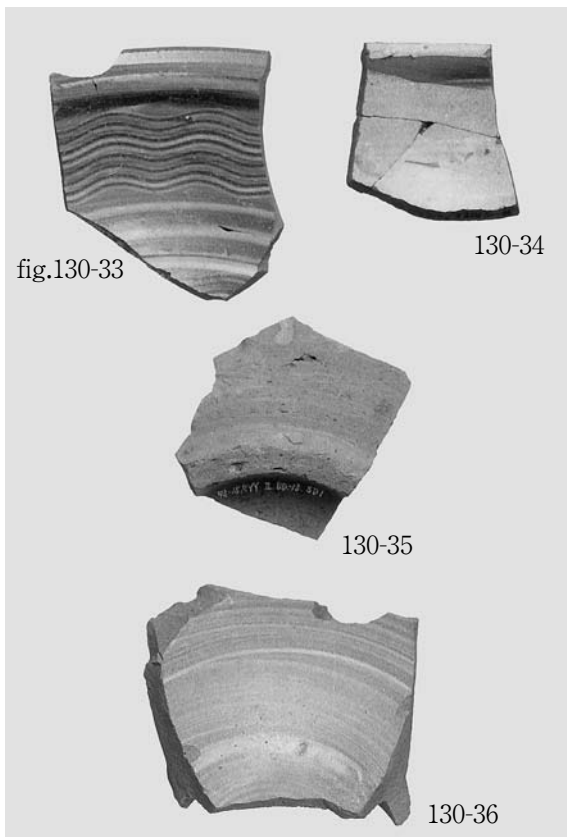
C



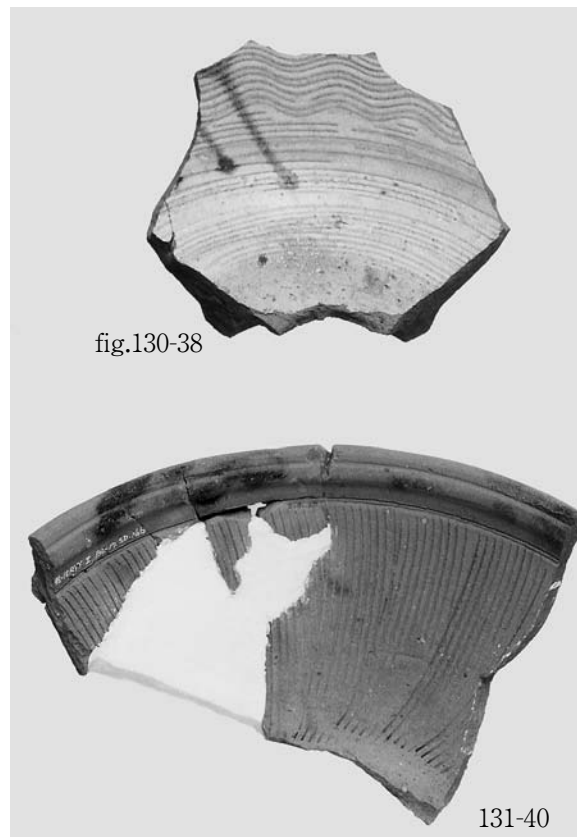
D



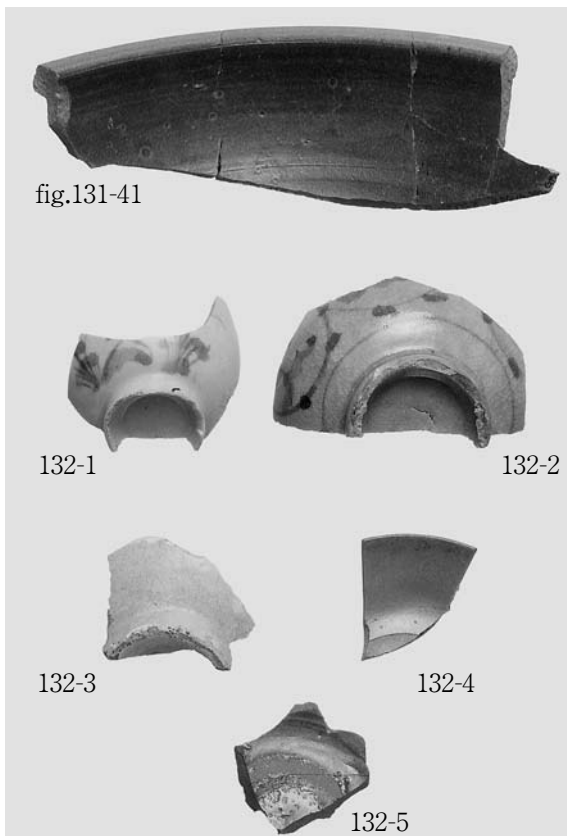
A



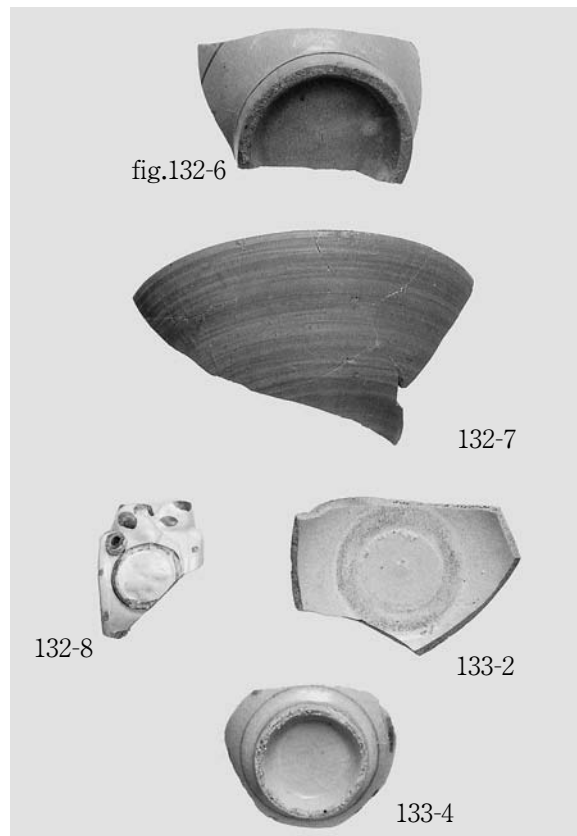
B



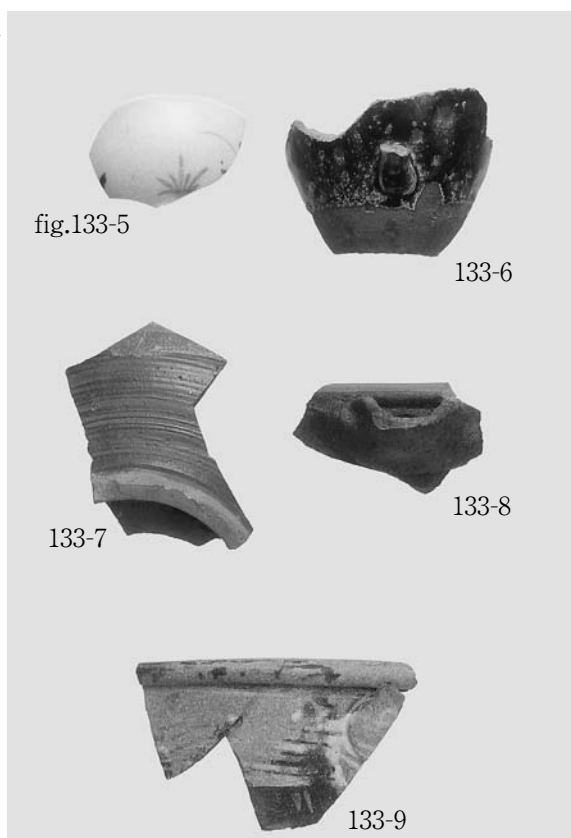
C



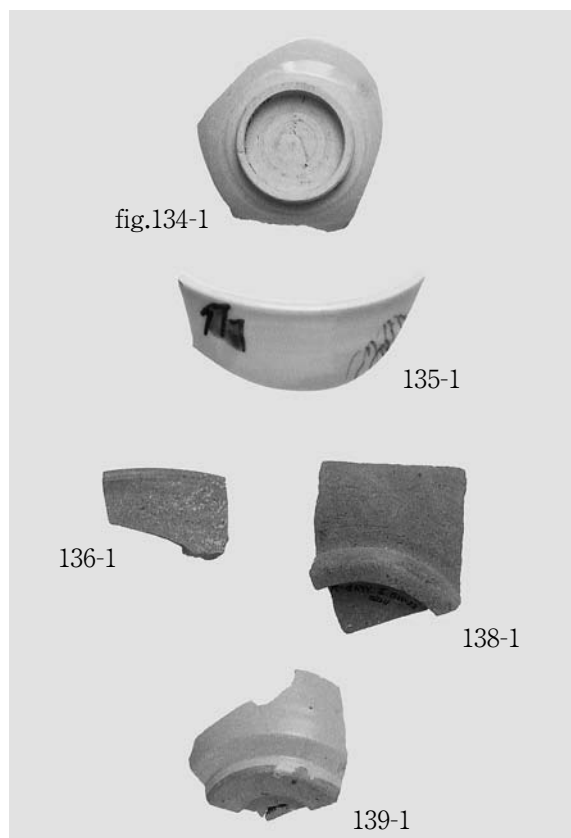
D



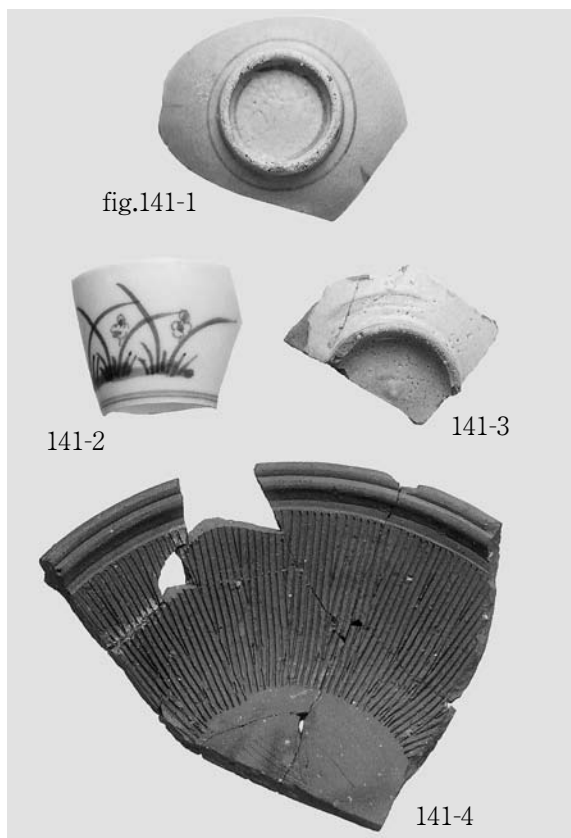
A



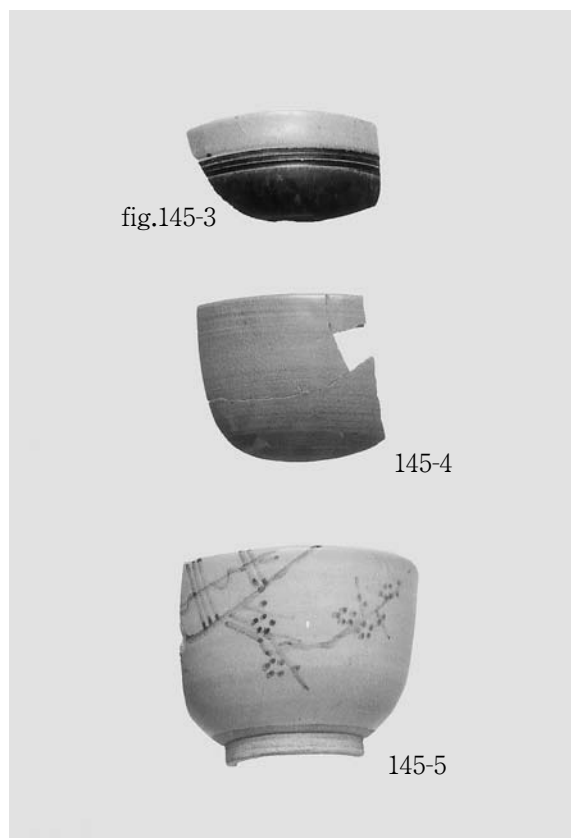
B



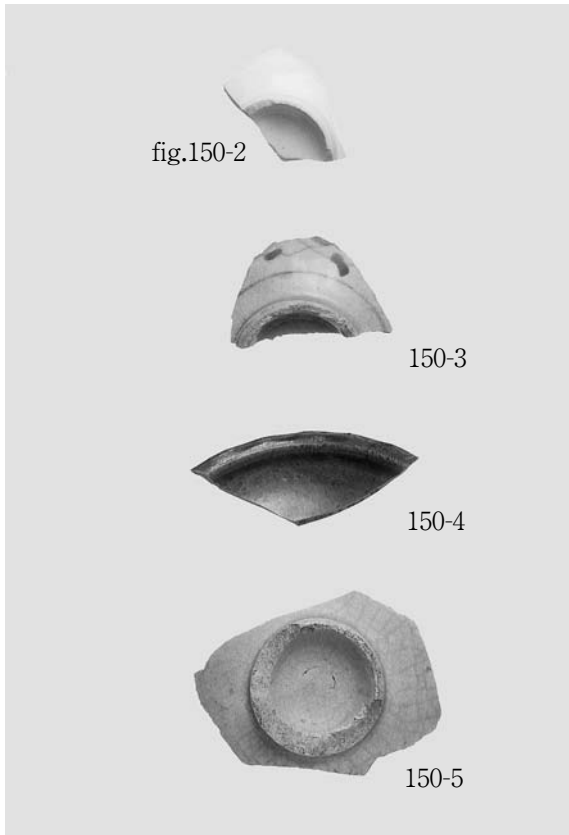
C



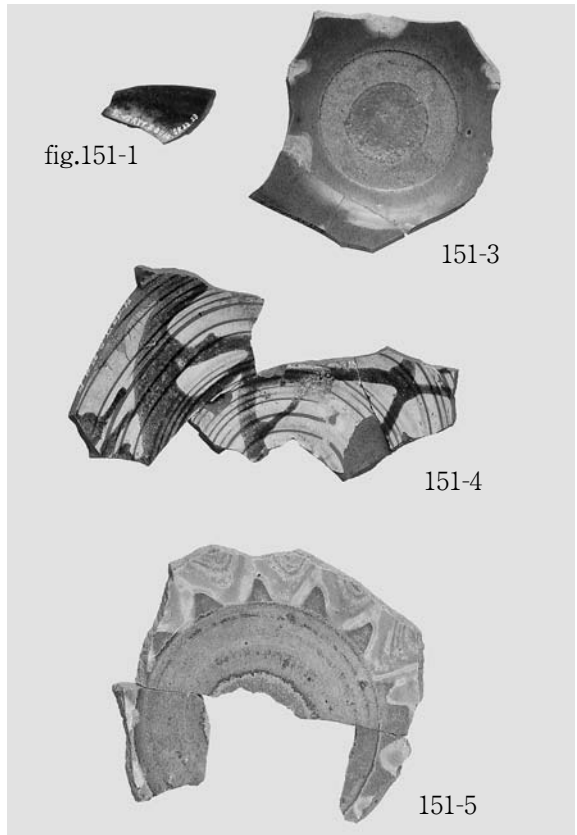
D



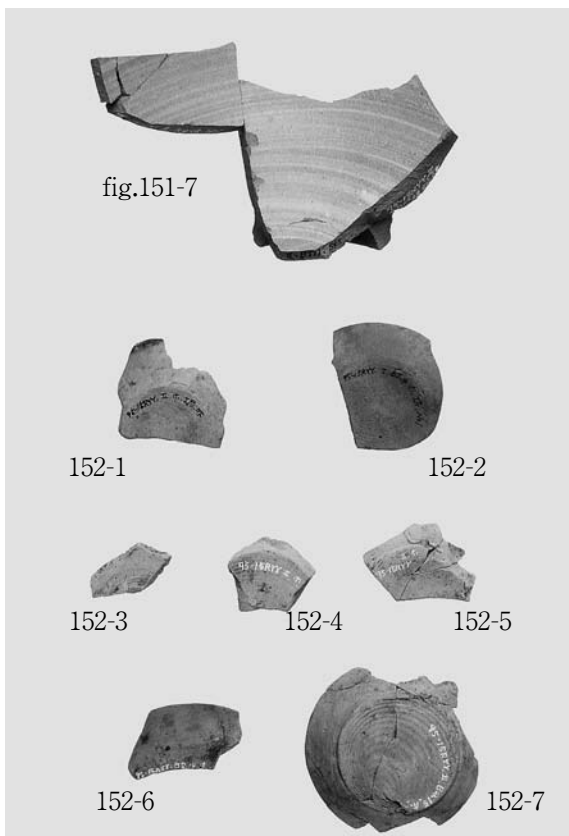
A



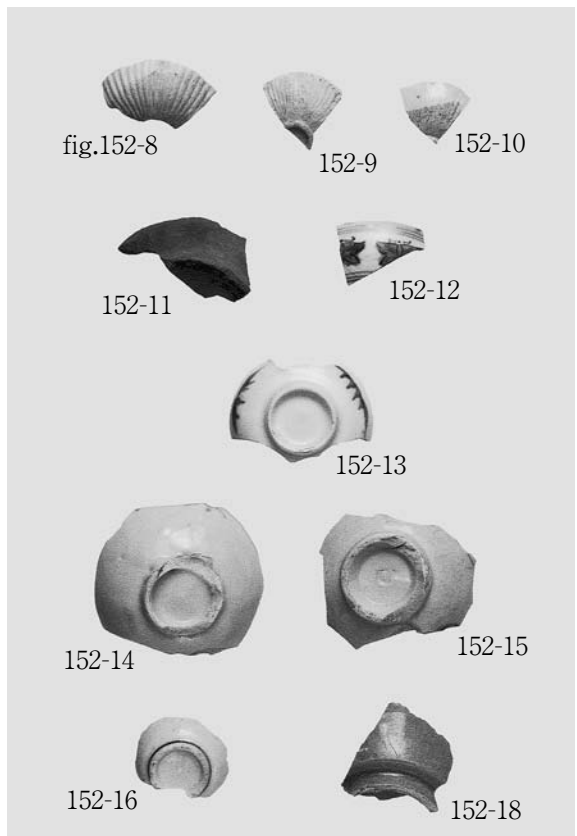
B



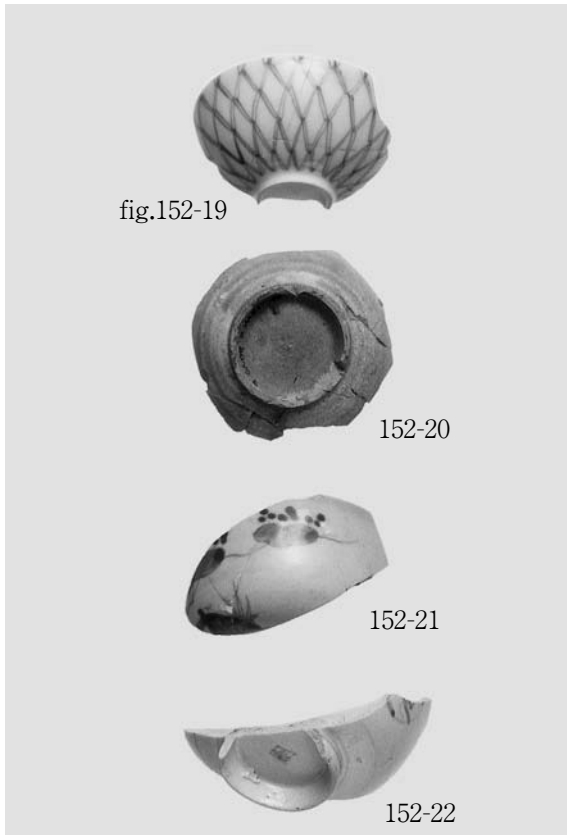
C



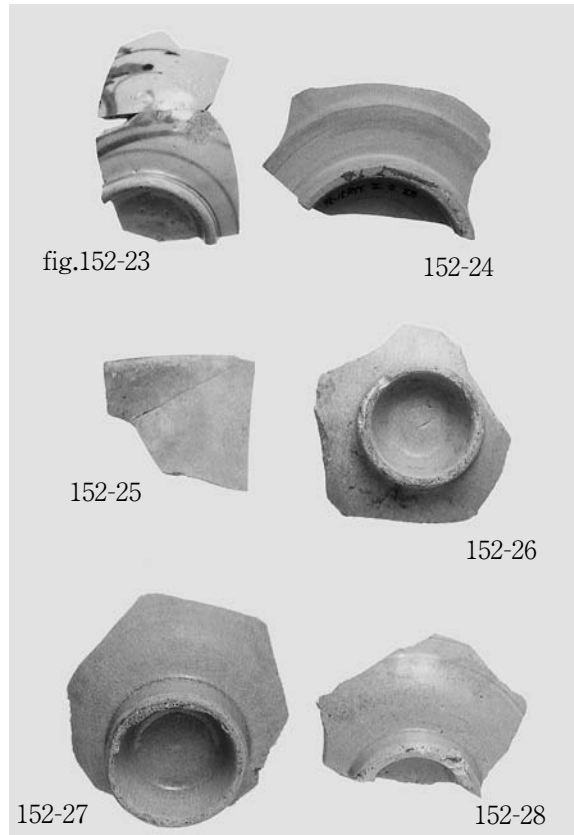
D



A



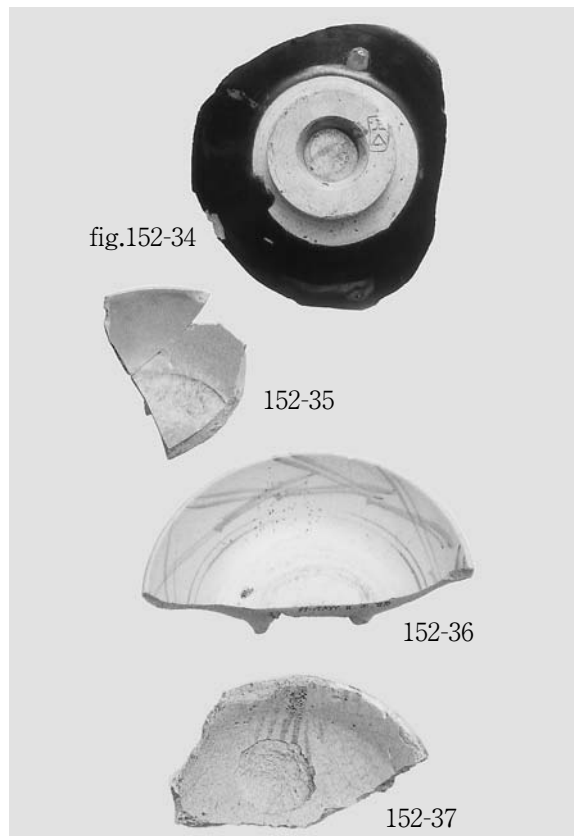
B



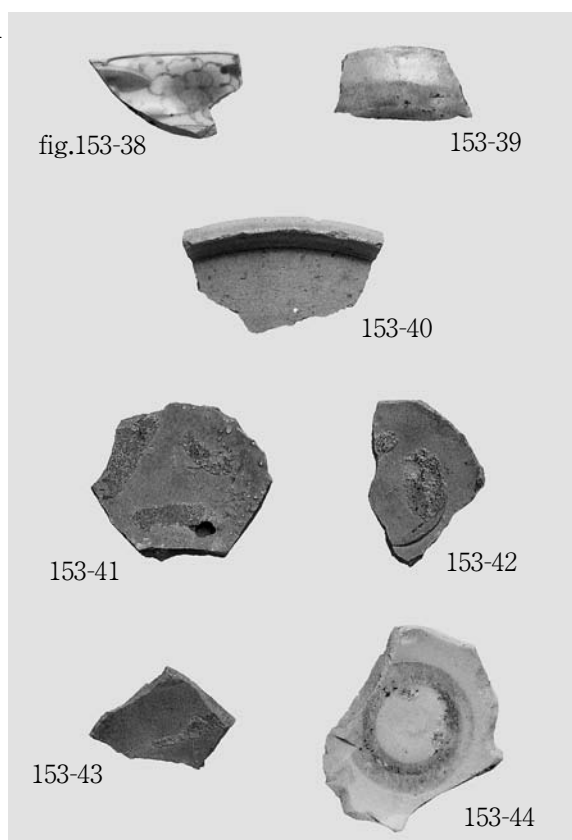
C



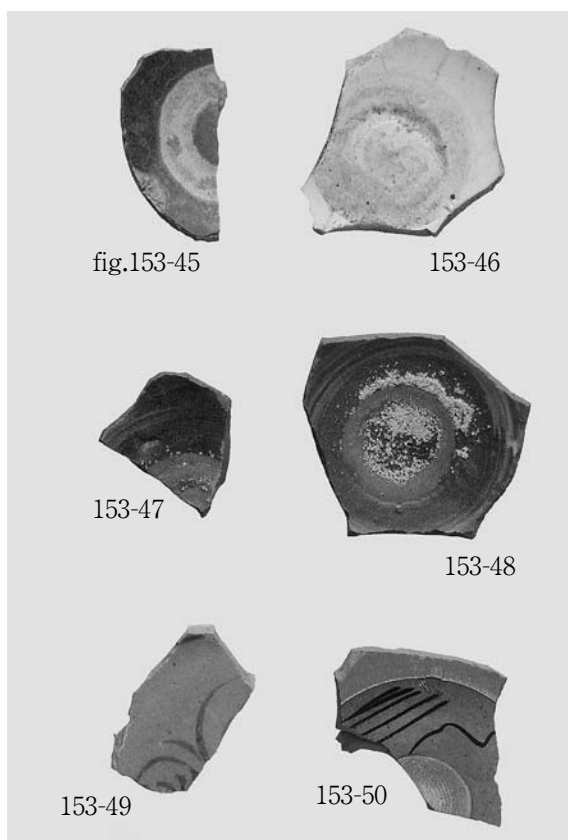
D



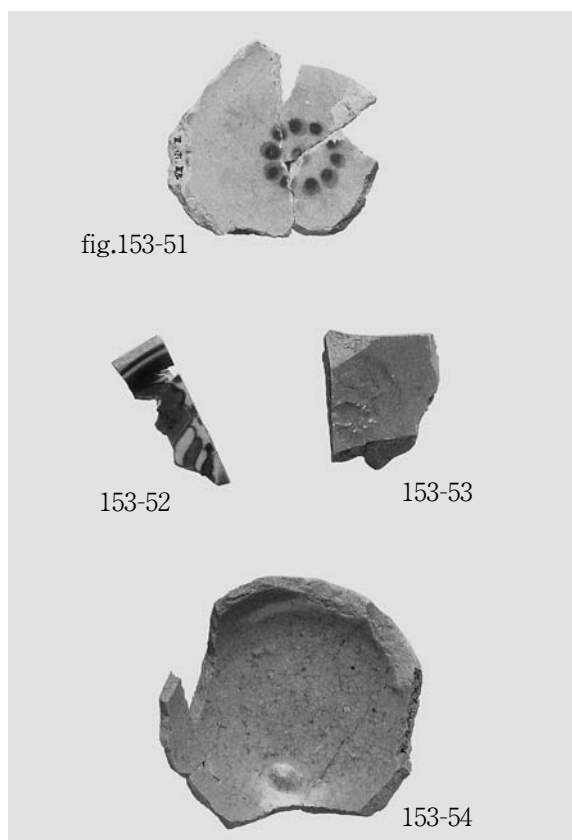
A



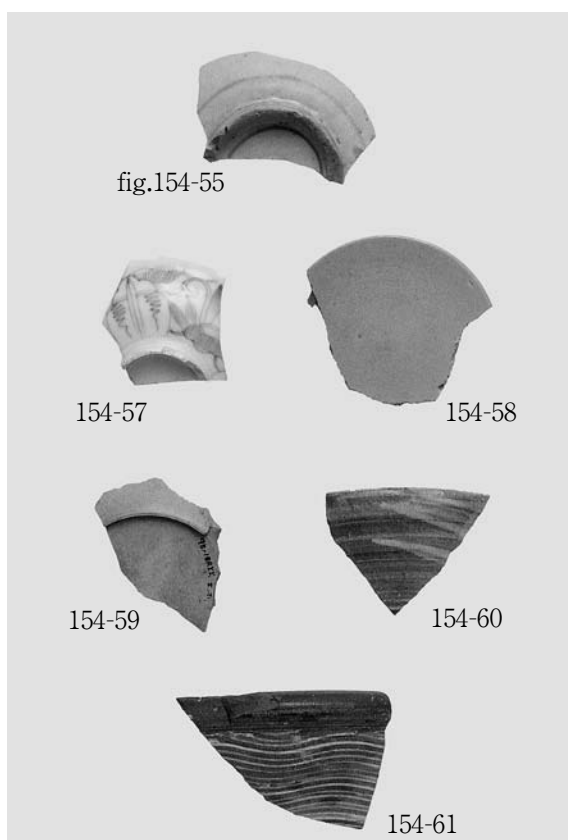
B



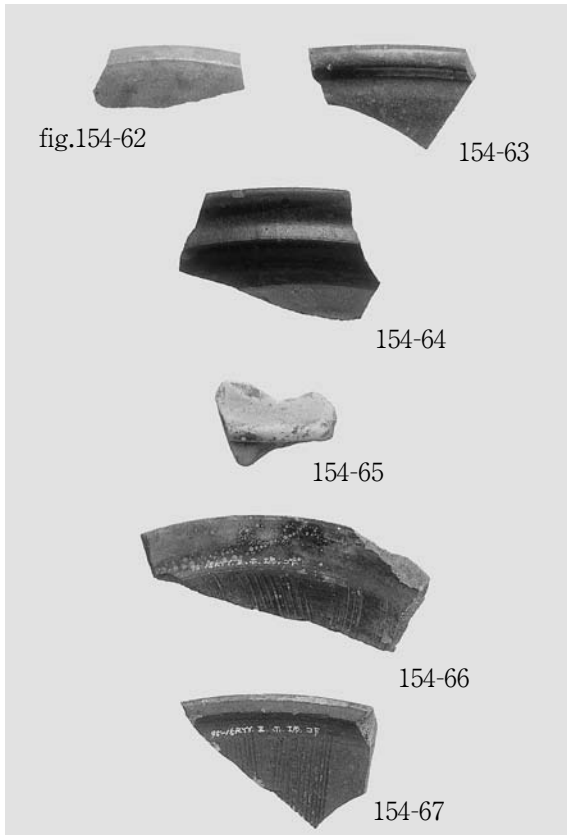
C



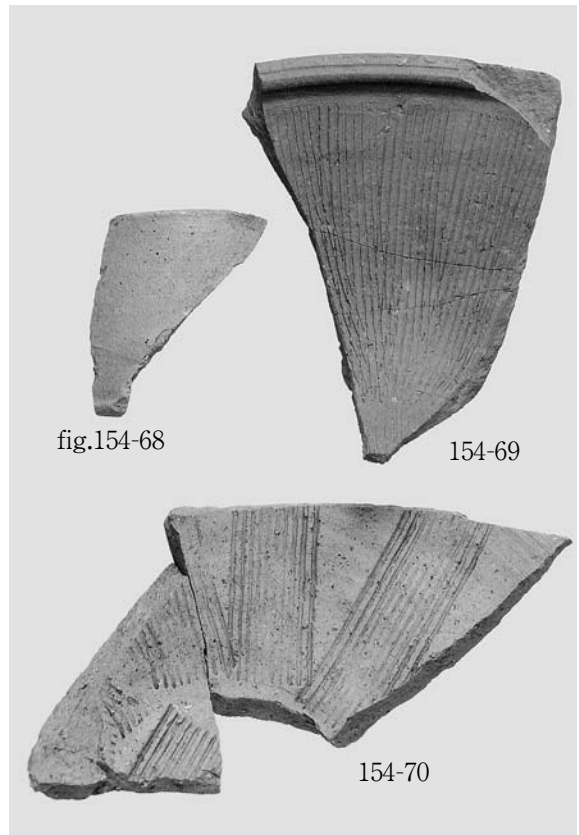
D



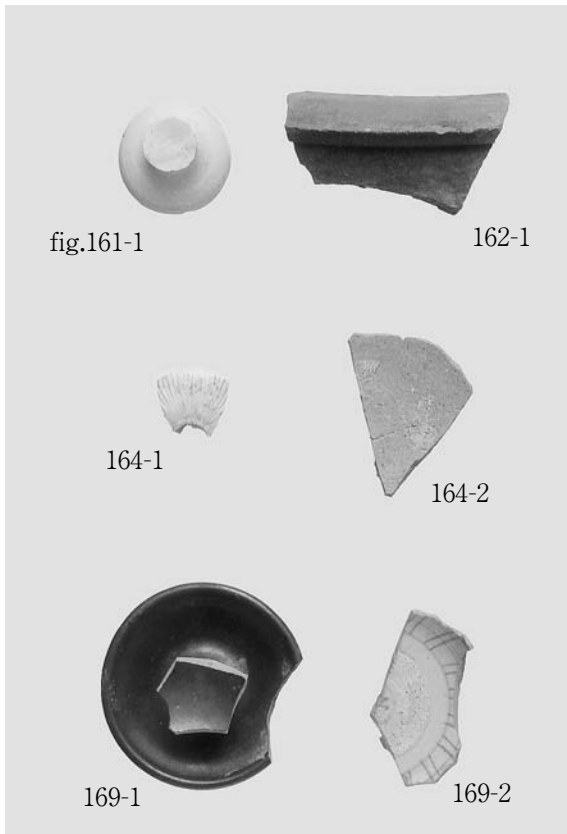
A



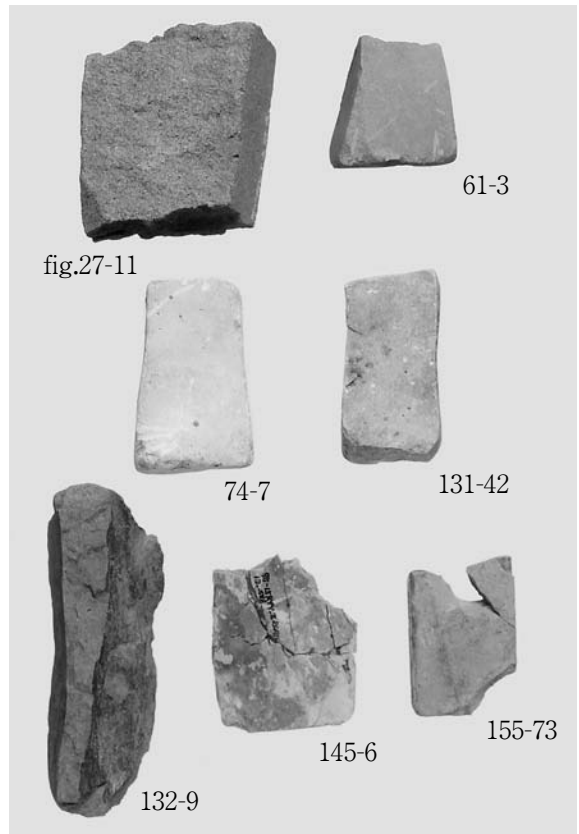
B



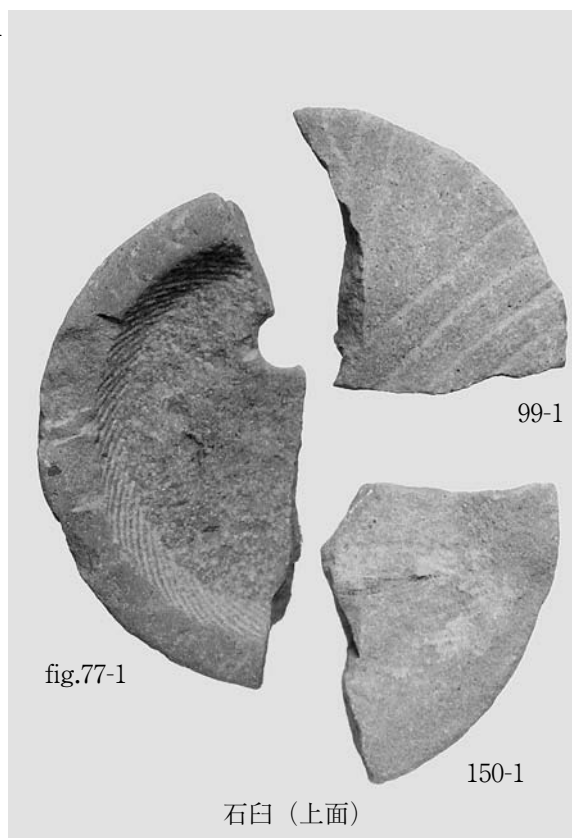
C



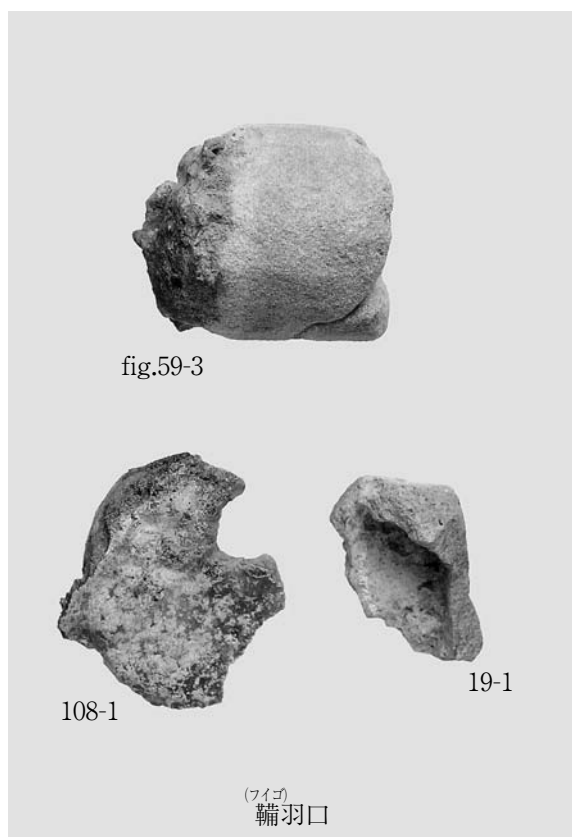
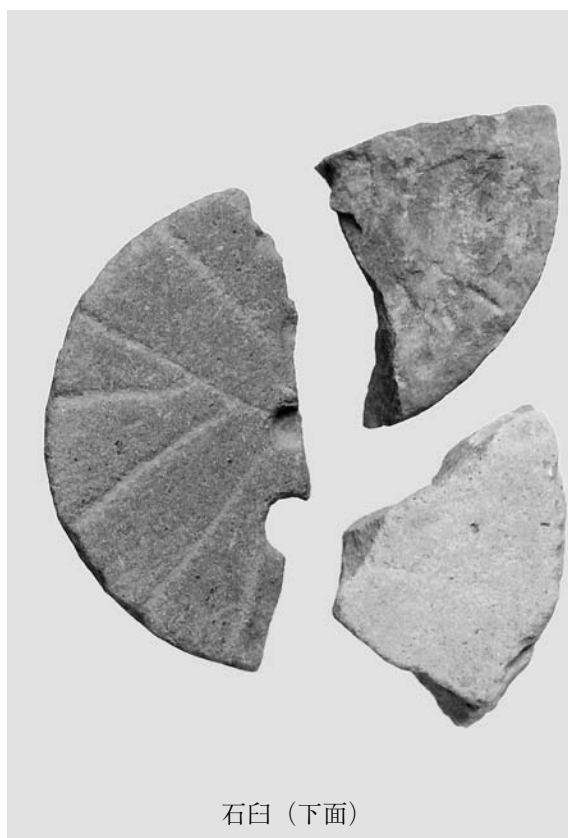
D



A



B



C

D



fig.131-43



fig.40-9

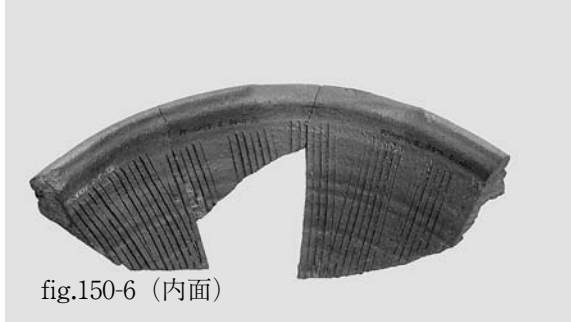


fig.150-6 (内面)



fig.40-8



fig.40-2



fig.74-4



fig.40-6



fig.77-5



fig.40-7



fig.77-10

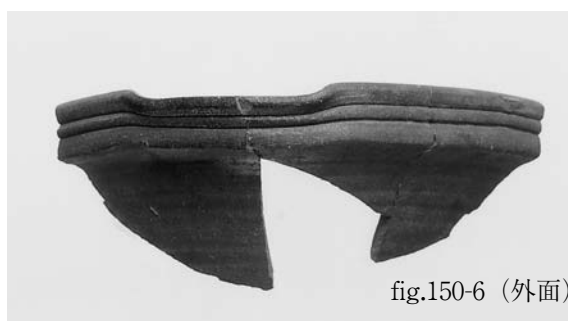
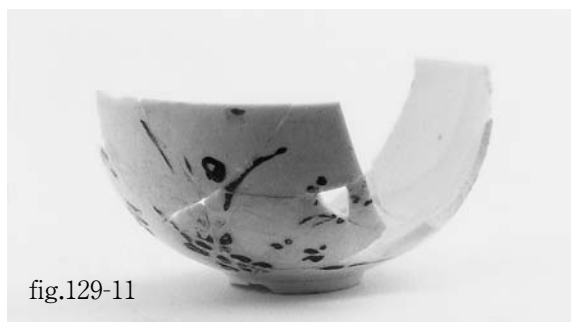




fig.151-2

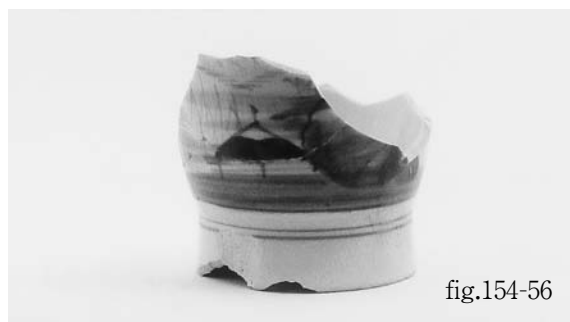


fig.154-56

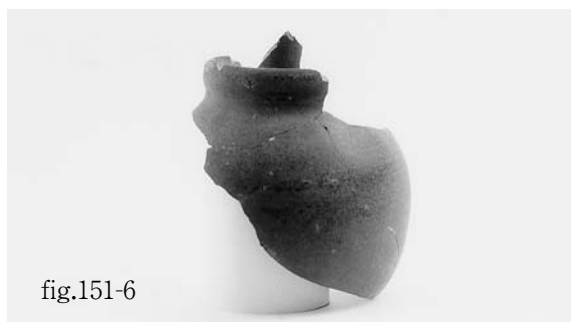


fig.151-6



fig.155-71



fig.151-8



fig.155-74

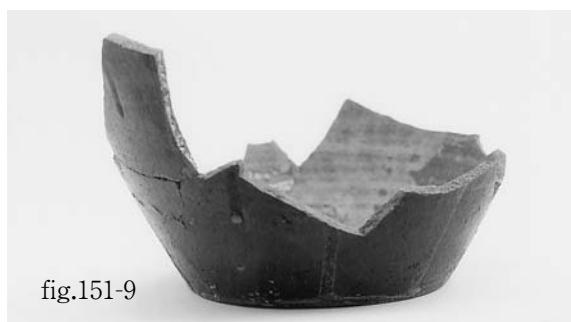


fig.151-9



fig.155-75



fig.152-17



fig.155-76

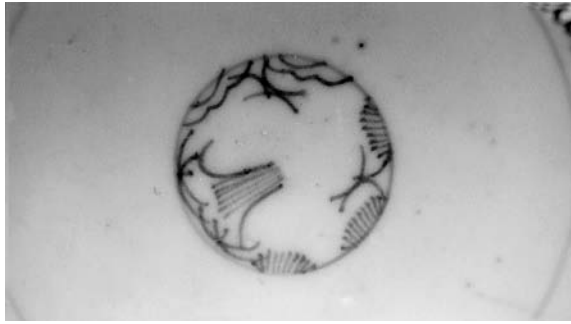


fig.40-7



fig.154-56

見込み紋様

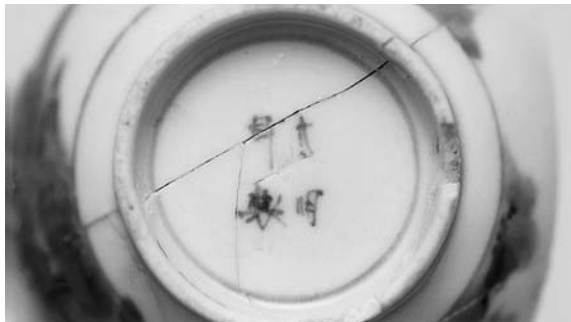
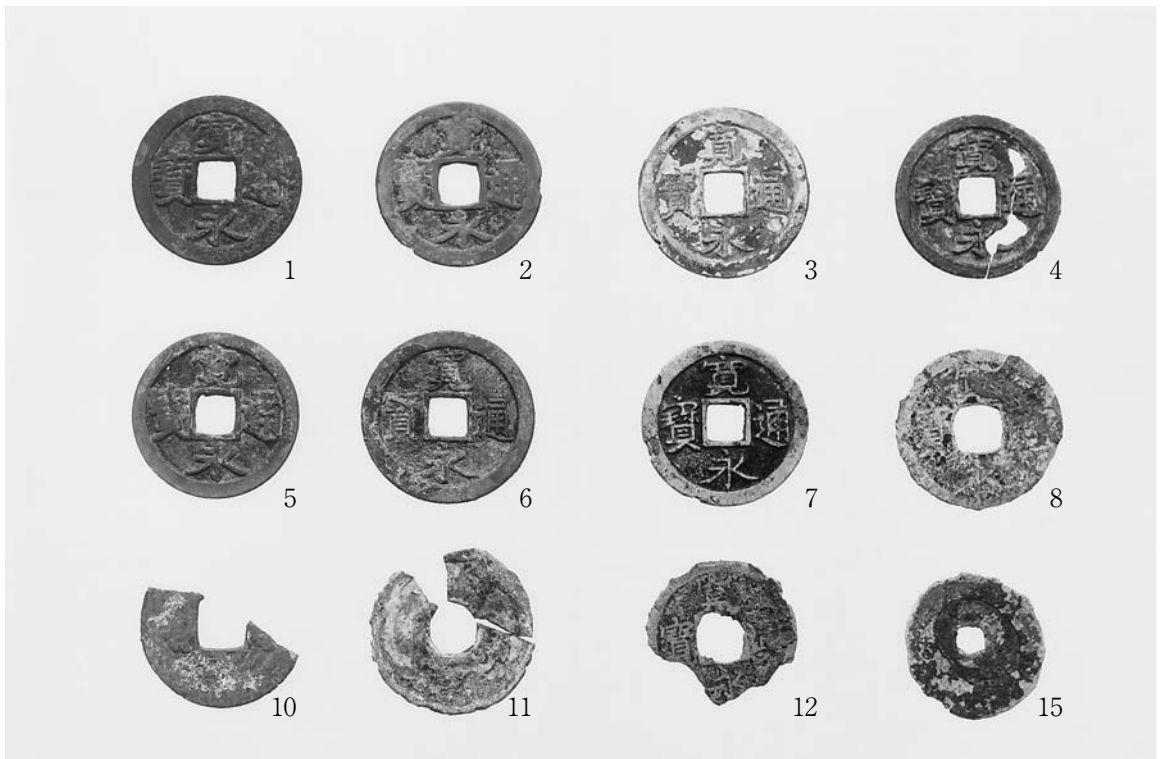


fig.77-5



fig.154-56

高台内銘



調査 I・II 区出土遺物 (紋様/銘/銅銭)

報告書抄録

ふりがな	やまだみつまたいせき						
書名	山田三ツ又遺跡						
副書名	あけぼの道路建設工事に伴う発掘調査報告書						
巻次	5						
シリーズ名	高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書						
シリーズ番号	第33集						
編著者名	藤方正治・佐竹 寛						
編集機関	(財)高知県文化財団 埋蔵文化財センター						
所在地	〒783 高知県南国市篠原南泉1437-1 TEL 0888-64-0671						
発行年月日	西暦 1997年9月30日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コ ー ド	北 緯	東 経	調 査 期 間	調 査 面 積 m ²	調 査 原 因
		市 町 村 遺 跡 番 号	。 。 ”	。 。 ”			
やまだみつまた 山田三ツ又 遺 跡	かみぐんとさやまだちよう 香美郡土佐山田町 なか 中 組	3 9 3 2 3 0 1 4 4	33度 36分 9秒	133度 40分 37秒	1995年 8月23日～ 12月27日	4,113m ²	あけぼの道 路建設工事 に伴う調査
所収遺跡名	種 別	主 代 時 代	主 な 遺 構	主 な 遺 物	特 記 事 項		
陣山遺跡	集 落 跡	中 世 近 世	堀 立 建 物 跡 土 坑 ・ 土 壙 溝 穴 群 性 格 不 明 土 坑	中近世国産陶磁器 (肥前系・能茶山 産)、貿易陶磁器 (龍泉窯・ベトナム 産) 金属製品 土 製 品	中世～近世の農村集落 跡 を 確 認		

高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第33集

山田三ツ又遺跡

(あけぼの道路建設工事に伴う発掘調査報告書)

1997年9月

編集 (財)高知県文化財団 埋蔵文化財センター

発行 高知県南国市篠原南泉1437-1

Tel. 0888-64-0671

印刷 共和印刷株式会社